

Title	工匠歌人ハンス・ザックスとその舞臺
Author(s)	内山, 貞三郎
Citation	大阪大学文学部紀要. 1952, 2, p. 1-328
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/3673">https://hdl.handle.net/11094/3673</a>
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 前 篇

ハンス・ザックスの生涯と作品



# 第一章 修業時代 一四九四年十一月五日—一五一九年

近世初頭に於て獨逸の時代精神を支配した宗教改革と人文主義とは、それが近代獨逸文化の礎石をなし、根幹となるものである。その意義は極めて重大であり、その内容は誠に複雑である。抑々此の兩者が一見矛盾反する要素を持ち乍ら、しかも獨逸文化の潮流を同一方向に向つて推進する協同作用をなしたと言ふことは、當時の時代思想が如何に微妙にして、錯綜せるものであつたかを思はずに足るであらう。新教精神は北國の寒地に生れた冷徹にして野性的な宗教的信念の所産であつた。それは只管に福音書の言葉に歸依し、神の恩寵を祈念し、愛の世界に奉仕することによつて、永への淨福に預り得るものとした。しかも少くともルツテルの教説に依れば、此の世界は神の恩寵に遍く光被されてをるが故に、眞に基督の言葉を信ずるものは、死の恐怖を知らぬ永遠の生命を享受し得るのであつて、この現世的歡喜を表象するものこそ、神より人間に與へられた音樂であり、日日の勤勞であり、自由なる個人の種種職能を以てする共同體への愛の奉仕であり、肉體に對する精神、物質的現世に對する神の意志の果敢なる鬭争と勝利であつた。されば宗教改革の精神的基調は何處迄も古代ゲルマン精神と獨逸古典派とを結ぶ線上にあり、言はば獨逸精神による基督教の變形 (Reformation) であつたのである。

之に反して人文主義は南國の陽光の下に咲き出た豐潤にして高貴なる人間讃歌であつた。それは只管に希臘羅馬の古代文物に沈潜し、人間性の尊嚴を禮讚し、個性の解放を強調することによつて、萬有 (Kosmos) を一身に内包する小宇宙人 (Mikrokosmos) を現實し得るものとした。しかもそこには神的なるものの意識の代りに、大宇宙を

支配する法則の認識が置かれたが故に、人間理性は世界の中心であり、凡ゆる價值評價の規範、人情風俗の標準を規定するものであり、世界を形成する力であつた。そしてこの高邁なる人生謳歌の思想は現世に對する、又は學術文藝に對する閑雅な靜觀的態度となり、彫型的美的形象に對する心酔となり、人間意志の自由に對する確信となることに、斯の如き純粹人間性の明朗活達にして調和せる世界こそは古代精神の中に最もよく具現されてあるものとした。従つて人文主義とは正しく普遍的汎歐羅巴的色調を帯びた古代精神の再生 (Renaissance) であつた。

併し乍ら宗教改革と人文主義とが如何に相對立せる様相を呈してゐるとしても、歴史の發展過程から見るとき、其處にはまた、少くともその主導者達の間にあつては、同一時代を形成すべき等質的特質が存在し、兩者期せずして相提携し、獨逸文化の新しい方向を決定して行つたのである。それには先づ何よりも、例へばルツテルに對するメランヒトンやウルリヒ・フォン・フッテンの協力に於て見るが如き、中世の神觀と教會政治に反對する兩者の積極的攻勢を擧ぐべきであらう。ルツテルが必ずしも古典の復興に反對したのではないことは、既に見た如く、(小著、宗教改革時代の演劇 参照)、テレンツやプラウツスの戯曲を推獎してゐることによつても知られると同時に、人文主義者達が羅馬教會に敵對的態度を執つたことは、かの Crotus Rubianus (Johannes Jäger, um 1480—nach 1539) 及び Ulrich von Hutten によつて書かれた Epistolae obscurorum virorum (Briefe der Dunkelnanner) や Reuchlin の Sergius (宗教改革時代の演劇第五章人文主義の

演劇参照)等が最も明白に證明してゐる。さればこそ羅馬教會によつて基督教及び純粹人間像に加へられた不純な挾雜物を排除しようとして、ルツテルは聖書に、人文主義者達は古典に直接復歸し、その結果純粹言語の美と力とを發見し、之を先づ相ともに新たに形成しようとしたのであつた。かくして兩者とも基督のやうな、又はソクラテスやプラトーンのやうな高貴にして卓越せる精神を翹望し、現世に於ける全人的人格の存在を信じ、中世の彼岸思想から近世的此岸思想へ、現世厭離から生の肯定へと飛躍した。その結果國民精神は此の新しい指導原理によつて異常に啓蒙開發されて行つた。今や個人は輝しい希望と大いなる歡喜とに満ちて、法王廳の權威に屈服してゐた幽闇なる境地から解放されるとともに、新たに各自の地上生活と独自の勤勞奉仕との神聖と光榮とを自認し、愛の共同體又は人類統一體の一員としての義務と責任とを自覺して來た。殊に市民層の精神的覺醒はその物質上の繁榮と相俟つて、都市文化に驚くべき發展を齎したのである。しかも此等の時代思想の特質こそはその後三百年を経て、獨逸古典精神に於て、より美事に完成されたものではないか！寔に宗教改革と人文主義との共同作業によつて、創り出された正純な市民文化こそは獨逸古典派の遠い母胎であつたのである。そしてその最も忠實な代辯者であり、又最もよき推進者とも言ふべきものの一人は、實にニュルンベルクの靴匠にして歌人、ハンス・ザックスその人である。さればゲータも歌つて言ふ。「近代の敬虔なる一人の男——ゲータ——も、かの祖先——ハンス・ザックス——の德行を喜びたり」と。(Hat auch ein Frommer neuerer Zeit/Sich an des Vorfahren Tugend erfreut etc. Prolog zu dem dramatischen Gedicht "Hans Sachs," von Deinhardstein.)

遺憾乍らハンス・ザックスの文學上の眞價は長い間歪曲され誤認されてゐた。それは次に到來した時代精神の必然にしてしかも悲しむべ

き結果であつた。と云ふのも十七世紀のバロック文化にして、十八世紀の啓蒙運動にして、Oehlke が既に指摘してゐる様に (Waldemar Oehlke, Die deutsche Literatur seit Goethes Tode, 1920)、宗教改革と人文主義の眞の精神機構を理解することが出來ず、寧ろ此等からその眞の生命を悉く奪ひ去らうとさへしてをつたからである。即ち前者はその貴族的にして異國的、怪奇的にして低徊的な虚飾趣味により、後者はその學究的にして西歐的、合理的にして倫理的な幸福論により、成程人間性の究明には一段と繊細緻密な新領域を開拓したけれども、それ丈かの近世初頭に於ける人間の本然的要求から發した素朴純眞な一大精神運動の眞相を次第に曲解して行き、結局それらが固陋低調なものであるかの如き臆斷を一般に抱かしむるに至つたのである。ハンス・ザックスの文學の如きはその傾向の害毒を最も多く受けたものであつて、Martin Opitz の Das Büchlein von der deutschen Poeterei (1626) が出て以來殆ど百五十年の長きに渡つて彼の作品は何等考究されることなく、全く傳統的先入見によつて冒頭から單なる町人の素人藝、無教養な職人の閑事業だとして、蔑視貶謗されて來たのである。

然し乍らその間にあつても勿論彼の功績を認めてをつた人達、例へば彼の弟子 Adam Puschmann を始めとして Jacob Schopper, Christian Hofmann von Hofmannswaldau, Christian Thomasius の如きが (Näheres s. Ranischs Historisch-kritische Lebensbeschreibung Hans Sachsens, 1765, S. 284 ff.) をかつたわけはなく、又彼の作詩、例へば O Gott Vater, du hast Gewalt etc., O Jesu zart, Göttlicher art, Christe, du von Göttlichem stam, 就中最も人口に膾炙せる Warum betrübst du dich mein Herz? (大抵の詩の原作者をハンス・ザックスであると考へるとは Karl Goedeke が疑を抱つてゐるけれども、Ranisch はそれが千五百五十二年又は六十二年ザックスによつて作られたものとしてゐる。

る。S. o. a. O. S. 190 ff., oder vgl. Otto Haupt, *Leben und dichterische Wirksamkeit des Hans Sachs*, 1868, S. 29 u. dazu Anm.)の如きは、既に千五百六十五年以來教會歌(Kirchenlied)として民間に流布し、歌ひ續けられて來たのである。従つて十八世紀中葉頃、獨逸主義の勃興するとともに、此の博學多才の民衆詩人に對して關心を抱く者漸く多きを加へるに到り、遂に千七百六十五年 Alenbourg の Friedrichs-Gymnasium の教授 Salomon Ranisch によつて、彼の最初の嚴密に校訂された傳記 *Historisch-kritische Lebensbeschreibung Hans Sachsens / ehemals berühmten Meistersängers zu Nürnberg / welche zur Erläuterung der Geschichte der Reformation und deutschen Dichtkunst / ans Licht gestellt hat* が公にされて以來、急激に此の詩人の存在が世人の注目を牽くこととなつた。此の評傳は「歴史書の法則を重じて、詩人の功績と徳行とを過剰に讚美したものではないけれども、しかも嚴密な眞實の許す限り、別に害にはならぬ程度の純眞な愛情の念を以て書かれた」もの(「Uebrigens erinnere ich vorher, daß ich jetzt keine Lobschrift, sondern eine Geschichte schreibe, in welcher ich zwar die Gesetze einer historischen Schrift durch kein übertriebenes Lob seiner Verdienste und Tugenden überschreiten, aber doch auch einer un-schuldigen Liebe so viel, als die strenge Wahrheit gestattet, wie ich hoffe, mit Erlaubnis aller billigen Leser, einräumen werde. S. Ranisch, o. a. O. S. 11)當時漸く識者の間に注目され出した國民文學の再認識に貢獻し、國粹主義文學運動の一端をなすものであつた。かくして實にハンス・ザックスは死後二百年にして茲に新たに復活し、且つその新敎的人文主義思想は今や十八世紀末の獨逸新人文主義(Neuhumanismus)の名實ともに遠き「祖先」となつたのである。

とは言へ然し彼の生涯がそれ丈異常なもので、彼の作品がそれ丈非凡なものであつたと言ふのではない。否寧ろ彼は市井の一職人として

極めて質實簡素な日常生活を送り、巷間の文人としては何處迄も勤勉力行、只管に世の浮華輕佻を避けて、市民的倫理と教養との確保啓發に努めて行つたのである。しかもその八十二歳に及ぶ長壽は、彼をして個人的には沁み沁みと人生の喜怒哀樂を経験せしめ、社會的には次々と歴史上の興亡浮沈を見聞せしめ、更らに又内外新古の圖書を通じて、該博廣汎な智識を獲得せしめた。かくてそれらの事件や智識は殆ど悉く彼の詩作の中に採り入れられて、彼自身の詠ずることゝ、その數實に六千七百七十篇(又は六千四百八十八曲と云ふ。Vgl. Sein Gedicht, Valere, *Summa all meiner Gedicht vom 1514. Jar bis ins 1567. Jar, gedichtet in 1567*, V. 214 f.; 詩作に訣別を告ぐるの辭。副題千五百十四年より千五百六十七年に及ぶ我が作詩の總計。千五百六十七年作)以上に達し、その種類も Meisterlieder (Par oder Bar と云ふ)は言ふに及ばず、Tragedien, Comedien, Historien, Kämpfgespräche, Gespräche, Iobsprüche, Klagereden, Comparationen, Sprüche, Fastnachtspiele, Räubeln, Schwünke 等等(作者自身編輯千五百五十八年出版した全集第一卷 *Sehr herzliche schöne und wahrhafte Gedicht des序辭參照*)當時知られてゐた限りの文學形式に及んだ。此の意味に於いても亦ハンス・ザックスは當時數多い工匠歌人中にあつて拔群の多作作家であるとともに、後世に於いても其の比を見ない程の忠實なる時代文化の擔當者であり、典型的代辯者であつた。しかも此れ丈の大家家であり乍ら、その功績が久しく埋没されてゐたが故に、彼の生涯に關しては、又傳ふる處が甚だ尠く、不備不明の點が甚だ多いことは、眞に遺憾の極みである。即ち今日知られてゐる彼の傳記と言ふのは僅に彼自身の手になる千五百六十七年作 Valere(訣別の辭)の中に記述されてゐる簡單な自傳、その他の作品中に點在してゐる、折りに觸れて洩された不用意な主觀的感懷や個人的事件、及び彼が終生愛着して置かなかつた故郷ニュルンベルク市の歴史年代記、記録又は彼に師事したことのある Adam Puschmann の恩師を追懷し

た詩 *Elogium reverendi viri Johannis Sachsen norimbergensis* (1576, 6) 等を校合して編纂されてゐるに過ぎないのである。

先づハンス・ザックスの出生に關しては、彼自身が「訣別の辭」の冒頭で「基督紀元千四百九十四年を數へし時、その年十一月五日に余ハンス・ザックスは生れたり」(Als man zeit vierhundert jar / und vier und neunzig jar fürwahr / nach des herren Christi geburt / ich Hans Sachs gleich geboren wurt / Novembris an dem fünften Tag etc.) と歌つてをり同年ニールンベルク市 St. Lorenzkirche 附近の Koigasse od. Schmalengasse (今日の Brunnengasse) にあつた父親所有の家で、仕立匠なる父 Jörg Sachs と母 Christine との間の獨り子として生れたと傳へられてゐる。しかも彼が續けて述べてゐる様に、此の年はニールンベルクの年代史に於いて甚だ不幸な年であつた。一方に於ては野武士 (Raubritter) Kunz Schott なるものが、貴族出身の無頼の徒 (Placker) Christoph von Giech と結托して、同市の周邊を脅かしてをり、最近も Schwabach 附近でニールンベルクの商人を襲撃すると言ふ不祥事があつたし、他方では邊疆伯 (Markgraf) Friedrich von Onolzbach が同市の所領地 Gostenhof 及び Wöhrd に對する地方裁判權を要求して、戰を挑んでをつた。その上晩夏の頃から恐ろしい黒死病が猖獗を極め、新たに建てられた隔離病舎も未だに満員の盛況であつた。ハンス・ザックスの兩親も亦之に犯されたけれども、幸に生命には事なきを得たと言ふ。そのため父親は大切な愛子の生命の危險を慮つて、誕生のその日直ちに嬰兒に洗禮を受けさせ、ハンスと命名した程であつた。ハンスは發育状態もよく、疫病にも犯されず兩親の注意深い養育と、名附親である小刀鍛冶 Andreas Spornn の懇篤な祝福を受けて、健やかに育つて行つた。されば彼は當時繁榮の一途を辿つてゐた帝國自由都市の中堅層をなす手工業者階級の善良温健な家庭に人となり、生れ乍らにして素朴堅實な職人氣質を享けつ

ぎ、又自らにして市民的教養を涵養するために必要な各種の素質を授けられてゐた。

藝で千五百一年彼の七歳の時、彼は所謂羅典學校 (die Lateinschule zum neuen Spital vom heiligen Geist) に入學し、以後前後八年其處に在學した。當時ニールンベルク市には有名な四つの寺院に附屬した四つの羅典學校、即ち St. Sebald, St. Lorenz, St. Egidien の學校及び Die Schule vom neuen Spital zum heiligen Geist が存在したが、彼が送られた學校は、此の中の最後のものであつたらしい。此等の學校では未だ執れも僧侶の手で授業が行はれてゐたけれども、學校行政は既に市廳の管理する處であり、監督官としては人文學者で市會議員であつた Willibald Pirkeimer が最近 Ingolstadt の大學を卒業して來た Hieronymus Ebnor 及び後の市長 Hieronymus Holzschuer と協力して事に當つてゐたから、教育も他都市のそれとは異り、遙かに自由にして進歩的であつた。従つてザックスがシムピタル・シムトつて學んだ學科目は、彼自身が後年自作詩 *Die werck gottes sint alle gut, wer sie im geist erkennen tut*, (1568, 2, 26. 心中樂へ思ひを致すものぞ、神の御業は總ひ良し) の中で述べてゐる様に Grammatica, rhetorica, logica, musica, arithmetica, astronomia, Poetrey, philosophia を始めとして、希臘語羅典語、土地測量法 (die ausmessung mancherlei land)、人間の誕生を判斷する卜星術 (die kunst der gestirn, der menschen geburt judicirn)、地上の自然、空中水中火中地中の諸生物の智識 (die erkenntnis der natur / Auf erden, mancher creatur / Im luft, feuer, wasser und erden;) に及び、更らに聲樂法 (gesangeskunst) 絃樂 (seytenspi) 並に作詩術 (poetrey) の練習を迄渡つてゐる。だから又別の詩へ (Vgl. Valette, V. 18)「それらのものは其後總て忘れられて了つた (Solchs alls ist mir vergessen seit.)」と言ふ、自分は無教養な人間で、希臘語も羅典語も出來ない (同上 V. 250 ff.,

Als einem ungelerten Mann, / Der weder Latein noch Griechisch kan,) と言つてゐるけれども、彼の勤勉と聰明とは此の學校時代に後年詩作に飛躍すべき基礎を獲得したものである。特に同校の教師で工匠歌人であつた Johann Friedel (Fridell) から唱歌及び作詩術を學んだことは重大な意義を持つてゐた。かくして彼は九歳の折(千五百三年)卅日程烈しい熱病で臥床した他には格別の事件もなく、無事十五歳(千五百九年)の年學校を終り、直ちに當時の風習通り、父親と同じく將來は職人として生計を樹てるため、或る靴工匠の下に弟子入りをした。しかも此の頃既に彼は名附親 Sponn の紹介で、熱心な工匠歌人であつた麻織匠 Lienhard (Leonhard) Nummenbeck に師事して工匠歌 (Meistergesang) の基礎的法則を學び、深く得る處があつたと言ふ。かくて見習期間に居ること二年にして、彼は纏て千五百十一年遊歴の旅に登る。彼は先づ Regensburg に向つたが、同地で靴工の修業をしたのみならず、又ヌンネンベックの推舉で、その工匠歌人の團體にも加入してをつた。ここに居ること數ヶ月、次いで Braunau, Ried から Wels に移つたが、Wels へ彼は始めて詩作に志を立てたものと思はれる。と言ふのはその自作詩 Ein gesprech: Die neun gab muse oder kunstgöttin betreffend (1536, 8, 25. 對語、才能を賜ふ九柱のミューズの神即ち藝術の女神について) はその間の消息を暗示して、次の如く物語つてゐるからである。即ち千五百十三年の或日の夕方彼はヴェルスで帝室動物園を逍遙し、花で飾られた美しい廣場に坐してついうとうとと眠りに就いた。その時九柱の藝術の女神が現れ、特に Klio は彼の憂愁の様を見て、事情を問ふ。彼は此の世の快樂の儂いものてあることを訴へ、眞に價値あり名譽ある慰樂を求めて迷うてゐると答へる。そこで女神は彼に、神の光榮を擴め、世道人心を善導するため詩作をするやうにと教へ、其の上九柱の神はそれぞれ懇切な言葉とともに、詩人として必要な各種の才能と徳操とを彼に授けられたと

言ふてゐる。之は勿論夢物語の形になつてはゐるけれども、依つて以て詩人の胸中を窺ふに足るものがあるであらう。

然しヴェルスに滞在したのも長い間ではなく、やがて彼は更に足を延し、Hall を經て美しい古都 Salzburg に這入つた。サルツブルクは有名な靴の生産地であつたのみならず、工匠歌人の唱歌教習所 (Meistergesangschule) や書籍印刷所を有し、ザックスの多方面の趣味を痛く牽きつけた。後年彼は Ein Iobspruch der stat Salzburg (1549, 4, 9.) の中で「年少の頃より目出度き技術、印刷の業に心を寄せ」(Von jugent auf so het ich guent/Zw druckerey, der lobling kuenst,) と歌ひ、「サルツブルクと呼ばるるいと古き由緒ある都」(Salzburg so haist mit nam die stat, / Die gar ein alten ursprung hat.) で「我は足をとめて印刷の術を學ばんと思ひ定めぬ」(Gedacht ich mir, gleich da-zw-pleiben / Die kunst der druckerey zw. treiben,) と物語つてゐる。何れにしても此の年(千五百十三年)旅の思が漸く深まるにつれて、彼の詩情も亦頻りに動き、彼は折りに觸れて詩作に耽つてゐたものと思はれる。今日彼の作として傳へられてゐる最古の詩、所謂 Buhlscheidlied (戀歌別離) 及び彼の獨創になる工匠歌の新曲調、Die Silberweis と Der güldene Ton とは千五百十三年の習作であつて、前者は愛人との哀切な別離の情を歌ひ、(S. Ernst Nummenhoff, Hans Sachs 1894, S. 15-16.) 後者一曲はそれぞれ Braunau と Ried とで出來たものとされてゐる。

サルツブルクから Burghausen, Ötting, Landshut を經て、千五百十四年彼はミュンヘンに這入り、ここに約一年滞在した。彼の工匠歌 Der schwknecht werckzewg in dem langen ton des Muscablit (1516. 靴職人の道具、トムスカトブリョーナ作長調、S. auch Edmund Goetze und Carl Drescher, Sämtliche Fabeln und Schwänke von Hans Sachs, B. 3, Nr. 1.) によると、ミュンヘンに到着した時は既に旅費を使い果して、彼は酒

の料にも困り、上衣を宿屋の亭主に質に置いたと言ふ。處が旅宿の主婦が同情して、靴工の用ふる道具と製靴工程を歌に詠み込めば、上衣を返さうと言つたので、忽ち筆を呵してそれらのものを巧に挿入した一篇の工匠歌をもつし、纔に上衣を失ふ危から逃れたのであつた。勿論工匠歌はかくの如き戯れ歌に用ひられることを許さず、その主題を極めて壯重嚴肅なる宗教的乃至道徳的内容に限るべきものであつたから、ザツクスの此の試作は、彼の自由闊達な詩情を反映して、工匠歌形式を座興的に亂用したものである。然し彼の詩作活動が舊慣を打破して、工匠歌に新領域を開拓しようとする自らなる傾向がここに既に見られるとも言ひうるであらう。何れにしても彼はミュンヘンで同市の工匠歌人と交り、Gloria patri lob und er in dem langen Ton des Marner (1514, 5, 1, 父なる神に榮と譽あれ。マルナー——ニルンベルクの工匠歌人の名——の長調)を詩作し、更らに同輩の認める處となつて、工匠歌教習所の世話役に擧げられた。しかも此のミュンヘンこそ彼の最初の Spruchgedicht(説話長詩) Ein kleglich geschichte von zweyen liebhabenden (1515, 4, 7, 悲戀物語)及び Kampfgespräch von der lieb (1515, 5, 1, 戀愛論争)が創作された處であつて、かくして彼の詩の世界は次第に拓かれて來た。「悲戀物語」は詩人がミュンヘンの或る鑄掛匠の娘を深く愛したけれども、娘の父親から未だ修業中の身で結婚などと思ひもよらないことであると諫止され、その失戀の思ひを、當時讀んでをった Boccaccio の Decamerone (彼の讀んだものは恐らく Steinhöwel 譯 Cento novelle, Urm, 1472, 266-267) の Lisabetha 物語(リサベータが兄弟の召使を密に戀したが故に、その召使は兄弟に殺される話)によつて慰めたもの、「戀愛論争」は詩人自身の自由構想になるもので、戀の利害得失を若い騎士と老人との對話で論じたものである。即ち老人は失戀の悲しみで死んで行つた息子のことを思つて、戀は凡ゆる不幸の基であると説き、アヒレスの戀、ヤゾンとメデア、

Pyramus 及 Thisbe, Hero 及 Leander, Guiscardo と Ghismunde, Tristan と Isolde 等の例を擧げる。騎士は之に反して戀愛そのものは決して不幸の原因ではないと争ふけれども、やがて彼の愛人とともに馳落ちをして來た佛蘭西の公爵夫人が森中の隱家で禿鷹に殺されたと言ふ報知が來る。かくて作者は眞の喜びと永遠の幸福は、只正常な夫婦愛のみであり、すまじきものはかりそめの戀であると教へる。以上の詩は當時既に作者が Ovid, ボッカチオ、中世の英雄傳説、近世の年代記等と廣く涉獵してゐたことを示すとともに、その健全にして道徳的な處世の指導原理が漸く確立されつつあつたことを表してゐる。そしてこれより彼は一身を嚴正に持して、多くの誘惑に對抗し、極めて善良なる市民生活を過さうと決意し、又事實過して行つたのである。

かくしてゐる中にミュンヘン滞在が餘りに長いのを心配した家郷の父親から、更らに遊歴を續けるか、或は歸郷するか何れかを選ぶ様にとの警告の書狀が到達した。(Vgl. sein Gedicht, Gespräch frau Ehr mit eynen jungling, 1548, 5, 9. 「石疊」夫人と若者との對話)そこで彼は更らに大なる成長を目指して、思ひ出の數々が残るイザール河畔の都を去り、マイン河畔の古るい僧正都市 Würzburg へ巡遊し、そこで工匠歌人の大先輩と崇められる Walter von der Vogelweide の墓に詣うるのであつた。それからフランクフルト・アム・マインに移り、ここでも彼の詩才は忽ち認められ、自ら工匠歌教習所を經營したのみならず、第三の創作工匠歌 Ein maistergrues aller ding: Ich bin gezogen verr vnd weit in der hohen perckweis Hans Sachsen. (1516, 或る工匠の物皆に對する挨拶の歌、遙けくも亦遠き旅なりき。ハンス・ザツクス作高山調)を作詩作曲して、彼自身の斯道に對する精進の心を明かにするのであつた。次いで最後の目的地ライン地方の諸都市コブレンツ、ケルン、アーヘンに杖を曳き、職業に必要な見學を済まして歸路に就

く。既に遍歴の旅も前後五年に及び、今は世慣れた靴工の徒弟となつたハンス・ザックスは、旅中只管に賭博、飲酒、情事の如きを避けて、折りある毎に工匠歌を吟詠し乍ら、千五百十六年遂に懐しの我が家に歸つて來た。

當時帝國自由都市ニュルンベルクは一種の共和政體の下に、獨逸第一の富裕殷賑の都として、繁榮の一途を辿つてをたつた。その隣接せる所領地に對し、舊縁により種々の權利を主張し、挑戦してをたつた外敵、例へば Markgraf Friedrich von Brandenburg-Onolzbach と Markgraf Cassimir von Brandenburg-Ansbach (1481—1527, Enkel des Kurfürsten Albrecht Achilles) と無賴の貴族 Friedrich u. Christoph von Griech 父子の如きも、市の新鋭なる武備と健全なる勢望とに抗し難く、ここ數年鳴りを鎮めてをたつた。皇帝マキシミアン一世は千四百九十年以來屢々同市に足を停めて、同市の忠誠と繁榮を嘉し、特別の恩典と庇護を垂れた。しかもその間、特に前世紀の中葉以來、商工業の發展に伴つて、優秀なる人物が數多く輩出したから、政治經濟教育宗教は言ふに及ばず、美術工藝學術文學等文化の凡ゆる方面に於て、卓越した業績を擧げ、當時有名な數學者 Johannes Regiomontanus が誇稱した如く、ニュルンベルク市は正しく「地理上並に學問上獨逸及び歐羅巴の中心」と言つても過言ではない状態であつた。即ち百人以上の各種の職工を擁したと言はれる印刷業者 Anton Koberger, マキシミアン一世の下に佛伊に轉戦した武道戰術の大家 Christoph Rifer, 懷中時計を考案した Peter Hele, 西阿弗利加を探險し、歸來世界最初の地球儀を作つた Martin Behaim, ローレンツ教會の Sakramentshäuschen に不朽の名を止めた石像彫刻家 Adam Kraft, 有名な Die Schedelsche Chronik の著者、外科醫 Dr. Hartmann Schedel, セバルツス教會の Grabmal を製作した鑄金家 Peter Vischer, 更らに木像彫刻家 Veit Stob, 畫家 Michael Wohlgemuth 及びその弟子

Albrecht Dürer, 詩人 Hans Rosenplüt, Kuntz Hab, Hans Folz, 人文學者 Hieronymus Ebner, Christoph Scheurl, Hieronymus Paumgärtner, Willibald Pirckheimer 等孰れも此の共和都市の名聲を重からしむるものであつた。之に加ふる上には豪族名流、例へば Holzschuer, Behaim, Imhof, Paumgärtner, Tucher, Stromer, Ebner 等の所謂 Geschlechter (門閥) から選拔された市長、市會、市會議長 (Losunger)、市會書記官 (Ratschreiber) が、外に對しては賢明なる外交、内に對しては嚴正適確なる模範的政治を行ひ、下には幾多の手工業組合が嚴格なる規律と優秀なる技藝と間斷なき精勵とによつて凡ゆる殖産興業に力を注いでをたつた。されば今やニュルンベルク市は内にあつては豪華なる輪奐の美を誇り、外にあつては佛伊蘭から遠くアメリカ新大陸、東印度等に迄及ぶ海外貿易を營み、その威望は隆々として旭日昇天の勢であつた。當時同市の商工業が如何に隆昌を極めたものであつたかは、Kuntz Hab の Das neue Gedicht der Joblichen Stadt Nürnberg (1490) の詳細に歌ひつゝる處であるが (Vgl. Rudolf Genee, Hans Sachs und seine Zeit, 1902, S. 41 f.)、又十六世紀始めには羅針盤製作者三十人以上に達し、十六世紀末の目錄によれば手工業の種類二百以上に及んでゐることによつても窺ひ知ることが出來よう。さればかかる情勢の下に於て一般市民の教養が著しく促進され、手工業者の中に風流韻事を弄ぶものが出て來たのは當然のことであつた。實に文學史上特異の存在である工匠歌人及び工匠歌 (Meistersinger od. Meistersänger u. Meisterlied, Meistersang) がニュルンベルク市に於て急速に發達したのは、かくの如き事情に負うてゐるものと思はれる。しかも全市に於けるこの文學運動を更新し、促進し、保持して生涯倦むことを知らず、ニュルンベルクと言へば直ちに工匠歌人を連想せしむるに至つた者こそ、ハンス・ザックスその人であつた。元來工匠歌人の發祥地はライン地方 Mainz で、千三百十一年の頃



Heinrich Frauenlob によつて最初の工匠歌教習所 (Meistersingschule) が設立されたと傳へられてゐるが、それ以後十五世紀には南獨の各都市 Worms, Straßburg, München, Augsburg, Frankfurt a. M. 等に次第に普及し、十五世紀中葉以後にはニュルンベルク市に於ても既にその道の先覺者が少なからず輩出してをいたつたのである。即ちハンヌ・ザックス自身その自作の工匠歌 *Die zwelff Nürnberger Dichter*: "Ich kam vür einen garten wolgezirt" in den neuen tone Hans Sachsen (1527, ニュルンベルク十二詩人。余は麗しき庭園の前に来たり。ハンヌ・ザックス作新調) の中で十二人の大先輩 *ein Beck, Konrat Nachtigalle (Bäcker, Konrad Nachtigall), ein nagler, Fritz Zoren (Nagelschmied Fritz Zorn), zwen heftelmacher Vogelsang u. Hernan Oertel, Fritz Ketner, Merten Grim (Grimm), Six Beckmesser, ein schneider vom Gostenhof (Nürnbergor Vorstadt), ein briefmaler, Hans Schwarz, ein holzmesser, Ulrich Eislinger, der durchleuchtig deutsch poet, Hans Folz, ein weber, Lienhart Nunnenbeck* の名を擧げてゐる程である。處て此等十二人の大家は古來ライン地方に於て傳説的に傳承してゐた所謂「舊十二大工匠歌人」(zwölf alte Meister, z. B. Walter von der Vogelweide, Klingsohr, Frauenlob, Marnier, Mügling, Regenbogen, Wolfram, Kanzler (Fischer), Meister Stolle, Tannhäuser (Danuser), etc.) に準じて選ばれたものであらうが、同じ詩の中で歌はれてゐる様に、此等十二人の栽培者が耕作した樂園の如き美しい果樹園も、やがて野獸の荒すところとなつて、雜草が一早く蔓延つて來た。と言ふ意味は果樹園とは工匠歌教習所のことであり、野獸とは同輩の猜疑嫉視の謂である。かくてハンヌ・ザックスと彼の崇拜せる先輩「尊き獨逸の詩人、ハンヌ・フォオルツ」(詳細は拙著中世獨逸演劇史第三十章、ハンヌ・フォオルツの項参照)との間には既に相當に深い間隙が横つてゐたことを思はすのであるが、之は勿論その間詩壇に有能なる

指導的人物が缺如してゐたからである。さればハンヌ・ザックスが製靴技術を習得したのみならず、豊富な旅の人生體驗と工匠歌人としての素養とを積んで、懐しの我が家に歸つて來た時、何よりも彼の關心を牽いたものは、この歌壇の不振状態であつた。事實當時のニュルンベルク市は千五百五年バイエルン繼承戰役 (Der bayrisch-pfalzische od. Landshtuter Erbfolgekrieg, Herzog Ruprecht von der Pfalz 及 Herzog Georg von Landshut-Baiern の娘の結婚、Herzöge von Baiern-München, Albrecht u. Wolfgang と對してバイエルンの相續權を主張し、戰爭を起した。ニュルンベルク市は當時 Der schwäbische Städtebund に加入してゐたので、フアルツ侯を叛逆者として、之を討拔するため三千の兵を出し、各地を占領した。此の戰は千五百五年マキシミリアン皇帝の調停で和解され市は占領地 Lauf, Herbruck 及び Aildorf を領有する (Laut und Aildorf) の和議以來十年、平穩無事の中に愈々富裕殷賑を極めるばかりであつたから、工藝美術に見るべきものを多く産出したけれども、又一方富豪は漸く矯奢逸樂に耽り、かの有名な Christoph Scheurl の結婚式 (宗教改革時代の演劇参照、エックが踊つたと言はれる式) の如き一週間の豪華な饗宴舞踊會が續いた程であるとともに、他方工匠歌人達の間に於けるが如く、大平に慣れて、互に利己的な嫉視反目を事とするに至ると言ふ微風を漸く示しつつあつた。従つて殆ど天性的に堅實な常識と善良な風俗とを思念してゐたハンヌ・ザックスが、歸來先づ何よりも歌壇の振興策と、それによる市民的教智と徳操との啓蒙に意を注いだことは當然のことであつて、曩に擧げた「ニュルンベルク十二詩人」の工匠歌や、既に一年以前の作である *Unterweisung was zu singen sey (ein schiel-kunst)*: "Mein hertz das mag nicht rue hon in dem langen Ton des Wolfram. (1515, 5. 15. 何を歌ふべきかを教ふ。——工匠歌教程——我が心、靜心なき我が心、ヴォルフラムの長調) は其の間に處して詩人の意圖する處が奈邊にあつたかを十分に察知せしむるに足るものである。即ち彼は



この後者の詩の中で従来の工匠歌の内容が總て神、基督、聖母、聖書、信仰等の極めて宗教的な觀念や情感をのみ取扱ふことを原則としてゐたのに慊足らず、それを擴張して貴族には各種の武術に就いて、婦人のためには羞恥心や禮儀作法に就いて、百姓のためには鋤鋏を執ることについて、軍人には攻城野戰に就いて、商人には異國の都市や市場に就いて、賭博者には賽子と花札について、愛人には美しい女子について歌ひ、人皆の心を樂しませるべきであると教へて、工匠歌の進むべき新しい道を打開しようとしてゐるとともに、民衆に興味ある智識物語を供給すべきことを勧めてゐるのである。されば彼は先づ恩師メンネンベックを訪れて遍旅の際に出來たかの三篇の創作工匠歌 Die Silberweise, Der güldene Ton 及び Die hohe Bergweis を始め、マルナーやヴォルフラムの古式調による試作を呈示して批評を乞ひ、將來の詩壇に於ける抱負を語つたのは勿論のこと、師匠に激勵されて、更らに詩作の筆を續ける決意を深く心に誓つたのであつた。それかあらぬか數曲の創作工匠歌のみならず、翌十七年には Ein dichter lob: "Ich lob ain prünlein kuele" in der silber weis des Hans Sachs (詩人讚歌、余は爽かなる泉を讚ふ。ハンス・ザックス作銀調) を作つて詩人と歌手との使命を説き、歌手よりも詩人にこそ永遠の生命が與へられると、自らの覺悟の程を示し、次いで彼の最初の謝肉祭劇 Das hofftsindt Veneris, unnd hat 13 person. (1517, 2. ヴァグナスの廷臣、登場人物十三)、翌十八年にはかの「戀愛論争」(千五百十五年作)を書き換へた謝肉祭劇 Von der eygenschaft der Lieb (1518, 1. 8. 戀愛の特性)と道徳劇 (Moralitäten) から暗示された物語詩 Klage der verriben frau Kuscheyt (1518, 5. 4. 追放された貞操夫人の嗟嘆) が詩作された。

然し乍らこれらの詩作のために彼が本職を忽せにしたとは考へられない。と言ふのも、彼自身の立場から言へば、彼は何處までもその律氣な職人氣質によつて、何よりも先づ生涯の生計を樹てるために本職

の靴工匠となることに努めざるを得なかつたからである。其の上又詩作を讀けようと決意した以上、工匠歌の宗匠 (Der Meistersinger od. Meistersänger) とならなければ嘘であり、工匠歌の宗匠となるには先づ工匠 (Der Meister) となつて一家を建ててをく方が、何かと便宜である、工匠となるには、技術を練磨して製作品の審査を受けることを要し、しかも審査を受けるためには一家を構へなければならなかつた。即ち之等の事情は相連關して若いハンスの精進を促し、彼はその本職に對しても極めて眞摯にして勤勉、模範的職工であつた。それには又當時職人組合の最も盛な時代であつたことをも考慮に入れなければならぬ。それらの組合は各職業別に組織され、それぞれの嚴格な規定を有し、工匠となるには一定年數の見習時代 (Lehrjahre)、徒弟時代 (Gesellenjahre) を経た後、審査員 (Die Geschworenen) による製作品の審議 (Die Schau) に合格しなければならず、徒弟時代には妻帯を許されず、工匠 (Meister) には必ず配偶者 (Meisterin) が必要なければならなかつた。さればハンス・ザックスもかの「戀愛論争」や「追放された貞操夫人の嗟嘆」等て繰り返し主張してゐるその持論によつて、單なる戀愛の對稱ではなく、眞に人生の伴侶となり、生涯の苦樂を共にするに足るやうな婦人を求めて、歸郷以來既に二年を過ぎた。そして千五百十九年、彼の二十五歳の年、靴工としての傑作を製作するとともに、漸く好配偶を見出して、同年九月一日木曜日 (Egydentag) の日に許婚、次いで同月十日土曜日に結婚の式を挙げた。新婦は近村 Wendelstein の故 Peter Kreuzer の娘 Kungund Kreuzerin (Kunigunde, geb. Kreuzer) と言ひ、式は風習通り一週間の祝宴を伴つたけれども、その數日前(八月廿九日)に行はれたかの Scheurl 家のものに比べては、遙に簡素にして質實なものであつた。

かくて一家を樹て、靴工組合に加入して工匠の位置を占めたハンス・ザックスは、間もなく(千五百十九年九月廿日)父親から譲られた Kot-

Sasse の自宅で、鋭意家事に精勵し、商品の販路を擴張し、廳て數年にして、何不自由のない幸福にして満足すべき家庭を築いた。彼は元氣で自由で、快活で富裕で、健康で、恰幅もよく快い日常を過した (frisch und frei, freudreich, vernünftig, gesund, wohlgestaltet und frohlicher Sitten, Vgl. Ein Klagesprech über das schwer alter, 1557, 11, 5. 老衰を嘆く對話、千五百五十七年十一月五日詩人の誕生日の作参照)。けれども又其の間一刻も詩歌の世界が彼の念頭から忘却されてゐたのではなかつた。只彼はその配偶者を選んだと同じ眞面目な精神で、善良なる市民として健全なる家計を確立し、快適な組合を維持することを第一義としたのである。されば以上の如き一身上の事情と、更らに千五百五十七年ザックセンの一角から擧げられた宗教革新の烽火によつて、そ

の從來の信仰上に異常な衝撃を受たため、千五百十九年から二十二年の間、彼の詩作活動は僅に若干の小曲を産んだのみで、殆ど全く中断されてはゐるけれども、しかも彼は千五百五十七年七月十三日以来翌年にかけて、自作の詩(二十九篇)や各地で自ら蒐集した歌を集録してをり、それは表紙に In dem süßen Namen unsers Heilmachers Ihesu criste und Seiner ebenedeiten Mutter Marie (我等が救世主イエス・キリストとその恵まれたる母マリアの麗しき名に於て)と記した百四十二の各種の曲調(Ton und Weise)からなる三百九十八篇の四つ折版筆寫本の大冊(現在伯林圖書館所藏)となつて殘存し、今日工匠歌研究の有力な資料をなしてゐるのである。

## 第二章 宗教闘争(戯曲習作時代前期) 一五二〇年—一五二九年

抑々工匠歌人とは手工業者の中で詩歌に志のあるものが、先づその道の歌匠 (Meister) に弟子入りをして、作詩樂譜法 (Tabulatur) の凡ゆる規則を學んだ上て、工匠歌教習所 (Meistersingschule) に加入して Schulfreund となり、次いで教習所で承認されてゐる曲調 (Ton od. Weise) を少くとも四曲歌ふるに至りて Singer となり、更に既に既知の曲調によつて、新しい歌詞を創作して Dichter となり、最後に自作の歌詞を自作の曲調で自ら歌はうるやうになり、かくてその優秀な作品の吟詠が試験委員 (Merker) による嚴重な審査に合格すれば、自らも亦歌匠として弟子を取り、試験委員ともなり、教習所の師範ともなりうる特權を得たものを言ふのであつて、今日の所謂詩人と作曲家と獨唱家とを兼ねたその道の二大業者であつた。だから工匠歌 (Meistergesang) なるものは必ず歌詞と曲調との緊密な相互關係を有し、歌詞の表題にはそれが歌はれる筈の曲調の名稱とその曲調の作者名とが附記されるのを常とした。例へば im langen Ton Marners とか im blühenden Tone des Frauenlob とか in der schrankweise Hans Folzens とか in der silberweis des Hans Sachs とか言ふのは之であつて、之等の曲調の名稱は歌詞の詩形又は内容を暗示してゐるものもあつた (例へば der lange Ton は歌詞の各章が長い場合、die Hühnweis は詩の内容が嘲笑詩である場合) (Naheres S. Karl Godeke. Dichtungen von H. S. I. T. S. XXXV u. f. od. Rudolf Gené, Hans Sachs u. seine Zeit, S. 275 f.) その大部分は作者の任意の嗜好によつて選ばれたものである。その詩句は發音上の抑揚や強弱の區別を未だ問題にしてゐないとしても、綴字數及び押韻 (まゝ歌章の中頃又は終り

に Waisen と呼ばれた無韻の詩句もあり) に於て、極めて嚴格であり、屢々複雑にして、技巧を凝した詩形を有し、Bar od. Par (lateinisch, Gleichheit, 各章各節が相似形をなしてゐることによる) と呼ばれた歌詞は、短かきは十一行長きは數十行に及ぶ二ヶ乃至數箇の相似形をなす Strophen (od. Gesätze, 歌章) から成り、各歌章は又 Aufgesang (起承部) と Abgesang (轉結部) と言はれる二部から成り、起承部は更らに多くの場合四行の詩句 (まゝ五行、六行或はそれ以上の場合もある) から成る二ヶの全く相似した小節、Stollen と Gegenstollen を有し、轉結部は大抵その小節よりも長く、小節とは異つた詩形をとるけれども、最後の一句乃至數句はさきの小節の最後の一句乃至數句と再び相似形をなす。かくて此の第一歌章の定形が出来ると、第二歌章第三歌章は凡てその定形と相似形をなさなければならぬ。更らに各行の綴字數は大抵八綴であるが、Schlagreim と呼ばれた短かきは一綴、長きも四綴に過ないやうな詩句も挿入され、又屢々十一綴の長き詩句も用ひられた。押韻に至つては複雑多岐を極めたものがあり、作者の工夫と手腕とを最も多く要求するものであつた。しかもその歌詞は曲調と合致しなければならぬのであるが、然し之れは單なる節調 (Melodie) に過ぎず、音の長短と高低と、Blume (Floritura od. Coloratur) と言はれる一種の裝飾音とを組合せた丈のもので、無拍子 (タクトレス) であつたから、恐く我國の漢詩の吟詠に似たものであつたと思はれる。

處て工匠歌の内容は、曩にも一寸言及した通り、原則的には依然としてスコラ派哲學による形而上學的觀念の思辯、特に舊教の獨斷教義、

例へば世界を創造する以前の神の所在地如何とか、父、子、精靈の關係如何とか、如何にして神の子は處女の腹より生れしかとか、聖餐に於ける神の子の遍存を如何に解すべきとか言ふ問題に關してをり、ハンス・ザックスの初期の作品も亦殆ど悉く三位一體や聖餐や聖母受胎の神祕、特に凡ゆる罪人の代辯者であるマリア讃仰を取扱つてゐる。既に裏に擧げたハンス・ザックス自身の蒐集した工匠歌集の表題「我等が救世主イエス・キリストとその恵まれたる母マリアの麗しき名に於て」によつても、彼が未だ少年時代の宗教教育及び父祖傳來の加特力教義をそのまま忠實に遵奉してゐたこと、又工匠歌の内容が如何に羅馬正教の信條に基いてゐたかを明かに知ることが出来る。

かくしてゐる中にウイテンベルクの城内會堂の門扉に掲げられた九十五ヶ條の免罪符彈劾は、Myconius (Friedrich, 1490—1546 in Gotha, Reformator, schrieb Historia reformationis) が言つた如く「宛も天使自身が使者となつて世人の眼前に運んだ如く、二週にして獨逸全國に、一ヶ月にして全基督教國に傳播し、」となきだに文明開化の先端を行き、人文派の新思想に目醒めてゐたニュルンベルク市の上下を異常な感激と昂奮の坩堝の中に投じた。しかも不思議にも宗教改革運動に眞先に讃意を表したものは、同地の僧侶階級であつた。アウグスティン派の長老 (Prior) Wolfgang Volprecht は千五百十八年ニュルンベルクの出版商 Peipus をしてルツテルの免罪符抗議書を翻刻させ、ためにパイプスは穩健派の市政府から警告を發せられた程である。更らに聖エギディ、ヘンの院長 (Abt) Pistorius、カールトイゼルの説教僧 (Kartäuser Prediger) Blasius Stöckel、聖ローレンツツ寺及び聖セバルト寺の副僧正 (die Pröbste zu St. Lorenzen und St. Sebald) Pommer と Peiler 等相次いでルツテルの教説を支持するに至つた。勿論人文派の學徒で市會の有力な一員であつた Lazarus Spengler (seit 1607 erster Ratsschreiber) はルツテルの忠實な同志にして新運動の指導者で

あり、千五百十九年九月には有名な Schutzrede und christliche Antwort eines ehrbarn Liebhabers göttlicher Wahrheit なるルツテル擁護論を公けにしてをるし、當時まだ市政には參與してゐなかつたけれども、後の有力な市政府員 Hieronymus Pamngärtner はメランヒトンの弟子であり友人であり、市會の副議長 (der zweite Losunger) Kaspar Nützel とともに、かの「角をとられたエック」劇 (一五二〇年、宗教改革時代の演劇第六章参照) の作者とされてゐる Willibald Pirckheimer (od. Willibald Pirckheimer) や千五百五年以來の老市長 Hieronymus Ebner と協力して、反舊教運動の先鋒であつた。しかもヴォルムスの國會 (二十一年)、ルツテルの追放、彼の行方不明、聖書翻譯 (二十二年) と相次ぐ大事件に、此の自由都市の感激はいやが上にも高調して行つた。

然し乍ら市會そのものとしては、皇帝 (マキシミリアン一世は千五百十九年死、同年カール五世皇帝に選ばれる。) の思惑もあり、千五百二十二年末に同市で開かれた國會に對する遠慮もあり、物情騒然として將來の見通しもつかなくなつたために、極力中庸穩健な立場を取つてゐた。一方ルツテルの著書の出版公布を禁止せんとする勅令を千五百二十一年四月布告したり、ルツテルに對する追放令を市役所前に掲示したり、四旬齋に肉食を斷たなくなつたものがあるために、肉屋に肉の販賣を禁じたりしたけれども、他方僧院を見捨てた修道僧や市の備用する新教派の説教僧、例へば Andreas Osiander (seit 1522 in der Lorenzkirche angestellt), Sleupner von St. Sebald, Venator vom neuen Spital 等の如きを投獄嚴罰に處することを要求した法王廳の訓令 (一五三三年一月) を斷乎として拒否してゐる。即ちその理由としては、一般的に基督教教義と眞正なる基督教信仰に反する様なことは何等提唱しない説教僧を、教會區民から奪ふことは、區民に對する不正であると言ふのであつた。

かかる情勢の中にあつて、我等がヘンス・ザックスは何をしてをうたか？

彼はその素朴純情な心で、教へられるままに遵奉して來た從來の信仰が、根柢から覆へされるのを見た。彼は自分が遂先年（一五二五年）パラフレーズしてその豊かな聲量で歌つてゐた *Salve regina* (ged. von Hermann Contractus) のマリヤ讃歌が、何時か *Salve Jesu Christe* (unged. von Sebald Heyden) に書き換へられて、公然と歌はれてゐるのを知つた。彼の驚異は大きかつた。幼い頃からの信仰は美しくも亦懐しいものである。さればとて眞理の光に何時迄も目を閉ぢてゐることも許されな。彼は三年の間黙々として、我が家業に忠實に従事する傍、教界の新しい事件に注目し、新しい教説に耳を傾け、新しい刊行物に目を曝し、新しい論説に沈思してをうた。彼は九十五ヶ條のテーゼは言ふ迄もなく、ルッテルの著書、*An den christlichen Adel deutscher Nation. Der Sendbrief an den Papst Leo X.*, *Von der Freiheit des Christenmenschen* 等々を始め、目につく限りの新刊説教書、論説書四十冊を蒐集して「神と神の御言葉を尊び、隣人のために一本に製本させた」(Got vnd seinem wort zw Eren vnd dem nechsten zw guet ainpünden lassen, 1522, 製本せる小冊子集の卷末に記された言葉) が、次いで二十二年の末聖書の翻譯が出版されるや、恐くそれを熟讀玩味すること、彼に及ぶものはなかつたであらう。

果然千五百二十三年七月八日彼は *Die wittenbergisch nachtigal, die man iez horet überal.* (今や到る處に聞ゆるヴァイテムベルクの夜啼鶯) なる一大説話詩 (*Spruchgedicht*) を書いて世に問ひ、茲に始めて文人としての公生涯の第一歩を踏み出すとともに、喧々囂々たる世の宗教論争に、彼自身の明快にして果斷、整然として苛責する處なき新教精神を宣言したのである。

*Wacht auf, es nahent gen dem tag!*

*ich hör singen im grünen hag  
ein wunnliche nachtigal;*

*ir stimm durchklinget berg und tal.*

(目覺めよ、夜明けは近づけり—緑なす垣根に快き夜啼鶯の囀り。その聲は山谷に響き渡る)

長詩は最初に犂猛な獅子によつて廣牧場の荒野に誘はれ、狼や蛇の大群に無慘に苛虐さやなまれてゐる小羊の状態を寫す。その時夜啼鶯の聲が晴れやかに夜明けを告げれば、今迄眠つてゐた小羊どもは迷の夢も覺めて、再びもとの優しい牧人のもとに歸る。獅子が激怒し、野猪や野山羊や猫や蝸牛や、扱ては蛙や野鴨が如何に喚き散らさうとも、鶯は垣根の陰に匿れて安全であり、日輪は愈々赫々と輝いて、陰鬱な月の光を消す。以上の比喩の後に作者は詳細に涉つてその説明を施す。愛らしい夜啼鶯は暗夜から我等を目覺ましたマルティン・ルッテル、月影は四百年の間福音の教を眩ましてゐたソフィスト達、獅子は法王、荒野は法王政治と説き明かし、ついで無盡藏とも思はれる程に豊富な用語と、比類なき巧妙な措辭とを以て、加持力教の諸制度を或は大膽に揶揄し、或は峻嚴に叱咤し、更らに悉一聖書の文言を引用して、餘す處なくその積年の惡蔽の驚くべき蒐積を摘抉痛罵してゐる。

扱て又狼とはかくも久しく小羊を苦しめ瞞してゐた僧正、修道院長の事であり、蛇とはかくも久しく小羊の生血を啜つてゐた修道僧尼僧の事である。かくて又此等の僧侶達の犯した暴狀惡徳が容赦なく曝露され、反新教派の頭目 *Eck, Enser, Cochläus, Murner* がそれぞれ適切に動物に例へられて愚弄される。蛙とはルッテルに反對して愚論を喧しく喚く學者達であり、野鴨とは彼を理解出來ずして彼を輕蔑してゐる俗人どもである。かくして作者は此の黒闇の夜に四ヶ年間に百篇の論文を書いて眞の光明を齎したルッテルの教説を、聖書によつて懇切に教示し、彼の宏大な功績を讚美することに全篇七百行の殆ど



屋、ハイ、もうお寺へお出掛けのことだとばかり思つてをりましたが。僧、いや、裏の四阿屋へ行つて身を粉にしてゐた處ぢや。靴屋。どうしたんですつて？ あなたが粉をひいてゐなされた？ 僧。何さ、定時のお祈りをし乍ら、うちの鶯に飼をやつてゐた處ぢや。靴屋。鶯と云ふのはどんな鶯で？ まだ啼きますかえ？ 僧。どうしてどうして、時節がもう遅いで。靴屋。わしの知つてゐる靴屋に鶯を飼つてゐる奴がゐますが、その鶯はやつと啼き出した處ですがな。僧。何、そんな靴屋は鶯と一緒に悪魔にでも喰はれて了へ。どうして其奴は世にも畏れ多い教王様や尊い長老様方やわしらの様なお坊様を、カルメル賣りの様にチャラ／＼茶化すのかな。

即ち以上の様な會話は、劇作家としてのハンス・ザックスの才能を既に示して十分餘りあるものであらう。

此の會話に次いで靴屋のハンスは聖書の文句を縦横に引用して、神の言葉（聖書の文言）に直接従はず、只人間（法王又は宗會）の定められた律法を、それも勝手に曲解して、金科玉條とし、その辭句の末節に拘泥して安逸放縱な生活を送つてゐる扶持僧、牽いては舊教僧侶全般を順々と教へ諭す。靴屋が去ると、扶持僧は料理女を相手に虚勢を張り、あんな奴はもう出入りを差しとめるとか、町人風情が聖書のことをかれこれ言ふのはもつての他だとか、その中には思ひ知る時が來ようとか意氣巻く。

之がルッテルの Von der christlichen Freiheit の趣旨を布衍して、舊教諸制度の偽善と詐欺に満ちた悪風を列擧し、それからの自由と解放を主張してゐるものとすれば、次の「僧侶の贖善行と彼等の誓約」はルッテルの論文 Von den geistlichen und Klostergehülden Martin Luther's Urteil (1521) によつて、僧徒の三大誓約、貧困、純潔、從順が如何に無意味にして無益、否有害なる結果を齎してゐるかを曝露したものである。ここでは色々詭辯を弄して僧院生活を擁護しようとする

うとする托鉢修道僧 Hainrich と、僧侶の墮落を單刀直入に攻撃する職人肌のパン屋の Peter と、穩健にして聰明、順々と信徒の守るべき信仰生活の正道を、例によつて聖書の文字を博く引用して説得する靴屋のハンスとが登場して、かの三大誓約が從來如何に亂用されてゐたかを論議してゐる。

第三の對話「基督教信徒に對する羅馬教信徒の論難」は舊教僧徒 Romanus に對するに、富裕階級を代表する Junker Reichenburger を以てし、當時の吝嗇貪慾な資本家階級の飽くとしもない搾取振りを詳細に描いてゐる。即ちロマヌスは、ルッテルによつて舊宗法からの自由解放が説かれて以來、先買ひ、買占め、量目詐欺、不正秤、不正商品、賃金詐取、高利、不正裁判等々が福音新教徒と自稱するもの間に益々盛んに行はれるやうになつたと、新教徒資本家の「吝嗇その他公然の罪惡」に關して、悉一糺彈する。ライヘンブルガーもその非難が一部のものに妥當することを認めるが、それが決してルッテルの眞意ではないこと、何れ時が経てばそれらの不正も改まつて行くことを期待する。さればその時が來たら、わしも僧衣をかなぐり捨てて、新しい教に従へませうと、ロマヌス。

最後に第四の「福音派信徒とルッテル派信徒との對話」では、新教派が生嚙りの福音書の智識を以て、徒らに攻撃のための攻撃をこことし、異説のための異説をたて、主張に急にして、何等修身齊民の實を伴はず、ともすれば過激な言動に陥り勝ちであるのに對して、聖書の眞意とルッテルの眞精神を懇切に説明し、據て以て正しい基督教徒の進むべき道を教示してゐる。ここでも亦先の執狂的新教徒で、今義理の兄弟の Meister Ulrich を新教に改宗させようと躍氣になつてゐるペーターと、溫良寛大なハンスとが現れ、前者が「信徒の自由」に關して過激な反加特力的議論を弄するのに對し、後者は諄々と寛容の精神と隣人愛を説く。そこへ新教を邪宗だと思ひ込んでゐるウルリッヒ



が来て、ペーターと口論にならうとするが、ハンスはペーターの行き過ぎを押へ、ウルリッヒの誤解を解き、遂に説教の始まるのを告げる三度目の鐘の音を聽いて、三人仲好く教會へ行く。

今やハンス・ザックスは年齒三十歳、思慮分別に富む壯年詩人として、中庸寛大の徳を以て市民社會を嚮導しようとする人間の自覺の上に立つに至つた。それと同時に彼の宗教的思索は、聖書の徹底的研究と、新舊兩教派信徒の眞相を残り無く見究めることによつて、最も純正なる新教的信仰を樹立するに至つた。かくて彼は新しい信仰のために、多くの宗教歌を詩作するのであつたが、それらのものには古歌の書き換へ、彼の所謂「基督教的に訂正したもの」(christlich korrigiert)もあれば、勿論亦全く彼自身の創意になる自作のものもある。次いでグビデの雅歌(Psalmen)の翻譯詩を企て、二十六年にはその十三篇が上梓された。そして翌二十七年ニュルンベルクで公刊された *Enchiridion geistlicher Gesänge und Psalmen* の中にルッテルの作品と同列に、彼の讚美歌が採用されたことは、此の市井一介の靴工匠にとつて如何ばかりの名譽であり、喜びであつたことであらう。かくて二十五年二十六年は深い宗教的感激と瞑想の中に暮れて行つた。

かうしてハンス・ザックスは不動の信仰を確立し、聊かの不安も動搖もなく、家族のため職業のために營々として働き乍らも、その餘暇を心靜かに、或は工匠歌や説話詩の試作に、或は各種新舊の書籍の讀書に過してゐる中に、ニュルンベルク市の情勢は極めて多端複雑な推移を辿つてゐた。市會は新舊兩教派の要求に對して、出来る限り中立的態度を維持しようとしてをつたけれども、しかも大勢の赴く處如何とも爲し難く、教會や市民生活では漸次ルッテル福音派の主張が實行に移されて行きつつあつた。

先づ舊教の各種の年中行事、例へば四旬齋の時に於ける免罪旗の掲揚、<sup>カールスライク</sup>聖金曜日 *die neue Spitalkirche* へ行はれてゐた受難劇、

<sup>バルムツンク</sup>棕栢の日曜日の學生による驢馬行列、聖體節の薔薇の撒布や聖櫃の渡御等が廢止された。更らに各寺院では千五百二十四年に受難週間の聖餐式を新教風に改めて、聖杯を會衆にも授與し、彌撒を撤廢し、聖書を獨逸語で朗讀するやうになつた。之に對しては市會も勅令を顧慮して、聖ローレンツツ寺の *Pesler*、聖セバルト寺の *Pömer*、アウグステイン派の長老 *Volprecht* に此の種の急激な改革を慎むやう警告を發し、*バムベルク*の僧正 *Weigand* は此等の人達を召喚訊問したけれども、彼等はそれらが總て自分達の所爲ではなく、教會區民の求むる所のものであるとして、その主張を一步も譲らなかつた。かくして千五百二十五年三月三日市役所の廣間で宗教懇談會 (*Religionsgespräch*)

が開かれるに及んで、舊教側は初めの約束に反して、懇談會が討論會になつたと言ふ理由で中途退席したため、結局宗教改革案は殆ど何等の異議なく、市の法規として採擇されるに至つた。その結果僧院は閉鎖され、*托鉢僧宗團 Augustiner, Karmeliter, Dominikaner, Kartäuser* 等の説教、懺悔聽聞は禁止され、彌撒及び加特力の祭日は大多數廢止された。

以上宗教上の鬭争が果敢に行はれてゐたとともに、市の外側からは農民戰爭 (*1525, der Bauernkrieg*) の脅威が加重されつつあつた。既に二十四年の五月ニュルンベルク市の近郊では激昂した農民の集會する形勢があつたが、その運動が *Poppeneuth* に移るに及んで、市會は迅速果斷の處置に出て、市の領域内に於ける首謀者を捕縛し、彼等を一切の過激な動行に参加しないことを誓はせた。何れにしても市會は此の場合も出来る中立的立場を保持しようとしてゐたものと思はれる。即ち自らに降りかかつて来る火の粉は、それに先んじて斷乎として排除したけれども、しかも特權階級に對しても、農民側に對しても出来る丈穩便な手段に出たのである。例へば近郊 *Wöhrd* 及び *Ton* が百姓 *Diepold* の煽動演説で暴動の危険を示した時は、その首魁 *Wirt Urban Übersan von Wöhrd* へ *Tuchknappe Hans aus*



Nürnberg を略式裁判の後、容赦なく死刑に處したが、しかも最初から百姓方の要求に對しては出来る丈の理解を示してゐたし、又一揆か鎮定されて、Würzburg や Bamberg へは殘虐無慙な報復が行はれた時にも、之に合同するやうなことはしなかつた。勿論シュヴーベン連盟が一揆に對して武装した時は、ニュルンベルク政府も軍費及び兵員を提供したけれども、三萬の農民軍がヴェルツブルクを圍み、勢に乗じてニュルンベルク市の向背を諮問して來た時も、又は Markgraf von Ansbach を襲はうとして、市會に軍費と兵隊とを請求して來た時も、斷然その要求を拒絶した。と同時に Casimir 邊疆伯から市に依頼して來た援助も亦同様峻拒したのであつた。そしてかくの如き市會の賢明にしてしかも果斷な態度こそ亦、忠實なる市民ハンス・ザックスの立場であつたのである。

彼ほかの四篇の對話、若干の宗教歌を世に問うた後は、激動せる政局をよそに、再び沈黙してその家庭生活に歸り、只管に内外の著作を涉獵し、工匠歌の維持獎勵に盡瘁してゐた。かくして又靜かな三年の歲月が流れたが、その間結婚以來八年、千五百二十七年迄に五人の子女（内二人は夭逝）を儲け、漸く家計の基礎も固まるとともに、彼の詩囊も愈々豊かに養はれて來た。千五百二十七年一月一日に書かれた彼の最初の戯曲試作、Tragedia von der Lucretia, auß der Beschreibung Livii, hat 1 actus und 10 person. (ルクレティアの悲劇 Titus Livius の記載する處による。一幕、登場人物十人) は實にその成果であつた。

かかる折柄彼の平和な生活に心ならずも波瀾を生ずるが如き事件が、又もや彼の名を世評の渦中に投ずるに至つた。一日ローレンツ寺院の説教師で有名な新教派の闘士 Andreas Osiander が彼を訪れて、Vaticinia Joachimi (Bononie, 1515, 4. モアウムの豫言、ボロニヤ、千五百十五年四月)なる、十三世紀 Kalabrien (伊太利南部)の僧院長ヨア

ヒムの著で、法王廳の歴史と運命とを豫言した諷刺的な畫帳 (Vsl. J. Titmann, Deutsche Dichter des 16. Jhrtts. 5. B. Dichtungen von Hans Sachs, II. T. S. XXVII f.) の翻刻出版に協力することを乞うた。此の書は、オシアンダーの序文によると、Kartäuser-Kloster が閉鎖された時、同寺院の圖書の中から発見されたものと言はれ（事實は千五百十五年ボロニヤで翻刻されたものが利用されたのである。）、オシアンダーはその極めて幻想的怪奇な畫面に、自ら説明文を書き、熱心な新教派詩人として既に定評のあるザックスにもその説明を要約した簡單な警句的韻文を附加することを求め、よつて以て辛辣無比にして效果適確な法王攻撃、新教宣傳の具に供しようとしたのである。ハンス・ザックスは即刻その乞ひを納れて、即日詩作にかかり、版木及び印刷も急速に進捗し、二三週間にして同書は二十七年の早春 Eyn wunderliche Weyssagung von dem Kalstumb, wie es yhm bis an das endt der welt gehen sol, in figuren oder kenäl begriffen, gefunden zu Nürnberg ym Cardiuenser Kloster vnd ist schier alt. Eyn vorred, Andreas Osianders. Mit guter verständlicher außlegung, durch gelehrte leut, verkleert Welche, Hans Sachs in teutsche reymen gefaßt, und darzu gesetzt hat. (法王廳に關する不思議な豫言。本書は世の末に至る迄の法王廳の成り行きを、圖形や繪畫に仕組めるものにて、ニュルンベルクのカールトイゼル僧院にて発見されし非常に古きものなり。諸先生方によつて説明されし、よく解り易き解説を附し、ハンス・ザックス更らにそれを獨乙語の韻文に綴りてこれに添加せり。)なる表題の下に Hans Guldenmundt なる出版商から公判された。畫帳の中、原典の古畫三十枚。内第二十番目のもの丈が修正されて、ルツテルを象徴するものに描き換へられた。即ちもと／＼左手に薔薇の花、右手に鎌を持ち、地上には火焰と人骨を配した法王の肖像畫であつたものを、附屬物はそのまゝにして、法王の肖像文を一人の修道僧の姿に變へたもので、之には「此の修道僧は、自分が誰であ

るか判る様に、己が衣服を着、己が紋章、薔薇の花を手持つてゐるから、思ふにルッテルであらう。鎌は凡ゆる肉慾を草の如く刈り取るためであり、火焰は基督の愛の火の燃え上る事を意味するものである」と、オシアンダーが傍評を施せば、それに和してザックスは繪の下に四行詩の讚をする。

Das thet der heldt Martinus Luther,

Der macht das evangeli Lauther,

all menschenleer er gantz abhauth

und selig spricht, der Got vertrawth.

(斯くなすは英傑、マルティン・ルッテルなり。君は福音を掃ひ潔め、人の掟——法王の獨斷教義——を悉く斷ち切つて、神に歸依するものに冥福を授く。)

かくの如く全篇凡て異形な姿をした人物や奇獸怪鳥の繪であつて、その解釋は法王廳に對する揶揄、皮肉、諷刺、諧謔を極めた警句を以て満ちてゐる。更らにオシアンデルはその序文に於て、原本が少くとも二百五十年前のもので、その説明文はそれより新しいものであるから、今は更らに新粧を施して、一般の了解を助けるやうにしたと斷り、「法王黨は亡びなければならぬ。それは如何とも仕難いことである。彼等には自ら進んで、痛い目に逢はない中に、亡びの道を辿るか、敵對して、非道い目に逢つて、轉落して行くか、二者その一を選ぶより他にないのである。何となればかくするは基督教徒ではなくて、神の鞭であるからである。」と峻烈な論告を以て結んでゐる。

此の書が一度世に現れるや、獨り舊教側に於いてのみならず、新教派に於いても異常な衝動を與へたのは言ふ迄もないことである。ルッテルは此の小冊子に快心の笑を洩らし、これを再版し度いと迄書き(Vgl. Brief an Spalatin, 1527, Luthers Schriften, Halle 1749, B. 21. S. 1038) 彼の肖像に鎌が與へられてゐるのも大いに氣に入つたけれども、只薔薇

の花丈は自分の個人的業績を現すものではなく、福音派の説教職全體を示唆するものとしたと言つた。事實二十七年中に三種の版本が出てゐる。

市會は後難を恐れて、同書が出版されるや否や二十七年三月二十七日即刻出版商グルデムントに對して同書を沒收處分に附し、版木を押收し、フランクフルト市當局に移牒して、同市の見本市に渡されたものを自費で買ひ占めるやうに處置したばかりではなく、オシアンダーには以後斯くの如き出版物の刊行を絶対に禁じた。そしてハンス・ザックスも亦「かくの如き本に詩作することは彼の職務でもなければ、彼に相應しいことでもないから、自己の職業なる製靴業に勵み、爾後雜誌や詩文を公刊することを遠慮するやうに。然らざればやむなく彼を處分しなければならぬであらう」と嚴重なる譴責を加へた。市政府に忠良なるハンス・ザックスは大いに恐縮して、これより又久しく自作を公刊することはなかつたが、創作の慾求は押へることが出來ず、再び工匠歌の世界に歸つて、教習所の指導をすることもに、自らの詩境を獨り靜かに開拓して行つた。即ち彼は二十七年二篇の自作工匠歌曲調 *der neue Ton* と *der bewährte Ton* なる新曲、及び數多くの古曲調による工匠歌や *Der eygen nutz, das gewlich thir, mit sein zwölf eygenschaften* (利己心、十二の特性を持つる猛獸。四百行。利己心を異形醜怪な巨獸に拵へ、その肢體の奇怪な形をした十二の各部分にそれぞれ利己心から生ずる各種の惡徳を意味せしめて、利己心が世の中に如何なる害毒を流すかを歌つたもので、當時商人のみならず、手工業者迄も如何に墮落してゐたかを歌ひ込んである點に興味があつた。) なる説話詩を創作してゐるのみならず、二十六年六月廿四日から二十八年六月廿四日の間に自作詩のみ集録した工匠歌集、その大部分は新舊聖書から取材した百三十五篇三十七曲調よりなる第二卷 (*das zweite Meistergesangbuch*) を編輯してゐる。

### 第三章 思索と詩作（戯曲習作時代後期） 一五三〇年—一五三九年

ハンス・ザックスがその宗教闘争から身を引いて、再び静かな生活に歸つた當時、ニュルンベルク市は恐く繁榮の最盛期に達し、今や漸くその市民生活に弛緩頹廢の徴候を現しつゝあつた。市會が千五百二十六年五月二十三日人文主義の學校 Gymnasium Aegidianum（メラヒトンの指導の下に、彼の推薦した希臘史及び文學の教授 Joachim Camerarius, 一般文學の教授 Coban Hesse を招聘し、始め Aegidienkirche の僧院中に設立されたが、後近郊 Aldorf に移つて綜合大學になる。）を開校したり、千五百二十九年の Speier の國會、次いで卅年のアウグスブルクの國會へ代表（前者には Christian v. Kres, Bernhard Baumgärtner, 後者には Christian v. Kres, Clement Volkammer）を送つて独自の立場から、新教擁護のために敢闘したこと、は、同市の富力と勢力の並々ならぬものであつたことを思はせる。しかも二十八年にはアルブレヒト・デュラーが此の世を去り（同年五月六日死。ザックスは同じ十四日 Reimen zw der abcontrafactur des kunstreichen malers zw Nürnberg Albrecht Dierers なる追悼詩を書いてゐる）、次いで三十年にはデュラーの親友で各種新運動の先驅者であつたヴァリバルト・ピルクハイマーも亦歿し、三十二年には人文派の學者にして且つ熱心な新教徒 Hieronymus Ebner, 三十四年には同じく Lazarus Spengler が逝去したことは、同市にとつて尠からぬ損失であつた。兎に角人文主義精神と新教教義が市民生活の中へ深く浸潤して行くにつれて、一方ザックスが「利己心」の中で既に嘆じてゐる如く、自由主義的個人主義の蔽風が跋扈するともに、他方信徒の強慢不遜と分離確執とが愈々顯著になつて來た。かくして忠誠な

るハンス・ザックスの再び立つ時が來た。

當時既に彼は靴工としても市中一流の名工であり、遠くフランクフルトの見本市へも出張出荷する有様であつた。従つて又家産も次第に興り、一家よく和合し、今は後顧の憂もなくつたものと思はれる。それとともにその人生觀宗教觀も人文主義的教養とルッテル福音派の信仰とによつて益々中正にして不動のものとなり、詩囊亦愈々豊かに肥えて來た。即ち二十八年には der überlange Ton なる第十番目の自作工匠歌新曲調を創作し、二十九年一年間には創作工匠歌の數は六十篇の多きに昇つてゐる。

それかあらぬか果然千五百三十年二月廿日彼は長大の筆を揮つて、先づ我が生都ニュルンベルク市の繁榮を壽ぐ長詩「Ein Lobspruch der statt Nürnberg (ニュルンベルク頌歌)」を上梓し、次いで矢繼ぎ早やに市民生活の墮落を諷刺警告する數篇の教訓歌「Das schlaweraffenland (1530, 極樂國) Klage der wilden holzleut über die ungetrewen welt (1530, 6, 2. 不實な世間に對する野人木樵の嗟嘆)」。Die Zehen gebot (1530, 十戒)「Die zehen fürreffentlichen tugendt, so das ehrlich alter an im hat. (1530, 3, 3. 尊厳なき老年が身に具ふる十の麗しき徳行)」。Ein gesprech eyner bulerin und eines ligenden narren unter ihren füßen. (1530, 4, 9. 遊女とその足下で横はる馬鹿者の對話)」。Der narrenfresser (1530, 5, 9. 馬鹿者を喰ふ者)」。Die zwölf eygenschaft eynes boßhaftigen weybs (1530, 11, 3. 惡妻の十二の特性)」。等を詩作する。

「ニュルンベルク頌歌」は既に八十年以前に作詩されたハンス・ローゼンブリュートトの Spruch von Nürnberg や Kuntz Hab の Das

neue Gedicht der Ioblichen Stadt Nürnberg (1490) と同じく、同市の殷賑振りを賞め稱へたもので、當時各都市で流行してゐた郷土歌の一種として、ニュルンベルク發展史研究の重要な文獻であるばかりではなく、詩人がその生國に對する報恩感謝の衷情と郷土愛の熱情とを以て歌ひ出したものである丈に、その詩的構想に於て、又はその修辭に於て彼の先輩の作品を遙に凌駕した獨自の詩境を示してゐる。

頌歌は此の作者が好んで用ゐてゐる夢物語を以て始まる。一日作者は五月の花に誘はれて森の中を散歩し、小河の邊りに假睡する。すると夢の中で彼の前に山が現れ、その山腹に美しい薔薇の花園が見える。花園はありと凡ゆる珍獸名花に満ち溢れ、一群の薔薇の繁みには左翼が赤白の斜めの縞をなしてゐる鷲（ニュルンベルク市の紋章）が坐してゐる。しかし又園の四周には獅子、虎、狼等の猛獸や猛禽が窺ひより、かの鷲に隙あらば襲ひかからうと待ち構へてゐるが、鷲の四隅には四人の乙女が保護するが如く立つてゐるので、攻め寄せることが出来ない。彼がこの様な夢を見てゐる時、一人の Persivant (d. h. pousivant, naml. Herold od. Ausrufer) が近づいて来て、彼を呼び起す。詩人が今のやうな夢物語をすると、口上役は彼を案内して森の奥に進む。やがて眼界が開けて、廣々とした黄砂の空地が現れる。丘陵の上には王城が聳え、そこから一望の下に大都市が見渡される。即ちニュルンベルク市で、目も遙かに家並みの海、五百二十八の鋪装した街路、百十六の波上泉水と十二の掘抜井戸、又は十一の石橋を架した六十八の水車を廻す河の流れ、扱ては四大時鐘三小時計、八大伽藍六大都門、十の公設市場、十三の公共浴場等々が其の間に綴在する。市場では凡ゆる物質、酒、穀物、果物、鹽、脂肪、菜、蕪等が廉價で買はれ、伽藍では神の言葉が説教される。かくて作者と口上役との問答によつて、此の市こそニュルンベルクと呼ばれ、市の住民が如何に富裕で有力で勤勉であるか、如何に商工業が盛んであるか、美術工藝、

武道、音楽が榮えてゐるか等の記述があり、次いで賢明なる市政府の構成、その行政司法に關する讚美的紹介がある。そしてかの夢の中で見た珍果名花は此の市の有する造營物や産物を意味し、かの鷲は此の市會を象徴するものであると言ふ。ではかの猛獸野禽は何者であらうかと問はれて、口上役は、これぞ市の名聲の隆まるに連れて之を憎悪嫉妬する者共のことであると答へ、これに對してはかの白衣青衣綠衣及び鎧を着た四人の乙女、即ち叡智 (Weisheit) 正義 (Gerechtigkeit) 眞理 (Wahrheit) 及び力と富とを意味する防備 (Schutz) が市の繁榮と平和とを護つてゐる事の次第を委細を盡して説き明す。特に防備に就いては二重の城壁、百八十三の樓塔、堅固な防塞、深い掘割、無數の砲術長や隊長、山なす彈藥の貯藏、大軍を戰場で養ふ各種の食糧のことに迄及んで精細を極めてゐる。

かくて口上役は極力市の諸施設を讚美した後、「お前はまだ若いから、末永く此の市で暮らす様に」と言つて別れて行く。作者はそこで城山を馳け下り、市中を見物して歩けば、言はれた言葉に違はぬ繁昌振り、華麗な公共物、秩序立つた市民階級、用意周到な政道、何れも豫想以上の立派さであるのに驚嘆するばかり、かくて神に對する感謝と祈念とで此の詩は終る。

此の説話長詩（全篇三百八十四行）が四つ折版の單行本並びに大<sup>フ</sup>一<sup>オ</sup>つ折版一枚刷で世に現はれるや、非常な評判となり、相次いで印刷され、又は筆寫されて廣く愛讀されたばかりではなく、市當局の詩人に對する態度も之がために著しく好轉して來たことは疑を容れない。彼の筆陣はこれより愈々益々多彩を加へ、その作品の種類も亦多種多様になつて行つた。

彼の笑話詩 (Schwank) 「極樂園」は、詩中にも言はれてゐる通り、既に「古人によつて空想された無憂郷」 (Schlauffen Landt, das von den alten ist erdicht, V. 101. Vgl. Edmund Goetze, Sämtliche Fabeln und

Schwänke von Hans Sachs, I. B. Nr. 4.)によつたものであるが、その内容は全く詩人独自の豊かな想像力によつて描かれた最も無爲無能の人間が最もよく暖衣飽食することの出来る國のことを歌つたものである。そこでは到る處、家屋も樹木も原野も河川も珍味佳肴で満ち溢れ、人間は無智無力なものが一番尊重される。されば怠惰で貧食でやくざで放縱な若者は此の國へ罰として追ひやられると、作者の反語は皮肉痛烈を極めてゐる。

「木樵の嗟嘆」では世の腐敗墮落した様に愛想をつかし、それを逃れて山中へ這つた人人が、草根木皮を攝取し、敬神にして自足した生活を送り乍ら、世人の再び正道に立ち歸る日を待つてゐる。その冒頭は

Ach Got, wie ist verderbt all welt,

wie stark ligt die untreu zu felt,

wie hart ist gerechtigkeit gefangen,

wie hoch tut ungerichtigkeit prangen,

wie sitzt der wucherer in eren,

wie hart kan arbeit sich erenen,

wie ist gemeiner nutz so teuer,

wie fillt der eigen nutz sein scheuer,

wie nimt überhant die finanz,

wie spitzig ist der alefanz, usw.

(あはれ神様、何と此の世は墮落してゐることか、何と強く不實がはびこつてゐることか、何と無慙に正義が縛いめられてゐることか、何と高く不正が驕つてゐることか、何と高利貸が敬まはれてゐることか、何と勤勞が暮しくいくことか、何と公共心が不足してゐることか、何と利己心が納屋を満してゐることか、何と金利商賣が巾をきかせてゐることか、何と私慾が鋭くなつてゐることか云云)の如き「何と」

で始まる二行押韻の詩句を連ねること正に八十行、以て作者の豊富な語彙と想像力と、更らにその精力的な詩魂とを窺ふに足るであらう。

その他「十戒」はルッテルの十の戒律を一節十三行、十節で解説したものであり、「老年の十徳」「遊女と馬鹿者」「馬鹿者を喰ふ者」「悪妻の十二の特性」等は何れも作者の世相に對する道義心の發露したもので、巧妙なる諷刺的、又は比喩的教訓ならざるはない。しかも作者の明朗瀟灑な氣象は自ら詩中に反映して、此等の説話詩や笑話詩が皆、奇想天外の構想、聊かも澁滯することを知らぬ筆致、輕快なユーモアや諧謔、嫌味のない揶揄皮肉によつて、何人にも悪感情を起させることなしに、勸善懲惡の倫理思想を何時の間にか鼓吹してゐると言ふことは、此の作者の一大特質であり、長所であるとしなければならぬ。

勿論作者の創作活動は今や工匠歌や、此の種の道德歌にのみ局限されてはゐない。千五百三十年と言へば獨逸の文壇に於て、漸く物語劇が近代劇的な形式へとその第一歩を踏み出して來た頃であつた。されば彼の旺盛な詩想は從來のやうな内容形式に嚴重な制約のある工匠歌は言ふ迄もなく、宗教詩や道德歌に意匠を凝すこと丈に満足することが出來ず、此の演劇の分野にもその觸指を延ばさなうてはゐられなかつたのは、又言ふ迄もなくことであつた。

彼は先づ千五百三十年一月七日、Comedia: Die gantz histori Tobie mit seinem sun, hat xiiij person und V actus (喜劇 通し譚) を書いた。その子。登場人物十四人、五幕。此の劇の創作年度は普通三十三年とされてゐるけれども、今は Bibliothek des literarischen Vereins in Stuttgart, CCXXV. Hans Sachs, B. 25. の作品年表(1580)を書きつ、その後 Hans Ackermann (1539), Jörg Wickram (1551), Thomas Brunner (1569) 等々多くの作家が好んで脚色したトビウス物語に先鞭をつけ、次いで二月三日 Comedia, darin die göttin Pallas die tugend und die

göttin Venus die wollust veficht und hat XII person und drey actus. (喜劇、女神ベナス徳行を、女神ヴェナス快樂を辯護す。登場人物十二人、三幕)なる一種の道德劇(モラル・プレイ)を書き、十二月八日には Comedia mit xij person, das Christus der war messias sey (喜劇、登場人物十二人。基督は之れ眞の救世主)なる救世主降臨に關する宗論劇(Disputation wen messias kumen sol)を創作した。それとともに「ヴェナスの廷臣」(1517)を書き、以來十二年振りて此の年十月八日 Ein kirtzweylich fasnacht-spiel von einen bösen weib, hat fünf person. (面白謝肉祭劇、悪妻、登場人物五人。因に此の創作年度に就てもトベナス劇に同じ)なる謝肉祭劇に再び筆を着けてゐるのみならず、悲劇の分野に於ても、かの「ルクレティアの悲劇」(1527, l. 1.)と等しく、羅馬の歴史家 Titus Livius (59 v. C.—17 n. C.) から取材した一幕物 Tragedia, mit 24 personen zu agiren: Die Virginia. (悲劇、出演人物二十四名、ヴァルギニア)なる殉難物語を十一月二日の脚色してゐる。更らに傳説及び歴史物語詩 Historia. König Artus mit der ehbrecher-brungk (Jan 9. Mörser-王と姦夫姦婦の橋), Historia: All römisch Kayser nach ordnung, wie lang yeder geregiert hat, zu welcher zeit, was sitten der gehabt und was todes er gestorben sey, von dem ersten an bis auf den yetzigen großmechtigsten kayser Carolum 5. (Feb. 12. 歴史物語、羅馬皇帝總考へり。年代順。各皇帝の統治年數、時代、風習、死因に就き、初代より現代皇帝カール五世に至る), Historia: Die göttin Diana mit Acteon, des königs son, der zu einem hirschen wardt. (Mai, 9. nach Ovidius, 傳説物語。ダイアナ女神と鹿となれし中士(マンナオン)と、インッパ物語による工匠歌 Von hasen vnd froschen ein fabel: “Esopus vns peschreibet” in dem süßen tone des Regenpogen (Jan. 5. 兎と蛙、動物實話、「インッパは我等の物語を」ヘーゲンボーゲン作甘美調)等の作品はすべて、作者が如何に不斷の

勤勉を以て、當時の行詰つた詩壇の隘路を開鑿して、文壇に清新の氣を吹き込まうと努力してゐたかを示すものである。此の意味に於てザックスが前年度二十九年末に既に時事問題を詩作の題材に取上げてゐることは、注目すべき新傾向である。即ち此の年土耳其軍はヴァーデンを包圍し、匈牙利に侵入し、慘虐野蠻、誠に戦慄すべき行爲に出たのであるが、詩人はその生都の繁榮を盡したのにも劣らぬ愛國の情熱を以て、直ちに筆を執り、Die türckisch belegerung der stat Wien, mit sampt seiner tyrannischen handlung (1529, Dez. 土耳其軍ヴァーデンを包圍し、暴虐なる行爲に出で、), Historia der türckischen belegerung der stat Wien, mit handelung bayder tayl auf das kirtzest ordenlich begriffen (Dez. 21. 土耳其軍のヴァーデン包圍論。兩軍の動行を簡潔に寫すもの)、Historia: Ein tyrannische that dess Türcken, vor Wien begangen (Dez. 24. 事實論、ヴァーデン郊外に行はれたる土耳其軍の暴狀。) Die duerckisch pelegerung der stat Wien: „Ir Cristen auserwelet“ in prueder Feiten thon (1529, 土耳其軍ヴァーデンを包圍す。「汝等選ばれたる基督教徒よ」なるインッパ兄弟民謡論), Ein lob des redlichen krieg-volck in der duerckischen pelegerung der stat Wien. In dem thon Es kam ain alter Schweizer gangen. (1529, 土耳其軍のヴァーデン包圍時を於て我が軍隊の敢闘を讀む。「老瑞士人がやつて来た」の民謡調)等或は物語詩で、或は民謡調で數篇の愛國詩を書き、戦の一進一退に應じて或る時は基督教國の悲境を嗟嘆し、或る時は基督教軍の勝利を謳歌し、羅馬帝國が神の加護を得て、獨逸皇帝により冷酷無慚な仇敵から救はれることを熱烈に祈念するのでもつた。

越えて三十二年土耳其軍が匈牙利を奪略するのを見ては黙視するに忍びず、彼は再び人道戦士として Vernommung zw ainem statlichen Durcken zug an das reich (1532, 土耳其の大軍基督教國に進攻するに當りて機す)なる一節八行二十五節の民謡調を詩作し、土耳其軍の暴戻殘

虐の状を描き、上は皇帝からシュヴェーベン同盟、王族貴族を始め、騎士、僧正、高僧は言ふに及ばず、下は小姓、部隊長、射撃兵、傭兵、百姓に至る迄、全國民一團となつて國難に當ることを要請してゐる。されば彼は尋常一様な市井の遊閑詩人として單に閑文字を弄してゐたのでは決してなかつた。その詩人としての使命の自覺は、彼をして國民精神作興のために椽大の筆を揮はずに至り、その憂國の熱情は尙今後とも幾多時局に關する政治詩を書かしたためたのであつた。

孰れにしても彼の詩人生活は此の千五百三十年を以て一時期を劃するものと言ふことが出来る。これより約十年間、ハンス・ザックスはその公正妥當なる識見と博覽強記の學識とによつて、文學の各方面に廣く創作活動を擴大展開し、それぞれの分野に於て習作的作品を試作し、筆陣を練磨して行つた。その素材は新舊聖書は言ふに及ばず、ポッカチオの Cento novelle (Steinhöwel 譯)、Von den Berühmten Frauen 及び Vom Glückswechsel、又はインツップ物語を始めとして、希臘羅馬の有名な歴史家詩人の作物、其他當時の年代記旅行記、民間文學、時事問題彙報の類から、更らに詩人自身の日常の觀察見聞等に涉り、その作品の種類は無數の工匠歌は勿論のこと、説話詩 (Spruch) 宗教詩 (Geistlicher Spruch)、道德歌、寓話詩 (Fabel)、笑話 (劇) 詩 (Schwank)、悲歌 (Klagrede)、對話詩 (Gespräch)、討論 (劇) 詩 (Kampf gespräch)、謝肉祭劇、喜劇悲劇正劇、傳説歴史時事詩 (Historia)、各種風物詩 (例へばニェルンベルク市の行事、軍紀、特に自然科学博物學上の事項) に及んでゐる。恐らく千五百三十年代十年間は彼の作詩生活にとつて、此等雜多な文學形式に於ける多面的研究時代であり、選擇時代であつたとも言ふことが出来るであらう。

今千五百三十年から三十九年に至る間に創作された五百七十五篇に及ぶ彼の大小作品の中から、若干異色あるものを列擧すれば、先づ道德的教訓詩としては曩に寓話劇の章 (宗教改革時代の演劇第十五章参照)

て見た「親子と驢馬物語」を取扱つた笑話詩 (1531, 5, 6.) を始め、かの「利己心」に類するもの (Nachred, das greulich laster, sampt seyden zwölf eygenschaften (1531, 陰口、十二の屬性を具へて惡徳) Hainz Widerporst (1534, 4, 16. 反抗太郎)、Bald-anderst (1534, 7, 31. 變化小僧)、Hans Unfeib (1534, 11, 20. 物臭やハンス) 等があるが、孰れもその表題の示す惡徳を擬人化して、巧妙にその特質や作用を描寫したものである。

「陰口」は作者得意の夢物語で、詩人は夢の中で奇怪な女 Calumniatrix (誹謗) と知己になる。彼女は背中二枚の羽、左の胸に出血してゐる傷、左の手に血の着いた剪刀、頭には王冠、額には目匿し、髪は蛇身、右手には毒の這入つた黄金の壺を持ち、右足には硫黄や瀝青の燃えてゐる大きな球を曳摺つてゐる。此の女が彼に備はれたいと言ふので、彼は彼女が何者かと問ふ。だが女は Ihrenhold の近づいて來るのを見て逃げ出す。後でエーレンホルトは彼女の十二の附屬物が、それぞれ陰口に伴ふ惡癖を表してゐることを詳細に解説する。

同様に「變化小僧」では作者が釣魚に行つて夕立に逢ひ、洞窟に迷れると、そこで若くなつたり歳取つたり、美しかつたり醜くなつたり、怒つたり優しかつたり、美服を着たり襤褸を纏つたり、笑つたり泣いたり、低くなつたり高くなつたり等々その他千變萬化する怪物に逢つて、彼からその輕佻浮薄の性格と諸行無常の世の有様を教へられることになつてゐる。「反抗太郎」では「これはこれ未開の愚人國から來た反抗太郎と申すもの」(Hainz Widerporst bin ich genant, / kum her aus wildem Lappenland) と言ふ書き出しで、こゝこゝに一般常識とは反對的態度に出ないでゐるらしい彼自身の言動を、自己紹介の形で無數に涉つて列擧してゐる。又「物臭やハンス」では或晩詩人が我が家の窓から眺めてゐると、怪しい一つ目の襤褸を着た口の大きい老人が、馬の尻に手綱をつけてやつて來て、都門の時限に遅れた



から一晩泊めて貰ひ度と頼む。(因て此の記述を後述する Historia von dem kaiserlichen sieg in Aphrica, 1535, 9, 30. Die Gesellenstechen, 1538, 3, 8. 〇中 ich nein gen Nürnberg zoch, / mein kram wider zu füllen — 店の品物を仕入れた、ニールンベルク市中へ行つた——又は als ich gehn Nürnberg wolt ——ニールンベルク市へ行かうとした時——とある文句から、ザックスが三十五年以來數年間ニールンベルク都門外に居住してゐたと Titmann の Dichtungen von Hans Sachs, II. 1. Spruchgedichte の Einleitung S. XVI に於て推定してゐるけれども、「物臭さハンス」が三十四年に出來てゐることから見ても、その推論は當らない。此等の文句は結局詩人の詩的假想に過ぎないものであると思はれる。)そこでお前は誰で商賣は何かと訊くと、老人が例によつて、自分は貴賤老若誰にも知られてゐる物臭さハンス (Hans Unheiß) と言ふもので、半盲目で怠惰で不精で無分別で、政治でも裁判でも、役所でも戦争でも、試合でも學問でも、文學美術でも家庭でも、ありと凡ゆるものを墮落荒廢させるものだと自己紹介をする。かくて此等の詩の最後にはそれぞれの結辭 (Der Beschlus) があつて、作者自身全篇の教訓的意義を明かにしてゐるのであるが、兎角乾燥無味四角四面に流れ勝ちな道德説を、一一趣向を凝らした詩的構想で包み、驚くべき豊富な實例を矢繼早やに二行韻を踏んで羅列して行く手腕は、有繁に作者の想像力と詩才との尠なからざるものあるを思はせる。

以上の如き比喩的教訓詩に連關して、直接に世相の混亂、時代の頽廢を悲憤慷慨したものがあつた。例へば九柱の詩神の神達が獨逸で蔑視されてゐるのを嘆いて、希臘のヘルナッスに逃げて行くと言ふ Klagred der neun muse oder kunst uber gantz Teutschland (1534, 8, 16. 九詩神又は藝術の全獨逸國に對する慷慨の辭)、基督教徒が互に異説を樹て、宗派争ひを事としてゐることや、各階級が互に嫉視反目して平和を攪亂してゐることを嘆いた Klagred der waren Freund-

schaft uber das volck christlicher landt, welliches sie Flüchtling verlassen muß. (1534, 4, 20. 眞の友情の基督教國民衆に對する嗟嘆の辭、友情は民衆を救護見捨つてゐることを) 〇 Des verjagten Frids Klagred uber alle stendt der welt (1534, 5, 7. 追はれたる平和、世界の凡ゆる階級に對し嗟嘆す) 等々である。

更に笑話詩 (Schwänke) には

Das hausmaid im pfug (1532, 4, 7. 鋤に縛られた娘。作者がバイエルンを商用で旅行した時或る町で目撃したことだと言ふ。六人の娘が鋤を牽かされ、若者に追ひ立てられて、畑を耕してゐる。何うした譯かと訊くと、彼女達は謝肉祭の晩に男の求愛を退けて、男に今年一年中の恥をかかせたから、その罰を受けてゐるのだとの事。すると六人の娘達が交る交るその理由を話す。或る者は母親がお前は未だ若過ると言つて許さないからであり、他のものは一度男を知つて捨てられたからであり、第三のものはまだ町へ來たばかりで、村に自分を愛して呉れてゐる男があるからである等々。そこで作者は若い娘様方よ、身持ちをよくし正しい結婚をする様にと教訓する。)

Der alten weiber roßmarck (1533, 6, 1. 老婆市場。かの極樂國では老婆を賣買する市場が立つ。或る日若い女房の驕奢に苦しみられてゐる老年の男と、老いた女房の醜惡に惱まされてゐる若い男とが、その市場で女房の交換をしようとするが、女房達は承知しない。老いた男は若い頃金のあるに任せ、凡ゆる甘言を用ひて女と結婚したのであり、若い男は金に目をつけて、當時未亡人であつた年上の女と結婚し、その金をすつかり使ひ果して了つたからである。かくて作者は分に應じた結婚をする様にと説示する。)

Wer lust zu gewinnen hat ein krantz, füg sich zu diesen nasendantz. (1534, 8, 12. 花冠を得たものは此の鼻踊りに來れ。鼻踊りと言ふものがあつて、一番大きな鼻を持つてゐる者には三等賞迄賞品が出ると言ふ話。尙此の笑話詩は千五百五十年二月四日謝肉祭劇 Der nasentantz に改作されてゐる。)



Des Ewlenpiegels thestament (1539, 2, 24. オイレンシユピーゲルの遺言。オイレンシユピーゲルが重病になつた時、坊様に喜捨を勧められ、糞壺の中に糞を入れその上に金を並べて置いて、坊様にその壺の中へ手を突込ませたと言ふ話)

Der karg und mit (1539, 3, 17. 吝嗇者と浪費者。尙此れと同じ表題で呼ばれてゐる三十八年二月十七日? 作の謝肉祭劇あり。又此れと同じ日に出来た同一表題の工匠歌もあり、遠く千五百六十二年五月二十五日にも同じ表題の笑話詩が作られてゐる。吝嗇して金をためた男が死ぬと、そのあとへ婿入りして来た男がそれを浪費してしまふと言ふ話。作者は最後にその中庸を行くやうに教へる。)

等があるが、勿論ここに挙げたものは數十篇 (E. Goetze, Sämtliche Fabeln und Schwänke von H. S. には三十年から三十九年迄十年間の作として Nr. 4 — Nr. 57, 五十四篇が挙げられてゐる) の中の比較的異色あるもの若干に過ぎず。

以上に次いで討論詩は

Kampf-gesprech zwischen frau Arnut unnd Pluto, dem gott der reichthum, welches under ihn (innen) das besser sey. (1531. 貧富優劣論。同年に同一題材の謝肉祭劇及び喜劇がある。)

Ein kampf-gesprech zwischen dem Tod unnd dem natürlichen Leben. (1533, 9, 21. 死生優劣論。)

Kampf-gesprech: Das alter mit der jugend. (1534, 1, 12. 老壯論。之は喜劇として取扱はれてゐる。そして古今の老若や日常の體驗から得られた作者の該博廣範な智識が驚くべき流暢な展開をされてゐる。)

等があり、時事詩として

Historia von dem kayserlichen sieg in Aphrica im königreich Thunis anno 1535. (1535, 9, 30. 皇帝の阿弗利加チャニスに於ける戰捷論。尙同一題材の同年作民謡調がある。)

Der kriegszueg in Sophoier lant (1536, サボイ遠征。民謡調)

等があるが、前者はカール五世が土耳其古の海賊 Chaireddin Barbarossa 征討のため、千五百三十五年五月バルセロナで軍議し、大軍を集めて六月一日五百艘の艦船を以て出陣、サルヂニアを経て七月チニスに上陸、敵を破つたことを歌つたもので、同時に此の皇帝に捧げた頌詩でもある。後者は同様に翌三十六年獨逸の西方の敵佛蘭西が伊太利に侵入したのに對して、カール五世が轉戦してゐるのを歌つたもので、ハンス・ザックスの國民的敵愾心は此等の物語詩や民謡調によつて十分に窺ふことが出来る。

扱て又風物詩として特記すべきものには

Das gesellenstechen (1538, 3, 8. 武術試合市民大會) があるが、之は三十八年二月六日月曜日に門閥 Pömer 家の息 Karmulus Pömer と Magdalena Kristen von Rodenhurg との結婚式に當り、市會から許可された中央廣場に於ける武術大會の模様を賦したものである。されば作者の廣範に渡る智識慾は此の種の行事やその歴史又は様式に就いても興味を寄せ研究を怠らなかつたものと思はれる。四十一年五月廿一日には騎士武術大會の歴史を敘した Historia. Ursprung und ankunfft des thurniers, wie, wo, wenn und wie viel der im Teutschland sind gehalten worden. (1541, 521. 歴史物語詩。騎士武術試合の起源と來歴。獨逸に於て行はれた方法、場所、時及び度數) と言ふ三百七十行に渡る長詩があり、四十五年七月廿四日には Der fechtspruch. Ankunfft unnd freyheyt der kunst (劍道説話詩、斯道の由來と自由) なる二百三十六行に渡る長物語がある。特に後者はオリムピック競技から始まり、中世の生死を賭した武術試合が流血の慘事を屢々惹き起したため、皇帝 Maximilian der Teure によつて禁止せられ、その代り模擬試合の體力を鍛鍊するための Gesellschaft der Marxbrüder (d. h. die Brüderschaft von Sankt Markus od. Marksbrüder in Frankfurt a.

M. Begründet 1487) が創立された次第に及んでゐる。

ニュルンベルク市に於ても十二世紀末以來王侯貴族の大規模な武術大會が行はれてゐるが、市民の参加は許されなかつた。しかも斯道の心得のある市民が地方大會などに参加すると、貴族騎士階級の憎悪を買つたので、市會はそれを二百磅ヘラーの罰金を以て禁止し、その代り *Gesellenstechen* と言はれる、馬上又は徒歩で、刀劍、棍棒、長棒等を以て敵手を衝く武技試合の市民大會を催すこととした。既に千三百八十七年此の種のもが市場で開かれてゐるが、殊に千四百四十六年度のもは参加人員數、その際催された豪華な行列によつて有名であると言ふ。その後各門閥家はそれぞれ衣裳、馬具、從者の仕着せ等に趣向を凝らし、競技の種目も數を増して、何等かの祝祭日に於ける豪華な催物になつて行つた。

ハンス・ザックスの「武術試合市民大會」は作者がニュルンベルク市へ商品の仕入れに來て、たまたま此の試合日に遭遇し、仕入れ先 *Wolf Rülen* に案内されて、此の試合を見物すると言ふ構想で（因に此の二人の立場は逆で、事實はハンス・ザックスの方で地方から商品の仕入れに來た顧客の小賣商かなどを案内したことがあるのであらう。従つてこれによつてザックスが市外に居住してゐたと推論するのは早計である。）、リュルンから説明を聴き乍ら町の賑ひ、試合の行列、演技の様様、その歴史、参加者の氏名と衣裳、賞品等に就いて忠實に記述したものである。特に演練の描寫は作者自身の直接見聞したものである文に、甚だ生彩を放つてゐる。

以上三十年代に於けるハンス・ザックスの特色ある作品數篇を見たのであるが、ここに特に注目すべきことは、彼が今や漸く戯曲創作の方面にも觸手を延して來てゐると言ふことである。

此の時代に創作された戯曲は、彼の所謂 *Tragedi* 一篇、*Comedi* 十篇、*Fasnachtspiel* 十一篇（此等に關する詳論は、後篇ハンス・ザックス

の舞臺に讓る。尙後掲ハンス・ザックス戯曲目錄參照）あり、喜劇の中にはかの三十年作「トピアス劇」を始めとして、既に屢々言及したことのあるロイヒリンの喜劇 *Hanno*（中獨演五一〇頁及び宗教改革時代の演劇三五八頁參照）の獨逸語譯劇 *Ein comedi, mit 10 personen zu recitieren, doctor Reuchlins im latein gemacht, der Hanno* (1531, 1, 9. 喜劇、出演人物十二人、ドクトール・ロイヒリン作羅語譯劇、ヘンノー) やエステル劇 (1536, 10, 8. 宗教改革時代の演劇第十一章參照) があり、謝肉祭劇にはゲーテによつてワイマールで上演され、其後もニュルンベルクで千八百七十四年六月廿四日ハンス・ザックス記念碑除幕式の日に上演された有名な *Ein fasnachts-spiel mit dreyen personen. Das narrenschneyden* (1536, 10, 3. 謝肉祭劇、登場人物三人。開腹手術、馬鹿者達の切開) がある。勿論此の時代の作品は未だ大部分敘事詩を對話體に焼き直した程度に過ぎないのであるけれども、爾今宗教改革時代の演劇熱は、健筆のこの詩人をも捕へて放さず、屢々斷續し乍らも、結局驚くべき數の戯曲の創作と演出とを招來するに至つた。されば此の時期は彼の戯曲創作から言つて、習作時代の後期に當り、將來への發展を豫約してゐる文に、獨逸演劇史上から見ても亦、重要にして興味ある研究課題を呈供してゐると言ふことが出来る。

尙ハンス・ザックスの工匠歌に至つては、千五百三十一年七月八日百六十七曲を收めた工匠歌集第三卷が完了。三十八年六月二十六日二百四十三曲を收めた第四卷が完結。次いで同年九月十一日第五卷に着手（之は四十三年四月十三日に完成してゐる）。說話詩集は三十八年七月十六日百二十八篇を收めた第三卷が完了。三十九年一月一日第四卷に着手（同卷は四十三年四月十三日結了）してゐる。孰れも作者自筆の筆寫本であつた。

## 第四章 叙事詩時代(成熟期) 一五四〇年—一五四九年

四十年代に這入るや、ニュルンベルク市は再び多事多端な時代を迎へるに至つた。所詮封建制度末期の社會不安は、殆ど獨立國家の觀を呈してゐた同市をも、そのままにはしてをかなかつたのである。然しザックスの心境は半生の營々たる精進努力の效空しからず、恒産恒心を得て漸く文字通り不惑の域に達したものの様に思はれる。彼は製靴の名工として一流の達人が自らにして悟入してゐる處世の大道を、靜かに度ましく歩みつつあつた。恐く今更らに名利名聞に煩はされることもなかつたであらう。その素朴純情な性格は嘗つては奔騰して筆禍を買つたこともあつたとしても、今は純潔にして圓満なる人格に迄發展し、同業の先達、工匠歌人の巨匠として仰がれ、恐く彼を知つたものにして、彼の詩才、彼の人爲りに敬愛の念を抱かなかつたものはなかつたであらう。

彼は既に千五百三十一年二月十五日に父 Jorg Sachs を失つてゐるが、それ以來十年、全く自力自營、又かの「利己心」その他の作品で手工業者の腐敗墮落を攻撃し、商業道德を遵守すべきことを極力要請してゐる言葉に背かず、勤勉力行、正直律義に家業を勵み、相當な資産をも蓄積するに至つた。即ち彼は千五百四十二年六月十四日、結婚生活二十三年にして、その増大して來た家族のために従來持つてゐた數箇の家作(例へば二十二年八月十三日に四百フロリンで Weysen-thurn am egk 附近に家を買つてゐる)を整理して、Spitalplatz の近く(今日の Hans Sachs-Gasse) 六百十グルデンで家屋(此の家は彼の死後 das Gasthaus zum goldenen Bären となり、後二軒の商家が建てられ、今日その一軒がハンス・ザックスの家として保存され

てゐる)を求め、ローレンツ寺院附近の今迄の住宅はそのまま自己所有として、新居へ移轉して來ることが出來た。此の費用が主として彼の靴工場の利潤から支出されたもので、詩作の稿料によつてゐるものでないことは、ほゞ確實であると思はれる。と言ふのも彼の作品で上梓出版されたものは成程かの「ニュルンベルク頌歌」を始め、一枚刷大版附木版の挿繪入り、又は四ツ折小版で、例へば先に擧げた「陰口」「木樵の嗟嘆」「反抗太郎」「鼻踊り」等々三十年代に相當數あるけれども、それらは何れも小品であり、その内容から見ても多く民衆を啓蒙指導する意圖を以て、出版者と協同で計畫されたもので、作者の民衆詩人としての評判を高めるに役立つたとしても、それから擧る物質上の利益は僅なものであつたからである。然し乍ら此等の印刷物に挿入されてゐる木版畫には畫法及び製版技術に於てまゝ非常な傑作があり、又當時詩人と畫家との提携が如何に緊密であつたかを窺はせるに足るものがある。ことにヂュラーの弟子 Hans Schaffelin の描いた Erklärung der tafei des gericht, so der köstlich maler Apelles dem könig Antiocho entwarf (1534, 7, 10. アペルネス—アンキサンダ—大王時代の畫家—がアンティオコス王のために描ける裁判の繪圖面解説) や Die hochzeit zu Cana in Galilea (1545, 2, 5. カナの婚姻) の挿繪、その他 Inhalt zweyerley predig (1529. 新舊舊教二種類の説教内容)、Fama, das weytflegent gericht (1534, 7, 27, ノーヴ・遠く飛ぶ噂の神) Ein tisch-zucht (1534, 7, 14. 食卓の衆) 等々に見られる板畫は、その巧妙なる想像的構圖、緻密なる筆致に於て甚だ美術的なものがある。因に此等の作品の出版者には Hans Guldenmund, を始めとして、

Georg Lang, Wolfgang Resch, Niclas Meldmann, Wolfgang Strauch 等の名が見られ、彼等の中には Fornschneide (木板彫刻師) 又は Briefmaler (装飾文字挿繪畫師) と名乗つてゐるものもあり、當時の職人が如何に眞摯な藝術家氣質と優秀な美術的技術の所有者であつたかを見る事が出来る。

孰れにしても彼の家政はかくして確立され、その家庭生活も當時は至極圓滿にして幸福なものがあつた。このことに就ては、四十一年十一月六日の彼の説話詩 *Das bitter-sües ehlich leben* (苦く甘き結婚生活。四十七年十一月二十五日に工匠歌の書き換へあり) を通じて十分に察知しうる。ここではマイスター・ハンスが、「私」と名乗る結婚を急いでゐる或る若者に例の如く豊富な語彙と例證とを以て、結婚生活の利害得失を教示し、婚姻は慎重にすべきことを説いてゐるのであるが、若者の *Mein maister Hans, secht an, / Habt ir nit auch ein pider weib / Auserwelet vur ewren Leib, / Die euch kein args noch sawres thuet, / Sunder nur alles sues vnd guet? / Wie kunt euch den nur pas gesein?*

(ハンスお師匠様、あなたも御自分は申し分のない賢夫人をお持ちではありませんか? 只只あなたに優しく親切にお仕へして、何の憂き苦勞もお懸けにならない様な。どうして之以上のことがありませうか?)

と問ふのに對して、彼は

*Got sey gelobet und geert, / Der mir ein frum weib hat peschert, / Mit der ich zway vnd zwanzig jar / Gehawst hab, got geb lenger zwar!*

(有り難いことに、自分は立派な女房を授けられ、今年で二十二年暮らして来たが、尙此の先末永く添ひ遂げたいものだ。)

と答へてゐる。かうして今は何等後顧の憂もなく讀書と詩作に専念

して行くことの出来たハンス・ザックスは、多くの弟子や崇拜者に擁せられて、何時か鬱然たる大家とたてられ、その民衆詩人としての名聲は遠く内外に喧傳されるに至つた。即ち千五百四十五年 Hans Brosamer の手になるとされてゐる彼の年齢五十一歳の時の木版肖像畫(縦二十八糎横三十一糎)が Johann Beiz 作の十六行からなる頌德詩を附して出版、賣り出されてゐるが如きは、彼の人氣の如何に高かつたかを證して餘りあるであらう。

扱て彼の私生活がかくの如く平靜健全な發展を辿れば辿る程、彼は時勢の推移、民心の動行に注意を怠らず、その篤實善良なる性格によつて、或は記録的な、或は警世的な文字を連ねて行くのであつた。彼の工匠歌集は一卷一卷と纏つて、四十四年十月三十日には第六卷、四十五年十一月五日には第七卷、四十六年十二月卅一日には第八卷が完了した。此等の詩歌は勿論新舊の聖書に取材したものが大部分を占めてゐるが、然し相變らず各種の趣向を凝らした人倫道義の教訓的諷刺詩にも富み、人心の頹廢を憂ふる作者の熱情、道德の高揚を念ずる作者の誠意は、年毎に深まつて行つてゐる。彼は千五百卅九年五月十七日 *Die neuerley heud einer bösen frauen sambt ihren neun eygenschaften* (惡妻の九種類の皮膚と九つの悪性) を書いて惡妻の性質を糾明するとともに、夫婦相協調すべきことを教へてゐる様に、引續き道德歌の作詩を怠らず、或は惡徳を糺弾し、或は徳行を推奨して、市民の正しい日常生活を教導することに努めてゐる。中でも四十年二月二十一日作 *Von dem tauffel, dem die hell will zu eng werden.* (地獄の狹隘を告ぐる惡魔) 四十二年八月九日作 *Die wolfs-klag uber die bösen menschen* (人間の惡業を嘆く狼) の如きは構想の奇異、諷刺の輕妙に於て、作者獨得の詩境を展開してゐる。前者は人もあらうに惡魔自身をして人間の墮落に悲鳴を擧げさせてゐる點に特殊なユーモ

アがあり、作者自身反つて自らの意圖に反して、人間を辯護してゐる點に辛辣な皮肉がある。詩人ハンス・ザックスは悪魔が増大する悪人を收容するために、地獄を擴張しなければならぬと言ふのに對して、教義が改革されて以來、品行方正一點非の打ち處のない基督教徒の德行を詳細に擧げて、その様な人物が夥しく存在する様になつたことを陳辯大いに努める。然し悪魔はせて十人の善人を見せて呉れたならば、その言葉を信じようと言ふ。そこで作者は十年の間探し求めて見たけれども、彼の言ふが如き善人に該當するものは一人もなかつたと言ふのである。

後者の中では作者が一日冬の日森の中を逍遙してゐると、狼がヂェピター神にも届けとばかり、大聲で吠え乍ら、自分達種族を迫害する人間を訴へてゐる。狼は天性に隨つて只生きるために家畜を食べるに過ぎず、その他に此の頃の人間共のするやうな悪業は何一つしないのに、悲惨な酷遇を受けてゐると言ふのである。そして例の如く八十行に渡つて人間のする有りと凡ゆる悪行を並べる。只人間と動物とを區別するものは、人間に理性あり、あり難いお宗旨があることであるが、人間はそれすら無視して用ひようとしなない。

以上の二詩は要するに人間の善行と悪行の早見表の如きものでもあり、作者の澆季の世に對する諷刺でもあるが、その間優れた諧謔が巧妙に驅使されてゐることこそ、詩人の心境が一段と明朗寛闊な天地に開けて來た證查であつて、ここに於てか彼にとつて久しく懸案の課題になつてゐた、しかも今後その得意の壇場となるべき謝肉祭劇や笑話劇詩に十分の力量を發揮しうる時が來たことを推察せしむる。そして事實又詩人の作中此等諧謔的劇詩の數が漸く多くなりつつあつたのである。

同様な傾向は又彼の宗教鬭争に於ても見られる。彼は相變らず誠實な福音新教の遵奉者であつたが、しかもその新教派が漸く僭越放恣黨

派的排他的に墮する傾向のあるのを見て、しめやかな嗟嘆の思ひを述べることもに、その間隙に乗じて舊教派が暫次勢力を挽回しつつあるのを知つて、人知れぬ憂慮の念を吐露するのであつた。しかもそれら作品の基調は往年の激越な反法王廳的、攻撃的論法を蟬脱して、明澄な悲歌的調子を帯びてをり、最後には常に正しい信仰の確立されるやうにと、神に祈願を込めてゐるのである。此の種のものでは先づ三十九年三月三十日作の Die gemartert Theologia（神學の迫害）に續いて、四十年三月十一日作 Das Klagennt Evangelium（福音書の嗟嘆）や四十二年五月一日作 Ein warnung Hensel Narren Den weltlichen stant vor dem gaislichen stant（馬鹿太郎の警告、宗界に對して俗界を警む）等を擧げることが出来る。前二者ではそれぞれ「神學」「福音書」を擬人化した婦人が、作者の夢に現れて、或は迷妄や詭辯、邪宗異教、同黨異閥、徒黨派等に毀傷はれてゐる慘狀を訴へ、或は神の言葉の眞理が長い暗夜を破つたかと思ふ間もなく、又もや凡ゆる人人に捨てられ、虐遇され、不具にされることを嘆き、かくして最後に基督の加護によつて神の言葉が清らかに遍く榮える様にと、作者は祈つてゐる。

「馬鹿太郎の警告」は三十行の短詩で、法王僧正修道僧寺僧等が各種の欺瞞政策を以て私腹を肥してゐることを指摘して、俗界の各層に警戒すべきことを注意してゐるのであるが、警告者が馬鹿太郎と名乗り、「昔から言はれる通り、馬鹿と子供の言葉に嘘言はなす」（Wie man den sagt vor alten dagen: / Kinder und narren warheit sagen.）と言ふ處に皮肉な諷刺がある。

斯の如くハンス・ザックスはその清明なる達識によつて、中庸の徳を飽くことなく説いて來たが、このことは取りも直さず、作者にとつて客觀的描寫法を習得するに大いに役立つたのである。されば今後彼が好んで敘事詩に筆を染め、次いで劇詩の創作に専念するやうになつ

て來た内的理由も亦茲に存するのであつて、彼はその自得した不動の人生觀により、次第に平靜明徹なる觀察眼を涵養し、外界に對して主觀的に反應するよりも、客觀的に觀照する丈の心的餘裕を得て來たのである。と言ふのも當時ニュルンベルク市の内外には色々な歴史的事件が相次いで惹起してゐたのであるが、ザックスの筆は忠實に詳細にそれらを傳へてゐるのみならず、彼はそれらの事實を色々な詩的構想によつて敘事詩風に描寫し、物語風に表現して見せてゐるからである。

扱て古來ニュルンベルク市は獨逸皇帝直轄の自由都市として皇帝より幾多の特權を授けられ、亦屢々皇帝の巡幸を仰ぎ、出來る限りの忠誠を盡して來たのであつたが、千五百四十年二月七日當時羅馬王であつた Ferdinand I. (1503—1564. カール五世の弟、千五百三十一年羅馬王——Königlicher König——同五十六年皇帝に選ばる)も亦和蘭に赴く途次、此の古都に臨幸するの光榮を與へた。

此の年謝肉祭前の土曜日ハンス・ザックスが一日の仕事を終へて一服してゐると、民衆が大舉して市の中央市場の方へ走つて行くのが聞える。そこで彼も亦何事であらうかと、上衣を取つて一緒に走つて行く。Fleischbrücke 迄來ると、街上には美事なる花綵が張り巡らされ、綠葉、金玉、獅子頭、珍果、色紙等が懸け渡されてゐる。進んで市場を越し、城門の邊りに行けば、何處も街路は滿艦飾を施され、登城口には國の定紋打つたる立派な凱旋門が立つてゐる。なほも進んで城山を登つて行けば、城中の室々は凡ゆる珍什名器で比類なく裝飾されてゐるのが見られる。そこで再び街へ引き返すと、武裝嚴しい二百人の儀仗兵が兩側に増列して城からフライシニェブリュケン迄も續いてをり、家並みや窓からは市民婦女子の顔が鈴成りに覗いてゐる。市役所から Frauentor 迄は清かな砂利が敷詰められ、そこにも三百人程の武裝兵が兩側に立ち並んでゐる。廳てのことに黒禮裝をした紳士が或は短劍

を、或は背囊を、或はマント袋を持つて、一人三人又二人と馬に跨つて行く。尙も立つて見てをれば續いて五人の市政府最高委員が黒豹の毛皮で縁取つた長い上衣を着て、これも馬で肅々と進んで行く。詩人は愈々不思議の念にかられて四邊りを見廻はすと、丁度折よく群集の中に彼の友人で市會議員の一人が雜つてゐるのを見つける。そこで之れ幸と彼に事情を訊きただす。知人の方では反つて驚いて、今晚羅馬王陛下が御入都になるのを知らないのか？皆陛下を歡迎するためのものではないか！一昨日既に二人の市會代表者がザルツブルク迄お出迎へに行つてをり、同様に今通つた五人の政府委員も郊外一哩ばかりの處迄、陛下をお出迎へ申上げて來た處であると言ふ。そこへ紅色の緞子張りの天蓋が擔はれて行く。それは黄金の綯を垂らし、四隈に翼を擴げた鷲を飾る。鷲の爪には楯が攫まれてゐて、楯には王國の三つの紋章が見られる。天蓋に續いて國王を都門の處迄奉迎した市政府委員達の一行が通つて行く。愈々國王が眞近に來たのである。群集の雜踏は彌増しに増し、鐘の音四方から響き渡り、老若男女悉く欣喜雀躍して、中には感泣の涙を流すものも多い。

程なく市の儀仗兵を先に國王の行列がさしかかる。先づ黒衣の輕騎兵の一隊、天鷲絨の衣裳に鎖飾りをつけた貴族高官の列、やがて之も天鷲絨の宮廷服を着た小姓の騎馬隊を先頭に、寶劔の捧持者のあとから四人の若い市會議員の支へた天蓋を翳して、國王が馬上豊に乗つて通る。次いで市によつて門閥、市民、軍隊の中から選拔された三百人の警衛隊が後陣を承る。

市場から聖セバルドス寺院の前に差しかかると、この寺院の内部も美しい精巧な毛氈を敷いて、王の參拜を待つてゐる。それは古式によつて羅馬王に加冠するためである。然し今夕は既に時刻も遅いので、そのまま行列は通り過ぎて、一行は遂に華麗な裝飾と歡聲の中を、城中に案内される。すると市會は數臺の車に美酒佳肴を積んで、王に獻

上する。ここに於てか曩の市會議員は再びザックスに向ひ、明日は黄金の酒盃と新しく鑄造された御紋章御名入りの金貨が獻納され、晩には煙花が打ち擧げられたり、各種の催物が行はれたりして、市會の國王に對する感謝と忠誠を表示することになつてゐると言ふ。然し月曜日には王は既に和蘭に向つて出發、かして急遽土耳其古軍に對する遠征の軍議を凝らすことになつてゐる筈である。願くば神よ、國王に幸運と祝福を授け、之を叶へ、かれを叶へ凡てを叶へさせ給へ。かくして神聖羅馬帝國が愈々強大に成長繁榮するやうにと、ニュルンベルクのハンス・ザックスは一重に切願するのであつた。

以上は勿論ハンス・ザックス自身の作 *Römischer königlicher mayestat Ferdinandi einreitung in des h. reichs statt Nürnberg, den VII tag Februarii im MDXL jar* (1540, 2, 15, 千五百四十年二月七日羅馬王陛下フェルディナント、神聖なる直轄都市ニュルンベルクに入都する) の傳へる處によつて、當時の模様を記述したのであるが、その詩の内容が忠實な眞實の記録に過ぎないにも拘らず、詩人は色々と趣向を凝して、それを劇的に物語らうと苦心してゐる。

越えて翌四十一年にはカール五世が此の都市を訪問してゐるが、ザックスはその盛大な歓迎の有様をも同様に同年三月十日作の *Kayserlicher mayestat Caroli des V einreyten zu Nürnberg in des heyligen reichs stat, den XVI tag Februarii des 1541 jars* (1541, 3, 10, 皇帝カール五世千五百四十一年二月十六日聖なる帝國都市ニュルンベルクに入都する) なる説話詩によつて、後世に書き残してゐる。此の時には特に要塞樓塔シュピタル門等から大小の祝砲が打ち鳴らされ、馬は騒ぎ、天地もために打ち震ふばかりであつた。夜ともなれば仕掛煙花が打ち擧げられ、木造の城が二つ互に砲火を交し合つた後に、炎々たる猛火に包まれて燃え落ちたのは、誠に壯觀であつたと言ふ。又祝祭は十六日から十八日迄三日間に渡り、その最後は市政廳に於ける壯重なる

表敬式を以て終つてゐる。且つ市からの獻上品としては百枚の金貨を盛つた鍍金の皿が奉呈されたとも言ふ。但し宗教上の問題に就いては、ザックスの詩中別に深く言及する處がないけれども、兩者とも、即ち帝王側でも市側でも譲らず、前者は市の新教派のセバルドス寺院に立ち入ることを肯ぜなかつたし、後者は、舊教側の請願を容れて、皇帝が教會に於ける加持力の儀式を復興することを支援したのに對し、それを鄭重に拒絶した。尙詩人が此の詩の最後で近く開かれるべきレーゲンスブルクの國會に於て、新舊兩教の葛藤も平和裡に協定されるであらうと、喜びを述べてゐるのは、彼の穩健中庸の志操を現して餘りあるものである。何れにしても彼は土耳其古軍に對しては常に異常な敵愾心を示してゐるけれども、戦争や鬭争そのものに對しては、何處迄も恐怖嫌悪すべきものとして、非戰論者であり、平和促進論者であつた。

此の點に關しては四十四年三月三日作の *Ein artlich gesprech der götter, die zwitracht des römischen reichs betreffende* (羅馬帝國内の争亂に關する神々の優美な對語) が最もよく證明してゐる。カール五世がニュルンベルク市を訪れた當時は、彼と佛王フランツ一世との間に行はれてゐた伊太利及びブルグント争奪戰(前後五回 1526, 1527, 29, 1536-38, 1542-44 及び 1556) の第三回と第四回との間に當り、丁度暫しの平和が續いてゐた時であつたが、此の系争は猶も危機を孕んで、何時果てるとも見えなかつた。果然四十二年獨佛兩國は再び干戈の中に相謁え、戰亂は今や三年の長きに渡つて續くに至つた。ここに於てかザックスは深く之を憂へ悲しみ、事に托して甚だ劇的な對話を創作したのであつた。

詩人の年齢五十歳に達した年、一夜心悲しみに閉ざされて樂しまず、彼は國事を憂へて、轉々反側してをつた。國會は年毎に開かれても、黨派の軋轢はやまず、羅馬帝國は戰亂の巷と化して、何時和平の日が來るとも見えない。彼はその原因を久しく考へてゐたが、やがて思ひ



疲れて眠りに陥る。すると夢に天使 *Genius* が現れて、「今晚汝に見せるものあり」と言ひ乍ら、彼を捉へて星辰の輝く大空のかなた、神々の玉座近くに連れて行き、暗い側室の窓から、月光煌々たる神々の大廣間を覗かせる。時に神々は圓座をなして、大會議中である。先づ *ヂュピター* が口を切つて言ふ「諸神よ、羅馬帝國も獨逸國民も今や不和擾亂の中にあり。二大強國（獨佛）又相敵對して抗争を事としてゐる。今にして之を抑止しなければ、帝國は滅亡の他はない。されば地上の大亂を鎮める名案あらば、遠慮なく申出られよ」と。時に *マルス* 身を甲冑に固め、拔身を持つて立ち上る。「地上の不和は之を益々助長使喚したがよい。兩派をして戦はせ、一方が他方を征服すれば、勝者が支配者になるであらう。」此の *マルス* の意見には *ヂュピター* も勿論賛成しない。戦争は殺人強盜放火荒廢を獨逸に齎すばかりである。平和の裡に人心を鎮める方法はないものかと、彼は今度は *ヂュニクス* に問ふ。問はれて *ヂュニクス* は、「妾の力で近頃 *フランツ* 一世と *カール* 五世の妹 *エレオノラ* とを結婚させましたから、やがて騷擾も止むてあります。さもなければ黄金の力を以て、人心を柔げられたら如何でありますか」と提言する。そこで大神は *プルート* に向つて、富を以て、諸候の間に平和と友情と和衷協同の精神を樹立せよと命ずる。然し *プルート* は黄金も只人を傲慢不遜にし、戦争の誘因になるのみであるから、寧ろ貧困を送るにしかずと答へる。されば *ヂュピター* は改めて貧困 (*Pennia*) を呼び寄せ、下界に忍んで行つて「不和」の兩手を縛り、協同一致を強ひよと言ふ。だが貧困も反つて課税を増して國民を悩ますばかりである。彼女はそれよりも神々の傳令 *メルク* ールを遣して、大神の強力な命令を、傳令の神の優しい口から傳へさせ、多くの黨派を平和の裡に協調させたらと提言する。そこで *ヂュピター* は言ふ。「*メルク* ールよ、急ぎ地上に舞ひ下り、諸方に我が意志、我が言葉を告げよ。即ち争亂を終決せよ。平和を亂すものは、我が不

興を蒙り、我が法廷に召喚され、嚴罰に處せらるべし」と。すると *メルク* ールが答へる。「彼奴等は何とも致し方がない者共で、御嚴命は成程觀面の效力がありませうとも、一方が従へば他方が従はず、阿諛佞辯を用ひ、疊々たる風を装うて言ふことをききませぬ。だから私の言葉も此の闇黒が去らぬ限り、物の用には立ちますまい。」そこで大神は早速 *Probus* (日の神) に向つて、此の闇黒を打ち拂ひ、凡ての黨派が眞理を求めるやうに、その光輝によつて萬物を照らし潤ほせよと命ずる。然し日の神も政教分裂して更らに多くの徒黨あり、永遠の眞理、聖なる神の言葉も暗闇の中に沈んでゐるから、自分の光輝でも如何とも仕難いと答へる。此の時 *Saturnus* は怒の聲を張り擧げて、「我が手に獨逸國を支配する力を與へ給へ。世界の平和を攪亂しようとする奴は、皆殺しにしてくれよう」と叫ぶ。しかも *ヂュピター* は彼を宥めて、暴力を用ふることを許さず、今度は *ミネルヴァ* に向つて、お前の智慧で羅馬帝國を平和にする方法はないかと聞く。だが *ミネルヴァ* にとつても事件の解決は中至難である。但し彼女は獨乙の諸侯の鬭争心を鎮めることの出来る只一人の人物を知つてゐると言ふ。  
ヂュ。「では此の不幸を停める丈の威望を持つた男とは誰のことか、教へてくれ。」

メル。「それは *Respublica* (*der gemein nutz* 公共心) と申す者で御座ります。」

ヂュ。「成程、その者は彼等の處にゐないのか？」  
メル。「はい、繪姿が残つてゐるばかりで、昔は古代羅馬帝國を身親しく強力に支配してゐましたから、帝國を偉大にし、市民を一致協力させ、凡ゆる階級をして公共のために盡させることが出来ましたのですが、利己心 (*eigener nutz*) が跋扈し出してからは、黨派の分裂、市民戦争、暴政が行はれ、到頭その男は放逐されて了ひました。それ以來何處へ行つたか、私も存じませぬ。かうして帝國は荒廢衰滅して行



くばかりで御座いますが、此の男を連れて來たら、或は再び國內に平和と協同の時代が到來するでせう。」

此の助言はマルスとサツルンを除いた凡ゆる神々の氣に入り、デュピターは直ちにメルクールに命じて「公共心」を探させる。メルクールはデュピターの指圖によつて先づ、嘗つて彼を尊敬してゐたことのある直轄都市へ行つて、彼を求めけるけれども、彼の姿は何處にも見られない。此の報告を聞いたデュピターは「それも怪しむに足らない。寧ろ彼を失つた帝國がとつくに亡びてゐない方が不思議である。」と言ひ、更らに公共心を何處に探したらよいかと、神々に助言を求めると Luna が昔或る晩、彼女が亞細亞に行かうとして、希臘のアテネに滞在してゐる彼を見たことがあると言ひ、Diana が彼はもうそこからも追放されて、近頃は向ふの森の中の泉の邊りに泣き濡れてゐるのを見かけたと言ふ。彼は自身の惨な様子を恥ぢて、ダイアナを避け、顔を匿して、石の洞窟に逃込んだ相である。此れを聞いてデュピターは再度メルクールをして公共心を迎へにやる。だが傳令神はやがて矢の如く昇天して來て、悲し相に報告する。公共心は致命傷を受け、病魔に犯されて、息も絶え絶えの容體である。その身體は瘦せ細り、皮は骨につかばかり、唇は齒を蔽はず、顔は青醒め、心臓は喘ぎ、脈博は只微かに鼓動してゐるのみ。若し彼を連れて來ようとなれば、途中で死ぬかも知れない——

デュピターは殊の他心痛して、醫術の神 Esculapius (Asklepios) を呼び、凡ゆる靈藥を持たせてメルクールとともに急派する。かくて大神は公共心の力によつて鷲(獨逸)が再びその翼を振り、大蛇(土耳其)も毒百合(佛國)も滅ぼされることを期待する。次いで結辭(der Beschluß)。エスクラピウスがメルクールとともに天下つて行くと、神々の玉座では微妙な音楽が起り、詩人の胸は公共心を見る喜びで打ち震ふ。と此の時鶏鳴曉を告げて、詩人は目を醒ます。即ち夢の終を遂

に見ることが出来なかつたことは残念であるが、神の慈愛によつて凡ての不和は治まり、神の言葉によつて國內の諸都市諸侯は協同し、公共心によつて羅馬帝國は再びもとの繁榮を取戻すやうにと、ハンス・ザツクスは願ふのであつた。

以上の梗概を見ても明かな如く、詩人は此の「神々の優美な對話」によつて、彼の持論である歐洲平和論の根柢を追求してゐるのみならず、従來の説話詩形式を進めて、僅かな地の文句で繋ぎ乍ら、全篇を對話で構成し、著しく顔見世式劇形式に接近せしめてゐる。このことはハンス・ザツクスが如何に當時物語の劇的發展に興味を抱き、劇創作に關心を寄せてゐたかを示すものであると言ひうるであらう。しかもかくの如き平和論的内容や劇的構想は既に四十一年六月十九日に詩作されてゐる (jaistlich spruch. Disputation zw Regensburg im 1541 J.) (宗教説話詩、レーゲンスブルク論争) と比較して見る時、更らに一段と興味ある發展の跡を辿ることが出来る。

此の詩は同年新舊兩教の確執を調停するために開かれたレーゲンスブルクの國會が失敗に終つたのを嘆いた比喻物語であるが、先の詩と同様に夢の中で神々の論争を聴くと言ふ趣向である。一夜作者は新舊二大宗派に分裂してゐる基督教の現状を憂へて、其の原因を究明しようとしてゐる中に、思ひ疲れて眠に陥り、ゲニウスに導かれてデュピター神の玉座近くに行く。然しここでは全篇殆ど敘事的韻文體で、未だ會話體をなしてゐない。デュピターの右手には鎖に縛られ、ぼろ／＼に擦り切れた衣服を着た Veritas (眞理)。それに對して孔雀の羽飾りをつけた光り輝く Hypocrisis (偽善)。彼女は Frau Negucia (卑劣夫人) をしてヴェリタスの罪狀をさんざんに訴へさせる。然しミネルヴァを始めバツカス、ヴェナス、プルートー等がヴェリタスの辯護をするので、漸くヴェリタスの光が射し出てやうとする。 Frau Racio (理性夫人) も亦デュピターを諫める。だが Frau Adulatio

(佞辯夫人)やネキツィア夫人は瀝青や硫黄の煙幕を張つて、ヂェビターの目を眩ます。大雷神はヴェリタスを援けたいけれども、視線は混濁し、心は思ひ亂れるばかり、サツルンやネプトゥーンに助言を求めて、時を過してゐる中に、マルスが武装し拔身の劍を持つて、廣間へ跳り込んでくる。かくて會議は又瓦解、凡ての議論はまた元の木阿彌となる。(Die versammlung zerietet / All handlung wart abgenclich.) ヴェリタスは相變らず幽囚の身の上。Frau Paciencia (忍耐夫人) Frau Justicia (正義夫人)とが彼女の涙を拭うて慰める。三人は何れ神の力でヴェリタスが自由の身となる日も来ようと、只その日のみ待ち望んで泣いてゐる——とこゝで詩人は目を醒ます。

此の詩は殆ど物語の垣々たる敘述に終始してゐるけれども、既に多くの劇的景を含有してゐることは多言を要しないであらう。

孰れにしても四十年代の歐洲は戰亂闘争天災が打ち續き、平和な市民生活を思念する詩人の心を痛く嘆き悲しませた。東方では土耳其軍が益々猖獗を極め、四十一年九月以來匈牙利の Ofen (Buda 市の古名)及び Pest 市を侵し、殺戮暴行を働いてゐる。ハンス・ザックスは此の事件をも四十二年十二月二十八日作 Der ungluckhaftig scharnützel deß Türcken vor Ofen mit deß Königs heerleger vor Ofen, anno 1541 im September geschehen (オーフェン市外の土耳其軍と同市外の國王軍との不幸なるゲリラ戦)、四十二年三月十六日作 Ein thyrannische that deß Türcken, wie er sechs hundert gefangne knecht elendiglich hat lassen nieder hawen. (土耳其人の暴狀、六百人の捕虜を惨殺す。)四十二年三月四日作 Der ungluckhafte scharnützel und sturm des römischen reichs vor Pest in Ungern anno 1542. (千五百四十二年匈牙利・ペスト市外に於ける羅馬帝國の不幸なるゲリラ戦と襲撃)等によつて、連年に渡つて悲憤慷慨し、基督教徒の敵愾心を煽つてゐる。

次いで四十三年三月二十四日には和蘭の女王 Marie (Philipp der Schöne の女、1505—1582)と Herzog von Klevé の間に戦争があり。和蘭軍は二千八百の騎兵と歩兵の精銳を以て、二十四の旗團と三千の騎兵からなるクレーヴェ軍を驅逐し、一時 Zittart を占領したけれども、馳て之が軍を引くや、クレーヴェ軍はその後を襲うて、之を撃破した。詩人は此の時の戦禍の大ききを悲しんで Die schlacht zwischen der künigin Marie heer und des herzogen von Cleve zwischen Zittart und Remmund. (1543. 5. 17. 女王マリー軍とクレーヴェ公との戦、ツィタルトとレルムント間に於いて)を詩作し、之以上の惨害が起らぬ様に、平和の早く到来することを願つてゐる。

翌四十四年にはシユパイエルの國會が開かれ、新教の勢力は愈々阻害された。しかも此の國會にニェルンベルク市の代表として出席した人文學者で市會議員 Hieronymus Paumgärtner は歸路 Simsheim と Wimpfen との間で五月十一日、かねてシユワーベン同盟によつて自分の野城二三を奪はれたことを恨んでゐた匪賊 (Stegreifritter) Albrecht von Rosenberg によつて襲撃され、奪取されると言ふ椿事が起つた。市は彼を奪回しようとして三百の兵隊を差し向けたが、事成らず、漸く敵の縁者 Wolf von Stetten を捕獲し、これに八百グルデンを添へると言ふ交換條件で、千五百四十五年八月三日パウムゲルトナーを救出することが出来た。かくの如く一方市の近郊は依然として不穩の狀態であつたとともに、他方國外ではカール五世が佛蘭西に遠征して激戦が行はれてをり、詩人の優しい心情を亂すものが中中に多かつたのである。されば詩人は四十四年十二月二十六日に至つて、宛も自らも共に従軍したかの如き構想と深い關心を以て Historia. Der zug keyser Caroli V inn Franckreich (カール五世の佛蘭西遠征)を書いてゐる。

同様の趣旨から天災も亦詩人の關心を牽かずにはゐなかつた。四十

五年七月七日作の Der erschrocklich erpiden zw Corphw in Moria (モリアなるコルフの強震) は、同年三月二十四日希臘半島から Moria (od. Moria, 今のペロポネソス) 地方にかけて、豪雨地震、洪水陥没、隆起逆流、山崩れが起り、Corphw (Corfu), Navapatre (Lepanto) 等その被害が最も大きかつたことを述べて、これぞ峻厳なる神の刑罰であるから、人は罪惡の眠りから醒めて、眞の贖罪に入らなければならぬと戒しめたものである。

かくしてゐる中に新教福音派にとつて、最も悲しむべき日が來た。即ち千五百四十六年二月十八日享年六十五歳にして、マルティン・ルッテルはその生地アイスレーベンに於て、多事多端であつた一生を閉じたのである。勿論終生變ることなき熱心なルッテルの支持者であつたハンス・ザックスにとつて、その死は一大痛恨事であつた。彼はかの「福音書の嗟嘆」(四十年) 以來久し振りに筆を執つて、今一度新教のため、福音のため、衷情を披歴して、此の宗教界の一大天才の逝去を追悼する。彼は二月十七日の夜、何故か心惻々として樂しまず、鬱々として沈思してゐる中に眠る。と何時か自分は蠟燭の光に照らされた、香煙の棚引くザツクセン式會堂の中來てゐる。會堂の中央には黒布に蔽はれた、薔薇の花に十字を入れた紋章(ルッテルの家紋)のある柩が安置されてゐる。これは何事ぞ、ルッテルの遺骸ではないかと、怪んでゐると、内陣から雪白の衣を着た婦人 Theologia が歩み寄つて來て、柩の傍に立つ。彼女は手を揉み、髪の毛を掻き掻つて泣き悲しみ、溜息を吐き乍ら訴へ嘆く。「あはれ悲しや、君はかくなり果て給へしか! 神より選ばれたる誠の勇ましき戦士よ! 雄々しくも神のみ言葉を以て妾の敵を挫き、妾をバビロンの幽囚から解き放ち給へる君よ! 妾は久しく忘却され、悶々の思ひに沈んでをりました。白き衣は黒く汚されて、無慘に裂け破れ、五體は打ちひしがれ、抓られひねられ、八つ裂きにされて、拷問苛責の傷絶えず、見る陰もない有

様、それも何故、皆人間共の無道な教説のため! されど遂に君立ち給ひ、妾を洗ひ潔め、妾を醫やし淨め、もとの如く明るく清らかな身に戻して下さいました。そのためには君の苦患こそ如何ばかり、生命を賭して、君が血に渴した法王僧正王侯の奸計と戦ひ、如何なる危険の中にあつても神の勇士として誠實を失はず、妾と神のために忠勤を盡されました。今や君居まさず、誰が妾のために闘士の役を引受けてくれませうか?」と。そこで詩人は彼女を慰めて言ふ。「恐れずに元氣をお出しなさい。神様はあなたを護るために、なほまだ生きてゐる立派な人達を澤山與へて下さるでせうから、獨乙の國ではあなたと知己になつた基督教徒が決してあなたを見棄ませず、どこまでもあなたを清淨に保ち、如何なる暴力にも奸計にも屈することがないでせう。最早や地獄の門も力及ばず、あなたを陥ることは出來ませぬ。だからどうかその様に悲しまずに下さい。ドクトール・マルティヌスは征服者勝利者、眞の使徒的戦士として、地上の戦を完遂し、あなたの敵を撃破し、今は大慈大悲の神様の御手によつて、艱難辛苦の一生をあとに、永遠の眠りに就かれたのです。基督よ、我等を助けて、永劫の歡喜を榮えしめ給へ!」と。

此の蕭やかに又敬虔まやかなる追悼の辭、即ち Ein epitaphium oder Klag-red ob der leyeh D. Martini Luthers (1546, 3, 22. ドクトール・マルティン・ルッテルの遺骸に捧げる弔辭即ち追悼之辭) は、詩人が如何に此の宗教改革の闘士に對して深い尊敬と感謝の念を抱いてゐたかを示すものであるとともに、その卒直な純情の流露によつて、今日猶人の肺肝を突くものがある。

然し乍ら新教の前途は詩人がその素朴な樂天的性質から、此の詩の結末で望んでゐるやうに、どこまでも清淨に保たれると言ふわけには行かなかつた。否その内情は益々分裂し敗退しようとする傾向を示しつつあつた。ことに從來凡ゆる點で忠誠を誓ひ乍ら、只一つ信仰の間

題のみは皇帝の要求ですら拒否し續けて来たニュルンベルク市にとつて、新教側に於ける斯の如き形勢は、容易ならぬ結果を齎した。それは先づ Der Schmalkaldische Krieg (1546—47) の勃發に始まり、千五百四十八年五月五日のアウグスブルク國會に於ける Das Interim (宗教假協定) を以て絶頂に達する。シユマルカルデン戦役は人も知る如く、新教の諸侯諸直轄都市により、カール五世の新教抑壓政策に對抗し、新教を擁護するため、シユマルカルデンで結成された(一五三〇年十二月卅一日)シユマルカルデン同盟が、トリエント宗教會議に出席することを拒んだ結果、千五百四十六年皇帝からその首領 Herzog Johann Friedrich von Sachsen と Landgraf Philipp von Hessen とを追放に處せられたことに端を發してゐる。同盟軍はシユグーベン及びバイエルン地方に進撃したが、一定の目標も計畫もなく、只漫然と小競合を演じて、徒らに四方に敗退するのみであつた。ニュルンベルク市は此の様な場合従来もさうであつた様に、此の時も亦中立的立場を取り、此の同盟に参加してはゐなかつたけれども、勿論新教都市として皇帝方にも加擔せず、極めて用心深い態度を嚴守してゐた。然し Herzog von Alba が西班牙の援軍を率ゐて、同市に宿泊するに及び、一部の市民の不滿は昂じて、正に騷擾を起さんばかりになつた。市政府は事の重大を恐れて、いち早く之を鎮壓し、兎に角アルバ侯を迎へ、彼に Dr. Scheurl の邸宅を呈供した。次いで四十七年早春カール五世が同市に滞在したが、此の時は六年前の如き歡迎祝賀の行事もなく、皇帝は手兵五百に守られ、輿に乗つて入都したと言ふ。市の警備隊は皇帝の衛兵と交替し、市政府は戦勝者に對するが如く、都門の鍵を皇帝に引渡さなければならなかつた。かくして皇帝は三月二十九日同市を進發、Aldorf を經てザックセンに向つたが、それから一ヶ月後には有名な Mühlberg の戦が行はれ、同盟軍は惨敗して、ヨハン・フリードリヒは捕虜になつた。此の事はニュルン

ベルク市民にとつても當然尠からぬ關心事となければならなかつた。さればハンス・ザックスは八月四日に至つて Die niederlag und gefencknus herzog Hans Fridrichs zw Sachsen im 1547 jar. (ザックセン侯ハンス・フリードリヒの敗北と投獄、千五百四十七年)なる極めて客觀的報道的な敘事詩で一枚刷の讀み本を出版し、次いでそれを Ein new lied im thon: So wolt ich gern singen, wen ich vor trawren kiennd. Die gefencknus herzog Hans. (1547. 新歌謠曲、ハンス侯の投獄)なる一節七行二十三節の民謡調に書き直してゐる。その内容はザックセン選帝侯がシユールベルクで、エルベ河の淺瀬を渡つて不意に強襲して來た皇帝軍のために散々に打ち敗られ、遂に Thil von Drot (od. Thill von Drot)なるものに自ら進んで捕へられ、皇帝によつて投獄される經過を歌つたもので、典據は Rotenburg ob der Tauber の出版商でアルプ侯麾下の皇帝軍に部隊長として従軍した Hans Baumann の Neue Zeitung であると言はれてゐる。(Vgl. Genée, Hans Sachs und seine Zeit, S. 239.) 此の原文が又全く事實の報道にのみ終始してゐる如く、ザックスの詩も甚だ散文的な報告書であるが、しかも詩人の胸中には新教及びザックセン侯の運命に對して、一脈の暖かい詩的感動が流れてゐたことは、結末の次の如き詩句によつても窺はれる。

Nach dem wurt er gefüeret spat

Für kaiserliche mayestat.

Alda er auf gen himel sach,

Mit einem grosen sewtzen sprach:

„O herre got, erbarm dich mein!

Sint wir itz hie.“ Als er allein

Kam vür kaiserlich mayestat,

Demüetig gnad pegeret hat,

Ein furstlich gefencknus zu verwalten,

Der Kaiser sprach: „Wir wohn euch halten,  
Wie ihr verdient habt. Führt in him!“

(やがての事に彼——ザックセン侯——は皇帝陛下の前に連れ出されたり。そこで彼は天を仰ぎ、長嘆息して曰く「神よ我を憐れみ給へ！我等は今かく果てたり」と。彼が只一人皇帝陛下の前に進み出し時、彼は度ましく温情を乞ひ、王侯として幽囚されんことを求めぬ。皇帝は云ひぬ。「我等は汝を汝に値するが如く扱はん。此の者を連れ去れ」と。因に地方伯フィリップ・フォン・ヘッセンも皇帝方についた彼の女婿 Herzog Moritz von Sachsen の言葉を信頼して屈服した。)

此の戦役が終ると、カール五世は宛も戦捷の勢に乗ずるかの如く、新舊兩宗派の調停に乗り出し、アウグスブルクの國會(四十八年五月)に三人の神學者 Bischof von Naumburg Julius Pflug, Titularbischof von Sidon Simon Michael Helling, Joachim von Brandenburg 選帝侯の宮廷付説教師 Joh. Agricola を派して、所謂 Das Interim (宗教假協定)を草案せしめ、之を新教徒にも承認するやうに強要した。ニュルンベルク市は Hieronymus Holzschuer, Sebastian Haller, Jakob Muffel の三人を代表として派遣し、他の新教諸侯諸都市の態度に進して、自らの態度をも決することを申出た。然し國會は市に對して、千五百三十三年以來同市では廢止されてゐた各種の舊教儀式の復興を要求し、剩へ從來新教の布教を許してゐた新教派の兩選帝侯 Friedrich von der Pfalz 及び Joachim von Brandenburg 迄も皇帝の名に於て、若し市が假協定を受諾しないならば、市政府全員を訊問し、市を軍隊で占有するであらうと宣言した。次いで六月十九日に至つて皇帝の使節 Johann von Lier と Heinrich Haas 及び前記の兩選帝侯の代表者が市に乗り込んで來た。既にして最も近い隣國の Markgraf Albrecht von Brandenburg-Ansbach も假協定を受諾せよ

るをえなくなつた。かくて皇帝側の脅迫が次第に激しくなつて來たので、市は止むなく先づ、一定の祝祭日に於ける肉食の許可制を停止し、次で各種の舊教儀式を認知し、個人的免罪權を許容した。其後も度々、嘆願や陳情が行はれた甲斐もなく、八月三十一日に至つて假協定は結局全市に採用されたのみならず、舊教側の要請によつて彌撒も執行されることとなり、遂に市政府は千五百四十九年、假協定規定書 (die Interims-Agende) を印刷布告するの止むなきに至つた。

勿論かくの如き趨勢に對して、市の新教派からは囂々たる不滿の聲が擧り、無數の激烈な抗議書、嘲笑詩、説教冊子や祈禱文が流布された。中でも聖ローレンツ寺院の説教僧 Andreas Oslander は市政府の處置に厭足らずして辭職し、痛烈な假協定反對論、辛辣な嘲笑詩を書き、後飄然としてケーニヒスベルクに去つた。そればかりかセバルドス寺院の説教僧 Veit Dietrich は憤懣の念に堪へずして遂に病を得、四十九年末だ四十三歳の若さで悶死した程である。されば有繁に濃厚なハンス・ザックスも亦、今福音の自由が強壓によつて奪はれて行くのを座視するに忍びなかつた。四十八年八月二十一日彼は Interim なる二百五十二行に渡る諷刺詩を草して假協定を殆ど完膚なき迄に揶揄嘲笑の對象にするのであつた。しかも此の詩は曩に擧げた「レーゲンスブルク論争」及び「羅馬帝國內の争亂に關する神々の優美な對話」の構想を更らに一步發展させたもので、オシアンダーの直情徑行的な憤激に對して、寧ろ獨創的にして極めて幻想的な詩的餘情を湛へてゐる。

例の如く詩人は一夜、神の明な言葉「眞理」<sup>ヴェリタツ</sup>が僧侶の奸計、上司の武器によつて抑壓されてゐるのを憂慮し乍ら眠ると、ゲニウスに導かれて廣い殿堂の中へ連れて行かれる。そこで玉座の上に白衣の清らかに光り輝いてゐる、高貴な婦人が本を膝にしてゐるのを認める。だが彼女の足は大きな鎖に繋がれてゐる。これぞ神より遣された眞理で、

獨逸の國にその明るい光を投じたものである。然るにサツルヌス（法王の比喩）はその光のために、己が輝きを消されるのを憎み、又バッカス、ヴェヌス、プルートー等を己が陣營から失ふのを恐れ、斯くの如き復讐をしたのである。そこでミネルヴァは彼女を憐み、ヂュピターに彼女の無實の罪を訴へたので、大神はメルクルを派して神々を召集し、大會議を開いて既に一年餘。されば今此の殿堂に集つてゐる群集は、何れも大空を仰ぎ星辰の運行を眺めて、大神の判決如何にと待つてゐるのである——と、かくゲニウスが詩人に説明してゐる時、ヂュピターは電撃を以て殿堂の門を打ち砕く。すると大蛇に乗つた Hippocrisis（偽善、カール五世の比喩か？）が玉座の上に飛び上つて、嫌がる眞理に長い五彩の衣を着せる。この衣裳は Nequicia（卑劣）夫人が古い布から縫ひ繕らうたもので、瀝青硫黄の煙を立て、臭氣激しく、只縁丈は若干甘い毒蜜で勝つてゐる。此の上衣を着せられると、眞理の明るい顔は青醒め、手足は動かさず、身内は芒の齒に刺された様に痛み、彼女は二重の囚はれて泣き苦しむばかり。そこでヒポクリジス夫人は猫撫で聲で、此の衣裳にすばらしい名稱を與へ「假協定」と呼ぶ。やがてのことに彼女は意氣揚々と大蛇に乗つて飛び去る。あとに残つた會衆は餘りのことに力もなく、救ひもならず涕り泣く。すると Fraw Pontencia（懺悔夫人）はもどかし相に言ふ。「これは、お前達が妾に對して犯した罪のためでありますぞ。お前達も妾を追ひ、闇を愛し、罪の生活を送つて來たからでありますぞ」と。だが眞理は慰めて「天地は亡びるとも妾は盡ることなし。妾を今日苦しめ苛み、惱まし捕

へ、壓迫するものは何時か永遠の亡びに入らん」と言ふ。ここに於てか詩人は「慈悲神ヂュピターともあらうものが何故にこの様に狂暴になつて、眞理を苦しめるのか」と訊けば、ゲニウスは物語つて、「Fraw Adulacio が大神を誘惑し、それに Ignorancia が手助けしてゐる上に、サツルヌスも黄金の雨を降らし、遂にヂュピターをして此の衣裳を承認させることが出來たのぢや。だが何時迄此の状態が續くものか。」と言ふ。此の時マルスが軍勢を率ゐて殿堂の前に迫り、砲撃劍撃の音に大氣も破れるばかり。その音に詩人は目を醒まし、此の不幸の後に永遠の喜びが榮える様にと、只管に神に祈願を籠める。

然し乍ら敬虔にして眞摯なる詩人の此の祈願にも拘らず、ニェルンベルク市の形勢は決して樂觀を許さなかつた。従つて此の詩は篋底深く藏されて出版されず、只親しい知人友人達にのみ披露されたに過ぎなかつたものと思はれる。

かかる間にも溢れるばかりの彼の創作慾は暫しも停止せず、四十八年一年間の作品數は無慮四百五十篇に及び、此の年正月一日に始めた工匠歌集第十卷は同年十二月卅一日に一先づ締め切る迄になつてゐた。されば翌四十九年元旦には第十一卷（之は千五百五十年十月完結）の收録を開始するとともに、此の年以來彼の多年鍊磨した來た創作力は、漸くその客觀的敘事的描寫から、戯曲の本道へと向はうとする。即ち此の年（四十九年）の作品數百八十六篇中、二篇の悲劇、二篇の喜劇（中一篇 Die Violanta は四十五年作のもの改作）及び一篇の謝肉祭劇を見るのである。（後掲ハンス・ザックス作品目録參照）

## 第五章 劇詩時代（圓熟期） 一五五〇年—一五五七年十月

曩に「宗教改革時代の演劇」に於て見た如く、十六世紀、特に其中葉以後に於ける獨逸文學の主流は正しく劇文學にあるとしなければならぬ。此の意味に於てハンス・ザックスが今や五十年代に至り、その卅有餘年の詩作生活の體驗を擧げて劇創作に立ち向はうとしてゐることは、又以て當時の獨逸文壇の一般的趨勢に相照應する興味ある事實であると思はれる。

勿論ハンス・ザックスの劇創作は今に始まつてゐる譯ではなく、既に彼の遊歴時代直後に謝肉祭劇の詩作があり、千五百三十年前後に至つては彼の所謂トラゲディ、コメディ、及び謝肉祭劇等の分野に於て、それぞれ一、二篇の作品が見られるのである。然し其の後四十年迄の間は獨り謝肉祭劇のみが三十二年、三十三年、三十四年、三十七年を除いて毎年一篇乃至三篇（三十六年）と製作されてゐるけれども、その他の種類の戯曲は三十四年に喜劇二篇があるのみ、四十一年より四十三年にかけてはその關心が全く中絶してゐる。漸く四十四年末に至つて久し振りに謝肉祭劇二篇を得、次いで四十五年四十六年兩年に渡つて、悲劇二篇、喜劇三篇、謝肉祭劇一篇の作あり、その後四十七年に一篇、四十八年に三篇の喜劇があるばかりで、未だ詩人の此の方面に關する創作段階は言はば準備試作の域にあつた。

然るに前章末に見た通り、四十九年に到つて、劇創作に關する彼の關心は俄然ここに新たに目醒め、五十年代に入るや、正に春草一時に萌え出づるの觀を呈してゐる。實に千五百五十年一年間の作品として二篇の悲劇、三篇の喜劇、八篇の一幕物謝肉祭劇を數へるのであるが、この趨勢はその後も聊かも衰へず、五十一年にはその數、六篇の悲劇、

五篇の喜劇、十一篇の謝肉祭劇の多きに達し、爾後五十二年より六十年に至る迄無慮百二十六篇の大小様々の戯曲を産み、五十三年度の如きは、悲劇五篇、喜劇六篇、謝肉祭劇實に十五篇、總計二十六篇の多作を示してゐるのである。今や正しく詩人の生涯に於て劇詩時代が來たと言ふべきである。

これは一面創作技巧、即ち客觀的描寫法が圓熟して來たためであるばかりではなく、此の南獨の商工業都市ニュルンベルク市の地方的市民文化が、劇文學又は演劇を理解し、受用する迄に進歩して來たためでもある。然し又作者が工匠歌の如き、一部特殊階級である手工業者、言はば素人詩人の澁難な形式的文學に厭足らず、その旺盛なる創作意欲を滿さんがため、長年の模索時代を経て、遂に時代の文學的主流の中へ泳ぎ出たためでもあるとしなければならぬ。既に從來とても彼の工匠歌そのものがその素材に於て、傳來のものゝ如く單に眞面目な宗教的題材のみに踰踏せず、殆ど凡ゆる方面に涉つてをり、その形式も亦從來のやうに詩形のために内容を選ばず、内容によつて詩形を決定してゐる様に、詩人は間斷なくその詩作活動の領域を増補し訂正し擴大し、夥しい數の文學作品を創作して來たのである。しかも此の民衆文學の老耆宿がその晩年に至つて劇創作に専ら力を注ぐに至つたことは、結局十六世紀の獨逸文學の主流が實に工匠歌の如き特殊現象にあらずして、矢張り劇文學及び演劇に存在してゐたことを、明かに實證するものである。

扱て以上の如く詩人がその製靴工場に於て只管平和を祈念し乍ら、文學的思索生活に餘念なく過してゐる中に、彼の周圍は再び不穩な形



勢を帯びて来て、それはやがて此の共和都市の興亡浮沈に係はるが如き大事件に迄發展して行つた。

事件の原因は詩人自身の言明する處によると「恐く單にニュルンベルク市の幸福と繁榮によつて、その嫉妬の性情を馳り立てられ、かくの如き無法な憎悪を抱くに至つた」(Die ursach ist allein / Vileicht mein gelieck und wolfart / Das bewegt sein neidige art / Zw solchem unferdinten has.) Markgraf Albrecht von Brandenburg-Kulmbach 通稱 Alcibiades の非道奸矯な強請によつて惹起された。アルブレヒト(1522—1557)は Markgraf Casimir von Brandenburg-Ansbach の息子、かの Moritz von Sachsen がシマールカルデン戦役で皇帝方に加擔、舅のヘッピン地方伯フィリップを降服せしめた功によつて選帝侯に推擧されたにも拘はらず、皇帝を裏切り佛蘭西王ハインリッヒ二世と同盟し、カール五世を追ふた際、彼も亦新教徒擁護の名目の下に、その實財慾を満さんがため、此の國內の騷擾に乗じて野盜の如く暴戻暴虐の限りを盡したのであつた。自由都市ニュルンベルクも亦彼の理不盡な挑戦に如何に苦しんだかは、ザックスの、前掲引用詩句の見られる説話詩、Cлагесprech der stat Nürnberg ob der unpfllichen schweren pelegung margraff Albrechtz anno 1552. (Alciades, 1552, 6, 16. 邊疆伯アルブレヒトの不正苛酷なる包圍に對するニュルンベルク市の嗟嘆、對話)が最も雄辯に物語つてゐる。

或る阜月さつきの朝詩人は緑の森を散策して、小河の邊りの圓い空地に出る。すると左側には翼を擴げた鷲、右側には赤と白との縞模様を附した金色の衣裳に身を包んだ、肢體の立派な女丈夫(ニュルンベルク市の比喩)が水邊の方右に腰掛けてゐるのに逢ふ。彼女は悲し相に溜息を吐き、左手に頭を支へて泣いてゐる。詩人は憐れを催して、挨拶も宜敷く、どなたであればその様に悲しんでゐられるのかと問ふ。乙女(Das frewlein)はやがて頭を擧げて見上げ、激しく泣き乍ら答へる

には、「妾を御存知ないとか？妾は國中で知らないものない女子、五十年の間平和に暮らして來ましたが、此の頃獐猛殘忍な兀鷹(アルブレヒトの比喩)によつて、身の圍りには強盜放火殺人頻りに起り、金銀財寶は悉く擄掠奪されますので、かくも悲しんでをります」と。即ちアルブレヒトは始め新教徒擁護と自衛のため、バムベルク及びヴェルツブルクの僧正を襲はうとして、五十二年三月一日ニュルンベルク市に一書を送り、同市がその武器輸出禁止令を緩和して、六百乃至八百の小銃と千の長槍とを彼に供給することを要求して來た。勿論此等の武器は自分が無法に攻撃された時にのみ用ふるものであるから、隣人としての日頃の交誼に免じて、特に許可され度いと、邊疆伯は懇に依頼するのであつた。然るに十分に武備が出來ると、彼は兩僧正に挑戦状を送るとともに、突如矛を轉じて、五月四日千五百の騎兵と十八旗團とを率ゐて、ニュルンベルクの領土、Lichtenau に現れ、同城の開城を迫つた。城守 Ludwig Schödt は息子を遣して談判せしめようとしたけれども、これはそのまま人質として抑留されたのみならず、聊も抵抗すれば、速刻息子を誅殺すると恐喝された。止むなく城主は開城し、アルブレヒトは掠奪した後で、完全に同城を焼き拂ひ破壊し盡した。ニュルベルク政廳はこの前代未聞の裏切り行爲に驚愕措く處を知らず、直ちに防衛の處置に出たが、敵軍の優勢を思ふと、こちらから一戦を交じへることは思ひもよらないことであつた。翌日邊疆伯は市政府に對し反皇帝同盟軍に味方して皇帝に宣戰の布告をするやうに要求して來た。然し乍ら此れより先、市は同盟軍に資金を用立て、ザックセン選帝侯モリッツ及びその他の同盟加盟者から、安全の保證と庇護の約束とを受けてゐたのである。だから市はアルブレヒトの使者を都門に入れず、この旨を申立ててそのまま追ひ返した。アルブレヒトは之に對して、市とモリッツ侯との契約に就ては未だ何等聞知してゐないから、事の真相を確認するために、家臣 Erlangen の

Ammann Veit Zigg を送らう。道中安全のため護衛を與へられ度いと申込んで来た。アルブレヒトの眞意は、若し此の使者に危害でも加へられたら、それを口實に市を攻略しようとするにあつた。だが市は使者を極めて鄭重に取扱ひ、契約の事實を納得せしめて無事に歸してやつた。すると伯は簡単に、かくの如き契約が自分に何等關係のないこと、市は二股かけてゐること、直ちに自分に味方して事實上の援助をしなければ、市を同盟軍の敵と見做すこと等を宣言して来た。従來から中立政策を堅持して来た市政府は勿論之を拒絶するとともに、當時バーデンの Gundelfingen にあつたモリッツ侯に邊疆伯の不法行爲を訴へ、これは後のことになるが、同侯から伯に警告を發して貰つた。しかも如何なる條理も勸告もともに暴行のための暴行を演じようとしてゐるアルブレヒトに對しては、全く無効であつた。彼は市政府に要求を拒絶されるや否や、直ちに進軍を開始し、先づ Stein 村を焼き打ちし、市の四周に於て掠奪放火強盜殺人ありと凡ゆる殘酷な暴行を働いた。と言ふのも市そのものを攻略することは、市の防衛が嚴重で到底不可能であつたからである。と同時にアルブレヒトは Markgraf Georg Friedrich から援兵を得て、その勢力は歩兵一萬二千、騎兵二千に達し、バムベルク、ヴェルツブルクの僧正領にも侵入して、兇暴の限りを逞しうした。遂に彼の同盟者 Wilhelm von Grumbach はバムベルクの僧正から僧正領中二十の官職を委讓させ、價金八萬グルデンを支拂はしむることに成功して、漸く兵を引き、又ヴェルツブルクの僧正は廿二萬グルデンの價金、邊疆伯の借財三十五萬グルデンの引受け、及び大砲彈丸火藥の讓渡を條件に和を結ばざるをえなかつた。ザックスの詩中乙女の嘆きには實に以上の如き経緯が伏在してゐるのである。だから老詩人 (Der Alte) が「あなたが何をしたからとて兀鷹はその様な殘酷な責め苦を加へるのでせうか？」と訊ねるのは尤ものことであり、それに對しては乙女も「親切の限りを盡してこそ

をれ、何一つ悪いことはしてゐませんのに」と答へてゐるのも當然である。それにも拘らず何か原因がありとすれば、市の繁榮を憎む彼の嫉妬心と云ふより他に心當りはなく、彼の行爲は全く不義不道理不盡を極めたもので、天人ともに赦さざる惡業である。そこで老人は「彼が近くを荒し廻つてゐた間に、貴女は防衛の手段を講じておくべきでありましたらう。」と言ふ。すると乙女が「彼の巧言令色に瞞されて、愚にも安心し切つてをりました」と答へてゐるのも事實であつたであらう。更らに兀鷹獨りならまだしも、多くの野獸、二匹の獅子、百合の王冠 (佛國) 等相寄つて大鷹 (Der Gros adler, 獨逸皇帝) に攻めかかる。しかも乙女は此等のものと協定して、その孰れとも仲好くする筈になつてゐたのに、近頃になつてかの兀鷹は彼女を爪で捕へ、劍や火で苦しめるのみならず、彼女が慈しみ育てて來た肉身の愛子達の一部迄彼に味方して、彼女を亡ばさうと願つてゐる情况である。ここで「のみならず妾が慈しみ育てて來た肉身の愛子達の一部迄彼に味方する」 (Darzu helfen im nicht dest minder / Ains dults meiner leijlichen kinder, / Die ich hat tragen und erzogen,) と乙女が言つてゐるのは、あとにも出てくる様に、市民の中に市政府の處置に嫌らず、反抗しようとしてゐたものがあつたことを言ふのであらう。

そこで老人が「此の國歩艱難の折りにあなたを助ける味方はないのか？」と問へば、乙女は「友人も皆叛き去つて敵方について了ひました」と答へる。今は誰もかれも自分の利益のみを計つて、これ迄色々世話をしてやつた者達も姿を隠して了つた。成程老人の言ふ様に、かの大鷹 (カール五世) のために此の様な憂目に逢ふのだから、大鷹が武器を執つて立てばよいのであるが、彼も既に敗れて再起には尙時日を要し、今は敵の強力な壓迫に敵し難い窮境にある。事實乙女がかく訴へてゐる通り、皇帝は當時モリッツ侯に追はれてインスブルックに逃れ、モリッツ侯も亦チロルアルプスの Füssen にあつて、ニェルン

ベルク市の懇請を如何とも仕難い状態にあつた。だが乙女にもまだ小敷の信義を重ざる子供達があり、無私無欲、無報酬で忠勤を勵んでくれるものがあるので、そこに唯一の慰安がある。そこで老人は色々と忠言を與へる。上下心を一つにしてこそ金城鐵壁で、何者をも恐れることはない。成程彼女の子供達の中には不平不満から陰口を飛ばして彼女の悪口を言ふものもあらうけれども、それは無分別に饒舌する凡俗にはよくあることであるから、聞かぬ振りをして皆人に親切を盡せば、やがて多くの味方を得るであらう。然し次いで乙女が憂うるやうに、それにも拘はらず佞奸不遜の徒輩が仲間を誘つて叛逆するやうなことがあるれば、最早や容赦をする必要はない。斷然嚴罰を以て臨むべきである。更らに食糧の缺乏に對してはよく秩序を保ち、富者は貧者を助け、一家親睦、利己心を去らなければならぬ。寔に「饑餓は粗暴なる客人である。」(Hunger ist ein unwirter Gast.) 即ちかくの如く作者が非常時局に於ける流言蜚語と食糧の危機に對して注目してゐるのは、自らの實際體驗に基くものであらうが、今日と雖も戦争や事變となればその間の事情は少しも變らないのである。しかも猶且つ此の様な各種の新しい危険な情勢のために、結局彼女が殲滅されるに至ることを恐れなければならぬとしたら、戦争の惨害よりも講和の不利を忍んでも、敵の要求を容れて平和を求めたがよい。かく諄々と説く老人の言葉に對して、勿論乙女にしても何よりも平和を望んでゐる。然し敵が講和によつて要求する處のものは、戦争によつて被る損傷より以上に過大不當なものがあつて到底受諾し難いし、さりとて現狀では兀鷹の奸計欺瞞、殺人放火、叛逆掠奪が彼女の財寶を蕩盡せしめ、糧食兵糧をも亦枯渴せしめようとしてゐるのである。今は孤立無援、彼女は無数の危険に取巻かれて、最悪の事態に直面してゐる。處で彼女がかく悲嘆するのにも亦事實上の根據がある。

既に新教派の諸侯諸都市の中にはアルブレヒトの餘りの暴狀に不満

を抱き、種々調停に乗り出す者もあつたが、總て無効に終つた。邊疆伯は兩僧正領が屈辱的講和をして以來、ニュルンベルク市の包圍を層一層強化し、市の領有する凡ゆる城塞村落水車莊園を根本的に破壊するの暴舉に出た。これにたいしては五十二年五月半頃からアウグスブルクに多くの自由都市の代表者が集つて、擬議した結果、アウグスブルク、ローテンブルク及び Hall (Schwabach) の代表が伯の陣中に派遣されて、和平の交渉を開始したのであつた。然し乍ら伯が平和條件としたものは、六十萬グルデンの償金、彼の占領し焼却した城、町、村落の讓渡、——これは殆ど首都ニュルンベルク市を除いた全領域を意味する——のみならず軍隊の撤廢及び伯の必要とする丈の敵方守備隊の市中駐屯等到底承認仕難い程過大苛酷のものであつた。代表達も此の條件が認容し得ないものである事を十分承知してはゐたが、然し他に方法がない以上、致し方がないとした。

だが市政府は敢然として此の亡國的條件を拒絶し、防戦を決意した。かくてニュルンベルク市にとつて前古未曾有の凄愴苛烈なる決戦の日が來た。談判が決裂したその夜、アルブレヒトは凡ゆる兵力を動員して市を砲撃し、近郊に火を放つた。市民は晝夜を分たず破損箇所を修理し、火災を防止し、守備を強化するために、不眠不休の活動をしなければならなかつた。その上更に不幸なことには五十の村落が既に焼失し、市中では不平の徒が騷擾を起さんばかりになつた。そこで止むなく市政府は再び講和を乞うたが、此の時の條件も六十萬グルデンの償金か又は二十萬グルデンと Kulmbach (auf dem Gebirge) 地方の凡ゆる町と城との割讓と云ふ苛酷なものであつた。市は之に對して八萬グルデン以外には何物も呈供しようとしなかつたので、六月七日から十日に渡る談判も再び決裂した。ここに於てアルブレヒトは今や Graf Christoph von Odenburg と Hauptmann Jobst von Dalbeck から全體で九千の歩騎兵の援兵を得て、亦もや襲撃を開始

し、市を攻略した曉には、何等容赦する處なく、市民を處置すると威嚇した。そして捕虜となつたニュルンベルクの百姓をして、市の近くに堡壘を構築せしめたので、市の守備隊は自國の同胞に破火を浴せかけるの餘儀なきに至つた。實にハンス・ザックスの「ニュルンベルク市の嗟嘆、對話」が書かれたのは（六月十六日）、丁度此の頃のことであつた。

されば詩中老人は萬策盡きた乙女に對して、續けて言ふ。「友人隣人に見棄てられた今は、神様に頼るより他に道はありませんまい」と。然し乙女は彼女の犯して來た積年の罪劫で、神の救助も中に頼み難いと答へる。しかも老人は懺悔贖罪して只管に神に祈願すれば、大悲の神の加護は必ず降らなげはゐないと勇氣づける。そこで乙女は結辭を述べて（*das frewlein peschlewst*）、此の不幸も身から出た鏝であれば、愈々信仰を堅くし、神に歸依して贖罪を果せば、或は神はその強力な手で、兀鷹の無法な反抗も打ち破つて下さるであらうと念願する。

そしてその通り邊疆伯アルブレヒトは亦結局悲惨な最後を遂げるに至つたのであるけれども、それ迄には尙幾多の恐怖戦慄すべき運命を市は耐へなければならなかつた。六月十八日に至つて市は遂に屈服、翌日同盟軍の諸侯の協力で、二十萬グルデンの償金、その中十五萬グルデンは即時拂、残金は一ヶ月以内に支拂ふこと、四百ツェントナーの火薬と六門の大砲を讓渡すること、及び同盟軍に加盟すること等の條件を以て和議を結んだ。そして六月二十一日 Landgraf von Leuchtenburg はアルブレヒトの代理として市に現れ、條約を執行、六月廿四日アルブレヒトは漸くにして、市の包圍を解いた。市が此の戦で受けた損害は然し、二つの町、三つの僧院、九十に餘る莊園と十七の村落、無敵の水車等の掠奪と焼失、市有林三千モルグンの焼却と言ふ莫大な額に昇つてゐる。中でも Wöhrd (Wehrde) の受けた損害

は見積り額二十五萬五千フロリンに昇り、到底恢復する見込みがなく、市は遂に此の町を自らの手で破壊した程であつた。（*Vgl. Genée, Hans Sachs und seine Zeit, S. 288—301, auch Ann. S. 501—504.*）

平和論者にして穩健中庸を尊んだハンス・ザックスが、祖國の興廢に係る此の戦亂に如何ばかり悲嘆し快惱したかは、乙女の言葉を通じて、悲しい迄に委しく傳へられてゐる。又彼が如何にその前後策を考へ、自らを反省したかは、老人の言葉が遺憾なく示してゐる。されば作者は講和交渉の始まつた日六月十八日直ちに筆を執つて、*Inter-scheid zwischen Krieg und Fried*（戦争と平和の相違）を書き、これを以て彼の三十八篇を收めた説話詩集第七卷の卷末を飾ることにした。此の詩は直接今度の戦亂に係つたものではないけれども、例の如く作者の夢の中に現れる「狂暴な女」（*das wuehtig weib*）によつて、戦争の恐るべき慘禍を筆を極めて描寫し、次いで人人の神に對する祈願により天降つて來た「美しい優しい婦人」によつて平和の樂しくも又幸福な様を歌つたもので、作者の目前の直接體驗と切實な現實感情とが凝つて成つたものである。

同様に作者が七月六日に悲劇 *Die Belagerung Samarie*（サマリア包圍、登場人物十四、五幕）、七月九日に悲劇 *Die Belagerung Jerusalem*（エルサレム包圍、登場人物十一、五幕）を書いてゐるのは、彼の生都が包圍された事件直後の感情に最も相應しいものであつたからであらう。

だがアルブレヒトの暴狀記は之を以て終つたのではない。翌五十三年カール五世はニュルンベルク市の忠誠に免じて、尤も同市は今餘儀なく同盟軍に加擔してゐたけれども、アルブレヒトと結んだ條約の破棄を命じた。と同時に佛蘭西王も同伯の申出を退けたので、彼は自暴自棄的に再び獨力でバムベルクを占領し、掠奪破壊を慾いままにし始めた。之を知つて市政府はボヘミヤ及びシレジアで五百人の騎兵團

を募集したが、之を邀撃した伯の部下の Landgraf von Leuchtenburg によつて該部隊は Eichstedt で包圍され、包圍を突破するために市から派遣された援軍も撃破された。かくて邊疆伯はニェルンベルク領の Lauf 及 Aldorf を襲うて放火し、轉じてヴェルツブルク領に入り、Schweinfurt を無抵抗で占領した。

然し乍ら此の頃から有繁に猖獗を極めた彼の勢力も漸く下り阪に向つて行つた。彼は惡逆無道なる平和擾亂者として國外追放の刑に處せられ、嘗つての盟友も彼の夜盜的不信行爲のために彼から離反して行つた。かくて彼はザックセン選帝侯モリッツと五十三年七月九日ハンノーヴァ領 Sievershausen で戦つて敗れ、そのフランケン領を奪取され、Plassenburg bei Kulmbach を破壊された。越えて九月十一日には Herzog Heinrich von Braunschweig (1489—1568. 反新教派、ルツテルに力つた Hans Worst と呼ばれた) に Geuten bei Braunschweig で敗れ、遂に佛蘭西に逃亡、再舉を計つてゐるうちに、千五百五十七年一月八日 Pforzheim でその傲岸不遜の一生を閉じた。勿論憂國の詩人ハンス・ザックスは異常な關心を以て、彼の其後の行動を見守つてゐたものと思はれる。と言ふのも當時の彼の詩作で、このアルブレヒト伯に關係してゐるものはなほ次の五篇を數へることが出来るからである。

1. Ein gesprech mit den 9 musee, wer doch vrsprüncklicher vrsacher sey der auftrier in tewtschlandt. (1553, II, 5. 九詩神との對話、獨逸に於ける騷擾の本來の張本人は誰ぞ?)
2. Die ander schlacht so margraff Albrecht verloren hat anno 1553 den II septem. (1553, II, 25. 邊疆伯アルブレヒト再度の敗戦)
3. Ein gesprech der götter wider den aufriechsch furersten margraff Albrecht und ander furersten und stet Deutschlands. (1554, 6, 27. 叛逆者アルブレヒト邊疆伯その他の諸侯及び獨逸の町々に對する神々の對話)

4. Ein pasquillus von dem schlos zw Blassenburg (in prosa 1554, 7, 16. プラッセンブルク城の誹謗書)

5. Gesprech von der himelfart margraff Albrechtz anno 1557. (1557, 2, 6. 邊疆伯アルブレヒト昇天問答)

第一の詩「九詩神との對話」は丁度作者の五十九歳の誕生日に書かれたもので、恐く此の日彼の説話詩集第八卷が完結し、此の詩を以て第九卷の冒頭を飾らうとしてゐたものであらう。作者は此の詩の發端でその事に言及し、千五百五十三年十一月五日は自分の誕生日に當り、既に廿卷の詩集(即ち此の年までに完結してゐる工匠歌集十三卷、説話詩集は八卷であるが、工匠歌集の第一卷と説話詩集とは頁數の連續してゐる一本になつてゐるから、全部で廿卷と言つたものであらう)を完成して、今は詩作にも倦み疲れたから、今後は創作を斷念し、餘生を安樂に過し度いものだ。詩を作つた處で、人から嫉まれるばかりで、得にも名譽にもならないからと歌つてゐる。詩人がかく述懐して眠りに就くと、嘗つてその昔若い折彼が Wels からザルツブルクに行く途中、彼に現れて彼に詩人としての使命を自覺させて呉れた九柱の詩神が彼の寢床の周圍に立つ。先づ Clio が生涯を詩作に捧げ、自分に奉仕しようと言つたものが、何故その様に、甘美なる詩を見捨てようとするのか?と問ふ。そこで詩人(Der dichter)は言ふ。老來をすなく、記憶は弱り、智慧は鈍り、詩情は枯れ、目も效かず、手も震ひ、耳は聴えなくなつた。既にあなたに奉仕して四十年、その間工匠歌、喜劇、宗界俗界に渡る悲劇、討論詩、謝肉祭劇、多くの頌詩、歴史傳説詩、凡ゆる種類の洒落本教訓本、娛樂用の笑話(劇)詩等殆ど四千篇に達する作詩をして來た。今は筆を擱くのが適當の時でありませうと。Euterpe が詩作を續けるやうに彼を激勵するけれども、詩人は老年の故ばかりではなく、獨逸國內の現状のやうに、戦亂、投獄、殺人、強盜、放火と王侯貴族が暴戾を盡してゐては、詩作をする氣も

出ないばかりか、今後生きてゐる心もないと嘆く。これに對して Melpomene がさう云う悪業を懲らしめるこそ、詩作をする第一の理由ではないか？と勸めるけれども、詩人は「今日詩作をすることは、誠に危険で御座居ます。世は擧げて曲筆阿世の世の中、誰が一體獨逸全國に此の様な不幸を齎した張本人でせうか？」と問ふ。すると今度は Thalia が口を開いて、「害悪はすべてヂュピター神から來るのです。今七つの星が悉く暗く影を消して、獨りヂュピターばかりが支配してゐるのが見えませぬか？」と反問する。詩人が「ヂュピターは如何なる星よりも溫良親切な御方であるのに、どうして獨逸に對して殺人の無法を犯しますのか？」と訊けば、Polimnia は「ではお前自身の目で見たがよいでせう」と、詩人を飛鳥の如く、雲上に連れて行つて、ヂュピターの玉座眞近に置く。ヂュピターの姿は寔に陰慘で、自分の子供を殺して喰ふと言ふサツルンかとも思はれる。その玉座の前後は血に汚れ、顔は人類に對する嫉妬と激怒で一杯になつてゐるやうに見える。

かうして詩人は更らに Erato, Terpsicore, Urania, Caliope とのそれぞれ問答によつて、玉座にゐるのは確にヂュピターであり、その傍に坐してゐるのは、ヂュノーではなくして、Fraw Schalkheit (狡猾夫人) で、その後控へてゐる青白い眼窩の陥込んだ女と、黄色い瘦細つた女は Fraw Untrew (不實夫人) と Fraw Neid (嫉妬夫人) であること、正義、正直、誠實、平和、眞理、叡智、慈悲等は奥の洞窟の中に鎖で繋がれ、彼女等は高慢、吝嗇、暴虐、復讐、詐欺、偽善、私利、暴力、不平等に苛責されてゐること等が知らされる。それで詩人はかくの如く目を眩まされた大神が支配してゐる限り、獨逸に平和が來ないことも當然であるから、ヂュピターの父神サツルヌスが來て、ヂュピターを追ひ、昔の様に玉座に着いて獨逸を災禍から救つて貰ひ度いものと言ふ。とヂュピターは忽ちその雷撃の斧を降り下ろし、

詩人を目掛けて雷光を射かける。その瞬間これはこれ南柯の夢、彼は氷の様に冷い汗の中に寝てゐたのであつた。かくて結辭 (Der pesch-tes), 即ち九詩神のやさしい物語で地上に於ける不幸の張本人が判つたからには、之を詩作して一般に告げ廣めるとともに、詩神の勸説に従つて、詩人は更らに勇を鼓し此の詩を以て詩集第廿一卷を始めようと思ふと言ふのである。

此の比喩對話詩は直接アルブレヒト伯に關係はないとしても、紊亂せる當時の獨逸の國情を憂慮する詩人の衷情を窺はせるに足るもので、これによつてハンス・ザックスは正しく國民的愛國詩人であつたと言ふことが出来るであらう。

次の「アルブレヒト再度の敗戦」は五十三年九月十一日ブラウンシュヴァイク侯ハインリッヒがアルブレヒトを (Gottschalk) で敗り、敵方に死者六百、他に多數の捕虜負傷者を出さしめた合戦の經過を敘述したもので、最後に、例の如く、此の戦からよき平和が生ずる様にと、作者は願つてゐる。

第三の「叛逆者アルブレヒト伯その他に對する神々の對話」も亦夢物語で、詩人はアルブレヒト伯が敗れても敗れても執拗に再起して戦亂を起しうることを怪しみ乍ら眠ると、Fraw Racio によつて、宛も「デダルスがイカルスにした様に」翼を與へられ、ヂュピター神の前へ連れて行かれる。すると丁度ミネルヴァと Justicia, die Gerechtigkeit (正義) とが雷神の前に出て、交る交る、血に餓えた軍神マルスに虐げられて、今や破滅に頻してゐる獨逸のために、救助を垂れ給へと願つてゐる處である。大神も既に獨逸人の嘆願の絶叫を聽いて、マルスに警告を發したのであるけれども、マルスは神の命令を蔑視して、毫も意に介しない。一方ネプトゥーンが反抗するので、大神自身は目下その方に多忙である。だからヘーラクレスをしてマルスを制誅せしめようと言ふ。メルクールが傳令として、ヘーラクレスを呼んでくる。

ヘーラクレスは既に四度マルスを打倒したが、その度毎に、彼の嘗つて退治したところのある百頭の大蛇のやうに、マルスは切つても切つても頭を擡げてくるのである。それには然し理由がある。マルスを助けてゐるものは地獄の鬼共ばかりではなく、天上の神々の中にも亦彼と氣脈を通じてゐるものがあるからである。デュピターは自分の配下にその様なものがあることを信じない。そこでヘーラクレスは數通の手紙を出して、神々の裏切行爲の證據を示す。デュピターは密にそれを讀んで、ミネルヴァに渡す。彼女は事の真相を知つて嘆き悲しみ、何故に神々迄がマルスの亂行を助けるのかと訊く。ヘーラクレスは他人の幸福を羨む嫉妬心からとしか考へられないと答へる。ミネルヴァはマルスに利用される丈利用されて、何れは捨てられる神々の愚さを憐れみ、ユステイティアはかくては大神の名聲にも關することであるから一刻も早く善後策を講ぜられよと言ふ。然しデュピターは大敵ネプトウーンのことを思うて未だに躊躇してゐる。そこへヘーラクレスが海神の方は一先づ容赦して、マルスとその一派の神々を先に征討されよと提議すれば、ユステイティアは彼に劍を捧げて、彼を激勵する。ミネルヴァも彼の提言に賛意を表し、さうすれば人類は大神に感謝し、大神の勢望は再び以前の如く榮えるであらうと言ふ。そこでデュピターは大いに喜び、雷撃電雷を發してマルス一黨を脅威し、彼等の戰意を奪ふことにすると言ひ、ヘーラクレスの前途を祝福してその勝利を祈る。かくてヘーラクレスはマルスに加擔してゐる男女の神々の名簿を貰つて退出する。そこで結辭。詩人はそれら神々の名を知らうと思つて一步踏み出したなら、寢臺の板に衝突して目を醒ます。扱ても「これは不思議な夢である。それが何を意味するかわからない」(Das ist ein wunderlich gesicht / Was das pedent, das wais ich nicht.) けれども、密に思ふに、神よ、よき手段を遣して、無法の衆徒を罰し獨逸に平和と正義とを再び降し給へ!——とかく願ふはハンス・ザック

ス。

勿論此の詩の意味する處のものは、先の「ミネルンベルク市の嘆嘆對話」と比較すれば、説明する迄もなく明瞭であるが、作者はそれ丈に結末で邊疆伯方の抗議を慮つて、その眞意を故意に踏晦したのである。尙全篇の構成が甚だ劇的な對話體をなしてゐることは、當時の作者の作風が主として劇詩の創作に向けられてゐたことを思はすもので、此の時代のハンス・ザックスは此の種言はば劇的敘事詩とも言ふべきものを好んで詩作してゐるのである。

されば第四の「ブラッセンブルク城の誹謗書」も同様に至極劇的に構成されてゐるのみならず、之は又珍らしく散文で書かれた一風變つた着想の對話である。先づ冒頭に同じく散文の地の文が對話の行はれた時や場所を説明してゐるが、それによると、アルブレヒト邊疆伯のブラッセンブルク城が久しく包圍された後、遂に陥落した時、その要塞の評判が餘りに高かつたので、詩人も好奇心に驅られて、五十四年七月十四日の夜遅く、満月の光を浴び乍ら、城塞を見物しようと、城山に登つて行つた。彼が壕割りの處迄行つて、その堅固な防塞を眺めてゐると、羅馬の廷臣風の服装をした背の高い男が山を登つて來て、外壕の處迄歩いて行く。恐る恐る尙も見てゐると、それは「羅馬の誹謗書」(der römisch pasquillus)で、彼は咳拂ひをした後、大聲で次の様に呶鳴り出したのである。とそれから誹謗書とブラッセンブルク城との問答になる。

「ブラッセンブルク、ブラッセンブルク、お前はまださうやつて立つてゐるのか!」

すると城の地下室や穹窿から深い溜息が聞えて來たが、他に何の答もない。誹謗書はもう一度同じ言葉を叫ぶ。すると憐れな聲が城の中から聞えて來た。「誹謗書よ、お前も儂を嘲りに來たのか、儂は大恩のある主人に捨てられて、新しい同盟軍の手中に落ちたが、扱てこれ



からどうされるのか知らない。」

誹謗書「汝の如きものは火をかけられて空に歸するのが當然だ。」

城「どんな悪いことをしたからとて、その様な憂目に逢はされるのか？」

誹「何を訊くのだ。汝の一生が何の役に立つたと言ふのか？」

城「御主人や御一族にとつては有名な、よく出来た御館であつたし、敵方の攻撃に對しては安全であつたのに。」

誹「何だと、盜賊、殺人者の巢窟であり、凡ゆる不敵な徒輩の安全な要塞であり、凡ゆる正義廉直の士の目を逃れる隱家であつたぢやないか？」

城「儂は又ブランデンブルクの寶庫でもあつた。」

誹「寶庫とはよく言つた。汝の中に見出されるものは街道で横領された凡ゆる種類の強奪物や掠奪物ぢや」云云

かうしてプラッセンブルク城は、以後は行狀を改めて同盟軍に忠勤を盡すから、生かして置いて呉れとか、要塞は壊しても、せめて壯麗な館文は全國の譽れとし、飾りとして残しておいてくれとか、新同盟軍は彼の如きものを破壊して、徒らに邊疆伯側の不滿を招く様なことはしないと云ふとか、いやしくも一國の主を放逐し、その都市城塞を占領し、その本城を破壊するとは、他の諸侯の思惑を考へないのかとか、色々に抗議する。

併し誹謗書は汝を生かして置いてはアルブレヒト及びその一味のものが落ちつかず、奸計殺戮を以て又もや汝を支配するに至るであらうとか、館文を残したのでは、纏て再び要塞が築造されて、前より一層非道な悪業が行はれるであらうとか、汝の主人とその一味のものは國や人民を亡ぼしたのみで、何一つあとに残したものはないから、今は彼の愛顧を得ようと欲する唯一人の人間も存在しないとか、敬虔な君主なら汝の主人の如き、皇帝から國外追放に處せられた者の、國內平

和を亂す叛逆的戰爭を是認するものはないとか、悉一辛辣に辯駁する。遂にプラッセンブルクは抗辯の種も盡きて、只復讐の一念を強調して威嚇するばかり。誹謗書は彼の過去の凡ゆる罪過を數え擧げて、彼を取壊すことを主張し、よつて以て戦亂を終焉せしめ、平和を確立することを願ふ。ここに於てかプラッセンブルクは溜息を吐くのみ、又何の答もしなくなつた。

最後に作者は以上の問答が、筆過を慮つて、實際のそれよりもいくらか緩和して書かれたものであると斷つてゐる。

アルブレヒト邊疆伯に對する詩人の憎惡は、然し最後の「邊疆伯アルブレヒトの昇天問答」に至つて絶頂に達する。此の詩はザックスの説話詩集第十一卷に收められてゐた丈で、アンズバッハ及びクルムバッハバイロイトの兩邊疆伯家に遠慮して、出版されなかつたばかりでなく、詩人の死後 Feschmann なる人の要請によつて、邊疆伯を誹謗した數種の作品の破棄命令が市政府から發せられた時、七十六年一月廿日（此の前晚ザックスは死亡）ザックスの遺族の手で詩集から切り取られて了つたものである。但し其の際中間の四枚が削除された丈で、冒頭の二十四行と結末の十七行とは、尤も邊疆伯の名前のある箇所（表題及び百九十二行目）と、最後の行中の *markischen* なる字が削り取られてゐるけれども、作者自身の筆寫したものがそのまま残つてゐる。それに幸にも尙他に當時の寫本が二部（伯林圖書館及びニュルンベルク市立圖書館）傳來してゐるので、此の受難の作品を今日でも見ることが出来るのである。然し寫本は孰れも、原本の今日僅に残存してゐる部分に於てさへも、若干相違してゐる點があり、その相違してゐる點が兩者の寫本とも全く同一であるのみならず、兩者とも意味から言つても、韻から言つても全く餘計な詩句が一行（TONとTON行との間に、そのために作者自身が最後に附記してゐる三百行とある行數が三百一行となる）餘分に挿入されてゐるから、此等の寫

本は原本そのものからではなく、恐く別の草稿から筆寫されたものであらう。従つて此の詩は祕密裡に相當世間へ流布してゐたものと考へられるのであるが、以上の経緯は既にその内容が異常に煽情的なものであることを察せしめる。事實又それは従來見て來た様な此の詩人に特有な温情主義を一擲して、激越を極めた諷刺皮肉からなり、六十三歳の老詩人は再び少年の頃の詩的情熱を湧き立たせて、己が生都の仇敵に對する憎惡感を吐露してゐるのである。

物語の發端は例の通り夢から始まる。詩人は千五百五十七年一月七日の夜土耳其軍やその他の暴君の惡業に就いて沈思し、此の様な世の中に生きてゐるよりも、寧ろ早く死んで彼岸の平安を得たいと願つてゐる中に眠る。とゲニウスが現れ「獨逸の國中を無益に戰亂の巷と化して、遂に生國を追はれた武將が昇天するのを見せて上げよう」と言つて、小暗い谷間へ連れて行く。やがて吊鐘が鳴り、挽歌が響いて來る中を、長い人影が陰鬱な霧の中を通つて行く。ハンス・ザックスが「人民が君主の御他界を悲しんでゐますので」と言へば、ゲニウスは「それ處か、皆があゝの男の死んだのを喜んでゐるのぢや。悲しんでゐるものがありとすれば、それはあゝの男がもつと早く死なかつたからだ」と答へる。寔に痛烈な皮肉である。「成程百姓や町人は随分苛められましたから、さうかも知れませんが、王侯達は悲しんでをられませう。」と訊けば、「王侯達も遂にはあゝの男の亂暴狼藉に驚愕して離反して了ひ、今は誰一人あゝの男をこの世に呼び戻し度いと願ふものはない。」との答。かくてその男の後から遠くついて行くと、彼はやがて貴族や武士や傭兵の大群に取り巻かれ、皆から「金！金！金！」と呼び掛けられる。これは故人が生前給料を支拂はなかつた部下達の報酬を督促する叫聲である。次いで女子供百姓町人無慮千人ばかりが、彼を取り圍んで彼を罵り辱しめる。それは彼のために何の罪咎もなく殺されたり焼かれたりした人達である。かの幽鬼は只頭を垂れて無言のまま通つて行く。そ

れから Styx の河の邊りへ來ると、彼と一緒に強盜掠奪を事とし、彼のために死んだり殺されたりした武士達が、血塗れた悲惨な姿をして、彼を待つてゐる。彼等は彼と一緒に昇天しようと犇めくが、それは牝牛が廿日鼠の穴へ這入るよりも至難の業である。やがて渡守 Charon が舟を持つてくる。然し例の幽鬼は舟に乗る前に岸邊に燃えてゐる火の中で、その身に附けてゐる重荷をすべて焼かなければならない。彼が亂醉を火に投ずると酒の臭氣が漂ひ、暴虐な反抗や惡行を焚くと瀝青や硫黄の様に燃える。それから瀆神、嫉妬、憎惡、偽善、奸計、と彼の惡德惡業を投ずるごとに、火は炎炎と燃え上り、天をも焦す計りとなる。すつかり身を淨めて、彼は舟に乗り込む。すると向ふ岸では偉い人物が澤山彼を持ち受けてゐる。彼等は Dionisius, Aristotimus, Cleomenus, Phalaris, Nero, Julianus, Heligabolus, Nicocrates, Nabis, Domitianus, Comotus, Caligula etc. と言つた様な皆歴史上有名な暴君で、今彼等の仲間の來たのを迎へてゐるのである。かくて地獄の門口へ來る。門の前に地獄の番犬 Cerberus が控へて三重の門を開けて、新來の客を大喜びで迎へる。詩人も一緒に門を這入つて、Danaicus や Minos が裁判する光景を見度いと言ふけれども、ゲニウスは「あすこは日も月も射さぬ永遠の闇であるから」と堅く彼を押し止める。かくてハンス・ザックスは目を醒まし、恐怖戰慄で心も心ならず、此の夢は一體何を意味するのかと考へる。其後數日にして邊疆伯アルブレヒトが一月七日の夜死んだと言ふ報道が國內に傳つた。かの夢が果して彼の昇天を告げるものか、夢が確に同じ晩のことであつたか、作者には判らない。それは賢明なる讀者の判断に任せ度い。「ハンス・ザックスは邊疆伯家の人達から、此魔夢のために不興を蒙り度くないから。」(Das mir kein ungunst daraus wachst / Pey den Meckischen, wünscht Hans Sachs.) 此の不思議な幻想は終つてゐる。

以上は全篇が「ゲニウス」と「ハンス・ザックス」との對話から成り立つてゐるのであるが、作者自身が公然と本名を掲げて、作中の主要人物になつてゐる等と云ふことは、随分大膽な卒直な趣向である。それとともにその奇怪な構想、辛辣な諷刺、卓抜な比喩、巧緻な皮肉等を通じて、作者の内に潜む忌憚なき現實的憎惡感情が遍く全篇に浸透してゐるのを見るのである。されば此の詩はハンス・ザックスの晩年の作品も數ある中に、稀れに見る過激なものであり、最も異色あるものであるとともに、老詩人の意氣なほ衰へざるを示すもので、甚だ注目すべき作品である。

抑々墮獄又は地獄行の代りに用ひられてゐる表題の昇天なる文字そのものが、甚だ隱微な揶揄を含んでゐるのであるが、弔鐘挽歌であるべき筈のものが、人人の抃舞雀躍を現してゐると言ひ、「今は誰一人あの男を此の世に呼び戻し度いと願ふものはない」と言ふに至つては、既に亡き故人を偲ぶ言葉として、餘りにも無情酷薄な皮肉である。よつて以てハンス・ザックスのアルブレヒト伯に對する憎惡が如何に峻烈なものであつたかを知るに足るであらう。次いでゲニウスに導かれて尙も詩人が見たと言ふ、故人によつて焼かれ殺され奪はれ亡ぼされた無辜の民衆や、彼の部下の武士達の行列に關する凄慘なる描寫は、その委曲を盡した詩的想像力と色彩の強烈さに於て、正にダンテの神曲、地獄篇を思はせるものがある。やがて幽鬼が淨罪火を経て、地獄の入口に到れば、地獄の猛火が黒煙を擧げて地獄の館の破風をも突き破らんばかり。そのバリバリ、パチパチ、パンパンと言ふ音に、ハンス・ザックスは突然目を醒ます——

勿論斯の如き故アルブレヒト伯に對する痛烈な憎惡感は、獨りハンス・ザックスのみならず、當時の多くのニルンベルク市民が抱いてゐたものでもあらう。されば此の詩が周圍の狀況を慮つて出版されなかつたとしても、作者の知人の手を通じて相當廣く流布してゐたのも

亦當然のことである。

以上の他に邊疆伯アルブレヒトを題材としたものに、一風變つた工匠歌曲調の笑話詩「Der Narr mit dem Kind in der Wiegen (od. mit margraf Albrecht) in der zugweise Frauenlobs. (1554, 6. 馬鹿役と搖籃の子供、又は邊疆伯お抱への馬鹿役)がある。カシミール邊疆伯お抱への馬鹿役 Fricz von Lambegk がアルブレヒトの搖籃時代、誰が留めても意に介せず、毎日赤坊の眠つてゐるのを、蒲團を捲つて接吻しては、目を醒させて了ふ。そこで奥方と腰元とが一計を案じて、或日搖籃の中へ赤ちやんの代りに猿を入れて置いた。馬鹿役が例の通り接吻しようとする、猿が彼の口を引搔く。馬鹿は大いに怒つて、赤坊を呪ふ。「此腐賣女の子は墓の中へ投げ込んで了へ！どうせ一生よい事をする筈がない」と。かくて馬鹿と子供は本當のことを言ふと言ふが、此の豫言が適中して、邊疆伯アルブレヒトはその後獨逸の國に何一つよいことをしなかつた——と言ふのである。

かくて五十年代は霸王アルブレヒト事件を以て終らうとしてゐたが、その間ハンス・ザックスの筆陣は既に物語の劇的表現法の修鍊を経て、時代の文學的主流である劇創作に専念從事してゐたのである。勿論當時に於ても彼は間斷なく各種の詩を詩作し續けてゐたことはゐたのであつて、五十二年七月十九日その第十三卷目の工匠歌集（之は千五百五十三年八月十九日に完了してゐる）に收めた卷頭の工匠歌 Die summa der gedicht Salomo in der spruchweise des Hans Sachs (ソロモンの詩歌總計、ハンス・ザックス作説話詩調。列王紀略上第四章に依る)によれば、此の時迄に既に各種戯曲八十三篇、説話詩七卷四百七十篇、工匠歌三千百九十五曲を數へてをり、五十四年十二月卅一日、彼が工匠歌集第十四卷の卷末に收めた詩「Zal und sunn meiner gedicht in der morgenweis des Hans Sachs (我が詩の總數。ハンス・ザックス作朝の曲調)によれば、即ち詩人の六十歳の折りには五百三十篇

の説話詩 (Historien, Fabeln, Schwänke und Gedichte, biblischen od. religiösen Inhalts) 三千八百四十四曲の工匠歌、百三十三篇の戯曲を數へてゐるのである。更らに工匠歌集第十五卷の中五十五年八月一日には、それ迄に神の加護によつて工匠歌四千を作つた (Pis da her hab ich eben mit hilf gottes 4000 lieder gemacht.) と記し、同年十月一日には説話詩集第九卷が未だ完成しなかつたけれども、早くも第十卷に着手してゐる。即ち五十五年十一月五日彼の誕生日の作 Der peschlus oder valete in dis 9 spruech-puech (説話詩集第九卷に寄する結辭又は訣別の辭) の中で、「此の訣別の辭を以て倦むことなく余は第九卷を完結したり。されど去んぬる十月には説話詩集第十卷を開始したり」 (Mit dem valete unferdrossen / Hab ich dis neunde puech peschlussen, / Doch in dem October vergangen / Das zehent spruech-puech angefangen.) と歌つてゐるのであるが、此の詩によれば、彼の滿六十一歳に達した此の日迄に、彼の工匠歌は四千三十四曲、その他の作品六百八十四篇に達してゐると言ふ。引續き五十六年九月卅日工匠歌集第十五卷と説話詩集第十卷とが完了。そしてその説話詩集の卷末詩 Die suma all meiner gedicht anno salutis 1556 am 30 Septembris は作者と或るドクトールの問答の形で、作者自身、自分がその少年の頃から一切の娛樂、戀愛も賭博も喧嘩も酒宴も、扱ては劍術、跳躍、彈琴、射的等を悉く避けて、只管詩作と讀書三昧に耽つて來たこと、織匠ヌンネンベックに就いて工匠歌を習ひ、廿歳の時 ミュンヘンで始めて詩作し始めたことを述べ、作品の數を工匠歌四

千百八十三曲、その曲調二百六十、内自作の曲調十三、喜劇四十四篇、悲劇三十八篇、謝肉祭劇七十四篇、その他の詩歌十卷六百篇以上に昇ると數へ、その第十卷目が今日完結し、それに加ふるに工匠歌集第十五卷も同時に完了したと歌つてゐる。「時に老詩人の齡は六十二歳に缺けること正に三十六日であつた。」 (Da ich alt was war und gewis / Zway-und-sechzig jar, gleich ich sag, / weniger sechs-und-dreyszig tag.) しかも詩人は老齡既に詩情衰へたりとして、幾度か筆を折らうとして折りえず、五十六年十月五日には更らに最後の工匠歌集第十六卷に着手し、十月十九日に説話詩集第十一卷を開始したのである。此の第十一卷は纏て翌五十七年十月五日に完了してゐるが、同日作のその卷末詩 Der peschlus in dis II puech の中の或る老人と作者との問答によると、工匠歌四千二百八十八曲二百六十二曲調。内自作曲調十三、喜劇五十三篇、悲劇四十八篇、謝肉祭劇七十七篇、その他の詩歌六百二十八篇となつてゐるから、此の約一年間に工匠歌三十五曲二曲調、喜劇九篇、悲劇十篇、謝肉祭劇三篇、その他の詩歌二十數篇を増加してゐる譯である。(因に此の戲曲の數は全く正確である。)

然し乍ら遺憾乍ら此の夥しい數の工匠歌や説話詩も、見るべき價值あるものは甚だ尠いから、老詩人の創作活動は十六世紀中葉以來、即ち詩人の年齢にして約五十歳(千五百四十四年)以後は、次第に劇詩の世界に重點が置かれるやうになつて來てゐると言はなければならぬであらう。

第六章 晩年 一五五七年十一月—一五七六年一月十九日

生涯を慈愛深き家父、忠良なる市民、熟練せる靴工、はたまた博學多才なる民間詩人として、只管に大悟せる心境を冀つて精進努力して來たハンス・ザックスにも、漸く老來心身の違和を嘆き、詩泉の枯渴を訴へる時が來た。千五百五十七年十一月五日、彼の六十三歳の誕生の日、彼は沁み沁みと自分の老弱老衰を嗟嘆し、老年の齎す弱點を悉一反省例擧し、清らかな諦觀と深い哲理とを以てそれを慰めようとしてゐた。その結果は *Ein Klagesprech uber das schwer alter od. Ein clagesprech von dem geprechlichen alter* (對話、老弱又は老衰の嗟嘆) 三百行となり、彼は之をその説話詩集第十二卷の卷頭に据ゑたが、この頃より彼の關心は次第に工匠歌の創作から離れて、今は只専ら劇作に注がれるやうになつて來たとともに、寧ろそれより以上に自らの歩いて來た遙かなる文學の道を懷古し、その豊饒な作物の收穫に自己慰安を見出さうとしてゐたのではないかと思はれる。即ち彼は五十七年末彼の愛讀者の要求に應じて全集出版の計畫を立て、翌五十八年一月一日それがための序文 *Dem gutherzigen Leser wunsch Hans Sachs ein gut selig new Jar* (親切な愛讀者各位、新年御目出度う御座ります) を書き、同年アウグスブルクの出版商 *Georg Willer* をしてフオリオ版全集第一卷を出版せしめてゐるのは、必ずしも讀者側からの要求に従つたばかりではないであらう。之はニュルンベルクの *Christoph Henßler* によつて印刷され、未發表百七十篇を含む三百七十六篇の作品、内十八の戯曲(工匠歌は全く除外されてゐる)を収録し、*Sehr Herzliche Schöne vnd warhafft Gedicht* なる表題の下に、出版商ヴィルラーの推薦の辭と作者自身の緒言とを載せてゐる美本であ

るが、筆者はその緒言の中で *Lucius Aeneas Seneca* の「怠慢のためには物事が紊亂されるより恥づべき損失はない」と言ふ訓言に警告されて「彼の多年の勞作が、彼の死後時を経るに連れて、彼の怠慢から散逸し、消失して行かない様に、六十三歳の折り、既往四十二年の間、その手工業の傍作つて來た凡ての詩歌を彼の詩集中に検討し、その中から最も優れたものを選んで、此の一本に蒐集印刷した」ものであると斷り「且又かくの如きは多くの尊敬すべき人達から非常に又屢々余に要求懇請されてつたものがある」(*wie dann solches viel ehrbare Lent viel und oft bei mir begehrt und angesecht haben.*) と記してゐる。されば此等の言葉は彼の莫大な数の作品が本職を閑却して出來たものではないことを明かにしてゐるとともに、誠實廉直な詩人がその本業とその豊富な餘技とを顧みて、如何に得意であつたかを、窺はせるに足るものであらう。

次いで五十八年八月十五日説話詩集第十二卷が同日作 *Der beschlusses in dis zwelft puech der spruech* (此の説話詩集第十二卷に寄する結辭) を以て結終、八月十七日 *Vorred oder eingang in dis buch* (此の詩集に寄する序辭又は卷頭詩。此の詩は彼の全集第二卷の卷頭詩としても用ひられてゐる。) を以て説話詩集第十三卷が着手され、之が五十九年十月十八日完結すると直ちに *Ein comedi, mit 26 personen zu recitieren. Der furst Wilhalm von Orientz mit seiner Amaley, des Königs tochter auß Engeland* (喜劇、登場人物二十六人。オルレアン侯ヴィルハルムと英國の王女なるその妻アマリー) を以て説話詩集第十四卷が開始されてゐる。即ち五十六年九月卅日工匠

歌集第十五巻が完了して以来、舊弊にして煩雜な形式を重んずる工匠歌の創作が著しく減退し、自由にしてしかも潤達な翻案による各種物語詩、劇詩が専ら詩作されてゐるのである。

事實之等の十三巻及び第十四巻の説話詩集の中に收められてゐる作品は、五十七年以來 Herodotus, Justinus, Plutarchus, Boccaccio, Virgil, Gesta Romanorum (Taten der Römer, 千三百年頃英國へ出來た傳説童話集、作者不明), Homer, Ovid, Livius 等から取材した Historia (傳説歴史詩) 五十八年から Pauli, Brant, Agricola, Waldis 等から採用した Schwank (笑話詩)、同年後半以後には Aesop, Cyrill から得た Fabel (動物寓話詩) が多數見られ、五十九年頃からは聖書の詩篇及び Jesus Sirach (西曆前二百年の始頃エルサレムの猶太人 Sira od. Sirach の子 Jesus によつて集收された處世訓言集) の翻案歌が漸く多きを加へて來てゐるのである。それと同様に劇詩の方面でも左表に於て見る通り、五十六年邊りを界として、その數を次第に減じてゐる。

Jahr	Tragedi	Comedi	Fasnachtssp.	Zusammen
1552	6	2	6	14
1553	5	6	15	26
1554	2	1	10	13
1555	7	3	2	12
1556	7	10	3	20
1557	6	6	4	16
1558	5	2	1	8
1559	4	3	4	11
1560	2	2	2	6
1561-2	0	2	0	2
1564	1	1	0	2

1565

1

1

0

2

以上の事實を要約すれば、十六世紀五十年代の後半に入るや、さすがに健筆を誇つたハンス・ザックスの創作力も、彼の還曆の年前後を絶頂にして、概してその藝術的香氣や詩的熱情を失ひ、それは一面時代的に衰頹の情勢にあつたためであらうが、複雑な詩形と重厚な内容を有する工匠歌からは遠ざかり、只興味本位か又は過去の習性で、容易に着手しうるやうな對象、即ち劇詩から笑話詩、笑話詩から寓話詩と次第に小品型に向けられ、遂には老後の心境に相應しいやうな聖書の雅歌や詩篇の翻案歌の完譯を念願するやうになつて來てゐるのである。

勿論此の間の消息は老詩人自身もよく自覺してゐる處であつた。されば彼が機會あるごとに歌つてゐる懷想詩は、屢々深い嗟嘆を以て、その詩囊の衰退して行くことを訴へてゐるのであるが、ことに曩に擧げた五十八年八月十七日作の説話詩集第十三巻卷頭詩「此の詩集に寄する序辭、又は卷頭詩」は、當時の詩人の心境を語るに委曲を盡してゐる。ここでも彼は既に一年前「對話、老弱又は老衰の嗟嘆」(五十七年十一月五日作)の中で反省してゐるやうに、老年の苦惱に快々として樂しまず、最早や詩作を止めて、平穩な樂隱居に這入らうと決心したと訴へ、かく決心したのは彼の詩歌によつて攻撃されたと誤解してゐる人達から憎悪と不興を蒙つたためであるが、然し自分としては何も個人攻撃をしたつもりはなく、何人をも依估眞負したり、嫉妬侮蔑したりしたこともなく、只だ罪惡を叱正追究したに過ぎない。彼がかく考へて、獨り眠りに陥ると、やがてゲニウスによつて美しい廣間に導かれる。玉座の上には高貴な婦人達に取巻かれて、雪白の衣を着た女王が王笏と玉冠を着けて坐つてゐる。女王は「教智」で、周圍の婦人達「正義」、「節制」、「眞理」、「友情」、「愛」、「誠實」、「名譽」、「廉恥心」、「忍耐」、「從順」等から、彼女等が地上で

酷遇されてゐる様を訴へられてゐる。やがて女王は老詩人を近くに招き、「何故お前は妾等のもとを去らうとするのか？」と尋ねる。そこで詩人は心中の苦悶を打明け、女王から色々と言諭される。そして悪人を懲らし、善人を喜ばせ有り難がらせ、又は悲しめるものの心を笑話詩で陽気にし、歡喜で満す様に詩作を續けて、節度を失はなければ、何れは名聲も擧り、その名は永久に残るであらうと勵まされる。かくて女王は彼に手を差し延べる。詩人はその手を取らうとして、寢台の板に衝き當り、目を醒ます。かうして彼は又もや勇氣を鼓して、詩作を續けて行くのであつた。

さればその後も暫くは詩作された作品の總數に於て必ずしも減少してはゐないけれども、その質に於てはごく少數のものを除き、殆ど見るべきものなく、戯曲に至つては六十年以後急激にその數を減少してゐる。

之に反して彼は愈々過去の作品の精算を急ぎ、六十年には全集第二卷を Georg Willer から出版する。此の全集第二卷は五十八年に出た第一卷が好評を博し、再版を出す勢であつたのに力を得て、直ちに準備されたもので、それかあらぬか、著者はその緒言(六十年二月九日作)に於て、久し振りに輕快な諸諷調を用ひて、自作品の自己辯護と自己推薦をしてゐる。即ち此の書が色々な種類の色々異つた材料、異つた時代の作品を公けにしてゐるので、學者から怪物とか海の魔とか呼ばれるのも尤であるが、併し著者の望む處は此の詩集第二卷を、親切な讀者よ！一般公開の遊園地だと思つて頂き度いことと、その中には健康人の食物となる甘しい果實をつける果樹があるばかりではなく、痛める心に下劑をかけ、惡徳の悪い濕氣を拂ふやうな藥となる苦い草根木皮もあり、心痛で衰弱してゐる無氣力な心を強めて、再び奮ひ立たせるやうな香水、香油又は果汁を、蒸溜調製することの出来る芳しい薔薇、薔薇、百合もあり、更らに鬱々として悲觀してゐる心を楽しく

輕快にするやうな美しい愛らしい色彩を持つた矢車草、苜蓿、薊の如き雜草野草もある云云。何れにしても彼が此等の詩を公けにするのは、何人かの嫉妬や不利益を望むからではなく、況んや何人に阿諛追従しようとするものでもなく、只神を讚へ、良き習慣道徳を振起し、罪惡を排除するためのみである。詩人がその善良な性質から、自分の詩敵を如何に氣にしてゐたかは、茲にも亦窮はれる。全卷の内容は出版商ヴィルラーの市政府に宛てた獻辭、作者の緒言、次いで先に述べた説話詩集第十三卷の卷頭詩を冒頭に、從來未發表の作品三百十篇(内戯曲三十八篇)を載せ、卷末詩として、特に六十年一月九日に、曩の説話詩集第十二卷卷末詩(五十八年八月十五日作)を利用して作詩された Der Beschluss im die ander buch der gericht (詩集第二卷に寄する結辭)を掲げてゐる。此の最後の詩で、作者は又改めて詩作から離別しようとする決意を作中對話の相手 Raito に對して、述べてゐるのは、詩人晩年の寂寞たる老境を傳へて、轉た讀む者をして哀憐の情を催さしむる。

詩人(Der Richter)は詩作に疲れた頭を休めに森の中を散歩して、そこで眠る。と Irav Raito に呼ばれて、何故にその様に心身を勞して詩作をするのか？何故其處に困難の仕事から今はもう休息しないのか？と問はれる。

詩人は詩作を仕事とは思はず、神から授けられた楽しい娛樂として、神の光榮を稱へ、隣人の利益を増し、徳行を賞め、罪惡を却けるために、又は笑話詩を書いて悲しめる心を慰めるために、筆を捨てようとは思はないと答へる。彼は又、何人の嫉みにも憎しみにもならぬ様に、四十四年の間作詩を續けて來たのであつて、怠惰は多くの禍を齎し、人の心は休息を欲してはならないとも言ふ。ラティオ夫人は頻りに、老衰のために既にお前の黄金の泉は枯れてゐるから、「詩作を止めよ」と勸めるが、詩人もそれを認め乍ら、何か心中に叫ぶものがあつて、



筆を擱くことが出来ない」と話す。だが相手はそれが彼の妄想であり、詩によつて名聲を擧げ、不朽の名を残さう等と思ふからであると言ふ。此の頃の世間は眞理を嫌ひ、光明を避ける有様で、媚び諂ふことをしないお前は、敵意と嫉みと憎しみを得るばかりである。だから、老人よ、自愛されよ。お前の詩は感謝も報酬もなく亡びて行くであらうからと諭す。此の時小枝に飛ぶ小鳥の音で、詩人は眼を醒ます。そこで彼はラティオ夫人の言葉を尤もと考へ、家に歸つて此の第二巻を整理編輯し、今後は生涯作詩から手を引かうと決意する。

寔にわが生命と頼む「黄金の泉」が日に日に枯渇して行くのを意識しないでゐられなかつた老詩人の胸中は、如何ばかり悲愁落莫たるものがあつたであらうか！説話詩集第十四巻の巻頭序言にも、此の五十九年十月十八日に始めた詩集を、翌六十年六月一日眺めた時に、そこには只十三曲しか記されてゐないのを知つて、心から驚き悲しみ、之が最後の詩巻になるであらうかと迄述懐してゐる。

かうした憂鬱な心境の中に詩人にとつては更らに一大不幸事が訪れた。千五百六十年三月二十七日彼の長年の糟糠の妻、クニグンデが四十年の結婚生活をあとに逝去して行つたからである。しかも彼は此の時迄にその子女二人の男兒と五人の女兒に悉く先立たれ、僅かに刀鍛冶 Hans Pregel に嫁した長女 Margarethe の忘れ形身の四人の孫があつたばかりである。彼の受けた打撃は大きかつた。四月五月と漸く各一篇「Wahrfafte Geschichte palzgraf Friedrichs」（宮廷伯フリードリヒト事實譚）と工匠歌が出来、六月十三日辛うじて「Ein comedi mit 23 Personen zu agieren. König Sedras mit der Königin Helebat und Piliro」（登場人物二十三人。セドラス王、王妃ヘレバート及びピレロ）を得た他は、筆執る手も遅々として進まなかつた。漸く六月も半ばを過ぎて、悲愁の思も幾分落ついて來たのであらう。今は亡き人の面影が靜かなる思慕と限りなき哀憐の情を以て思ひ出されて來た。

即ち六月十九日筆を執つて彼は悲痛なる哀悼の衷情を綿々として叙述するのであつた。彼は純情の限りを盡して、結婚の當初から筆を起し、十二年の間に七人の子供を設けて悉く失ひ、只長女の子供四人が残されたこと、四十一年間妻から獻身的愛の奉仕を受けた後、此の年受胎告知の日（三月二十五日）愛妻が側腹に苦痛を覚え、やがて心臓に及び、醫者を呼んだけれども効果なく、苦痛はいや増すばかり、七轉八倒の苦しみをした後、三日目の晩に遂に遠く神去つて行つたことを書き記す。

二日の後彼女を葬つて以來、彼女の起居した場所を踏めば、心は裂けるばかり、彼女の着慣れた着物を見れば、氣も遠くなる思、自分は六十六才、彼女は五十六才、今こそ彼女を必要とする時だと思へば、悲しみは益々募る。時には彼女がまだ生きてゐて、友達の處へでも行つてゐるやうな氣もするが、やがて彼女は本當に死んで、もう此の世に居ないのだと考へると、胸の悲しみは又新たになる。彼女は始終夫に誠實に仕へ、家計をよく切り盛りしてくれた。只召使達の怠惰に對しては時々烈しい言葉を用ひたけれども、彼女のすることは悉く一家の家政を助けるに役立つた。彼女亡き後は日夜溜息に暮らし、只彼女のことのみ戀ひ慕うて來たが、或夜又もや彼女を思うて眠りにつくと、愛する妻が白い衣裳で、しとやかに室へ這入つてくる。そこで飛び起きて抱擁し接吻しようとするれば、妻は「ハンス、そんなことはないやせん。今は私、前の様にあなたのものは御座りませぬもの」と言ふ。かくて詩人は亡き妻の魂と後生、冥福、彼岸の生活等に就て、心行く迄語り合ひ、彼女がアブラハムの膝下で永遠の平和を得てゐると聞いて、喜び慰められて目を醒ます。彼は昔の師匠ヌンネンベックが數年前同様に夢に現れて、同様にあの世のことは此の世の人に語られないと言つたことを想ひ起す。されば此の世では只管に神の言葉を信じ、神に信賴して、死後天國に救はれるやうに願はなければならぬ。

5。

以上が有名な *Der wunderliche traum von meiner abgeschiedenen lieben gemahel, Künigundt Sächsin* (故愛妻クニグンデ・ザックスの靈夢) の簡単な梗概であるが、詩人の卒直な衷情と純真な悲哀が流れるがままに流れてゐて、讀むものの心の底を惻々と打つものがある。

かく哀切な情を吐露した老詩人は、幾分その悲苦に餘裕を生じたためであらうか、はた又恐くその孤獨寂寥の心を紛らすためでもあつたであらうか、その後は既往の作品の總目錄の編纂を志し、かの驚くべき多數の作品を整理整頓することに僅に心やりを見出してゐた。そしてやがてそれは六十年七月十二日に完成した。この作品總目錄は詩人の着實にして几帳面な性格をよく現はし、各詩の表題、冒頭の句、工匠歌には曲調の名稱、その作品の記載されてゐる詩集の巻數、句數、製作月日等を刻銘に記してゐる。次いで七月十七日その結果を歌つた工匠歌 *Die suna seiner gedicht* を作つて、工匠歌四千二百七十三篇、二百七十二曲調、宗教詩二十三、戀歌二十六なる數を傳へてゐる。其後同年秋には歴史に取材した *Die königin Cleopatra aus Egipten mit Antonio* (1560, 9, 10. 埃及女王クレオパトラアントニオ) と *Romulus und Remus* (1560, 9, 20.)、*Ein Tragedia mit 24 personen. Artoxerxes, der künig Persie, mit seinem mancherley unfalls der seinigen* (1560, 10, 12. 斯波王アルトクセルクセスとその一族の不幸) の三篇の悲劇 (因に此の最後の戯曲は彼の作品目錄には喜劇の部に入れてある。) 及び *Ein comedi. Die jung wifraw Francisca* (1560, 10, 31. 若き未亡人フランチスカ)、*Ein Comedi. Esopus, der fabeldichter* (1560, 11, 23. 寓話作者イソップ) の二篇の喜劇 (尤も此の二篇は彼の作品目錄では謝肉祭劇の中に入れてある。) 等を物にして僅に憂愁の思を霽らすのであつた。然し乍ら老工匠の強靱な生命力は、丁度老ゲーテのその如く、永

遠の青春を内に秘めてゐると言ふべく、思春期の激しい熱情的噴煙に今一度燃え上る時が來た。悲痛なる寡孤生活一年五ヶ月、彼は六十七歳にして、少年の如く胸躍らせ乍ら、再婚の決意をする。彼に選ばれた娘は *Barbara Harscherin* と言ひ、千五百六十一年八月十二日許婚、同年九月二日簡素な結婚式が擧げられた。彼が此の結婚によつても幸福にして圓滿なる家庭生活を築くことが出來たことは、その後の彼の創作意欲が急騰し、作品數が激増してゐることによつても知られる。

先づ第一に八月十六日には彼の全集第三卷の編輯が終り、その緒言が出來た。之もアウグスブルクの *Georg Willer* が出版、ニールンベルクの *Christoph Heubler* の印刷になり、かの「故愛妻の靈夢」の他には全部彼の戯曲百二篇、内譯四十二の悲劇、三十三の喜劇、三の芝居、二十四の謝肉祭劇よりなつてゐる。そしてヴィラーの序文中にも、著者の緒言中にも、之が詩人の第三卷最後の著作になるであらうと斷り、又戯曲の齎す效用に就て特に強調してゐる。ことに作者にとつてはそれらの中多數のものが自ら監督指導して上演されたものである丈に、之迄大切な秘藏の寶物として保管しておいたものであると言つてゐるのは、注目に價する。彼が晩年如何に演劇を重要視し、それに深い關心と研究とを注いだかを窺ふに足るであらう。

更らに同年十一月十七日、かつて「これが最後の詩集になるであらうか」と彼を絶望せしめた説話詩集第十四卷もほぼ完結し (その後又二篇を加へ、工匠歌集第十六卷と合本されてゐる。) *Tragedi. Andreas, der vngerisch könig* (1561, 12, 17. 匈牙利王アンドレアス) を以て第十五卷を開始してゐるのを見ても、彼の創作が昔日の如く順調に運びうる希望があつたことを知ることが出来る。しかも翌六十二年一月廿八日には藏書目錄を製作して、作品總目錄のあとに附加してゐるのは、老人にあり勝ちの懐古趣味と整理慾の現れでもあらうが、又恐く爾後の創作の新材料を求めんに大いに貢獻したこともあらう。だ

が何よりも結婚後の彼の心境をよく傳へてゐるものは、若い愛妻を得て滿一ケ年の後、六十二年九月四日に作られた、此の詩人特有な素材にして純情無比なる *Das künstlich frawen-Job* (新妻頌歌) 百行であらう。ここで彼の若妻の内外の美點が異常な雄辯と臆面もない卒直さで縷々として描寫されてゐる様は、宛も若い戀人が始めて女性の美に感動した時の胸底の祕語を、そのまま寫したものと云ひうる程である。

Ein Hälslein und ein Kehlen weiß

Darunter zwei Brustlein ich preis,

Mit blauen Äderlein gezieret

Hin und wieder gedividret —

(頂かみと咽喉の白しろよ、その下の乳房を讚へんか、青き血管あやをなし、あなたをなを區分せり。)

かく彼女の肉體美を悉く讚へた後、彼女の善良高貴な性質、高尚な徳操に及び、最後にはポッカチオの選んだ百人の女性にも入るものと極賞してゐる。

Wenn Bocatius in seiner Jugend

Auch hätte gvußt ihr Sitten und Tugend,

So hätte er sie gestellt auf Trauen

Zu den hundert durchleuchtigen Frauen.

(ポッカチオ若し若き折りに、彼女が徳操を知りてしあらば、いと尊き百人の婦人の中に、彼女を數へしは必定なり。)

されば彼は彼女が我が心に適へるものとして、千五百六十一年聖エギデイウスの日新妻として迎へ、偕老同穴の契を結び、今此の頌歌を創る。名はバルバラ・ハルシャリン、今はバルバラ・ゼックジンと呼ばれ、彼は此の人の傍て生涯を終り度いと思ふ。願くば神の恩恵によつて、夫婦愛が日毎にいや増し榮え行かんことを!

此の老詩人の若々しい意氣軒昂たる情熱には、誰か好意ある微笑を禁じうるものぞ。宣なる哉。此の年一年間の彼の作品は正に百八十九篇に及び、同年十二月二十九日作 *Suma samarum all meiner gedicht* (我が詩歌の總計) を以て、説話詩集第十五卷(百八十六篇收録)を完了してゐるのである。しかもここに特記すべきことは、それが當年(六十二年)ニュルンベルク市に猛威を振つてゐた黒死病流行のさ中に敢行されつつあつたことで、多くの市民は恐怖戰慄して、他地方に避難して行つたにも拘はらず、彼は何人の勸告をも入れず、敢然として市中に止まり、只管に己が天職の完遂に邁進してをたつたのである。その間の事情は全集第四卷(彼の死後千五百七十八年出版)の巻頭詩として、翌六十三年六月二十一日に詩作された *Der eingang des vierd-ten buchs od. Ein spruech vnd gesprech von den sterbläuffen zw Nürnberg im 1562 jar* (此の第四卷の巻頭詩又は、説話と對話、千五百六十二年のニュルンベルクに於ける死病の流行。説話詩集第十六卷には後者の表題で收録されてゐる。)の中に詳細に敘述されてゐる。それに據れば、急激な黒死病の流行は既に前年六十一年の終り頃から始まつてゐるのであつて、これぞ人間の罪惡、瀆神、貪食、姦淫、増長慢、擄取、高利、凡ゆる種類の詐欺に對する天罰である。

市政府は有毒瓦斯を清掃するために、凡ゆる手段を講じ、汚水汚物を遠く郊外に除去させ、刺路法によつて出た惡血をベグニツツ河やフインニバツバに捨てさせる。又醫師外科醫を任命して醫療を行はせ、藥種商には消毒藥を燻蒸させ、罹病者の外出を禁じ、恢復者の教會や浴場への出入を差止める。郊外に隔離病舎を設け、設備萬端を整へて病氣の徴候のあるものは何人でも早刻そこへ輿に乗せて運ばせる。そのためには擔人夫が指定され、その他のものは病舎に入ることを許されず、市中の病人には看護人が一定される。商工業者の集會は禁止。死者の衣類用具の賣買も同様、再鐘の點打は金曜日に限られる。しか

も死者は一日一日と増加し、日に百人以上斃れて行く。かくて十月十一月に至つて病勢は極點に達したが、纏て漸次下火になつて行つた。正にこの一年間の死者千二百五十六人を數へたといふ。

處て此の死病流行の初期に、親しい友人が詩人を訪れて、難を市外に避けるつもりはないかと問ふ——とこれから以上の如き敘事に次いで、此の詩は詩人 (Der Fichter) と友人 (Der Freund) との對話となる。

詩人は此の疫病が人間の罪惡を罰する神意であつて見れば、何處の國へ逃れても、神の手からは逃れることが出來ないと言つて、絶對に避難することを肯じない。友人が「だが此の市丈が澤山の死者を出して、他の町では左程ではないではないか？」と言へば、「此の市の犯した罪業が特に大きいからだ」と答へ、「然し罪のない子供でも死んで行く」と言へば、「子供達が召されるのは、神が彼等を此の世の苦患から救はれるためだ」と説き、「善人でも罪人でも罹病した者は一樣に死亡する」と言へば、「汝等の髪の毛は數へられてあり、汝等の父の意志にあらざれば、汝等の頭より髪の毛一條も落ちず」と言ふ基督の言葉で答へる。かくして友人は悲惨な病人の様子や死病の迅速無情なことや、葬式の見糞しさや、多くの人が毎日避難して行くことを舉げて、詩人にも逃避するやうにと説得しようとするけれども、詩人は堅く天命を信じ、現世的享樂や虚榮を追ふために、又は家業を捨てて逃避難して、生命を永へるこの害毒を擧げて譲らず、「よしや今直に死んだとしても、それは儂が凡ゆるものを擧げて悉くお任せしてある神様の御名によつて起ることだ」(Und ob ich denn gleich stirb demaßen, / So geschah es in dem gottes namen, / Dem ich es beflih allessammen) と深い信念を示す。彼には翻譯し創作する慰安があり、宗界俗界の素材を探す樂しみがある。最後に友人から、全集第三卷で老耄の故に筆を斷つと約束したてはないかと詰問されても、彼は一年

以上休息した以上、今はその約束を破つても恥しいとは思はない。上司からは出版の許可も得てあり、この災厄時に、詩作で人心を慰め勵まし、善導することは、町を逃れて偷安の日を過すよりもよいことではないか！と説く。かくて友人は詩人の愚を笑つて、明日は町を去ると、暇乞ひをすれば、詩人は何處迄も市中に踏み止まり、既に其の間各種の詩四百首程も出來てゐるから、神の加護を得て、第四卷、第五卷を世に問ふつもりであると望む。

今や老詩人の心境は誠に羨むべき境地に達した。彼は清らかな諦觀と高き信仰とにより一切を擧げて神に歸依し、言はば人事を盡して天命を俟つの悟りに到達したのである。そして同年(六十三年)七月十四日作 Der nam Johann Sachso, darin anzalgt die zall seiner gedicht (ヨハン・ザクソン——即ち作者の羅典名——なる名前を詠める歌。この中に彼の作歌の數が示さる。)は

Ich hab gleich 6000 gedicht

On dritthalb hundert zw-gerecht

Heiliger schrift, cristlicher leer,

Auch weltlich sprüech zu zuecht und eer,

Nemlich manch fröliche comedi,

Nach-spiel und manch trawrig tragedi,

Schöne gsprech und lobsprüech der thuegent,

Alli laster gschent zu ler der juegent,

Clar vil histori und parabel,

Hernach lecherlich schwenck und fabel ——

Solch als spruchweis und maistergsanck

O got, dir sey lob, eer und danck!

(右直譯、余は正に六千に欠くること二百五十篇の詩を物せるが、中でも聖書、基督教の教、又は世話物語りは賤げと譽れとのため、即

ち幾多の樂しき喜劇、謝肉祭劇やら幾多の悲しき悲劇、徳行の美しき對話や頌歌、凡ゆる罪惡を懲らして青少年の教訓とするもの、明らかに多くの史事實譚人情寓話、更らに可笑しき笑話や動物寓話——かくの如きを説話詩とし又は工匠歌としたり。おお神よ、賞め讃へあかめ敬はれ、感謝されてあれ。因に各詩句の最初の文守を綴り合せるとヨハン・ザクソンになる。)

とその作品數實に五千七百五十篇たりと、誇らかに戯れ歌ひ、同年十一月十九日作 *Der beschluss in das vierdt buch meiner gedicht* (我が詩集第四卷に寄する結辭。尙此の第四卷は彼の死後千五百七十八年に出版されてゐる。又此の詩は *Der beschluss in dis 16 puech der spruech darin angecaigt werden die summa al meiner gedicht auf diese zeit* の表題を附して、説話詩集第十六卷の卷末詩ともなつてゐる。) には、三千の箴言、一千五首の詩歌を作つたソロモンの智慧(列王紀略上四の三二)に對比して、當代の詩人は、無學の者乍ら(cals ein ungelehrter mann) 同様な智慧の泉から一滴一滴と汲み取つて、正に總計五千八百十二篇、(因に此の數は説話詩集第十六卷の卷末詩の方では五千八百七篇となつてゐるけれども、先の七月十四日——此の時迄五千七百五十篇出來てゐる——から此の十一月十九日迄の作品數が六十二篇あるから、五千八百十二篇とある方が正し。) を歌ひ擧げたと、誠に意氣揚々たるものがある。それも亦尤のことであつた。六十三年度一年間に作詩された作品數は前年度の記録(百八十九篇)を遙かに抜いて、二百十八篇、内古代作家の作品や年代記に取材した史實譚詩五十八、聖書によるもの七十、寓話、笑話五十七、各種の詩、特に Plinius (Caius, 23 n. C. — 79 beim Ausbruch des Vesuvs, Verfasser der Naturalis historia in 37 Büchern) から採つた博物詩等三十三に達してゐるのだから。因にこゝで博物詩と言ふのは *Des angehörns art und natur* (1563, 10, 4. 一角獸の性質), *Natur des*

*pantelhiers* (1563, 10, 4. 豹の本性), *Natur und art des thiers hystrix* (1563, 10, 20. 豪猪の性質) 等のことを指すのであつて、此等の詩は何れもそれぞれの動物の形状や性質や狩獵法を敘述した後、結辭(*Der beschluss*) に於て、例へば一角獸は勇敢なる人物、豹は暴君、豪猪は賢しい人物に相似してゐることを説明し、そのよい性質や悪い性質に就いて教訓を垂れてゐるものである。

然し乍ら此の様にその勞作は續けられてゐたとは言へ、既に深き悟道に這入つた老詩人にとつては、現世的な人生の種々相によつて心を動されることもなくなつたのであらうか? 此の兩年間工匠歌及び戯曲の創作は殆ど全く見られないのである。勿論折りこゝは *Meisterstube* と言はれた工匠歌人の集會所 *Moritzkapelle* の低い附屬建物の狭い小室に現れて、弟子や若い子弟の練習振りを穩かな平和な微笑を湛へて眺めたり、よい忠言を與へたりしてゐたと想像される。かくて彼の心は次第に神への奉仕、信仰の世界へ牽かれて行くのであつた。その後の四年間(自六十四年至六十七年)就中六十五年及六十六年と言ふものは、全く聖書の詩篇百五十篇、何よりもダビデの歌の翻譯詩、ソロモンの箴言全部、Jesus Strach 全卷の翻譯案、解釋の詩作に費されてゐる。しかもその解釋には *Pomeranus* (獨逸名 *Johann Bugenhagen*, auch *Dr. Pommer* genannt, 1485—1558) や *Brenz* (*Johann*, 1499—1570) の説が參考にされてはゐるけれども、その詩的構成は全く彼獨自のものである。彼の解釋は詳細克明を極め、各篇の最初に *Summa* なる總説を掲げ、最後に長い倫理的教訓を附加してゐる。かくてその驚くべき堅忍不拔の精勵によつて、六十五年九月十一日には説話詩集第十七卷(百十六篇收録)が完了。八月二十九日には第十八卷に着手、七十一年十一月十八日 *Das geschencket glas* (贈呈酒杯 *Niclas Goswein* の *Hans Pfancing* なる人に贈つた酒盃の獻詩を代作せるもの) を以て、それが完結したのである。だから此等兩卷は大部分宗教

歌、教會歌から成り立つてゐるのであるが、中には猶若干異色あるものが見られる。

今やハンス・ザックスの名聲は彼の全集三巻が出版されて、彼の端正なる性行、彼の不斷の努力が一般に知られるやうになつて以來、その生都ニュルンベルク市内のみならず、國の内外に喧傳され、彼が屢々嗟嘆した敵手の嫉妬も憎悪も亦影を潜め、學者門閥からも知己を得るやうになつてゐた。彼の詩は各方面から要求され、或は肖像、酒盃、寶石等の讚、或は誕生、結婚の祝賀歌、或は知己友人のための各種記念詩や弔歌等を依頼され又は懇願されるのであつた。殊に各都市から依頼されたか、又は諸都市の繪圖面の説明のために作詩されたと思はれるやうな都市頌歌が非常に多く、説話詩集第十七卷所載の六十五年九月十一日作 Ein Iobspruech der fürstlichen stat München を始めとして、第十八卷には六十七年十二月一日作 Ain Iobspruech der hauptstat Wien in Osterreich、六十八年九月廿九日作 Ain Iobspruech der stat Franckfurt 等の作があり、その他 Nördlingen in Schwaben (1568, 11, 20.), Regensburg (1569, 2, 19.), Lineburg (1569, 3, 17.), Lübeck (1569, 3, 21.), Hamburg (1569, 4, 30.) 等の地理や歴史を歌つた都市頌歌が見られる。更らに異色あるものとしては、恐く彼を取巻く若い人達のために作つたであらうと思はれる戀歌 (puelied) Ain schöns lied einer erlichen junkerfrawen mit irem namen in 5 puchstaben. (1568, 1, 17. 五文字の名を詠み込める淑女の佳詩。一節八行、五節から成り、各節の最初の文字を綴り合せる) Maria と言ふ、恐く此の詩の對象である愛人の名が出来る。), Ain schöns puellied einer erlichen frawen mit ain namen in den anfangen (1568, 4, 14. 冒頭に名前を詠み込める或る良妻の佳き戀歌。一節六行、九節から成り、各節の最初の文字を綴り合せる) Magdalena となる。)) 等等は老齡七十四歳の詩人とは思はれない様な純情無垢な戀愛感情を盛つてをり、優れた抒情詩をなしてゐる。

最後に此の詩人の老いたりと雖もなほ永遠に若く、滾々として盡きざる詩泉の逞しさを告げてゐるものに、六十四年作の Kriegesunter aller pefelchslewt zw ahnem grossen feltzug, 452 verse. (出征軍指揮官軍職總まくり) 及び六十五年十月卅日に出来上つた Eigentliche Beschreibung aller stände, 912 verse. (世態百相) がある。これは何れも當時ニュルンベルク市で著名な畫家 Jost Amman の木版畫集に附された一種の畫讀であるが、前者はフランクフルトの書肆 Sigmund Feyerabend から出版された Fronsperger (Leonhard, Kriegsschriftsteller, um 1520-1575) の Kriegsbuch に挿入されたアムマンの木版挿繪四十八枚を、後六十四年に一本に纏め、その各々に附する解説詩を、ハンス・ザックスに求めて來たので、作られたものである。一木版畫ごとに十行の韻文一首(最後のもの文十二行)を賦し、各種の軍人軍屬の習慣、義務、權利等を教へてゐるのであるが、老詩人が此の種の智識迄も容易に自家藥籠中のものとし、輕快な筆で流暢に歌ひ流してゐる様は驚嘆に値するものがある。後者は之も亦シークムント・フナイエルアーベント出版のアムマンの木版畫集 Iygentliche Beschreibung Aller Stände auff Erden (世態百相) の説明詩であるが、上は皇帝、羅馬王、王侯、法王、司教から始めて醫師、藥劑師、外科醫、獵師、船主、歌手、笛手、商人、各種手工業者、下は大食漢、吝嗇漢、馬鹿役等に至る迄、社會百般の階級人、職業人百十四種を描いた風俗畫に就て、それらの人物の特質を巧に把握した、各八行一首の適切輕妙な詩節から成る中中の大作である。ここでは詩人の六十年に渉る世態人情の忠實綿密な觀察が美事に結實してゐる。

扱て以上長短の詩はその大部分が説話詩集第十八卷の後半を飾るもので、此の詩集を完結しうる見通しもついて來た。さればかうして神から授けられたと信ずる天職を残りなく果した詩人は、今こそその天職に最後の訣別を告げる時が來たと思つたのであらう。千五百六十六

年五月一日のよき日、彼の七十二歳の折、一篇の長詩 *Summa anni meiner Gedicht. 254 Verse.* (我が詩歌の總計。此の詩は千五百七十六年彼の死後間もなく *Das Valere*——訣別の辭——なる表題で、十二枚の單行本として公刊され、それには製作年度が六十七年になつてゐる。) を賦して、その長い生涯の總決算をすのであつた。そこで彼は今一度彼の遙けき人生行路を、誕生、學歴、遊歴、工匠歌の修業、結婚、夫人の死、再婚と簡潔に懐古し、次いで作品の總數を委しく數へ擧げてゐる。即ち今年六十六年五月一日、過去五十二年間(千五百十四年以來)に於けるわが作品の總決算をして見れば、工匠歌集十六卷、説話詩集十七卷と第十八卷目の着手、すべて是自筆の寫本で題材は新舊の聖書を始め、多くの歴史書哲學書から取られ、神を讚へ、惡を懲らし、善を勤めるものと、入念に作詩の意義を述べ、工匠歌の數四千二百七十五曲、二百七十五曲調、内自作のもの十三曲調、又全十八卷の説話詩集に收められてゐる悲しい悲劇、嬉しい喜劇、楽しい狂言シニヒル二百八篇、それらの大部分はニュルンベルク市或は其の他遠近の都市で上演されてをり、更らに各種各様な對話詩、説話詩、博物詩、寓話詩、笑話詩洒落、滑稽等凡そ約千七百篇、又既刊の全集本三卷、その中には七百八十八篇を收め、今又第四卷目四百五十篇の詩歌の上梓を準備中、その他散文の對話七篇、宗教歌流行歌軍歌戀歌等七十三首、之を要するに全體の總數正に六千七百七十篇に達すると言ふ。それら總ては神の言葉を含め、老若男女のため、社會矯風の役にたつもの。されば此の詩を以て詩作に訣別を告げようとする。時に七十一歳と六ヶ月に足らざること五日、老齡身に重く、心中苦澁甚し。無學にして羅典語も希臘語も知らざる此の身に、有り難くも、詩才を授けられし神よ。讚へられてあれ! 云云。

かくその一生とその豊富な成果を廻想した時、老詩人の胸中又自ら慰められるものがあつたであらう。その詩句は訣別の辭としては嘗つ

て見ない程、明快流暢な調子を帯びてをり、大悟せるものの虚心と工まざる品位に輝いてゐる。尙此の有名な詩に就ては後日譚がある。ハンス・ザックス自身六十八年八月二十八日作の *Ein Gespräch, darin der dichter dem gefuersten abt zu Allerspach sein valere und lezten spruch dedicret* (對話、詩人、アルラースパッハの僧院長貌下に自作、訣別の辭と最後の説話詩を呈上す) によつて語る處によれば、此の詩が完了した日、當時ニュルンベルク市に於てデューラーにも劣らぬ名聲を博してゐた畫家 (*Der weit peruenbt und kunstreich / Maler, der in Nürnberg, der stat, / Den rumb, wie Albrecht Dürer hat, / Andreas Heineisen* が詩人を訪れて來た。彼はその頃アルラース・ザックスと云ふニュルンベルクの詩人は數年前に死んだと聞いたが、本當のことかと訊ねた。そこで畫家はそれを否定はしたが、その時何か證據となるものを貌下にお目にかけて度いものだと思つた。それで今わざ／＼詩人を訪れて來たのである。だから何かザックスが生きてゐることを證據立てる書き物はないかと尋ねた。處が丁度その日出來上つてゐたのが、此の詩であつたから、詩人は早速之を僧院長に獻上することにした(又一本には、畫家に贈呈して、僧院長に讀んで貰ふことにした)と言ふのである。

之に對して畫家は感謝の詩を作つて詩人に獻げたのみならず、その後詩人の死期の迫つた頃(千五百七十六年元旦の夜)、詩人の肖像を描いて詩人に贈つた。すると更らにそれを見た *Jost Amman* は、畫家の懇請によつて蝕刻し、印刷に附して廣く公刊した。と言ふのも、*Heineisen* 自身 *Danck Sagung des Malers für das Valere* (訣別の辭に對する畫家の謝辭) の中で言つてゐるやうに



Weil ich aber war ingedenck,

Das vil Leut auch in nah vnd fern

Verlangt zu sehen diesen Herrn

Vnd nit zu jm können kommen,

Hab ich zu ehren diesem frommen

Mein willig dienst auch dazu than

Vnd jm im Truck lassen außgan,

Weil er selbst sagt an sein Siechbet,

Das jm das Bild gleich sehen thet.

(余は然し思へらく、遠近の多くの人人も此の人に逢ひ度く思へども、訪れ來ることは難からんと。されば余は此のよき人に敬意を表し、一臂の力を又捧げて、之を印刷公刊せしめたり。そは病床に臥したる彼自らが、此の繪の彼に似たりと言ひしが故なり。)

と言ふ事情があつたからである。事實此のハンス・ザックス八十一歳二月の時の肖像畫は今日残つてゐる彼の畫像の中で最も傑出したもの一つである。以上「訣別の辭」に關する挿話は、ハンス・ザックスがその晩年如何に貴賤老若遠近の人達の間に有名であり、愛好されてゐたかを證するものである。

孰れにしてもハンス・ザックスの詩的使命は此の「訣別の辭」を以て、文字通り終つたものと見做しても大過ないものと思はれる。其の後十年間に出來たものは、大部分所謂 (Gedgenheitsdichtung (際物詩)) で、多くは他人の懇望によつて創られた小品のみである。只一篇最後に奇怪な内容を持つた作品が説話詩集第十八卷に載せられてゐる。それは傳ふる處甚だ尠い此の詩人の閱歴に關して、かの「訣別の辭」とともに、大切な資料を與へるものであるけれども、その敘述が甚だ抽象的で何等具體的事實に言及してゐないため。今日尙眞偽の程を疑はれてゐる問題の詩である。即ち曩に第一章で引用したことがある、六

十八年二月二十六日に作詩された Die werck gottes sind alle gut, wer sie im geist erkennen thut. (心中深く思ひを致すものには、神の御業はすべて良し。) がそれであるが、ここでも詩人はその永い過去を回顧して、少年の頃は両親の嚴格な躰の下に生ひ立ち、學校では文法、修辭、論理、音楽、數學天文云云を學び、やがて文學に志して詩作を始め、多くの史實譚や悲劇や喜劇、扱ては神の言葉等を傳へて、全基督教徒のためを計つて來たと彼の作家としての立場を歌つてゐる。然るに此の頃一家繁榮して、富、名聲、好評、幸福、よき子供達、良妻を恵まれ、美貌と力と健康を授かり、世人からは賞めはやされて、彼は悉く思ひ上るやうになつて來た。彼は神を忘れ、神の言葉を思はず、驕慢不遜、深い罪劫の生活に陥つて尙それと氣がつかない。だが終に神は彼の髪の毛をとつて御元(みもと)にひき寄せ給ふ。と言ふ意味は彼を激しい墜落によつて谷底へ突き落し給ふ。かくて良心の苛責に漸く身も世もあらぬ思ひ、日夜懊惱して過すうちに、神に祈願するより他に道のないことを悟り、懺悔改悛して、只管に神の恩寵を乞ひ願ふ。かうして彼は始めて自分の空しさ、自分の罪深いことを覺り、總ては神の宏大無邊の慈悲によつてゐることを知る。彼が慢心に驕つたのも、地獄の責苦に逢つたのも、總て神の慈悲であり、彼をして眞に謙虚な善良な人間に立ち歸らしめようとする神の意志であつたのである。罪の人は日に七度罪を犯しても、神の御手は絶えず彼の上に翳されてゐるのである。我等は誠に益無き奴(やつぱり)、憐れな罪人(つみびと)であれば、神はその慈悲心によつて天國より基督を遣はされ、十字架にかけて、我等の罪を贖(あがな)はしめられた。基督こそは我等の代辯人、我等の仲介者であるから、基督に心から祈願を籠める者は、永遠に賞め讃へられてあれ! 處でハンス・ザックスが果して中年にして自己の幸運に狎れ、己が肉と血は、倨傲不遜に陥り、非道の慢心に漂うた」(Und hei also mein Fleisch und Blut / In ein stolz und preching hochmut; / In

solch gottloser hoffart schwebet, ) ことがあるかどうか、甚だ疑問である。恐くそれは詩人の詩的假想であつて、詩の迫眞力を強めるため、眞偽取り交ぜて敘述したものではないかと思はれる。詩の全體の重點は結極神の言葉と基督とに對する信仰の勤めにあるのであり、その趣旨を極力強調してゐる處から見て、世によくある事實を、自分の身の上に假托して教訓の資料としたものであらう。だから又彼が學校で學んだとして擧げてゐる學科目にも詩的誇張があるものと思はれる。と言ふのも説話集第十八卷に載つてゐる同じ詩の中には只學校に於ける教師方の教へによつて」(durch die Lehr / der praeciptori auf der schul) とあるのが、全集第四卷の方では「大學に於ける云云」(auftr hohen schul) とあるからである。勿論詩人が大學で學んだと云ふ事實はないのであるから、此の詩句は明かに詩的誇張である。

かくする中に千五百七十年、彼の全集第二卷の二版と第一卷の三版(二版は六十年に出でゐる)とが出たが、彼が準備をすすめてゐた第四卷と第五卷が出版される日を見る丈の餘命は、遂に彼に與へられておなかつた。勿論此の頃には工匠歌や戯曲の創作は全く跡を斷ち、五十六年十月五日に始められた工匠歌集第十六卷は既に六十年頃に打ち切られたものと見做されてもよく、其後六十七年迄の間に只五篇を増してゐるに過ぎない。されば此の十六卷は分量の尠いために、先に一寸述べた如く、同様に不作であつた説話詩集第十四卷と頁數を異にして、合本されてゐるのである。説話詩集第十八卷の彼の最後の書込みは、千五百七十二年十一月十八日の「贈呈酒盃」であつたが、最後から二番目のものは十月卅日作次の如き、Ein zuecht-spruch meiner Lieben hausfrawen Barbara Sechsin (我が愛妻バルバラ・ゼックジンの座右訓) 五行である。

Mensch, hab gedueldt in dem elent,  
Wen dir göt her auff erden sent

Durch sein vetterlich, guetig hent,  
Due bues und dich von sünden went,  
So nemst ein cristlich, selig ent.

(君よ、不幸を忍び給へ。神は君に此の世にて慈しみと情けの手を以て贖罪を授け、君を罪より遠ざけ給へば、君は信者の幸多き最後を受けん。)

彼が最後の筆を愛妻のために保存して、若き夫人を劬り警しめたと云ふことは、誠に感銘の深い挿話である。

尙翌七十三年度の作として説話詩集第十二卷の餘白に書き込まれてゐるもの三篇があるが、千五百七十三年五月十五日を以て彼の作詩は全く跡を絶ち、爾後二年有半、彼はその強靱な體力の餘燼の盡きるのを靜かに待つばかりであつた。彼の弟子 Adam Puschmann (1532 in Görlitz als der Sohn eines Backers geb. — 1600 in Breslau gest.) の Elogium reverendi viri Johannis Sachsen Norinbergensis (1576. 6. 我が敬愛する人ニュルンベルクスのハンス・ザックス頌徳詩) の傳へる處によれば、晩年の詩人は聽覺も才氣も力衰へ、人が彼を訪問しても、幼兒の様に行儀よく机に向つて坐つてをり、人が彼に物を尋ねても、無言のまま力無い頭で只頷くのみ、誰が彼の前に立つても、何時も書物、特に聖書を眺めてゐたと言ふ。

千五百七十六年正月十七日ニュルンベルク市は大豪雨で、翌十八日には中央市場を舟で渡り、フィシユマルクトを馬で越さなければならぬ程の大洪水になつた。そしてその凄しい雷鳴豪雨の衝撃には老いたる靴匠の心臓も今は抗し難かつたのであらう。越えて一月十九日の夜、大獨逸の老大工匠歌人ハンス・ザックスは八十二歳の天壽を全うして、靜かに老衰の眠りに就いたが、彼が屢々取扱つた夢物語とは違つて、此の眠りからは永遠に醒める時がなかつたのである。

因に彼の全集第四卷は彼の死後千五百七十八年に、第五卷は七十九年に出版された。

後  
篇

ハ  
ン  
ス  
・  
ザ  
ッ  
ク  
ス  
の  
演  
劇

## 第七章 初期の謝肉祭劇

一五一七年—一五四〇年

毎年早春の頃、謝肉四旬齋が近づいて来ると、ニュルンベルグの市民は貴賤老若を問はず、否近郊の郷土農民迄も擧げて異常な興奮状態に捲き込まれて行くのであつた。人々は、既に久しい傳統によつて全く民間の年中行事化してゐた謝肉祭を、今年も亦思ふ存分享受するたために、その富力とその藝能とに任せ、凡ゆる趣向を凝らし、凡ゆる贅澤を盡して、最も放恣に最も快適に過さうとする。巷の大路では意匠を競うた行列、手練を誇る馬術 (Reitpiel) や武技 (例へば Konn-leinsechen, 王冠をつけた長桿を以て戦ふ試合) の競演、異様な衣裳をつけた假装が到る處に見られ、門閥富豪の邸宅では長夜の宴が張られ、有名無名の旅館料亭では町人百姓が今宵一夜を限りと痛飲飽食亂舞狂亂を演じてゐる。寔にそれは研を競ひ華を衒ひ、一世の豪奢を誇る一大市民的祝祭であつたとともに、當時十六世紀の中歐に於ける商業の世界的中心と自他ともに許したニュルンベルグ市都人士の豪華を極めた市民的現世的行樂の爛熟頹廢した姿とも言ふべきものであつた。されば一生啓蒙警世のために椽大の筆を揮つて倦むことを知らなかつたハンス・ザックスは、千五百四十年その市民的行事の痴態を憂慮して、次の如くに述べてゐるのである。

謝肉祭とは四斗樽の如き腹を持ち、全身に鈴を垂らし、頑健な齒と絶大な咽喉を有し、尻尾は薄く擦れ切れ刈り取られ、目も耳も無い怪物である。彼の腹は獸肉鳥肉魚肉野菜類は言ふまでもなく、香料鹽胡椒甘味酸味麵類を始めとして、酢漬け詰め物煮たもの焼いたもの油で炒めたもの何でも貪り喰ひ、フランケン酒ムスカテラー酒ライン酒マルヴジール酒その他異國の凡ゆる種類のビールの大樽を大盃小盃で

貪り呑む。彼の鈴は亂痴氣騒ぎ馬鹿騒ぎを意味するもので、カルタ遊び賽ころ遊び、手踊り輪飛び、凡ゆるる種類の仕掛煙花、さては桿棒試合騎馬競争を始めとして劍の舞輪踊り謝肉祭劇等の催物、更らに假裝假面の扮飾に至つては婦女子に化けるものあり、坊主になるもの黒坊になるもの、ジプシー、百姓馬鹿役を真似るものあり、正に百鬼夜行千容萬態、異形の續出である。その強健な齒は多くの財布を喰ひ破り、多くの金囊を嚙り取り、多くの遺産を四散させ、多くの盗金を咀嚼し、カルタを裂き賽を摧き、仕事日を咬み、惡例を消化し良風を損傷し名望を蠶食する。又その宏大な咽喉は金錢衣服寢床錫器家具家邸田畑何物でも口の中へ流れ込むものは悉く呑み盡す。更らに痩せ細つた尻尾は謝肉祭のあとに引き續いてくる多くの不幸の謂である。即ち借財貧乏病氣犯罪恥辱、借金支拂質屋通ひ、過剰の支出を補ふための極度の節約、粗食過勞、さては牛飲馬食の結果としての頭痛惡寒中風水腫、風紀の紊亂凌辱姦通、いかさま賭博喧嘩に口論、悉く之謝肉祭の齎す災害である。最後に彼が盲目で聾者であると言ふのは、彼が何人の見さかひもなく、何人をも憚らず、僧俗貴賤の區別なく愚弄するからであり、又彼自身に對する憤慨處罰罵詈謗には聊かも耳を藉さないからである。彼を防止するには只暴力を以てするより他に手段はない。彼は二三ヶ月の間自分の道をまつしぐらに驀進するけれども、やがて多くの馬鹿者共に伴はれて町から追ひ拂はれる。然しかの馬鹿者共は十ヶ月を経た後やがて彼が再び歸つて來て、彼等を又もや喜ばすのを只管に待つてゐるのである。

されば以上の様に謝肉祭を形容したハンス・ザックスは最後に戒め

て言ふのである。

謝肉祭が再び立ち戻つて來ても、各自は彼をして餘りに食せしめ、衣服酒宴遊興のためや、その他同様な莫大な失費のために、その後一年中飢餓の破れ布を縫ひ繕はなければならなくなるやうなことをしてはならぬ。(Vgl. Ein Gespräch mit der Falsnacht von ihrer ayenschaft, 1540, 2, 18, Neudruck, Sämtliche Fabeln und Schwänke von Hans Sachs, hg. von Edmund Goetze, B. I. Nr. 58.)

此の奇想天外な謝肉祭の擬人化には、勿論詩人の詩的空想による誇張も幾分加へられてはゐるであらうが、併し當時の都人士が如何に豪華な奢侈逸樂を追ひ、贅澤な酒食遊藝に耽つてゐたかを示して餘りあるものがある。従つてその影響する處、風紀を紊亂し、家産を蕩盡する者を續出せしめたとしても、又他面之が文學美術に對する需用を増加し、その進歩發展を助長したことも争はれない事實である。蓋し物的財貨の榮える處に文化の花は咲き出づるからである。かくしてニールンベルクの演劇、何より第一に謝肉祭劇、特にハンス・ザックスの謝肉祭劇は、獨逸文學史中全く特異にして獨自な現象となつたのである。

抑々謝肉祭劇なるものは、既に小著中世獨乙演劇史に於て(同書四五頁以下、四七五頁以下、又は五一五頁以下参照)詳説した通り、中世末期以來宗教劇に對する民間の大衆的世話物劇として傳承して來たものであつて、その淵源する處は遠く古代ゲルマンの異教時代の年中行事や祝祭の舞踊演技に端を發し、それが中世基督教の祭禮に於ける儀式風習、又は宗教劇の一部と合體して、民衆的演劇の初歩を形造つてゐたものが、伊太利に於ける謝肉祭の演藝に影響されて、奥國の南部又はチロル地方から、やがて瑞西、バイエルン地方にかけて謝肉祭用の餘興として次第に劇形式を整備され、遂に十五世紀の中葉頃から南獨の商都ニールンベルクの商工組合に引繼がれて、今や最も隆盛を極

めるに至つたのである。だからその内容は民衆の興味を呼ぶが如き聖者、英雄、民間の傳説や時事問題、扱ては一般民衆の人情風俗習慣の戯畫であり、その表現は一體に輕妙にして洒脫、陽氣にして通俗、しかも人情の機微を穿つとともに、或る意味に於て愚劣にして滑稽であるか、醜怪にして奇矯、淫靡にして皮肉であつた。

併し乍ら各都市にはそれぞれの性格があり、地方的特色があるから、ニールンベルク市に於ける謝肉祭劇の發展史的過程にもこの商工業的都市に相應しい獨自の傾向が見られることは、之も既に小著中獨演史(同書五一五頁以下参照)で検討した通りである。即ちハンス・ローゼンブリュート及びハンス・フォルツの作品によつて代表される同地の謝肉祭劇はその始め武技舞踊の如き餘興的演技から一種の顔見世形式(Knechtform, 中獨演史五三〇頁参照)となり、次いで簡單な對話體から裁判劇的形式を完成し、更らに進んで求愛求婚の如き人情芝居や、傳説、物語、童話、宗教劇等から取材した茶番狂言式のものに及び、次第に近代的な喜劇の領域に接近しようとしてゐた。只その一般的傾向として、一面に於て表現は驚くべき程巧妙輕快であり、語彙は極めて豊富にして警拔であるけれども、それ又他面に於てその内容が未だ何れも卑俗猥雜で、當時の市民的民衆の卒直にして放逸、素朴にして大らかな祝祭的景圍氣を如實に反映してゐる。

かくて今やローゼンブリュートによつて創成され、フォルツによつて守成されたニールンベルク謝肉祭劇は、ハンス・ザックスによつて大成される時が來たのであるが、以上の経緯を見る時、此の工匠歌人の手に委ねられた謝肉祭劇の將來には、如何なる發展史的意義が秘められてゐたか、ほぼ推定することが出来るであらう。それは小にしてはハンス・ザックス個人の作家的個性の中に潜む文學的使命の達成であり、大にしては獨逸文化の潮流を代表する演劇史の上に浮ぶ時代的要求の解決である。

元來ハンス・ザックスが未だ若冠十九歳の折り、Wels に於て眞に價値あり名譽ある娛樂を求め、遂に詩作を生涯の天職とする決意を固めて以來、彼はその創作の基調を終始國民的教養の啓蒙と市民的道德の高揚とに置いて來た。しかも之がザックス文學の最も重要な目標であつたことは、彼自身屢々その回想詩や詩集の卷頭詩又はかの有名な「訣別の辭」の中で「それら總ては神を讃へ、惡を懲し善を勧めるものである」と誇らかに歌つてゐることによつても知られる。されば彼の謝肉祭劇も亦當然興味ある物語による健全な娛樂を、市民に與へることを創作の動機とし、穩健妥當な倫理觀によつて、眞面目な教訓を大衆に説くことを中心課題としなければならなかつた。然るに謝肉祭そのものの陽氣な祝祭的氣分、特に先に見た通りニュルンベルク市のその如き狂熱的享樂的雰圍氣は、教養に必要な智識や勸善懲惡を説くための壇場として、凡そ縁遠いものであるとともに、その際の餘興の一つである謝肉祭劇そのものの内容も亦これに即應して既に傳統的に至極暢達洒脫の調子を帶び、時には低俗愚昧、時には卑猥尾籠の言辭を弄することを主眼としなければならぬと言ふ有様であつたから、ハンス・ザックスの庶幾するが如き世道人心に對する啓蒙文學とは全く相容れない性質のものであつた。だから如何にしてその賑やかな祝祭的享樂に更に一段と興を添へるとともに、とかく道學者流の固苦しい無味乾燥な修身講話になり勝ちな信仰や德行の教説を、之に盛るべきか？之を要するに教訓的滑稽文學を純文藝の領域にまで昂めることの至難さが、今やハンス・ザックスの前に横はつてゐるのであり、その訓育と諧謔の二面が、それぞれ作者と作品の本質に基く根本的要求を以て對峙してゐる文に、問題の解決は一層困難を極めてゐるのである。

しかも問題はそれのみではない。ハンス・ザックスの斯の如き啓蒙運動は又時代精神の要求する處のものであつたからこそ、そこに彼の

文學が不可欠にして十分なる存在理由を持つのであつて、彼は正しく世紀の要求に答へるべき一大使命を課せられた運命の詩人であり、従つて十六世紀獨逸文化の擔當者であり、代辯者であり、推進力でもあつたと言つて過言ではないのである。と言ふのも既に前編初頭に於て述べた如く、時代は人文主義と宗教改革の協同作業によつて、獨逸古典派の遠い礎石となるべき市民文化の確立を目指してゐたのであり、ハンス・ザックスの生涯の文學活動も亦當然此の線に沿うて動いて行くべきものであつたからである。されば彼も亦多くの時代的先覺者と同じく、當時發見強調された純ゲルマン的人間性を指導原理として、市民層の物心兩面の生活、即ち宗教道德智識風俗習慣等の文化面を啓蒙善導しようと努力したのであり、そしてこの彼の啓蒙精神がやがてその最も有力な手段として演劇を取り上げるに至つたことも亦、當時の劇文學を主流とする一般文壇の大勢と相應するものであつた。かくして彼はその後半生に於て異常の熱意を以て劇創作とその演出に従事したのであつたが、それ文に彼の謝肉祭劇が獨逸演劇史上に於て有する意義には又輕々に看過し得ないものがあるのである。何となれば彼の謝肉祭劇は正に從來の如き一時的座興として單なる茶番狂言式のものに過なかつたニュルンベルク謝肉祭劇を漸次一幕物の輕喜劇に接近せしめ、遂には全く近代的喜劇にも比すべきものに迄發展させ、かくて中世劇と近代劇とを架橋する重要な役割を果す文の資格を供へるに至つてゐるからである。之を要するに十五世紀から十六世紀にかけて約百年の間榮えたニュルンベルク謝肉祭劇は、ハンス・ザックスによつて始めて單なる座興的茶番狂言式形態から一種の啓蒙的喜劇へと發展させられ、よつて以て時代の要請に答へるとともに、獨逸演劇を近代的に建設するための重要な土臺の一つを築いたのである。

處てハンス・ザックスの謝肉祭劇は彼の劇創作二百十篇(彼自身の作品目録に依る)の中、八十五篇の多きに達し、その創作年代は、彼が遊

歴の旅から歸つた翌年千五百十七年に既に始つて、晩年千五百六十年六十六歳の年に迄及んでゐる。その多くは即興的に一氣呵成に書かれ、大部分は二百行乃至四百行餘りの短篇一幕物である。従つてそれらの作品はその文學的價值から見て、個々の作品間に甚だしい逕庭があり、一見玉石混淆の感があるけれども、しかもその約四分の三(八十五篇中六十六篇)は作者の圓熟期(一五五〇年―一六〇年)になつたものである丈に、劇作法上及び演出法上の各種の要素に於て甚だ見るべきものがあり、年代とともに進歩發展して行つてゐる跡をつぶさに辿ることが出来る。加ふるに作者自身が繁榮期に於ける商工業都市の自由民として、寧ろ明朗にして樂天的な性格を多分に恵まれてをり、此の種諸謔文學は作者の最も得意とするものであつたから、此の詩人の六千有餘に及ぶ作品中笑話詩(Schwänke)と謝肉祭劇には最も多く傑作が存在し、ゲーテによつて既に認められた如く、今日に於てもその文學的生命を失はないものが多々あるのである。しかも時代は正に演劇全盛を謳歌する好時期に當つてゐた。ハンス・ザックスの謝肉祭劇が獨逸文化史上に有する價值も亦僅少なならざるものがあるとなしなくてはならない。

勿論今日の進歩した演劇理論及びその實際と比較すれば、彼の作品は餘りにも安易であり、幼稚であらう。その中には物語、否一貫した筋すらもない單なる對話の羅列に過ないものも多く、まゝ、對話體で書かれた笑話詩と區別し難いものすらある。只笑話詩はその發端の部分が必ず敘事的説明の地の詩句で始まり、やがてそこに現れて來る人物の劇的な對話に移つて行くと云ふ形式を取つてゐるのに對して、作者が謝肉祭劇と呼んでゐるものは、大抵謝肉祭の餘興として演出を目的に書かれたもので、そのために觀客に對する挨拶の辭を以て始まつてゐるか又は終つてゐる點が異なつてゐるばかりである。然し乍らその作劇上に於ける蕪雜さや稚拙さは獨り此の作者のみの弱點ではなく、當時に於ける一般水準が、二三の例外を除いて、凡そその程度のもの

であつたことは、既に學校劇に於ても人文派劇に於ても見た通りである。(小著宗教改革時代の演劇參照)されば彼の劇作品を正當に鑑賞するためには、時代の演劇全般の發展段階を規準として、素材の中に含まれてゐる、又は作者自身の創意によつて加へられた劇的契機に對する作者の取扱ひ方を考慮することが是非とも必要であり、然らざればその批判は作者にとつて餘りにも無理解にして苛酷なものとなるのみならず、殆ど全く不可能事を強要することになるであらう。此の意味に於てハンス・ザックスの獨逸演劇史上に占める價值を決定するためには、先づ何よりも彼の謝肉祭劇がその初期の段階に於いて如何なる内容形式から出發してゐるかを検討して見る必要があると思はれる。

處で既に屢々言及した如く(宗教改革時代の演劇第二章、本書第一章參照)ハンス・ザックスの謝肉祭劇の處女作は千五百十七年二月二十一日即ち謝肉四旬齋前週土曜日(Samstag vor der Herrn Fastnacht)に書かれた Das Hoffgesindt Veneris vmd hat XIII Person (マハナスの廷臣、人物十三人、Neudruck, Sämtliche Fastnachtspiele von Hans Sachs, Nr. 2, Herausg. von Edmund Goetze. 以下綴字及び番號は此のゲッツェ本に依る)であるが、之はニュルンベルク謝肉祭劇の傳統を牽いて、未だ顔見世形式を少しく複雑にしたものに過ないけれども、しかもその間既にハンス・ザックスの特質を窺はせるに足るものがある。

芝居は例の如く口上役((der Ernholdt)が役者一同を引き連れて登場、御辭儀をして口上を言ふ(tridt ein, neiget sich vindspricht,)ところから始まる。

Gott grüß euch, all jr biederleudt,

Als jhr den hie gesamlet seidt!

Her kunbt mit mir ein kleines Heer,

Die wollen euch allen zu ehr

Ein kurtzes Fastnacht spiel hie machen,



Wer denn Lust hat, mag sein wol lachen.

Doch wirt in diesem Fabnacht spiel

Geredt zu weng oder zu viel,

So bitten wir euch all vorahn,

Ir wolt es in gut hie verstañ

Vnd vns zu den besten auß legen.

Nun will ich euch stellen entgegen

Ein in ein langen, groben bart,

Der selbig heist der drew Eckart,

Der kumbt her auß dem Venus perck,

Wirt euch sagen groß wunderwerck.

(右譯、御機嫌宜しう、ここにかうやつて御集りの皆々紳士淑女方よ！こちらに私と一緒に参上致しました小さい一團は、皆々様に敬意を表して、謝肉祭劇を演じます者共、されば氣に召しましたら御笑ひ下さいませ様に。だが此の謝肉祭劇で言ひ足らなかつたり言ひ過ぎたり致しましたら、何卒善意に解して御了承下さいませ様に、予め皆々様に御願ひ申し上げます。扱て御目通り致させますは、長い疎髻をつけました一人の男、此の者は忠義なエックルトと申しまして、ヴェナス山から参りました者、大層不思議な珍らしいお話を申し上げますことせう。)

すると忠義なエックルト (Der gedrew Eckardt) が同様に客人に對して挨拶を述べた後、ヴェナス女王が鋭い早い矢を以て多くの廷臣達を集めようとしてゐること、その矢に射られたものはひどく難儀をすることを告げて、客人達に對し彼女を警戒するやうに警告する。次いで宛も今の言葉を立證するかのやうに、タンホイゼルが進み出て、自分はフランケン國に生れたタンホイゼル (Der Donheuser) と言ふものであるが、ヴェナス夫人の矢に心臓を射抜かれて、彼女に捕へ

られ丈夫な綱に繋がれてゐると言ふ。最後にヴェナス夫人 (Frau Venus) が現れ、「妾はヴェナス、愛の寶庫、妾のためには多くの國が亡びました。妾は地上の貧富老若誰に對しても偉大な力を持つてをります。妾の此の弓で傷ついたものは妾の召使にならなければなりません。今もかうやつて弓をひき絞つてをりますから、逃げようと思ふものはお逃げなさい。」と言ふ。

以上を發端として、いよいよ芝居は本筋に這入る。そこでは各階級を代表する色々な人物が、エックルトの警告も諾かず、各自の力を誇つてヴェナスに挑戦する。けれども結局彼等は悉くヴェナスに屈服して彼女の奴隸になつて了ふ。先づ騎士 (Der Ritter) が「世に並びなき女王よ、余はこれ素性賤しからぬ騎士、余が心は常に馬術槍術を思ふのみなれば、御身の弓矢からは安全でありませうぞ。」と言ふ。然しエックルトは「お逃げなさい！お逃げなさい！殿めしい騎士殿、でないとヴェナスは貴殿の一生を悲惨なものにしますぞ。」と警める。だがヴェナス夫人は「逃げてても役に立ちませぬ。もう妾の矢がお前に向けられてゐますからには」と勝ち誇る。騎士は忽ち悲鳴を擧げて「何の罪あつてかうも烈しく余を射られるのぢや。余の馬術も槍術も今は終りぢや。貴女の支配に身を任せます。」と答へる。次いでドクトール (Der Doctor) が自分の楽しみは讀書にあるから大丈夫だと自慢するけれども、エックルトには「ヴェナスが追ひかけて來ない中にお逃げなさい」と警められ、ヴェナスには「妾の矢が忽ちお前に飛んで行きます」と脅かされ、胸に重傷を受けて降参する。同様に市民 (Der Burger) は金錢財寶のことしか考へず、百姓 (Der Bauer) は草苅り打穀が仕事であり、傭兵 (Der Landknecht) は攻城野戰を樂しみ、博徒 (Der Spieler) は賽やカルタ丈が身上であり、酒呑み (Der Trincker) は飲食を愛し、處女 (Die Jungfrau) は純潔を尊び、令嬢 (Das Frewlein) は名譽を重んじ、それぞれヴェナスに對

抗しようとするが、その度にエックルトは逃げるやうに勧め、ヴェナスは彼等を嘲り、自分の弓矢の力を誇る。すると忽ち誰もが悲鳴を擧げて、彼女の奴隷になつて了ふ。そこでエックルトはヴェナスの足下に平伏して、もう之れ以上その鋭い矢を射ないやうにと、彼女に嘆願する。ヴェナスがその願は重大ではあるけれども、彼に免じて今日の處はもう誰も傷つけまいと答へる。するとタンホイゼルが深い傷を受けて嚴重に縛られてゐる身の上を嘆き、赦して貰ひたいと哀訴する。だがヴェナスは一度彼女の矢に觸れて彼女の仲間になつた以上、總ての希望は死し、生涯彼女の支配を受けなければならぬと言つて赦さない。そこで一同は聲を揃へて、永久に捕はれの身の上であることを嘆き悲しめば、エックルトは自分の警告を諾かなかつたが故の自業自得であると答へる。

かくて結末の場となり、ヴェナスは再び觀客に向ひ、今彼女の廷臣になつた人達を例として、自分の恐るべき力を説き、彼等の憐れな様を述べ、それから彼等がすつかり意氣沮喪して了はない中にと「樂隊やさん！一曲吹いて此の人達を踊らせてやつてお呉れ。」と命ずる。

そこで一同の踊りとなる。(Man Dantz.) 踊りが終ると、ヴェナスは廷臣達を引き連れて、凡ゆる競技音楽娛樂が行はれてゐる自分の宮殿、ヴェナス山へ行くから、一緒に來たいものはあとに置いておいて！とかく物語るはニェルンベルクのハンス・ザックス。(Wir wollen in Fraw Venus Berg. / So spricht Hans Sachs von Nürnberg.) ——と言ふヴェナスの結辭で此の芝居は終つてゐる。

以上の梗概を見ても判る通り、此の「ヴェナスの廷臣」は Thomas Murner の Die Gauchmat (gedr. 1519. 戀の白痴饗宴の筈) や Pamphilus Gengenbach の同名の謝肉祭劇 (um 1521. 宗教改革時代の演劇第二章 参照) 等と同一趣向のものであるが、ハンス・ザックスは此の題材を、千五百十二年以來屢々版を重ねてゐるシェワローベンの騎士 Hermann

von Sachsenheim (gestr. 1468 in Konstanz) の作 Die Mörin von Venusberg (作者が此の本を所藏してゐたことは彼の藏書目録によつて知られてゐる。) から暗示されたもので、寧ろゲンゲンバッハの「戀の白痴」の方がザックスの此の劇によつて多分に影響されてゐる跡が見られる。と言ふのもその構成が大體に於てザックスの劇を稍複雑にした丈で、その趣向に於ては殆ど同一であるからである。即ち「戀の白痴」の中に出てくるキューピットやキルケ (Cupido und Circe) はヴェナスの弓矢の力を具象化するために附け加へられたものであり、「馬鹿役」は全くエックルトの役割に相當するものであるばかりか、兩者とも全篇の骨子が啓蒙的にして教訓的であり、兩者とも發端の場、顔見世形式による本筋及び終局の場と三段からなつてゐる等、その間近似してゐる點が多々存在するからである。然し乍らその趣向は勿論ハンス・ザックスの創意によるものではなく、恐く當時民間に廣く流布してゐたヴェナスの誘惑物語 (タンホイゼル傳説もその一つ) とニェルンベルク謝肉祭劇の傳統的作劇法である顔見世形式とを組み合せたに過ぎないのである。

それにも拘はらず此の劇に既に作者の獨自性が現はれてゐると言ふのは、何よりも先づその構成が序の口、中の口、大詰と三段から成り立ち、前段と後段とが首尾照應してゐるからである。即ち始めに口上役エックルト、ヴェナス、タンホイゼル等の脇役が紹介されるのを前段とし、それらと所謂ヴェナスの廷臣達、騎士、ドクトール等の主役が對立する場を中段とし、最後にヴェナスの警告、舞踊、結辭の行はれる場を後段として全篇の人物がここに再び所作を與へられてゐるのである。實にこの様な構想は從來の謝肉祭劇にあつては、ハンス・ザックスの直接の先輩であるハンス・フォルツの作品に於ても未だ存在しないばかりではなく、此の形式こそザックスの晩年の劇作に於て美事に大成されたものである。

しかも構成上の整備とともに此の芝居は内容に於ても當時のニュルンベルク謝肉祭劇には未だ見られなかつた新方面を開いてゐる。と言ふのがこれ迄は單にその上乘のものでも面白可笑しい茶番狂言式のものに過なかつた謝肉祭劇に、ここでは作者の主張しようとする確固たる一つの根本思想が與へられてゐるからである。即ちそれは作者が五ヶ年の遊歴時代に於いて身を以て體驗し、爾來終生の信念となつた戀愛觀に基づくものであつて、疑も無く作者は此の劇によつて、愛慾の力には如何なる階級の人も如何なる才能も如何なる心境も如何なる情熱も徳操も全く抗し難いものであることを、極めて卒直明白に描き出して警告を與へ、據つて以て市民道徳の向上改善を計らうと意圖してゐるのである。之を換言すれば謝肉祭劇は今やハンス・ザックスによつて、倫理道徳を説く一種の教育的手段に利用されて來たとも言ふべく、そしてこの事は時代の趨勢と作者の性格から發してゐる丈に、ザックスの謝肉祭劇の最も重要な特質であるとしなければならぬ。従つて彼の謝肉祭劇は正に此の點に於て一新紀元を劃したもので、その大部分のものが、努めて卑猥尾籠の言辭を避け、人情の機微を穿ち、事件そのものの中から何等かの教訓を抽出して觀客に警告を發し、市民生活に良風美俗を植へつけるやうに趣向されてゐると言ふことが出来る。

クス自身の喜劇悲劇では、原則的に大抵口上役を眞先きに登場せしめてゐるにも拘はらず、彼の謝肉祭劇では、特に口上役を設けるか、又は劇中の人物をして口上を言はせてゐるものは僅に十四篇を數へるに過ぎず、此の劇の如きもその少數の例外に屬する甚だ特異な作品であるからである。恐く作者は、一般的に言つて、謝肉祭劇のやうな寸劇に口上役を出すことは、冗漫であり過剰であり、それより寧ろ短刀直入に事件の中へ突入した方がより効果的であると考へてゐたものと思はれる。(Vgl. Eugen Geiger, Hans Sachs als Dichter in seinen Fastnachtspielen im Verhältnis zu seinen Quellen betrachtet, S. 69 u. 70) さればこゝで口上役を特に用ひてゐるのは、終末に於て登場人物一同をして舞踊を演じさせてゐることともに、内容の固苦しさを緩和し、輕快明朗な調子を出すためであつたとしなければならぬ。勿論口上役にしろ舞踊にしろ作者の獨創になるものではないけれども、既存の諸要素を狀況に應じて取捨選擇し、適宜に利用し配合することも亦作者の劇作法上の才能を示すものであるから、まだうら若い作者の處女作として以上の事實は注目すべき傾向であるとしなければならぬ。更らに又本筋に這入つて、ヴェナスの廷臣達が始め自力を誇つて威張り返つてゐるが、次から次へと忽ち悲鳴を擧げて降参して了ふ處でも、作者は特にその對照の妙味を強調してゐるのであつて、實演されたら隨分觀客の無邪氣な笑を誘つたものであらうと想像される。實に此の劇がゲンゲンバッハの作劇欲を刺戟したのも當然であるとしなければならぬ。兎に角「ヴェナスの廷臣」はその劇的内容や形式に於て未だ甚だ幼稚な段階にあるけれども、當時の謝肉祭劇の一般的水準から見れば、全篇が要領よく纏められてをり、全體の調子が極めて輕快であり多くの人物の悲劇的運命の中に喜劇的要素を織り込み、悲しみを笑ひに轉じ教訓を陽氣な祝祭的氣分で包んでゐる等、相當に成功した作品であると思ふことが出来る。

脚本は創作された期日から言つても、冒頭の口上役の台詞から見て、十七年度の謝肉祭に作者及び作者の同僚達によつて上演されるために書かれたものに相違ない。恐らく若い職人達が長い間旅にあつて此度歸國したザックスの詩才に目をつけて、今年はその才筆によつて大いに氣勢を擧げようと相謀つた結果出来たものであらう。

上演の方法は口上役の文句によつても推察される通り、大體舊來の習慣によつたものと思はれる。先づ役者樂師一同が口上役に引卒されて人々が賑かに集つてゐる料亭の大食堂か、富豪の大廣間に這入つてくる。そして役者一同が背後に居並ぶと、口上役が挨拶宜敷く「忠義なエツカルト」を紹介して傍へ退く。かくしてそれぞれの役者は順番に應じて進み出、自分の役を演じては次の番のものと交代して一方の側か、又は後方へ退いて、次の出番を待つ。その際ヴェナスは弓矢を持ち、エツカルトは長い白い鬚をつけ、絶えず舞臺の前面の片側と中央とにあつて、相手方に應待する。勿論背景や道具立ては必要としない。せいぜい役者が自分の番の來る迄休んでゐる長い腰掛が後方に置かれてゐた位のものであらう。只その扮装用の衣裳や所持品は思ひ切つた意匠や金目のものが用ひられ、その所作も當時としては随分工夫を凝らしたものであつたと思はれる。かうして演技が終ると、舞踊になるが、もともと舞踊から起つた謝肉祭劇のことであるから、この場は最も期待された部分で、役者達の腕の見せ處であつたであらう。やがてその舞踊も一座の興を湧き立たせ、喝采裡に終れば、ヴェナスは俳優一同を促してヴェナス山へと引き上げて行く。これは勿論役者を退場させるための演出上の用意である。けれどもここで口上役を再び登場させ、劇内容の教訓的意味を説明するやうな常套的結辭を用ひてゐないのは、作者が劇的效果に深い注意を拂つてゐることを立證するものである。

之を要するにハンス・ザックスの謝肉祭劇の第一歩は傳統的な顔見

世形式に、作者自身の體驗と信念による戀愛觀を盛つたものから始まつてゐるとすることが出来る。しかも此の傾向は彼の戯曲習作時代前期（一五二〇年—一五二九年）及び後期（一五三〇年—一五三九年）の間に創作された十三篇の謝肉祭劇に共通の特質であるから、今ここでは同様な傾向特質を示してゐる千五百四十年の十二月に出来た二篇を加へて前後十五篇の作品を彼の初期の謝肉祭劇と見做すこととしたい。

扱て翌十八年此の度は手廻しもよく新春早々詩人は又もやその才筆を呵して一曲を書いた。題して

Fabnacht spiel mit 4 Personen: Von der Eysenschaft der Lieb.  
(戀愛の特性、人物四人、Nr. 1, 1518, 1, 8)

と言ふ。これは先年旅先のシムン・ヘンで詩作された説話詩 Kampf-gesprach von der Lieb (戀愛論争、1515, 5, 1. 前篇第一章参照) を書き換へたもので「ヴェナスの廷臣」の中に呈示された問題を更らに一步進めて、戀愛の利害得失を詳細に検討し、それに最後の解決を與へたものである。

ここでは何の前觸れもなく冒頭から「老人入場して言ふ」(Der Alte gehet ein vnd spricht) とあり、此の老人が「推參致しましたは老人の私」と自己紹介し、「ここにおいでの皆様、御機嫌宜しゆう。今晩は御目出度う御座あります。」と挨拶し、「願くば無斷でかく參上致しましたのを悪くお取り下さいませぬやうに。實は胸に抱く大きな心痛と悲しみを、ここで皆様に心から訴へたいので御座あります。時はこれどなた様も楽しく御過しになつてをられる謝肉祭の折柄、私はここにかうやつて悲しみ嘆いてをります。」と早速事件の只中へ切り込んで行く。すると直ちに騎士 (Der Ritter) が「何てその様に悲しんでゐられるか？」と受ける。かうして老人はかの説話詩にある通り、今宵自分の息子が甘才の若さで如何なる醫者も何物を以てしても癒すことの出来ない病氣で死んで行つたと話す。「それは一端罹かつたら

何人も恢復することが出来ない癩病でもありませんか？」と騎士。「いやいや息子の病氣と言ふのは或る美しい娘子を思ひ染めたからで」と老人は自分がその戀を許さず、延び延びになつてゐる中に、娘は或る貴族に嫁入つて了ひ、そのために息子は悶々の思ひに苦しんで死んで行つたと話す。騎士は成程戀には不幸がつきものではあるが、自分の心は戀の宿。あすこの眉目麗しい令嬢がやさしい心で自分を思うてくれたら、少々の苦しみ位何でもないが、と言ふ。老人はいやらしい戀がそんなによければ、許してあげてもよいが、然し煩悶のない戀はない、と戒める。

以上を發端の場として、そこで「騎士は婦人の方へ近づき、お辭儀をして親し相に話しかける。」(Der Ritter tritt zu der Frauen, neigt sich vmd spricht freundlich) と下書があつて、騎士と令嬢 (Das Fräulein) の戀愛論争になる。騎士は熱心に求愛して、愛の樂しさ嬉しさを説き、愛こそ地上最高の喜びであると主張する。令嬢は之を拒んで、戀は只人の良心、魂、心情を苦しめるばかり、名譽も財産もそのために失はれ、女を恥辱の中に陥れるものだと言ひ、戀とはほんの僅な喜びを交<sup>ま</sup>へた苦しみに他ならない、と斷言する。騎士は笑つて「凡ゆる娛樂も戀故に行はれ、總ての樂しみは戀に従ふ。」と言ふ。令嬢は「戀は人の思慮分別を奪ふもの、戀するものは休むことなく日夜愛人に奉仕して自分は樂しむことを知らず、しかも揚句の果ては屢々恐ろしい報を受ける」と Achilles が Polixena と結婚しようとして、Thybra の宮へ Paris の手にかかつて倒れる例を擧げる。騎士がその様を偽りの戀は問題ぢやないと、Samson と Dalida (Delila) の例を擧げ、だが、眞に二人の愛人同志の心と心が結ばれて、愛の焔に燃える時は、二人の愛は磐石であると説けば、令嬢はそれも束の間、やがて二人は仇敵の間柄になるとヤゾンとメデアの例を引く。なる程トリスタンとインルデの様に不幸な關係になることもあるけれども、

それは虚偽の告口に乘ぜられるからで、本當に二人が愛し合つておれば Piramo (Pyramus) と Thisbes (Thisbe) のやうにどんな讒訴をも信ぜず、ピラムスが殺されればティスベも死んで行くと騎士。だがどの様に堅く結ばれた愛でも、やがてその祕密は必ず洩れて、デカローモン、Lorenz と Lisabetha のやうに男は女の兄弟に殺されるやうなことになるかと令嬢。然し又戀は人を賢くし、色々な策略を教へる。Gardoleye は高樓に閉ぢ込められたけれども、戸口の錠を蠟で型取り、城から投げ卸してやつたから、愛人 Canis は自由に戀人の室へ出這入りが出来たと男。でもその策略が反つて身の破滅になるとは Quibgardus (Guskardo) と Gismunda の例が示してゐる。戀は人を盲目にし、悲惨な最後の來るのをも知らないと言ふ。トリスタンとインルデのやうに死刑に宣告されても尙且つ計略と幸運によつて危地を脱することが出来る。愛は苦しみを減じ、苦い膽汁をも甘くする(男)。しかも不幸は色々な形で來るから、愛の喜びも何時苦しみに變るかも知れない(女)。かうして騎士は時節を待つて相逢ふ時の喜びを説けば、令嬢は相愛する心が強ければ強い程、別離の悲しみ苦しみは又一入であると言ふ。愛の與へる希望の樂しみも Incerea と Eurialus (Euryalus) のやうに永久に遠く別れては、焦れ死して了ふばかりである。よしや二人の眞心は決して離れず、互に後を追ふものであらうとも、ヘーレナを盗んだペーリスは結局復讐されずにはゐない(女)。そこで騎士は自分の身の上話をする。實は彼もペーリスのやうに英國の或る高貴な侯爵夫人と馳落ちをして來たのである。夫人は森の中へ隠れ、これも貴族出の小童に傳<sup>か</sup>づかれてゐる。今日彼は一對の拍車を買ひに町へ來て、圖らずも此の家へ立寄つたのであるが、今はもう愛人の待つてゐる森へ歸らなければならぬ。これを聞いて令嬢は、他に戀人があり乍ら、先程からは又彼女に求愛するやうな男心の頼り無さを、觀客の婦人達に訴へて、その戀は必ず後悔

の種となると言ふ。騎士が笑つて、彼の人のためなら凡ゆるものを捧げ盡しても悔むことはないと言つてゐる處へ、「小童が馳けて来る。彼は血塗れの被衣を持ち、兩腕を高く上に差し擧げて」(Der Knab kummet geloffen, treget ein blutigen stanchen, vnd spricht mit aufgeworffen armen.) 號泣し乍ら、侯爵夫人が獅子に襲はれ、八裂きにされて、連れて行かれた。この被衣丈が櫛の木の下に残つてゐたと報告する。そこで騎士は兩手を頭上で打ち合せ、自分の戀故に彼女を殺して了つたと悲しみ嘆き、「腰掛の上に崩折れる。」(Der Ritter sincket nider auff die banck.) 老人が彼の手を取つて慰めると、令嬢はかうなつたのも皆自業自得、彼の云ふ甘い戀が如何に苦いものになつたかと、騎士を揶揄する。老人は令嬢の無慈悲な言葉を戒めて、悲しむものは慰めてやらなければならぬ。何か辭さ霽らしの飲物をやつて下さいと頼む。然し令嬢は妾は此塵人は嫌だから、この小童におさせなさいと言つて承知しない。止むなく老人は小童に命じて酒を取りやる。「小童は(觀客の飲食してゐる)食卓の處へ行つて、酒盃を取り」(Der Edel Knab gehet zunn tisch, nimbt ein geschier)「若い騎士の生命を助けるのですから、この新しいお酒を頂戴するのを悪く取らなして下さい。」と斷る。老人がその盃を受け取つて騎士に渡し、「一獻傾けて勇氣を出し、わしの息子のやうになつてはなりませんぞ」と慰める。「騎士も漸く起き上り、それを飲んだ後」(Der Ritter richtet sich auf, trincket, darnach spricht er.) 又もや悲嘆に暮れて、今は世に最も愛するものを失つて、一生を悲しみくらさなければならぬと訴へる。令嬢はかりそめの戀はすまじきもの、愛は結婚に終るべきもので、聖書の教へる通り、一生に一度愛したら、二度と愛を移してはならないと説く。「かくて老人が来て結辭を述べらる。」(Der Alt kummet vnd Beschleust.)「この謝肉祭には色々な餘興やよい芝居があると聞きましたので、かうやつて參上、戀のお

芝居を演じてお目にかけました。ではお休みなさいませ。愉快から不快が生れて來ないやうに、私共のことを悪くお取り下さるな、とハンス・ザックスはお願い申します。」

以上芝居の内容を比較的詳細に記した所以のものは、之によつて工匠歌人の謝肉祭劇が何處で如何様に上演されたものであるか、ザックスの戀愛觀が如何様のものであつたか、又詩人の古典的智識が既に如何に廣いものであつたかを一層明瞭に看取されうるからである。舞臺は明らかに料亭か酒場の様な處で、演技はお客の飲食してゐる前で行はれたことは、小童が客席から酒盃を取つて來る場面が明かである。だから道具立てとしては、高々騎士が崩折れる腰掛が用ひられたに過ぎない。それは宛も今日の喫茶店や酒場でアトラクションとして行はれる演藝の様のものであつた。このことは「老人」の始めと終りの口上でも推定されるが、勿論「無斷で」即興的に演ぜられるのであるから、舞臺装置などを豫定することは出來ない。因にその「老人」の役は最後の句が暗示してゐるやうに、作者自身によつて演ぜられたものであらう。

扱つて又その内容は至極眞面目な論争で、人は假初めの戀を極力廻避し、戀愛は必ず結婚に終らなければならぬと言ふ作者終生の持論を骨子としてをり、僅に冒頭と結末に之が謝肉祭劇であることを思はせる數句があるに過ぎない。そこには聊かの滑稽諧謔の調子も見られないのみか、作者は古今の神話傳説物語を引用して、只一途に彼の戀愛觀を闡明しようとしてゐるのである。だから之は思想があつて形が出來たもので、作者の啓蒙精神による一種の思想劇とも言ふことが出来る。従つてそこには作者の根本思想を説明するに役立つ様な對話が順次行はれて行く中で、一貫した劇物語を缺いてゐる。然し乍ら作者としては之によつて前劇の未だ言ひ得なかつたことを明かにして、その解決策を示し、同時にその人文派的教養を遺憾なく發揮することが

出來たことに恐く満足したであらう。この意味に於て此の劇はよし劇作法上に種々の缺陷があるとしても、詩人の作劇傾向を見る上には猶且つ甚だ重要な作品である。

更らに劇の構成が前劇同様矢張り三段構へになつてゐるのも注目に値する點である。即ちここでは既に口上役を用ひず、端的に問題の中へ這入つて行く老人と騎士との對話を前段とすれば、騎士と令嬢の論争を中段とし、騎士の不幸な戀の破局を後段とする。然し乍らその間共通するものは、作者の戀愛觀と騎士丈で、事件そのものには何等の連絡がなく、老人、騎士、令嬢が各自言ひ度い丈のことを交る交る述べてゐるに過ぎないから、依然として一種の顔見世形式であり、作劇法上には未ださしたる進歩の跡を止めてゐない。但し小童の役には相當劇的所作が與へられてゐるから、俳優の演出技術に就いては絶えず研究が積まれてゐたものと思はれる。

却説「戀の特性」が出來た翌年千五百十九年から二十二年迄は、*ハンス・ザックス*の創作活動が殆ど休止状態にあつた期間であり、その後もしも引き續き彼の關心は時代の最も重大な事件である宗教闘争に向けられてをつたから、彼の創作は猶久しく新教教義とは相容れない謝肉祭劇と全く絶縁してゐる。漸く千五百三十年かの有名な「*ニエルンベルク*の讚歌」を始め「*極樂園*」「*木樵の嘆き*」等多くの道徳的説話詩の傑作が創作された年になつて、彼の才筆益々冴え、彼の詩囊愈々肥えるにつれて、その健筆の奔るままに、ほんの一時の興にかられて書きなぐつたと思はれるやうな一篇の謝肉祭劇が見られ、翌卅一年更らに一篇を加へてゐる。前者は謝肉祭古劇によく見られた惡妻物語 *Eine kurtzweylig fasnacht Spiel von einem bösen weib.* (惡妻の面白謝肉祭劇。1530. 10. 8. Nr. 4. 此の作の創作年度は、*ヴェッテ*本其の他凡て二十三年度になつてゐるが、*今*は *Bibliothek des Literarischen Vereins, Hans Sachs, 25. B. H. H. S. S.* ザックス作品年代表による。) 有繁にその對話は一段と

輕快自由で潑刺としてをり、可笑し味にも富んでゐるけれども、全體の調子は全く舊套を追うてをつて、之が單なる作者の筆のすさびに過ぎないことを示してゐる。その筋は或るヒステリックな工匠の細君が徒弟や女中に當り散らし、止めに這入つた旦那に喰つてかかり、それを又仲裁に來た隣人に迄惡態雜言を吐き、結局細君一人が四人を相手に大立廻りをすると云ふ、例の喧嘩口論の場を取扱つたものである。只從來此の種の惡妻は百姓の女房に限られてゐたものが、ここでは市民階級の婦人を對稱としてゐる點に異色がある。作者は之によつて當時の世相の一端を諷刺し、我儘な婦人に警告を與へる意圖を持つてゐたのであらう。

後者は貧富優劣論 *Klag, Antwort vnd vrteyl zwischen Fraw Arnut vnd Plutus, dem Gott der reichthumb, welches vnter yhn das pesser sey.* (貧乏夫人と富の神 *Plutus* との間の告訴と答辯と判決。1531. Nr. 3.) を主題にした、之も謝肉祭劇に

は極めてありふれた一種の裁判劇形式による論争で、作者は之を謝肉祭劇の中に數へてゐるけれども、寧ろ説話詩 (*Spruchgedicht*) の中へ這入るべきものである。と言ふのもその構想が全く *ハンス・ザックス* 得意の討論詩 (*Kampfgespräch*) の體裁からなり、全篇の調子は對話體の敘事詩であるからである。即ち作者は寒中二月満月荒涼たる森の中を彷徨ひ、行き暮れて森の隱者の草庵に一夜の宿を求めるとそこまでが敘事敘景の説明詩で、それから對話となり、そこへ同じく貧乏夫人 (*Fraw Arnut*) と *ブルーツス* が訪れて來て、二人の間に貧と富との利害得失が論ぜられ、最後に隱者 (*Der Waltruder*) が兩者互讓して相提携してこそ世の中は圓滿に榮えると裁斷を下す。因に三十八年二月十七日の作 *Ein schöne Comedia mit dreyen Personen: Nemlich von einem Vater mit zweyen Söhnen. Vnd heist Der Karg vnd Mildt* (面白喜劇、人物三人、即ち父親と二人の息子。題して吝



奢者と浪費者。Nr. 7.) も之と同一形式のものである。守銭奴の兄と贅澤な弟とがそれぞれ互に自分の行状を自慢して譲らず、お互に自分こそ父親の遺産を受け継ぐ者と主張するのを、父親が何れもその行き過ぎを戒め中庸の道を説いてきかせると云ふ筋である。

扱て以上の二篇は當時未だ詩人の謝肉祭劇に關する關心が如何に單純稀薄なものであつたかを示してゐるが、果してその後も亦三年間一篇の謝肉祭劇も創作されてゐない。しかも丸三年を経て千五百三十五年に出來た二篇の作品 Ein Fabnacht spil mit vier Personen, Nemlich ein Richter, ein Buler, ein Spiler vnd ein Trincker. (判官、情人、博徒及び酒豪。1535, 2. 9. Nr. 5.) 及び Ein Fabnacht Spiel mit Sechs Personen, vnd heist die Sechs Klagen, (六人の訴人。1535, 12. 21. Nr. 9.) にしても、孰れも一種の顔見世式裁判劇であり、古來の傳統を墨守してゐるのみで、此の領域に對する詩人自身の積極的攻勢意圖を窺ふに足るものは未だ全く見られない。

「判官、情人、博徒及び酒豪」では希臘の國アテネから遙る遙る來たと言ふ判官の前で、情人 Hans、博徒 Lux、酒呑みの Marx と云ふ三人の兄弟が、一番の悪者には遺産が分配されないと云ふ父の遺言によつて、互に自己の長所美點を自慢し、他の短所惡徳を攻撃し、誰が一番悪者であるかを判官から裁判して貰つてゐるのであるが、その劇構成には何等の新味を示してゐない。只實際各人物が愛情、遊戲、酒の功德と害毒とを説くに當り、聖書や古人の名句を博引傍證してゐる點や、判官が最後にそれぞれの短所長所を教へ、色慾や賭博や飲酒で財産を蕩盡しない様にと戒めて、遺産を三人の間に公平に分配してやる邊りに、作者の特色が見られる位のものである。

「六人の訴人」も前劇と全く同一形式で、料亭の主人が謝肉祭を祝ひに來てゐる店の客人達を歡待してゐる處へ、傭兵坊主百姓職人乞食が這入つて來て、各自交る交る自分が一番貧乏で慘めな生活をしてゐ

ると訴へ、他の者の言ひ分を反駁してその生活がいかに豊て贅澤なものであるかを發き、最後に亭主の取做して一同踊り抜いてから出て行く。だから之も此等の階級の明暗二面の生活状態を知ることが出来る上に於て、風俗史的資料を供給してゐるとしても、劇的價値に於ては問題とする程のものではない。因に千五百三十九年十二月十五日作 Ein fasnachtspiel mit sechs personen: Ein wirt, kerner, kremer, petelninich, rewter vnd ein ziegeuner vnd haist: Die 5 elenden wandrer. (亭主、荷馬車引、小賣商、乞食、騎士、ジプシー。題して五人の慘めな旅人と云ふ。Nr. 13.) も前二篇と全く同一趣向のものである。

然し乍ら經驗は自ら老練なる技巧を教へ、多作は必然に新奇なる趣向を要求する。さればその後續して翌三十六年に三篇、飛んで三十八年三十九年四十年と各年二篇づつの作品が創作されてゐる中には、その構想に於て又はその脚色に於て作者の創意創見の見るべきものあり謝肉祭劇は次第にハンス・ザックスによつて新方面を打開されて行きつつあつた。

處て上記九篇の謝肉祭劇の中次の三篇

1. Ein schön Fabnacht Spiel mit dreyen personen: Nemlich ein Vatter, ein Son vnd ein Narr. (Der vngeraten sun.) (不孝者。1536. 9. 30. Nr. 6.)
2. Ein Spil mit dreyen Personen vnd heyst der Fürwitz (好奇心。1538. 7. 12. Nr. 8.)
3. Ein fasnacht spil mit dreyen personen: Der hewchler, der jung man vnd der alt amice vnd heist: Der hewchler. (阿諛者。1540. 12. 30. Nr. 14.)

は全く同一趣向からなつてゐるけれども、各篇が隔年に創作されてつて、同種類の内容のものを連年繰り返すことを避けてゐるのみならず、それ々に又作者が如何に脚色法上に留意して、別種の味を出さ

うとしてゐるかを見ることが出来て、甚だ興味深いものがある。かうして詩人は次第に謝肉祭劇の創作に深い關心を抱き、高い認識を持つやうになつて來たのである。

先づ「不孝者」では意志の薄弱な青年、息子のフランツ (Der Sohn Franz) が悪友、馬鹿 (Der Narr) の甘言と親父 (Der Vater) の條理を盡した訓戒との間に立つて動搖し乍ら、結局惡の誘惑には勝てず、父親を捨てて馬鹿のあとを追うて墮落して行く様を寫してゐる。

息子の近頃の行狀に疑念を抱いた父親が、息子の出入りするらしい料亭で待つてゐると、そこへ案の狀馬鹿に誘はれて息子がやつて來る。馬鹿は息子に勸めて、先づ賭博をやらせる。それを見て父親が「誰がお前に賭博打ち等を教へたのか？此の目で實際に見たのでなければ信じられないことだ。」と言ひ乍ら近づいてくる。息子は喫驚仰天逃げ出さうとするが、馬鹿はそれを止めて、「何も怖いことはないぢやないか。もう答で打擲される年頃でもあるまいし、爺が何か言つたら、こつちでも言ひ返してやれ」と唆かす。だが父親が賭博の害を説き聞かすと、息子も「悪い仲間には誘はれて逐手を出したので、今後は乾度致しません。」と謝罪する。すると馬鹿が「そんなに何もかも楽しみ事をなくして何うするのですか？」と擲ふ。そこで息子が父親に「僕何か楽しみ事をしてはいけなのですか？」と喰つてかかる。父親は「お前には本も澤山あれば、樂器もあり、劍術唱歌舞踊跳躍の娛樂もあるぢやないか！」と教へる。「でも仲間さへ立派な人達であつたら少々の賭事位して遊んでもよいでせう。」と息子。「一磅や二磅の賭事をとめるわけではない」と父親。かうして息子が理解ある父親のものにならうとするので、馬鹿は更らに料理や酒の甘い料亭へ息子を誘ひ出さうとする。息子は早速之に應ずる。父親が又もや食食の害を説いて聞かせる。息子が再びそれに服さうとするので、馬鹿は「君は籠の鳥になつて爪でも噛んでゐたいのか。」と嘲り、今度は女色を以て

誘惑する。息子の心が又それに引かれる。父親は女色の恐るべきことを説いて結婚をすすめ、妻以外の婦人に心を移してはならないと諭す。次いで馬鹿が愉快な謝肉祭の贅澤な假裝行列に出ることを勧める。そして息子が假裝を整へる金がないと言ふと、父親の品物を盗み出して賣るか、借金をしろと言ふ。然し息子はそんな方法は今迄も度々試みたので、今はすっかり信用をなくして了つてゐる。父親が又もや諄々と惡友のために家産を蕩盡する愚さを説いてきかせる。息子が後悔して赦しを乞へば、父親は甘グルデンの金を與へて、それで着物でもこしらへよと優しい理解を示す。すると馬鹿は大切な囀が逃げようとするので、息子の因循姑息を散々に罵倒する。それを聽いて息子は又もや謀叛氣を起し、謝肉祭にやつてくれと父親に頼む。父親は謝肉祭も自分の若い頃の様に節度あるものならよいが、此の頃のやうな放埒無軌道なお祭り騒ぎでは面白くないと戒める。かうして父親は息子を家へ連れ歸らうと極力説得するが、息子は馬鹿に、家へ歸つて坊主の様な生活をするのかと冷かされるので、遂に堪り兼ね、父親の止めのも振り切つて馬鹿と一緒に、新しい遊び場を求めて馳け出して行つて了ふ。あとで父親は子供達の教育が如何に難しいかを觀客に訴へ、子供達からは極力惡友を遠ざけるやうにと注意する。

次の「好奇心」も同様に浮薄な青年 (Der Jungling) が忠義なエックハルト (Der treue Eckhart) の忠言を悉く却けて「好奇心」 (Der Fürwitz) の勸告に悉く賛成すると云ふ筋である。だが事件も會話も一段と輕快に進行してゐる。先づ忠義なエックハルト登場、觀客にお辭儀をし、御機嫌を伺つた後、近頃は昔と違つて、自分が誰からも厄介者視されてゐることを訴へ、せめて信心深い皆様の間丈でも滞在を許して貰ひ度いと頼む。そこへ好奇心が馳け込んで來て、「ここで泣言を言つてゐる老筆は誰だ！」と、彼を突きやり、追ひ出さうとする。エックハルトが「何でお前様から此の様な侮辱を受けるのか。この家

の主人が僕を<sup>おれ</sup>追ひ出してもしないのに。」と抗議を申し込めば、「俺が此の家の主人だ。とつとと失せやがれ！」と好奇心。エックハルトは止むなく出て行かうとすると、「お前は變な老爺だ。まあここにゐてもよいから、黙つてゐろ。」「言ふべき時には言ふ」と争つてゐる處へ、青年が来る。彼はこの家の主人から夕食に招かれたけれども、家で食事をして来たので、扱てこれからは何をしようか。一體どう云ふ風に暮らしたら、世間で名譽を得られるであらうか？誰か教へて呉れる人はないか？と思案してゐる。そこで好奇心が近寄つて来て、「世間の人は皆俺の言ふことに従つてゐる。俺の言ふ通りにしたがい。」と言ふ。「あなたの御説は是非聞きたいのですが、あなたは一體何誰<sup>だ</sup>ぞ？」「俺の名を知らないか！俺は Bethulancia と言ふものだ。」「どうか獨逸語で言つておくんさい。僕はどうも無學として。」「ぢやよくお聞き。俺は好奇心ぢや。」「それぢやあなたは女子のものぢやありませんか。男の子には恥となる。」「お前は頭が悪いぞ。此頃では王侯貴族何人も俺を珍重してゐる有様ぢや。俺が彼奴等の喜びや楽しみを増してやるからな。俺が氣に入らなければ出て行つて貰はう。」「成程御尤で。何うか御説をきかせて下さい。」するとエックハルトが「此の男の云ふ事を信じてはいけない。言ふことは優しく甘い。嘘で固めて底なしぢや。アダムもエブもこの男に騙されたのだ。全人類に難儀をかけ、教へ子を悉く辱しめる。用心したがい。」と言ふ。好奇心が怒つて彼を追ひ出さうとするが、彼は「忠言をするのが僕の役目ぢや。」と言ひ張つて應じない。「ではお前は一體何者だ？」「僕は人々の幸福を守り、何人にも不實な事をしたことのない忠義なエックハルトぢや。」遂に青年は堪り兼ねて「お前の様なものは除け除け。あなた、僕にその處世法を教へて下さい。老耄、早く失せろと言ふのに。」と呶鳴る。好奇心「お金があるか？」青年「金は澤山あります。」好奇心「それぢや宜しい。」とここで好奇心は先づ青年

に、最新流行の衣裳、高價な裝身具を絶えず身につけてをれば、人々に尊敬されると教へる。青年がそれを聽いて喜ぶ。エックハルトが虚飾驕慢は貧の元、身分に應じて身を飾れと戒める。青年が怒つて彼を突き出さうとする。それから世間に持て囃される手段として、好奇心が、陽氣な仲間と一緒に世間を茶化し道化て渡れと勧めれば、エックハルトは、良友を求め讀書に精進せよと、キケロやペトラルカの言葉を引用して諭す。好奇心が本の代りに長槍を取つて戦争に出かけて行け。老後の語草になるやうな色々面白経験が得られると教へれば、エックハルトは戦争の慘禍を説いて、上司の命令がなければ、戦争になど出るものではないと言ふ。更らに一方が殺伐な武技や無用な狩獵、危険な水泳、贅澤な謝肉祭の各種餘興や假裝、飲酒舞踊、夜遊び、豪華な家具の購入、伊太利風の露臺のある豪壯な建築等を極力推賞し、遂に貴族の紋所を手に入れ、政治に携り、鑛山を經營し、鍊金術を習ひ、かくて巨大な富を造り、長夜の宴を張り、歡極まれば温泉に浴し刺路法を施せと、青年の野心を馳り立てる。他方は悉一それを反駁して、それらの恐るべき裏面や陥穽を説き明かして聞かせる。然し青年はその度にエックハルトに激しく反抗し、全く好奇心の捕はれとなり、結局彼を追ひ出して了ふ。そして好奇心の誘ふままに、何がな新しい珍しいことはないかと、市場の方へと出掛けて行く。

扱て此の劇を前劇と比較すると、その内容に於ては孰れも青年の陥り易い誘惑を主題として、謝肉祭の豪奢を戒め、一時的戀愛の代りに結婚を勧め、つとめて身分相應な中庸の生活を送るやうに教訓してゐる點、作者の持論を盛つたもので、格別新味があるわけではないが、その脚色法上に於ては、後者が一段と世話劇風に仕組まれてをつて、人物の登場して来る理由や人物の性格を明瞭にし、とかく冗漫になる恐れのある教訓的結辭を用ひてゐない等明かに進歩の跡が見られる。何れにしても前劇では父親と悪友馬鹿との間に絶えず動搖してゐる息

子を描き、ここでは徹頭徹尾「好奇心」に驅られてゐる若者を寫してゐるのは、青年心理に對する作者の理解を示すものである。

第三の「阿諛者」<sup>おべつもの</sup>では狐の尻尾を持つ阿諛者 (Der heuchler mit den fuchschwänzen) がその尻尾 (阿諛の比喩) の買ひ手を探してゐる處へ、眞に頼るべき忠實な友人を求めてゐる若い男 (Der junge man) がやつて来る。そこで阿諛者が若い男に「友人が欲しいなら僕の處へ來給へ。君は却々立派な若い衆だ。僕を友達にすれば、君の名譽となり僕の利益となる」と甘言を以て近づいてくる。若い男は「それでは君が果して僕の氣質や心持ちに合ふ人物かどうか驗して見よう。」と言ふ。そして色々と自分の慾望を數へあげれば、相手は一々それに賛成して彼を煽て擧げる。若者が「僕は怒りつばい人間だ。」と言へば、阿諛者も「僕も喧嘩は大好きだ。馬鹿にされてゐる法はない。」と答へ、「僕は強慢な男だ。」と言へば「人に屈してゐるわけはない。」と答へる、かうして一方が御馳走が好きだ、女が欲しい、賭博がしたい、教會には行き度くない、義兄が羨ましい、商人を瞞して百グルデンを巻き上げたことがある、面白可笑しく世を渡りたい等々と言へば、他方は何れも大賛成、巧に調子を合せて相手にすつかり取入つて了ふ。若い男は大いに喜んで、彼を自分の家へやつて御馳走の仕度をさせる。阿諛者が去ると、老友 (Der alt Amice) が来る。若い男が彼に向つて、自分の心の望むものを何でもしてくれる本當の親友を見出したと喜ぶ。老人がそれは阿諛者と云ふもので、自分の利益しか考へない詐欺師だと言ふ。老友が色々と、惡を惡として諫言し、善を善として推賞するものこそ眞の友人であることを説いて聽かせるけれども、若い男はすつかり今の男に魅せられて言ふことを諾かない。遂に老友自身その男の言ふことを聽いて見ようと言つてゐる處へ、先の阿諛者が再び現れる。彼は今町で若い男の惡口を言つてゐる男と殴り合ひをして來た處だ等と言つて、若い男の歡心を買ふ。それから

若い男は又もや色々な問題を出して阿諛者を試験する。若い男が自分は數年前或る人と非常に不利益な契約を結んで困つてゐると言へば、阿諛者は狡猾な法律屋を頼み、相手の辯護人に賄賂を贈り、胡魔化して了へばよいと教へる。老友が「約束したことは猶豫なく果さなければならぬ」と戒める。若い男は更らに百グルデンの借金を免れるために二人の證人が欲しいと言へば、阿諛者は早速證人になることを承知するが、老人はそれは偽證と言ふもので眞の友人のすることぢやないと言つて斷はる。更らに若い男が自分は或る小村を治めなければならぬが、百姓達をどう取扱つたらよいかと訊く。すると阿諛者は嚴罰重税を以て臨めとすすめ、老友は慈悲を加へ溫情を施せと説く。同様に我を侮<sup>おなじ</sup>むる敵に對して、一方が戰爭を主張すれば、他方は平和中庸の道を説き、村有財産を増すには、一方のすすめる様に詐欺取材苛斂誅求によらず、他方の説くやうに律義正直な商法によるべきである。遂に若い男は老友の固苦しい言葉に飽いたか、阿諛者を誘うて夜食を取りに家へ歸つて行く。阿諛者は一足遅れ、老人に甘言佞辯の利徳を讚へ、得意になつて退けば、老人は今更らに阿諛者の蔓<sup>つた</sup>こる澆季の世を嘆き、昔の賢人哲人が如何に阿諛者を遠ざけたかを博引例證して結辭とする。

言ふ迄もなく此の劇の構成上に於ける異色は、阿諛者を中途で一端退場させ、暫くして再度登場せしめてゐる點にある。之によつて此の劇は若い男と阿諛者の場、若い男と老友の場、及び若い男、老友、阿諛者の場と三場に判然と頷たれ、その三場を通じて一貫した稍々劇的物語らしいものが展開して行く。のみならず前々劇に於ては教訓を與へる側の父親、前劇に於ては誘惑する側の好奇心、即ち副人物的存在が最もよく活躍してゐるのに對して、此の劇では、三つの場面に共通してゐるのは若い男丈であり、従つて彼が中心人物として最も多く動いてゐる。だから此の劇は、未だ甚だ素朴の形ではあるが、甘言に誘

惑されて行く若い男の運命を一幕三場に仕組んだものとも言ふべく、この事は此の劇を他の劇に比して著しく近代劇の形式に近づけてゐるのであり、又作者の劇作法上に於ける一進歩と言はなければならぬ。

以上三篇は然し乍ら何れも古來屢々用ひられた所謂「岐路に立つ」ヘーラクレス」(宗教改革時代の演劇第五章参照)又は道德劇(Die Moraltiten, 同上第十三章参照)の好んで取扱つてゐる契機モティフと同一趣向になるもので、美德と悪徳がまた心の固まらない青少年を争奪することを骨子としてゐるのであるが、作者はその善悪二面の内容を、特に當時の市民生活の觀察から得た人情風俗を以てし、市民道德の高揚を一意専心繰り返し繰り返し祈願してゐるのである。されば謝肉祭劇は今やハンス・ザックスによつて、市民のために倫理道德を説く一種の啓蒙的教訓的諷刺劇に利用されて來たと言ふことが出来る。それ丈に又彼の此の種の謝肉祭劇は未だ幼稚な顔見世形式的論争の場面上には出ず、作者自身の道義觀の主張に急ぐ餘り、謝肉祭劇として必要な喜劇的分子の潤色を缺いてゐるのは勿論のこと、劇的葛藤も無く、人物の性格も類型的である。しかもその間素材の取捨選擇、作劇法上の趣向技術に於いて徐々として自得する處あり、進歩しつつあつたことも亦疑を容れない。

とは言へ文學的直覺力に秀れた此の作者が謝肉祭劇の重要な要素である滑稽諧謔洒落等を含む喜劇的場面を無視し等閑に附してゐたのではない。否寧ろ初期の作品にあつては、此の方面に於いて彼は相當成功を収めてゐると言ふことが出来るのであるが、由來ニルンベルク謝肉祭劇の可笑味おかしみと言へば、大抵百姓を愚弄した種類のものであり、ハンス・ザックスもその舊套を墨守してゐる點に未だ陳腐月並の感を抱かしむるものがある。即ち次の三篇

1. Fasnacht spiel mit 5 Personen, Die Rockenstuben genandt.

(紡ぎ室 1536, 12, 28. Nr. 10.)

2. Ein fasnacht spil mit drey personen : zwen pawren vnd der kellner, vnd haist das pachenholen im teutschen hoff. (二人の百姓と給仕人。又はメッセ亭のメッセ買ひ。1539, 11, 21. Nr. 12.)

3. Ein fasnacht spil mit 3 person : ein purger, pauner vnd edelman, die holen krapfen. (町人、百姓、貴公子のメッセ菓子買ひ。1540, 12, 31. Nr. 15.)

は何れも農民階級に取材した滑稽物であり、詩人が必ずしも教訓一點張りの道學者ではなかつたことを證して餘りあるものである。

「紡ぎ室」とは一種の女子集會所の如きもので、村の婦人達の共同の糸紡ぎ場であるばかりでなく、そこで女達が色々な遊戯や雑談に時を過す所である。今百姓の下婢 Grete が紡ぎ車を持つて這入つて來て、「今晚は紡ぎ室が開かれて、下男や馬丁も一緒に色々な遊びが行はれると聞いたが、鶏の鳴く迄踊つたり歌つたりしよう」と言ふ。即ち觀客に場所と時と登場人物とをほぼ推察させる臺詞である。そこへ百姓の下男 Künzel がやつて來て、グレーテに口説きかかるが、娘からこつびどく肘鐵砲を喰つて、こちらも娘の悪口を言つてゐる處へ、百姓の女房が矢張り紡ぎ車を持つてやつてくる。女房はグレーテに男の甘言を眞に受けてはならないと警め、精出して糸を紡ぐやうにと吩咐ける。そこへ又百姓が這入つてくる。女房を見て「お前此處所で糸紡ぎをしてゐるのか。家でしたらどうだ。物好きにも程がある。」と言ふ。女房も負けてはゐない。「お前様だつて何時も大酒を呑み、大飯を喰ひ歩いてゐるではないか。」とやり込める。て亭主が閉口して「まあよい、よい。」と言へば、女房は上機嫌になつて「グレーテや、さあさあ新しい流行唄はやしうたでも歌つておくれ。」と言ふ。そこへジプシー(Der Ziegeier)が這入つてくる。彼は占師で、彼の口上に釣られて、先づ女房から百姓下男下女と順次手相を見て貰ふ。處が何れも舊

悪を曝露され、不吉な豫言を聴かされる。そこで放蕩者で私生兒をこしらへてゐると言ふ百姓と、隣繰り金を溜めて、寺の坊様と乳繰り合つてゐると言ふ女房の間に喧嘩が起り、二人は追ひつ追はれつして出て行く。最後に見て貰つた下女は、怒つてジプシーに紡車で打つてかかり、彼を戸外に追ひ出して下女。その上下女と下男の間に今聞いたことから悪口の言ひ合が始まり、とど下女は下男をも戸口から叩き出す。(Sie schlegt ihn zu der thür hinaus.) するとかのジプシーが再び登場、結辭を述べる。此の頃は百姓の間ばかりでなく、町でも市でも本當の事を言へば嫌はれる。上手に世渡りし、金儲けをし、災難を避けようとすれば、甘い事を言ふに限る——と言ふのである。

之は全く傳統的な農民階級を茶番化した喧嘩口論の場を主眼にしてゐるけれども、人物が舞臺に順次自然に登場して來、又順次自然に退場して行く點に、舞臺變化があり、従つて從來の顔見世形式と異つて、上昇し下向する筋らしいものが認められる。

次の「ドイツ亭のハム買ひ」は當時ニルンベルクで行はれてゐた俚諺、Die Speckseite (Bache oder der Pach) kann nur einer holen, der Herr im Haus ist. (一家の主人<sup>おちやう</sup>丈がハムを買うことが出来る。強いものが勝ちの意)を文字通りに劇化したもので、矢張り農民の無智を滑稽に描き出してゐる。料亭ドイツ亭の給仕人 (Der Kellner) が主人の留守中お客の接待を委かされたと言つて、酒食の支度をしてゐる處へ、二人の百姓 Heinz Flegel と Simon Frauenknecht が這入つて來て、此の店の名物大型の豚の燻製脂肉を謝肉祭用に註文する。そこで給仕人が脂肉は一家の主人に丈しか賣られなと言つて、百姓達が事實一家の實權を握つてを、女房の尻の下には敷かれてゐないことを證明させようとする。百姓達が色々に自分が強くて豪いことを自慢するが、自慢する傍から、化けの皮が剥げる。例へばシモンは「わしの女房がわしを主人にしておくのは勿論のことだが、わしは女

房の言ふなりにならなければならぬ。」と言つた工合。遂にシモンは、さんざんに女房天下の生活振りを曝露して、ハインツに迄愛想をつかさされる。がさう言ふハインツ・フレージェルも亦給仕人に問ひ詰められて、「わしの夫婦生活には九つの戒律があつて立派なものだ。」と誇るけれども、その戒律と言ふのが、花嫁花婿時代の舞踊音楽を樂しむ「天使の戒律」はまだよいとして、大食大酒して女房が暴れ出す「獨逸紳士の戒律」あたりから怪しくなり、貧乏暮しを意味する第三の「洗足僧の戒律」、お互に罪を歸せ合つて亭主が一口言へば女房は二口罵る第四の「説教僧の戒律」と次第に娼天下の風が増し、喧嘩口論して、女房が壺を投げれば亭主は皿をぶつける第五の「受難の戒律」お互に別れ別れの生活をする第六の「隠者の戒律」、夫婦が無言の業をして口をきき合はない第七の「カルトイゼルの戒律」何もかも質に入れて了ふ「乞食の戒律」、遂に夫婦勝手なことをして女房は始終亭主に反抗する第九の「馬鹿者の戒律」に至つて、遺憾なく亭主の弱體振りを發揮する。そこで給仕人は百姓達をドイツ亭から追ひ出し、夫が一家の主人となつて、妻を穩良貞淑に教育しなければならぬと結辭を述べる。

ここでは九ヶ條の戒律が如何にもハンス・ザックスらしい巧妙皮肉な比喩として、會話の内容に新鮮な可笑し味を與へてゐる。

「町人、百姓、貴公子のパン菓子買ひ」も同様に謝肉祭を祝ふために、パン菓子を買ひに來た百姓が、町人の仲間入りをして町で謝肉祭を祝ひ度いと、折柄お客を招いて饗宴を張らうとしてゐる町人の家へ這入つてくる。そしてこの馬の骨かはわからない土百姓などは、お客に招んだ覚えはないと町人に拒絶される。百姓が自分は確なものだと、祖父以來の碌でもない素性を勿體振つて名乗り上げるけれども、町人はここは町の名士丈が來る處だと言つて、相手にしない處か、彼を突き出さうとする。そこへ貴公子がやつて來て、百姓の粗野低級、

愚昧狡猾であることを攻撃して、彼を追ひ拂はうとする。百姓も負けにはおかない。かうして三人の間に農民市民貴族の優劣論が取り交される。貴族は宮廷に出仕し、俸祿金利で樂に暮せると誇り、百姓は農耕牧畜でさう言ふ貴族や町民を養つてやると自慢し、町人はそんな下等な労働をしないでも、ちつとしてゐて金儲けが出来ると威張る。結局百姓は自分の仕事で健康で愉快で明朗であり、町人貴族のやうに病弱に悩み、退屈不機嫌憂鬱に苦しむことがないと大いに氣焰を挙げれば、貴公子は「百姓の言ふことも尤だ。一緒に謝肉祭を祝つてもよいぞ。」と言ふ。町人は「匿すより顯るるはなし」と言ひ、「三子の魂百迄」と言ふこともある。百姓はどこでも百姓で、無作法者に交はれば、自分も無作法になる。だから若い人は賢明練達の士と交はつて自分を修業するやうにと結ぶ。

ここでも百姓が町人や貴族に對し、負けない氣になつて、色々と自分の生活の立派で豊かなことを主張するけれども、その言葉の蔭から、生活程度の低級粗野であることが洩れ出る處に滑稽味がある。

以上三篇は何れも當時の農民の原始的生活を輕妙な筆で戲畫化した「万歳」式の間答に過ないが、ここに最後に一篇、ハンス・ザックスの初期の作品として彼の名を辱しめない秀作が残されてゐる。それは千七百七十八年ゲーテがブイマールに於て自ら劇中の「醫師」に扮して上演したことにより一躍有名になつた *Ein Faßnacht Spiel mit dreien Personen: Das Narrenschneyden* (馬鹿者を切り取る。1536, 10, 3. Nr. 11.) であるが、さすがにゲーテの慧眼は此の謝肉祭劇の有する劇的效果を見逃さなかつたのである。

題材は勿論多くの他の作品と同ぐく、ザックスの獨創によるものではなく、傳來の大道醫師の役や *Sebastian Brant* の *Das Narrenschiff* (1494) 等に見られる趣向を利用したものであるけれども、ここでは多くの馬鹿者共が顔見世式に順次自己紹介をしようと云つた從來の單純

な演出法を避けて、次ぎに何が出てくるかを觀客に興味を以て期待せしめるやうな脚色法を取つてゐる。

先づ初めに醫者 (*Der Arzt*) が下男 (*Der Knecht*) を連れて登場、御當地では醫者が入用だと言ふこととやつて來ましたが、ここにお出での皆様、どんな病氣でも結構、腫物でも結石でも咳嗽でも中風でもさては暴飲暴食、賭博に負けた鬱憤や、嫉妬、戀情何でも藥を差し上げて、御代は至つて廉くしておきます。私が確なものであることは、ここに極印附の證書が之この通り」と免許狀を示す。下男があたりを見廻して「ここには病人らしいものは見當らねえだ。皆元氣で丈夫で樂し相で、藥の代りに藝人を欲しがつてゐるだから、他へ行つたがよ・うがあししよう」と言ふ。そこで醫者は「これは矢禮致しました」と一座のものに斷つて、出て行かうとすると、そこへ太鼓腹を抱へた病人 (*Der Großbauch Kranck*) が一本の杖にすがつてやつて來る。醫者に「あなたが評判のお醫師さんですか。どうかこの孕み女のやうな腹を診て下され。」と頼む。かくてかの復活祭劇中の大道醫者の場面のやうに、先づ尿の検査が行はれる。そして腹の脹れてゐるのは、飲み過ぎ食へ過ぎの結果だから、下劑をかけようと醫者が言へば、患者は「それぢやここにゐる客人達から出て行つて貰はにやなりません。随分臭い匂がしますから」等と言ふ。だが實はもう病人自身下劑をうんと吞んで十二回も廁へ通つたのだが、それでも腹は一向に樂にならぬのである。そこでもう一度醫師は下男に尿を出させて檢べる。と病人の腹が馬鹿者で一杯になつてゐるのである。病人が馬鹿者などは食へた覺えがないと言ふが、醫者はそれではお前さんのこの尿を暖い中に飲んで見なさいと言ふ。それを飲むと腹の中が騒ぎ出す。そこで醫者の出す鏡で口の中を見ると、馬鹿者の耳が見えるので、それを掴む。かうしてその馬鹿者共を腹から切開する手術が行はれることとなる。その間下男と病人との間に色々手術の危険なことに就て、



可笑味宜敷くあつて、下男は鉗子鉄海綿氣付け藥等を取り揃へる。やがて病人の首に白布が捲かれ、醫師は腹を裂く、病人が痛い痛いと叫ぶ。その中に醫者は鉗子で第一の馬鹿者（勿論、人形）を引き出す。「そら御覽、なんと言ふ大きな頓馬だ！ てつかい頭をしてゐるではなにか」と醫者。「少し樂になりましたわい」と腹を擦つて病人。「この馬鹿者は傲慢と言ふもので、尊大不遜生意氣思ひ上り等でお前さんの腹が脹れてゐるのも何の不思議はないわけだ。」その後又腹を覗いてゐた醫師が四角の馬鹿者を挟み出す。これは吝嗇と云ふ馬鹿者。次いで病人が脇腹へ手をやつて「ここにも馬鹿者が噛りついてゐます。」と言ふ。下男が「ほらほら鼠のやうに噛つてゐる音が聞えるぞい」と言ふ。やがて瘦せ細つて青白い馬鹿者が引き出される。嫉妬である。かうして次から次へと不貞貪食憤怒怠惰の馬鹿等凡て七大死罪が悉く取去られる。最後に馬鹿者の巢がまだ残つてゐる、へとへとになつた病人は葡萄酒を一杯貰つて、下男に威かされて、又もや手術を受ける決心をする。そして醫者が大汗を掻いて引き出した巢の中には山師の法律屋、手品師、鍊金術師、高利貸、詐欺師、幫間、悪口屋、嘔吐き、亂暴狼籍、忘恩不義、輕舉妄動、痴情怨恨、訴訟癖、借金癖等々ドクトール・セバステイアン・ブランドがその馬鹿船につんで運んだもの

が、うようよ蠢動してゐる。そこで病人はすつかり健康になつて、豫後の療法を訊く。醫者は我儘勝手を抑へ、克己自制するやうにと教へ、患者は大喜びで、まだまだ此の町には同じ病氣で苦しんでゐるものが澤山あるから、無償で治療して貰つたお禮に、その人達を紹介しようと言つて去る。醫者は尙も此の病氣に對する處方を説き、よく物事を分別し、自分の欲望を制し、賢い人の教と言葉に従へば、決して馬鹿者は生れて來ないと結ぶ。

場面は如何にも醜怪であるが、事件は一貫して開腹手術の經過に集中され、馬鹿者共の巢が取出される迄極めて緊張して發展し、三人の人物も亦それぞれその役割に應じて適切に描寫されてゐる。しかもその内容は此の作者特有の道義の教訓であるとともに、それを最も直截な具象性と、甚だ刺戟的にして滑稽な所作とを以て表現してゐるのである。そこには修身教育と諧謔文學との不可分の合致が見られるとも言ふべく、正にその意味に於て此の劇はハンス・ザックスの特質の最もよき代表作であり、當時に於ける文化一般の水準から見て、謝肉祭劇の如き寸劇の達しうる最も高い段階にある。されば今や此の作者によつて近代演劇史に於ける喜劇の第一歩が踏み出される時も遠くないであらう。

## 第八章 習作時代及び成熟期の戯曲 一五二七年—一五四九年

附、四十四年四十五年度の謝肉祭劇

ハンス・ザックスの生涯に於て千五百三十年代が謝肉祭劇の準備時代であつたとすれば、四十年代は大體に於て戯曲創作の習作時代であつたとすることが出来る。と言ふのも既に述べた通り、彼の劇作品總數二百十篇の中、三十年代の末迄に創作されたものとしては、悲劇三篇、喜劇十篇に對して、謝肉祭劇十三篇が存在するのに對して、四十年代になると、悲劇三篇、喜劇八篇、謝肉祭劇六篇の割合になつてゐるからである。だからその作品數から言つても四十年代はザックスの戯曲習作時代と言ふことが出来るばかりではなく、その内容から見ても亦謝肉祭劇によつて得られた劇作法上の經驗が、當然悲劇や喜劇の領域にも彼の詩才を導いて行くべき時代であつたのである。事實彼の最も初期の悲劇が全く謝肉祭劇風な簡單な形式を取つてゐるのに比して、此の時代の末期のものになると、漸く一定の劇形式を産み出すに至つてゐる。しかも此の間の消息は何よりも先づ當時の作品に於ける幕の分け方によつて知られる。

既に前章でも觸れた如く、ザックスは千五百十七年「ヴェナスの延臣」同十八年「戀愛の特性」二篇の謝肉祭劇を書いた後は、工匠歌を除いてその他の文學の分野に何等の創作意欲を示してをらず、殆ど十年の間その關心と研究は只管時局の重大なる推移と家業の健全なる發展に向けられてをつたのである。だから彼が再び劇創作に歸つた時、最初に取り上げた題材が、その内面的諸契機によつて當然幾幕かに分けられるべきものであつたとしても、彼がなほその様な脚色法の必然性を自覺せず、單に謝肉祭劇風なごく單純な對話形式から出發してゐる

るのは怪しむに足らない。即ち千五百二十七年正月元旦に書かれた悲劇の處女作

Tragedia von der Lucretia, auß der beschreibung Livii, hat 1 actus und 10 person. (ルクレティアの悲劇、リヴィウスの記述による。一幕人物十人。因にザックスの用ひた原本は Titus Livius, Römische historien mit etlichen neuen Translationen etc, z. B. 1523, Mainz, Im Besitz von Sachs,) は單なる對話又は獨白の羅列に過ぎず、そこには未だ何等特殊な劇構成上の考慮は拂はれてゐない。

先づ口上役 (Der einhold, 因にザックスの戯曲では、彼の謝肉祭劇とは異つて、例外なく必ず口上役、又はそれに相當するものが、序辭及び結辭を述べてゐる。) 登場、お辭儀をして言ふとあり、彼は觀客に向つて簡單に劇の内容を紹介する。即ちこれから、二人の羅馬の史家 Valerius Maximus と Titus Livius が書いてゐる物語、Sextusによつて凌辱されて自刃して果てた貞女の鑑 Lucretia の芝居を演ずると言ふのである。すると使者 (Der bot) が現れ「皆様御機嫌如何ですか？ 私は遠方から參つた者、Colatinus の奥方ルクレティアと言ふ御婦人が此の邊りに住つてはをられませんか？ 旦那様から御手紙を預つて來たのですが。」口上役「間違ひない。これがルクレティアの家ぢや。そら奥様が室から出て來られる。奥様、使の者が參つてをりますぞ。」そこでルクレティアが口上役にお禮を言つて、使者に手紙の事をきく。使者が「旦那様の處から海山越えて手紙を持つて參りました」と言へば、ルクレティアは彼を厚く勞らひ、遠く夫を思慕する

體宜敷くあり、手紙を受取る。以上芝居の發端で、場面はルクレティアの住居の玄關の間でもあらうか。今夫君が留守で彼女獨り孤閨を守つてゐることが示される。

すると此の家の下男 (Haubknecht) が、王様の長男 Sextus の來訪を通じ、一夜の宿を求めてゐると告げる。ルクレティアは鄭重に迎へるやうにと命ずる。然し下男はパリスを泊めたヘレナの例を引いて諫止する。彼女が此のお客様にはそんな心配は要らないと言つてゐる處へ、既にセックスツスが近づいて来る。彼は「日頃の誼みに免じて、一泊させて頂き度い」と頼んで、快く迎へられる。彼女は女中 (Ancilla) を呼んで、食事の支度を命ずる。だがセックスツスは馬の旅で疲れてゐるから、すぐに休ませて貰ひたいと言ひ、ルクレティアと慇懃に挨拶を交し、下男に案内されて寢室へ退く。

ここで第一幕、又は第一場が終るわけであるが、作者は何等の區切りをおかず、すぐそのあとを何の斷りもなく、女中「旦那様、どうしてこんな所へ？ 奥様はもうお休みになりましたのに。」セックスツス「いや、一寸お前に用があつて來たのだが、どうか奥様の處へわしを連れて行つてはくれまいか？」と續けてゐる。それから女中が、「どうして其慶事が出來ませう。奥様は私をイズルデ様 (Isid) と腰元ブラングル (Brangl) の間柄のやうに、信用してゐて下さるのに」と拒む。けれどもセックスツスは五十金で遂に女中を買収し、ルクレティアの室に案内される。ここで又場面が變る筈であるが、何等の注意書もなく、セックスツスの「世にも美しいルクレティア、戀ひ焦れてやつて來た私、あはれと思つて御身の腕に抱いて下され」と臺詞が續いてゐる。勿論ルクレティアが極力拒絶するので、或は千金を與へようと誘惑し、或は若し自分の意に従はなければ、彼女と彼女の下男を殺して同じ寢床に寝かし、二人が不義密通してゐるのを見たから、刺し殺したと言ひふらすぞと脅迫する。ルクレティアはアポロの神の名を

呼んで悶え苦しむけれども、結局男の意に従ふ他に逃れる道はなく、せめてそのあとで懺悔贖罪して身の汚れを潔めようと覺悟する。

次いで翌朝、女中がルクレティアを裏切つたことを後悔し、主家を去らうとしてゐる處へ、下男が來て、「こんなに早く何處へ行くのか？」と訊く。「放つてをいておくれ。お前様はうちにおいで！」と女中（彼女はそのまま退場したものであらう。）そこへルクレティア登場、自分の節操が汚されたことを嘆き悲しみ、下男に命じて、父親や友人の Publius Varius, Junius Brutus を呼ばせる。とすぐ父親の臺詞が續く。「娘何事ぢや、どうしたと言ふのだ？」とルクレティアがセックスツスに脅迫されて身を汚されたからには、死んで心の潔白を證明すると言ふ。それに對して父親、ヴァリウス、ブルーツス、更らに夫のコラティヌス迄が交る彼女の純潔貞淑であることを強調して、自決を思ひ止まらせようとしてゐる。だが彼女は此の汚辱の記憶は消えることがないと言つて、遂に自刃して果てる。コラティヌス始め皆々その可憐な最後を痛み悲しむ。次いでブルーツスが今は女のように泣き喚いてゐる時ではない。我々は暴君 Tarquinus 及びその息子セックスツスを倒さなければ、此の高貴な羅馬の婦人にも劣るものだと言ふ。ヴァリウス、コラティヌス、ルクレティアウス（父親）が各々復讐を誓ふ。そしてコラティヌスが如何にしてその復讐を遂げるかと問へば、ブルーツスは此の遺骸を市場に運び、市民にタルキニウスの暴虐を訴へ、その息子セックスツスの非行を示し、市民と相謀つて王を追放しようと言ふ。コラティヌスが賛成する。かくて口上役が「此の破廉恥な所業のためにやがてタルキニウスもセックスツスも羅馬市民と元老院によつて放逐され、セックスツスはガビアで殺されました。かうしてロムルス以來二百四十四年羅馬の王制は廢止され、不正の強權は終熄したのです。暴政のある所不和騷擾の絶える間はなく、正義人道博愛慈善の行はれる所、その國土も國民も平和の中に榮え、富と

榮譽を謳歌致しまする」と結辭を述べる。

扱て此の劇はリヴィウスの羅馬史中の物語に興味を牽かれた作者が、未だ何等の劇作法上の用意もなく、それを單に大膽に素朴に對話化したものに過ぎない。従つて時間や場所の關係がすべて無視され、室外も室内も同一場面であり、呼ばれた父親や旅にゐる筈の夫が直ちに登場して來てゐるが如き不自然さが到る所に平氣で行はれてゐる。人物の臺詞もその多くは筋の進行と各人の立場とを示す丈にとどまり、劇的所作を描寫するものが少い。だから作者も之が全く試作に過ぎないものであることをよく承知してゐたものであらう。當時この作は上演もされず、發表もされなかつた。(發表されたのは千五百六十一年彼の全集第三卷。)

悲劇「ルクレティア」を書いた後三年、詩人は再び劇作に筆を染めてゐるが、未だ作劇法上に確乎たる自信と自覺を持つてゐたとは思はれない。即ち千五百三十年二月三日作 *Comedia, darin die göttin Pallas die tugend und die göttin Venus die wollust verfehlt, und hat XII person und drey actus.* (喜劇、パラス女神德行を、ヴェナス女神快樂を辯護す。人物十二人三幕)は *Benedictus Chelidonius* (—1521) の *Voluptatis cum Virtute disceptatio* (1515. 快樂德行と討論す。宗教改革時代の演劇第五章参照)によつたもので、原作が三幕であるから、それを踏襲して之も三幕になつてゐるけれども、同年十二月二日作 *Tragedia, mit 24 personen zu agiren: Die Virginia.* (悲劇登場人物二十四人、ヴィルギニア)及び十二月八日作 *Comedia mit XII personen, das Christus der war messias sey.* (od. *Disputatio von mesie.* 喜劇人物十二人。基督は之眞の救世主、又は救世主問答)は何れも幕分けのない一場面の對話劇又は討論劇である。

然し「ヴィルギニア」になると先きの「ルクレティア」に比して臺詞や所作が作者の想像力によつて著しく生動し劇的に具象化されてゐ

る點を見逃すわけには行かない。例へばその發端に於て口上役が劇の荒筋を述べた後、*Appius Claudius* 登場、腰を下ろすと、彼はヴィルギニアに對する戀慕の情を甚だ情熱的に獨語する邊り、やがて女術の *Cleopatra* が來るのを見て、彼女を使つてヴィルギニアを誘惑しようとする處等は、詩人が取材したリヴィウスの羅馬史には全く見られない、作者独自の劇的構想によるものである、因にヴィルギニア物語はレッシングのエミリア・ガロツティと同様、娘の貞操を守るために、父親ヴィルギニウスが娘ヴィルギニアを殺すと言ふ筋書きであるが、此の劇では最後に大法廷が開かれて、悪人一同所罰されることになつてゐる。かの女術の如きは所刑人によつて頭から囊を被せられ川の中へ投げ込まれるために連れ去られて行く。

「救世主問答」はかのベネディクトボイレン降誕祭劇(中獨演七六頁参照)第一場の再生とも言ふべきもので、この論争では猶太人等が完全に論破され降服してゐる。且つアウグスティヌスが序辭及び結辭を述べてゐるのも古劇に據つてゐる。尙同年一月七日には聖書外典から取材された「トビウス劇」*Comedia: Die ganz histori Tobie mit seinem sun, hat XIII person und V actus.* (宗教改革時代の演劇第十二章参照)が脚色されてゐる。しかもこれは既に登場人物十四人、五幕から成つてゐるけれども、その製作年代にはなほ疑問の點があるから、今ここでは論外にして置く。

處てハンス・ザックスが眞にかくの如き單なる謝肉祭劇風の對話劇と、物語を骨子とする悲・喜劇との區別を認識し、事件の發展と舞臺構成とに留意するやうになつたのは、恐く彼が人文派劇及び古典劇の劇形式を知るに至つた時からであらうと思はれる。と言ふのが翌千五百三十一年一月九日作 *Ein comedi, mit 10 personen zu recitieren, doctor Rauchlin im latein gemacht, der Henno* (喜劇、登場人物十人。ドクトール・ロイヒリンの羅語劇ヘンノー。中獨演五一〇頁参照)はロイ

クリン)の Scenica progymnasmata oder Henno (1497, 宗教改革時代の演劇第五章参照)を改作したものとあり、同年一月十三日作 Ein comedi mit II person zu recidirn, der Plutus ein gott aller reichthumb, unnd hat fünf actus. (喜劇、登場人物十一人、凡ゆる富の神プルートス。五幕)はアリストフパネスの Plutos を翻案したもので、何れも五幕から成り、次いでその後の作 Ein comedi, das judicium Paridis, hat 15 personen und 5 actus (パリスの判決。1532, 1, 9) も Jacob Locher の Spectaculum de Judicio Paridis (1502, 宗教演劇第五章人文主義の演劇参照)を書き換へたもので、五幕から成つてゐる等、爾後の作品は何れも場面の變化又は事件の経過を示すために、幕分けを使用してゐるからである。即ち如何に作者がこの幕分けを利用してゐるかは、例へば「パリスの判決」第三幕を見ても知られる。ここではパリスがデュピターの命令で三人の女神の優劣を判断するためと呼ばれてくる。すると彼は先づ Juno に向つて言ふ。「ては貴女の素肌を拜見し、又他の御二方を拜見して、その上で誰方にも依估贖眞のない判断を致しませう。どうか私が百の眼を持つと言ふアルグスになることが出来たらよからうに。さうすれば正しく取調べて間違ひのない判断を下すことが出来ますものを。さあ着物を脱いで、御身體を見せて下さい。」然しデュピターはそんなことをここでされては困る。人目に着かない向ふの天幕の陰へ這入つて検査して貰ひ度いと注意する。かくて皆々退場して幕切れとなる。されば此の幕分けを使用するに至つた三十一年を以て、ザックスの劇作法上一時代を劃するものとする事が出来るであらう。

この事は同じく三十一年一月二十八日に書かれた Ein tragedi, mit II personen zu agiern: Der Caron mit den abgeschidnen geisten (悲劇、登場人物十一人、カロンと亡靈達)が正に謝肉祭劇から本格物の戯曲への過渡的段階を示してゐることによつても知られる。此の

劇は矢張り古典でも Lucianus の「死者の對話」(Scaphidum—das Totenschiff od. Totengespräch)から取られたもので、場面の變化を要しない問答劇であるから、一幕物になつてゐるけれども、その内容は甚だ眞面目な諷刺的悲劇とも言ふべきものである。

口上役の序辭が終ると、地獄の渡守り Caron は傳令の神 Mercurius と一緒に舟に乗つて登場、そこに待つてゐる亡者達に言ふ。(Hiefert Caron in ein schif mit dem got Mercurio, spricht zu den seln:) 即ち彼は彼等に河が大きく深く、舟は古るくて弱いから、地上で身につけたものは凡て捨て、身輕になつて舟に乗るやうにと言ひ、メルクルをして荷物の検査をさせる。最初に富や權勢を蔑しみ德行を重したと言ふストイック派の Menippus が杖と囊を捨て、メルクルの檢閲を難なく通過して舟に乗る。次にヴェナスの下僕だと云ふ Carmelius が装身具を始め紅い口黄色い髪、接吻戀文等愛慾に關係のある一切のものを去つて、舟に收容される。第三に Lampicus 王が王笏を捨てて舟に乗らうとして、メルクルに王冠も王服も權力勢力暴虐華美殘忍不正等をも置いて行けと命ぜられる。第四に力士 Damastias が勝利の冠、肥肉傲慢等を取り去つて許される。第五に富者 Craton が一切の財産を捨てさせられ、第六に軍人 Mico が甲冑掠奪殺戮を放棄させられる。最後に Philosophus が来る。舟の中からさきのメニプスが、その男は哲學者で上衣の陰に澤山の不潔物を匿してゐるから注意するやうにと叫ぶ。哲學者が上衣を脱ぐと、その上衣を見て、メルクルは嫉妬憎惡迷妄迷信虛偽空語妄想等が附着してゐるのに驚く。それらを取り去つてもまだ長い太い髭が残つてゐる。メニプスはメルクルに命ぜられて、舟から下り、手斧でその髭を刈取る。哲學者は泣き出す。と言ふのも若い者に尊敬されてゐたのも此の髭のお陰であつたからとはメニプスの解釋。やがて彼はメニプスにどうして貴君は愉快に楽しく笑つてをられるのか?と訊く。メニプス

は楽しく笑つても船の重荷にはならないからだ。さあ舟を出さう。錨を上げる、と言ふ。舟が動き出すと (Sie faren im schif dahin) 徳利を携へた Epicurus が遅れて馳けつけて来て、乗せてくれと云ふ。舟が止る。(Das Schif stet.) 彼は仲間と最後の酒盛りをしてゐて遅れたのである。彼も徳利や上衣を捨てて漸く舟に收容される。すると之等の亡靈達の關係者達が地上で大騒ぎをしてゐる物音が聞えてくる。メルクルがその説明をしてゐる中に舟は對岸に着く。亡者達は皆戸口から退場 (Die sel geen alle durch die tür aus) カロンとメルクルは舟で又もとの岸へ歸る。口上役の結辭、彼は無慾恬淡、徳行を重じたメニプスを推賞してゐる。

ここでも亡者達が交る交るメルクルによつて裁かれてゐるのは、依然として顔見世形式であるが、舞臺の一方に亡者達が待つてゐるとそれを迎へて来たカロンが、彼等を對岸に運んで、再び新しい亡者を迎へに歸つて行くと云う趣向は、映畫の一場面でも見る様に劇的である。従つて舟が重要な役割を果してゐるのであるが、後に述べる様に舟が實際に舞臺で用ひられたと言ふ確證が見られるのはなほずつと後年のことであるから、此の劇も「ルクレティア劇」と同様、上演用として書かれたものではなく、原典の「對話」を劇形式に變へて見た丈のものではないかと思はれる。

以上挙げたものの他に三十年代の作としては

1. Ein comedi, mit 29 personen zu recidieren. Die Stulticia mit item hofgesind. (馬鹿の眷屬。1532, 2, 1.)
  2. Kampf-gesprech: Das alter mit der jugend. (討論、老年と青年。1534, 1, 12.)
  3. Comedia oder kampf-gesprech zwischen Juppiter unnd Juno. (喜劇、ジュピターとジュノーの討論。1534, 4, 30.)
- の三篇があるが、「馬鹿とその眷屬」は Erasmus の Encomium

moriae (Lob der Torheit, 1509) に依つたもので、「馬鹿の女神」の前で各階級の代表者が順次自らの愚行悪徳を紹介して、女神から馬鹿の帽子を授けられると言つた昔作らの顔見世形式であり、他の二篇も一種の老若の優劣論、又は男女何れが政權を執るに適當するかの討論であるから、恐くそれ等は謝肉祭劇並に上演されたことがあるが故に、作者はその戯曲目録の中に擧げてゐるのであらうが、實際は劇詩と云ふよりも、説話詩又は討論詩として取扱はれるべきものである。

かくして千五百三十六年十月八日 Comedia. Die gantze hystori der Hester zu recidirn, hat xij person unnd drey actus. (喜劇、エステル全史、人物十三人、三幕) が創作される時が來たのである。此の劇に就いては既に宗教改革時代の演劇第十一章エステル劇の項で詳細に論じたから、今ここでは、之こそ十六世紀に盛大を極めた聖書物語劇の先驅をなすものであるとともに、民間劇、特に謝肉祭劇と人文派劇との中間に立つて、その架橋をなすものであることを指摘するに止めておく。されば此の劇は千五百五十九年八月八日七幕に擴大された改作が出來てゐるのである。その上此の劇で作者が幕分けを用ひてゐること、人物の行動に努めて動機を興へようとしてゐること、馬鹿役を登場させてゐること、又場面を緊縮節約しようとしてゐることは、従來の劇創作から習得された作者の作劇技術又は舞臺經濟上の智識の利用を示すもので、少くとも當時の演劇の一般水準から言つて、見逃し得ない長所であるとしなければならぬ。それにも拘はらず此の劇が聖書の記載する處に従つて、エステル物語の全部を劇化してゐるために、劇的所作、人物の性格、事件の具象性等から來る眞の劇的效果が甚だ稀薄なものになり、臺詞による單なる筋の紹介に墮さうとしてゐるのは、之亦當時の民間劇の素朴さと幼稚さとに依存するものである。されば此等の缺陷を如何に打開して行くかが、作者に課せられた今後の問題である。

却説かくの如くハンス・ザックスは兎に角三十年代に於て既に民間劇、古典劇、及び人文派劇等から題材を求め、それによつて劇作法上に自得する處が多かつたのであるから、それらの経験が四十年代に至つて彼の關心を益々劇創作に向はせたのは當然のことである。しかも時代は正しく演劇隆昌の機運を孕んでをつたのであるから。今や詩人は年輪四十歳代の働き盛り、家産漸く起り、道心又愈々健實、文筆の業も更らに一段と光彩を放つに至り、民間詩人としての彼の名聲は内外に喧傳されつつあつた。しかも事局は益々多事多端、物情又騒然たるものがあり、作者の健筆によつて物語られるべき史實、警告されるべき事件も尠なからず存在したから、詩人は或は皇帝のニールンベルク市訪問記を敘し、或は土耳其古軍征討の歌を詠じ、或は獨佛葛藤の解決を念ずる詩を作り、よつて以て敘事詩的作風から著しく劇詩的作風に近づいて行くのであつた。(本書第四章参照)

果然詩人は四十四年十一月二十五日齡正に五十歳の年、過去三年間筆を絶つてゐた劇作へ再び歸り、此の度はポッカチオのデカーメロンの中の愚かな畫家 Calandrino とその仲間に関する物語(第八十三話)を謝肉祭劇化してゐる。即ち Fin fabnacht-spiel mit fünf personen. Der schwanger pauer. (孕み百姓 Nr. 16) は彼の謝肉祭劇中文藝復興期の外國文學から題材を得て脚色された最初のものであつて、當時作者が如何にその讀書から得た智識を創作に應用しようとしたか、又その創作の方向が如何に敘事詩から劇詩へと向つてゐたかを示すとともに、それは又謝肉祭劇に於ける取材の範圍に一新方面を開拓したものであることを意味する。

先づ百姓 Merten が登場、今度の謝肉祭をどうして過すかを相談するのだと言つて、仲間を待つてゐる處へ Hans と Urban がやつて来る。ウルバンは隣の百姓 Kargas と云ふ猶太人の所へ百グルデンの遺産が轉げ込んだから、一つ饗らせようぢやないかと言ふ。ハンス

があんな吝嗇坊が金など出すものかと言へば、ウルバンはさう言つたものでもない。彼奴の散財してゐる處を見たこともあると答へる。メルテンが吝嗇坊だとか吝嗇坊でないとか、ここで争つてゐても仕方がない。丁度あすこへカルガスがやつて来たから、一つ實地にぶつかつて見ようぢやないかと言ふ。そしてカルガスを呼び入れて、伯母様が死んで遺産が這入つた相だが、少し寄附して貰ひたい。皆で楽しく謝肉祭を祝はうぢやないかと申出る。だがカルガスは此れ迄貧乏してゐた時は仲間はずれにして可哀相だとも思つてくれなかつた癖に、今更らお前様方の悪計にのる程馬鹿ぢやないと拒む。ウルバンとハンスが如何に説いても肯き入れずに行つて了ふ。そこでハンスがウルバンとメルテンに向つて「これぢやとても駄目だから他の手段をしなれば」と、その方策を授ける。即ち明朝彼に逢つたら、三人で交る交る顔色が悪いがどうしたのかと訊き、カルガスを重病人にして了ふ。そして醫者と結托し、尿を検査させ藥代を拂はせ、その金を捲き上げようと云ふのである。ウルバンが「そいつは良策だ。それカルガスが家から出てくる處だ。わしが先づ始めるから、お前達は納屋の裏に匿れてゐてくれ」と言つてゐる處へ、カルガスが又やつて来る。ウルバンが「お前さん顔色が悪いが、どうしたのか？」と尋ねる。「そんなに青い顔をしてゐるかね。どうもわしも身體の調子が變なやうな氣がするだ」とカルガス。そこへメルテンが出て来て「やあお早よう。おや何處か悪いのかい？半分死にかかつてゐるやうに見えるぜ」と威かす。「ウルバンも先程わしの容態がひどく悪いやうなことを言つた。だが、それ程苦しい所もないのだが」とカルガス。メルテンが「お前さんの病氣は腹の中にあるのだ。早くお醫者に見せたがよい」と奨める。とそこへ又ハンスもやつて来て「ひどく瘦せて青醒めてゐるぢやないか！途中で倒れない中に早く家へ歸つて寝たがよい。」と教へる。カルガスは「何だか胸の邊りが壓されるやうだ。心臓が悪いのだつた



ら大變だ。二人の衆わしを家へ連れてつて下され。だん／＼気分が悪くなつてくるやうな氣がする」と訴へる。かくて二人は彼を連れて行つて椅子に掛けさせる。(Sie führen vnd setzen ja auf ein Sessel nieder. 即ちここから場面は街上から病人の室へ移つたものと想像される)するとウルバンもやつて来て、「そらわしが言つた通りだ。此の病氣は重くなるぞ。布團をかけて暖かくし、尿を取つて見たがよい。わしは醫者の處へ一走りしてくる。」と飛び出す。後で病人は手足が震へる。腰が引攣る。腹がひどく痛んで來ると、苦悶し、「金が出來ると身體が悪くなる。財産と健康と、二つうまいことはないものだ」と嘆いてゐる。やがて醫者の Simon がやつて来て、尿の検査をし脈を見る。そして「これは未だ嘗つて男にはない病氣だが、お前さんには一寸教へ兼ねる」と言ふ。病人がたつてと言ふので「本當を言へば、お前さんは子供を孕んだのぢや」そこで病人は兩手を頭の上で打ち合せ (Der Kranck schlecht sein hend ob dem Kopf zusam.) 悲しんだり、恐つたり嘆いたりする。「かうなるのも女房が悪いのだ。子供を産み落したら、女房の奴めどうしてくれるか覺えてゐるがに記してない。」と呶鳴り散らし、乳がないのにどうして赤坊が育てられようかと、色々先々の事を案じ煩ふ。醫者は大いに同情して、良藥を進げるから安心したがよいと慰め、上等なライン酒、その他貴重藥や肥えた鶏三羽が必要だから、費用を出して貰ひ度いと言ふ。カルガスはひどく喜んで金を出し、「費用は厭はないから、どうか此の子を墮ろして下さい」と頼む。かうして醫者が藥を調合して来る間暫く休んでをつたがよいと言つて出て行けば、メルテンは送つて行かうと、醫者のあとを追ふ。(ここで病人は退場したものらしい)すると醫者はメルテンに金を渡して、これで鶏や魚を買つて明日の晩は自宅まで皆して一杯やらう、又病人には此の葡萄酒を飲ませておけば大丈夫

夫、何れ近い中に又來て見るからと言ふ。かくて彼等は退場。次いで病人が杖に縋つて出てくる。(Der Kranck geht ein an ein Stecken. そして彼は先の椅子に腰を下ろしたものと思はれる。)メルテンが例の葡萄酒を持つて來て、挨拶宜敷くそれを病人に飲ませる。病人はそれを飯むと、「藥が効いた様だ。氣分が前より大部よくなつてきたわい。やああすこへ先生が見えたぞ。」と喜ぶ。醫者が來て、彼の脈を調べ、病氣はもう癒つたから、二度と子供を産むやうなことはないと言ふ。病人は立ち上つて (Der Kranck steht auf) 醫者と握手し、お陰で三日前と同じ様に丈夫になつた。子供を産まうとしたこと等は嘘のやうな氣がすると大喜び。隣人達と交る交る握手し、皆の好意は忘れられない、脈を殺して御馳走しようと言ふ。最後に醫者が結辭を述べて、以上の芝居には三つの教訓を含んでゐる。餘り吝嗇でも惡いし、餘り亂費するのもいけない。即ちその中間を行くのが一番よい方法であると言ふ。

隨分人を喰つた馬鹿話であるが、元來文藝復興初期の作品の特質を代表する滑稽物語を、巧に換骨奪胎して、その人物時代場所等をすつかり十六世紀に於ける獨逸の農民に移し變へた手際は、さすがに此の作者の詩才の凡庸ならざることを證するものと言はなければならぬ。勿論人物の出入や場面の變化や時間の経過は凡て觀客の想像力に任せられたままであるから、屢々不自然であつたり不合理であつたりするけれども、それ丈その缺陷を補ふための巧妙にして寫實的な對話と處々重要な箇所に入挿されてゐる卜書によつて、事件の全貌は極めて明瞭に寫されてゐる。即ち場面は始め街上、次ぎは病人の室、時日はカルガスの臺詞によつて前後三日に渡つてゐることが知らされてゐる。只作者が例によつて極めて安易に其等の關係を取扱つて、場所の移動と時間の間隔を寫すための何等具體的な手段を構してゐないのは、當時の脚色法と舞臺裝置と觀客の要求とが未だ甚だ幼稚であつたこと

に歸因する。

何れにしても「孕み百姓」はザックスの謝肉祭劇中一時期を劃するものであるが、之に次いで四十四年十二月十日 *Fasnacht spiel* mit 5 Personen: *Die laster Arzney*. (惡徳の藥。Nr. 17. 醫者の前へ、嫉妬家 いばなりやう 吝嗇坊 しんさくぼう 望家 のぞみや 怒りん坊の四人が交る交る現れて、自分の病氣を説明し、醫者からそれ／＼の惡徳に對する教訓を興へられて病氣が癒ると云う筋)なる簡單な顔見世形式のものと、翌四十五年十一月十九日 *Ein Fasnacht Spiel mit vier personen: Der Teuffel mit dem alten Weyb*. (惡魔と老婆。Nr. 18. 惡魔の力でも如何とも仕難かつた非常に仲のよい夫婦者を、惡魔が妻君には夫が間男をしてゐると告げ、夫には妻君が彼を毒害しようとしてゐると騙して、二人に大喧嘩をさせ、遂に惡魔をさへも、此の婆さんには一籌を輸して逃げ出すと云う筋)なる傳統的な一種の惡魔物語とを作つて、小手調べをした後、詩人は再び本格的戯曲の創作に立ち歸る。即ち「惡魔と老婆」と殆ど前後して、

*Ein klegliche tragedi des fürsten Concreti, mit zehen personen zu spielen, und hat V actus, od. Gismunda mit Guisgardo*. (モンタレート公の悲劇。人物十人、五幕。又はギスムンダとギスガルト。1545, 11, 17. *デカメロン*第三十一話)が出来、次いで

*Ein comedi mit dreyzehen personen. Die Violanta* (喜劇、人物十三人、*ヴィオランタ*。1545, 11, 27. *デカメロン*第四十七話)

*Ein trawrige tragedi, mit sieben personen zu spielen: Von der Lisabetha*. (悲劇、人物七人、*リサベータ*。1545, 12, 31. *デカメロン*第三十五話)

*Ein comedi mit 13 personen, die geduldig und gehorsam marg-gräfin Griselda*. (喜劇、人物十三人、温順貞淑なる邊疆伯夫人、*グリセルダ*。1546, 4, 15. *デカメロン*第百話)

*Ein comedi mit 10 personen zw aigiren: die zwen getrewen freunt Titus und Gisippus*. (喜劇、人物十人、二人の親友、*ティッス*と*ギ*

*シプス*。1546, 5, 25. *デカメロン*第九十八話)

が孰れもボッカチオの*デカメロン*から取材されて脚色された。此等の詩作は勿論未だ近代劇に於けるが如く、人物の性格や境遇、遺傳等から發展して行く深刻な悲劇的事件や、人間の心理の微細な解剖等を示してはゐないけれども、しかも原作が何れも人口に膾炙してゐる有名な物語である丈に、それが如何に劇化されてゐるかを見ることは、當時の作者の劇作法上の段階を知る上に最もよい便宜を與へるものと云ふことが出来る。されば今ここでは上述の諸劇の代表作として「*ヴィオランタ*」を少しく詳細に検討して見ることにしよう。

*ヴィオランタ*は、*デカメロン*によると、シシリー島 *Trapani* の貴族 *Messer Amerigo* の娘へ、父の奴隸 *Pietro* (實はアルメニアの貴族 *Fineo* の實子 *Theodoro*) と互に憎からず思ひ合つてをいつたが、或る時アメリカの別荘へ家族一同保養に行つた歸路、若い二人は家族のものより自然先行するやうになつた。折しも俄に夕立が來たので、二人は近くの小屋で雨宿りをする。これが機因となつて二人の戀愛は人知れず實を結び、遂に*ヴィオランタ*は懷孕する。*ピエトロ*は事實の發覺することを恐れて逃亡したいと言ふが、*ヴィオランタ*は絶対に愛人の名は明かさなからと言つて、彼を止める。その中に妊娠の事實を隠し切れなくなり、彼女は母親に虚構の物語を告げて、救助を求め。母親も一時は烈しく怒つて見たものの、結局密に娘を或る小作人の家へ匿す。月満ちて産み時が來た時、折り悪しく父親が蒼鷺狩りの途次附近を通りかかり、娘の陣痛の呻き聲を聞いて、母と娘を發見する。そして父親の恐ろしい糺問に合つて、娘は遂に一部始終を告白する。そこで父親は一方代官 *Currado* に訴へ出て、*ピエトロ*を笞刑と絞首刑に處せしめるとともに、他方娘には毒と短刀を送つて、兩者何れかの死を選べと言つてやる。

處が丁度 *ピエトロ* が裸にされて笞打たれ乍ら刑場へ追はれて行く時、

アルメニヤから法王廳へ派遣された三人の使節が、旅館の窓から此の有様を見てをつた。しかもその中の一人 *Pinco* はピエトロの胸に大きな黒子があるのを見て、その罪人が十五年前 *Lajazzo* の海岸で海賊に奪はれた自分の實子であることを知る。かうして絶えて久しい親子の再會から、*フィンネオ* は早速代官の所へ走せつけ、事の次第を物語る。そしてピエトロはもと／＼*テオドロ*と云ふ自分の實子で、*ヴィオランタ*とは對等の身分のものである。それ故若し二人は正式に結婚することが出来るのだから、暫く處刑を待つて貰ひ度いと願ふ。代官は驚いて*アメリカ*を呼び、此の由を傳へる。*アメリカ*は早速娘の處へ使をやつて、間一髪の處で、娘の命を救ふとともに、*フィンネオ*の宿舎へ馳けつけて、*ヴィオランタ*と*テオドロ*の結婚を提議する。勿論*フィンネオ*始め若い二人に異議のあらう筈はなく、ここに忽ち兩家の縁談は成立し、*フィンネオ*が羅馬から歸り、新婦が産褥を離れた後、盛大な結婚式が擧げられた。その後*テオドロ*と*ヴィオランタ*は新郎の故郷へ歸つて、末永く平和に暮らしたと言ふ。

處で以上の様な物語を、*ハンス・ザックス*は如何に脚色してゐるか？先づ例によつて口上役 (*Der ehrenhold*) 登場、宿の主人、客人、夫人、令嬢等觀客一同に挨拶の言葉宜敷くあつて、*ボッカチオ* (*Bo-carius*) の傳へる事實譚、*シンリア*は*トラバニア*の騎士*アメリカ*の娘とその奴隸との不義の戀から如何様な珍事が出来したか、暫く御靜聽あらん事をと、芝居の内容を簡単に紹介する。口上役が去ると、奴隸 *Theoderus* が登場、子供の頃此の國へ連れられて來て以來十二年、主人に使へて幸福な日を過してはゐるが、未だに自分の肉親が誰かわからないと、身の不幸を嘆いてゐる。處へ騎士*アメリカ* (*Amerigo, der Ritter*) が二人の下僕を従へて出てくる。彼は*テオデルス*に何故そんなに悲しんでゐるのかと問ふ。そこで*テオデルス*は自分の本當の両親を教へて貰ひ度いと嘆願する。すると*アメリカ*が、十二年前(原作

では十五年) *ゲヌア*の海賊船からアルメニア (*Armenien*) の少年少女を買ひ取つたこと、*テオデルス*はその中の一人で、その後洗禮を施し奴隸頭とし、眞の父親も及ばぬ程可愛がつて來たことを話し、今後もし事に精を出し、婦人達によく仕へてくれれば、我が子の様に大切にしていやるぞと慰める。*テオデルス*は厚く感謝して忠誠を誓つて去る。次いで夫人と*ヴィオランタ* (*Die frau und tochter Violanta*) が來る。*アメリカ*は今五月の花盛り、*テオデルス*が待つてゐるから庭へ行つて遊ぶがよい。自分もあとから行くからと、一人を去らせる。あとで彼は二人の下僕 *Mark* と *Lux* にそれぞれ仕事を命じ、自分はこのから散歩して行くと言ふ。ここで*マルクス*は酒樽の荷造りをして*ヴェニス*侯に贈呈する目録を作り、*ルックス*は邸内の管理をするやうに命ぜられてゐるのは、全く作者の創意によるもので、*アメリカ*の勢威環境を示すためのものと思はれる。かくて「主人退場、又二人の下僕も走り去る」とあり、續いて「*テオドロ*ス、*ヴィオランタ*の手を引いて入場、*ヴィオランタ*云々」(*Der herr geht auß, auch laufen die zwen knecht auß, Theoderus firt die Violanta bey der handt hinein und Violanta die spricht:*) とト書があつて「*テオデルス*や、大變の降りだわね。此の古るい納屋で一寸雨宿りをして行きませう。まあ御覽恐ろしい稲光なこと、おーひどい雷様、これではとても先へ行く氣がしないわ」とある。即ち場面が變化してゐるわけであるが、作者は前場の登場人物を全部退場させることによつて、場面の變化する用意をしてゐるのである。*テオデルス*は*ヴィオランタ*の言葉に早速同意し、御主人様方はずつと後におなりだから、村で雨の過ぎるのを待つてをられませう。あゝ何時迄も此の雨が續いてくれたら、どんなによからうと言ふ。*ヴィオランタ*も同じ氣持、子供の頃から彼を慕つてゐたと言へば、男の方でも、自分の切ない思ひを打ち明けることが出來ず、只優しい姿をかい間見て、心を慰めてゐたと語り、二人は互

に相抱き合ふ。そして兩人堅く行末を誓ひ、男は女に指輪を與へる。だがお父様に知られては此の國にゐられないから、決して秘密を洩らさないやうにと、男は女に頼む。女も快く承諾する、やがて「雨も止んだからそれでは出掛けませう。旦那様も奥様もその中追ひつかれましよう。それもうあすこにお見えになつた。でも今の事文はどこ迄も氣付かれないやうに」と男は言ひ乍ら、二人は退場。

第二幕。下僕のマルクスとルックスとがヴィオランタとテオドルスの間柄を怪しんで、色々と噂してゐる。マルクスが間違ひの起らない中に一層御主人に話して了ふと言ふけれども、ルックスは證據も充分ではないのに、滅多なことを話して、失敗つては大變だ。國中のことは何もかもよく眼の届く御主人のことだから、何れは御自分で氣がつかれるだらうと反對する。二人が既の方へ馳けて行つて了ふと、ヴィオランタが登場。悲し相にして腰を下ろし、母の教を守らず一時の情にかられて身を汚したことを嘆いてゐる。テオドルスが來て、彼女の沈み込んでゐる理由を尋ねるけれども、彼女は黙して答へない。男が重ねて苦樂をともしする筈ではないかと言ふので、始めて女は身重になつたことを打ち明ける。それを聽いて男は吃驚、ここにかうしてはゐられないと言へば、女は、お前に捨てられてどうして生きてゐられようかと言ふ。そこで二人は相談して、この事が知れてはテオドルスが何麼重い刑罰に處せられるかも知れないから、彼の名前文は絶対に洩らさず、母親に丈適宜に事實を話して、何とか處置して貰ふこととする。とそこへ母親が來かかるので、テオドルスは去る。母親も娘の様子を心配して色々と問ひ糺すが、娘は頭を兩手で支へ、悶え嘆いて死んで了ひ度いと言ふばかり。母親にどんなことでも宜いから話して御覽、事實はどうとも仕て見ようがなくなつても、又他に何とか手段方法もあらうと言ふものと言はれて、漸く娘は泣き乍ら、身重になつたことを告げる。相手の男は誰かと訊かれて、お父様の處へお客に來る

人だと言ふ。それでは誰にも知れない中に、その人と結婚して了へばよいと母親。その人はもう此の國にゐないと娘、では田舎へ行つてこそり身輕になつて來たらよい。入用なものは何でも送つて上げるからと、母親はこま／＼と注意を與へる。かうして娘は泣き乍ら二人とも退場。此の幕は甚だ寫實的で、最初の下僕達の噂話をしてゐる處も巧手を配置であるし、ヴィオランタ對テオドルス、及びヴィオランタ對母親の對話もそれぞれ情味豊かな世話場である。恐く民間詩人としての作者の長所を最もよく發揮してゐる傑れた場面の一つであらう。

第三幕。裁判官(Dar Richter)が刑吏を連れて出てくる。刑吏の一人が訴訟のあるものは訴へ出よ。法官が廣間に出張してをられると喚ぶ。が一人も訴人がないらしいので、判官は暫く海岸へ散歩に行つてくると、席を立たうとする處へ、アメリカゴが二人の下僕を連れて訴へ出る。即ち自分の奴隷が娘を凌辱したから、其奴を罰して貰ひ度いと云ふのである。判官が本人が自白したのか、それともあなたが現場を押へたのかと問ふ。そこでアメリカゴは、原作にある通り、狩の途中娘の陣痛で苦しんでゐる處へ行き合せて、事の真相を糺明した次第を物語る。判官が直ちにテオドルスを捕縛するやうに命令を下す。刑吏達が出て行く。するとアメリカゴは下僕のマルクスに短刀と毒酒を與へ、娘に毒杯を飲ませるか、さもなければ娘を眞二つに切るやうに、赤坊は石で打ち砕いて犬の餌食にしろと命ずる。母親が出來て來て兩手を擧げ、アメリカゴの足下に伏して、二人の命乞ひをするけれども、激怒してゐる彼は、益々猛り立つて、夫人を叱り、下僕に刑の執行を急ぐ様にと、嚴重に吩咐ける。下僕が出て行くと、母親は娘を失ふ悲しみにかき暮れ乍ら、夫とともに退場。あとで判官は二人の人間を殺し、自分の血で自分の手を汚すとは、何と云ふ無情な人だ。そんなに厳しくする必要は少しもないのと言ひ乍ら出て行く。此の場でも作者は溫和な判官と悲嘆する母親とを、殘酷なアメリカゴに對立せしめて劇的效果を揚

げてゐる。

第四幕。判官が廷丁達 (Die statknecht) を連れて登場。彼は可哀相だが、あの奴隷は主人が望むのだから仕方がない。絞首の刑に處しなればならないと言つて、テオドルスを呼ばせる。命を受けた廷丁が出て行くと、テオドルスの父親 Phineus が登場、廷丁の一人に、自分は旅の者だが、四邊が騒しいのは何うした譯かと訊ねる、廷丁が主人の娘を犯した奴隷の裁判があるのだと教へる。そこへ所刑人 (Der Henker) が廷丁達と一緒に罪人を連れて来る。フィネウスはその罪人が十二年前に海賊に奪はれた自分の子供に似てゐるのを怪しむ。その中に奴隷は判官の前に連れて來られる。判官が彼に笞刑と絞首刑とを宣告し、權杖を折る。テオドルスは戀のために若い生命を捨てなければならなくなつた身の不幸を悲しみ、愛人の名を呼んでその幸福を祈り、私はお前のために死んで行くと嘆く。判官は所刑人に餘り酷いことはしない様に、寛大に處罰せよと吩咐ける。處刑人と廷丁とが畏こまつて、罪人を連れ去る。フィネウスは罪人の様子をぢつと熱視して (Phineus sieht scharpf auf den armen) 胸に黒子のあるのは自分の息子と同じだがと獨語し、若いお方、お前さんは何處の生れの者かと訊く。テオドルスは國はアルメニヤ、十二年前に此の國に賣られて來たと自分の身の上を話し、もとの名はと問はれて、テオドルスと答へる。そこで父は息子の頸をかき抱き、お前はわしの息子ぢや、これはなんとしたら宜からうかと言ふ。彼は處刑人に刑の執行を猶豫するやうに頼む。處刑人も快く承諾して、上衣を罪人の腰の邊りに着せて、彼を連れ去る。それから父親フィネウスは早速判官の前へ出て、事情の一部始終を話し、判決の取消しを請願する。彼はアルメニヤ王から土耳古征討軍募集のためローマ法王廳に派遣された者、自分の子供は相手の娘と結婚して決して恥かしいものではないと説明する。判官は直ちに廷丁をしてアメリカゴを呼ばせる。そしてフィネウ

スに向つて、御子息の助かるやうに出来る限り盡力しようと慰めてゐる處へ、下僕を連れてアメリカゴが来る。判官は今の不思議な物語を話し、彼に和解を勧める。アメリカゴも大いに喜んで、娘がもう死んでゐなければよいと言ひ乍ら、下僕をヴィオランタの處へ、廷丁をテオドルスの處へ遣はして、兩人を助けるやうにと命ずる。下僕と廷丁とが走り去ると、アメリカゴはフィネウスを懇に我が家へ招待する。フィネウスは御嬢様の命に別條がなければよいがと心配し乍ら、皆々退場。此の幕では複雑な交渉が極めて要領よく脚色されてをり、各人物の感情も甚だ鮮明に描寫されてゐる。

第五幕。アメリカゴとフィネウス登場。アメリカゴが使者の首尾如何と待つてゐると、フィネウスが直ちに下僕の歸つて來るのを見付ける。下僕のルックスが娘も赤兒も無事で、今直ぐあとから來ると報告。アメリカゴは兩手を舉げて喜ぶ。ヴィオランタが赤兒を抱いて、父親の前に膝まづく。彼女は「お懐しい御父上様、二人とない御情け深い命の親！どうかお赦し下さいませ。悪い事を致しました。」と詫げる。父は彼女に兩手を差し出し、「また命のあつたからには赦しもしようが、不義は御家の御法度ぢや」と戒める。母も出て來て娘を抱き締め、娘の無事を喜んで神に感謝すれば、娘の方でも母の慈悲に感泣する。更らに母は赤兒を腕に抱き取り、孫の幸運を神に祈る。かうしてゐる處へ、服装を調へたテオドルスが来る。父親フィネウスは多年愛子の身の上を思うて悲嘆に暮れてゐた國元の母親も、慙かし満足するであらうと言ふ。さう云ふ父をテオドルスは抱いて、父親の慈愛に厚く感謝する。それから彼は父に勧められて、アメリカゴの足下に平伏し、一時の情に驅られて愛嬢を誘惑した罪を謝す。アメリカゴは彼に手を與へて助け起し、奴隷としては赦すことが出来ないが、身分あるものと判つた今は條件附きて承服しようと言ふ。テオドルスがどの様な條件でも従ふと言へば、アメリカゴは娘と正式に結婚して呉れるかどうかと問

ふ。勿論テオドルスに異議のあらう筈はない。そこでアメリカは娘の方に向ひ、娘の意志を確める。娘も亦お父上の御意のままと答へる。フィネウスも勿論容姿容貌氣質年齢財産身分行儀作法ともに申分ない良縁であると、即座に承諾する。かくて、アメリカは兩人を一緒にして、婚姻の祝福を與へる。更らに騎士夫人が新婿を喜び迎へ、テオドルスの父親にも祝意を述べ、こちらも亦立派な嫁女を貰ふことが出来たと大喜び、彼の發議で樂師の奏樂につれて一同舞踊。踊りの後でフィネウスは船の用意も出来てゐるからと訣別の挨拶を述べれば、アメリカは港迄送つて行つて、最後のお別れを致さうと——かくて皆々列を正して退場 (Sie geht alle aus in der Ordnung.) 口上役登場、以上のコメディから三つの教訓——戀の情熱は用心警戒しないといかに隠してもやがては顯れて身の恥辱破滅になること、第二には事を處理するには細心の注意を以て當ること、然らざれば不幸と間違ひが生ずるから、手段目的を熟慮して、禍を轉じて福となす様に、第三には人はよし如何なる死地窮境に陥らうとも失望落膽してはならないこと、神助は奇績によつて下り、悲しみは變じて喜びとなる——と説き明す。

扱て以上の劇物語を原作の物語と比較して第一に注目すべき點は、人名と地名の他は人情風俗悉く全く獨逸化されてゐることである。と云ふことは要するに、作者の意圖する處が物語の單なる對話化にあるのではなくして、物語に寫實的具象性を與へ、依て以て理解を容易ならしむるとともに、その劇的效果を高めようとしてゐることを意味する。事實此の劇にあつては作者の創意によつて甚だ劇的に構成されてゐる場面が各所に見られるのである。既に第一幕に於てテオドルス (又はテオデルス) の身の上とアメリカ、その夫人及び娘が紹介され、次いでアメリカの環境と勢力が彼と二人の下僕との問答で暗示されてゐるのは、發端の場として如何にも巧妙な配置である。かくて登場人

物が皆それぞれ所用を帯びて退場、舞臺が空虚になるのを待つて場面が變化するのも、作者の用意周到な舞臺技巧と言はなければならぬ。次いでテオドルスとヴィオランタの戀の成立する場面であるが、ここでも作者はヴィオランタをしてそれが單なる野合ではなくして、正當な結婚であることを主張せしめたり、テオドルスをして愛人に指輪を與へさせたりして、讀む物語と見る劇との相違すべき點を明かにしてゐる。第二幕第一場はことに作者の創意になるもので、前場の下僕二人を出してその後の情勢を知らせてゐるのは、却々に達者な演出法である。それからヴィオランタがテオドルスと妊娠の後始末に就て相談し、それを母親に打ち明ける邊りは、作者の實生活からでも取材したかの如く、よくその風景を盡してゐる。

かくて第三幕、事件は高調に達する。裁判の場は當時好んで脚色上演されたものであるが、ここでは有緊に獨特な構成を持つてゐる。即ち判官の温情と母親の悲嘆とを描いて、激怒してゐるアメリカの殘忍酷薄な處置とに對比してゐるのは、先きにも言つた通り、父親の性格を一段と印象的に劇的に浮き出させる効果を狙つてゐるのである。更らに第四幕、判決の場に於ても、判官が犯人を取り調べることなく、直ちに刑を宣告してゐる處は、不自然な感じを起させるけれども、複雑な事件がここで簡潔に纏められてゐるのは、全く作者の功績としなければならぬ。最後に第五幕、和解の場も、作者は原作の平面的敘述を立體的に活寫してよく人情の機微を穿つてゐる。アメリカ夫人が孫を抱き取つたり、フィネウスが國元の妻のことを話したりする邊りは秀れた着想である。ことにアメリカがどこまでも嚴正な態度で結婚の條件を持ち出す處は、如何にも獨逸的騎士氣質そのまま、彼の性格に一貫性を與へるとともに、作者の戀愛觀の發露したものと云ふことが出来る。只原作にあつてはヴィオランタは未だ産褥にあり、フィネウスは羅馬へ行く途中にあるため、それぞれ場所も時間も各別に行

はれてゐる事件が、ここでは舞臺經濟の上から凡て同時同所で演ぜられてゐると言ふ不自然が目立つけれども、作者はその不自然を避けることによつて反つて劇的操作を冗漫なものにするより、寧ろ時間的正確さを犠牲にしても、劇的生命を尊重する方を選んだのであらう。因に序辭で口上役が宿の主人や客人に挨拶しており、又終幕が舞踊で終つてゐるのは、此の劇が謝肉祭劇と同様な上演法を目指して書かれたもので、未だ一定の場所に舞臺を設けて演出されたものではないことを證してゐる。

之を要するに「ヴィオランタ」は小曲(全篇五八六行)ながら、その構想が發端の場から劇的葛藤の高調及びその終局へとよく緊縮して發展して行つてをり、ト書によつて所作を規定することも數を増してをり、場面の構成も適確であり、人物の描寫も堅實であつて、ハンス・ザックスの劇作に一新紀元を劃するものである。恐く作者の多年に渡る謝肉祭劇創作による經驗が此の種彼の所謂喜劇(コメディ)を脚色するに當つて自ら裨益する處が多かつたのであらう。と言ふのも謝肉祭劇なるものが元來喜劇的なものであり、兩者とも當時の市民生活や人情風俗の觀察に基くものを多分に持つてゐるからである。

従つて四十年代の作として喜劇の數が最も多く(八篇)、謝肉祭劇の數がそれに次ぎ(六篇)悲劇の數が最も少くして僅に三篇しか見られないのは、此の作者の劇創作上に於ける發展段階としては當然の結果であつた。ザックスは今や謝肉祭劇と同質的なものを持つてゐる喜劇を創作することによつて、その創作活動を一步前進せしめたのであつて、かくして之れ迄謝肉祭劇の創作によつて得た經驗を生かすとともに、徐々に本格的な悲劇の領域へ進むための準備をすることが出来たのである。

されば彼の取材の範圍に於ても當時にあつては未だ甚だ用心深いものがあつた。彼はデカメロンから取材した數曲の喜劇を創作した後、

既に「エステル劇」で經驗を積んだ舊約聖書の中から更らに二曲、即ち約百記 Ein comedi mit neunzehn personen: Der Hieb, und hat 5 actus. (人物十九人、五幕、1147, 11, 9.) 及び創世記、アダムとエブ、Ein comedi von dem geschöpf vnd fall des menschen; hat xi person und iij actus. (人間の創造と墮落、人物十一人三幕、1548, 10, 17.) を脚色し、ブラウツスの Menechmi (双生兒メナエキミ)を翻譯した Ein comedi Plauti mit 10 person, heyst Menechmi und hat 5 actus (ブラウツスの喜劇、人物十人、題名双生兒、五幕、1548, 1, 17.) を書くとともに、再びボツカチオの百物語中の第十九話 Comedi mit 9 personen. Die unschuldig frau Genura, unnd hat fünf actus. (喜劇、人物九人、貞節なるゲヌラ夫人、五幕、1548, 3, 6.)に歸り、更らに四十九年に至つて古傳説から取材した佛蘭西の王妃 Ein comedi mit dreyzehn personen. Die konigin auß Franckreich mit dem falschen marschalck, hat fünf actus. (喜劇、人物十三人、佛蘭西の王妃と邪しき大臣、五幕、1549, 12, 12.)を作劇し、同年久し振つて又 Titus Livius の羅馬史を取り上げて、悲劇 Ein tragedi mit dreyzehn personen. Die sechs kempfer, hat vier actus. (人物十三人、六人の闘士、四幕、1549, 7, 1.)を劇化してゐる。尙同年九月六日「ヘカスツス劇」Ein comedi von dem reichen sterbenden menschen, der Hecastus genannt, hat 19 personen und 5 actus zu spielen. (喜劇、死に類する富者、ヘカスツス、十九人、五幕。)が Georg Macropedius のものによつて翻譯されてゐることは、宗教改革時代の演劇第十三章道德劇の項で述べた。此の劇はザックスの作品目録では悲劇の部に入れてある。しかも之等の題材は殆ど悉く作者の愛讀書又は當時最も廣く民間に行はれてゐた傳説から取られたものである丈に、作者はそれら物語の内容を十分に咀嚼して自家藥籠中のものとなし、適宜に取捨選擇を行ひ敷衍省略を施して自在に場面を構成することが出来た。かくて此の



民間の素人劇詩人は散文の敘事的物語を韻文の劇的對話に改作することによつて、作劇法上の種々の要點を學んだとともに、又他面演出上隨分不合理不自然な舞臺操作をも、一種の慣習的約束として黙過すると言ふ安易な道を進むに至つた。彼は一つの物語を適當な若干の場面に分析し、それらの場面の連續によつて物語の筋を發展させて行く點に於て殆ど天馬空を行くが如き自由自在な詩的構想力を次第に養つて來たけれども、それ丈に空間と時間の關係が粗雜亂暴になり、場面の構成も多くの場合劇的效果を狙ふより、寧ろ事件の單なる報告に墮するに至つてゐる。この事は勿論作者が物語の教訓的分子に重點を置いたため、必然的に劇内容の具象性より、その道義性が強調された結果であるとしても、そのために作者の作劇法上の進歩が阻害されたことは言ふ迄もないことである。

以上の特質は前記の諸作に大なり小なり共通したものであるが、その最もよい實例は「佛蘭西の王妃」である。此の劇の内容はティーク・ヘッベル、Raupach 等によつて屢々脚色されてゐる Genoveva 物語の先蹤をなす中世傳説であつて、劇中冒頭で口上役が言ふ様に「古人によつて記されてゐる物語」(Die ist beschrieben von den alten) を劇化したものであることは、他の諸作と同様である。ザックスの用ひた直接の原本は不明であるが、恐く當時既に廣く民間に流布してゐた民間傳説本の一つであつたであらう。

第一幕では美しい妃に横戀慕してゐる大臣(Der marschalck)が戀々の情を獨語してゐる處へ、妃が侏儒(das zwergelein)を連れて登場、親切に色々と彼の惱の種を問ひ尋ねるので、彼は遂にその戀情を打ち明ける。勿論妃は拒絶する。彼は掴みかからうとして突き返される。さすがに妃も激怒して、王に訴へると言ひ乍ら侏儒とともに退場。大臣は後を追うて憐みを乞ふけれども、侏儒が振り返つて「お妃様にこんなことを仕掛けるとは何と言ふ不届なことをなさる。王様に

申し上げてその儘には濟まされません」と戒める。あとで大臣は獨り、身の破滅を避けるためには、王が狩場に行つてゐる明早朝、妃の眠つてゐる間に、侏儒を彼女の寢床の中へ入れて、二人が不義をしてゐると訴へ出るより他に仕方がないと言ふ。ここで場面が變つて、王は獵師に狩の準備を命じてゐる。そこへ大臣が馳けつけて來て、妃の不貞が愈々發見されたと密告する。王は激怒して急いで引き返す。此の幕は甚だ緊張した劇的な場面を展開してゐる。又第一場で妃が侏儒を連れてゐることや、第二場で王が騎士 Florio の愛犬のことを言つてゐるのは、後段に對する伏線とも言ふべきもので、作者の巧妙な着想である。

第二幕。王は hertzog Leopold, ritter Florio, 大臣、口上役等と登場、妃の不義が現れて侏儒は既に誅戮されたが、妃を如何に處置したらよいかと問ふ。ロイポルトとフロリオは妃が妊娠中であるから寛大な處分を賜り度いと交々願ふ。大臣は不義の子を世嗣には出來ないと反對する。妃が呼ばれて來る。王は早速不貞の罪を以て、妃を火刑に處すと宣告、妃の抗辯も聽かず、刑吏に命じて捕縛させる。刑吏(Der nachrichter)もフロリオもロイポルト侯も彼女の命乞ひをする。お附の腰元も妃の貞節を稱へて無實の罪を申立て、若しやむなくば自分を身變りにして下さいと、王の足下に伏し沈む。そこで王は一同に起立するやうに合圖し、妃の分婉が濟む迄、身柄をフロリオに預ける。彼は有り難く王命を受けて、犬を連れて行つて、油斷なく監視しませうと言ふ。王が廷臣を連れて去ると、ロイポルト侯はフロリオに出産が濟んでも妃を大切に守護する様にと言ふ。妃は夫や故郷に悲しく別れを告げ、何故今朝のやうなことが起つたのかわからない。屹度あの悪者がしたことに違ひないと嘆く。皆が去ると、大臣が出て來て、妃がフロリオに自分の横戀慕の事實を話したら大變、これから直ぐに後を追うて、二人を亡きものにしなければならぬと言ふ。此の

場は例によつて裁判を取扱つてをり「ヴァイオラント」中の判官の如く、王は妃を碌に取り調べず一方向的に判決を下してゐる。然しここでは大臣が豫め「婦人は芝居をすることが上手で、嘘言を言つて人に取り入るものですから」と釘を打つてゐるので、王が妃の言葉に耳を藉さないわけが了解される。

第三幕、手斧を持つた炭焼き (Der Kohler) が出て来る。彼は此の森の中で木を切つて炭を焼き、日夜を分たず働いてゐるが、何と世の中は不公平なものだ、だが人各々それぞれ苦勞はあらうと言ふものと述懐してゐる處へ、妃が逃げ込んで来て助を求め。彼女は悪者の大臣に讒訴された一部始終を話し、今その悪者に襲はれて、老騎士は殺され自分は命からがら逃れて來たと物語る。炭焼きはそんな高貴な御方に差し上げる食物も望もないと云ふ。妃はそんな心配は要らない。生計はわたしが引受けるからと宥め、金を與へて彼を巴里へやり、刺繡の材料を買はせることとする。炭焼きが承知して二人が去ると、場面が變つて宮廷。王は口上役、ロイポルト侯並びに腿に繃帯をした大臣とともに現れる。王が脚の負傷について大臣に尋ねる。大臣はフロリオの犬が晝食時になると毎日何處からともなく現れて、自分に噛みつき、パンを奪つて逃げて行くと答へる。王は今度その犬が來たら四方の戸を閉ぢ、廷臣達に打ち殺させよと命ずる。大臣がその準備をするために去ると、ロイポルト侯がこれには深い仔細があると言ふ。そして一昨日侯が犬のあとを付けて行つて、騎士の死骸を見付けたこと、犬は死體の番をしてゐて、腹が空くと食を求めて宮中に歸り、大臣に襲ひかかることを話し、察するに犬は主人の仇を打たうとしてゐるのである。何とかして事の真相を究めて頂き度いと訴へる。そこで王は一同に助言を求め。ロイポルト侯が大臣と犬とを血闘させて見たらと勧める。王は早速それを容れて、口上役に血闘の條件を問ふ。口上役は大臣には棍棒、犬には齒を用ひさせて、鬪場で兩者を戦はせ

るやうにと答へる。王が大臣を呼ばせようとしてゐる處へ、大臣が來る。王は彼に犬が主人の復讐をしようとしてゐる疑があるから、犬と勝敗を決せよと命ずる。大臣は身分ある自分に犬の様な畜生と血闘せよとは何故の御不興かと抗辯する。けれども王は冤罪ならば戦て證明せよと動かぬ。ロイポルト侯が正しい者に勝利を與へ給へと神に祈る。一同退場。以上物語の筋は極めて直截明確に對話を通じて發展させられてゐる。甚だ老巧な脚色振りと言はざるを得ない。

第四幕、ロイポルト侯が王に、血闘の結果犬が勝つて大臣の罪が明かになつたことを報告してゐる。處へ刑吏が大臣を捕縛して連れて來る。大臣は王の糺問に逢つて事の次第を悉く自白する。王は彼を赤裸にし、馬の尾に縛つて町中を曳擦り廻し、刑場に至つて身體を八裂きにし、町の四方に曝し物にする様にと宣告する。刑吏が大臣を連れて去る。と王は更らに口上役に、老騎士の遺骸を厚く葬る様に命ずる。口上役が長つて出て行く。次いで王は妃の搜索に懸賞金を出すことを布告させ、自分の早まつた處置を痛く後悔する。ロイポルト侯が自分の言葉を用ひてをられたら、此處事にはならなかつたのと言ふ。王も汝が居らなかつたら妃を焚刑にした處であつたと言つてゐる處へ、早くも急使 (Der Postbote) が馳込んで來て、國中到る處を探しても未だに王妃の所在は判明しないと報告する。王は兩手を頭上で打ち合せて失望落膽の體、嘆き悲しみ乍ら皆々とともに退場。相變らず達者な脚色振りではあるが、相變らず時間關係を平氣で無視してゐる。王が事件の善後處置を刑吏、口上役顧問達にそれぞれ果斷に命じて行く處は頗る細く注意が行き届いてゐ乍ら、王妃の搜索を命じて數言を費ひやすか費やさぬのに、もうその結果の報告が齎らされてゐるのは、何と言つても不自然である。

第五幕。王は快々として樂しまない。ロイポルト侯が五月の花盛りだからと言つて、氣霽らしの散歩を勧めてゐる處へ、口上役が來て、

女の雜貨商人が祕密に謁見を願出てゐると奏上する。そして許されて這入つて來た雜貨商の女房 (Die Kramerin) の口から、王妃の手になる精巧な刺繡品を賣りに來たものが紹介され、やがてかの炭焼きが呼び入れられる。炭焼きは始め品物がロンドンから輸入されたものだと云つて胡魔化さうとするが、王に問ひ詰められて、王妃のその後の消息を物語り、王妃のために命乞ひをする。王は早速一同を連れ、妃を迎へに出發する。場面變つて赤坊を抱いた妃が炭焼きの歸りの遅いのを心配してゐる。そこへ王の一行が來るので、彼女は恐れて逃げようとする。王はそれを呼び止めて、彼女の足下に伏し、今迄の非道の處置に對する赦しを乞ふ。妃は王を助け起して冤罪の霽れた事を神に感謝する。王は赤坊を抱き取つて接吻し、妃が未だ子供に洗禮を施してゐないと言ふのを聽いて、明日はその儀式を行はうと云ふ。彼は炭焼きに子供の名附親になることを依頼し、彼に獵區を與へて伯爵に叙する。次いでロイポルト侯に祝賀の大會を開く準備を命ずる。侯は二千クローネンを貧民に施すことをすすめる。かくて王は機嫌宜く巴里に歸還する。と口上役の結辭。即ち此の物語には五つの教訓が含まれてゐる。第一、婦人は貞操を守るべきこと、第二、奸計は必ず曝露すること、第三、一時の激情に馳られて過激なことをしてはならないこと、人は思慮分別が大切であること、第四、總て兇事を轉じて吉事にする様な手段を構じなければならぬこと、第五、人は忍耐が肝要で、苦難の中にも神の慈悲を忘れてはならない事、是である。

要するに全篇の結構は此の最後の懇切な教訓を眼目として組立てられてゐるわけである。と言ふのも作者にとつては劇の藝術的價值よりも道德的意義を鮮明にすることの方がより重要な課題であつたからである。だから物語のもつ教訓が當時の一般民衆の常識により、興味を以て理解され感動されることに作劇の力點が置かれてゐるのは當然のことである。そして此の意味に於て此の作品は作者多年の修練の結果、

既にその脚色法上殆ど模範的とも言ふべき程度に達してゐると言ひうる。即ち場面と場面の緊密な連絡、必要な事實の細心を配置、人物と人物の適切な應待、物語の筋書の極めて明瞭な發展等に於て、作者の長所は遺憾なく發揮されてゐる。然し乍らそれ丈に物語の重要な部分が出出されずに、單に登場人物の口を通じて報告されるに止まつたり (王妃とフロリオが大臣に襲撃される場や、犬と大臣の血闘する場面。因にフロリオの忠犬については度々物語られてゐるけれどもそれが舞臺に登場してゐないのは、犬をして演技せしめることの不可能なのを知つてゐる作者が故意にさう云ふ場面を避けて脚色したからであらう。後になると舞臺で實際に犬が使はれてゐる。第十四章参照) 不必要な説明的臺詞が長々と挿入されたり (第二幕幕切れに大臣がわざ／＼登場して獨語してゐる場)、時間の關係が無視されたりする缺點を生ずるに至つた。

孰れにしても今やハンス・ザックスは劇作家として漸く興味と自信とを獲得して來たものと思はれる。彼が彼の所謂悲劇「六人の闘士」を書いてゐるのは、此の劇詩人にとつて如何なる場面も劇化し得る丈の準備が出來たことを示すものであつて、そこでは「佛蘭西の王妃」で避けられてゐる闘争の場や殺人の場が詳細に取扱はれてゐるのである。恐く作者はさう言つた場面から生ずる全體的印象によつて、その結末が圓滿に解決してゐるにも拘はらず、此の劇を悲劇の部に入れたものであらう。尙彼の悲劇と喜劇との區別に就ては後段に於て述べ

る。「六人の闘士」は第一幕、羅馬皇帝 Thullus Hostilius (傳説によれば第三代目の羅馬王) の時代、羅馬と Alba 市との間の長い戦争で、兩市とも疲弊の度甚しく、王は元老議員 Horatius 及び Fabius と兵員軍費の徴達に就いて會議をしてゐる處から始まる。そこへアルバ市から講和の使節が派遣されて來て、講和談判が行はれる。互に巧妙な外交的折衝が交された後、皇帝は使節を一端下げて、對策を協議す

る。その結果ファビウスの提議により、兩市より三人宛の選手を出して試合をさせ、その勝敗によつて兩市の運命を決しようと言ふことになる。かくて呼び入れられた使節は試合の日程場所等を委細取り決めて歸る。

第二幕第一場、ファビウスの推薦で、老ホラチウスの三人の息子が戦士として選ばれる。ホラチウスは男子三人、娘一人あり、三人の息子を取られては一家の破滅であるが、公共のためには換へられないと言つて承諾する。第二場、兩市の戦士六人闘争の場である。アルバ市の使節 *Mecius* が自國の代表戦士に激勵と教訓の辭を述べる。三人の闘士が交々その武術を誇り、勝利を誓ふ。ことに第三人目の戦士は羅馬に親の許した婚約の女があり、そのやさしい乙女のためにも武勇を顯はし、祖國を救つて見せると誓ふ。そこへ皇帝が議員と三人の戦士等連れて來る。羅馬方に於ても同じ様に、皇帝の三人に對する激勵、ホラチウスの息子達に對する注意と三人の答辭があつて、戦闘開始となる。アルバの第一闘士が味方を勵ましつゝ進めば、羅馬方の第一戦士も「いざいざ、祖國のために立て！」と切り込む。アルバの使節メチウスや *Curus* が三組の格闘の花々しい有様に感嘆してゐる。と羅馬の第一戦士が倒れる。老ホラチウスが愛兒の生命を氣遣ふ。アルバの第二の戦士が味方に幸運が向いてゐると叫ぶ。羅馬の二人の闘士は互に勵まし合つて、勢猛に切つてかかる。ファビウスが戦の不利であることを心配すれば、皇帝は敵も弱つてゐるし、また之からだと言ふ。か言はぬに「やや、又羅馬方がやられた。さあしつかり頑張つてくれ、勇ましい勇士！」と呼びかける。ホラチウスが「忤、お前もやられたか！」と嘆く。メチウスが勝利を確信すれば、クリウスは羅馬方が一人でも、その一人は無傷だが、こちらの三人は皆重傷を負うてゐると悲觀する。その中にファビウスが羅馬の戦士は敵を避けて逃げてゐると、絶望の嘆聲を發する。然し皇帝はあれは戦略で敵の弱るの

を待つてゐるのだと慰める。アルバの第三の戦士が「逃げるとは卑怯な。戦ふ力がなければ降伏しろ！」と嘲る。するとホラチウスの末子は「何の戲言、黙れ黙れ！今日にも見せてくれる。此の命のある限り刀は渡さぬ。」と烈しく切りかかる。かくて彼は三人の敵を次々と切り伏せる。(Nach dem schlecht er die drei Albaner nach einander nieder.) メチウスが絶望の嘆聲を發する。若いホラチウスは劍を高く揚げて勝利を宣言する。かうして皇帝とメチウスとの間に平和條約が締結され、皇帝は意氣揚々と凱旋する。

此の闘争の場は甚だ生彩に富んだ力強い緊張した風景を美事に描寫してゐる。恐く作者は當時ニュルンベルク市で度々行はれた武術試合 (*Das Gesellenstechen*) の實地見聞による體驗をここに利用してゐるのであらう。

第三幕。ホラチウスの娘が手を振り髪を搔きむしつて愛人の悲惨な死様を嘆き悲しんでゐる。彼女はアルバ市の第三の闘士の死骸の傍に跪つき、その頭を膝の上に乗せ、その顔を拭うては泣いてゐる。そこへ彼女の兄弟(かの羅馬方第三の勇士)が敵の楯と兜とを分捕つて、ジュピターの殿堂に捧げるために來る。彼は妹の様子を怪しんでその譚を問ふ。乙女は只殺された愛人のことを思うて、祖國の危機も兄弟の死も顧る餘裕がない。彼女は「私のいとしい人が生きてゐてくれたら、羅馬の半分が亡びたつてよい」「兄様方のこと等は二匹の犬の死んだ程も氣にならない」と激昂する。若いホラチウスが如何に道理を説いて聽かせても、彼女は愈々愛人の仇だと言つて、羅馬を呪ひ、兄を呪ふ。遂にたまり兼ねて、彼は劍を抜いて、妹を刺し殺す。彼女は「人殺し、助けて！」と叫ぶが、聽て愛人の屍に取り縋つて死んで行く。ホラチウスが劍を拭うてゐる處へ、クリウスが來る。クリウスは殺人罪で彼を拘引しようとする。彼は皇帝の前に出て立派に辯明すると言ふ。二人が退場すると、死者も運び去られる。(Hie tregt man

auch die toden ab.) こころも妹が諫められれば諫められる程激昂して滅茶苦茶にあたり散らし、遂に兄をして劍を抜かせるに至る異常な心理過程は近代劇としても遜色のない程劇的に展開させられてゐる。

第四幕。かくて又裁判の場。王様クリウスの訴とホラチウスの陳述とを聴く。そして元老議員達の意見を求める。ファビウス及びメチウスが「法は曲げられない。殺人罪は死刑に當る」と言ふ。それで王は磔刑に處すべきであるが、今日の功績に免じて騎士に相應しい打首の刑に處すと宣告する。老ホラチウスがかくでは三男一女悉くを失ふ。彼が救國の功に免じて命を助け給へと願ひ、更らにそれが許されなければ此の身を身代りにして貰ひ度いと申出る。王もその言葉に動かされ、再審議をする。かくてファビウスもメチウスも救命に賛成するので、王は前判決を取消す。老ホラチウスと小ホラチウスは相抱いて神に感謝する。特に息子は父親を始め皇帝元老院に堅く忠誠を誓ひ、その繁榮を祈る。そして口上役の教訓的結辭。昔羅馬では斯の如く祖國愛と正義と功績が重ぜられたから、國威は四隣を壓して繁榮した。然し此の三徳が衰へて私利私慾が政道を亂すに至つて、國家は衰亡して行つた。如何なる町でも此の三徳を守るものは隆昌疑なし——と言ふのである。

劇は講和談判の場と鬭争の場と妹殺しの場と裁判の場とをそれぞれ一場面として、極めて明確に構成されてゐる。又時間關係も第一幕講

和會議以後は一日間の事件として、緊密に發展して行つてゐる。ことに國家的大事件と私人の家庭的悲劇とを極めて自然に結合し、しかも題材のもつ大規模にして深刻な内容を適確に把握活寫してゐる點は、老手と言はなければならぬ。實にかの試合の場面の如きは戰士自身と周圍の人達の口を通じて、それぞれの立場が明白に描き分けられてゐるばかりではなく、鬭争の經過も生き生きと具象的に展開させられてゐるのである。

正しくヘンス・ザックスは四十年代の終りに至つて、當時に於ける作劇技術の要領をほぼ習得するに至つた。彼は謝肉祭劇に於て教訓と滑稽とを調和することに成功し、次いで次第に取材の範圍を擴大して各種の物語を數幕の喜劇に改作し、よつて以て演劇による道德的啓蒙運動を推進するとともに、作劇法上の要點を會得した。かくて悲劇の分野に手を延し、彼の穩健公正なる市民的叡智を一段と研磨宣揚する傍、舞臺構成を緊密化し、舞臺面を具象化する方法を學んだ。只幸か不幸か彼には餘りにも豊かな詩作能力が惠まれてゐたが故に、筆に任せて流れ出る詩句は、彼をしてともすると冗漫にして空疎な敘事抒情に走らせ、多くの劇的場面を單なる敘事的對話として取扱ふか、又は全部無視して時間的空間的に不自然な、或は安易な便宜的表現を取らせるに至つてゐる。

## 第九章 完成期の一幕物

一五五〇年—一五五四年

謝肉祭劇創作に關するハンス・ザックスの活動は千五百五十年から五十四年の五年間を以て最盛期に達してゐる。是れより先四十五年十一月十九日かの「悪魔と老婆」(前掲)なる謝肉祭劇を書いた後、四十九年十一月二十七日作 *Ein fasnacht spil, mit fünff personen zw spielen: Der kauffmann mit den alten weibern.* (商人と二人の老婆。Nr. 19. 不幸續きの商人が悪魔に魂を賣り血の契約書を取交して、十年の幸運を買ふ。十年後商人は友人に勧められて、二人の醜惡な老婆を買つて来て、彼等により悪魔を追ひ拂ふと言ふ筋。) を書く迄、詩人の謝肉祭劇創作は前後四年間全く中斷してゐるのである。恐くその理由は、詩人によつて久しくその素朴敬虔の念を以て尊崇されてゐたマルティン・ルッターが千五百四十六年二月十八日逝去したこと、及びそれに續いてやがて起つたシュマルカルデン戦役 (*Der Schmalkaldische Krieg, 1546—7*)、アウグスブルク宗教假協定 (*Augsburger Interim, 1548*) 等の重大事件が、詩人をして此の種茶番式演劇から遠ざからしめたことにあつたと思はれる。

果然千五百五十年に至つて、彼の劇創作は急激に活氣を呈し、同年一年間の收獲は、謝肉祭劇八篇に昇つてゐるが、此の趨勢はその後も衰へず、五十一年には十一篇、五十二年にはアルブレヒト伯の大戦禍があつたためか、少しく低下して六篇、五十三年には實に十五篇の多きに達し、尙五十四年には十篇の謝肉祭劇が創作されてゐる。しかもそれが詩人の年齢五十六歳から還歴にかけての時代であり、更らにその後は謝肉祭劇より寧ろ悲劇喜劇の領域に主力が注がれ、五十五年には謝肉祭劇二篇に對して悲劇七篇喜劇三篇、五十六年には謝劇三篇、

悲劇七篇喜劇十篇、五十七年には謝劇四篇悲劇六篇喜劇六篇等々と劇創作の活動が續けられてゐるのを見る時、此の詩人の老いて益々盛んなる創作意慾に驚嘆せざるをえないものがある。と同時にかの「孕み百姓」を第一着手として五十年以後はその大部分が、彼の愛讀書から取材され、それに詩人獨得の創意を加へて謝肉祭劇の内容を擴充してゐるのみならず、巧に原作を緊縮して舞臺効果を擧げてゐることは、詩人が單なる戯作者ではなかつたことを證して餘りある。勿論此等夥しい數の作品中には傳統的な顔見世形式により、好んで喧嘩口論の場や惡妻惡婆物語を取扱ひ、只その豊富な語彙と亂痴氣騒とて人の意表に出てようとしたり、又は原作の敘事物語を對話形式に移したに過ぎないやうなものもあるけれども、しかも他面に於て素材の中に潜む喜劇的契機を直截に把握し、その人物に新しい生命を附與したのも少なからず存在する。實に謝肉祭劇は詩人がその明朗純眞な性情、洒脫輕妙な着想、市民生活の多年に渡る觀察、穩健方正なる處世觀及びその流暢自在な詩作力を十全に發揮し得た一種特異な演劇形式であつた。

勿論詩人がその獨得の長所を縱横に活躍せしめる迄には既に見て來た通り、長い準備期間を費やしてゐるのであつて、彼が既成の物語や諧謔文學から題材を取るやうになつたのも喜劇又は悲劇を創作した経験から來てゐるものと思はれる。即ちかの「孕み百姓」はデカーメロン第八十三話によるもので、此の書が彼の喜劇又は悲劇に多くの題材を供給してゐることは言ふ迄もないことである。次いで彼が脚色したものは Johannes Pauli の *Schimpf und Ernst* による *Fasnacht spiel mit 3 Personen: Der farendt Schuler im Paradeis.* (天國で行

つて来た遊歴學生。1550, 10, 8. Nr. 22.) であるが、五十年度に書かれた八篇の中最初の二篇 Ein fasnacht spil, das ist mit 9 personen zw spielen vnd haiset der nassentanz. (大鼻踊り。1550, 2, 4. Nr. 20.) 及び Ein fasnacht spil mit vier personen vnd heist der gestolen fasnacht hon. (盗まれた謝肉祭用雄鶏。1550, 10, 4. Nr. 21.) を除いて、他の六篇は何れもパウリ或はデカームロンから取材されてゐるのを見れば、此の頃から作者が傳統に満足出來ずして次第に彼獨自の領域に這入つて行くかゝるとする自信と抱負を持つて來たことが知られる。

「大鼻踊り」は謝肉祭古劇に屢々見られる様な顔見世形式と殴り合ひの場を組み合せたもので、鼻の一番大きいものが賞品を與へられ、鼻踊りの王様に選ばれると言ふ村長の布告に應じて、九人の百姓がそれぞれ交る交る進み出て、自分の鼻が如何に肥滿魁偉であるかを醜怪奇警の辭で自慢し、それから一同舞踊、舞踊が終ると賞品授與で甲論乙駁、大喧嘩になるので、村長は次の日曜日迄決定を延すと云ふ筋である。勿論奇怪巨大の鼻の形容やその比較測量、彼等の舞踊が當時の觀衆にどのやうな哄笑爆笑を買つたかは、想像に餘りあるが、然し相變らず農民を愚弄した茶番狂言式座興に過ぎず、未だ舊劇の常套を脱してゐない。

然し次の「盗まれた謝肉祭用雄鶏」になると漸く筋の發展が劇的に構成されて來てゐる。

百姓 Haintz Tötsch が前晚雄鶏を盗まれ、犯人は隣家の Heman Grampas ではないかと怪んでゐる處へ、グラムパスがやつて來る。そこでハインツが鶏のことを色々訊き糺すけれども、ヘルマンは自分はそのな鶏のこと等は些つとも知らないと言ひ張り、然し女房が隠してゐるかも知れないから聞いてくると言つて去る。ハインツがあんなに穩しく歸つたのは臭い證據だと言つてゐると、彼の女房 Matsch が來て、占師に見て貰つたが、鶏は確にお隣りが食へたのだ。鶏の羽

が裏の芥捨場にあるに違ひないから、グラムパスに談判して見て呉れと言ふ。ハインツが今掛合つた處だと先の經緯を話す。女房は羽を探して城代に訴へ出ると言ふ。だが亭主は鶏のこと位で喧嘩をするのは嫌だと反對する。女房が諾かないで出て行くので、止めようとしてあとを追ふ。するとグラムパスが又出て來て、御隣の雄鶏がうちの雌鶏の處へ飛んで來て、穀物を荒すので、殺して食べて了つたのは本當のことだが、此の事はどうしても明かされないと云ふ。處へ女房の Schlocknes が馳けて來て、大變なことになつた。お隣のお主婦が鶏のことで訴へ出たと言ふ。百姓が貴様が鶏の首を締めたから此處目に逢ふのだと言へば、女房はまたお前様が箒で打ち殺したぢやないかと、互に罪を着せ合ふ。然しとどの詰り、二人口を合せてどこまでも犯行を否認しようとして相談する。そしてヘルマンは宮參りに行つて、世間の評判がどんなだか探つてくると言ひ乍ら、出て行く。そのあとへマルチが來て、盗んだ盗まないと女房同志の大口論が始まる。マルチは城代の裁きだと言つて鶏の代償六グロシオンを要求し、その證據として鶏の羽を出して見せる。シュレックメツツは頑強に否定し、二人の口論は愈々烈しくなる、その中にグラムパス迄やつて來て、マルチを脅迫し、殴りかかる。そこへ又ハインツ・テツチも來る。彼は只管に喧嘩を丸く收めようとするけれども、女房マルチは却々肯かない。シュレックメツツはマルチが若い美しい助僧とよい仲だつたと素破抜けば、マルチも負けずに悪口雑言。遂に女房達は掴み合ひを始めるので、テツチが仲裁に這入り、グラムパスと共同して、二人を追ひ出す。あとでグラムパスが觀客に向つて、今の醜體を詫び、謝肉祭を愉快に過すやうにと願ふ。

相變らず農民の惡賢しき、殊に百姓女房の口達者と剽悍振りを押揃したものであるが、然し二組の夫婦四人の男女が適宜出入し、組合はされ、それぞれの對立に於て人物の立場が明かにされてゐるのは、兎



に角劇らしい形式を帯びて來てゐる。特にハイイツ・テッチが事を穩便に濟まさうとし、ヘルマン・グラムパスが最後に女房連の喧嘩を恥ぢて、亭主同志は仲直りしてゐるのは、此の作者の健全な常識を反映してゐる。かうして作者は簡單な風俗素描から素朴な人情描寫へと移り、遂に物語を中心とする作者獨得の喜劇を脚色するに至つた。即ち次の「天國へ行つて來た遊歴學生」は依然として百姓女房の愚昧さを取扱つてはゐるけれども、そこには一脈の素朴なユーモアが漂うてゐて、人の純情に訴へるものがある。

劈頭一人の百姓女房が獨りて先夫との樂しかつた生活を思ひ、今の夫の吝嗇で慾張りなのを嘆いてゐる處へ、遊歴學生が這入つて來る。彼は諸國を遍歴して種々の技術を學んでゐるもので、既にヴェナス山にも巴里にも行つたことがあると言つて、一椀の施物を求める。巴里をパラダイスと誤解した女房は、天國から來たのなら、自分の先の夫に逢はなかつたか。あんなよい人が天國へ行つてゐない筈はないからと問ふ。學生は天國には澤山の魂がをつたが、お前様の旦那様はどんな着物を着て行かれましたかと尋ねる。それから墓に葬つた時、青い帽子と敷布しか身につけてやらなかつたと聽いて、その人なら知つてゐる。襯衣も猿股も靴もなく、小遣錢にも困つて乞食の様な暮しをしてゐると教へる。女房は嘆き悲しんで、又天國へ行くならば、夫に託物を届けて下さらぬかと言つて、贈物を取りに退場する。あとで學生は獨語、これは又何とお人好しの女房だ。着物や金を逃へられたら、横取りしてやらう。亭主が歸らない中に早く逃げ出し度いものだと、言つてゐる。そこへ、女房は裏の牛小屋へ匿して置いた臍線金と下着類を入れた袋とを持つて來て、學生に與へる。それから天國から返辭を持つて歸るには却々閑がかかると聽いて、それではその間に又小使錢が無くなるだらう。ポヘミヤの古錢があるから、それもやつておくれ。收獲が濟めば、又夫の目を胡魔化して、お金を匿しておくか

ら、それ迄うちの人に宜敷くと、學生にも使賃をやつて、一生懸命に頼む。學生が去ると、女房は故人を偲ぶ歌を歌ひ出す。處へ百姓が歸つてくる。何でそんなに陽氣にしてゐるのかと訊かれて、女房は今の話を物語る。百姓はそれはよい事をした。だがそれ丈のお金では少ないから、もつと持つて行つて貰はう。早く馬の用意をしてくれ。學生のあとを追ひかけて渡すのだからと言ふ。女房は大喜び、お前様が死んだら、お前様にも同じ様に上げてあげると答へる。彼は學生の行つた方角や恰好を訊いて、女房に馬の用意をさせる。女房が出て行くと、彼は女房の愚さを罵り、學生から金と着物を取り返して、女房をうんと懲らしてやるんだ。あんな女房を持つたが百年目、一生後悔の種だと獨語。そのうちに女房は晴れ晴れした聲で、馬の用意が出來たから、早く行つて下されと言ふ。とその言葉で彼も退場。

場面變つて沼地迄やつて來た學生、うまく百姓女を騙したと喜んでゐる。がやがて百姓が追ひ馳けて來るのを見て、背に擔いでゐる袋を匿し、杖に凭れて、誰か人を待つてゐる體にしてゐる。百姓は背に袋を擔いだ男を見なかつたかと問ふ。學生はその人なら沼を越えて向ふの森の方へ行つたと教へる。百姓は學生に馬を預け、預り賃迄與へて、その跡を追ふ。あとで學生はどう云ふ風の吹き廻して此處に今日は運がよいのかと大喜び。百姓が歸らない中にと匆匆にして馬に乗つて立ち去る。女房が百姓の歸りの遅いのを心配して出て來るが、豚を放してやる時間だと言つて去ると、百姓が來る。彼は四邊を見廻して、馬も學生も居なくなつてゐるのに氣が付く。彼は自分迄もすつかり騙されたことを知る。然し安否を氣遣つてやつて來た女房には、天國迄の道が遠いから、馬もやつたと言つて女房を喜ばす。女房はお前様も死んでくれればよいのに。さうすればどつさりお金でも着物でも牛でも豚でも鷲鳥でも送つて上げると言ふ。百姓はそんな信心話はこつそりするものだと、言ふけれども、女房はもう學生の一件を村中に話した

あとである。百姓は何と言ふ女房を持つたものだ。物笑ひの種だと嘆く。だが女房が牛乳の用意をするために去ると、あとで、愚鈍な女房を持つたのは不幸の種ではあるが、女房の眞心丈は認めてやらなければならぬ。亭主だつて人に瞞されて大損をすることもあるのだから、利害得失差引きすれば、結局夫婦仲好くするに越したことはない、結辭を述べる。

一幕二場の對話の中に百姓女房の愚な純情が生きて書き出されてゐる。ことに原作では天國に行つてゐる死者が百姓の息子になつてゐるのを、ここでは女房の先夫にしてゐること、又百姓が女房の愚行を怒る代りに、贈物が不足だと言つて、單純な女房を喜ばせ、急いで馬の支度をさせる邊りは、作者の巧妙な創意によるもので、これによつて此の百姓夫婦の複雑な間柄及びお人好ひで氣のよい女房と小柄巧で吝嗇な百姓の性格が美事に描き出されてゐる。のみならず、詐欺に懸つたことをも知らずに満足してゐる女房と、慾張つたがために失敗する亭主とは、何れも喜劇的人物になつて、對照の妙を得てゐるのである。

かうして今や作者の詩的想像は更らに活潑に發展して行く。即ち同じくパウリのシンプ・ウント・エルンストから暗示されて脚色された次の *FaBacht spil mit 3 personen: Praw warheyt will niemandt herbergen.* (眞理夫人に宿貸すものな)。1550, 11, 10, Nr. 24.) は詩人が原作の單なる齣案者ではなかつたことを示して餘りある。これは原本の物語によると、火と水と空氣と眞理の四人の處女が、それぞれ何處に自分が住んで居るかを物語つて「眞理」に及ぶと、彼女丈は家もなければ宿を貸すものもなく、凡ての人に嫌はれると嘆く。この簡單な比喩的對話から、如何に劇的な場面が具象的に構成され、ユーモアと教訓とが渾然と融合されるに至つたかは、次の如き梗概を見ても、容易に了解されるであらう。

先づ百姓と百姓の女房が登場、百姓は紳士淑女方の集まつて居られる此の料亭に來たのは、都風の上品な謝肉祭を愉快に過したためだから、どうか仲間に入れて貰ひたいと言ふ。女房が風笛を持つて來ればよかつた。一曲吹いて踊れるのと言へば、百姓は今日は踊りに來たのではないぞ。行儀作法を見習ひに來たのだと、女房を叱りつける。作者は明らかに當時の謝肉祭行事が放埒亂脈に走り勝ちであつたことに對して、間接に警告を發してゐるのである。と同時にこの口上は謝肉祭劇が依然として人の集まる料亭で演じられたものであることを示してゐる。そこへ眞理夫人が這入つて來て、一夜の宿を乞ふ。彼女は本性が知られると、何處でも宿を借すものがない。女房は非常に同情して、亭主に、夫人を泊めてやる様にと熱心に頼む。だが百姓は誰にも嫌はれるやうでは、どんな悪い女かも知れないと疑ふ。女房が兎に角何者であるか訊いて見たらと勸めるので、百姓はその見知らぬ女に彼女の名前を尋ねる。供し眞理夫人は名前を言へば、今迄もさうであつた様に彼も泊めてはくれないだらうから、どうかそれは訊かずに宿を貸して呉れと頼む。女房が名前の如何に拘はらず宿丈は喜んですると言ふけれども、彼女は今名前を告げては屹度追ひ出されるから、明日の朝迄待つてくれと願ふ。女房は「心配しないで言つて下され。宿丈は必ず致します」と迫る。到頭夫人もいやいや眞理と云ふものだ和本性を打ち明ける。百姓は非常に喜んで「眞理様に來て頃くとは何と云う幸福だ」と、一體何處から來たか、何處で生れたか？と乘氣になる。そこで夫人は父はジューピターと云ふ最高の神で、天上から地上に人間種族を懲戒するために遣はされたと答へる。すると女房が彼女を斷つた人達のことを問ふので、夫人は到る處で虐待された過去の經歷を物語る。始め農村へ行つて、百姓達の不行跡を叱つたら、忽ち追ひ拂はれて石を投げられた。それから町へ出て、商人や職人の家に泊つたが、そこでも彼等の利己心と詐欺とを發いたので追ひ出され

て了つた。その後町中凡ゆる種類の人達の處へ行つて見たが、何處でも嘘偽奸計が蔓こつてゐて、彼女は散々に小突き廻され、着物をぼろぼろにされて了つた。次いで正義が支配してゐる筈の裁判所へ行つたけれども、それも不義不正が行はれてゐて、遂にインキ壺を投げつけられ、着物を見るかげもなく汚されて逃げ出さねばならなくなつた。更らに王宮へ行つて見ればそこでも矢張り役人達の假面を見破つたので糞尿を浴せかけられ、犬を嚇しかけられて突き出された。最後にお寺へ行つて、ここそ一番安全だと思つてゐたのに、坊様達に猛烈に憎まれて、顔を殴られ髪の毛を引抜かれ、血塗れにされ散々な目に逢はされた。だから今は疲れ切つて行く處もない。是非今晚一晩泊めて貰ひ度いと、彼女は又しても百姓に頼む。百姓夫婦は大いに同情して、ごもごも自分の宅に何時迄も泊つてくれ、其處可愛らしい姿をしてゐて、どうして其處に憎まれるのかと問ふ。だが夫人の言葉は常に眞面目で厳しく、如何なる嘘偽甘言も許さないと聽いて、夫婦は次第に不安になり、百姓はそんなに何時も本當の事ばかり言つてゐては、首が飛ぶと言へば、女房は野菜や家畜や乳の値段を胡魔化さなければ、暮らして行けないと言ふ。遂に眞理夫人がお前様方は本當の事を聽かさず、悪事を罰せられても辛抱が出来ると言ふに至つて、二人とも大いに不平で、そんな勝手なことをされては、とても宿は出来ないと、散々に悪態を吐いて、出て行く。あとで眞理夫人は御覽の通り始めは誰も眞理を愛する様な顔をしてゐるが、家の中へ這入つて行かうとすると、皆が自分を追ひ出してさう。仕方がないから山の中へ這入つて、世間がもつと自分を喜ぶやうになり、欺瞞や奸策が驅逐される迄匿れてゐようと、結辭を述べる。

例の通り皮肉な滑稽の對象とされてゐるのは百姓夫婦であるが、それ丈原作の比喩的教訓が寫實的に具象化され、自在な會話の應酬によつて、當時の社會相を辛辣に諷刺してゐる。

此の「眞理夫人」に次いで矢張りパウリのシムプ・ウント・エルンストから取材された *Fabnacht spiel, mit 4 Personen zu agin: Der Pawr mit dem Kuedieb.* (百姓と牛泥棒。1550, 11, 25. Nr. 25.) があるが、これになると更らに一段と複雑な筋書を、作者は出来る丈合理的に寫實的に運ばうとしてゐる點が注目される。物語は牛泥棒が百姓の牛を盗み出し、その牛を百姓自身に賣らせ、その代金を持ち逃げすると言ふ、相變らず愚鈍にして好人物の百姓を主人公にしたものであるけれども、泥棒の巧妙な詐欺の手口が、作者の創意によつて順序よく運ばれて行つてゐる處に、此の芝居の面白味がある。

百姓が娘に明日市場へ賣りに行くチーズや乳の準備を吩咐け、娘は市場で服地や手袋を買つて來て呉れと、父親に強請つてゐる處へ、牛泥棒が、一夜の宿を求めてくる。彼は町や村へ掛取りに來たのだと言ひ、明日は早朝から一緒に町へ行かうと、百姓ともども寝に就く。あとで娘も家の見廻り跡片付けを済まして來て、明日の買物を樂しみ乍ら、寢所へ去る。とかの泥棒が忍び足で出て來る。泥棒の獨語で、家の中には金になる様な品物が何一つないこと、仕方がないから牛を盗んで森の中へ匿して置くことが知らされる。

翌早朝百姓が起き出て來て、約束通りかの泥棒を呼び起す。泥棒は背延びをしたり、欠伸をしたり、目を擦すつたり (*Der Dieb kumbt, denet sich, gienet auff, reibt die augen.*) して出て來て、此の村で一軒貸金を取り立ててくる百姓屋があるから、後刻森で待つてゐると言つて、匆々にして出て行く。あとで何の商賣をしてゐるのか、様子がどうも怪しいと百姓が獨語してゐる。するとかの泥棒が又出て來て、借金の抵當に此處牛を擱まされたが、値踏して見てくれと頼む。百姓は自分の牛によく似てゐる。却々よい牛だ。六グルデンはするだらうと答へる。泥棒は牛と云ふものは何れもよく似てゐるものだ。自分は町で掛金集めに忙しいから、此の牛を賣つて來てはくれまいか。御馳

走もするし、酒手もやらうと言ふ。百姓は喜んで、町の木賃宿で落ち合ふ約束をして、牛を曳いて去る。泥棒はそのあとで百姓の馬鹿さ加減を嘲笑つて、彼自身は町で度々詐欺をやつてゐるので、町へ姿を現わすのは危険だから、百姓を手先に使つたのだと獨り言。

場面變つて木賃宿。宿の亭主が例によつて商賣の不振を嘆いてゐると、百姓が来て、木賃宿を探し、かの泥棒のことを尋ねる。彼は亭主に勧められて、ビールを呑み乍ら待つこと暫し、かの泥棒がやつて来る。そこで牛を五ターレルで賣つた話をすれば、泥棒は一ターレルの酒手を與へ、更らに料理を取り寄せようとする。だが酒も肉もここで碌なものがないと言つて、自分で行つて買つて来るとばかり、亭主から徳利と錫の盆とマントを借りて出て行く。マントは肉や酒を他處から取り寄せたとあつては此の宿の名折れだから、それらをこつそり匿して持つてくるためである。あとで百姓は今の客人はよい商賣をしてゐるらしいと言へば、亭主は自分の家は浮浪人ばかりを泊める宿屋だと言ふ。そこへ百姓の娘が馳け付けて来て、牛が盗まれたことを告げる。かうして百姓も亭主も泥棒にすつかり瞞されたことがわかる。亭主は泥棒のあとを追ひかけて行く。だが百姓は實は例の牛を六ターレルで賣つたのであつて、一ターレル着服してゐる上に酒手を一ターレル泥棒から貰つてゐるのである。だから泥棒と亭主とがあとの四ターレルを半々に分ければ、三人とも平等に分配したことになると、彼は妙な理窟で大いに得意になる。そして娘には約束した物を買つてやるから、女房には今の事を話してはならないと口止めして、市場へと出かける。

何れにしても此の寸劇では人物の行動が極めて自然に運ばれてゐるとともに、場面の風景も甚だ寫實的に描かれてゐる。即ち第一場は市場日の前夜の農家を巧に活寫してゐるとともに、第二場では町の怪し氣な木賃宿の景圍氣を美事に描き出してゐる。特に冒頭で娘が「牛の

世話をしてから、晩御飯にしよう」と言つてゐる處、百姓が借金の事で裁判所から呼ばれてゐるから、明朝は女房や娘より二時間も早く起きて町へ出掛けなければならぬと斷つてゐる處、牛を大切に濯山乳が攝れる様にしてくれと娘に吩咐してゐる處等は、百姓の女房を登場させずに濟ますための配慮であると同時に、今後牛が問題になるための準備である。更らに劇中の人物の動作に就てはそれぞれ明確な理由が與へられてゐるのも、作者の苦心の存する處である。泥棒が特に牛を盗むわけ、牛を百姓に賣らせるわけ、亭主からマントを借りて行く理由、百姓が亭主も泥棒と結託してゐるのではないかと疑ふわけ（と言うのはその前にその宿屋が甚だ性質のよくないものであることを示すことによつて）等凡て用意周到に準備されてゐて、それらが人物の動きを著しく效果的にしてゐる。そして之をパウリの敘事物語が泥棒の立場から彼の自慢話の一つとして紹介してゐるのに比べる時、劇作家としてのハンス・ザックスが如何にすぐれた脚色法を取つてゐるかを容易に認めうるであらう。

パウリの笑話に次いで作者が好んで取材したものは、ポッカチオのデカメロンであるが、之は前者に比べて物語の内容が複雑で變化に富んでゐる丈に、謝肉祭劇の如き寸劇に壓縮するには多くの無理があつた。従つて喜劇又は悲劇の分野に於て相當に成功したであらうと思はれるものも、簡単な茶番狂言化しようとして徒らに筋のみを追ふ對話の羅列に過なくなつて了つたものが多い。然し之を逆に見れば此の種大膽な試みが次の時代の劇詩の創作に對するよい準備工作であつたことは争はれない事實である。

處で當時詩人が脚色したものはデカメロン第八十話 *FaBnacht spiel, mit 4 Personen zu agirn: Der jung Kaufman Nicola mit seiner Sophia* (若く商人ニコラドンニャ。1550, 10, 10, Nr. 23.) 第八十九話 *FaBnacht spiel, mit 4 Personen zu agirn: Von Joseph vnd*

Melisso, auch König Salomon (モヤントメリン、又はソロモン王。1550, 11, 29, Nr. 26.) 及び第九十二話 Faßnachtspiel mit fünf Personen: Ein Edelmann vnd zwen Knecht, Ein Abt vnd ein Knecht, vnd heist das Wildbad. (貴族と二人の下僕、僧院長と下僕、又は湯治。1550, 12, 17, Nr. 27) の三篇であるが、何れも謝肉祭劇の題材としては、時、所、人物の關係に於て長大であり錯綜してをて、到底そのままでは脚色し難いものである。されば作者は随分思ひ切つた自由な取扱ひをしてゐるばかりか、全く別種の趣向を加へて、原作の物語を反つて非劇的にして了つてゐるものもある。

先づ「ニコラとソフィア」にあつては原作にある様な豊艶な男女入浴の場やその後の情交の描寫の如きは勿論すつかり省略されて、甚だ無味乾燥なものになつてゐる。言はば花の散つた枝葉、肉を削つた骨格ばかりの様になつてゐるのは、それが舞臺面では上演し難い種類のものであるとしても、餘りに安易に過ぎた脚色振りである。ニコラはフロレンスの貿易商の手代、ソフィアはシンリー、パレルモの高等淫賣婦、彼女はニコラが出張販賣員として渡島して來て、税關の倉庫に五百グルデンの商品を預けてゐることを知つて、色仕掛けてその金を巻き上げる。即ち女中をやつてニコラを口説かせ、浴場へ招待し次いで晚餐、寢室へと誘惑し、妖艶の美と豪華な接待で青年の心をすっかり魅了する。かくて愛の手練と贈物でニコラを完全に我が物とした時、一日わざと女中に呼ばせて中座したソフィアは、やがて歸つて來ると、彼女の弟が千グルデンの金がなければ破滅すると言つて寄越したと言つて、悲嘆して見せる。かうして商品を賣つた代金五百グルデンを男から體よく借金すると、その後はすつかり彼を見限つて、相手にしない。店主の方からは矢の様な催促が來るので、ニコラは絶望してナポリ迄引き上げてくる。そしてそこで Pietro dello Canigiano なる老友に逢ひ、事情を打ち明けて助けを求める。するとカニギアノ

が一策を授ける。

かくてニコラは油樽には水を詰め、織物箱には麻屑を入れて、パレルモに引き返し、それを二千グルデンの品物として倉庫に預け、尙三千グルデンの商品があとから到着する筈だと言ひ觸らす。それを知つた女は暇で鯛を釣らうと、再び男に懇懇を通じ、巧に言ひこしらへて先の金を返済して機會を窺ふ。すると今度は男の方で女を瞞す。彼は商品輸送中の船が海賊に奪はれて、その賠償金千グルデンを出さなければ商品が戻らない。だが倉庫の商品も今賣つては時機ではなく、女から返して貰つた五百グルデンも、新しい麻布の仕入金としてナポリに送つて了つて、今は一文も無いと言つて、嘆き悲しんで見せるのである。そして女から倉庫にある商品を抵當に金を融通して貰ふと、そのまま郷里の方へ引き上げて了ふ。あとでソフィアが抵當の品物を調べて見れば、油や織物は體裁丈で水と麻屑ばかりであつたと言ふ。

素材は多くの劇的場面を含んでゐるが、勿論簡單な一幕物に纏めることは不可能である。だから作者は時間の長短や場所の移動を無視して、極めて素朴に平面的に筋を運んでゐるに過ぎない。先づ若い商人 (Der Jung Kaufman) が獨白で、パレルモへ商品を持つて來て、或る貴婦人に歡待されてゐることを述べると、そこへカニギアヌなる老友 (Changianus, der alt freund) がやつて來る。彼は噂に聞いたと言つて、ニコラがソフィアに親しくしてゐる相だが、女は金に目を付けてゐるのだから、注意せよと忠告する。勿論若者は肯かずに行つて了ふ。老友はあんなに目が眩んでゐては、何と言つても駄目だと、心配し乍ら退場。此の第一場は全く作者の創意によるものであるが、餘りに常識的教訓的な發端で、物語の持つ情味を殺して了つてゐる。次いでソフィアが女中メツツ (Metz, die magd) を連れて出る。二人の會話により、ソフィアが御馳走でニコラを籠絡して、昨日儲けた數百グルデンの金を捲き上げようとしてゐることが知らされる。女中

が退場すると、ソフィアは悲し相にして坐つてゐる。とニコラが来る。そして女の悲嘆してゐる事情に同情して、結局五百グルデンの金を用立てる。女はこの御恩は一生忘れない等と言つて、男を晚餐へ連れ去る。此の場も全く實用的な脚色振りで、原作では女が男を接待してゐる際に中座して、それから男を購すことになつてゐるのに比して遙かに見劣りがする。第三場、女中メツツが獨白してゐる。ソフィアがもうすつかりニコラを相手にしなくなつたこと、男が裁判に訴へても、證文がないから駄目であること等。そこへニコラが訪ねて来るが、女中に追ひ返されて、頭を掻き捲つて歸つて行く。第四場、ニコラが老友に逢つて窮況を訴へ、策略を授けられる場。次いで第五場はソフィアと女中との簡単な對話。男が居なくなつたから、次の掠鳥を又引掛けようと言ふ。女中は兎に角ニコラの哀れな容子に同情してゐる。即ち此の場はニコラが新しく商品を仕入れて再び現れる迄の時間的間隔を塞ぐためのものと思はれる。第六場でニコラ登場、彼は自分の計略を成功させたものだと言つて去る。するとソフィアが出て来て、あの若い商人の姿を又見掛けたがと言つてゐる處へ、女中もやつて来て、ニコラが又澤山の商品を持つて歸つて来たと言つて報告する。そこで早速彼を呼ばせにやる。女中が去つて、ソフィアはもう一度腕に縫まりをかけて男を購してやらうと獨り言。とニコラが来る。女が前の事件を色々辯解すれば、男は何氣ない風で、今度の莫大な儲け仕事の話等をして聽かせる。するとソフィアは先の金を返し、夕食を一緒にし度いからと言つて、男を連れ去る。第七場、女中が出て、またあの若い人は購されるのかと言つてゐる處へ、ニコラが来て、女中にソフィアを呼ばせる。女中が走つて行くと、彼は悲し相にして坐つてゐる。とそこへ女が呼ばれて来る。そこでニコラは海賊船の話をし、商品に抵當にして女から金を借りることとなる。女が金を取りに去ると、ニコラは愈々幸運が運つて来た。水を詰めた樽、藁を入れた柵で千グ

ルデンを取つたら、早速海を越えてニッサへ歸るのだと獨り言。臆て金が出来たと言つて女が歸つて来る。男はこれでお前の眞心が判つた等と言つて、二人で退場。寔に坦々たる描寫で、物語の筋を追ふ丈の對話を必要限度に縮めて示してゐるに過ぎない。第八場に至つて、女の購されたことが明になる。女中が獨りで女主人の餘りに氣前のよいのを氣遣つてゐる處へ、ソフィアが馳け込んで来て、税關にある商品は贗造物であり、宿屋できけば男はもう出發後であつたと言つて、嘆いたり呪つたりする。最後に老友の結辭。色情を戒め、賣女の手練てに用心しなければならぬことを説いて、正しい結婚を勧める――

以上原作と脚色とを比較する時、此の劇が如何に此の作者の缺點を代表する種類のものであるかを見るであらう。ここには只單に物語の對話が存在するに過ぎず、素材が全く劇形式を殺してゐる。恐く作者は物語の面白さに引かれて、その内容を傳へれば足れりとしたのであらう。だが多作がともすれば亂作になるのは如何なる作家に於ても不可避の通蔽であるのみならず、當時の劇界の藝術的要求も至つて低い水準にあつたのであるから、これを以て獨り此の民間詩人を攻めるのは酷である。何れにしても是文の内容を一幕物に壓縮しようとするものが、根本的に不可能な註文なのだから、寧ろ作者がそこ迄謝肉祭劇のための取材の範圍を擴大してゆき、ともかくも複雑な筋を一つの舞臺面――即ち場所はソフィアの住居の外と内――に纏めた、如何にも素人らしい大膽さを認めるべきであらう。

同様に「ヨセフとメリソ」及び「湯治」も亦題材そのものの興味によつて作劇されたもので、脚本としては甚だ凡作である。只原本の異國的色彩がすべて當時の獨逸に於ける時代調に變更されてゐることは、大衆作家としてのザックスの特色でもあり、苦心の存する處でもある。

「ヨセフとメリソ」では、既に屢々謝肉祭劇の好題材とされた、恐

るべき悪妻に苦しめられてゐると言うヨセフと、誰からも敬遠されて愛されることのないと言ふメリソンが、賢王ソロモンを訪れ、デカールロンにある様な、王の甚だ暗示的な助言を得て救はれると言ふ筋であるが、作者は之れに配するに、これも既に人口に膾炙してゐたソロモンとマルコルフ (Salomon u. Marcolfus) の問答 (中獨演五九二頁以下参照) を以てしてゐる。

「湯治」では原作の強盜 Ghino di Tacco を當時獨逸に横行してゐた山賊貴族 (Edelman) に代へ、その二人の家來 Schrammfriz と Wursthans をして山賊生活の内情を物語らせてゐる。即ち山賊に落ちぶれた貴族が二人の家來と獲物を窺つてゐるわけであるが、そこへ美食と運動不足で胃弱に悩み、湯治に行くと言ふクリンゲンの僧院長 (Der Abt von Klingen) が通りかかると、彼等は之を監禁し、粗食と水と暗い室とですつかり治療してやると云ふ筋である。だが二人の家來が主人の待遇が悪いからよい主人を探して逃亡しようと思つたり、商人を襲うて上前を撥ねようと計畫したりしてゐる處は、全く作者の創意によるもので、作者特有の寫實描寫である。

以上を以て五十年度に創作された八篇の謝肉祭劇を見て來たのであるが、それ等は勿論作品の藝術的價值から言つて玉石混淆してゐるものがあるにしても、作者の意圖する處が常に諧謔を通じて中庸穩健なる處世的教訓を啓發しようとするにあり、そのために努めて古今の物語から題材を求めて、常に新しい興趣を喚起しようとしてゐることは争はれない事實である。かうして今やハンス・ザックスは謝肉祭劇創作の圓熟期に達したやうに思はれる。その劇作數は五十一年から五十四年の四年間に無慮四十二篇 (その内四篇 Die drei studenten. 三人の大學生。1551, 2, 2. Nr. 29.] Der podenlos prüfensack. 底無し坊主の頭陀袋。1551, 9, 21. Nr. 33.] Die Reichstage Deutschlands 獨逸帝國議會。1553, 3, 2. Nr. 48.] Der schalkhaftig pawren knecht. 狡猾な百姓の下男。1553, 10,

2. Nr. 55. はテキストが傳つてゐない) に達し、作者の博讀と觀察から得られた素材は、興趣の赴くままに次から次へと諷刺教訓笑話等の寸劇に變改されて行つた。そこには宛も水の低きにつくが如く何等凝滞する處ない、自在な作詩振りが見られるとともに、上演用の制約に對する注意深い配慮も亦到る處に行はれるやうになつて來たのが知られる。勿論之等多數の作品中には劇的生命に乏しい單なる對話篇に過ぎやうなものも少なからず存在するけれども、しかもそれらのものにして當時に於ける幼稚な劇文學の水準から言へば、さすがに多年鍊磨した老巧な筆になるもの丈に、自在な會話の應酬に於て甚だ優れたものがあり、讀者をして倦ましめないものがある。ことに作者が喜んで取扱つてゐる愚鈍な百姓、小俐口な町人、又は好色貪慾な坊主等を題材にしたものには謝肉祭劇の特質を最もよく生かした幾多の傑作が存在し、作者ハンス・ザックスの名を不朽にするものがある。されば實にハンス・ザックスによつて謝肉祭劇は十六世紀諧謔文學の中に重要な地位を占めるに至つたのみならず、彼に依つて世界文學史上に於て、一つの特異な劇形式が創造されたと言つても過言ではない。そして斯の如く謝肉祭劇を向上せしめたものは勿論詩人の詩才によるものではあるけれども、しかも作者が不斷の努力を以て、自己の教養を高め、廣く智識を古今に求めることにより、その内容を充實して行つたことも亦重要な因子をなしてゐる。既に見た通り、彼はデカールモンとパウリのシムプ・ウント・エルンストから屢々題材を取つて來たのであるが、此の二書は終生彼の詩作の源泉であつたとともに、今や之れによつて習得された作劇法は彼の書架に並ぶ古代、中世、近世に渡る愛讀書にも應用され、擴張されて行つた。従つて彼の謝肉祭劇はその原作との比較によつて最もよくその特色を看取することが出来るのみならず、その發展過程の跡をも辿ることが出来るのである。

扱て圓熟期の作品に題材を供給してゐるものは矢張りデカールモン



を以て第一位とする。即ち五十二年度に創作された三篇

1. Faßnacht spiel mit 4 Personen: Der gestolen Pachen. (著者不明。1552, 12, 6. Nr. 41. Dec. 76.)

2. Faßnacht spiel mit 6 Personen: Der Pawr inn dem Fegfeuer. (淨罪火の中の百姓。1552, 12, 9. Nr. 42. Dec. 28.)

3. Ein faßnachtspiel mit 5 Personen, Die listig Bulerin genandt. (奸智にたけた精婦。1552, 12, 17. Nr. 43. Dec. 66.)

五十三年度に創作された三篇

4. Ein Faßnachtspiel mit 4 Personen vnd wird genennet: Der groß Eyferer, der sein Weib Beicht höret. (女房の懺悔を聴く吝嗇鬼。1553, 1, 14. 1553, 1, 14. Nr. 45. Dec. 65.)

5. Ein Faßnacht Spiel mit Drey Personen: Das Weib im Brunnen. (井の中の女房。1553, 1, 15. Nr. 46. Dec. 64.)

6. Faßnacht spiel mit 5 Personen: Der Ketzermeister mit den vil kessel suppen. (宗教裁判官と澤口のルーペ。1553, 10, 2. Nr. 53. Dec. 6.)

及び五十四年度の作品

7. Ein fasnachtspiel mit vier person: Der alt wol erzawst pueller mit seinr zauberrey. (数々の操縦された好色爺と魔法。1554, 2, 1. Nr. 62. Dec. 85.)

の七篇は何れもボツカチオの十日物語に依つており、それぞれ作者の自在な脚色振りを示してゐる點に於て、前時代のものより又遙かに作者独自の世界を展開してゐる。

先づ「盗まれたハム」は曩の「孕み百姓」と同じく、デカメロンで屢々愚弄されてゐるお人好しの畫家 Calandrino の馬鹿癖を取扱つたものであるが、作者はそれを巧妙に翻案して、當時の獨逸の農村に於ける事件とし例によつて愚鈍な百姓を揶揄してゐる。そこには多くの作者の創意になる新趣向が加へられてゐるとも、農民生活の實情

が活寫されてゐるのは、有繁に老巧な筆法と言はなければならぬ。

最初に Heintz Knol が二日酔の體で、まだ足がふらふらすると獨り言を言ひ乍ら登場、仲間の百姓 Cuntz Drol に行き逢ふ。二人の挨拶で、クノルが昨晚坊様の處で、坊様の腸詰めを着に呑み明したことがわかる。ここで坊様の噂が出てくるのは、後段の巧な伏線である。それからドロールは Herman Dol が豚を殺して、腸詰めやハムを造つたが、こちらで毎年腸詰めを贈つてやるのに、向ふではちつとも返禮をしないと云ふ。するとクノルも毎年招待してやるのに、彼奴は一度も招んでくれたことがないと、二人でドルの吝嗇の悪口を言ひ、今晚彼のハムを盗んでやらうと、その方法を相談する。即ちドロールが何かを借りに行つて、ドルを誘ひ出してゐる中に、クノルが家の裏から忍び込んで、ハムを盗み出さうと言ふのである。それからそのあと始末はうまく計略にかけて胡魔化してう。又殿様 (Pfleger—Burggraf) に知れても、元來ドルの吝嗇は評判だから、こちらに嫌疑のかかることとはないと云ふわけである。二人は早速示し合せて、今晚燈りがついたら決行しようと言つて退場。ここでハムを盗み出す方法は、原作によると、カランドリノを二人の悪仲間 Bruno と Buffalmacco が坊様と相談して、坊様の奢りで彼を招待し、泥酔させて戸締りをせず寝て了ふ處を、盗みに這入ると云ふことになつてゐるのであるが、作者は恐く場面を簡潔にするためと、百姓生活を寫すために前述のやうにしたものと思はれる。又領守の話をするのも心理的に面白い作者の創意である。

次いで吝嗇な百姓 (Der Karg Pawr) ヘルマン・ドルが登場、彼の獨語で、彼が肥豚を屠つて鹽漬にした事、先づ骨から嚙つて行くこと、屠殺者が腸詰めを餘り大きくし過ぎたこと、隣家へ贈り物をすることは見合せること、獨りで腸詰めを食べれば、斷食祭の頃まで保つこと等が知らされる。彼の性格がここで躍如として描き出されてゐる

る。クンツ・ドロールがやつて来て、下男が薪割りて手斧を毀し、自分は打穀棒を折つたから、此の二品を借してくれと頼む。ドルは借すことは借すが二日経つたら間違ひなく返してくれと念を押す。腸詰めが澤山室中に懸つてゐるが、一つ試食させないかとドロール。女房に無断では手がつけられないとドル。お前様のお主婦かみきんは湯治に行つてゐる。誰が告げ口をしようと云ふのかとドロール。いや女房がちやんと數を知つてゐるから、女房の吩咐には背そむかれぬ。さあ手斧と棍棒を取りに行かうとドル。ドルの個性がカランドリノのそれに比して如何に激烈と描寫されてゐるかは、此の簡単な場面でも知られる。二人が退場すると、場面が變つてハインツ・クノルとクンツ・ドロールが出て来る。既にクノルはハムを盗み出して、自家に持つて歸つたのである。そのハムをどうしようかと問ふドロールに對して、クノルは坊様に話してあるから、坊様の處へ持つて行かう。坊様が策略でドルを煙に巻いて、彼奴が自分で自分のハムを盗んだことにするのでと答へる。そこへドルが悲し想にして出て来る。クノルがどうして其處に悄氣てゐるのかと訊く。ドルが「非道い目に逢つた。お隣りの衆、昨晩わしのハムが失くなつた。」と答へる。ドロールが失くなる譯がない。戸締りを嚴重にしたと言ふぢやないか！自分で何處かへ匿して、後で情婦いろまんにやるつもりだらうと言ふ。そんな事は決してない。女房に打擲されるから何とかして助けて、ハムを見付けてくれと、ドルは一生懸命である。そこへ坊様が来る。ドルはお前様の祕法で泥棒を探して下されと頼む。坊様は其處事は出来ないが、策略で泥棒を見現はしてやる。青い生薑しやうがに呪文をかけて、皆にそれを食べさせると、眞の犯人丈は膽計の様に苦くて、それがどうしても呑み込めずに吐き出すと言ふ。そしてそれには費用がかかるから五十文出してくれと、言はれてドルは、今金の持ち合せがない。實は、女房に匿して埋めてあるのを掘り出して来るから、それ迄に支度をして置いて下されと馳け去る。

夫婦の間でお互に躰練金を匿して貯めてゐると言ふ話は、既に「ヘンノー」や「天國に行つて来た遊歴學生」にも見られる趣向であるが、作者は勿論原作には見られない此の挿話を、ここで非常に有利に應用してゐる。と言ふのが之によつてドルなる人物の性行が一層明瞭に浮き出してくるとともに、彼を一端退場させて、その不在中に坊様が他の二人に策略の祕密を打ち明け、手筈を決めることが出来るからである。ドルが馳け走ると、クノルがその策略とはどう云ふのかと早速坊様に訊く。坊様がお前達の食へるのは生薑を砂糖で包んだのだが、ドルに食べさせるのは犬の糞と蘆薈に砂糖を被せたのだから、間違ひない様にして欲しいと教へる。そこへドルが馳け込んで来て、土中から掘つて来た金を差し出し、なほ泥棒が見付かれれば、もう五十文をお禮に出さうと言ふ。坊様が生薑を取り出して、出鱈目の呪文を稱へ、各々に一片づつ食べさせる。クノル、ドロールと次々に食べ終つて、ドルの番になる。彼は生薑を口の中であちらこちらに轉ころがして苦い顔をする。(Herman Dol wüßte den jünger im maul hin und wider, sieht sawr.) 坊様は泥棒がやがて見付かり相だ。ヘルマンは生薑が呑み込めないと言ふ。彼は遂に吐き出して「身體中が震おのく程口の中が苦くつて、目から涙が出るわい。生涯泥棒にされても此れ丈は食べられない。犬の糞の味がして心の臟迄刺される様だ。吐き相で戻し相でたまらない。」と苦しがる。此の場は嘸かし觀客を喜ばせたことであらう。ドロールが彼に擲みかかつて、「貴様ひどい奴だ。自分で盗んでゐて、罪を正直者に被せようとする」と言へば、クノルも「お前さんは情婦いろまんの Strigel Christel にやるために自分でハムを持ち出したに違ひない。お前さんの女房おかみさんに言ひつけてやる。」と脅かす。ドルは兩手を擧げて遂に降参する。彼は女房に丈は黙つてゐてくれ。今度のことには身に覚えはないにしても、祕法が教へ、他に盗みをしたこともあつて見れば、女房が信じないわけはない。クリステルの名が出たら、女

房がどんな亂暴を働くかも知れないと嘆願する。遂に坊様は口留料に一グルデンと腸詰め二十ヶを要求し、ドルは二グルデン出すから腸詰め丈は勘弁してくれ。女房が腸詰めの方は嚴重だからと、又もや地中から金を掘り出すために馳け出して行く。あとで坊様が吝嗇坊から金を出させ、酒を呑むのはよい事だ。どうせ彼奴は自分では樂しき土の中へ埋て置くのだ。貯めるものがあれば、使ふ者がなければならぬ。金袋が大きくなり過ぎない様にと、滑稽な決論を下す。ここで秘法を行ふ者が原作の様に主人公の友人達ではなくして、坊様になつてゐるのも、作者のよい着想である。と言ふのはそのために秘法や呪文が一層尤もらしく見えてしかも滑稽であるとともに、當時のカトリック僧侶の俗化を諷刺する一石二鳥の効果を擧げてゐるからである。何れにしても此の劇はその人物描寫と舞臺技巧に於て又一段と進歩の跡を示してゐる。

次の「淨罪火の中の百姓」も愚昧な農民が狡智な坊様に愚弄されると言ふ同一趣向になるものであるが、作者は原作の喜劇的分子を捕へてよくその劇的效果を擧げてゐる。原作では、トスカニヤの或る高德の譽れは高いが、實は非常に好色な僧院長が、百姓 Ferondo の細君に頼まれて、夫の異常な嫉妬を矯正してやる代りに、細君の貞操を自由にすると言ふ約束をする。かくて百姓に麻酔藥を入れた酒を飲ませ、假死状態にし、一端棺に入れて埋葬するが、やがて腹心の僧正をして、フェロンドーの着物を僧衣に着換へさせ、暗い牢屋へ運ばせる。そこで彼が正氣に返ると、お前は死んで魂が淨罪火へ來てゐるのだと教へ、嫉妬の罪を償ふのだと言つて打擲する。且つ僅にパンと酒とを與へて、之は細君の供物だと告げる。そこに色々滑稽な問答があるが、ザックスの芝居でも亦此の場の描寫に滑稽味が旺盛してゐる。かうして十ヶ月百姓が暗室に閉ぢ込められてゐる間、僧院長は百姓の着物を着て、細君の處へ通ふ。やがて細君が妊娠するので、院長は百姓に贖

罪が叶つて、お前は娑婆に歸り、子供を授かると諭し、再び彼に麻酔藥を飲ませ、意識を失はせて棺に入れる。彼が再び目が醒めて棺の中から出て來ると、衆僧悉く驚き恐れ、死者を蘇生させた僧院長の宏大な信仰の力を讃へる。フェロンドーはその後すつかり嫉妬をやめたと言ふ。

ザックスの芝居では僧院長が獨身の淋しさを嘆いてゐると、修道僧 Ditch が結婚生活の煩しさを説いてゐる。とそこへ宛も夫婦生活の悪い方面を證明するかの如く、百姓 Heinz Düppel の女房が、夫の嫉妬に苦しめられてゐると訴へ出ることになつてゐる。然し僧院長は女房を誘惑する代りに、報酬を要求し、女房は例によつて牛小屋に埋めてある金が七ポンドあるから、それをお禮に持つてくると言ふ。そして院長の入智慧で、女房が夫に供物を持たせて今日中に彼を僧院に寄越すと言つて去るのも、作者が人物の出入に如何に注意を拂つてゐるかを證するものである。同じく百姓デニツベルが麻酔の這入つてゐる酒を呑んで倒れる場面で、小作料の未納を院長に督促されるため呼び出された百姓 Ißberlein (Irßenbrey) と Nickel Rubendunst が居合せて、現場を目撃し、彼等が死者の噂をしたり、死骸を片付けたりにしてゐるのも、作者の巧妙な新趣向である。此の二人の百姓は更らに最後に又デニツベルが蘇生したと言ふ噂を聞いて、様子を見に來るが、瘦せ細つたデニツベルを見て、亡靈が出たとばかり逃げ出さうとし、それからデニツベルから淨罪火にゐた時の話を聴く處も却々に滑稽な獨創的場面である。とにかく此の劇では作者が物語の内容を獨逸風に改作し、場面を劇的に構成するために、如何に獨特な趣向を凝らしてゐるかを最もよく知ることが出来る。そしてその原作との相違點が、原作では物語の中心を僧院長の好色に置いてゐるのに、此の作ではどこ迄も嫉妬深い百姓の微罰に置いてゐることにあり、かくて滑稽と教訓とを巧に結合してゐるのは、作者が素材を如何に自在に使い熟して

あるかを示して餘りある。

「奸智にたけた情婦」は殆ど原作通りの忠實な翻案であるが、只その前半に於て自ら、巧な對話と心理描寫で、人物の性格物語の教訓的意義が劇的に表現されてゐるのは、有繁に老手の致す處である。

フロレンスの武士の妻で美貌の Isabella は若い愛人 Leonetto の他に尙強要されて止むなく許した情人 Lambuccio があつた。或る時夫の留守にレオネットーを呼び寄せた處へ、ラムベルツッキオも押し掛けて來たので、若者を匿くして彼を接待してゐると、不意に良人が歸つて來たと腰元が注進して來る。夫人は早速の機轉で、ラムベルツッキオをして拔身を翳し、室から飛び出させ、良人に逢つたら「神に誓つて彼奴をそのままにはして置かぬ」と喚き乍ら、走り去る様にさせる。そこで良人が夫人にその譯を訊くと、夫人は匿れてゐる若者にも聞える様に、見知らぬ若者が逃げて來て、匿まつてやつた後へ、ラムベルツッキオが追ひかけて來たけれども、室へ入れなかつたのだと答へる。良人は家の中で殺人が行はれなかつたのを大いに喜び、若者を呼んで、仔細を尋ねる。若者は理由もなく切りかけられたので、此の家へ逃げ込んだが、お陰で命を助けて貰つたのは有り難いと答へる。かうして夫人の奸計は功を奏し、良人は若者に痛く同情し、彼を晩餐に招待したばかりか、家へ迄も送り届けてやつた——と言ふ。

然し劇の方は Lisabetha と腰元 Agneta との對話で始まる。そこで夫の留守に愛人を呼ばせようとする夫人に對し、アグネータは色々諫言してゐる。あの様な真面目な旦那様を瞞して、若し見付かつたら、お二人とも命がないとか、前の日曜日にも危い處で漸く逃れたてはありませんかとか、かう云うことは何時か屹度知られないではあないとか言ふけれども、夫人は自身の才智を頼んで言ふことを肯かない。然し腰元が使に出て行くと、さすがに彼女も「此の一年間隨分危い綱渡りをしてきた。もうよい加減で切り上げる汐時だ」と反省するが、今

日のよい機會は矢張り逃されないと、愛慾の思ひに堪へないでゐる。

そこへ Leonetta が忍んで來る。彼も亦前の日曜日にどんな目に逢つたか知つてゐるくせに、何故又自分を呼ぶのかと、恐怖に堪へないでゐるが、リサベータは色々に言ひ慰め、町中探しても手に這入らない様な襯衣を新年の贈物として作らせて置いたから見て下さいと、極力男の機嫌を取つて、別室へ連れ去る。あとで腰元が出て來て、奥様はレオネットア様を愛し乍ら、Lamprecht さんともよい仲になつてゐらつしやるが、これは此の儘收り相もない。何れ一騒動持ち上るに違ひないから、早く暇を取り度いものだとやつて、退場する。即ち此のアグネータの獨白は早くも自分の身の上を心配する賢い女中の如何にも言ひ相な科白であるとともに、リサベータに二人の情夫のあることを觀客に知らせるためのものでもある。と言ふことは副人物又は端役の口を通じて物語の筋を運ぶと言ふことで、一種の間接敘法とも言ふべきものであるが、今後作者は此の方法を頻繁に用ひるやうになるのである。扱て腰元と入れ代つて、リサベータとレオネットアが出て來る。

男は美事な襯衣の贈物を賞めて、漸く氣も落ちついた様子。女は尙ももつと立派な飾手巾をあなたのために作らせてゐるのよ等と愈々懸命に男の歡心を買はうと努める。處へ腰元が又馳け込んで來て、ラムプレヒトが來た由を告げる。夫人は早速若い燕に一寸の間匿れる様にとやつて、ラムプレヒトを迎へに行く。あとでレオネットアは女の浮氣心を知つて、再び後悔し、女蕩しと評判のあるラムプレヒトとここで逢つたら、刺し殺されるだらうと心配し乍ら出て行く。同時に女がラムプレヒトを連れて來る。此度は前と反對に男の方で一生懸命女の機嫌を取る。男は今日狩に出てゐたら、御主人に逢つてフライブルクへ行くと聞いたから訪ねて來たと言つて、金の鎖を贈物にする。女が主人の目が嚴しいので、自分からは何にもお返しが出来ないと言へば、男は何のそんな心配が入りませう。あなたの愛に優るものはないと答へ

る。と腰元が三度馳け込んで来て、主人の歸宅を告げる。ラムプレヒトは喧嘩になつたら負けてはゐないと見榮を切るが、夫人は原作物語にある様な策略で、首尾よく三人の危機を救ふ。しかも良人 Landolin はレオネッタに對して、貴君のお父様にはヴェニスとの戦争で命を救はれたことがある。その息子様をどうして見殺しに出来ようかと、若者を改めて夫人に紹介し、鄭重に晩餐に招待するのである。それから彼等が去ると、腰元が結辭を述べてゐるが、一時は女の智慧で男を瞞すことが出来ても、何時かは露見して、恥と争の種となると警告する。

以上の梗概によつても知られる様に、此の劇の前半には作者の創意によるものが多々あり、そこに登場する四人の人物の性格も美事に描き分けられてゐるのは注目に値する。

かくてハンス・ザックスの人間心理の解剖は次の「女房の懺悔を聴く吝氣男」に於てほぼ頂點に達する。ここには一人の嫉妬深い男がモリエルの喜劇でも見るやうに、鮮明に描き出されてゐる。元來原作の物語は異常に嫉妬深い男が美しくて貞淑な細君を、殆ど監禁同様にして苦しめるので、細君も愛人を作つて、夫の裏を搔くと云ふ處に興味の中心を置いてゐるのであるが、作者は「淨罪火の中の百姓」に於て試みたと同じ筆法で、その吝氣男が、どこ迄も貞淑な細君の奇計で、改悛させられると云ふ教訓を骨子としてゐる。それ丈に劇では當然嫉妬する夫の心理を強力に展開して見せることに劇的葛藤の契機を置く必要があつた。だから冒頭細君の Margaretha は女中の Ursula に向つて、夫の嫉妬が如何に無法で激烈なものであるかを訴へるけれども、女中がそれでは貴女も一層、よい人をこしらへて楽しんでやらうと云ふのを受け入れない。そして女中が原作にある通り、隣りの若者と壁の穴を通じて親しく出来ると勧めるにも拘はらず、細君が自分の操は汚されないと断つて、原作とは全く相反する構想であつて、これに依つて、夫の常規を逸した嫉妬は、細君には悲劇であるが、それ自

體では喜劇的效果を擧げるに至つてゐる。即ち細君と女中とが去つて彼、嫉妬男 (Der alt Eiferer) が登場、その獨白を聴けば「美しい若い細君を持つてゐる夫は何と憐れなものだ。細君は誰にも愛される。夫は世にも辛い思ひをする。心は心痛で泣いたり怒つたり、どんなに注意して見張つても、何の役にも立たない。女の計略は遠謀深慮、狡猾老獪で、色々な陰謀を企むのだから。わしは病氣で病院に這入つてゐるやうだ。」と嘆き、更らに「神様は私を大金持ちにし、その上美しい若い女房を下すつたが、わしは女房のために夜晝氣を柔んでゐる。成程家内のあとから蹤いて歩き、見たり聞いたり訊ねたりして見ても、それらしい様子は見當らないし、ききもしない。本當を言へばその通りだが、それでも嫉妬に氣も狂ふばかり、日が経つ程に益々烈しくなる。」と告白する。正に嫉妬に狂ふ餓鬼である。そこへ細君が明朝教會へ懺悔に行かせて呉れと言つてくる。彼はしぶしぶ、必ず知り合ひの司祭補の處へ行くことと終つたら眞直に歸つて来ると云ふ條件附きて許す。兩方とも腹に一物あるのである。細君が去ると吝氣男は獨言で、自分の計畫を洩らす。即ち司祭補の帽子と衣を借りて、女房の懺悔を盗み聞きしようと言ふのである。翌朝細君の處へ女中が「旦那様は今朝早く司祭補様の家から僧衣を着て出て来られました」と注進してくる。細君は夫の意圖を察して、此度こそあの吝氣男の馬鹿さ加減を思ひ知らせやると言ふ。それから懺悔聽聞の場面。嫉妬男が司祭補になり濟まして、今日こそ女房の情事を聞き糺してやると言つてゐる處へ、細君が来る。細君は或る坊様が毎晩自分の寢床へ忍んで来ると告白する。坊様とは誰かと問ひ詰めるが、それ丈は明かされないと女房は拒む。では神様に祈つて、そんな罪から逃れるやうにして上げよう。毎朝小僧をやつて前晩の様子を聞かせるからと言ふ。相手が夫と知つて、思ひ切つた虚偽の告白をして見せる細君と、細君の一言一言に激しく苦しみ乍ら、本性を現すことの出来ない夫との此

の場の對話は、彼一問これ一答、却々に巧を極めてゐる。細君が去ると、夫は烈しく興奮して、どうしてもその坊主を捕へてやると言つて出て行く。次いで細君が女中に懺悔の折の様子を物語つてゐる處へ、夫が来て、今晚は友人に招待されてゐるから、夕飯の支度も要らない。早く戸締りをして寝る様にと言つて去る。細君は嫉妬に狂ふ夫を笑ひ、何をする心算かと、女中とともに様子を窺ふため臺所へ出て行く。すると甲冑を付けた客氣男が出て来て、薪室の土間で一晚中見張りをしてゐて、坊主を見付けたら擲り殺してやると言つて去る。續いて女中が細君に、旦那が鎧をつけ槍を持つて、坊主を待つてゐると報告すれば、細君は一晚中下で凍えさせておおきと答へる。二人が去ると又夫が出てくる。彼は一晚中凍えながら坊主を待つてゐたが、坊主が来たのかどうか判らないから、小僧を遣つて聞かせて見ようと言つて去る。次いで女中が細君に小僧が来たことを知らせる。細君は小僧を呼び入れて、昨晚は坊主が来なかつたと答へて歸す。後で女中が小僧と旦那様とこそ話をしてゐるのを見たと言へば、細君は主人の馬鹿さ加減を笑ふ。すると又夫が出て来て、張番をしてゐたので、坊主が来なかつたが、これから冬中ずつと張番をしてやると、散々に坊主の悪口を言つて去る。代つて又細君と女中が現れる。女中が原本にある様に、細君に情事を勧めるけれども、細君はどこ迄も貞操堅固である。女中が去つて、主人が来る。彼は坊主が誰かと問ひ詰める。すると始めて細君がその坊主とはあなたのことだと打ち明け、懇々と嫉妬の謂れないことを説く。遂に夫はすつかり謝罪して改心を誓ふ。

以上の様に此の劇では場面が目まぐるしく變るのと、時間關係が無視されてゐるのは、此の作者に屢々見る缺點であるが、しかも謂れない嫉妬に盲目になつて痴態を演ずる主人公は十分に喜劇的人物になつてゐる。しかもかくの如き効果を擧げ得たのは、實に作者の巧妙な心理描寫にあるのであるが、此の傾向は次の「井戸の中の女房」を見る

時、更らに一段と明瞭に看取される。

此の劇の筋書でも、作者は原作の物語を殆どその儘採用してゐる。僅に最後に浮氣な女房の亭主が、原作の様に、友人親戚に説得されるのではなく、自ら進んで事を穩便に收めるために、女房に讓歩することになつてゐる點が違ふ位のものである。がしかも之丈でも作者が如何に人物の心理的發展を重んじてゐるかを窺ふに足るであらう。従つて物語の潤色振りも亦此の線に沿うて展開されて行く。

Stettano は近頃女房が機嫌よく毎晩酒を飲ませて呉れるのが、自分を酔はせて前後不覺に眠らせ、その間に間男をしてゐるのであると氣がつく。そこで今晚は泥酔した風を装うて家へ歸り、女房の不義を押へてやらうと獨語する。そして女房の Citta に兄様の處へ行つてくるからと言つて出掛ける。あとでギッタは夫の泥酔した醜體を事細かに物語り、今晚も酔拂つて歸るに違ひないから、戀の樂が出来ると喜んでゐる。そこへ呂律の廻らなくなつた千鳥足の夫が歸つて来る。此の邊は相變らず時間關係が無視されてゐる、女房は早速口もよく廻らない夫を賺して寢床に連れて行く。やがて又歸つて来た女房は、是から戀人を尋ねて眞夜中二時頃迄に歸つてをれば、夫は一晚中傍に居たものと思ふだらう。もう半年の間も續けて来たことだと獨語する。次でステファノーが出て来て、女房は案の條男の處へ行つたから、歸つて来ても家へは入れないと、入口の戸に門を掛ける。そこへ女房が出て来る。彼女は戸を鍵で開けようとして、内部から鐵の門が下りてゐるのを知る。さては夫が起きてゐてしたることか？悪事が露見しては大變だとばかり、小刀を出して抉じ開けようとしてならず、戸を叩いてこつそり女中を呼ばうとするが、反つて夫が出てくる邊り、此の場の女房の所作はさすがに此の作者ならではと思はせるものがある。出て来た夫は、友人達にお前の不行跡を見て貰ふ迄は家の中へ入れないと女房を嚇す。女房が哀訴嘆願、あなたは考へ違ひをしてゐる。紡ぎ室

て糸紡ぎをしてゐたのだと辯解すればする程、こちらは益々自信たつぷり、牢屋へ入れて曝し者にしてやると脅迫する。そこで女房ギッタは身の證あかしを立てるため死んでやる。世間の人はお前さんが突き落したのだと言ふだらうと言ひ乍ら石を井戸に投じて(Sie wirft den Stein in Brunnen.) 投身した様な音をたてて見せる。夫が驚いて飛び出して來ると、入れ代つて女房が家の中へ這入つて戸を閉ぢて了ふ。かうして二人の位地が全く轉倒する。夫は一生懸命に井戸の中へ向つて、釣瓶の中へ這入つてをれ。今引張り上げてやる。もう怒つてはゐないから、どうか生きてゐてくれと哀訴嘆願する。と家の中からギッタの嘲弄する聲が聞えてくる。かうして今度は戸を開けて呉れと願ふのが夫で、酔拂ひの豚野郎などは夜廻りに擱まつて皆の者に見て貰ふがよいと言ふのが細君。そこへ細君の兄の Antoni が來て、二人の言ひ分を聴き、ステファノを散々に打擲し、兄は妹を連れて歸る。あとで夫は女房の辯口にはどうしても敵かたはないから、明日は仲介人を遣つて和解しようと言ふ。

之も却々によい喜劇である。ことに作者が女房を締め出した時のステファノと、女房に締め出された後のステファノとを巧に書き分けて、そのコントラストに滑稽を求めてゐるのは、誠にすばらしい着想である。だから原作と違つて、ステファノが最後に自分からすつかり降参して了ふのも、此のコントラストを生かすための作者の優れた創意であるとしなければならぬ。尙此の劇では戸口と井戸が重要な役割を果してゐるから、此等のものも舞臺に飾り付けられたに相違なく、謝肉祭劇でも漸く道具建が用ひられるやうになつたことを知りうる。

扱て斯の如くクライマックスに至つて、主役の位置が轉倒する對立ラストの滑稽は「宗教裁判官と澤山のスープ釜」にも見られる。ことに此の劇では相手によつてその態度を異にする墮落した宗教裁判官が幸

刺に諷刺されてゐるのは、熱心な新教徒にして聰明なフマニストである作者の立場を明かにするものとして、甚だ意義深いものがある。

原作の筋書は、異端者取締りに名を藉りて、良民を搾取してゐる宗教裁判官が或る富豪に至つて愚鈍な男を、密告によつて捉へ、彼がキリストでも好んで飲むであらう様なよい酒を持つてゐると言つたのをキリストの名を冒瀆するものとして糾問する。そこで男は仲介するものがあつて莫大な金を獻納して、漸く焚刑を免れるが、その代り毎朝彌撒に出て、お晝には裁判官の處へ出頭する様にと命ぜられる。或る日裁判官の處へ行くと、今朝の説教はどうだつたと訊かれる。で男は誠に結構な説教であつたが、只一つあなたの方のために大變お氣の毒に思ふことがあると答へる。それは又どう云ふ譯かと問はれて、説教では此の世で與へたものは、あの世で百倍にして酬いられると言はれたが、さうすると僧院で毎日貧民に施される大釜幾つかの残滓くず汁も天國で百倍にして返されるとすれば、お前様方は皆その中で溺れて死んで了ふでせうと答へる。さすがに此の愚てはあるが辛辣な諷刺を含む言葉には、偽善的施物をしてをる裁判官も、事を荒だてることの不利を知り、彼を匆匆にして僧院から退去させたと言ふ。

芝居は町の與太者で宗教裁判の密偵 Herman Pich が誰かに集かつてやらうと待つてゐる處へ、宿屋の亭主 Simon Wirt が料理の仕入れをしようとして來かかり、遂自家の酒の自慢をして、基督だつて洗禮者のヨハネだつて、あの酒丈は大喜びで飲むだらうと言ふ場面から始まる。即ち此の場ではピッチとの對話を通じて、シモンの愚直で金持ちであることが紹介される。次いで宗教裁判官の Dr. Romanus が權道権道を以て弱い者を搾取してゐることを自慢してゐる。其處へかのピッチが來て、シモンを密告する。裁判官はよい鳥とばかり、早速仕丁を遣つてシモンを呼び出す。第三場で、シモンは宗教裁判官の處へ呼び出されたと言つて怖れ嘆き、隣人 Clas に頼んで、辯護人になつて貰



ふ。第四場、宗教裁判官と助僧との會話で、彼等が表面は殊勝らしく勤行施物に勤めてゐるやうに見せて、裏面で愚民から喜捨財物を捲き上げてゐる事が示される。彼等は貧民に大釜でスープを施してゐるのであるが、實は助僧(Der Custor)の忠義顔で言ふ處を聴けば、肉や魚のよい處は坊様達が食べて、残りの屑汁を施し、それで彼等自身が如何に粗食に甘じてゐるかを知らせ、信者の獻金を増させようと言ふのである。そこへシモンとクラースが来る。シモンが恐る／＼挨拶を述べると、裁判官(Der Inquisitor)が威丈高になつて、異端の罪を責める。クラースがそれを反駁したり、茶化したりする。遂に裁判官はクラースの皮肉に手子摺つて、彼を退去させ、それから又恐れ入つてゐるシモンを權勢づくで威嚇する。そして羅馬の指圖を仰ぐ迄、僧院に止まつて、説教を聴き、その報告をせよと命ずる。裁判官が勤行に行くと言つて去ると、隣人のクラースが来て、今の様子を聞き賄賂を使ふことを教へる。シモンは賄賂が效くと聞いて急に強くなる。そして二人で説教を聴きに行く。此の場は甚だ要領よく、合理的に構成されてゐるのみならず、裁判官の對シモンと對クラースの態度が美事に書き分けられてゐるのも、作者の功績に歸すべきものである。そして第五場。宗教裁判官が助僧に、まだシモンが奉謝金を出さうと言はないから、もつと脅してやると言つてゐる處へ、シモンが来て、原作にある様なスープ釜の話をして、有繋の裁判官をすつかり狼狽させる。彼はシモンに歸宅を許し、此の頃は宗教裁判の威信も全く地に墮ちたと悄氣する。かうしてここにも亦作者は對立による劇的效果を巧に應用してゐる。即ち一方には宗教裁判官と密偵ピッチ又は助僧、他方にはシモンとクラースを出して、裁判官の偽善と權勢、シモンの愚直と恐怖を示すとともに、此の両者が相對峙するに至つて、始めは驕傲尊大な裁判官が、終りには蔑視し切つてゐたシモンのために美事に背負投げを喰はされる。ことに宗教裁判に召換されて周章狼狽し、自

分を辯護してくれるクラース迄も否認し、あんな男は知りません。まるで氣が狂つて分別を無くしてゐるか、酔拂つてもゐるやうで御座ります。わしと一緒に偶然ここへ這入り込んで來ましたので」と言ひ逃れようとするシモンが、やがて僧院内に行はれてゐる贈賄奢修偽善不正の生活を知るに及んで、急に強氣になり、「こんな處で説教を聴くより家で聖書を読んでゐる方が餘程有り難い。僧院にゐても大して善い事は見られない。まやかしばかりで、お祈りはよくしても、信心がない。世間を瞞すためだから」と啖呵を切る邊りは、作者が如何に心理的變化の描寫に優れてゐるかを示すとともに、作者の宗教上の信念を加托したものと見て特記すべきものである。

最後の「散々に搔き捲られた好色爺と魔法」は例のカランドリノの馬鹿物語を「盗まれたハム」に於けると同じく、獨逸の農民劇に翻案したものである。従つて登場人物の境遇が凡て原作と異つて來てゐるとともに、それ丈に物語の要點が適當に強化されて、そのグロテスクな滑稽味が一段と生彩を帯びてくるやうになつた。

愚鈍で好色な Eberlein Dildapp が料亭のお主婦さんに懸想して思ひ焦れてゐるのを Villa Lapp が仲を取持つてやらうと言ふ。だが鬼婆と世間で評判な女房に知られたらどうするかと注意されて、デイルグップが「桑原桑原、女房に氣づかれねえやうに萬事はこつそり隠れてすることだ。」と答へてゐるのは、後段の伏線となつてゐるばかりではなく、原作では Filippo の愛人 Niccolosa に懸想してゐるカランドリノを例のブルノーとブッフアルマッコー「盗まれたハム」参照が弄ぶために、二人の間を仲介しようとする、カランドリノが「Zelio」に文は注意して呉れ。彼奴はわしの女房「Essa」と親類だから、大事な話が滅茶苦茶になる。」と言つてゐる簡單な文句を、特に作者が別趣向で補強したもので、詩人の細心な脚色振りを思はずも

のがある。

ラップが去つて、エーベルライン・ディルダップが獨り悦に入つてゐる。彼は昨夜お主婦さんに言ひ寄らうとすると、平手で背中を打やされ壁の際へ押し倒され、おまけに割木を投げつけられたのは、女が自分に氣のある證據だと得意である。それも原作ではカランドリノーが「わしにすつかり惚れ込んでゐる妖精のやうな娘」とブルノーに言つてゐるのを敷衍したものであるが、作者の想像力はディルダップを一段と滑稽にグロテスクに描き出してゐる。同様に次の場面ではラップが料亭の女將 Hidegart にディルダップの話をする、女將が「あんな醜男は町中にない。跛足で尙僕で齒缺けて、顔は豚の胃腑のやうだし、野雁のやうな骨ばかりの足をしてゐるぢやないか！よくもあんな男を取持つたわね。」と言ふのも、却々にグロテスクで滑稽な文句である。そこでラップが「何、謝肉祭の樂しみに彼奴を一つ愚弄つてやらうてんだ。」と言ふ。で二人が示し合せて女將が去ると、ディルダップが首尾如何と訊きに來る。女もお前に首つたけだと聞かされて、彼は益々調子に乗り、胡弓を弾いて、歌を歌つてきかせたら、どんなに喜ぶだらう等と言ふ。ラップは飾紐を取り出して、女の贈物だ。その代り櫛か財布のやうなものを返禮にしたらと煽て上げる。ディルダップは乘氣になつて「欲しいものは何でも買つてやる。年は取つたし男振りも悪いが、まだく色戀位は出来る。パンツも膝つておいたし、靴も墨を塗つておいた。帽子には羽を飾り、ツボンは藁のバンドで留め、上衣も新しいのがある。」等と大得意。作者のディルダップ描寫は巧妙を極めてゐる。彼が去るとラップがその馬鹿さ加減を笑つてゐる。處へ——ここで又時間關係が無視されてゐるが——女將が來て、昨夜ディルダップが彼女の窓で鼻の叫聲のやうな胡弓を弾き、狼の遠吠のやうな歌を歌つては、頭布を被つた猫にキッスをしたり愛撫したりして行つたと、大笑ひをする。そこでもう一芝居打つて、ディルダップを愚弄はうと云ふことになる。女將が去つて、ディルダップが來

ると、ラップは戀の護符をやるから、それを女の肌に觸れれば、女は思ふ通りになると教へ、その魔法の護符に必要な香と稷めた蠟燭と生きた蝙蝠とを要求する。それから女將とラップとが計畫の打合せをする場面があつて、女將が去ると、ディルダップの女房 Agnes が夫を探し乍ら出てくる。彼女はラップから夫に愛人が出來たと聽かされて、散々に夫の悪口を言ひ、あんな男を相手にする女は誰だらう。見付け次第鼻を殺ぎ腹を裂いてやると當り散らす。ラップは今晩密會の現場へ案内してやるが、そんな亂暴はしないでくれと頼む。此の場面も作者の獨創によるものであるが、ここに女房を登場させて、最後の場面の準備をしてゐるのは、事件の發展に對する期待を高める上に非常に役立つ。愈々最後の場面では、女將が顔を匿くして男を待つてゐる。ディルダップが忍んで來て、「お前様の頸に蚤がある」と言ひ、蚤を取るやうな風をし乍ら、かの戀の魔の札を、女の肌に觸れる。そして納屋の方へ行くと、女はすつかり男に惚れ込んだ體で、あとを追ふ。男が我が事成れりとはかり、それ／＼と女に抱きつかうとしてゐると、女房アグネスが馳け込んてくる。女將はす早く逃げて了ふ。勿論女房は亭主に掴みかかつて大亂痴氣騒ぎを演ずる。見兼ねて仲裁に這入つたラップ迄も叩き出して了ふ。遂にディルダップは兩手を舉げて降参し、今後色戀は一切諦めると言ふ。

此の劇の特質がディルダップのグロテスクな滑稽味にあることは言ふ迄もないことであるが、之をかの「盗まれたハム」の吝嗇なヘルマン・ドルや「淨罪火の中の百姓」の吝嗇男ハインツ・デューペルに比較して見る時此の好色爺が彼等の後身であり、彼等のエローティクとグロテスク味を發展させたものであることが知られる。さればハンス・ザックスは農民の愚鈍と狡猾とを槍玉にあげて、それを揶揄と滑稽の對象にしたのみではなく、今やその特殊の性格と心理とを掘り下げて行く中に、彼の人間觀察は次第に辛辣鋭敏になり、ここに一種獨特

な喜劇的人物を創造して來たと言ふことが出来る。實に此の意味に於てディルグップはハンス・ザックスの喜劇文學に於ける最も成功した最も特異な人物であつて、彼の絶えざる人間研究の生んだ稀有の存在であると言つても過言ではない。

由來ニユルンベルク謝肉祭劇は傳統的に農民の愚直にして狡智な性質及び惡魔も避易するやうな猙獰な惡妻を好んで諧謔の對象にして來たのであるが、ハンス・ザックスに至つてそれらが一幅の風俗畫的物語として展開され、當時の農民及び市民階級の生態の一面を喜劇化したものになつて來た。そこには非常識にして不自然な誇張もあり、野卑俗惡な奇語雜言もあるとしても、それ丈に當時の民間に於ける人情風俗が浮彫りにされ、偽らざる大衆感情が表現されてゐるのを見るのである。しかも宗教改革以來誠實な新教徒となつたザックスは舊教僧の墮落を諷刺揶揄するに何等の憚りも感ずる必要がなかつたので、彼の惡徳を描いて民衆の無言の抗議を代辯することも怠らなかつた。されば實に彼の謝肉祭劇中生彩に富んでゐるもの的大部分は、愚な百姓か氣の強い女房か又は色好みの僧侶かが關係しゐるもので、既述のデカメロンの翻譯劇もすべて此種の人物をニユルンベルク地方色を以て描寫してゐるのである。此の意味に於て作者は農民と市民と僧侶との生活感情と實態とを寫して倦むことを知らない現實主義（リアリスム）の詩人であつた。

先づ農民を主人公にしたものに次の二曲があるが、それ等が惡妻の契機（契機）と好色僧侶の契機を巧に取り入れてゐる處に、劇内容の著しい特色が見られる。即ち

Fabnacht spiel mit 3 Personen : Das Kelberbruten, (犢を孵化する。  
1551, 10, 7. Nr. 34.) へは例によつて愚直な怠惰な百姓と剽悍な女房と無能な僧侶とが登場人物となつてをり、

Ein Fabnachtspiel mit dreier Personen : Der Bawer mit dem Plett.

(百姓と霧。1553, 10, 12. Nr. 54.) へも人の好い百姓と、僧侶と密通してゐる女房とが取扱はれてゐるのである。前者の百姓は不精で自墮落であり乍ら、却々にお人好しな愚な男である。今日も女房は朝早く起きて、乳を絞り、牛乳と卵を町の市場へ賣りに行く支度をしたのに、まだ亭主は起きて來ない。彼女がふん／＼怒つてゐる處へ、百姓が頭を搔き／＼出て來て、「婆さん婆さん、お早よう。どうして其處に早く起きたのかい！」と訊く。女房が「お前さん、それでも起きて來たのかい。今頭の毛を搔き掻しつて起してやらうと思つてゐた處だに」と言ふ。亭主は「まだ牡鶏も牝鶏も鳴かないのに何をそんなに早くしろと言ふのだ」ときく。女房は「怠け者の不精者が、何を言つてゐるんだ」と嘔鳴りつけ、市場へ行つて來るから、掃除し、爐に火を入れ、家畜の世話や食事の用意をしておいて呉れと言つて、出て行く。あとで彼は爐に火を入れ、野菜鍋を掛けたら、まだ早いからもう一眠りしようと言つて出て行く。がやがて又歸つて來て、「大變大變、村長さんが合圖をしたのも知らずに寝過して、牛や豚を出すのを忘れて了つた。鍋の菜葉は煮えくり返つてゐる」と言つて出て行く。入れ代つて女房が荷物を擔いで出て來る。彼女は「亭主が碌なことをしないでらうから、歸つたら非道い目に逢はせてやる。品物を町で賣つたら一杯ひつかけて急いで歸らう」と言ひ乍ら町へ行く。すると又百姓が出て來て、爐ではスープが煮え零れ、猫は肉を攫つて了つたので、其奴の腰の骨を折つてやつたが、お陰で菜葉は眞黒に焦げて了つた。女房がどんなに怒ることだらう。だが家畜を外へ出して十分草を食へさせて置いたから、どれ小舎へ入れて來ようと言つて立ち去る。すると又出て來て、犢が井戸に墮つて溺れて了つたと言つて悲觀する。だが牝鶏や鷺鳥が卵を抱いて雛を孵すことから、チーズについてゐる蛆虫から犢を孵すことを思ひ着き、土間の暗い處へ籠を据ゑ、その中へチーズを抱へ込んで坐つてゐる。そこへ女房が歸つてくる。見れば家の中は

散々で、亭主の姿は見えない。ハンス！ハンス！と探し歩いて漸く土間の籠の中に蹲すままつてゐる男を見出す。が女房が罵つても叱つても怒つても嚇しても、彼は鷲鳥の様に手を羽代りにばたばたく動かし、クッ！クッ！クッ！プフ！プフ！と云ふばかり。さすがの女房も之は憑き物がしたんだと、坊様の處へ馳けつける。その間百姓は立ち上り、チーズを取り出してそれを眺め、再び下に置いてその上に坐る。さうしてゐる中に女房は坊様を連れて歸つて来て、一部始終の話をし、夫を助けて呉れと云ふ。だが坊様が代つて色々話しかけるけれども、百姓は相變らずクッ！クッ！と言ふばかりで返事をしない。そこで女房は呪文で憑き物を降ろしてくれと頼む。が坊様は百姓の形相の物凄いのを恐怖して承諾しない。女房が一生懸命頼むので、漸く祈禱書を取り出し、珍妙な呪文を稱なへる。と百姓は相變らずプフ！プフ！クッ！クッ！と云ふばかり。そこで遂に坊様は僧衣を彼の頭に引掛け、女房は坊様の背後に纏まつて、二人で彼を籠から引き出さうと引張れば、三人一團となつてどつとばかり折り重なつて倒れる。と百姓が嗚り出す。「お前さん方何するんだ。人が一財産儲けようと思つて、卵を孵なさうとこつそり置れてゐるのに。」と。女房「何を孵すのだえ」「懐だ懐だ！お前様方が邪魔しなければ、此のチーズの虫が皆懐になるのだ」坊主「どこから其魔術を覚えて来たかね？」「女房が怖くて恐ろしくて、つい思ひ着いたことですわい」坊主「それは又どう云うわけだね」とそこで百姓が今日の出来事を話せば、女房はお前の様な大馬鹿者はない。早く薪でも割つておいでと言ふ。坊様は女房に旦那を大切にしなければならぬと教へるが、女房は言ふことを諾かばこそ、拳を極めて坊様を追ひ出してさふ。それから亭主に「今日中に薪を割つて了はないと御飯を上げないよ」と叱りつける。がやがて「此魔亭主を相手に怒つて見ても始まらない。市場で儲けた金で酒でも買つて、今日の馬鹿騒ぎを忘れよう」と亭主を酒買ひにやる。

此の材料は作者が工匠歌(1547, 5, 13.)にも笑話詩(1557, 11, 9.)にも取扱つてゐるもので、作者得意のものと思はれるが、その脚色は人物の性格と言ひ、變化に富む所作と言ひ、自然に流れる會話と言ひ、凡てが陽氣にして滑稽な雰圍氣を醸し出すに役立つてをつて、謝肉祭的氣分に相應しい喜劇をなしてゐる。因に Kirchhoff の Wendunmut (I, 81.) 中にも、鷲鳥の様に卵の上に坐つてガーガーと鳴いてゐた百姓の話があり、此の笑話も古くから民間に流布してゐたものと思はれる。

「百姓と霧」ではこれも好人物の百姓 Heintz Meyr が薪割り鉋を持つて登場。彼は森へ薪割りに行かうと、朝早く出掛けたが、スーブをあとから届けてくれる様に頼むつもりで引返して、家の中を窓から覗くと、女房が坊様と裸になつて寢床に寝てゐるのを見たのである。

そこで坊様の髪の毛を捲り取つてやらうかと思つたが、何分にも相手は坊様のこと、手荒いことも出来かねて、不義者見つけたぞと嗚りつておいたが、何れ次の日曜日の彌撒の折りには此の事を素破抜いてやるし、女房がスーブを持つて来たら、打擲してやると言つて退場する。次いで女房が髪の毛を掻き捲り乍ら出てくる。彼女はこれは飛んでもないことになつた。あんな坊様を相手にするのはなかつたのに、悪魔にでも魅入られたのか、あの坊様は吝嗇で何一つ呉れたこともなければ、大口で何せむしで、跛足びつこで片目で、山羊の様に臭いの、それに身を任せるとは、妾の様な馬鹿な女は村中にもあるまいと後悔したり心配したりしてゐる。すると隣りの女が出て来て事情を聴き、色々慰めるが、女房は亭主の仕返しを極度に恐れて却々慰まなない。遂に隣りの女は自分によい思ひ付きがあるから、任せてくれ。お前さんは旦那に菓子でも焼いて待つておいでと言ふので、女房も喜んでそれに従ふ。

他方百姓は女房がスーブを持つて来るのを待つてゐると、隣りの女

がスープと菓子を持つて来て、「さあ、お二人でお上りなさい」と言ふ。百姓が怪しんで「わしは一人だが」と言ふ。「何を言ふの、お前さん方二人ぢやないの。冷めない中にお上りなさいよ」百姓は四邊りを見廻して「弄かつちやいけない」「弄かふもんですか。二人ぢやんとあるぢやないか。二人分十分あるから坐つてお上りなさい」百姓は又もや周圍を見廻して「そんな馬鹿なことあねえ。わしはどこまでも一人で、側には誰もあねえ」そこでどつちが正しいか賭をしようと言ふことになり、女は男に手を觸れて見て、始めて自分が間違つてゐたことに氣付いた様を振りをする。そして眼の前に霧がかかると、一人が二人に見えるものと説明する。かうして百姓をして、彼が今朝見たものも、目の迷ひであつたかと思はせるやうにする。彼は結局隣りの女房に説き伏せられて、自分の思ひ違ひで女房と坊様の悪口を言つたのは申譯無い。一緒に家へ歸つて酒盛りでもして、何もかも忘れようと言ふことになる。

此の作はA. L. Stiefel の考證 (Vgl. Zur Schwankdichtung des Hans Sachs in der Zeitschrift des Vereins für Volkskunde. Heft 1. 1898. S. 79 f.) によつて Friedrich Heinrich von der Hagen の Gesamtabentener (1850, 3 Bde.) の第二卷 Nr. 38, Der wibe list と甚だ類似してゐるが、更らにそれ以上に Jacques de Vitry の Predigtmärchen (Exemplar) にある物語と近似してゐるから、ザックスは之と共通の原本から取材したものであると言ふ。何れにしても此の物語の要點は霧の中では一つのもの、二つに見えると言ふ自然現象にあり、それ丈に劇全體の構成は劇と言ふよりも寧ろ巧な會話に過ぎないけれども、農民を主題にしたものも、遂に此の様な智的な内容を持つに至つたことは當時として甚だ斬新な試みであるとしなければならぬ。

謝肉祭劇の傳統的題材として愚昧な農民に次ぐものは、悪妻物語であるが、ザックスの作中之を主題にしたものは五十一年度に三篇

Ein Faßnacht spil mit drey Personen: Der böß Rauch (533) 題。1551, 1, 13. Nr. 28.)

Ein Faßnacht spil mit vier Personen: Der Pawren Knecht wil zwo Frauen haben. (百姓の伴に二人妻。1551, 10, 21. Nr. 36.)

Ein Faßnacht spil mit 3 Person: Das heiß Eysen (熱い鐵。1551, 11, 16. Nr. 38.)

それから飛んで五十三年に一篇

Faßnacht spiel mit 3 Personen: Das böß Weyb mit den worten, Wirtzen vnd Stein gut zu machen. (言葉や藥草や寶石をも良くならん悪妻。1553, 9, 4. Nr. 49)

がある。然し何れも劇的價値に乏しい對話に過ぎぬ。

「ひびい煙」之は Hans Folz の工匠歌 Ein liet genant der böß rauch: in der Flanweis から取材されたものである。悍猛な女房に苦しめられてゐる夫が、隣人に勧められて女房を打擲しようとするが、反つて女房のために散々打たれて逃げ出す。しかもあとから水迄ぶつかける。その様を見て隣人がどうしたのかと問ふ。亭主は火事が出たので消そうとして見たが、ひどい煙なので逃げて來たと言ふ。隣人がでは俺が消して來ようと家の中へ這入つて行くが、又もや女房に追ひ出されて來る。それから今はすつかり悄氣で弱氣になつてゐる亭主を勵まして、もう一度女房に立ち向はせようとする。其處へ女房が出て來て、隣人の取做しもきかばこそ、パンツを奪つたからには (die Bruch ab zu gewinnen, とは一家を支配することを意味する) 庖丁と財布 (das messer vnd die taschen, 一家の實權を握ることを意味する) も寄越せと言つて肯かない。遂に亭主は降参し、女房の腰に庖丁と財布を結んでやる。隣人が亭主の意氣地無いのを笑ふので、女房は彼を追ひ出してさふ。後で亭主は始め女房を甘やかしたので、女房を此處に増長させることになつたのだから、用心しなければならぬ

と、結辭を述べる。

「百姓の倅と二人妻」。Herman Lötsch は息子 Heinz に嫁を取つてやると云ふが、息子は父親の勸める Contz Tösch の娘 Gred の他にもう一人床屋の娘 Christa も嫁に貰ひ度いと言ふ。父親が女房と云うものは一人でも手に負へないのに、二人持つたら頭の上りつこがないと言つて反對する。そこへ叔父の Fritz も出て来て、色々息子を戒め、結局今年一人貰つて見て、結婚生活がうまく行つたら、來年又一人貰ふことに話が決まる。それから父親と叔父とがコンツ・テッチの處で求婚する場面があり、兩方の親からそれぞれ息子と娘に與へる資産が取り決められる。次いで結婚式から出て來たフリッツ叔父が料理の不出來なのに不平を並べてゐる處へ、コンツ・テッチが馳けて來て、狼が出て牛を襲うたと云ふ。二人は早速狼狩りに行く。次いで一年経つた後の場。息子は女房に散々な目に逢はされ悲し相にしてゐる。父親がもう一人嫁を貰ふつもりかと問へば、もう懲りくたすと答へる。そこへ叔父と舅とが狼を捕へたと言つて來る。そして狼を罰するにはどうしたらよいかと云ふ相談になつて、色々な案が出るが、息子は狼を苦しめる一番の方法は、其奴に女房を持たせるに限ると云ふ。コンツがそれは何うしてかと問へば、息子は自分の経験からだと言へる。コンツが其處に自分の娘が悪いなら、引き取らうかと言へば、息子は大喜び。叔父は己が折角貰つてやつたのにどうして又返すのかと不平顔。そこで息子は女房と一緒に一日も安らかな日がないと、悪妻の恐ろしいことを説明する。

此の芝居は結婚式の晩に捉へた狼が一年後に持ち出されてくる等と云ふ不合理を犯してゐる點で、時間關係を無視してゐる代表的なものであるが、又當時の農村に於ける結婚風習を寫してゐる點で特記すべきものである。

「熱い鐵」夫が不貞を犯してゐるのではないかと疑つてゐる細君が、

親戚の老婆に勧められて、熱した鐵片を夫に握らせる。鐵で手が焼ければ罪があり、焼けなければ罪がないと言ふわけである。夫は海綿を袖の中に忍ばせておいて、それで手を保護し、輪を描いてその中へ置かれた灼熱した鐵を、輪の外へ取り出して見せる。それから今度は夫が細君に同様な試鍊を課する。細君は恐ろしくなつて、次々と寺の坊様を始め七人の男や、その他にも數人の若衆と關係したことを告白し、それでも夫が諾かないので、鐵片を持つて大火傷をする。因に是と同種の物語が F. H. von der Hagen 刊行の Gesamtabenteuer II. S. 373—378 にあると言ふ。

「言葉や藥草や寶石でも良くならない悪妻」は題名の示す通り、口達者な酒呑みで怠け者の女房を持つた男が、隣人に助言されて、始め親切な言葉で女房を叱るが、女房は益々つけ上るばかり、次に藥草を買つて來てその液汁を吞ませて女房を矯正しようとするが失敗し、更らに寶石の指輪で歡心を買はうとして成功せず、最後に磔を澤山拾つて來て、それを女房に投げつけて、さすがの女房をも屈服させると云う筋。これはパウリのシムプ・ウント・エルンスト百三十四話から取材されたものである。

此等の悪妻劇は「ひどい煙」を除いて、各々劇の前半と後半とで主人公の立場を逆轉させてゐる處に滑稽味がある。従つて作者は此の對立した境地を出来る丈鮮明に描き出すために、色々な説明的場面を附加してゐるのであつて、それは一面作者の劇構成力を示すものであるとともに、他面物語の筋を不自然にしたり、誇張したりして、劇的效果を不確實にしてゐる。

扱つて以上の様に五十一年度に創作されたものには比較的簡單な構成を持つ悪妻劇が好んで脚色されてゐるのに反して、舊教僧に取材したものは五十三年度以後に屢々見られ、しかもその内容が複雑怪奇で、甚だ興味に富んでゐるのは注目し得る。之は取りも直さず、作者が

此の場合に於ても、謝肉祭劇の取材の範圍を次第に擴大して傳統的なものから離れて行つてゐることを示すとともに、彼の作劇法と演出法とが漸時進歩發展して行つてゐる證據ともなるであらう。今その代表的なものを擧げれば、五十一年度に一曲

Ein Fabnacht Spil mit vier Personen: Der farendt Schuler mit dem Teuffelbannen. (遊歴學生惡魔を呼び出す。1551, 11, 5. Nr. 37.)

五十三年度には、かのテカームロンに取材した「宗教裁判官と澤山のスーパ爺」の他に

Ein Fabnachtspiel mit drey Personen: Die Burgerin mit dem Thumbherrn. (町女房と寺僧。1553, 10, 24. Nr. 56.)

Ein wercklich Fabnachtspiel mit V. Personen: Die alt verschlagen Kuplerin mit dem Thumbherrn. (狡猾な鴉母婆と寺僧。1553, 10, 27. Nr. 57.)

五十四年度に二曲

Ein fasnacht spiel mit 4 personen: Der pfarrer mit sein eprecher pawern. (牧師と婆夫達。1554, 5, 30. Nr. 65.)

Ein fasnacht spiel mit 3 personen: Der plint messer mit dem pfarer vnd sein weib. (盲目の寺男、その妻及び牧師。1554, 10, 25. Nr. 69.)

等がある。此の中「町女房と寺僧」では僧侶そのものは登場してをらず、醜男くまの老人を夫に持つ若女房が、菩提寺の和尚を情人に持ち度いと云ふのを、母親が策略を用ひて、思ひ止まらせると云ふ筋で、寧ろ後段に述べる夫婦關係の危機を取扱つたものであるけれども、しかも表題に「町女房と寺僧」とあり、當時作者、と云ふより世論にとつて如何に舊教僧の墮落が注目的になつてゐたかを示すものがある。従つて之等の劇は何れも僧侶と俗界の女との不義密通を取扱つたもので、時代相の一端を窺ふに足るものがあるとともに、作者の描寫も亦却々に優れたものがある。ことに「遊歴學生惡魔を呼び出す」は此の

種茶番狂言の壓巻である。

百姓の女房が今晚は亭主が夕食も濟まし、辨當も持つて森へ仕事に行つたから、夜中前には歸らない。此處時和尚さんが来てくれればよいが、近所のものや宅うちの人がもう感づいてゐるらしいから、うつかり呼び出すことも出来ないと言つてゐる。處へその和尚が垣根を越して忍んで来る。彼は亭主が森へ行つたのを見たのである。女房は大喜びで先日殺した豚の腸詰めや酒を取りに行く。だが和尚は早くして呉れ亭主が歸つて来ては大變だからと言ひ、亭主が近頃自分を怪しんで兇器を持ち歩いてゐる様子を物語る。女房が酒の支度をしに行く時、和尚は亭主に見付かつたら、何とされても仕方がない。家にも一人女房があり乍ら此處馬鹿なことをしてゐるのだからと述懐する。やがて女房が御馳走を持つて来て宜しく酒宴となる。と木戸のあく音がする。怯えた和尚も、這入つて来たのが遊歴學生の物乞ひだと見ると居猛け高になつて威しつけ、叱つて追ひ出さうとする。學生が只管哀訴嘆願して施物を乞ふけれども、到頭女房と一緒に突き出して了ふ。突き出された學生は物陰に匿れてゐて、百姓が歸つて来た二人のことを密告してやると言ひ乍ら去る。こちらでは和尚が戸締りをして邪魔の這入らない様にしたがよいと言へば、今の男が戸を締めた音が聞えたでせうと女房。作者は却々細い處へ氣を配つてゐる。二人が酒盛りを始めると、百姓が戸を叩く。女房は外を覗いて見て、それが亭主であることを知つて狼狽し、之もうろ／＼する和尚をストーヴの中へ忍ばせ、大急ぎで御馳走を秣槽の中へ匿して、戸を開く。何で戸を締めて置くのかと百姓、お隣の豚が土間へ這入つて来て悪い事をするので。だがどうしてお前様は此處に早く歸つて来たの？と女房。二本とも斧が折れて仕事が出来なくなつたからだだが、腹も空いた。豚肉がある筈だが、出して呉れと百姓、女房は腸詰めはもう食べて骨丈しかないと云つてゐる處へ、先の學生が這入つて来る。彼は百姓に既でよいか



ら宿を貸してくれと頼み、驚く女房に、お前さんが黙つてゐれば、私も何も言はないからと悟らす。それから百姓が學生の職業を問ふ。學生は大學から大學へ勉強して歩くもので、魔術を學び、盗まれたものも見付けるし、眼病齒病も癒し、占も寶掘りも出来ると言ふ。そこでお前さん方は悪魔を呼び出すことが出来ると言ふことを聞いたが？と尋ねれば、學生は悪魔を呼んで何でも知り度いことを訊くことが出来るし、腸詰めでもパンでも酒でも取り出してお目にかけると答へる。どうかその悪魔を見度もいものと百姓。そんならお前様のおかみさんを見るに限ると學生。冗談は置いて悪魔を出して見せてくれと百姓。彼は女房が反對するのも諾かず、學生に迫る。そこで學生は二人を後向きで室を出て行かせ、用意が出来たら呼ぶから又後向きで這入つて来てくれと言つて去らせる。二人がその通りにして出て行くと、彼は和尙を引張り出してくる。今度は二人の立場が全く逆轉してゐる。和尙は金も出すし、冬中の宿もするから逃してくれと哀訴嘆願する。學生は十二ターレルの金を巻き上げてから、和尙を悪魔に仕立てる。彼は裸になつて煤を眞黒に塗り馬の皮を着た上で、匿した御馳走を持つて出て来なければならぬ。和尙が去ると、百姓夫婦が呼ばれる。二人は後向きで這入つて来ると、學生は彼等を坐らせ、物を言つてはならない。何か言ふことがあつたら、指で差し示す様にと吩咐ける。それから輪を描き劍を持つてその中へ這入る。かくて地獄の室から酒と腸詰めと焼き立てのパンを持つて来いと、呪文紛ひの文句を稱へる。と何僕で跛足の悪魔が走り込んで来て、跳ね上つて輪の中へ御馳走を並べる。そこで學生は悪魔に、家の裏口からでも棟からでも既の穴からでも好きな處から出て行けと、巧に和尙を解放してやる。あとで百姓は汗を拭うて、「あゝ怖かつた。早く輪を消して悪魔の來ない様にして下さい。悪魔があんなに眞黒で毛深く不恰好なものとは思はなかつた。何僕で跛足でまるで村のお和尚さんのやうだつた」と言

ふ。學生が「さあ元氣を出して、元氣を出して！もう寝ることにしよう」と言へば、夢に悪魔が出て來相で怖いと百姓。學生は「此の札を首に掛けてゐれば大丈夫。お前様が家にゐないと悪魔が来るが、家にゐる間は來はしない。お前さんが悪魔を恐れてゐるより、悪魔の方でもつとお前さんを恐れてゐるから」と學生。女房がはらはらして「悪魔はとつくに地獄へ行つて了つたから、早く行つて寝なさい。」と亭主を追ひ立てる。百姓はお札を首に掛け、御禮の金を出して、もう跛足の悪魔の出ない様にしてくれと言つて退場。あとで學生は女房からも金を要求する。女房は例の通り臍繰りが家の裏に埋めてあるから明日迄待つてくれと言つて去る。一人になつた學生は、そこにあつた御馳走で以て納屋でゆつくり一杯やらうと、三人から金を巻き上げたことを喜んでゐる――

此の作は恐くハンス・ローゼンブリートの説話詩 *Ein hübscher Spruch von einem paurn und von s weib, vn von einem furenden schiller vnd von einem pfäfen für kurzweilig zu lesen.* (Vgl. Adelbert von Keller, *Fastnachtspiele aus dem 15. Jahrhundert.* W.S. 1172—6)によつてゐるものらしいが、當時人氣のあつたものと見えて三種類の印刷本が今日知られてゐる。それ丈に筋の構成、人物の出入が甚だ自然であり、心理描描も繊細で、會話も潑刺としてをり、更らに劇的葛藤を絶えず一脈のユーモアを以て運んで行き乍ら、それぞれの所作に十分のモチヅを與へてをつて、此の種輕喜劇の上乗なるものと言ふことが出来る。

「狡猾な鴉母婆と寺僧」は、容色の衰へた遊女が女衞になるより生きる道がないと言ふので、女を欲しがつてゐる坊様と浮氣な若女房との中を取持つて、密會させようとするが、坊様が急に僧正に呼ばれて來れなくなるので、他の男を物色して、若女房の待つてゐる處へ連れて來た――のが人もあらうに女房自身の御亭主。それと見て女房は狼

狼するが、女中に教へられて、夫が来ると不意に掴みかかり、悪所通ひの現場を見付けたと怨み言を言ふので、夫はすつかり敗亡すると云ふ筋。あとで女房が女中に、どうしてあんなよい考が出たのかと訊けば、女中は前に奉公してゐた貴族の邸で、夫人が何時も色々な策略で旦那を騙してゐたので覺えたのだと言ふ。だから之も當時の市民僧侶貴族の墮落した社會相を描寫諷刺したものとして見る時、却々に面白いものである。のみならず之をその原本である古くいニュルンベルク謝肉祭劇 *Ein spiel von ein Thumherrn und einer Kuplerin.* (寺僧と鴉母婆の芝居、中獨演五三四頁参照) と比較して見る時、作劇法上に於ても臺詞に於ても格段の進歩を示してゐる。古劇では先觸れ (Pretorium) が寺僧を紹介すると直ぐ鴉母婆が寺僧に女を取り持たうとしてゐるのに對し、ザックス劇では最初に鴉母婆が身の上話をし、戀の取持ちをして生計を立てるやうになつた譯を明かにして退場。次いで寺僧が出て、現在の權妻が横暴で手におへないから新しい女を探し度いと、自己の立場を説明する。そこへ鴉母婆が再び出て来て寺僧に女を取持つこととなる。それから寺僧は女の事情を色々尋ね、鴉母婆に報酬を與へ、女を周旋して呉れるやうにと熱心に頼み込む。更らに婆さんに注意されて、愛情の印である指輪を女に贈ることとなり、それを婆さんに托す。之等の筋書きは大體古劇通りであり乍ら新劇の方がそれぞれの人物の行動に十分の動機を與へてをり、そこからその後の動作が自然に發展してくる點で、遙かに寫實的であり合理的であり劇的である。次いで若女房の方も女中を連れて市場へ買ひ物に來た途中で、鴉母婆が男を取持たうと言ひかけてくることになつてゐるが、之は全く作者の創意によるものである。そして女が指輪を貰つて、男が戀ひ焦れてゐると言はれると、贈主に興味を抱き、男のことを色々尋ねるが、まだ承諾を躊躇して「考へさせておくれ」と言ふのを、婆と女中が傍から色々勧め、遂に密會の打合せをするやうになつてゐるのは、古劇

には到底期待出来ない新劇の優れた點で、此の作者の心理描寫は高く評價されなければならぬ。それから次の場面では寺僧は鴉母婆に密會の出來なくなつたことを告げてゐるが、古劇の様に使者が來て寺僧を連れ去る場面はない。然しその代り寺僧も婆も事柄に齟齬を來たした事をひどく残念がり當惑してゐる臺詞があつて、ここにも注意深い寫實主義が見られる。此の傾向は若女房の夫が登場してくる場合にも亦明かに着取される。そこで彼は細君が市場へ行つて歸りが遅く、九時にもなるのに一かけの火もないと言つて怒つたり、心配したりして、彼女を探しにくるのである。彼がうろく〜と美しい女を見ると、その顔を覗き込んでゐる様子を見て、婆さんがよい掠鳥とばかり、寺僧の代りに彼を誘惑する。かうして女が男を待つてゐると、婆さんに連れられて男——實は女の主人——がやつてくる處は、古劇と同じ。然し新劇では細君が待ち草臥れて「もう歸らう。宅がひどく怒つてゐるだらうから」と言ふのを、女中が「旦那様にはお寺でお参りをしてゐたと言ひませうよ。旦那様も歸りが遅いことが度々あるぢやありませんか」と引き留め、「もう婆さんが來相なものだ」と言つて、外を覗いて見ることになつてゐる。之も作者の新趣向で、如何にも事が自然に運んでゐる。夫が來るのを見ると、細君が狼狽する。彼女は夫が婆様を雇うて自分の貞操を驗さうとしてゐるのであると悲鳴を擧げ、女中がそんな筈はないと言つて、一策を授ける處は古劇によつてゐるが、夫が細君に散々にやつつけられる場面は新劇の方が甚だ劇的に構成されてゐる。そのために古劇では女中が鴉母婆に襲ひかかり、結局四人の立ち廻りとなり、寺僧の下男が之を止めて、踊りになると言ふ筋が、ここでは鴉母婆は何時か逃げて了ひ、夫婦喧嘩は女中が仲裁して、漸く納まるのである。かうしてザックスの芝居では始めに出てくる鴉母婆と寺僧は終りには全く劇外の人物となり、劇の中心は何時か若夫婦に移つてゐて、前後の關係が甚だ稀薄であるが、それ文事件の進行は

自然に動いてゐるので、此の劇は作者の寫實主義リアリズムの代表的なものとすることが出来る。因に此の題材は Jacob Ayrer が更らに謝肉祭劇に脚色してゐる。

次の「牧師と姦夫達」は既に十年前、四十四年九月十三日と十五日とに工匠歌及び笑話詩として取扱はれてゐる題材である。牧師が百姓達に不貞を犯してゐるものを罰すると告げたので、百姓達が大恐慌をきたしてゐる處へ、牧師が来て、風儀を亂してゐるものには此の棒が當ると言つて、棒を振り上げると、皆々思はず頭を匿す。そこで牧師が贖罪のために皆十字架を負うて教會の周圍を廻れと命ずる。あとで百姓達は之が女房に知られては大變だとばかり、悲觀するが、やがてそれが牧師に對する恨みとなり不平となる。それから次の日曜日牧師が百姓達に罪を懺悔せよと言ふと、百姓達は誰一人それに従ふ者がなればかりか、反つて牧師自身の不行跡を曝露あはきたるので、彼の方で到頭逃げ出す。百姓達はそれを止めて、悪いことをしてゐるのはお互だから、喧さわしいことは言はずに一杯やらうと言ふ。

「盲目の寺男、その妻及び牧師」の題材も既に二回途工匠歌 (1549, 8, 31. und 1551, 6, 12.) に取扱はれてゐるもので、A. L. Stiefel の Zur Schwankdichtung des Hans Sachs によれば、その原作は印度の物語集 Panchatantra 第三卷十六章であると言ふ。今 Theodor Benfey の獨逸譯によつてその印度の物語を紹介すれば――

或る村に Jadschajudtra と云ふ婆羅門教僧侶 (Brahmane) があつた。彼の妻には愛人があつて、妻は始終砂糖やバターで御馳走を作り、夫に匿して愛人に與へてゐた。すると或る時それに氣付いた夫は、その菓子をごうするのかと問うた。細君は氣轉のきく女であつたから、これは女神様の祠へ御供へ物にするのだと言つた。そして夫の見てゐる前で御馳走を持つて、Devī 神の祠へ出かけて行つた。彼女が河を身を潔めてゐる中に、夫は別の道を通つて祠へ行き、Devī 神の祭壇の背後に匿れてゐた。そこへ細君が来て色々儀式宜敷くあつて、女神の前へ額づき、どうしたら夫が盲目になるでせうかと尋ねた。すると女神の背後にゐた夫が、つくり聲で、夫に絶えず菓子や御馳走を與へれば、夫はやがて盲目になると答へた。すつかり瞞された姦婦は、夫にその通り御馳走を食べさせると、或る日夫は目が全く見えなくなつたと言つた。細君は癒々女神の功德が現れたのだと思つた。そしてそれ以後毎日彼女の愛人は公然と彼女を訪ねて来た。だが夫は遂に或日姦夫の髪を擱んで棒叩きにし、足蹴にして殺し、女房の鼻を殺いで、彼女を追ひ出した――

勿論此の物語は歐州に傳へられて以來、全く印度の地方色を失つて來たとともに、ザックスは更らにそれを謝肉祭劇風に翻譯してゐるから、一見した處兩者の間には何の關係もない様に見えるけれども、仔細に見る時は、後者が前者の變曲であることを疑ふことが出来る。元來 Bidpai の作と傳へられるパンチャタントラは既に早く千四百八十三年 Ulm の Lienh. Holle によつて Das Buch der Beispiele der alten Weisen (古賢人の範例譚) と題して翻譯出版されてをり、ヘンクス・ザックスは此の印度物語集から幾多の笑話詩 (Z. B. Die Löwin mit den Jungen, Nr. 15; Der karg Wolff, Nr. 244; Der Mann mit der Haus-schlangen, Nr. 245; Der Einsiedel mit dem Honigkrug, Nr. 268; Die Wolfs-brucken, Nr. 330; Die drei Dieb auf dem Dach, Nr. 331; Der Affe mit der Schildkröten, Nr. 347.) 及び工匠歌 (Die schererin mit der nasen. In dem speten ton Frauenlobs, 1538, 6, 13; Das toten ergucken. In dem schatzton Hans Vogels, 1546, 7, 6; Der fuchs mit dem hon. In der gruntwais Frauenlobs, 1546, 7, 7, Vgl. K. Goedeke, Dichtungen von Hans Sachs, I. T.) を作つてゐるのみならず、千五百六十年六月十三日には König Sedras mit Helebat (後述第十四章参照) を脚色してゐる程である。だから今日傳つてゐる「古賢人の範例譚」(herausg. von W. I. Holland, Stutt-

gart, 1860)の中には此の謝肉祭劇の原作に相當する物語が記載されてゐないとしても、ハンス・ザックスの時代にはそれが民間に既に傳へられてゐたことは確實であると考へられる。と言ふのも Heinrich Prühle の Kinder- und Volksmärchen (Leipzig, 1853, Nr. 51, S. 162.) の Frauenlist über alle List & Karl Simrock の Deutsche Märchen (Stuttgart, 1864, S. 273.) 中の Der Eierkuchen は、何れも悪妻が隣りの女房の入智慧で夫に御馳走を食へさせて夫を盲目にしようとするが、夫は盲目になつた振りをして、最後に細君を罰すると云ふ筋で、それが印度の物語の變曲であり、従つて此の印度の物語が早く獨逸に這入つて獨逸化されてゐたと考へられるからである。

然らばザックス劇の筋書きは如何なるものであらうか？

仕立屋で寺男をしてゐる Heinz Schneider は自分の女房と坊様が不義をしてゐるのを感じて、女房には坊様を家へ呼ぶことを禁じ、坊様には自分の家へ出入りすることを斷る。そこで坊様と女房は相談して聖シユトルプリオン (St. Stolpion) に祈願し、寺男を盲目にして、自由に戀を樂しむとする。それから女房が教會へ通つて聖シユトルプリオンに祈願を懸ける。それを怪しんだ寺男が柱の陰に隠れて、女房の祈りをすつかり盗み聽きする。そこで彼は聖者の聲色を使つて、祈願を聽き屈けてやるから、夫に菓子や豚肉や酒を御馳走せよと言ふ。女房は大喜びで、それ以後亭主を歡待する。寺男の亭主は御馳走を食べ乍ら次第に目が見えなくなつて行く振りをする。遂にすつかり目が見えなくなつたと言つて、嘆いて見せる。女房は早速此の事を知らせるために坊様の家へ馳けつける。次いで彼女は夫が盲目になつたから大丈夫だと言つて、弩弓を持つて来る。そして矢を番へて坊様を狙ふ。は之だと言つて、弩弓を持つて来る。そして矢を番へて坊様を狙ふ。姦夫姦婦は驚愕して逃げ惑ふ。遂に彼は坊様を射て倒し、二人を追ひ出す――

以上の様にパンチャタントラの物語と此の劇とは物語の核心に於て全く同一の趣向からなつてゐる。即ち姦婦が情人と自由に密會するために女神又は聖像に祈願する點、夫がその裏をかいで女神、又は聖像の背後に潜んでゐること、盲目にする方法が御馳走を食へさせると言つた奇想になつてゐること、最後に姦夫姦婦が罰せられること等それである。ただザックス劇ではそれが全く獨逸化され、相變らず舊教僧が登場し、聖者の名が Stolpion などと云ふ馬鹿氣た名になつてゐることは、舊教僧の墮落及びその偶像崇拜を皮肉つたもので、新教徒としての作者獨特の構想である。此の意味に於て此の劇は當時の僧侶階級に對する痛烈な諷刺を含んでゐる好喜劇である。

以上は農民、悪妻、僧侶に取材したのを見たのであるが、更らに此の種の輕喜劇として、夫婦喧嘩、従つて夫婦生活の危機を取扱つたものが數曲あり、何れも謝肉祭劇の傳統的題材を發展させて、作者の寫實主義を發揮してゐる。處て夫婦喧嘩はもとく悪妻劇から發展したもので、古くは受難劇の香料商人とその妻の場面に於て屢々演ぜられてゐる。同様にハンス・ザックスにあつても、五十一年五十二年には悪妻劇、五十三年五十四年には夫婦間の葛藤を取扱つたものが見られ、しかもその後には愈々彼は獨特の境地を開拓し、巧な心理描寫を以て人間生活の實相を喜劇化してゐることを知る時、彼の劇作が實に自然にして着實な發展過程を辿つてゐるのを理解し得るであらう。

先づ五十三年には先に一寸觸れた「町女房と寺僧」が書かれてゐるが、之は老年の夫を持つた若妻が、性の不滿に耐へかねて、寺僧を情人に持たうとするのを、母親が戒めると云ふ筋である。母親が不義は罪惡であること、必ず現れて夫の怒を買ふこと、自分達兩親は三十年の間汚れの無い生活をして來たこと等を諄々と説いて聽かせるけれども、娘は現在の結婚生活に何の楽しみもないこと、坊様を愛してゐること、坊様なら秘密が保たれることなどを擧げて、言ふことを諾かな

い。そこで母親は夫の心を試して見て、彼が眞に寛大な人で妻の過失を赦してくれる様な人なら、好きなやうにしてもよいと言ふ。かうして母親の助言で若妻は第一に夫が大切にしてゐる無花果の木を無残にも切つて了ふ。夫はそれを見てひどく残念がるが、妻が夢で此の木に首を吊つてゐる夫を見たので、切り拂つたのだと言う言譯を信じて、彼女を赦す。第二に同様に夫の愛犬を殺し、それが絹の机掛けを汚したからだと言ふ。夫はひどく怒つて細君を叱るけれども、細君が泣いて私より夫が大切かと怨み言を言ふので、又もや彼女を説諭する丈で赦す。此の邊は若妻に對する老夫の心理的動きを巧妙に寫してゐる。そこで娘は愈々自分の思ひを遂げようとするが、母親は更らに第三の試験を勧める。即ち今回は旦那がお客をすると言ふことだから、食事半ばに卓布に鏈を引掛けて食卓の上のものをすつかりひつくり返して見るやうと言ふのである。次いで細君は「食卓のものをすつかりひつくり返したけれども、夫はこれ／＼氣でも違つたのかと言つたばかりなので、もう大丈夫、何をして夫は赦してくれる。」と言つてゐる處へ、夫が來て「お前には不潔な血が多過ぎるから、血を採らなければならぬ」と言つて、醫師の處へ無理に連れて行く。母親が心配して後を追ふ。かうして母親に連れられて再び歸つて來た娘は、兩腕から血を採られてすつかり參つて了ひ、改悛して母親の訓戒に従ふ――

此の作の題材は *Gesta Romanorum* (當時此の書の譯本は二種類 *Das Buch gesta Romanorum, von den geschichten oder geschehen dingen der Römer. 1489. Augsburg, H. Schöbser 及び Die alten Römer. Sittliche Historien und Zuchtgleichnissen der alten Römer. Camerlander. 1538. あり、ザックスの藏所目錄には *Gesta Romanorum, der Römer gemein Geschichtsbuch* とある。) にあり、ザックス劇は若い妻を持つた老年の夫を巧に描いてゐるけれども、人物の出入、場面の構成が散漫で、餘りに説明的に墮して了つてゐるのが、大きな缺陷をなしてゐる。だが注目すべ*

きは五十四年度に至つて、此の種夫婦生活の危機を描いたものが五曲もある事である。

1. Ein fasnacht spil mit 4 personen zu spiln vnd haist: Der dot mon. (死んだ夫。1554, 1, 11. Nr. 60.)
2. Ein fasnacht spil mit 4 personen: Das wainent huentlein. (女く小大。1554, 1, 25. Nr. 61.)
3. Ein fasnacht spiel mit 3 personen: Die winderlichen man geschlacht zw machen. (怒らぬ夫を穩くへつ法。1554, 4, 24. Nr. 63.)
4. Ein fasnacht spiel mit 4 personen: Der los man mit dem nuncketen jungen weib. (無頼の夫と不平を言ふ若女房。1554, 5, 24. Nr. 64.)
5. Ein fasnacht spiel, mit 6 personen zw spielen vnd haist: Der kremer korb (行商人の仕入籠。1554, 7, 19. Nr. 66.)

「死んだ夫」。これも既に工匠歌 (1537, 10, 5. 及び 1545, 5, 26. 二回) につくられてゐるもので、その題材はすつかり作者の自家薬籠中のものになつてゐる。

自墮落な細君からどれ丈自分を愛して呉れるかと問はれて、主人は彼女の日頃の悪妻振りを擧げて、あれぢや愛し様がないと云ふ。然し細君は色々辯解し自分の方が深い愛情を持つてゐる證據として、若し夫が死ぬやうなことがあれば、自分ももう生きてゐたいとは思はず、勿論再婚もせず、自分の一番よい赤い着物を着せて埋葬すると言ふ。そこで細君を洗濯に出してやつて、主人はあとで獨り言。「死んで了つてから親切にして貰つても仕方がない。生きてゐる中にそれ丈のことをしてくれたら、少しはよい日を過せるのに。だかまあ彼女の言ふ事が本當かどうか驗して見よう」と言うわけ、室の中へ手足を延して横になる。(Der man legt sich nach aller leng in die stueben.) 洗濯から歸つて來た細君が、呼べど揺れど動かない。てつきり死んだ

と思つた細君は先づ腹ごしらへが大切だとばかり臺所へ馳け込む。それからわんわん泣いてゐると、隣りの女房が見舞に來て、色々慰める。そして、葬式の世話をしようとするれば、死體を包むものは疫病で死んだ豚の皮で澤山、着物や麻布などは勿體ないと云ふ。そこへ隣りの主人もやつてくる。すると彼女は又もや新たに泣き悲しんで、家畜が皆死んでも夫が生きてゐてくれたらと嘆く。だがその家畜と言ふのも聞いて見れば、犬や猫や鼠や蚤虱のことである。それから棺も入らない。蠟燭も要らない、葬式なんか出す必要はない、供物も入らないと一一斷つてはえーん〜と泣いてゐる。到頭夫が堪りかねて飛び起き、細君を散々にやつつける。だが細君は自分もあなたのように芝居をしたのだ。貴郎が本當に死んだのなら、此慶事はしないと云ふ。隣人が女の悪企みには叶はない。さあ女どもには構はずに、酒でも呑みに行かうと結ぶ。

之はチェホフの「熊」を思はせるやうな芝居で、細君役によい俳優が得られたら、面白い演技になるであらう。ことに夫婦口論のあとで細君が「洗濯をしなければなりませんから、あとを頼みますよ」と如何にも愛情たつぷりの言葉を残して出て行くと、夫が「あんな優しい事を言ふが、日頃でない事だ。一つ驗しに死んだ振りをして見よう」とその用意をする邊り、前場と後場との間に空隙を作らないための巧な趣向であり、そこへ洗濯を終つて細君が歸つて來て、夫の死んだのを確かめると、洗濯で濡れ、腹も空つてゐる。泣くものにも腹を造らへてからだと歌を歌ひ乍ら臺所へ馳け込む。と夫がむつくり起き上つて、女房の今の様に呆れ「わしが死んでも匙の落ちた程にも思つてくれない云云」と言つて、再び死んだ振りをする處、更らに隣人の女房が戸を叩いて這入つて來て、「どうして此處に突然亡くなつたの?」と訊けば、「二三日前に指に一寸怪我をしたので、出来る丈手當はしたのに」と細君が金をかけた話をするにも拘はらず、葬式の支度になると、極

力物惜しみをする處、最後に隣りの主人が來ると又もや細君は新たに泣き悲しんで見せ乍ら、費用のかかることは一切斷つて了ふ處は多年舞臺操作に修練を積んだ此の作者ならではと思はせるものがある。

「泣く犬」老貴族 Philip はエルサレムに巡拜して來ると言つて愛妻 Pavina に留守中の注意を與へて別れて行く。あとでパウリーナは堅く貞節と信心を誓ひ乍ら歩き廻つてゐると、 Felix と云ふ貴公子が彼女を見送つて、戀慕の思ひを寄せる。彼が去ると、パウリーナがフェリックスの戀文を持つて登場。既に男が凡ゆる手段を盡して求愛したけれども、彼女は道心堅固で動く様子もない。彼女が去ると、思ひ襲れた姿でフェリックスが代つて出てくる。彼は希望のない戀を嘆く。と鴛母婆が近づいて、若者の訴をきき、戀の取持ちをしようと言ふ。若者は喜んで澤山の報酬を與へて去る。あとで婆さんは女を手に入れるための策略を巡らし乍ら、女の處へ出掛けて行く。パウリーナが登場してくる。彼女はフェリックスが家の廻りをうろ〜してゐるのを憐れむが、夫に對する愛を裏切ることには出來ないと言ふ。そこへ婆さんがく〜泣いてゐる犬を連れて來る。此の犬には腹を空かさせておいて、芥子を混ぜたスープを與へておいたのである。彼女は憐れな産婦のために施物を貰ひに來たと言ひ、聖地巡禮や免罪符その他色々の信心深い話をする。それから巧に話を泣いてゐる小犬の上に持つて行く。かうして若夫人をして小犬に注意を向けさせ、小犬の泣いてゐる理由を物語るに至る迄の婆さんの話述は巧妙を極めてゐる。犬はも〜婆様の娘であつたが、餘りに堅氣で或る若者を焦れ死にさせたので、愛の神ヴェナスの罰を受けて、此慶姿にされて了つたのである。それを聴くと若夫人はすつかり心を動かされ、自分とフェリックスとの間柄を打ち明けて、婆様に相談する。かうして婆さんは完全にパウリーナに取入つて了ふ。次いでフェリックスが登場。戀人が優しい目で見てくれたと喜んでゐる。と婆さんが出て來て、事が成功し

たことを報告し、今晚夫人が戸を開けて待つてゐると傳へる。若者は大喜びで去る。最後に鴉母婆がありと凡ゆる詐欺陰謀策略で男女の仲を取持つのが自分の商賣だが、之が公けに知れば、火責め水責めにされるのだと告白する。

此れも *Gesta Romanorum* から取材されたもので、小犬を使用してゐる處に異色がある。勿論直接夫婦生活の危機を取扱つたものではないが、若い人妻が夫の留守中、それが道徳堅固であればある程、反つてその點を利用して、誘惑に陥つて行くと云ふ心理的弱點を描いたものとすれば、作者の關心が矢張り結婚生活に於ける一つの危機を示すにあつたことは明かである。會話の運びは達者であるけれども、只場面が幾つにも斷ち切られてゐるのは、此の作者特有の説明が過ぎるため、劇的效果を害してゐる。

「怒り易い夫を穩しくする法」細君が買ひ物に行つて歸りが遅い。それを旦那が怒つてゐる處へ、若い女房が歸つて来て、所謂賣り言葉に買ひ言葉で、大喧嘩になる。それから妖婆 (*Die alte vnheld*) が出て来て、色々な祕法で人を誤魔化してゐることを物語る。そこへ細君が来て、怒り易い夫を治してくれと頼む。そこで夫を治す祕法だと言つて、場所と時間と方法と呪文を教へて返す。翌早朝細君は教へられた場所へ行つて、東と北へ一ターレル宛置いて呪文を稱へる。すると老婆が藪の中へ潜んでゐて、靈 (*Airane*) の聲を眞似、第一、夫に従ふ事、第二、使に出ても早く歸る事、第三、夫が怒つても口答をしない事と言ふ。細君は家へ歸つて夫に此の話を物語れば、夫も細君を戒め、細君も自分の悪かつたことを後悔する。

此れには格別新規な劇的葛藤はないけれども、原本であるパウリのシムプ・ウント・エルンストに比較すると、夫婦喧嘩の原因が、怒り易い夫と我儘な細君の両方にあることになつてゐるのを、此處では夫には全く缺點がない様にしてゐること、劇の發端を喧嘩の場を始め、

劇の結末を夫婦の完全な和解で終らせてゐる等の點で、細君に與へられる教訓の一方的であるのを合理化してをり、その効果を具象的に示してゐる。特に細君が妖婆に夫を治すことを依頼する場面で、妖婆がそれでは靈に伺つて見るからと言つて、細君を一端退場させ、そして之は細君の方が悪いのだから、自分が靈になつて嚇してやらうと獨語し、再び細君を呼び入れて、今靈から方法を授かつたと言ふ邊りは、原本にはないけれども、劇的效果を非常に高める作者の新趣向である。

「無頼の夫と不平を言ふ若女房」之もパウリのシムプ・ウント・エルンストから取られた夫婦喧嘩を仕組んだものである。女房が獨りて仕事を少しもしない呑んだくれの夫を恨んでゐる處へ、夫が来て口論となる。一文も働かずに呑み歩いてばかりゐるが、女房子供をどうして呉れると細君が散々喰つてかかるけれども、夫は仕事なんかする氣は無いと言つて又出て行つて了ふ。細君が後から惡態を吐くので、又戻つて来て嗚鳴り返して行く。そこで細君は母親の處へ行つて、夫が家財道具を持ち出しては呑み廻つてゐる暴狀を訴へる。母親が懇々と娘を戒める。お前は好きで両親の言葉も諾かず一緒になつたのではないか。今更らそんな事を言つて來られた義理ではあるまい。妾を見なさい。お父様も若い頃は亂暴者だつたけれども、わたしは優しく揖を取つて今は立派に暮らしてゐる。お前が毒づいたり、惡口雜言したりするから、夫は益々家に落ち着かなくなる。酔拂つて歸つて來たら、親切に世話して、翌朝酔が醒めた頃、靜かに話しをすすめるものだから、娘は親切に見ても馬鹿にされるばかりだと言ふ。母親は一度や二度で夫が直るものではない。お前が第一我儘で怠け者で意固地だから不可<sup>いけ</sup>ないと教へる。然し娘は母親の言ふことに承服出來ずに歸つて行く。他方夫は呑み仲間と細君の惡口を言つて大いに氣焰を擧げ、家一杯やらうと、相手を連れて歸つて來る。家では細君がもう二時にもなるのにまだ歸らないと言つて、又もや夫の働きの無いのを散々



罵つてゐる。そこへ夫が呑み仲間を連れて歸つて来る。しかし二人が何と話しかけても、細君は無言で返事をしない。そこで呑み仲間(Der Ios zechtsel)が名案を出す。彼のお袋はよく口が廻らなくなる。ことがあるが、その時は親爺が櫻酒をお袋の胸から背中手足迄塗つてやると癒る。だから裏の庭の櫻の枝を折つて来て、それで擦つてやれ。木にも酒と同じ液汁があるから效くだらうと言ふのである。二人が木の枝を取つてくる間、細君は何をして一言も口を利くものかと獨語してゐる。やがて二人が棍棒を持つて歸つてくる。そして呪文を稱へて棍棒で細君を擦り出す。堪り兼ねて細君が叫び出す。そこで又喧嘩になり、夫は擦つても效かなければ、擲つてやると、襲ひかかるので、細君は逃げ出す。呑み仲間が「わしも女房が口を利かない時は、今の様にしてやらう」と言つてゐる處へ、母親が娘を連れてくるので、こそく逃げ出す。後で母親は若夫婦を懇々と説諭する――

誠に近代文學の作品にも比肩し得る寫實描寫である。勿論内容そのものは單純卑俗で、職人階級の家庭爭議の一風景を寫してゐるに過ぎないけれども、それ丈に人物は生動しており、會話は自然に發展して行つてゐる。恐く作者は實生活に於て此の様な場面をその周圍に觀察し體驗したことも多かつたのであらう。

「行商人の仕入籠」下男が酒壺を持つて登場、彼は酒を買つて食事に間に合ふ様に歸れと吩咐けられてゐるのであるが、そこでふと夫婦者の行商人が仕入籠を中にして争つてゐるのを見る。亭主は女房に籠を擔がせようとするが、女房は亭主が賭博で金を擽つて了つたのを怒つて言ふことを肯かない。すると亭主も女房が酒呑みなのを言ひ立てて譲らない。二人は散々口論した揚句、擲り合を始めるので、下男がそれを止める。すると女房は籠を放り出したまま行つて了ふので、亭主は仕方なくそれを拾つて去る。

次いで主人夫婦が下男の歸りの遅いのを怪しんで噂してゐる。處へ

彼が歸つてくる。そこで旦那が咎めると、下男は今見て来た喧嘩の話をしする。と細君は早速行商人の女房の味方をする。旦那は行商人を辯護する。喧嘩は今や主人夫婦の上に移る。細君は賭博で資手を擦るやうな夫の言ふ事を肯く必要はないと言ふ。旦那は要らない着物を買ひ込んで無駄費ひをする細君は籠を擔ぐのが當然だと言ふ。遂に擲り合になつて細君は逃げ出す。二人が去ると、下男が行商人の籠のお陰で喧嘩になつたが困つたことをした。もう誰にも話すまいと獨語。そこへ料理女が料理匙を持つて馳けて来て、仲のよい御夫婦がどうして喧嘩なんかしたのかと訊く。そこで又下男が事の次第を話す。と今度は下女が行商人の女房の味方をする。下男がそれを聞いて、おれが行商人ならお前のやうな女は擲つてやるとやる。かうして又お互に悪口雑言、下男がお前は父無し子を生んだらうとやれば、この嘔吐きめ、よくも私を馬鹿にした。籠はお前に擔がせてやると、二人は料理匙と拳骨で擲り合を始める。とど女が逃げて行く。あとで下男は他人の喧嘩に口出しすると言ふが、本當のことだと結辭。

ここでは行商人夫婦、主人夫婦、雇人の男女と三組の喧嘩が巧に書き分けられてゐる。實にハンス・ザックスの自然主義的寫實的作風はここに至つて最高點に達してゐると言ふことが出来る。

最後に此の種世態人情に取材して戀愛遊戯を諷刺したものに Ein FaBschspiel mit vier Personen: Der Parteckensack. (頭陀袋。1552, 12, 2. Nr. 40.)なるものがある。之はその登場人物から言つても筋書から言つても、前述のやうなハンス・ザックスの人情喜劇を代表するものであるが、同時に又女性の性生活そのものを直接題材にしてゐる點に於て甚だ特異なものである。

未だうら若い未亡人 Rosinunda は夫の生前には何もかも満ち足りて幸福であつたのに、今は獨り寝の淋しさに堪へ兼ねてゐる。女中の Anna が「貴女程結構な御身分は御座りません。出るも入るも御自由

だし、食べ放題飲み放題、子供が多くて貧乏なものは朝から晩迄働いて、それでも稼(と)げなものは食(と)べられませぬのに」と慰(なぐさ)める。だがロシムンダはお前などに判(と)ることはないと答(こた)へる。女中も漸(と)くそれと察(と)して、且(と)那樣をお持ちになつたらと勸(すす)めるので、夫人も實(じつ)はその事(こと)だが、私の様なものを相手にしてくれる人があらうかと云(い)ふ。そこで女中の獎(た)めて、彼女に心を寄(よ)せてゐると云(い)ふ多くの若(わか)者(もの)の中から、夫人も憎(にく)みからず思(おも)つてゐる手代(てしろ) Engelhart が選(えら)ばれる。他(ほか)方(か)エンゲルハルトはロシムンダに戀慕(こいぼ)してゐるけれども、三年(さんねん)の年(とし)期(か)が明(あ)けなければ結婚(けっこん)が出来(こ)ない。だからさし詰(と)め金の力(ちから)で女(おんな)を自由(じゆう)にしたいものだと言(い)つてゐる處(ところ)へ、女中(にようぢゆう)のアンナが來(き)て、夫人(ふじん)の氣持(きぢ)を傳(つた)へる。そして聖(せい)ニコラス教會(きやうかい)の禮拜堂(らいはいだう)で二人(ふたり)が密會(ひそかに)する手筈(てがら)を決(き)めて歸(かへ)る。次(つぎ)いで女中(にようぢゆう)の獨(ひとり)り言(ご)言(ご)い。彼女(かのんな)は夫人(ふじん)が教會(きやうかい)に行(い)つたが、二人(ふたり)の間(ま)がうまく行(い)けば一儲(い)儲(い)出來(こ)るから出來(こ)る丈(だけ)のことをして、此(こ)の戀(こい)を取(と)持(も)つのだと言(い)ふ。そこへ夫人(ふじん)が歸(かへ)つてくる。彼女(かのんな)は男(おとこ)から贈(くわ)物を貰(もら)つたりお金(かね)を約(よ)束(そく)されたりして、今晚(こんばん)逢(あ)つてくれと頼(たの)まれたが、結婚(けっこん)しようと言(い)はないのが氣懸(きけん)りて、未(いま)だ返(かへ)事(こと)をしないて來(き)たと言(い)ふ。それを女中(にようぢゆう)は色(いろ)々と甘言(かんげん)で説(と)き伏(ふ)せて、遂(つい)に男(おとこ)が今(いま)晩(ばん)の三時(さんじ)、丁度(ちょうど)月(つき)も無(な)くなることだから、空(から)の酒樽(さかづき)の置(お)いてある裏(うら)の戸口(かど)から忍(しの)んで來(き)ることを、夫人(ふじん)に承(うけ)諾(だ)させる。女中(にようぢゆう)が早速(さつそく)その旨(こころ)を男(おとこ)に知(し)らせに行(い)くと、夫人(ふじん)は獨(ひとり)り不安(ふあん)な期待(きたい)に胸(むね)を踊(おど)らせてゐる。

その夜(よ)エンゲルハルトは裏(うら)の戸口(かど)迄(まで)忍(しの)んで來(き)たが、今晚(こんばん)の首尾(くびび)がすつかり駄目(だめ)になつたと獨(ひとり)り悲觀(ひくわん)してゐる。と言(い)ふのは店主(たぬし)が突然(とつぜん)アウグスブルクから來(き)て、今晚(こんばん)中に決算(けつざん)し、明日(あした)は伊太利(い大利)に行くことになつたからで、彼はせめて女中(にようぢゆう)でも出(で)て來(き)たら、自分(おれ)が心變(こころ)りしたのではないことを一言(ひとこと)言(い)ひ置(お)いて行き度(い)いものだと嘆(なげ)く。然(しか)しやがてかうしてゐる中(なか)にも時(とき)が立(た)つと、彼は心(こころ)を殘(のこ)して去(さ)つて行く。そのあとへ女中(にようぢゆう)が出(で)て來(き)る。彼女(かのんな)は男(おとこ)を案内(あんない)するやうに吩咐(ふんぷ)かつたので、土間(どま)に潜(ひそ)んで待(まち)つてゐると言(い)つて去(さ)る。暫(しばらく)くすると遊歷(ゆうりき)學生(がくせい) (Der Pachant) の Conrad が頭陀袋(ずつたぶくろ)と筆記(びき)道具(どうぐ)を持(も)つて出(で)てくる。彼は學校(がく)へ行く傍(そば)ら乞食(こじき)をしてゐるので、今日(けふ)は貰(もら)ひも十分(じふぶん)あり、頭陀袋(ずつたぶくろ)にはパンも這入(こ)つてゐる。夜(よ)は此(こ)の家(いへ)の空樽(からづき)の中(なか)に寝(ね)れば、宿賃(しゆくぢ)入(い)らず、鼠(ねずみ)もゐないと獨(ひとり)り言(ご)言(ご)い。彼は當時(たうじ)の苦學(くがく)生(せい)であるが、こころは自由(じゆう)で氣樂(きらく)な生活(せいかつ)振(ふ)りが窺(うかが)はれて甚(いた)だ興(き)味(み)がある。人聲(にんせい)を聞(き)きつけた女中(にようぢゆう)は若(わか)者(もの)が來(き)たものと思(おも)つて、とやかく言(い)はず學生(がくせい)を土間(どま)へ引(ひ)入(い)れる。そして彼(かれ)を其處(こゝ)に待(まち)たせて、女主人(にようぢゆうじん)にその旨(こころ)を告(つ)げるために奥(おく)へ這入(こ)る。と學生(がくせい)は温(ぬ)いスープでも惠(めぐ)まれるのかと思(おも)つたが、女中(にようぢゆう)の言葉(ことば)から自分(おれ)が人違(ひとちが)ひされてゐるのを察(と)する。彼は思(おも)はぬ幸運(さいうん)に、之(これ)を逃(に)しては馬鹿(ばか)だとばかり、闇(やみ)に乗(の)り乗(の)りして相手(あいて)のするに任(まか)せようと決(き)心(こころ)する。だから女中(にようぢゆう)が再び迎(むか)へ來(き)ると、言(い)はれるままに、手(て)を曳(ひ)かれて三階(さんかい)上の女(おんな)の室(むろ)へ案内(あんない)されて行く。此(こ)の場(ば)は女中(にようぢゆう)がひそひそと囁(ささ)く言葉(ことば)文(ぶん)であるが、それが如何(いか)にもエロイシであるとともに、學生(がくせい)のグロテスクな様子(ようす)とコントラストをなして特(とく)異(い)な喜劇(きげき)的(てき)狀(じやう)景(けい)を寫(か)して出(で)してゐる。纏(まと)て三度(さんど)女中(にようぢゆう)が歸(かへ)つてくる。彼女(かのんな)は首尾(くびび)よく二人(ふたり)を取(と)持(も)つたからには御禮(ごれい)はたつぷり出(で)るだらう。どれこれから一眠(ひとね)りして明日(あした)朝(あ)早く又(また)暗(く)い中に若(わか)旦那(だんな)を送(おく)り出(で)さなければならぬと言(い)つて去(さ)る。處(ところ)で彼女(かのんな)が事(こと)の成(な)功(こう)したのを喜(よろこ)び、やがてはあの人(ひと)も結(むす)婚(こん)しなければならぬことになるだらうと得意(とくい)であればある程(ほど)、彼女(かのんな)の失態(しつたい)が曝(は)露(ろ)する時の逆(さか)效果(くわく)も大(おほ)きいから、此(こ)の獨(ひとり)語(ご)は甚(いた)だ重要(じゆうじやう)な意義(いぎ)を持(も)つてゐるのである。かくて翌(あした)早(はや)朝(あ)女中(にようぢゆう)が又(また)乞食(こじき)學生(がくせい)の手(て)を曳(ひ)いて階(かい)段(だ)を下(くだ)りてくる「足を踏(ふ)み外(はず)さな

い様に、物音(ものね)をたてると下男(したおとこ)が目(め)を醒(さ)ますから」と言(い)ふ間(ま)もなく、學生(がくせい)の頭陀袋(ずつたぶくろ)が轉(ころ)り落(お)ちる。(Den Pachanten entfällt der Parreken-sack) 彼は帶劍(たいていけん)が抜(ぬ)けて落(お)ちたのだ。踏(ふ)むと危(あぶ)ないからそのままにしてをいてくれと胡摩(こま)化(か)して行(い)つて了(しま)ふ。あとで女中(にようぢゆう)はその刀(や)を拾(ひろ)つて置(お)いてやれば又(また)酒手(さけで)が貰(もら)へると喜(よろこ)ぶ。夜(よ)が明(あ)けてロシムンダもアンナ

も夕べの男が人違ひであつたことを發見する。夫人は床の傍に筆記道具や本や破れたパンツを見付け、女中は刀だと思つたのが頭陀袋であつたからである。そこで彼が乞食學生だと判つたが、女中は彼の聲が變つてゐたのも酒を飲んでゐたからであり、着物がぶよぶよしてゐたのも、狼の毛皮だと思つたのである。さう言へば寢床の中で木偶の坊の様に愛想がなく、狒狒爺の様にしつこく、時々臭い匂を出して身體をぼり／＼搔いてゐたのも思ひ當ると夫人。此の閨中祕話は觀客を喜ばせるに十分であつたらう。夫人も女中も大恐慌の體であるが、おまけに金の指輪迄與へて歸したとはと、夫人が残念がるのも、無理からぬ次第である。彼女は口留料として外套をやるから、遺留品をすべて Pegnitz 河（ニールンベルク市の河）に流して、堅く祕密を守るやうにと女中に吩咐ける——

即ち此の劇の前半は「狡猾な鵝母婆と寺僧」に甚だよく似た趣向で、鵝母婆と若女房と寺僧とは女中アンナと未亡人ロシムンダと手代エンゲルハルトにそれぞれ照應する。又寺僧もエンゲルハルトも急用で逢引きが出来なくなり、そのために思ひもかけない代用人物が飛び出し

てくることによつて、喜劇の落ちが構成されてゐる點も類似してゐる。しかも鵝母婆の芝居では單に一片の風俗喜劇に過ぎないものが、此の劇では性の不満に惱む女性心理から凡てが發展して來てゐる。従つて一見類似型的に見える人物もここではそれぞれ特有なモティーヴで動いてゐるのであつて、例へば前劇の中の女中と此の劇の女中アンナは同じ様な役割を演じてをり乍ら、アンナの方が遙かに個性を持つた喜劇的人物になつてゐる。同様に此の劇の後半に出てくる遊歴學生も既に「天國へ行つて來た遊歴學生」や「遊歴學生惡魔を呼び出す」で見たと同種類の人物で、その筋は孰れも此の種の學生が一寸の機轉で思ひもかけない幸運にありつくこと云ふ點で軌を一にしてゐる。然し此の劇になると遊歴學生そのものの性行が喜劇の主要契機を構成してゐる。

されば此の劇はハンス・ザックスの寫實主義に基く人情喜劇中でも最も特有のもので、近代的な喜劇にも比肩し得る諸要素を供へてゐると言ふことが出来る。と同時にここから後述するやうなハンス・ザックスの性格喜劇が發展して行く跡を辿ることが出来るであらう。

## 第十章 謝肉祭劇と人文主義 一五五一年—一五五四年

前章迄に述べた如く、ハンス・ザックスがニュルンベルク謝肉祭劇の傳統的な主題を開拓發展させて行つた足跡を辿つて見る時、その農民にしろ悪妻にしろ僧侶にしろ夫婦生活にしろ、孰れもその構想に於て簡單なものから複雑なものへと移行してゐるばかりではなく、作者の生活體驗に基く個々の人間性や心理状態を描くことから始めて、それが宛も一幅の風俗畫のやうにそれぞれの階級から抽出された特性の代表的人間像か又は現實社會の一斷面を象徴する典型的時代相に迄高められて行つてゐるのを見る。之は實にハンス・ザックスが職人階級の間に生れた民間詩人として、當時の市民生活や生活感情を鋭意探究した當然の歸結であつた。だが彼の詩人としての使命は之に盡きるのではない。彼は又當時の智識人として劇界の趨勢、時代の要請に即應し、人文精神による一般民衆の啓蒙に貢獻した偉大な國民的詩人でもあつたのである。されば彼の謝肉祭劇の中には穩健中庸な人生觀に基く實踐的倫理の啓蒙を主としたもの、又はその博讀強記の教養から得られた古典的人文精神を紹介したものが見られるのは怪しむに足らない。然し乍ら前者は比喩的教訓劇の一種であつて、何物かの思想即ち民衆の道德的指導原理を具象化したものである丈に、劇的葛藤による劇的效果を目指すよりも、教訓を主とした巧妙なる對話に過ぎないものが多く、謝肉祭劇としては必ずしも成功したものとは言はれない。又後者はザックスの古典物とも言ふべきもので、古典的な有名人の挿話的物語を脚色したものであるから、物語そのものの忠實な紹介と説明に終始して、そこに藝術的創作力の見るべきものが少ないのは遺憾である。とは言へ一體にルネッサンス期に於ける獨逸の文化は一般の大

勢から言つて未だ古典文化の醜案啓蒙の域を脱することが出来なかつた事を考へる時、ハンス・ザックスの以上の様な傾向にしても、彼が市井の一職人であり乍ら、しかも時代精神の主流を代表してゐる卓越した先覺者であつたことを證するものとしなければならぬ。

彼の比喩劇としては五十一年度に書かれたものが多く

1. Fabnacht spiel, mit 4 Personen zu agirn: Zwischen dem Gott Apoline vnd dem Römer Fabio (ハポロ神と羅馬人ファビウス。1551, 9, 2. Nr. 30.)
2. Ein Spiel, mit 5 Personen zu spielen, vnd heyst der halb Freundt. (仲好じ。1551, 8, 28. Nr. 31.)
3. Fabnacht spiel mit 5 Personen; der vnserlich Geizhunger genandt (餓へたお節者。1551, 9, 5. Nr. 32.)
4. Fabnacht spiel mit 4 Personen, die spüch Bulerey genandt. (戀愛吟味。1551, 10, 20. Nr. 35.)  
の四篇あり、五十二年に戀愛を教訓したものの一曲。
5. Fabnacht spiel, mit 17 Personen zu Agirn: Von der vnglückhafften, verschwatzen Bulschafft. (悪口をたいた惡戀物語。1552, 8, 9. Nr. 39.)  
飛んで五十四年に
6. Ein spil, mit 6 personen zw spielen: der kampf frau Armuet mit frau Glueck, (貧乏夫人と幸運夫人の論争。1554, 9, 5. Nr. 68.)  
が、之を古典物が、五十二年に一曲
1. Ein Spiel mit 3 Personen: Das gesprech Alexandri Magni mit dem Philosopho Diogeni. (ハンキサンダー大王とディオゲネス。1552,

12, 30. Nr. 44.)

五十二年の三曲

2. Faßnacht spiel mit 4 Personen: Der Tyrann Dionisius mit Damone seiner glückseligkeit halber. (暴君トマシムスとダモン。幸福體 1553, 1, 28. Nr. 47.)

3. Faßnacht spiel mit 7 Personen: Der verdorben Edelman mit dem weichen beht, das Keyser Augustus wolt kaufen. (零落した貴族の柔い癡呆をイウグストス皇帝が買ふ。1553, 9, 9. Nr. 50.)

4. Ein Spiel mit II Personen: Wie Gott, der Herr, Adam vnd Eua Ihre Kinder segnet. (主の神トマムアハンの子等を祝福す。1553, 9, 23. Nr. 52.)

五十四年度の一曲

5. Ein spiel mit 4 personen zw spielen: Sant Petter lezet sich mit sein freunden vnden auf erden. (聖ペテロ地上にて友人達と楽しむ。1554, 8, 28. Nr. 67.)

と言ふやうに創作されてゐるものと比較する時、ここにも亦作者は簡単な構想のものから次第に複雑な内容のものへと發展して行つてゐるのを見る。

扱て右の教訓劇の中「アポロとファビウス」ではどうしたら地上に於て最大の富貴が得られるかと云ふ問題に對して、アポロ神が敬神の徳(Die Frumkeit)を説いてゐるのであるが、希臘の神アポロと羅馬の名門の末孫ファビウスの問答の間に Julius Cesar & Marcus Crassus (114—53 v. C. 羅馬三頭政治の一人)を登場させ、Numa Pompilius (715—672 v. C. ローマ第二代の王) & Falerius Publicola の事績を紹介してゐる處に、文藝復興期に於ける智識人としての作者の新傾向が見られる。

同様に「仲好し」に於ても登場人物の名前が父親 Lucianus 息子

Lucius 追従者 (der Heuchler) Coridus 阿諛者 (der Schmeichler) Medius 等羅典名になつてゐるのも、當時の人文派作家の作風を思はせらるゝがある。此の劇は眞の友情とは如何なるものかを教へたものとして、Steinhöwel 譯のインツン物語の中に収録されてゐる Petrus Alfonsus の Die Disciplina Clericalis 中にある寓話の一角が原典である。

息子のルチウスがコリツス、メデイウスと云ふ取巻達に煽てられてよい氣になつてゐる。父親ルチアヌスがそれを心配し、息子をして彼等の友情を驗めさせる。息子は父親の勧めに従つて、豚を屠り、それを袋に入れて擔ぎ、人殺しをしたから匿まつてくれと云つて、友人達を訪れる。だがコリツスもメデイウスも掌を返す様に不人情極まる應待をして、彼を追ひ返す。そこで父親は自分の只一人の友人の處へ息子を行かせる。とその友人は親身になつて息子の身の上を必配し、彼を慰め勵まし、手傳つて彼を匿まつてくれる、かうして息子は始めて眞の友情を知る、作者はここで悪友と親友の別を知るために一方悪友達が息子に取入つて飲食を驕らせたり(コリツス)、金を借りたり(メデイウス)する場面、更らに彼等が人殺しをしたと言ふ息子を追ひ拂つた後で、お互勝手な理窟を捏ねて自分達のとつた態度を是認してゐる場面を描き、他方父親とその友人とを出して、友人の娘の嫁入りに就て相談する場面や最後にその父親が息子に懇々と教訓を與へる場面を挿入してゐるのであるが、これは劇的對立による効果を目指したものであらうけれども、それがために反つて物語の一貫性を缺き、全體を説明的なものにしてつてゐる。

「飽くなき吝嗇家」も前劇同様 Petrus Alphonsus (Alfonsus) の寓話から取られたものであるが、作者はここでも原本に比へて劇的對立による効果を擧げるために、多くの場面を構成してゐる。物語の方は或る商人が町の有力者に金を預けて置いたのを、旅から歸つて來て返却して貰はうとする處から始まる。然し芝居では Simplicius (商人)

が先づ紹介される。彼は貸金を取り立てて漸く金が出来たが、誰に預けて旅に出ようか、Iux Reichenburger は町の有力者だから彼に頼んだら安心だらうと言つて去る。次いでライヘンブルガーが細君に對して事業が悉く失敗し、金貸し業も思はしくないと口説く。この對話は却々寫實的で、先週やつた小遣はどうしたと主人が問へば、あんなものは野菜や肉の代でとづくに失くなつてゐると細君。夫がもつと家計を切り詰めて、雇人の給金も減らす様が出来ないか。家の修繕に金が必要からと言へば、細君はもつと貸金の利息を揚げたらよいのと言ふ。雇人は物を盗んだり胡魔化したりしてゐる。かうして彼の業慾振りが紹介される。そこへシムプリチウスが金袋を持つて訪ねて来て、金を預けて去るのである。だからその後で夫婦間にその金が問題になるのは當然である。細君が先づその金を横領することを勧める。彼女は、その金で息子の嫁取りが出来ると夫を誘惑する。さすがに夫は色々な場合を考へて躊躇してゐるが、もつと金には目が無いのだから、遂に細君に説き伏せられる。即ち預り證文を入れてないのだし、向ふは名もない人間だから、こちらが知らないと言へばそれ迄である。又名譽や信用等は今迄金貸しをして來てゐるのだから、今更ら問題にしても始まらないと言つた譯である。以上の様に作者は單純でお人好しのシムプリチウスと狡猾で貪慾なライヘンブルガーの對立を描いてから、話の本筋に這入る。夫婦の相談が纏ると、旅から歸つて來たシムプリチウスが現れる。勿論ここでも時間的経過は無視されてゐる。彼は預けた金の返還を求めて拒絶される。細君にあなたも見てゐたではないか！二ターレル御禮に上げた筈だと言ふけれども、細君も知らぬ存ぜぬの一點張り。シムプリチウスが悄然として出て行くと、ライヘンブルガーはしてやつたりと北叟笑んでゐる。

次の場でシムプリチウスは非道く悲觀して出てくる。そこへ彼の友人 Sapiens (智慧を意味する) が來て事情を聴き、シムプリチウスが

餘り輕卒であり、ライヘンブルガーが貪慾飽くなき男であることを教へる。シムプリチウスは激昂して彼を刺し殺してやると怒る。すると始めてサピエンスが一策を授けるので、彼は急に元氣になつて、大喜びで去る。

一方ライヘンブルガーは細君ともう大丈夫金はこつちのものだと話してゐる處へ、サピエンスの遣した老商人が這入つて來て、一萬二千グルデンの價のある寶石箱を預つて貰ひ度いと言ふ。吝嗇男が喜んで承諾してゐる處へ、シムプリチウスがやつて來る。彼は何氣ない風で再び先の金を請求する。すると新しい客に目の眩んだ金貸しは文句無く細君に命じて、金袋を返させる。シムプリチウスは預り賃を置いて去る。老商人も指輪をお禮におき、夫婦の者に送られて歸る。があとで夫婦が箱を開いて見ると、枯草と礫ばかり、指輪も亦ガラス玉に過ぎない。最後にシムプリチウスとサピエンスとが登場、前者が感謝すれば、後者は金や權力に瞞されて飽くとしもない吝嗇の犠牲になつてはならないと警める。

これも明らかに教訓を骨子としてゐるけれども、作者の關心事は寧ろ物語を如何に劇的に構成するかにかかつてゐる。それがために最初シムプリチウスが金を手に入れた時の喜びを寫し、やがてそれを詐取された時の悲嘆、相手の奸策を知つた時の憤怒、サピエンスの助言をえて元氣づく處を描いて、彼の心理の推移を巧妙に表現してゐるばかりではなく、ライヘンブルガー夫婦の得意と失意とを彼等の性格から發展させてゐるのである。此の意味に於て此の劇は單なる比喩的教訓劇の範疇を脱して、一種の物語劇になつてをり、作者の優れた作劇術の眞價をよく發揮してゐるものとすることが出来る。

「戀愛吟味」此れは若い娘の婿選びに關する教訓である。物語は古晰 (Vgl. Erzählungen aus altdeutschen Handschriften, ed. A. Keller, S. 150-160.) にあるもので、叔母が姪の求婚者を吟味するために、遠く

旅をしてくることを条件として婿選びをする話であるが、ハンス・ザックスはそれに新趣向を加へて、劇的葛藤を構成してゐるのである。

貴婦人 (die Edel frau) Plangina Plankensteinin は兄の娘 Sophronia の後見をして貞淑温良に育てて来たが、年頃になつたので娘に財産を與へて婿選びの心得を話して聽かせる。處で娘には Franz von Sternberg と云ふ青年が結婚を申込んでをり、叔母は Cunradt von Adelsteiner を候補者にしてゐる。そこへシュテルンベルクが求婚に来る。叔母は二日の猶豫を乞うて彼を返し、娘の氣持を問ふ。娘には彼が氣に入つてゐる。だが人は外見丈で判斷してはならない。平常の行狀、兩親、門地なども大切であるからよく調べて見なければならぬ。次いでアーデルシュタイナーが来て、先に手紙で申込んだ通りソフロニアを貰ひ度いと云ふ。然も之も明日来てくれと言つて返へす。後で娘は矢張り先の方がずつと優しいから好きだと言ふ。叔母はアーデルシュタイナーの方がずつと立派だと言ふ。かうして二人の意見が相違するのを特に強調することによつて、その解決に期待を持たせる處に、作者の創意がある。かくてこの二人は次ぎ次ぎに返事を訊ききて、アーデルシュタイナーはエルサレムへ、シュテルンベルクは Ach (Akka?) へ巡禮してくるやうに言はれる。二人が承諾して去ると、娘は猶もシュテルンベルクの方がどうしても好ましいと言ふ。そこでそれではもう一度試験して見ようと言ふことになる。そして娘が狩に出て、凍えて以來、癩病になり、その治療で財産も無くして了つたと言ふことにする。かくて旅から歸つて来たシュテルンベルクは叔母からその話を聞かされて、逃げ出すが、アーデルシュタイナーは容貌財産に惚れたのではなく、氣質性行に感じたのであると言つて、娘の病氣を見舞はせてくれと頼む。それを聽いて叔母は娘を呼び、男には今は拵へ事だから赦して貰ひ度いと願ひ、ここで娘も始めて自分の間違ひを覺る――

之は作者の新構想によつて物語の筋を劇的に發展させるとともに、教訓の趣旨を一段と鮮明に判り易く描き出してゐる好例である。

「悪口された悲戀物語」これには珍らしく序辭役 (Prologus) が最初に登場して物語の荒筋を紹介してゐる。ザックスの謝肉祭劇としては稀有のことで、當時作者が本格的劇作に漸く専念しようとしつつあつたことが影響したものと思はれる。従つて此の作は謝肉祭劇としては餘りに複雑過る内容を持つてをり、内容に比して形式が伴はないために、劇的統一を失ひ、散漫冗長なものになつて了つた。

第一場、父親 Mang と母親 Irena が息子を修業の旅に出す處を寫してゐる。父親は若者 (der jüdling) に諸國を遊歴して立派な職人になる様にと諭し、母親は友人や女に氣を付け、落ち着いたら手紙を寄越す様にと教へる。二人はそれぞれ旅費や小遣を與へて、若者を懇ろに送り出す。第二場、さきの若者が獨語してゐる。此の町で仕事をしてゐる中に、Eva と云ふ娘を愛するやうになつたが、女の方でも自分を思うてくれてゐる様だと言ふのである。第三場、町内の若者 Adam と Jacob が他國者に町の娘を取られては、町の者の名折れたとばかり、かの若者を毆つてやらうと相談してゐる。そこへ若者が來かかるので、喧嘩を吹きかける。そして双方刀を抜いて切合ひ、二人が逃げ出すのを、若者が追うて行く。第四場、若者と仲間のハンスとが登場。二人で戀人に逢ひに行かうとして出掛けると、主人夫婦 Neydhart と Clara とが出て来て、仕事をしないで女の後を追ひ廻してゐると叱り、相手の女は性悪だから欺されてゐるのだと戒める。だが二人は肯かずに行つて了ふ。主人は相手の娘の父親に言ひ付けて、若者の出入りを止めさせようと言ふ。第五場、エヴァの父親 Gutman と母親 Benigna とが若者の噂をして、立派な男だから娘を與れてやつてもよいと言つてゐる處へ、ナイトハルトが来る。彼は娘の兩親に、若者が娘を弄んで陰で娘の悪口を言つてゐると告げる。だが娘の兩親



は若者を信用して、それを信じないので、ナイトハルトは怒つて立ち去る。第六場。ナイトハルトは若者の両親マンクとイレーナを訪れて、息子が悪い女に瞞されてゐると注意する。マンクが叱つて懲らしてくれと頼む。だが叱つても言ふことを諸かないから、父親の方から手紙を書いてくれと言はれて、承知する。然し母親は息子が其麼悪いことをしてゐるとは信じない。又眞面目な愛情なら賭博や飲食に耽けるよりもよい。若い者には楽しみがなければならぬのだから、何はともあれ息子の居場所が判つて嬉しい。さあそれでは食事にしませう。手紙を書くのを忘れないで下さいと言ふ。母親らしい情愛が簡單な科白の中によく表現されてゐる。第七場。二人のエヴァが若者とハンスの噂をしてゐる。第一のエヴァ(Eva die erst)は若者が久しく顔を見せないがどうしたのか。町の若衆が彼を憎んでゐるばかりか、今日もこの窓下へ来て歌を歌つて行つたが、自分はあんな人達には氣がなうと言ふ。第二のエヴァ(Eva die ander)が主人のナイトハルトさんが留守なので、家を明けられないのだらうと云ふ。と二人の愛人が出てくる。ハンスは女の心が未だ元の通りかどうかと疑ふけれども、若者は女が心變りをする筈がないと言ふ。その中に二人は女の家の前へ来る。ハンスが足で大地を踏み鳴らす。(Hans klopf mit dem Fuß auf die erdt.)そして第一のエヴァに注意されて、第二のエヴァが様子を見に出て、二人の愛人が忍んで来たのを告げる。それから久し振りで逢つた喜びやら、長い間訪ねて来なかつた譯やら、ナイトハルトが男の方へ行つては女の悪口を、女の方へ来ては男の悪口を言つて歩いてゐることやらが、四人の口からそれからそれへと物語られる。若者は第一のエヴァに求婚し、エヴァは両親の許しを得る迄待つてくれと答へ、二人相抱いて、ではそれ迄心變りをしてほしと別を告げる。ハンスも又同様第二のエヴァを抱いて別れを惜しむ。此の場面は對話が四人の間に行はれてゐる點で、從來にその比を見ないものであ

るが、作者は巧にそれを描寫して間隙を生ぜしめてゐないのは、さすがに老巧の手練である。第八場。二人の娘が去ると、Evaと云ふ仲間が出て来て、若者にエヴァの悪口を言つて、結婚を思ひ止まらせようとする。ルックスは自分がエヴァを戀してゐるので、彼女を自分のものにして云ふ肚である。然し若者は言ふ事を諸かずに、ハンスと連れだつて行つて了ふので、ルックスは自分の妹をエヴァの處へやつて、若者とエヴァの間を離間させようとする。第九場。ルックスの妹 Schlappebrot がエヴァの處へ来て、若者の悪口を言ひ、自分の兄を薦めるが、エヴァは頑として受け付けない。第十場。エヴァが両親に若者との結婚を許して呉れと願つてゐる處へ、若者も来て、結婚を申込む。彼は自分の両親からも承諾を得てゐると言ふので、ここに正式に婚約が成立する。男は一グロッシェンと手巾を贈り、女は指輪を贈る。母親が二人を祝福する。第十一場。悪魔が出て来て獨語。彼は此の結婚を邪魔しようとして、ナイトハルトや、ルックス兄妹を使つて見たが、失敗に終つたので、今度は女術の妖婆をして、若者の両親を瞞させようと言ふ。第十二場。老妖婆(Die alte Hex)が若者の母親を訪ねて、エヴァには悪い評判が立つてゐると教へる。母親は驚いて、父親と相談して早速息子の處へ使を遣らうと云ふ。第十三場。息子の處へ使者(Der Post)が来て、彼を故郷へ連れ歸る。第十四場。父親マンクと母親が息子を迎へる。(Sein Vater vnd Mutter kummen ihm entgegen)父親は息子に結婚を思ひ止まらせようとして、言ふ事を諸かなければ廢嫡して勘當すると言ふけれども、息子は誓言を破るわけには行かないと言つて、出て行く。第十五場。娘の両親と娘とが若者の歸つて来るのを待つてゐる處へ、彼が来て、自分の両親が此の結婚を許してくれないと訴へる。そこへ又息子の母親が使者と一緒に現れる。彼女はどうしても此の結婚は破談にして貰ひ度いと言つて、無理に息子を連れて行かうとする。娘は泣く。(Die Braut weindt.)息子

は娘に自分の愛を誓ひ、時節を待つて望を捨てない様にと慰める、それから樂士に音楽を奏させ、一同踊りとなる。踊りが済むと、娘の父親が子女の教育に就て教訓を述べる。娘に悪い評判が立たない様に、若い男との交際には注意しなければならぬと言ふのである。

以上の様に此の芝居は映畫のシナリオでも見る様で異色ある作品であるが、筋の發展も冗漫であり、人物の性格も分明ならず、物語と教訓ともびつたり合はない。之れ丈では二人のエヴァを出して二組の愛人關係を描く必要もないし、ナイトハルトが中傷離間するのも動機が薄弱であり、惡魔が出て來るのも唐突で不自然である。何よりも息子が最後に簡単に結婚を斷念してゐるのは理解し難い。恐らく作者は自分の修業時代に於ける旅先きの經驗に基いて、當時同様な事件が身邊に起つたのを脚色したものであらうか？ 果して然りとすれば、若者の性格は作者自身の性格を反映してゐるものであつて、彼が一時情熱に驅られて眞剣に求愛するけれども、元來溫和な彼の性格として、何處迄も我意を通すことが出來ないのも了解される。何れにしても此の劇は個々の場面に時として優れた寫實的描寫があるけれども、全體としてモテイーヴの薄弱な敘事的對話に過ぎない。

最後の五十四年度に書かれた「貧乏夫人と幸運夫人」は純然たる比喩的教訓劇である。貧乏と幸運とを擬人化した二人の婦人が Der treu Eckhart に紹介されて登場、互に彼女達の優劣功罪を論じ合ひ、遂に掴み合ひの喧嘩になるが、幸運夫人は貧乏夫人に征服されて臣事することとなる。そこで幸運夫人は貧乏夫人に命ぜられて、櫻の杭に、色慾、暴力、飲酒その他怠惰、傲慢、吝嗇、賭博、詐欺、強盜、憎惡、嫉妬、羨望等を象徴する戀文と指輪、劍、酒樽、合切袋を縛りつけ、此等人間に不幸を齎すものを追放する。貧乏夫人はそれに安心して退場。やがて漁色家 (Der pueler) がやつて來て、幸運夫人に戀愛の幸福を授けて頂き度いと願ふ。夫人は色戀は汚辱の基だから、最早や自分は關

係しない。欲しかつたらその杭に繋いであるから勝手に取つて行くやうにと言う。漁色家は手紙と指輪を取つて喜んで歸つて行く。同様な経緯を経て軍人 (Der kriegsman) は劍を、酒呑み (Der drinker) は酒樽を持つて行く。あとで幸運夫人は人間の愚さを嘆いてゐる。すると先の漁色家が憔悴して出て來て、愛慾生活の恐るべき結果を物語る。同様に軍人は片腕を繃帯して出て來る。酒呑みの美食家 (Der schlemer) は杖を突いてよぼよぼと現れる。何れも權力や贅澤に驕つた結果、今は惨めに零落したのである。幸運夫人は三人に自業自得だと諷刺。忠實なエツカルトが最後に懇々と幸運の儚いものであることを説いて、自らを謹しまなければならぬと教へる。

即ち之れも古來から用ひ古るされた喧嘩口論の場面と顔見世形式とを組合せた一種の道德劇 (Moralitäten) として、元々ボッカチオの物語 (ザックスの用いた原本は Funenste Historien und exempel von widerwertigen Glück durch Joannem Boccacium in Latein beschriben, von Hieronymo Ziegler verdeutschet. Augsburg bei Hch. Steiner 1545. Im Besitz des Dichters) に由來し、千五百四十五年五月七日作 Ein Kampf zwischen frau Arnut und frau Glück を劇化したものであるから、作者の關心は劇的效果よりも教訓の意義を明瞭化することに係つてゐたと思はれる。従つて最初は Comedi mit 6 personen. Der Kampf mit frau Arnut und frau Glück, unnd hat I actus (喜劇人物六人、貧乏夫人と幸運夫人の論争。一幕) と題されて印刷公刊されたもので、謝肉祭劇ではなかつたのである。

以上の様にハンス・ザックスの教訓劇は謝肉祭劇として必ずしも秀れたものではないけれども、それを劇的に構成しようとして、各種の細い趣向を凝らしてをり、個々の場面には流石に周到なる用意が施されてゐるのを見ることが出来る。只教訓を主とすれば筋が陳腐となり、筋を劇的にすれば教訓が疎かになると言つた矛盾は、此の作者にして

も未だ如何ともなし難かつた。

同様なことが彼の古典物に就ても言ひうる。即ち彼は啓蒙主義の詩人として劇的效果よりも教訓的意義を尊重せざるを得なかつた様に、フマニスムスの作家としては結局物語の知的要素のために劇的要素を犠牲にせざるを得なかつた。その最もよい例は「アレキサンダー大王と哲學者ディオゲネス」である。物語はプルートルクの訓言集（ザックスの用ひた原本は *Plutarchi von Chereona und anderer kurz weise und heilige Sprich. Deutsch von Hch. von Eppendorf. 1534. Strassburg bei Hans Schott.*）から取られた有名なものであるが、ザックスは此の樽の中の哲人が自分の前に立つた大王に、日光を興へよと要求する場面に續けるに、専制君主と禁慾主義者との長問答を以てしてゐる。そして其處には作者の持論である平和主義清貧主義がディオゲネスの口を藉りて語られてゐる丈に、會話はさすがに生彩を帯びてゐるけれども、劇的所作は殆ど見られない。勿論作者としても劇的構想を無視してゐるわけではない。特に最初の場面の如きは大王と先觸れ（Herold）とを出して、先觸れに大王を紹介させ、「全能にして強力なる皇帝、印度全亞細亞を征伏せる勝利赫々たる世界の霸王、母はオリムピアス、父はデュピター、王の中の王」（因に此の時既に全細亞を征伏したと云ふのは土地及び時代錯誤である）と呼ばせてゐるのは、後段で、かくの如き偉大な王が無一物のディオゲネスに完膚なき迄に論破されるのと相俟つて、對立（コントラスト）の効果を狙つたのであり、更らに此の先觸れの説明で、大王は軍を留めて學問の都アテーンに賢人を訪ふことになつてゐるのも、武力と智力との對立を暗示することによつて、次の場面に對する期待を昂めるに役立つてゐる。かくてアレキサンダーはディオゲネスを認めると、「樽の中にて字を書いた紙を綴り合せてゐるのは誰か？」と先觸れに訊く。先觸れがキニーク派の哲學者であることを説明する。すると大王は哲學者に近づき「お

前は誰か？」と問ふ。ディオゲネスは大王であると答へる。そして所謂犬儒派の意味がこゝで説明される。彼は忠犬の様に罪惡に噛み付き、膿み爛れたものを舐り、徳を捕へるために狩に出るのである。だが彼のあとに従ふものは一人もない。次いでディオゲネスが「君は誰か？」と問ふ。「お前は儂を知らないのか。儂はアレキサンダー大王ぢや。お前は貧乏してゐるやうだが、何か欲しいものがあれば、望むがよい。」と王は答へる。如何にも王者らしい科白であるが、哲人は只「少し退いて下さい」と言ふ丈で又書類を綴り合せてゐる。王は後へ退り乍ら「何を望まうかと思案し度いのぢやな。千ドカーテンが欲しいと言つても喜んで取らせよう。儂の事を賞めて書き残して呉れるぢやらうから」と彼らしい想像をしてゐる。然し先觸れはディオゲネスの注意が最早や王を去つて、彼自身の哲學の書物の上に歸つてゐることを説明する。そこで王は再び近づいて、何か欲しいものはないかと訊く。ディオゲネスは「日陰にならない様に退いて下さい。」と書物の糊が乾かないから、その他に欲しいものは何もありません」と答へる。王は驚いて「世界の最強の王がお前を富ませてやらうと云ふのに、それを拒むのか？」と反問する。哲人は王がフィリップ王から受け繼いだマケドニア王國丈で満足せず、他國を侵略して飽くことを知らないのは、自分より貧しい證據だと答へる。かうして王は王權、軍隊、幸運、名聲、所罰權、廷臣、權勢を誇るけれども、ディオゲネスはそれを一一反駁して、自分の方が遙に強力であり、王は彼の下男の又下男に過ぎないと云ふ。と言ふのも王はもろもろの罪惡の捕はれとなつて、それに使はれてゐるけれども、彼はそれらの罪惡の上に立つて、それらを支配してゐるからである。彼には最大の財寶がある。それは智識である。ここに於て王は全く屈服し、頸飾（ネクタイ）を贈る。だが哲人はそれをも投げ返して、自分は水とパンと住居があるから何にも要らないと言ふ、王は先觸れに促され、「儂がアレキサンダーでなけ

れば、此のディオゲネスになり度い」と言ひ、彼に悉く感心し乍ら、アテーン市外の軍隊の處へ歸つて行く。あとでディオゲネスは「王は非業の死を遂げるであらう」と豫言する。

以上の様に此の劇は前半に幾分劇的所作が加味されてゐるけれども、後半は全く論争詩で、千五百五十八年二月十一日に Ein Gespräch König Alexander der Magnus mit Diogene, dem philosopho の表題の下に改作されてゐるものと大同小異である。

「暴君ディオニシウスとダモン」も Petarca の Rerum memorandarum 三卷二十三章から取られた有名な物語で、前劇同様、前半が劇的に構成されてゐるのに對して、後半は全く非劇的對話に過ぎない。(因にザックスの用ひた原本は F. Petarcha. Gedenkbuch Aller Handlungen etc. Deutsch durch Mag. Steph. Vigilius Pacimontanus, Augsburg, H. Steyer 1541. Im Besitz von Sachs.)

Dionisius は彼の顧問 (der Raht) Damon と二人の護衛 (Trabanten) を連れて登場。彼はシシリー島を征略し、シラクサに都を定め、強力な専制政治を行つて、僅に治安を維持してゐる。するとダモンは暴君の勢威を口を極めて讚美し、それにも拘らず王が快々として樂しまない風があるのを怪しむ。そこで王は彼に、そんなら明日一日王者としての幸福を味つて見たらどうかと言ふ。ダモンは身に餘る光榮だと非常に喜ぶ。ここでも作者は例の如くダモンの期待と歡喜を強調することによつて、後段に於ける彼の幻滅と恐怖に對立せしめてゐる。されば原作ではダモンが王の客人に過らないのを、ここでは王の家臣にしてをる、従つてダモンを王として迎へるため豪華な準備が行はれる記述もすつかり省略して、その代り極力ダモンの心理状態を詳細に寫してゐるのである。ダモンは翌朝、前晩は殆ど眠らずに、王から何が下されるかを考へてゐたと言ひ、町を下されるか、國を下されるか、それとも國中で王に次ぐ最高の位を下されるかと希望に満ちてゐる。

そこへ護衛 Dion が來て、王位に即いて王の全權を行使するやうにと云ふ王の命令を傳へる。彼は大喜びで、これも日頃王の御機嫌を取つて、王のすることを御無理御尤と通して來た御陰だと獨り語る。次いで護衛 Nisus と Dion が出來る。ニシウスは王の命令で、ダモンの王座の傍に立ち弓で彼を狙ひ、ディオオンも同様槍で彼を突くばかりの姿勢を取ることになつてゐる。それは王がダモンを脅して樂しむためである。王は慘酷無情、冷酷暴戾で親戚知友悉く苦しみ惱まされてゐる。早く彼が死んで血腥い政治が終つてくれればよい。かう言つて二人は暴君の暴狀を怨嗟する。だが此の場は例の間接敘事法を用ひて事實を説明する丈で、物語を發展させるものではないから全くの冗物である。

ディオニシウスは貧乏しい服装をし、ダモンは王服を着て出てくる。王はダモンを王座に坐らせ、宮廷の凡ゆる役人凡ゆる娛樂は悉く彼の意のままであるから、思ふ存分樂しんだがよいと言ふ。ダモンは非常に喜び、これでもう死んでも思ひ残すことはないと言ふ。處へ先の二人の護衛が出來て、左右から彼を弓と槍で狙ふ。ダモンは彼等を退けようとするけれども、彼等は頑として言ふことを諾かない。その時又ダモンは頭上に拔身の劍が吊るされてゐるのを見る。彼は忽ち恐怖戰慄して、早速王位を返したいと願ふ。それから王とダモンとの間に華かな權勢と豊かな財寶の陰に、如何に絶えざる恐怖と不安が藏されてゐるかが話される。ここでは前劇と反對に、王自身がダモンの問ひに答へて、暴君僭王の身邊が如何に危険の多いものであるか、その幸運が如何に頼り無いものであるか、神の加護から見放されたものであるかを、諄々と説明してゐる。遂にダモンは紫衣も王笏も王冠も返し、權力も榮耀榮華も幸運も名譽も望まない、あなたの家來で澤山であると言ふ。

此の劇でもダモンが意氣揚々として王位に即き、その得意と自信の

程は、ニシウスが弓で脅かしても「退りおれ、今日は政治の全權が私にあるのだぞ。退らぬと二人とも締め殺してくれ」と叱りつける迄に高められて来た處で、急轉直下、彼が忽ち身の危険を知つて驚愕するに至ると言ふ對立的過程に心理的にして劇的な展開が見られる。然し乍らそれに續くディオニシウスとダモンの對話は作者の持論の人道主義の説明であつて、ディオニシウスは全く暴君の典型として、暴君の一般的心理を物語るのみで終つてゐる。従つて其處には教訓と思想があつて、人物と事件がない。是は要するにハンス・ザックスが前半に於ては劇詩人であつたものが、後半に於ては人文派の學者であつたことを證するものである。

更らに「零落した貴族の柔い寢床」も同じ缺陷を示してゐる。羅馬の貴族 *Superbus* は債鬼に攻められて破産に頻してゐるにも拘はらず、贅澤三昧に日を過し、豪華な生活を續けてゐる中に、突然卒中で死んで了ふ。そこで彼の遺産が競賣に附せられる。それを聞いたアウグスツス皇帝は、彼の使用してゐた寢台を是非とも欲しいと言つて、買ひ取らせた。と言ふのも皇帝は心痛のため屢々夜寝られない事があるのに、スペルプスは借財山をなしてゐても、日高うして漸く起き出るとは、彼の寢床が必ず寢心地よく出来てゐるからに違ひないと言ふわけは、彼作者はパウリのシンプ・ウント・エルンスト (Nr. 503.) の傳へる上の様な物語を二場に分けて脚色し、第一場ではスペルプスと召使 *Inato* 及び *Dramo* を出して貴族の生活振りを示し、第二場では皇帝と廷臣 *Thius* 及び *Fabius* を出して寢台購入の件を論議させてゐる。しかも前者は相當寫實的に、後者は全く對話文で脚色されてゐるのと、前の事件と後の事件とに緊密な因果關係がないのと、ここでも亦作者が劇作家であるとともに、人道主義者であり、その兩者を未だ藝術的に統一することが出来なかつたことを示してゐる。然し乍ら前劇に於ても此の劇に於てもその人道主義には今日の所謂民主主義思想の含

まれてゐることを見逃してはならない。

従つて次の「主の神エブの子等を祝福す」は作者の人道主義的精神を劇化したものとして特記すべきものである。即ちここでは劇物語と根本思想とが漸く融和され、從來の二元的合成物が一元的に統一されてゐるのである。勿論それがためには素材の内容そのものが預つて力があるけれども、作者がそれを選択しそれを劇化したと云ふ功績は、そのために聊かも減ずるものではない。ハンス・ザックスが此の物語を如何に愛好したかは、既に千五百四十七年八月二十五日に之を *Die ungleichen kinder Eve: in dem zarten tone des Heinrich Frauenlob.* なる工匠歌に詩作し、更らに今茲に述べる謝肉祭劇 (1533, 9, 23.) に次いで同じ年十一月六日に *Comedia. Die ungleichen kinder Eve, wie sie gott, der herr, anredt; hat XIX person unnd fünf actus.* (喜劇ハバの等しからざる子等。主なる神彼等に試問す。人物十九人。五幕。後述) なる五幕の喜劇に脚色し、更らに千五百五十八年一月六日に同名の笑話詩を書いてゐることによつても知られる。

物語は人類に於ける職階の起源を説明したもので、既にグリムの童話百八十一番にも採録されてゐることから見て、それは遠くゲルマンの古代神話と關係あるものとされてゐる。(Vgl. Dichtungen von Hans Sachs. III. T. von Julius Tittmann, S. XXXVI ff.) と言ふのも *Edda* の中にもヴォータンの子 *Heimdall* が地上を巡廻して人間を下僕と自由人と貴人との階級に別けた話があり、之が基督教風に改變されて、神と人類の祖先アダム、エバとの物語に移されて來ることは容易に考へ得られるからである。従つて此の物語は早く *Bapista Mantuanus* の *Eriogen* (牧歌。Ca. 1470.) の中に見出されるもの (Vgl. Creizenach, II. 103.) 既に *Sixt Brick* (宗改演第九章参照) によつて千五百三十九年に脚色され、當時世に廣く傳つてゐた。ザックスも其の喜劇の冒頭に「始めヒリップ・メロンヒトーンが羅典語でものしたよき物語」(ein

comedi und lieblich g'dicht, das urspringlich hat zugericht im latein Philipps Melancthon)と言ひ笑話詩の中にも「昔學者達がもつたよき物語」(Die g'leren haben zugericht vor jaren ein lieblich g'richt)と言ひつゝる様に、メラントーンは千五百三十九年三月二十三日伯爵 Johann von Wied に宛てた手紙の中で之を語り傳へてゐるし、千五百四十一年には Erasmus Albertus が羅典語の對話にしてをり、その獨逸語譯は Leonhart Jacobi によつて千五百五十二年出版されてゐる。尙 Johann Agricola の Sprickworten (格言集、低地獨逸語版一五二八年高地獨逸語版一五二九年)にも此の傳説が紹介されてゐると言ふ。然し乍らハンス・ザックスが典據とした原本が彼の言ふ如く果してメラントーンの手紙にあつたかどうかは疑問である。彼は物語に權威と興味を興へるために、此の有名な人文學者の名前を擧げてゐるに過ないのて、——さう云う例は他の劇にも屢々見られる——その實際の原典は別にあつたのではなからうか？と言ふのも千五百十六年の精靈降臨祭に Freiberg でザクセン侯ゲオルグ及びその宮廷人の前で上演された宗教劇中に既に此の物語が演ぜられてをり、その表題、登場人物、ことにアダムとエバの子供達の名前等がザックスの喜劇と合致してゐるからである。(Vgl. Creizenach, III, 139.) 即ち此のフライベルク受難劇は四日に渡つて演ぜられたものであるが、その第一日目には天使の墮獄、人類の創造と墮落、天國より人類の追放、「アダムとエバの等しからざる子供等。主たる神が彼等を試問考査する場面」(von den ungleichen Kindern Adams und Eve, wil sie Gott der Herr angerebet und examiniert)があり、その中にエバの子として「よき子に Abel, Set, Jared, Enoch, Matsalach, Lamech, 悪しき子に Cain, Datan, Achan, Nabal, Essau, Nimrot 等の名が見られるのは、ザックス劇と全く等しいのである。何にしても「エバの等しからざる子供」は當時の人文學者にも興味を持たれ、民間に於ても相當に流布してゐ

た寓話であつて、ハンス・ザックスが之を四回も取り上げて作詩の題材にしたのも、その中に色々な趣向の變化の可能性と時代的意義を見出したからである。

彼の工匠歌は最も簡潔に物語の内容を歌ひ、神が必要な仕事にそれぞれの人間を配し、如何に賢明に此の世を支配してゐるかを教へてゐる。笑話詩ではそれを敷衍して敘事詩的に物語り、最後に結辭(Der Beschluß)を附加して、神の定められた職階には貴賤の別はないのであるから、各自その職に安じて本務を盡すべきであるのに、此の頃互に他を排擠して、神の秩序を亂すものがあるのは遺憾であると述べてゐる。此の兩者はその趣向に於て殆ど等しく、教訓に於て後者の方が遙かに親切に物語の持つ時代的意義を明かにしてゐる。之に對して彼の喜劇は一番の大作であり、趣向に於ても解釋に於ても前二者と甚だ趣を異にし、描寫も懇切を極めてゐるが、それ丈冗長で作爲的であり、古るい宗教劇を思はせるものがある。そこでは前二者に明示してなかつた子供達の名前がカイン、アベル以下よい子七人、悪しき子七人に與へられてをり、彼等はそれ／＼神からモーゼの十戒、信仰問答を試験される。そして悪しき子には絶えずサタンが現れて使喚し、遂にカインはアベルを嫉んで彼を殺すに至る。しかも此の劇の結末で口上役(Der ernholt)の述べてゐる説明は、此の劇が第一、原罪による慘苦艱難な人間生活、第二、敬虔なるアベルの神への奉仕、第三、惡逆非道のカインの墮獄、第四、基督の贖罪による人類の救済を示すものであると言ふ。従つてここには劇物語の中心をなす人間職階の起源が問題ではなくして、全體が全く昔の受難劇の一部をなすものとなつてゐる。

之に比べると謝肉祭劇「エバの等しからざる子供等」は新しい時代を呼吸してゐる民間詩人が自由な構想で新しい人文主義精神を盛つたものであつて、流石に此の作者ならでは見られない進歩的作品であると

言ふことが出来る。

こころは既にカインがアベルを殺した後の話である。エバは悪魔の蛇に誘惑されて禁断の木の實を食べて以来、樂園を追はれ地上で人の子を産む苦しみに悩んでゐる。彼女がかく嘆いてゐる處へ、アダムが鶴嘴を擔ぎ、疲れ切つて出て来る。之も同様に額に汗してパンを得なければならぬ辛勞多い地上の生活を嘆く。そしてエバが戸口で悲し相に坐つてゐるのを見て、どうしたのか？ と切り問ふ。エバは犯した罪の恐しさを繰り返して、今は嘆き悲しみ訴へるより他に詮ない身の上だと言ふ。アダムはそれを慰め勵まし、今日天使から知らせがあつて、神様が訪ねて來られるから、子供達にその支度をして置くようにと吩咐ける。それを聽いてエバは神様は慘酷な方だから逃げようと言ふ。

然しアダムは神様が御訪ね下さるのは、御恵を授けて下さる御心算だらうから、子供達を綺麗にさせ、家の中を掃除して置くやうにと諭す。そこで彼女は両手を指し上げて、神を讃へ、神を迎へる用意をするために出て行く。アダムも同様に祈念を捧げ、自分達の罪の報は今もなほ續き、カインはアベルを殺すに至つたが、御怒りを解いて救ひ主を遣し給へと祈る。そこへエバが四人の子供を連れてくる。彼女は彼等が屹度神様の氣に入り、そのお陰で皆が仕合せになれるだらうと期待してゐる。するとアダムが他の子供達はどうしたかと問ふ。だが他のものは凡て醜怪で畸形、神様の前に出すのも恥かしいので、乾草や藁や籠、圍爐裏の中へ藏されたのである。アダムは神様の前では容貌の醜陋等は問題ではなく、行を謹しみ神を敬ふ事が大切なのだから、皆を連れて來るやうにと教へる。それから子供達に向つて、神様を迎へる時の作法を言つて聽かせる。長男 Set が「お父様の仰有る通り出來る丈一生懸命に致します」と答へてゐる處へ、神は二人の天使を連れて現れる（以上第一段）。主は「平安汝等の上にあれ！」と彼等を祝福する。アダムとエバは交々頭を垂れ跪づき、神の徳を讃へ悔悛の念

に堪へないものがある。然し神の慈悲は宏大無邊であるから、聽て「エバの種子は蛇を踏み躪るであらう。」「ではその聖なる種子と云ふのは此の子達の中にあるのでせうか？」とエバ。すると神はその種子が既に始まつてゐること、子から子へ傳つて、やがては今言つた様な惠まれた種子が生ずることを告げ、それから子供達の方に向ふ。「子供達よ、お祈りが出来るかね？」「はい、出來ます御座います」とエバは愛想がよい。そしてゼトが祈禱すれば、その他の子供等もそれに續く。主は人類の繁榮を壽ぐ。そしてエバの願で、子供等の頭を手を置き、一人一人に職務とその心得を授ける。即ち長子は王笏と王冠を授けられて王にされ、次子は楯と紋章とを與へられて騎士にされる。同様に第三子は市長として權杖を、第四子は商人として衡と物差しとを貰ふ。かくて彼等は主に招かれて天國に行く。エバも一緒に行き度いと言ふけれども許されぬ（以上第二段）。主がよい子等四人とともに退場すると、エバは他の醜い子供達を連れて來なかつたために、彼等が神から祝福されず、立派な身分にして貰へなかつたのを残念がる。アダムが「言はないことぢやない。主は身形などを御覽にならぬ。行狀が大切なだから、早く行つて子供達を連れて來たがよい。」と答へる。エバも早速その氣になり「主が又來られたら、暫くお相手申上げてゐて下さい。すぐ歸つて來ますから」と出て行く。アダムが彼女を送り出して、ふと見れば、遠くに又主が近づいて來られるのが見える（以上第三段）。

主は日も暮れかかる、天國へ歸らなければならぬが、エバは何處へ行つたか？ と問ふ。そこでアダムは事情を話して暫く待つて貰ふ。彼がエバを迎へに行かうと馳け出す處へ、彼女が四人の子供を連れて歸つて來る。彼女は神様を見ると早速、此の子供達も前の子供達と同様に祝福して下さいと願ふ。そして主に、何故先程連れて來なかつたのか？ と問はれて、彼等が餘り醜いので恥かしかつたからだと言へ



る。主は彼等を跪つかせ、祈らせようとするが、エバはとても其處へとは出来ませんと傍から取り做す。そこで主は子供が不法法で不信心であると言つて、エバを叱る。エバは子供の多い上に仕事忙しいので、遂自分もアダムも手が廻らなかつたのですと言ひ、重ねて此の子供達にも祝福を授けられる様にと嘆願する。そこで主も子供の不行跡はアダムとエバの責任で、子供に罪はないからと言つて、子供達を近く呼びよせる。かくて神は又子供一人一人の頭に手を置いて、それぞれに職業とその心得を授ける。即ち最初の子は靴屋として靴型を、二番目の子は織工として梭を、三番目は牧童として雑囊を、四番目は百姓として鋤を貰ふ。エバは前の子供達と後の子供達とが餘りにも身分が違ふので、不服である。併し主は人を見て職を授けそれぞれ處を得て世の中の凡ての事が怠り無く行はなければならぬことを説き、皆が皆王侯市長になつたら、家を建て、機を織り畑を耕すものがなくなる。又民衆を賢く支配し公益を護り、悪人を懲らす上司がなければ、此の世はどうなるであらうか？ されば何れも缺くことが出来ないものであると教へる。しかもエバは何れも同じ自分達の子供であるのに、先の四人は贅澤な生活が出来、後の四人は粗衣粗食で、烈しい勞苦に耐へなければならぬのは、どうしたことてせうか？ 同じ様な生活が出来たらよいけれどもと抗議を申し込む。主は職業に上下の別はないことを懇々と諭す。王侯貴顯には人に知られない苦勞があつて、日夜心痛の絶える間がない。それに對して勞働するものは妻子を養ふ他に苦勞はなく、仕事は健康であり夜は安眠が出来、食事は美味しい。それ故各々その職に安しなければならぬ。かう云つて主は再び天國へ歸つて行く。あとでアダムはエバに、主の言葉を守つて子供達を教育し、敬神と信心を旨とすれば、聽て救世主の降臨となり、永遠の生命を得ることが出来るであらうと結ぶ(以上第四段)。

以上一見極めて平單な描寫で劇的葛藤よりも寧ろ最後の教訓に重點

が置かれてゐる様に見えるけれども、各段を仔細に見る時、必ずしも之が劇的效果を無視した單なる教訓劇ではないことを看取しうる。先づ第一段に於てはアダムとエバの夫婦關係と家庭生活がその簡單な會話で如何にも人情味豊かに描かれてゐる。そこには人類の祖先などと云ふ宗教的概念ではなくして、現實に生きてゐる人間の市民的生活感情が流れてゐる。エバが絶えず主導的立場に立つて事件を運んで行くのも、彼女が原罪の發頭人であつて見れば合理的であり、家庭生活に於ける主婦としての當然の役割であつて、物語の進行を自然にしてゐる。しかも彼女の樂園追放に對する悲嘆、神に對する恐怖、醜い子供達に對する羞恥等はよく女性心理を穿つてゐる。それに對してアダムは理性的である。彼は彼女を励まし諭し教へ、呼ばれて來た子供達に賓客を迎へる禮法を説けば、子供達も穩しくそれに従ふ。彼は良人として父親として申分ない役割を果してゐる。尙エバが子供達を迎へに行つてゐる間、アダムが神に祈念を捧げ、カインがアベルを殺したことに言及してゐるのも、作者独自の聰明な構想である。

第二段に於てもエバはよく活動してゐる。神が子供達を試問する場面は演ぜられず、只彼等は禮拜祈禱する丈で、神からそれぞれ祝福されてゐるが、之は舞臺經濟のために作者が割愛したものであつて、そのために劇の進行は反つて簡明にして緊縮したものになつてゐる。恐らく作者は此の時既に後に書かれた喜劇の中で、此の場面を詳細に脚色する意圖を持つてゐたのであらう。従つて子供達の名前も長子 *Ugath* を除いては本文中には示されてをらず、又彼等には何等の台詞も與へられてゐない。その代りエバが絶えず子供達のために取り做してをり、最後に子供達と一緒に天國へ行き度いと言ふのは、母性愛と女性心理の巧妙な表現である。されば第三段でエバは直ちに他の醜い子供達をも神の恩恵に浴せしめなかつたことを後悔してゐる。かくてアダムに勧められて、それらの子供達を迎へに行く様にエバの氣持が轉換する

のも自然である。だが第四段で主が再度此の家を訪れる動機が何等示されてゐないのは、此の作者に似合は無い手落ちである。神は既によい子等を連れて天國へ引上げてゐるのだから、エバが再度の訪問を期待してゐるのはまだよいとしても、神が事實何の理由もなく突然又もや現れるのは、何と言つても奇異な感を與へる。とは言へ此の度は神の方が先に登場し、アダムを急がして待つてゐる處へ、子供達の來ることになつてゐる點に於て、前段で子供達の方が神を迎へる準備をして神の到着を待つてゐるとは反對の風景を呈してゐるのであつて、此の事は同一事件の反復による場面の單調を避けようとする作者の老練な舞臺技巧を示すものである。次いで悪い子供達が試験されるに當り、子供は全く無言役であり、エバが色々と申譯をしてゐるのは、前段と同様な趣向であり乍ら、茲では全く別の重要な意味を持つてゐる。と言ふのは之によつて子供等の不行跡の責任がエバにあつて子供に無く、従つて子供等は神の祝福を受けることが出来るからである。之は作者の人間愛の自らの發露であり、人類平等の新しい思想に基くものである。かうしてここから此の劇の教訓が全く人文精神によつて説明される。勿論結末に於けるエバと神の間答及びアダムの結辭は之も此の作者特有の非劇的對話、説明のための臺詞に過ない嫌はあるけれども、その中に述べられてある思想は、先きに見たディオゲネス、ディオニシウス又はアウグスツス皇帝によつて示された様に、王侯生活の不幸と、市民生活の平安を説いたもので、單に人間社會の職階の起源を示すに止まらず、職業に上下の別なく、人類は凡て平等で自由であると言ふ人生觀を盛つてゐるのである。實にハンス・ザックスは獨逸文學史上人文主義による民主主義思想を表現した最初の詩人であつた。かうしてハンス・ザックスの謝肉祭劇は、今や新時代を代表する人文派の精神を主題とし、人間性の本質をも問題にするやうな意義深い高貴なものとなつて來た。此の趨勢は次の「聖ペテロ地上にて友人と

楽しむ」に於ても猶引繼がれてゐるが、それが謝肉祭劇として必ずしも成功したものではないとしても、作者の構想力の豊富さを示すものとして注目し得る作品であると言ふことが出来る。

聖ペテロは天國で永遠の生命を得て、何の不足もなく暮らしてゐるが、只一つ地上で楽しみらしい楽しみを失なかつたのが心残りである。それで彼は主の神に願ひ、三日の暇を貰つて地上に下りてくる。地上では彼の従弟 Hans と友人 Hans が今年には豊年満作で酒は樽に溢れ、五穀鳥獸は山野に満ち、毎日の酒宴で二日酔が去らないと嬉らしい泣言を並べてゐる。そこへペテロがやつて來るのを見て、二人は彼の幽靈が出て來たとばかり、逃げ出さうとするが、やがて本物のペテロだと判つて大歓迎する。そしてペテロは今日はクライスの家へ、明日はハンスの家へと言つた風に連日友人知己の家へ招待されることとなる。一方主は三日立つてもペテロが歸らないので、昔の癖が出て、酒に呑み痴れてゐるのだらうと言つてゐる。だがペテロはもう九日間も地上で呑み廻つてゐるので、頭は痛むし足はひよろつく。それでもやつと天國へ歸る氣になるが、行がけの駄賃に酒を袋に詰めて行かうと言ふ。

天國では主がもう九日になるが、ペテロが未だ歸らない。天國の門を閉めた切りで、澤山のもの待つてゐるのにと心配してゐる。處へペテロが恐縮し乍ら歸つて來る。そこで主は色々地上の様子を訊く。すると地上では豊作で皆上機嫌、神のこと等すつかり忘れて、謝肉祭の馬鹿騒ぎをやつてゐる。と聽いて主はでは又來年の謝肉祭に一ヶ月の暇をやるから、それ迄は天國の門番をしてをるやうにと吩咐ける。ペテロは大喜びで、來年を楽しみに務めを怠らない様に致しますと答へて、退場。あとで神は仕合せにしてやれば人間は神を忘れる。今度は不幸な目に逢はせてやらうと獨語。

扱つてその翌年、地上では先きのクライスとハンスが今度は兇年不作

を互に嘆ち合つてゐる。處へ又ペテロがやつて来る。彼は元氣よく挨拶するけれども、クラーヌもハンスも意氣消沈、穀物は實のらず、酒は腐り、殺人強盜放火頻りに行はれて、家邸も焼けたとハンスが言へば、家畜は取られるし、二人の子供は病氣になる。恐ろしい疫病が流行してゐるとクラーヌ。二人が神の助けを只管に祈るので、ペテロも此處ことなら天國にゐて地上に来るのではなかつたと二人のあとに蹤いて行く。他方神がペテロも此度は直きに歸つて来るだらうと豫期してゐると、早くも彼は散々の體で逃げ歸つて来る。そして地上の悲惨な状況を報告し、そのために今や老いも若きも懺悔改悛して、只管に神の慈悲を祈つてゐるから、どうか彼等を救つてやつて頂き度いと願ひ出る。そこで主はペテロに、此の様な災害こそ人間にとつて薬である。人間は幸福で順境にある時は兎角神の恩恵を忘れて、強慢不遜になり、福音書の言葉を無視して、罪惡不信の徒となるものであるから、彼等を苦しめ悩まして、贖罪敬神の念を起させなければならぬのであると教へる。

以上の様に此の劇の根本思想も亦人間性の根本的缺陷を摘抉すると同時に、不幸や災害が人生に對して持つ意義を明かにしてゐる。それは神やペテロが登場してゐることによつて考へられる様な宗教的意義を説いたものではなくして、全く人間生活と人間精神の現實に即した實踐的倫理思想である。勿論その倫理思想が前劇にも示されてゐる様に、神は世界秩序の維持者であると云ふ基督教的の神觀の上に立つてゐることは言ふ迄もないことであるが、人間は神の恩寵に馴れて、罪惡を犯すものであるから、彼等を反省させるために不幸が存在するのであると言ふ人間の解釋は、全く新しい人文精神による教訓である。しかも作者はそれを古來幾多の諧謔的挿話の持主であるペテロをして、天國と地上とを往復させ、一脈のユーモアを加へ乍ら、大規模な構想によつて具象的に表現しようとして試みてゐるのである。此の意味に於て

此の劇は正しく謝肉祭劇の達しうる最高の精神的段階を示してゐるものと言ふことが出来る。

然し乍ら元來物語の趣旨は一度地上で歓迎された味が忘れられず、又もや地上に向いて今度は虐待されると言ふ、ペテロの無邪氣な滑稽な失敗談である。従つて之に新しい解釋を施したのは確に作者の功績ではあるけれども、それ丈に謝肉祭劇として見る時は、その構成が劇的所作に乏しい對話と獨白に過ないものになつてゐる。と言ふのもペテロの地上に於ける行動が二回ともその實狀を寫さずに單に同じ様な會話の形で暗示されてゐる丈であり、クラーヌもハンスも亦個性のない脇役に過ないからである。

以上を以てハンス・ザックスの最盛期の謝肉祭劇に於ける教訓劇と人文劇とを見て來たのであるが、要するに茲でも作者は内容的に通俗簡單なものから思想的に複雑高尚なものへと謝肉祭劇を發展させて行くとともに、その劇的藝術的要求を満たさうと絶えず努力してゐるのである。

却説此の時代のものとして最後に見るべきものに Till Eulenspiegel 物語から取材した二曲と Fünzing (Finsing) 村人物語一曲がある。オイレンシュピーゲルは人も知る如く十四世紀に實在した遊歴人 (est. 1350 zu Mölin) で、その各地で演じた機智に富んだ悪戯は、やがて民間傳説となり、後人によつて附加追補されて百種に餘る物語となつた。それらは始め低地獨逸語で書かれ、後千五百十九年シュトラースブルクの Johannes Grieninger によつて高地獨逸語版が出版されるに至つて、國民的滑稽文學にまで發展して行つた。當時之が如何に民間に廣く流布してゐたかは、その後十六世紀の刊行本として今日知られてゐるもの十八種類に及ぶと言はれることによつても窺はれる。(Vgl. Reclam, Nr. 1687-88. Das Volksbuch von Till Eulenspiegel. S. 5.) 従つてハンス・ザックスが之から謝肉祭劇の主題を選んでゐるのは、

既に種々の著名な人物の逸話を劇化して來た此の作者としても當然のことであるとしても、ここで注目すべきは、このオイレンシュピーゲル劇こそは實に低地獨逸で生れ廣く歐洲に知られるに至つた獨逸固有の歴史的傳説的人物を主人公にした最初のものであると云ふことである。されば之は文字通り純粹な國民大衆劇であり、同じ獨逸の生んだファウスト傳説が、之よりなほ約四十年の後英國に於て始めて劇化されたことを思ふ時、ハンス・ザックスの新奇な着眼と大膽な詩才とは高く評價されてよいであらう。

處で彼が脚色した二曲は(尙晩年に二曲ある。後述) *Fabnacht spiel mit 9 Personen: Der Ewlienspiegel mit den blinden.* (キーンマン・ブーゲルと盲人。1553, 9, 14. Nr. 51.) 及び *Ein fasnacht spiel mit 4 personen: Ewlienspiegel mit der pfaffen kellerin vnd dem pfer.* (オイレンシュピーゲルと寺の給仕女と馬。1553, 12, 16. Nr. 58.) であるが、前者は作者が既に千五百四十七年一月二十六日に、又後者は千五百四十六年四月二十八日に工匠歌として詩作してをり、孰れもパウリのシムプ・ウント・エルンスト (Nr. 646 以下 Nr. 650.) に、オイレンシュピーゲルの名は擧げてはないけれども、同様な趣向の話があることから見て、數あるオイレンシュピーゲル物語の中でも、作者にとつて親しみ深いものであつたと思はれる。

「オイレンシュピーゲルと盲人」オイレンシュピーゲル登場。彼は獨逸中で有名な悪戯者であると自己紹介し、只残念なのは *Egelsheim* (原本では *Hannover*) にはまだ悪戯をしてゐない。だからあすこへ來る三人の盲人(原本では十二人)を弄つてやらうと、その方法を獨語してゐる。處へ三人の盲人が手を引き合つてやつて來る。そこで彼はわしは黃鼬の皮を着てゐるからよいが、此の寒空にそんな薄着でどこへ行くのか? と問ふ。盲人 *Lörr, Lodi, Liendi* は代る代る彼等が食を求めて夏も冬も乞食をして歩かなければならないことや、在郷

へ行けば百姓達に追ひ立てられ、町へ行けば泥棒だ火付けだと罵しられることを訴へる。オイレンシュピーゲルはひどく同情して、では一ターレルやるからエーゲルスハイムの *Hans Wirt* の處へ行つて、寒さの弛む迄過したかよいと言ふ。盲人達は喜んで手を差し出し、レールルは此處大金を持つたことはない、厚く御禮を述べると言ふのも盲人達は、オイレンシュピーゲルが先に獨語した通り、各々自分が貰はなくても、誰か他のものが貰つたものと思つたからである。處が事實は彼は何にも與へなかつたのである。彼はでは御機嫌宜う行つたかよいと、言ふ處で皆々退場。

此の場は原本に比べると却々巧者を脚色振りをしてゐる。原本ではオイレンシュピーゲルが馬に乗つてゐることによつて、盲人達が彼を偉い人だと思ふやうになつてゐるけれども、ここでは馬を出さずに黃鼬の毛皮で彼を貴公子だと思はせるやうに仕組んでゐるのは、馬が舞臺では使はれないからであらう。又オイレンシュピーゲルが盲人を購す理由と方法が最初に物語られ、それによつて彼の所作を觀客に理解せしめてゐる。更らに盲人達が彼等の生活を代る代る物語つてゐるのは、全く作者の創意によるもので、之によつて彼等の生活が如何に慘なものであり、従つて一ターレルの金が如何に大きな喜びであるか、しかもそれが詐欺であつたことを知つた時の彼等の失望が如何に大きいかを、推察させるのである。之に對して原本では盲人達の生活振りを示すものとして、彼等が町の物持ちの法要で施物を貰つて來た處であると言つてゐるに過ぎない。

次の場面では宿屋の亭主ハンスが女房と商賣は不景氣だし、税金は高い等と話し合つてゐる。之も脚色上では常套的趣向であるが、原本には勿論見られない事柄である。その中に女房は三人の盲人が來るのを認め、亭主を勵まして彼等を迎へさせる。盲人レールルは杖を突き立てて亭主を探す。亭主はルーードルから彼等に金があると聞いて、

急に愛想がよくなり、丁度昨日豚を殺した處だから腸詰めもあるし酒もある。さあ室を温めて一杯差し上げてくれろ。あなた方もストロヴの傍へ来て温まつて下さい。誰にも遠慮は入りませんからと、下へも置かぬ待遇振りである。亭主と女房が去ると、ルーニドルが此れもあの一ターレル下された旦那のお陰だ。もう貧乏ともお別れだと喜べば、ルーニドルは金の無くなる迄ここで休んで、金が盡きたら又旅に出よう。何、百姓どもが金を出さないと云ふなら、口でも手でも足でもひん曲げてやると、すつかり呑氣な氣になつて氣焰を擧げてゐる。此の心理描寫も甚だ效果的である。すると亭主が勘定書を持つて来る。彼は酒代が大分溜つて二十二グロッシェンになる。もう二罎ビールを明ければ一ターレルだから、一先づ支拂つて貰ひ度いと言ふ。だが勿論盲人達は三人とも金を持つてゐない。そしてルーニドルとルーニドルはルーニドルが貰つた金を着服しようとしてゐるのであると疑ひ、互に罵り合ひ、遂に喧嘩を始める。それを見て亭主も三人に襲ひかかる。即ち茲でも原本と違つて、亭主は盲人達が瞞されたのを知らず、盲人達自身が彼に詐欺を働いたものと思ふやうになつてゐる。だから彼は物凄く怒つて、勘定を拂ふ迄豚小屋へ叩き込んでやると言つて盲人達を室から突き出す。彼が盲人を連れて去ると、女房が出て来る。彼女は自分の見込み違ひで、無錢飲食されたことを悔んでゐる。と亭主もやつて来て、女房の迷惑違ひを責めては見るが、扱て是から何うしたらよからうかと。思案投首の體。このまま盲人を放してやれば、飲み食ひされたのが無駄になり、留めておけばそれ丈飼扶持が入るからである。かうして此の場の亭主は極めて合理的に働いてをり、原本の敘事的描寫に比すれば、却々劇的に活躍してゐる。ことに彼が盲人を豚小屋へ追ひやつてから、彼等を放してやつても留めて置いても損になると思案してゐるのは、原本の話の順序を逆に行つてゐるのであるが、ここにも亦作者の巧妙な構想を見ることが出来る。と言ふのも此の場

合亭主としては行動が第一で反省は第二である方が自然であるのみならず、此の反省によつて次の場面が連絡され是認されるからである。更らに茲で女房が登場して亭主の役を助けてゐるのも盲人達が喧嘩を始めるのもすべて原本には無いことで、劇的所作を構成するための作者の新趣向である。

扱て亭主が何うしたらよいかと思案してゐると、女房がオイレンシュピーゲルの近づいて来るのを見つける。彼は宿を頼むと直ちに豚小屋にゐるのはどう云ふお客様かと問ふ。そして亭主から一部仔什を聴くと、それは殘酷だと言つて、亭主を非難し、保證人があつたら盲人達を放してやるかと問ふ。勿論困り切つてゐた亭主は喜んで承諾する。では確な人を頼んで来るからと、オイレンシュピーゲルは亭主に送られて、早速出て行く。彼が亭主の無情を非難し、亭主が辯解するのに乗じて、では保證人があつたら放してやるかと言ふ邊りは、何でもないこと乍ら、原本には見られない老練な駈け引である。

次いで坊様が出て来る。彼も例の通り近頃百姓達が供物を捧げなくなつたのを嘆いてゐるが、臆て見知らない客人が邸内へ這入つて来るのを認める。彼は何か贈物を持つて来たかかと、祈禱書を開いて勤行中のやうな風をする。之も日本流に言へば、檀家の吝嗇臭いのを悪口言つてゐる坊様が、參詣人があると聞いて周章<sup>あや</sup>てて珠數をつまぐつて殊勝氣な風をすると言つた喜劇の常套的場面であるが、原本には「そこでオイレンシュピーゲルは牧師の處へ行つて言つた」とある丈なのから見れば、既に作者は自ら喜劇作法を體得してゐるとも言ひうる。處でお客と言ふのはオイレンシュピーゲルで、彼は挨拶宣敷くあつてから、宿屋の亭主が氣が狂つたので女房が悪魔拂ひをして貰ひ度いと言つてゐると話す。ここでも彼が亭主の氣狂い振りを説明して、夜も眠らず飲み食ひもせず、嗚鳴つたり荒れ狂うたりするので、手拭で椀桶の中に縛りつけてあると言つてゐるのは、作者の豊かな詩的想像力

による創意である。坊様は承知して、用意の都合もあるから二日待つてくれと云ふ。では女房を連れてくるから慰めてやつてくれと言つて、オイレンシュピゲルは退場。あとで坊様は亭主が気が違つたのも尤のことだ。量目を胡魔化したり、勘定を二倍にしたりして悪い事をし來たのだから——今日は寒さが却々厳しい。どれ火でも少し燠さうかと言ひ乍ら退場する。實に此の場を締め括るに適切な獨白であつて、勿論原本には見られない。

宿屋では亭主が女房を相手に客人の歸るのを待つてゐる。とオイレンシュピゲルが笑ひ乍ら歸つてくるのが見えるので、事が旨く運んだのだなと亭主。やがて出て來たオイレンシュピゲルは保證人が見付かつたからと、女房を誘うて坊様の處へ連れて行かうとする。亭主も二日待つのは僅な間だからと、女房を出してやる。場面が變つて坊様は百姓達がちつとも供物を持つて來ないから、今度説教してやらうと言つてゐる處へ、オイレンシュピゲルが女房を連れて來て紹介する。坊様は一兩日中に行つて亭主を助けてあげようと、堅く誓つてやるので、オイレンシュピゲルは「頼りの無い哀れな者に、親切な御慈悲を頂いて誠に有り難いことです」と、盲人のためにも、亭主のためにもどちらにも取れる様な返事をする。彼等が退場すると、坊様は「給仕女が町へ行つてまだ歸らないが、悪巫山戯をしてゐるのだから。どれ通りでも見てみよう」と言ひ乍ら出て行く。此處臺詞も坊様と給仕女との關係を暗示するとともに、登場人物を舞臺から退場させる口實に役立つてをり、原本には見られない味のある趣向である。

そのあと原本では「女房はオイレンシュピゲルと再び家に歸り、以上の事を亭主に告げた。亭主は喜んで盲人達を自由にして放してやつた。オイレンシュピゲルも然し又立ち去つた」とある。併し芝居では、亭主が「あの坊様が盲人のために一ターレル出すとは變なことだ。百姓達の噂ではひどい吝嗇坊で、一文の錢を出すにも三度も眺め

てからにすると言ふのに」と疑つてゐる。そこへオイレンシュピゲルが女房と戻つて來て、二人ともく坊様が引き受けたから盲人を放してやる様にと勧める。そこで亭主も至極満足して、それではブランドーでも飲ませて放してやらう等と上機嫌である。かうして亭主がすっかり喜んで氣前のよい處を見せてゐるのは。後段で彼が欺されたこと知つて激怒することと對立するわけで、作者の用意周到な伏線である。亭主と女房が出て行くと、オイレンシュピゲルはしてやつたりとばかり、坊様と亭主の間を取り持つたから、もう用はない。此の後一騒動持ち上るだらうが、それは何れ又エーゲルスハイムに來た時判るだらう。わしのした悪戯が曝れない中に匆匆お暇乞ひをしようかと、立ち去る。

それから二日後、坊様が頸に袈裟をかけ、手に祈禱書と笏を持つて出て來る。彼は亭主に惡魔拂ひを施せばお禮はたつぷり出るだらうと獨語してゐる。すると女房が來て行成り、宅の人が約束の一ターレルを貰つて來いと言つたと言ふ。坊様には何の事かわからない。だが盲人三人の代りに支拂ふのだと聽いて、彼は亭主が愈々本物の氣違ひになつたのだと思ふ。スープを食べたら直ぐにも行つて惡魔を追ひ拂つてやるからと言ふけれども、女房は約束の履行を迫つて諾かない。坊様は何を戲言、昨夜酒に酔拂つて夢でも見たんだらうと言へば、そんなら宅の人を連れて來てひどい目に逢はせてやるから、此の生臭坊主の嘘言吐き坊主とばかり、彼女は駈け去る。あとで坊様が女房迄も氣が違つたか。一ターレル支拂ふ等とはちつとも合點が行かないと、獨り言を言つてゐる。處へ亭主が屠豚用の大槍を持つて馳けつける。彼は一ターレル寄越せ、わしが氣が違つた等とは飛んでもないことを言ふ奴だと呶鳴りつける。坊様がさう言ふのがもう惡魔の付いてゐる證據だと言ふけれども、亭主は惡魔呼ばりはよしてくれ、早く一ターレル出さないかと大槍を振り廻す。坊様は大聲で助けを求めると百

姓達がどうしたどうした。喧嘩か。和尚様の家だと馳けて来る。そして百姓 Bierdopf と Dolhopf は暴れ狂う亭主を言ひ宥めて、無理に連れ去る。此の場の活劇は原本で「亭主は牧師を擲らうとしたが、その間に百姓達が来て、辛うじて二人を引き離した」とある丈なのに對して、甚だ生彩に富んでゐる。亭主が狂暴に代金を要求すればする程、百姓達は彼が氣違ひになつたものと思つて宥めたり賺したりし、坊様は悪魔のせいにする。四人宜敷く立ち廻りがあつて、亭主が腕いたり呶鳴つたりし乍ら、百姓達に連れ去られると、坊様は之から咎を潔めて悪魔拂ひをしてやらうと、悪魔の害毒を述べて結辭とする。此の結末も原本とは甚だ異つてゐる。原本では亭主は生涯代金を請求してやまず、坊様は悪魔拂ひをしてやると言つて譲らなかつたとあるのが、ここでは亭主の方が完全に氣違ひにされてゐる。即ち之も作者の聰明な新解釋であつて、之がために元來の悲劇的素材が喜劇的結末を告げてゐるのである。かくの如く此のオイレンシュピーゲル劇は、原作の物語と比較して見る時、ハンス・ザックスの作劇法の特質を最もよく示してゐるものであることが了解される。彼は人物の動作ドングにそれ／＼時宜に應じた動機を興へて演技を自然に運んでゐるのみならず、同一人物の前後相對立する心理、又は人物と人物との相對立する性格や境遇を努めて強調して、劇的效果を擧げてゐる。恐く此の劇は彼の謝肉祭劇中、その舞臺技巧が最も圓熟した時代の作品として彼の傑作の一つに數へ得るであらう。そのみではなく此の劇にはなほ重要な特徴がある。それは主人公と考へられるオイレンシュピーゲルが實は劇的葛藤の對象ではなくして、單なる誘導役をしてゐるに過ぎないと言ふことである。彼は盲人と宿屋の亭主、亭主と坊様の間に紛争を起させ、後は高見の見物をしてゐるのである。だから劇の主人公は寧ろ亭主であつて、盲人も女房も坊様も畢竟するに、オイレンシュピーゲルの傀儡に過ぎない。されば此の三人は頭々として彼の言ふことを信じて疑は

ないので、亭主丈は自分の意志を主張して最後迄譲らないのである。かくてオイレンシュピーゲルが絶えず安全な立場に立つてゐるのに反して、亭主は全く喜劇的人物になる。彼は元來必ずしも善人ではない。又單純である丈人の好い處もあるが、利慾にかけては却々に抜け目が無い。従つて彼が氣違ひにされるのには十分の理由があるから、彼の不幸な運命は悲劇感を起させない。と同時に彼を不幸にした張本人である悪戯者オイレンシュピーゲルは彼から遠い安全地帯に立つてをり、その兩者の間には何等悲劇的葛藤の起る餘地がない。即ち亭主の不運は亭主自身に責任があるとともに、責任がないとも言ふ處に、此の劇の輕妙な喜劇的要因があると言ふことが出来る。さればここには既に一種の性格喜劇に近いものが見られるとも言ひうるであらう。

此れはハンス・ザックスの詩人としての直觀が物語の中の喜劇的要素を把握してゐる最もよい例であるが、次の「オイレンシュピーゲルと寺の給仕女と馬」に於ても、此の傾向は十分に窺はれる。原本の物語はブラウンシュワイク侯が Rysenburg の牧師の持つてゐる駿馬を買ひ度いと言ふけれども、牧師がどうしても手放さないので、オイレンシュピーゲルが奇計で手に入れると云ふ筋である。だから問題はその奇計にあるのである。オイレンシュピーゲルはかねて知り合ひのその牧師の處へ行つて、三日ばかり滞在すると病氣になり、今にも死に相な風をする。そこで牧師は懺悔して聖餐を受ける様に勧める。彼は誠に悲し相な聲で、今はもう皆忘れて了つたけれども、一つ丈覺えてゐる罪がある。だがそれを懺悔しては、貴方が怒るに違ひないから、他の牧師さんを連れて来て呉れと頼む。牧師は他の牧師と言つても遠くて間に合はないし、懺悔して赦されぬ罪はない。又自分としても懺悔の祕密を洩らしてはならないのだから、怒つて見ても何のたしにならうと、彼を説得する。オイレンシュピーゲルは事は貴方に關するので、お氣の毒だと、思はせ振りを言ふ。牧師は益々聞き度くなり、



何麼悪い事でも屹度赦してやるし、そのために彼を憎むやうなことはないからと誓ふ。そこで彼は漸く、牧師の給仕女と五回も關係したと告白する。處て勿論牧師は彼を赦免するけれども、後で下婢を呼んで、オイレンシュピールとの關係を責める。身に覚えのない女は、それを何處迄も否認する。牧師は承知しない。杖を取つて彼女を打擲する。その騒ぎを床の中で聞いてゐたオイレンシュピールは「我事なれり」とばかり。翌日は早速床を起き出て、もう病氣は癒つたから出發し度いと言つて、食費の勘定をする。牧師は面喰つて心も心ならず、金を受け取らないのにも氣が付かない。愈々出發となつて、オイレンシュピールはこれから Halberstadt の僧正の處へ行つて、懺悔の祕密を洩らした罪を訴へ出ると牧師を嚇す。驚いた牧師は二十金で内濟にして呉れと頼むけれども、彼は幾ら金を出しても駄目だと答へる。牧師は泣き乍ら、下婢をやつて再度示談を申込ませる。そこで彼は遂に馬を渡せば告發するのを止めようと申し出る。かうして馬が何麼に惜しくても、牧師は結局馬を彼に渡すより他に致し方がなかつた——

要するに物語の喜劇的分子は給仕女を情人にしてゐる坊様が彼の弱點を曝露し醜體を演ずる處にある。だから物語の方では興味の重點がオイレンシュピールの奇計、即ち如何にして馬を手に入れるかにあるのに對して、劇としては彼の奇計が坊様と給仕女との關係に及ぼす影響にあるとしなければならぬ。従つてザックスもそこに亦劇的所作を求め、その劇的葛藤によつて劇的效果を擧げてゐるのである。

舞臺ではオイレンシュピールとブラウンシュワイク侯 (Herzog von Praunschweick) の間にリゼンブルクの牧師 (Pfarer von Ris-senpung) の馬を手に入れようと相談する場面があつて、次に給仕女 (Der Pfarer und Die Kellnerin) が現れる。坊様は朝の勤行に行く處で、給仕女が冗談を言ひ乍ら彼を送り出さうとしてゐる。二人が至極圓滿に暮らしてゐることはその會話で明瞭である。と其處

へ前の場面でブラウンシュワイク侯から馬の一件を頼まれて運動費をせしめて來たオイレンシュピールがやつて來る。坊様はかねてから彼を知つてゐるので、喜んで迎へる。だが給仕女はそれに不満である。即ちここでも坊様と給仕女との仲が好ければ好い程、又坊様がオイレンシュピールを信用してゐればある程、それらの事情が後段で逆轉する時の効果は大きいわけである。坊様はオイレンシュピールが金を持つてゐると聽いて益々上機嫌。二日でも三日でも泊つて行けと言ふ。給仕女が彼を信用せず反對するけれども、オイレンシュピールは彼女にも金を擱ませて黙らせる。その間彼は絶えずとぼけた冗談を言ふ。給仕女が坊様に促されて食事の支度に退くと、坊様も彌撒のために會堂へ出かける。

オイレンシュピールが獨りになると、扱て何うしたらうまく馬が手に這入るかと思案し出すが、その中に妙案ありとばかり、早速ベンチの上に横になつて病氣になつた風をする。(Is legt sich auf die Bank) するとかの女中が出て來て、彼の寝てゐるのを怪しむ。彼は氣分がひどく悪い——ここに四ターレルある。之を皆上げるから、私が死んだら回向して呉れ等と云ふ。かうして女中に取入るとともに、益々重態に陥つて行く。顔色は青ざめ手足は冷くなる。給仕女が心配し乍ら介抱してゐる處へ、坊様が「こらお前達二人何をしてゐる」と呶鳴り込む。すると女中はオイレンシュピールが重態であることを説明し、病人の食事を作るために臺所へ去る。あとで坊様は型の如く懺悔を勧める。しかも彼はここでも相變らず坊様の言ふ言葉尻を捕へて洒落のめしてゐるのは却々面白い。そして結局他の牧師さんでなければ懺悔が出來ないと言ふと、坊様は極力懺悔の祕密が嚴守されることを誓ふ。若し彼がその祕密を漏らす様なことがあれば、彼は僧職を剝脱され教區を追放され、それを諾かなければ舌を抜かれるのである。だが此の彼の言葉がやがて彼自身を裁くものとならうとは神ならぬ身

の知る由もない。しかもオイレンシュピーゲルが女中と關係したことを告白すると、坊様は俄然我を忘れて罵り騒ぐ。オイレンシュピーゲルがすかさず前言と矛盾することを突込む。坊様は漸く自制するが、オイレンシュピーゲルが屋根裏室へ行つて休むことにしようとして立ち去るや否や、又もや彼を呪ひ、女中を呼びつける。やがて彼一言これ一言、二人の間に大喧嘩が始まる。と彼等が掴み合ひ擲り合つてゐる最中に (wie sie einander rauffen vnd schlagen.) オイレンシュピーゲルが出て来て、此の騒ぎはどうしたのですかい。ひとの安眠の妨害をして? としらばくれる。女中がお前様は何と言ふ嘘吐きだと彼に喰つてかかる。彼はそんな事を誰が言つたと訊く。このやくざ坊主から聞いたと、給仕女はまだ腹の虫が収まらない。だが彼はえたりと坊様に向つて、懺悔の祕密を洩らした罪を責めたてる。そして坊様が馬を手放すことを未だに承諾しないので、僧正に訴へてやるとばかり、出て行かうとするので、坊様も到頭馬を諦める。オイレンシュピーゲルが意氣揚々と引上げて行くと、坊様は又もや彼を悪口雑言し、給仕女に怨み言を言ふ。遂に出て行け、出て行きますと言ふことになつて、女が去らうとするので、彼は慌ててそれを停める。だが女はもう止まる氣はない。女が去ると、あとは坊様の綿々たる泣聲になる——

かうして此の劇にあつては前後四日に渡る事件が巧に一場の喜劇に壓縮され、坊様の快適な家庭的な生活が、オイレンシュピーゲルの機敏な駆け引きによつてすつかり破綻して行く様を示してゐる。否そればかりではなく各人物の感情や所作の動きを適確に把握し、それぞれの境地を鮮明に描出し、よつて以て劇的對立を構成してゐる點は、原本の素朴な散文的敘述の到底及ぶ處ではない。殊に坊様の人間性の描寫が滑稽の中心をなしてゐることから言つて、之も亦性格喜劇の一種とすることが出来る。

此のオイレンシュピーゲル劇は詩人をして同種類の民間傳説を連想

せしめたものと思はれる。その後十日にしてザックスは Ein Fasnachtspiel mit 4 personen: Der rosdiel zw Fünssing mit den dolien diebischen pawern. (フインジックの馬泥棒と愚な泥棒百姓。1553, 12, 27 N. 59.) を脚色してゐるが、フインジック (Finsing, バイエルンの村名) の村民は Abderien や Schildbürger と同様、色々な奇行愚行の持主として、ミュンヘン地方で評判の高かつたものである。従つてフインジック愚民傳から色々な綺談が作者によつて既に千五百四十六年五月二日及び四十八年四月二十七日に工匠歌として、又五十八年二月十九日には笑話詩として作詩されてゐるのであるが、此の謝肉祭劇の中に取扱はれてゐる題材も五十一年六月二十一日作の工匠歌 Der roßdieb zw Hirsaw: in dem kurzen tone des Wolfram と同一のものである。

フインジック村の村議 Gangl Dösch, Steff Löll, Liendl Fricz の三人は馬泥棒を捕へたので、早速絞首刑に處しなければならぬと言ふことに衆議一決する。處がその中にシュテッフル・レルが刑場の近くに自分所有の麥畑があつて、まだ收穫が済んでゐないから、今處刑などをしたら見物人のために畑が荒されると、異議を申立てる。リエンドル・フリッツも同様に反對するので、ガングル・デッチがでは期日を三週間延して收穫が済んでからにしようと言ふ。處がさうするとその間泥棒を食へさせなければならぬので費用がかかる。そこでレルの提案で、四週間したら必ず歸つてくると云ふ誓言を立てさせて、泥棒を一先づ放してやらうと言ふことになる。そこでその宣言を授けるためにレルが泥棒を呼び出しに行く。あとで二人の百姓がレルは村中一番の智慧者であると賞めあつてゐる。即ちここでも亦作者はオイレンシュピーゲル劇で見たと同じ様な逆効果を狙つてゐるのであつて、百姓達の間が圓滿で、彼等の計畫が賢明であるとされればされる程、後にそれが逆轉した時の印象が強められるわけである。

泥棒がその宣告をきくと、百姓達の馬鹿さ加減を嗤ふが、忽ち一計を案じ、四週間文無しでは又盗みを働かなければならず、そのために他國で捕まつてはこちらへ歸つてくることが出来ない。又乞食をして歩いてゐたら、フィンジンク村の名折れになると言ふ。かうして彼は相當の旅銀をせしめると、百姓の言ふ通り誓言を立てる。ガングル・デッチが若しもその誓言を破つて歸つて來ない様なことがあつたら、絞罪にするばかりか、その前に兩耳を切り落すがよいかと言へば、そんなに心配なら此の帽子を置いて行かうと泥棒。百姓達はすっかり安心して彼を放してやる。あとでフリッツが自分が一番の年長だからこの帽子を預かつて置くと言へば、ガングルは實に立派な解決法で、村中の者が喜んでくれるだらうと得意の様子である。三人が去るとかの泥棒が忍び足で出て來る。彼はフリッツから山羊を、レルからは青い上衣を盗み出して逃げて行く處である。

それから四週後、フリッツとデッチが泥棒の歸つてくるのを待つてゐると、ミュンヘンへ行つて來たと言ふシュテッフル・レルが出て來る。彼は例の泥棒が其處の市場で古物を商つてゐたので、青い上衣を買つて來たと言ひ、尙フリッツの山羊によく似た山羊も賣つてゐたと告げる。そこでフリッツがお前は泥棒と共謀して山羊を泥棒にやる代りに、その上衣を貰つて來たのだらうと疑ふ。だがガングル・デッチに注意されてよく見ると、その上衣と言ふのがレル自身の盗まれたものである。レルは然し泥棒から上衣と一緒に手袋をこつそり失敬して來たから、仕返しはしてあると自ら慰める。それを聽いてフリッツが泥棒が泥棒のものを盗んで來たと言ふものだから、又二人の間に喧嘩

が始まる。そして結局仲裁に這入つたガングル迄も舊惡を發ぎ立てられて、三人ともナイフを抜いて切り合ひ乍ら退場する。あとで垣根の陰から様子を窺つてゐたと言ふ泥棒の口を通じて、彼等三人がそれぞれひどい目に逢つたこと、喧嘩のあとにかの赤い帽子が落ちてゐたので彼が再びそれを手に入れたこと。之で約束通り村へ歸つて來たから赦して貰ひ度いこと等が知らされる。正に百姓達の全面的敗北であり、相變らず狡猾にして愚昧な農民を揶揄してゐる單純な茶番狂言式のものである。

然し乍らその特徴は三人の百姓によつて代表される村民達が主人公であつて、馬泥棒は單に事件を惹起する契機に過ぎないと言ふ點にある。此の事は此の劇に先のオイレレンシュピーゲル劇と同一種類の喜劇的性格を興へる。只違ふ處はオイレレンシュピーゲル劇ではオイレレンシュピーゲル自身が積極的に働きかけてゐるのに、この馬泥棒は全然受動的立場に立つてゐると言ふことである。従つて彼が悪人であつても、彼には百姓達の愚行に對する責任はなく、寧ろ百姓達の不幸は彼等自身の性格に基くものであり、従つて彼等の敗北は實に彼等自身の失態に過ぎない。されば此の劇は正しく純然たる性格喜劇と言ふことが出来る。かくしてオイレレンシュピーゲル劇を更らに一步進めるとともに、今やハンス・ザックスの謝肉祭劇も單なる物語の筋や教訓や思想そのものを對象とせず、人間性の弱點、人間の性格を主眼とするものになつて來た。この事は實にハンス・ザックスをして當時に於ける幾多の劇詩人中ユニークな存在たらしむるものであり、獨逸演劇史上不朽の名聲を享受せしむるものである。

## 第十一章 ハンス・ザックスの舞臺

一五五〇年—一五五四年

ハンス・ザックスは千五百五十年から五十四年にかけて五十五篇の謝肉祭劇を書きつゝ、その間彼の本格的劇詩に關する關心が中斷してゐたわけは勿論なし。各年毎にその要求は高きもの、五十年度では悲劇二篇 Tragedia mit 6 personen. Die enthaltung Johannis. (ハンスの舞臺 1550, 1, 15.)

Ein tragedi, mit dreyzehen personen zu recidiren. Die unglückhaftig köningin Jocasta. (ハンスの舞臺 1550, 4, 19.)

神靈川舞 Comedia: Jacob mit seinem bruder Esaw. (ハンスの舞臺 1550, 1, 31.)

Comedi mit 8 personen. Die göttin Circes, unnd hat fünf actus. (ハンスの舞臺 1550, 2, 22.)

Ein comedi, mit acht personen zu recidirn. Juditium Salomonis (ハンスの舞臺 1550, 3, 6.)

この舞臺は五十一年度では悲劇二篇 Tragedia, Judit mit Holopherne. (ハンスの舞臺 1551, 3, 17.)

Tragedia mit 12 personen. Der prophet Jeremias (ハンスの舞臺 1551, 8, 3, 7.)

Ein tragedi, mit vierzehen personen zu agieren. Der auführische Absolon mit seinem vatter, köning David; hat fünf actus. (ハンスの舞臺 1551, 10, 26.)

Tragedia mit 7 personen. Der jung stolz köning Rehabeam mit Jerobeam. (ハンスの舞臺 1551, 11, 12.)

Tragedia mit 9 personen. Die aufferweckung Lasari, unnd hat 3 actus. (ハンスの舞臺 1551, 11, 19.)

Ein Tragedi, mit acht personen zu agieren. Die falsch keyserin mit dem unschuldigen grafen, hat fünf actus. (ハンスの舞臺 1551, 11, 27.)

及び神靈川舞 Comedi. Der köning Dagobertus auß Franckreich mit des forsters kind. (ハンスの舞臺 1551, 1, 31.)

Comedia, Biancaffora mit dem pfaben. (ハンスの舞臺 1551, 4, 17.)

Ein comedi mit vierzehen personen. Die unschuldig keyserin von Rom, unnd hat fünf actus. (ハンスの舞臺 1551, 8, 31.)

Comedia mit 10 personen. Der gantz prophet Jonas, unnd hat 4 actus. (ハンスの舞臺 1551, 10, 1.)

Comedia mit 5 personen, der waldb Bruder vom heimlichen gericht gottes, zu agiren unnd hat 3 actus. (ハンスの舞臺 1551, 11, 23, 因ハンスの舞臺 1551, 11, 23.)

及び五十一年度では悲劇二篇 Ein Klegliche Tragedi mit zwölf personen zu spielen. Die zwen ritter von Purgund, hat fünf actus. (ハンスの舞臺 1552, 1, 16.)

Tragedia, mit 11 personen zu spielen. Der köning Ibbose mit sein untrewen haubtleuten, hat 5 actus. (ハンスの舞臺 1552, 2, 4.)

Tragedia, mit 13 personen zu recidirn, wie köning David sein mannschafft zelen lieb, unnd hat drey actus. (ハンスの舞臺 1552, 5, 5.)

Tragedia mit 14 personen: Die belegerung Samarie, hat 5 actus.

(カマコトの回圖。1552, 7, 6.)

Tragedia mit 11 personen. Die belägerung Jerusalem von dem assyrischen künig Senacherib, und hat fünf actus. (カマコトの回圖。1552, 7, 9.)

Tragedia, mit 15 personen zu agirn. Der wütrich künig Herodes, wie der sein drey sön und sein gnahel umbbracht, unnd hat 5 actus. (喜劇五篇の回圖。1552, 11, 2.)

及の喜劇一篇 Comedi mit 5 personen. Der alt reich burger, der seinen sünen sein gut ubergab, und hat 5 actus. (喜劇五篇の回圖。1552, 7, 22.)

Ein comedi, mit zwölf personen zu spielen. Der ritter Galmi mit der herzogin auß Britanien, hat sieben actus. (喜劇五篇の回圖。1552, 12, 24.)

及の喜劇五篇 Tragedia, mit 15 personen zu recedieren. Die kindheit Mose, hat 5 actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 1, 26.)

Tragedia mit 23 personen. Von der strengen lieb Herr Tristrant mit der schönen künigin Isolden, unnd hat 7 actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 2, 7.)

Tragedia mit 22 personen. Der Fortunatus mit dem wunschuet, und hat 7 actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 3, 4.)

Tragedia mit 14 personen. Der priester Eli mit sein ungeratenen söhnen. Hat fünf actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 8, 27.)

Tragedia, mit neun personen zu agiern. Die opferung Isaac. Hat 3 actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 11, 4.)

及の喜劇五篇 Ein comedi, mit acht personen zu recitieren. Die Abigayl, und hat V actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 1, 4.)

Comedia mit 10 personen. Der David mit Batsaba im ehbruch, unnd hat fünf actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 10, 4 ?)

Ein comedi, mit zehen personen zu recidieren. Mucius Scevola, und hat vier actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 10, 5.)

Comedia. Die ungelichen kinder Eve, wie sie gott, der herr, anredt; hat XIX person unnd fünf actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 11, 6.)

Comedi mit 11 personen, Von dem ehrenvesten hauptman Camillo mit dem untrewen schulmeister in der statt Valisco, und hat 3 actus. (喜劇五篇の回圖。1553, 12, 8.)

及創作の回圖。ただ五十四年と記しては漸く悲劇一篇の創作の回圖。1554, 1, 2.)

Tragedia mit 14 personen. Die mörderisch künigin Climestra, und hat 5 actus. (喜劇五篇の回圖。1554, 1, 2.)

Tragedia mit 13 personen. Die zerstörung der statt Troya von den Griechen, unnd hat 6 actus. (喜劇五篇の回圖。1554, 4, 28.)

喜劇一篇 Comedia mit 7 personen. Persones, die künigin, reit den philosophum Aristotelem, und hat 5 actus. (喜劇五篇の回圖。1554, 1, 20.)

に低下してゐるが、それも翌年五十五年以後の目醒しの活躍振りを見る時、此の方面に於ける作者の詩才が衰へたことを意味するものではない。然し乍ら執れにしても、此の期間は作者にとつて謝肉祭劇創作の時代であり、作者の創作力は彼の長年の経験と、時代の要求によつて自ら謝肉祭劇に集中されてゐたから、以上三十七篇の悲喜劇が劇的價值から言つて、謝肉祭劇より見劣りがするのも争はれない事實である。と言ふのも作者の戯曲創作の第一の意圖は、謝肉祭劇の場合にも増して、悲劇又は喜劇そのものの純粹な劇的效果を狙ふよりも、そ

の内容の持つ教訓的意義を鮮明にし、よつて以て市民道徳を啓蒙するにあつたからである。この事は勿論作者自身の持論でもあつたけれども、亦十六世紀の獨逸演劇が學校劇を中心に發達したこともよつてゐるのであつて、ニュルンベルクに於ても商工組合員の演劇が學校劇と一種の競争意識を以て行はれたからである。従つてザックス劇の取材範圍も前掲の如く、聖書物語と古代傳説とに限られてをり、その取扱法も作者自身の穩健な人生觀と相俟つて、極力人心を教化するに役立つことを主眼としてゐるのである。

かくて謝肉祭劇に於てはより自在な構想力を發揮した作者も、戯曲を創作するに當つては極めて慎重な制約された立場を取らざるを得なかつた。殊にそれらの大部分が上演されたものであり、又上演の場所が市政府の許可を要する教會内であつたことを考へる時、その内容が出来る丈勸善懲惡的に、その脚色は努めて簡單明瞭にならざるを得なかつたであらう。此の意味に於て作者は謝肉祭劇と詩劇との題材と目的とをそれぞれ明確に區別して意識してをいた。即ち千五百六十一年八月十六日に書かれた Vorrede in das dritt und letzt buch der Gedicht (作品集第三卷終卷序言) の中へ、彼は

Nun diß mein dritt und letztes Buch hab ich auch in drey theil abgetheilet, zu erst die geistlichen spiel, auß altem und newem testament, figur, geschicht der könig und propheten, auch evangelia und ander geistlich materi, dardurch die gotseligkeit, forcht und liebe Gottes inn die hertzen ein zu bilden unnd pflanzen; der ander theil weltlich, alt histori, auß den poeten und geschichtschreibern, die zu anreizung der guten tugent unnd zu abschneidung der schendlichen laster dienstlich sind; zu dem dritten, die fabnachtspiel mancherley art, mit schimpfflichen schwencken gespicket (doch glimpfflich ohn alle untzucht), die schwernütigen hertzen zu freuden

ernunden.

(右譯。處て此の第三最終作品集をも、余は三部に分けたり。第一部は宗教劇にして新約舊約の聖書、諸王豫言者の人物、物語、又は福音書その他宗教的題材から取材し、よつて以て神の淨福、敬神と神の愛とを人の心に形成し函養するにあり、第二部は世俗劇、即ち詩人及び史家から取材せる古傳説なり。之はよき徳行を奨勵し、恥べき悪行を斷絶するに役立つためのもの、第三部としては各種の謝肉祭劇にして、滑稽なる笑話を盛り(されど穩健にして何等卑穢なる處なし)悲しめる人の心を勵し樂しませるものなり。)

と言つてゐるのである。之はとりも直さずザックスが謝肉祭劇を娛樂用とし、詩劇を教化用として取扱つてゐることを明瞭にしてゐるのみではなく、劇詩を更らに取材の上から二種類に分け、聖書に基くものを宗教劇として正しい信仰を布教するためのもの、又古代傳説に基くものを世俗劇として世道人心を啓發するためのものとしてゐることを示してゐる。更らに作者は同じ序言の中で、「それらの戯曲の大部分は自演し又は助演したものである」(weil ich sie den meisten theil selb hab agieren unnd spielen helfen,) と言ひ、又そこには「凡ゆる種類の人物、善人も悪人もそれぞれその性質に應じて極めて特異に念入りに描かれてをり、彼等の身振り言行、登場及び退場も指示されてゐるが故に、此の巻は讀んで益あり興味あるのみならず、此の種の芝居又は狂言を演ぎんとするものも、此の巻によりてさして勞することなくその思を遂げうるべし。されば既にその中の一部は二三の王侯により又は自由市に於て演ぜられ、觀客を樂しませ驚かせたり」(Auch sind sie manigfaltig allerley person, gut und böß, ein jede nach irer art, auff das eygentlichst und feissigst dar gethan mit iren gebärden, worten und wercken, eingängen und außgängen angezeigt, das also diß buch nit allein nutzlich und gut zu lesen

ist, sonnder auch, wer lust hat, solche comedi oder spil anrichten wolt, gar mit leichter müh aus diesem buch bekommen möcht, welche auch zunn theil vorhin in eiflichen fürstn und reichstetten mit freunden und wunder der zuseher gespilt worden sindt.)

と言つてゐる處から見て、それらは明かに上演用のために書かれたものである。

然らばそれらの脚本は誰によつて如何なる舞臺で如何様に上演されたか？

此の問題に就つて Max Herrmann (cf. Forschungen zur deutschen Theatergeschichte des Mittelalters und der Renaissance. 1914.) が極めて詳細に科學的に考證してゐる。次いでその結論が Albert Köster (Vgl. Die Meistersingerbühne des 16. Jahrhunderts, ein Versuch des Wiederaufbaus. 1920.) によつて反駁されるに及んで、更にクルムンの公開狀 (Vgl. Die Bühne des Hans Sachs, ein offener Brief an Albert Köster, 1923.) が發表され、それを又ケスターが皮肉に辯駁 (Vgl. Nr. 112 des Jahrgangs 1923 der Deutschen Literaturzeitung und Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte, Bd. 1. S. 557—581.) すればクルムンも再度辛辣な解答 (Vgl. Noch einmal: die Bühne des Hans Sachs, 1924.) を與へると言つた激しい論戦が行はれた丈に、多くの重要な點が今日興味深く解明されてゐる。だから以下は兩者の見解に私見を加へて問題の解決に當ることとする。

處で論戰の對象となつた第一の點は勿論上演された場所であるが、之を決定するに當つて最も重要な資料となるものは、今日ニュルンベルク市役所に残つてゐる當時の市役所の議事録 (Katsprotokolle. Vgl. Th. Hampe. Die Entwicklung des Theaterwesens in Nürnberg, 1900.) であつた。そして此の記録によると問題の時期、即ちハンス・ザックスの劇詩創作時代千五百年から六十二年迄の間は、ニュルンベルク市の

Marthakirche にその舞臺が設けられたことを推定し得るのである。先づ千五百五十一年一月五日の記録に、

Desgleichen sol denen, die bei sant Martha ain comedi halten wollen, dasselbig doch auch nur am feirtag nach der predig und dieselbig kirchen darzu zu gebrauchen vergönnt werden, weil sies fernt (d. h. im vorigen Jahre) auch gepraucht haben. (同様にマルタ教會で芝居を演ぜんとする者共にも休日に関り説教後に同教會を使用することを許す。彼等は昨年も同所を使用したればなり) とあり、次いで同年一月十五日には

Daneben erkundigung tun, was Hans Sachs für ain spil hab, solichs widerpringen. (その他ハンス・ザックスが如何なる芝居を有するかを調査し、それを返却すること) 及び同年一月十九日には

Hans Sachsen auf die beschehen erkundigung sein spil vom abt geperen und mein herrn zu nachtril kumen möcht, weiter ze treiben mit guten worten ablahnen. (調査せる結果、芝居は僧正と僧正を捕へし貴族との芝居にて、外部に於て種々なる風評を生み、當地の貴族の名譽を害する恐れあれば、ハンス・ザックスに爾後演ぜざるやう懇談し拒否す。) と言ふ記事があるが、以上三ヶ所の記録を照合すると次の如き推定が成立する。それは、千五百五十一年の年頭にマルタ教會で芝居を演じた人達があり、彼等は前年同様にそれが許可されたこと、即ち五十年にもマルタ教會が舞臺として使はれたこと、その人達が一月五日に許可を得て一月十一日の日曜日 (休日) に芝居を演じた處が、それが世間の物議を醸したので、市政府は十五日に脚本を調査し、恐く十八日の日曜日の實演を見て、遂に十九日に公安を害するものとして禁じたこと。だからその人達と言ふのはハンス・ザックスを代表とする工匠歌人の劇團であつたこと、上演された脚本はザックス



作の謝肉祭劇「湯治」(Der Wildbad. 1550, 12, 17. Nr. 27. 前述)で、それが二回日曜日に演ぜられた上で「爾後演ぜざる様拒否」されたこと等である。事實此の年(五十一年)にザックスの謝肉祭劇「湯治」が演ぜられたことは、ザックスの千五百五十一年三月六日作の工匠歌に Die 27 Spil des schmidein, in Römern gesangweis (シハミットラインの演じた二十七の芝居)なるものがあつて、その第三節に Nach dem ich erst ein rewtter wuer/Vnd halff ein abt Selb fangen und auch paden. (その後て私は先づ侍になつて、僧院長を捕へて水浴させる手傳をした。)と歌つてゐるのでも知られる。即ち此の文句はシハミットラインなる俳優がかの謝肉祭劇中の Wursthans か Schramm-fritz の役を演じたものでもあつてを告げてゐる。しかも此の工匠歌は續けて Nach dem wart ich ein marschalck nur / Vnd ein hoffschmaichler, pracht herschaft zw schaden. (その後て私は大臣となり又佞臣となつて主人に害を加へた。)と歌つてをり、此の二役は千五百五十年四月十九日作悲劇 Jocasta, die unglücklich künigin (不幸な女王ヨーカースタ委細後述)の中の Nicias 及び Sathanus のことである。だからマックス・ヘルマンは五十一年に此の「ヨーカースタ劇」が「湯治」の禁止された後に、マルタ教會で上演されたものであると推定してゐる。かくして五十年以來マルタ教會が用ひられたものとすれば、その後五十二年の記録に、同年二月八日附を以てハンス・ザックスに Die unschuldig Keyserin von Rom (貞節なるローマの皇后。1551, 8, 31. 後述)の上演が許可されてをり、五十三年度の記録には十二月八日附で、彼に Mincio Scevola der roemer. (ローマの市民ムチウス・スケヴォラ。1553. 10, 5. 後述)が許可され、同様に五十六年一月中旬にも彼及びその他の請願者( Hans Sachsen und den andern ansuchenden personen) 謝肉祭途の間芝居を演ずることが認められてゐるのも、その上演場所はマルタ教會であつたと考へられる。その後

五十七年一月二十六日には引き續き Jörgen Fröhlich と云ふ刀鍛冶(Messerschmied)と Hans Adam 云々挿繪書( Briefmaler)の請願によつてマルタ教會で芝居の上演が許され、(26. Jan. 1557: Den ansuchenden briefmalern und messerem soll man ire spil bis kunftigen sonntag bei sant Martha zu halten zulassen.) 翌二十七日附でハンス・ザックスにも許可されてをり(27. Jan. 1557: Hansen Sachsen soll man seine spil zu halten zulassen. 因に此の場所が銘記されてゐないが、次の記事でブレディガー僧院であつたと思はれる)次いで同年二月六日附で、ハンス・ザックスに對し Predigerkloster てまだ説教が終らなう中に芝居を始めたことが嚴重に警告されてゐる。(6. Feb. 1557. Hans Sachsen soll von ratswegen ernstlich angesagt und bei eins rats straf auferlegt werden, ainich spil im predigerkloster zuvor und ehe die predig gar aus ist, zu halten, noch jemand hinein zu lassen.) 即ち五十七年にはヨルゲン・フレイリッヒとハンス・アーダムの名前でマルタ教會に舞臺が設けられ、ハンス・ザックスの名前でブレディガー僧院の食堂(Renter)が使用されてゐるのであるが、前二者は工匠歌人としてハンス・ザックスの指導下にあつた人達であり、又彼等の演じた芝居はハンス・ザックスの作品であることも記録に散見してゐるから、ザックスの自演又は助演は五十七年に至つてマルタ教會とブレディガー僧院の食堂と二ヶ所に擴張され、數曲が上演されたものと考へられる。そして此の状態は實にザックスの劇創作がほぼ終熄してゐる六十一年迄續いてゐる。されば五十六年及び五十七年度のザックスの作品數が最も多數に登つてゐるのも又當然のことである。何れにしても工匠歌人達の演劇は五十年以來年頭から謝肉祭の頃にかけて漸く定期的行事となり、特に五十六年以後六十一年の間に於てハンス・ザックスの創作、演技、演出活動は最も盛んであつたとすることが出来る。

然し乍ら他面に於て市政府の取締り檢閲も亦次第に嚴重になつて來

た。既に見た通り五十一年には「湯治」が上演禁止になつたが、五十二年一月二十五日にはハンス・ザックスその他の者が如何なる事件、如何なる物語を演ずるかを調査すること、従つて何分の沙汰がある迄芝居を上演してはならない旨が通達されてをり、その他教會の説教が濟まない中に芝居を始めたり、人を入れたりしない事、入場料を餘り高くしないこと、教會内の器物を毀損しないこと等の注意が與へられたり、千五百六十年一月十八日にはヨルゲン・フレイリッヒ及びその仲間マルタ教會で芝居をすることを許すとともに、ハンス・ザックスに對して此の種の芝居を書くに當り、いくらか慎重にするやうにと警告が發せられてゐる。勿論當時芝居の上演を願ひ出たものは毎年數組に昇り、その上演場所も Clarakirche, St. Lorenz, Rathaus, Frauenbrüderkloster, Haisbrunnhof, Augustinerkloster, Spitalkirche, Der Goldene Schwan 等があつた。(Vgl. Köster, Die Meistersingerbüchne, S. 6.) 市政府の監督も自ら嚴重にならざるを得なかつたのであらう。

扱て工匠歌人舞臺が設けられたと云ふマルタ教會は千三百六十年 Pülgerspital 附屬の教會として建立され、千六百十五年、千七百二十九年特に千八百六十五年に改造されて今日に及んでゐるゴシック式建築であるが、ニールンベルク市に新教が布教されて以來、千五百二十六年最後の勤行が行はれた後、祭壇や聖畫彫刻等は舊教時代そのまま据え置かれたけれども、宗教儀式は最早や行はれず、説教所として復活したのは漸く十七世紀になつてからであつた。(Vgl. Herrmann, Forschungen, S. 16. f.) 従つてハンス・ザックス時代のマルタ教會は教會としては使用されてをらず、又今日の構造とは著しく相違してゐたけれども、しかもそれは神聖の場所であり、市政府の監視もあつたから、彼が其處で自作を上演するためには、作品の内容を此等の事情に應ずる様に慎重に考慮する必要があつた。かくて若し作者が此の教會

に設けるべき舞臺を考慮に入れて、劇創作をしたとすれば、當時に於ける教會の内部構造と五十年以後のザックスの作品の脚色振りとは密接な關係があり、兩者を照應すれば、マルタ教會の工匠歌人舞臺を今日再構成して見ることが出来るかと考へられる。だからヘルマンとケスターの論争の第二は、この教會の内部構造が十六世紀中葉如何様のものであつたか、そしてその構造を利用して如何様に舞臺が設置されたかに係つてゐる。

然し乍ら曩に掲げた五十年から五十四年度にかけて創作された三十七篇の劇はまだ敘事的對話によつて筋が運ばれてゐるのみで、劇的所作に對する考慮が餘り拂はれてをらず、殆ど凡て一定の型に填つた構成を持つてゐる處から見て、頭初は舞臺装置もまた謝肉祭劇風に簡單なものであつたと推定される。それが年毎に役者の演技も上達し、新工夫も考案されてくるに従つて、舞臺に對する要求も多くなり、五十五年度邊りから次第に複雑な舞臺設備が施されるやうになり、工匠歌人舞臺は更らに一段と飛躍して行つたと思はれる。此の意味に於て今マルタ教會で演ぜられたことが明かな作品中、その初期のもの、即ち「不幸な女王ヨーカースタ」(前掲)を取つて、當時のザックス劇と舞臺とを檢討して見ることにしよう。

先づ口上役が登場して言ふ。(Der ehrenhold tritt ein und spricht) とある。即ちザックス劇にあつては必ず口上役が冒頭に登場してゐるのであるが、(只一曲 Der Waldbruder vom heimlichen gericht gottes——隱者と神の秘密裁判——1551, 11, 23. に於て口上役の代りに隱者自身が序辭を述べてゐる) 茲で彼が觀客に向つて挨拶する言葉には、先きに見た喜劇「ヴィオランタ」(1545, 11, 27.) の場合の様に、「御主人様やその御客様方、御奥方様御姫様方」(Heyl unnd glück sey euch ehrenften/Herrn, dem Wirt unnd seinen gessen/den züchtling frauen und junckfrawen!) の御機嫌を伺ふ文句がない。と言ふことは此の劇が

最早や私人の宅や料亭へ招かれて演ぜられたものではないことを示してゐる。それから彼は芝居の内容を簡潔に紹介し、観客に靜肅に觀覽するやうに要求して、一端退く。と言つても彼が口上を述べたのち退場したことは別に記してあるわけではないが、その次の卜書に「ライウス王、口上役と二人の従者とともに入場、腰を下ろして言ふ」(König Layus get ein mit dem ehrenhold und zweyen trabanten, setzt sich und spricht)とあり、又彼の臺詞の最後が三行同韻(Dreitrein)になつてゐることによつて知られる。と言ふのがザックスの詩句は悉く一行八綴四高揚音二行階韻の所謂 Krittelsvers であるが、千五百三十年二月三日作「パラス女神德行を、ヴェナス女神快樂を辯護す」(前述)の第一幕と第二幕の幕切れに用ひられて以來、幕が變り、登場人物が凡て舞臺を去る時に限つて、その最後の臺詞には此の三行同韻が用ひられるのが殆ど通則の如くなつてゐるからである。(Vgl. Max Fernann, Sticheim und Dreireim bei Hans Sachs und andern Dramatikern des 15. und 16. Jahrhunderts. Nürnberg, 1894. S. 30 f. 尙ザックスの詩形を關しては Reimbrechung und Dreireim im Drama des Hans Sachs von Dr. Rachel, Freiberg, 1870; Sticheim und Dreireim bei Hans Sachs von Jacob Minor in Wien, 1897. 参照)

扱てライウス王が入場して腰を下ろす處から第一幕が始まることになる。だから此の舞臺では椅子がそれより先に用意されてゐたか、又は従者の一人が持参したことが知られる。何れにしても王様の様な身分の高い者は特殊の場合を除いて凡て坐つて物を言ふ様になつてゐるが、之は逆に言へば、坐つて科白を言ふ事は身分の高い者であることを示す舞臺上の約束であつたことが出来る。

ライウス王はヂュピター神によつて授けられた王權に對し神の徳を稱へ、ユーノー神には妃ヨーカースタの胎内に出來た子供が男子であるやうにと祈り、口上役に命じて、妃の様子を尋ねさせる。口上役が去

ると、王は従者の一人 Demas に武術試合の準備が出來てゐるかどうか見て來るやうにと命ずる。かくて「従者デマスは退場。口上役歸つて來て言ふ」(Demas, der trabant, geht ab. Der ehrenhold kommt wider und spricht.)とあり、彼は男子出生の由を報告する。王は兩手を合せて喜びの意を表すとともに、他の従者 Linus に、城の屋上で祝の煙花を打ち上げて全國に吉報を告げさせようとする。リヌスがお辭儀をして去ると、王は更らに口上役に向つて、廣間を飾り祝宴の用意をする様に命ずる。口上役が去る(Der ehrenhold geht ab.)と、王は今度は兩手を擧げ目を天に向けて、ヂュピター神に生れた子供の未來を豫言して貰ひ度いと祈る。するとメルクルが來る。(Der Gott Mercurius kommt.)そしてわれは神々の使者メルクルである。神々の決議で、汝の子はやがて汝を殺すことに定められてゐると告げて去る。王は烈しく悲嘆して、折りから歸つて來た先の従者デマスに、指輪を與へ、それを證據にして妃から子供を渡して貰ひ、直ちにその子を遠く山の中へ捨て、野獸の餌食にするか、自分の手で殺すかするやうにと命ずる。デマスは悲しみ乍ら、命を受けて出て行く。あとで王は子供の手に懸つて死ぬ位なら、子供を殺した方がよいと獨語して、自ら慰める。とそこへ子供の心臓を刀に刺したデマスが歸つて來て、使命を果したことを報告する。王は嚴重に祕密を守るやうにと命ずる。デマスがそれを約束してゐる處へ、口上役とリヌスが歸つてくる。王が口上役に妃の様子を尋ねる。口上役が妃の悲嘆してゐる様子を物語るのに、王はでは皆の者、妃を慰めに行かう。何故始めての男の子を殺さなければならなかつたかを話したら、妃も諦めるであらうと言ふ。その最後の詩句三行には同韻が用ひられてゐる。かくて一同退場。第一幕は終る。これによつて見ると口上役は必ずしも序辭と結辭とを述べるばかりではなく、王侯の宮殿では一種の傳令官(Der Herold 又は式部官)のやうな役を演じたことが知られる。

第二幕。コリント王アトローテス (Der König Athletes von Corint) が大臣ニキアス (Nicias, der marschalck) と二人の従者とを連れて入場。彼は例の通り腰を下ろしてから、昨夜命じておいた様に、今朝早く狩に出たかどうかと訊く。大臣ニキアスが夜の明けないうちに狩に出たから、もう皆が歸つてくる頃ですと言つてゐる處へ、一人の獵師 (Der Jäger) が子供を連れて来る。彼は森の中で赤兒を拾つたと言つて、王にその子供を捧げる。王は赤兒を抱いて、自分のあり相な子供だ Edippus と名付け、自分の子供にして育てようと言ひ、ニキアスを子供の養育係にする。ニキアスが喜んで引き受けると、王は皆を誘つて、朝食の席へと出て行く (Sie geht alle auss.) 場面變つてライウス王は武装してヨーカスタと入場、王はフェニキア人 (die Phenicer) とコリント王との間に戦端が開かれ、王自身フェニキア軍を助けるために出陣しなければならなくなつたと言ふ。王妃はそんな危険を冒さない様に、他國の争に何の係りがありませうと諫める。然し王は嘗つてフェニキアに助けられたことがあるから、今度は助けてやらなければならぬと言ひ、王妃と相抱き別れを惜しんで出て行く。あとに一人残つた王妃は、十八年前には息子を失ひ、今又夫を戦場に出すこととなつた。夫も最早や歸らないであらうと嘆き、デュピター神に王の凱旋を祈るため、神殿へ急ぐ。舞臺は又一轉して、コリント王アトローテスの城中。王は大臣従者を連れて入場。フェニキア軍とテーベの王ライウス (Layus der König zu Theba) に對して、我軍は誰を總大將にしたらよいかと問ふ。ニキアスが自分の育てたエディプスにしくものは無い。既に武装してあすこにやつて來ましたと答へる。そこで王はエディプスを呼んで、總大將に任命する。エディプスが畏んでそれを受ければ、王は軍隊も既に出陣の用意が出來てゐるからと言ひ、皆々を連れて退場。ここで又王の最後の詩句三行は同韻である。以下幕切れごとに同斷。

第十一章 ハンス・ザックスの舞臺

此の第二幕は三場から成り立つてゐるわけであるが、第一コリントの場と第二テーベの場との間には十八年の間隔がある。しかもそれが一幕の中に收めてゐるのは一見した處、劇的效果を顧みず、只古典劇の型に従つた丈で、幕分けの意味を十分に理解してゐないことを思はせる。然し之を物語の筋全體の上から見れば、此の幕はエディプスのコリント滞在時代を一纏めにして脚色したものであつて、此の幕の切り方が必ずしも無意味であるとは言はれない。何れにしても上演の際には幕の切れ目と場面の切れ目とに大した差異はなく、幕を引くとか幕を下すとか言ふことはなかつたのであらう。だから幕の終りには、特に三行同韻が用ひられて、その間の區別を明かにしてゐるわけである。

第三幕。エディプスが武装して従者一人と入場。彼が今や戦備も整つた。マルスよ、戦勝を授け給へと祈ると、従者 Timus が敵も既に戦列を立てて攻撃に移らうとしてゐるのを認める。そして敵方の大將ライウス王が近づいて來ると告げる。言葉に違はずライウス王が従者をつれて登場 (Der König Layus tritt auf mit seinen trabanten.) 二人の大將は互に名乗りを擧げて、一騎打ちとなる。即ち「各大將はそれぞれ従者から甲冑を受け取り、互に長い間戦ふ。」 (Hie nimt jeder hauptman harnisch und rundel von seinen trabanten, kempfen lang mit einader.) と卜書にあるから、此の立ち廻りは、既に「六人の闘士」で經驗済みのものであり、役者の見せ處であつたであらう。遂にライウスは重傷を負ひ、従者デマスに「あゝ、わしを連れて行つてくれ。わしは深傷だ。死神の手に搦め捕られない中に」 (Ach, für mich ab, ich bin todwund, / Eh mich verstrick des todes bund!) と頼む。かうしてライウス王が連れ去られるのは、死者を舞臺に残さない用意である。と言ふことは又死者を舞臺に残すと、あとでその死體を取り片付ける必要があり、それが不自然な感じを與へると考へられたことを

意味する。かくてエディプスは砲門を開き總攻撃に移るやうにと命じ、敵の大將を打ち取つたからには、勝利はこちらのものだと、従者とともに急ぎ足で退場する。

次いでヨーカースタが入場。彼女はライウス王の安否を氣遣つて寢食を忘れ、晝夜を分たず心痛してゐると言ふ。そこへ口上役が手紙を持つて来て叩頭する。彼は王の戦死と敗戦の報告をし、自分も捕虜になつたこと、然しコリント王が女王ヨーカースタに深く同情し、エディプスと再婚してテーベの國を治めるやうにと言つたこと等を傳へる。女王は只管夫の死を嘆き悲しむばかり。それを口上役は色々に言ひ慰め、コリント王の命に背けば國は亡びると言つて、手紙の返事を書く様に勧める。そこでヨーカースタは退場する。がすぐ又返事の手紙を持つて出て来る。(Sie geht ab und kommt doch bald wider mit einem Brief.) 彼女は再婚することを承諾はしたが、どうして今更ら新しい夫を持つことが出来ようかと後悔するのを、口上役が慰める。だが彼が返事を持つて去つた後も、彼女は両手を握ち合せて、亡き夫のために泣き悲しんでゐる。とそこへコリント王アトレテスがエディプスと二人の従者を従へてくる。王はヨーカースタの返事を聞いたから、此のテーベの國へ来たと言ひ、彼女とエディプスの結婚を勧め、數ヶ國を婚資として贈る。ヨーカースタも父とも仰ぐ王の御言葉であればこそお仰せに従ひますと言ふ。そこで王は二人を自分の前に立たせ、兩人の手を結び、彼等の結婚を祝福する。それから一同に向つて盛大に祝宴を張り戴冠の式を行ふことを命じ、皆々整列して退場する。(Sie gehen all in der ordnung aus.)

以上の幕は二場から成つてゐるが、第一場でライウス對エディプスの血闘が實演されてゐるのは、舞臺効果を狙つたもので、既に前例もあり、却々要領よく脚色されてゐる。之に反して第二場では時間と空間の關係を無視してヨーカースタとエディプスが結婚する迄の經路を描

いてゐるために、甚だ不自然な感じがする。ことにヨーカースタが退場して直ぐ又コリント王へ宛てた返事の手紙を持つて歸つて来るのは餘りにも時間關係を無視した脚色振りである。だから後になると此の種の不自然さを避ける方法が構ぜられるやうになつてくる。

第四幕。エディプス王は口上役と二人の従者を連れて入場。あとの三人は直ちに退場し、王丈が腰を下ろす。王は國威益々揚り、一家又繁榮、幸運に缺ける處がないけれども、只一つの悩みは自分の素性が知れないことであると嘆息する。彼はコリント王に拾ひ上げられた當時のことを述べ、デュピターにわが生みの親を知らせ給へと祈る。するとメルクルが現れ (Mercurius, der Gott, kommt.) その様を愚な願はよしたがよい。半年経たない中に真相が判るであらうと告げる。

メルクルが去るとヨーカースタが来る。彼女は王の悲し相な様子を見て慰める。此の十五年の間平和安穩に過し、男子二人女子二人の子迄授かつてゐるのに、何をその様に悲しんでゐられのかと。王は此の事丈はお前にも言はれないと答へて、會議に出て行く。獨りになつたヨーカースタは夫が何故に惱んでゐるのかと、デュピターに伺ひを立てると又メルクルが現れて、汝の夫は汝の息子であると告げて去る。それを聽いて王妃は両手を握ち合せて苦悶する。彼女は神々に向つて、この前代未聞の醜聞を嘆き訴へ、身も世もあらず悲しむ。そこへエディプス王が来る。彼は王妃の様子に驚き、先きにはあの様に機嫌が宜かつたのに、今此の様はどうしたのかと問ふ。王妃は今恐ろしい話を聽いたのだと言ふばかり。ふと王の頸に掛けてある寶石を認めて、それに手をかける。王様、ここに下げてゐられる此の寶石はどこから出ましたかと彼女。生れた時から身に付けてゐたものとエディプス王とヨーカースタは両手を打ち合せ胸を打つて絶望の體。「悲しや、これは何としよう。あなたは私の實の子。此の寶石は私があるに上げたもの」とエディプスの生れた時の話をする。王もその恐ろしい事實に

驚き、それでは母と寝ね、父を殺したかと懊惱する。もし王笏も王冠も捨て、國土も妻子も見限り、我と我が兩眼を剝り取つて、行方へも告げずに出て行く。あとでヨークスタは兩手を頭上で打ち合せ、運命の悪戯を怨み嘆いてゐるが、聽て、まだ子供が幼いから、國政を見なければならぬと言つて、悲し想に退場する。

此の幕はさすがに緊密に引き締つてゐる。勿論メルクルが現れて簡単に神託を告げてゐるのは、安易な脚色法であるが、しかも一回目では祕密を明かさず、一回目で漸く真相を教へると言つた技巧は、甚だ効果的である。尙ここでは悲哀絶望を現すために色々な所作が示されてゐるのも注目し得る。即ちヨークスタは兩手を振ぢ合せ (wint ihr hend) 悲し相に坐り (trawrig sitzen) 溜息して物を言ひ (spricht seuffzent) 兩手を打ち合せ (schlecht ihr hend zamen) 胸を打ち (schlecht an ihr brust) として悲し相に退場する (geht trawrig ab) のである。

第五幕はヨークスタの二子 Joristes と Foristes とが相續争ひをする場である。兄のヨリステスは自分が一國を支配し、弟に伯爵の位を與へようと言ひ、弟のフロリステスは二人と一緒に國を支配するか又は二等分すべきだと言つて譲らない。兄は民衆の支持があり、弟は貴族に人望がある。遂に二人は刀に手をかける迄になる。(Sie greiffen beyd an die wehr.) そこへヨークスタが来て、二人を制する。國政はまだ彼女の掌中にある。何れ彼等が政治の出来る年頃になれば國を分配するかしないかを決定するが、それ迄は仲好くして待つ様にと言ふのである。兄弟は和解を誓ひ合ふ。そしてフロリステスは母に促されて夕食の席へ、母とも去る。すると Sathans なる佞臣 (Der hof-schmeichler) が来る。彼は兄ヨリステスを呼び止め、弟の陰謀に欺されぬ様にと忠義顔。そして民衆は彼の味方だから、早く弟と戦へと使喚する。ヨリステスは彼に金を與へて、彼の勞を謝する。ヨ

リステスが去ると、サタヌスは兄弟二人を互に喚<sup>レ</sup>けて、兩方から報酬を貰ふのだと獨語する。彼が退場すると、フロリステスが武装して入場、兄が自分を亡ぼさうとしてゐると警告してくれるものがあつたから、こちらから先馳けするのだ。貴族達は自分に加擔してゐるから、恐れることはないと言ひ。そこへヨリステスが之も武装してやつて来る。兄は傲然と (trutzlich) 挑戦する。弟も劍を抜いて應戰する。やがてフロリステスが逃げる。ヨリステスが「逃げるか！ 止まつて勝負をしろ！」と呼ぶ。弟が踏止まつて又戦ふ。そこへ口上役が馳けつけて来る。彼は大聲で二人を制止するけれども、二人は互に突いたり切つたり、長い間追ひつ追はれつして、遂に何れも倒れ伏す。(Sie stechen und hawen auf einander, treiben einander lang umb, endlich fallen sie beyd darnider.) 此の時ヨークスタが来る。彼女は口上役から事の次第を聽いて、頭上で兩手を打ち合せ嘆き悲しむ。遂に絶望の餘り自刃して果てる。(Jocasta sticht sich und fellt.) かくて口上役が結辭を述べる。(So beschleunigt der ehrenholdt.) 即ち此の物語には (Bey dieser Histori) 五つの教訓が見られる。第一には如何に人間が賢くても、神慮に背くことは出来ないから、神の掟には従はなければならぬこと、第二には人の運命が如何に儂いものであるか、第三には不幸は相次いで来るものであり、十字架こそ魂の醫藥であること、第四には人は凡ゆる慾望を謹まなければならぬこと、第五には支配者は奸臣佞臣の言葉に耳を傾けてはならない事、之である。

勿論此の劇はソフォクレスの悲劇とは、その結構に於ても氣品に於ても到底比べるべくもないが、十六世紀の丁度半ばに、工匠歌人劇が漸く舞臺劇として確立されて來た頃の典型的作品として見る時は、甚だ興味深いものがある。劇は必ず口上役の序辭で始まり、結辭で終る。序辭では觀客に對する挨拶に次いで、ごく簡潔な劇物語の梗概が紹介

され、結辭では劇中の主要な人物又は事件の教訓的意義が第一第二第三と簡條書きにして説明される。劇の内容そのものは、作者自らかかの作品集第三巻の序言で言つてゐる通り、物語の筋を「始め、中、終りと事件が目の前に起つてゐるのを見る様に、出来る丈明瞭に示すために」(auf das deutlichst an tag geben mit anfang, mittel und endt, samb man die augenscheinlich im werck sech gesehen)登場人物の對話と所作によつて、忠實に物語の各段階を追うて行つてゐるが、しかも多くは敘事的對話であつて時間空間の關係を無視し、劇的統一を缺いてゐる。その最もよい例は此の劇の第五幕であるが、作者の意圖はエディプスの運命ではなく、ヨーカスタの悲劇を示し、そこから大きな教訓を引き出すことであつたから、彼女の一家が亡び、彼女が自刃して果てる處迄寫さなければならなかつたのである。殊に此の劇の原本はかの有名な希臘の悲壯劇そのものではなく、口上役の序辭にある通り、歴史家 Ovidius (作者の所蔵本は P. Ovidii Nasonis Metamorphosis. — Erwan durch M. Albrechten von Halberstadt im Reime weisz vertauscht. Jetzt erstlich gebessert etc. durch Georg Wickram zu Colmar. Mainz. Jvo Schöffer. 1545) 及び Johannes Bocatius (作者の所蔵本は Die 99 durchleuchtung frauen, Deutsch durch Steinhöwel. Neudruck: Bibl. des Litt. Vereins Nr. 205) の物語であつたとすれば、兄弟の不和が漸次悪化して、遂に一家全滅するに至る経路を此の様に要領よく、しかも甚だ活劇的に一幕に纏めることが出来たのは、作者にとつても観客にとつても十分満足すべきものであつたと思はれる。と言ふのも當時の作者も観客も物語に一應筋道が立ち「事件の初め、中、終りが目の前に起つてゐるのを見る」ことを主眼としたからである。何れにしても作者は一方に於て舞臺經濟のために場面を極力壓縮し簡單化する必要があり、他方に於て事件の發展を出来る文具象化して見せなければならなかつたから、目に見えない時間關係の如きは中世劇の傳統に従つ

て、無視しても大して不都合を感じなかつた。その代り此の作者の苦心は出来る丈劇物語の筋道(Plot)を明確にすることに存したのであつて、ヨーカスタ劇でも、突然五幕で現れてくる佞臣サタヌスの役は實に兄弟が如何に死闘を演ずるに至つたかを示すためのものであつた。しかも彼が兄のヨリステスを喉す場面を寫して、弟に働きかける場面を描かず、單に彼の獨語で暗示するに止まつてゐるのは、全く同様な場面の反復を避けようとする舞臺經濟のためであると思はれる。そして此の舞臺經濟のためと言ふことがザックスの作劇に非常に大きな力で働いてゐることは見逃し得ない事實であつて、之は結局、甚だ多くの場合、當時の舞臺構造が未だ非常に單純幼稚なもので、舞臺裝置に關する設備が殆ど存在しなかつたことに歸因する。

然らばその舞臺構造は如何なるものであつたか？ 此の問題は曩にも述べた通り、ヘルマン——ケスターの重要な論争點であるが、頭初に用ひられた舞臺がそのままザックスの活躍してゐた全期間中不變であつたとも思はれないから、今ここでは此の劇で推察しうる初期の段階に就て二三の點を列擧して見ることにする。

先づ第一に舞臺の背後を仕切る幕はあつたが、舞臺と観客席の間を區劃する幕はなかつたことである。と言ふのは教會内で會衆席の前にして舞臺を設けるとすれば、大體内陣のある側に取らなければならず、その時は少くとも内陣の祭壇が見えて餘りにも舞臺幻想を破壊するから、どうしても背後を遮斷する幕が必要である。しかも場面が變るごとに登場人物がすべて退場するやうになつてをり、特に第三幕の終りでは皆々整列して退場してゐることは、観客席に向つて幕を用ひなかつたことを示してゐる。

第二には舞臺に登場又は退場する出入口が少くとも二つあつたことである。今登場する場合に用ひられてゐる卜書の用語を見ると、tritt ein od. treten ein 三回(第一幕口上役、第三幕エディプス、第四幕エディ



ンスの二子。何れも幕の始めに用ひてゐる。get (geht) ein od. hinein  
 七回、kompt wider od. kompt 十七回 tritt auf 一回 (第三幕ライウス  
 王) 等があり、退場する場合には geht ab od. geht ab od. gehen  
 wider ab 二十回 geht aus 四回及び führt in ab 一回がある。即ち  
 舞臺に登場するには eingehen 入場するか kommen 来るかの二様式  
 が壓倒的に多いのであるが、此の事は内部から、即ち祭壇のある内陣  
 の奥から舞臺へ「這入つて来る」ことと、外部から、即ち會衆席のあ  
 る側から舞臺へ「来る」ことを意味し、明かにその間に區別があつ  
 たことを思はせる。ヘルマンは前者を背景の幕の中央に出入口があつ  
 て、其處から登場することを意味し、後者は舞臺の前面向つて右手か  
 ら登場することを意味するザックスの舞臺用語 (Terminologie der  
 szenischen Bemerkungen) であると迄言つてゐる。然しケスターはそ  
 れに反對し、幾多の反證を擧げて活潑に論争を展開してゐる。處て、  
 此の劇に於ては、例へば第三幕二場で、ヨーカースタは geht ein し、  
 次にコリント王アトレテスは kompt してをり、又相敵對するもの、  
 エディプス對ライウス、ヨリステス對フロリステスが同一方向から  
 登場してくるとは考へられないから、舞臺への出入口が少くとも二つ  
 あつたことには異論の餘地がない。従つて此の劇に於て geht ein と  
 kompt がヘルマンの言ふ様な意味で正確に區別されて使用されては  
 ゐないとしても (例へば第三幕第二場でヨーカースタは geht ein して  
 ゐるが、コリント王へ返事を書くために geht ab し、直ぐ又 kompt  
 wider してゐるが如き) その後漸次前者が舞臺裏から、後者が舞臺側  
 面から登場することを現はすやうに固定して行つたものと思はれる。  
 そして舞臺裏から登場するのは劇中の人物が同一の建物 (宮殿又は住  
 居) の他の室又は場所から事件の現場即ち舞臺へ現はれる場合であり、  
 舞臺側面から登場するのは、遠く外部から現はれる場合である。  
 第三には舞臺が會衆席から見てよく觀覽出来るやうに、一段高く造

られてゐたと言ふことである。此の點に就てはヘルマンもケスターも  
 一致してゐるが、ヘルマンは舞臺がマルタ教會の内陣から會衆席へか  
 けて設けられたものとして、(次章参照) 舞臺の高さを、少くとも内  
 陣の椅子の戴つてゐた臺の高さ約八十センチと、内陣の床が會衆席の  
 床より十五センチ高くなつてゐるから、會衆席から見ると九十五セン  
 チとなるとしてゐるし、(尤もその椅子が臺の上に戴つてゐたと言ふことは  
 ケスターの抗議に逢つて撤回してゐる。Vgl. Herrmann. Die Bühne des H. S.  
 S. 33, und Köster, Die Meistersingerhütte S. 19.) ケスターは舞臺が會衆  
 席の眞中に設けられたものとして、立つたまま見物する觀客のため  
 に二メートルの高さを想定してゐる。(Vgl. O. a. O. S. 33.) 孰れにし  
 ても一段高い處で演技が行はれたと言ふことは、退場を示す言葉に  
 geht ab (下りて行く) が壓倒的に多く、更らに führt ab (連れて下り  
 る) & tritt ab (歩いて下りる) 等の用語が見られることによつても知  
 られる。此の geht ab は年代から言つて千五百四十九年七月一日作  
 「六人の闘士」(前述) に始めて用ひられ、此の「ヨーカースタ劇」に  
 於て他の退場を現はす言葉 geht aus, geht hin 等を殆ど驅逐するばか  
 りに用ひられて來てゐることから言つても、マルタ教會に舞臺が設け  
 られる様になつてから、舞臺が一段高くなつたことを思はせるのであ  
 る。遺憾乍らその後の作品で千五百五十三年十一月に至る迄のものは  
 今日作者自身の編集した印刷本が残つてゐるのみで作者直筆の初稿が  
 失はれて了つてをるために、此の問題を決定するだけの資料が傳  
 つてゐないのである。と言ふのも印刷本(第一巻は一五五八年第二巻は  
 一五六〇年)は作品の出來た時期よりも遙かに後になつて出版された  
 ものであり、作者は出版するに當つて初稿に大分手を入れてゐるから  
 である。然し乍ら工匠歌人劇に一時期を劃してゐる千五百五十五年度  
 の作品になると、退場を現す言葉として geht ab が全面的に用ひら  
 れてゐるから、此の頃になると演臺を用ひることが常習となつてゐた

と思はれる (Vgl. Hermann, Forschungen, S. 38.)

然らば舞臺装置は如何なるものであつたか？ 之も時代が進み、経験を積むに連れて發展して行つたものと思はれるから、先づ今は五十二年及び五十四年度に上演されたことが知られてゐる「貞節なる羅馬の皇后」と「忠義勇敢高貴なるローマの市民ムチウス・スケヴオラ」を取つて、ヨーカースタ劇と比較検討して見ることにする。

「貞節なる羅馬の皇后」の例の口上役の序辭に「古人の記した名前知られなき皇帝の物語」(welch geschicht beschrieben uns die alten/von ein keyser doch ungenant)とあるが、原本はザックスの藏書目録にある著者不名の *kaiserin von rom vertriben* であると思はれる。

第一幕。口上役の序辭に次いで、皇帝 (Der keyser) が廷臣 (mit seinem hofgesindt) を連れて入場。腰を下ろす (即ち廷臣の一人が椅子を持参したものであらう) 彼は三年の戦争が終つたから聖地巡行に行くと告げ、自分の代理として弟 Alphonsus を執政官 (der statthalter) に命ずる。皇后が来る。皇帝は彼女と相擁し別れを惜しむ。皇帝が廷臣を連れて去ると、皇后は腰を下ろし、夫君の安否を氣遣つてゐる。そこへ皇弟アルフォンスが来る。彼はひどく悲しんでゐるので、皇后がその譚を問ふ。そして彼が戀に悩んでゐること、その戀の相手は皇后自身であることを知る。皇后は一時は怒る (zornig) けれども、相手が烈しく迫るので、泣く様を聲で (klaglich) 獸苑の塔で密會することを約す。然しアルフォンスが喜んで去る (ここでは *geh hin* とある) と、彼女は笑ふ。そして口上役に、彼が塔に這入つたら塔の入口を閉ざして、彼を幽閉して了ふ様に命ずる。口上役が去ると *Ason, hertzog von Ferrar* が来て、何故執政官を監禁したのかと訊く。皇后は十分理由のあることだが、何れ皇帝陛下に報告するからと言つて、彼を返す。と口上役が来て、かのアルフォンスが塔の中で荒れ

狂つて、無實の罪を鳴らしてゐると報告する。そこへ使者 (Der post-boy) が手紙を持つて来る。彼は皇帝の歸還を報ずる。此の邊は相變らず時間關係が無視されてゐる。皇后は手を打つて喜び、口上役に、執政官を解放し、皇帝を迎へにやるやうにと吩咐け、自らも奉迎に出る支度をするために退場。

此の幕で注目すべきことは、口上役の役制である。ここでは前劇にも増して、口上役が必要に應じ劇中の人物として活躍したものであることを明かにしてゐる。彼は序辭 (その最終三行は同韻になつてゐる) を述べた後一端退場、次いで皇帝の廷臣として皇帝とともに登場、その後ずつと皇帝及び皇后の傍に侍立してゐたものと思はれる。と言ふのもアルフォンスが去つた後、皇后は突然彼に話しかけて、彼に執政官を幽閉する様に命じてゐるからである。次いでアゾン侯と皇后との對話の後へ、彼が歸つて来て、その後の執政官の様子を復命してゐる。そして此のアゾン侯と皇后、口上役と皇后の簡単な場面は、皇帝が聖地へ出かけて歸つてくる迄の時間的経過を満たすためのものであるから、口上役の役制は却々重要な意味を持つてゐると言ふことが出来る。だがそれにしても此の幕で取扱れてゐる時間關係は、先のヨーカースタ劇第三幕で口上役がライウス王戦死の報を持つて来てから、ヨーカースタとエディプスが結婚する迄を取扱つてゐるのと比較して、より合理的に運んでゐるとは言はれない。否寧ろ時間と空間の關係を無視する傾向は更らに一段と強化され、最早や當時の舞臺常識になつてゐるとも言ふべきである。

第二幕。皇帝は廷臣を従へて無事歸還して来る。彼は腰を下ろし、弟の浮かない様子を見て、その理由を尋ねる。皇弟は始め言ひ澁つてゐるが、やがて皇后が皇帝の留守中自分に道ならぬ戀を仕掛け、それを拒んだら、自分を幽閉し、數々の不貞を働いてゐたと訴へる。皇帝は激怒し、刑吏 (Der hencker) に命じて、皇后を密に森中に連れ出し、

斬首の刑に處せよと言ふ。アゾン侯が一應取調べて見ることを勤めるけれども、アルフォンスは、侯も亦皇后の仲間だと言ふ。皇帝は刑を即刻執行する様に命じて、一同とともに退場。次いで場面が變つて森中。刑吏が皇后を縛つて出て来る。刑吏が皇后に因果を含めると、彼女は跪つき、神に無實の罪を訴へる。そこへ Marggraf とその弟 Hako が来る。弟ハトーが此の森の中で女の泣き聲がすると言へば、邊疆伯は婦人が殺されようとしてゐるのを認める。二人は抜劍して馳けつけ、刑吏を追ひ拂ふ。刑吏が逃げて行くと、伯は皇后の縛めを解き、色々事情を聞き糺す。結局皇后は身分を匿したまま、伯爵の領地 Salerno に伴はれて、伯爵家の子守役をすることとなる。かくて伯は町へ行つて食事を取らうと言ふので、皆々退場。場面は再び變つて、皇帝とアルフォンスが入場。皇帝は座について悲しんでゐる。皇后を訊問せずに殺したからである。アゾン侯が一應取調べてるやうにと忠言したことを述懐するけれども、アルフォンスは訊問などは無駄であることを主張して譲らない。そこへ先の刑吏が皇后の毛髪を持つて出て来て、刑の執行が済んだことを報告する。皇帝は彼女の最後の様子を尋ね、彼女が無實の罪を訴へ、その敵を赦して死んで行つたと聞いて、顔を蔽うて泣く、それから立ち上つて、廷臣とともに悲し相に立ち去る。(Der Keyser weynt, deckt sein angeseht, steht auf, geht davon trawrig mit seinem hofgesind.)

此の幕は却々劇的に出来てゐるけれども、舞臺装置に就ては、何等指示するものがない。従つて第二場森の場面に、果して森の飾付けが行はれたかどうか不明であるが、恐く第一場と第三場が同一室内で、そこには何れも皇帝が坐る椅子が置かれた筈であるから、その椅子を廷臣の一人が持ち去ること、場面の變ることを表したに過なかつたと思はれる。この事は又場面が室内以外の特殊な場所である場合は、必ず臺詞の中でその事を知らせるやうに配慮されてゐることによつて

も知られる。即ち此の幕でも第一場で皇帝は「妃を密かに森の中へ連れて行け」(Führ sie naub heimlich in den waldt.)と言ひ、第二場でハトーは「そら泣き聲が聞えますぞ。誰かが婦人を此の森の中で殺してゐるやうな」(Ich hab izt hörn/Ein stin schreyen, sam wöll man nörn/Ein weybes-bild in diesem waldt.)と言ひ、前後二回に渡つて、場所が森中であることを明示してゐるのであるが、第一場と第三場についてはそれらが室内であることを示す何等の文句も見當らないのである。かく如く登場人物の口を籍りて、場所の關係を示す丈で、舞臺には何等の飾付けが行はれなかつたと言ふことは、次の幕を見る時なほ明瞭になるであらう。

第三幕。皇后が襁褓の幼兒を抱いて入場。運命の急轉を嘆き、先の皇后も今はかうして邊疆伯の子守役、扱て此の先はどうなることか。萬事神の御心にあることと述懐する。即ち此の臺詞によつて、場面がサレルノ伯の城中であることと、皇后が赤兒を抱いてゐる譯が知らされる。そこへ伯の弟ハトーが入場。伯夫人が見せ度いものがある相だからと言つて、彼女を奥へ去らせる。それから彼は彼女を愛してをり、何處事があつても彼女を自分のものにして見せると獨り言してから去る。入れ違ひに皇后が赤兒を抱いて再び現れるが、彼女は既にハトーから求愛されてゐる。しかも此處道ならぬ戀をするより、あの森の中で殺された方がよかつたと獨語する。そこへ伯爵が来て、彼女の悲しんでゐる譯を訊く。彼女は昨夜よく眠らなかつたからだと胡魔化するで、伯爵は奥方が待つてゐるからと言つて、ともに去る。すると又ハトーが来る。彼はあの女に三度言ひ寄つて三度とも拒まれた。その返報には、今夜彼女の寢室に忍び込んで、赤坊の頸を剃刀で切り取り、その剃刀を彼女の布團の中へ入れておかう。かうして彼女に子殺しの罪を着せてやるのだと言ふ。彼が明るい月ももう直き沈んで行くと言つて傲然と去ると、皇后が死兒を抱いて出てくる。彼女は絶望の體宜

敷く、昨夜赤坊が搖籃の中で殺されたと言ひ、どうして伯爵に申譯をしようかと悲しむ。そこへ伯爵が抜劍して出て来て、彼女を成敗しようとする。家來 (Der trabant) がその劍を抑へて、此處女の血で手を汚すのは勿體ない。海の中へ沈めたらと勧める。伯はその助言を容れる。彼が子供の死を悲しんでみると、弟ハトーが傍から、此處女は一刻も早く溺死させるやうにと喉かす。かくて伯は即刻彼女を荒海の中で殺せと命じ、夫人を慰めるために一同と奥へ這入る。

此の場は極度に舞臺面を節約してゐる。先づ作者は伯爵の弟が皇后に求愛する場面を故意に避けて、皇后を退場させ、それから彼をして意中を獨語させる丈にしてゐる。これは物語の進行を計るために劇的所作を犠牲にしたものであるが (既に第一幕で皇后皇弟アルフォンズスの間に同様な場面が實演されてゐるから) 他方に於て同一舞臺面で出来る丈多くの事件を演ずるための節約でもあつたと思はれる。同様なことが子殺しの場面に就ても言はれる。ハトーが二度目に登場して來た時は、彼はもう三度も皇后を口説いたことになつてゐるばかりか、甚だ劇的である子殺しの場面も、その時彼が計畫として物語る丈で實演されてゐない。即ち彼が「直きに明るい月も沈んで行く」と悪計を實行する時の近づいたことを暗示して退場すると、次にはもう皇后が死兒を抱いて出てくるのである。之は何と言つても物語を急ぎ過てゐる。更らにそこへ直ちに伯爵が抜劍して出て來るに至つては、物語の筋道こそそれで了解されるとしても、劇的所作としては餘りにも唐突である。だが何故作者は此等劇的效果に富む場面を故意に避けたのであるか? それは結局當時まだ舞臺を變化する操作が行はれなかつたため、一つの室内から他の室内へ舞臺を移すことが困難であつたからである。

だから次の場面では場所が孤島の斷崖であることを、登場人物の口を藉りて眞先きに説明してゐる。即ち船頭 (Der schiffmann) が皇后

を縛つたまま連れて來て「嵐で此の孤島はらしまに流されたが、あなたを此の岩から海の中へ突き落さなければならぬ」と言ふ。皇后はそれに對して「お前はお前の舟でお歸り。わたしを此の儘残して行つておくれ」と頼む。船頭は「其處事をしたら、わしが殺される」と拒むが、皇后は「お前に殺されなくても、何れ此處離れ島では長く生きてはゐられないのだし、誰も知るものはないのだから」と只管に助命を哀願する。勿論以上の科白の中には舞臺装置の不備を補ふ意味のものを含ませであるわけである。従つて舟のことが度々言はれてゐるのも、當時はまだ舟そのものを舞臺で用ひなかつたからであると解される。船頭が揖を持つて退場する (Der schiffmann geht ab mit seinem ruder.) と特に斷つてゐるのは、その間の消息を明瞭に物語つてゐる。恐く斷崖から突き落さうとするのは、舞臺が觀客席より高くなつてゐたことを利用したものであらう。尙舟に關しては、後述する筈であるが、此の作品の直ぐ次ぎに書かれた「豫言者ヨナ」 (Jonas, der Prophet, 151, 10, 1. 之は口上役の序辭で geistlich comedi といふ) の tragedi と言つてもよいと言はれてゐるもので、ザックスが喜劇と悲劇とを何によつて區別してゐたかを知る上に大切なものであるが、此の問題も後の機會に述べることとする。(第一幕にどうしても舟を用ひなければ上演出来ない様な場面がある。然しヘルマンの考證 (Vgl. M. Herrmann, Forschungen, S. 88 ff.) してゐる様に、此の作は印刷本しか傳つてをらず、後で舟が舞臺で使用される様になつてから手を入れて出版に附したものであると思はれる。事實又そこにある卜書は前後關係に於て不可解なものがある。何れにしても當時はまだ舟が舞臺で用ひられたと言ふ明確な證據はない。

扱て船頭が去ると、皇后は兩手を擧げて、命の助つたことを神に感謝する。そして神の正しい裁きに信賴して、腰を下ろして眠る。すると「天使 (Der engel) が來て、癩病に效くといふ木根を彼女の膝の

上に置いて去る。と皇后は目を醒まし、木根を見出す。」(Der engel kommt und spricht:.....Der engel legt ihr die wurtz auf die schoß, geht ab. Die keyserin erwacht, findt die wurtz etc.)とト書にある。それにも拘らずその次の皇后の臺詞と所作はこれと一致してゐない。彼女は天使が夢の中に現れ、土地を掘ると癩病に卓效のある木の根が見つかるかと告げられたと言ひ、事實土を掘つてそれを見出すのである。(Sie grebt ein, findt die wurtz)されば此の矛盾は印刷本が最初の原稿を訂正するに當つて犯した誤記から來てゐると思はれる。と云ふことは此の劇が最初に上演された時には、土を掘ると言つた所作が行はれなかつたのに、その後舞臺でそれに必要な手段が構ぜられるやうになつたことを意味する。

皇后は藥根を手に入れると非常に喜び、尙も神の加護を祈る。やがて沖を通る船を見付け、あの船を頼つて羅馬に渡り、癩病人を癒してやり度いと言ひ乍ら、舟のあとを追うて退場する。勿論舟のあとを追うかの如くにして退場するのである。

第四幕。さきの邊疆伯が今は癩病を患つてゐる弟ハトーを連れて、羅馬へ來た處。そして病人は過去の罪を懺悔告白して、醫者の姿をした皇后から病氣を癒して貰ふ。ここでも場所が羅馬であることが、眞先に伯の科白によつて示されてゐるのみではなく、伯が醫者に向つて自己紹介する處でも、遙る／＼サレルノから羅馬に來たと斷つてゐる。

第五幕。弟アルフォズスが癩病になつたことを心配してゐる皇帝は、フェラール侯アゾンから、癩病の名醫の話聞いて、口上役に命じ、その醫者を呼ばせる。アルフォズスが變装した皇后によつて、過去の罪惡を告白させられる處は前幕と同様であり、醫者が病人の尿を検査し、それによつて何處までも病人を貰めて行く處は中世劇の傳統によつてゐる。但しここでは皇帝がアルフォズスの告白を聴くと、皇

后を無實の罪で殺したことに堪へられず、顔を蔽うて一端退場し、弟の病氣が癒ると、弟に呼ばれて再び登場して行くことになつてゐる。之は一寸凝つた趣向であるが、此の時皇帝を呼びに行く使者が矢張り口上役である處を見ると、口上役なるものは宮廷の場では常に舞臺にあつて待機してゐるのが常則であつたと思はれる。なほ此の幕では前幕に於けるが如く場所を指示する文句が何處にも見られないのは、皇帝の掛ける椅子によつて場所を示すことが出來たからである。

最後に皇后は男装を捨て、皇帝の命で口上役が女官(die hofjungckfräwen)をして持つて來させたものと衣裳に着換へ、アルフォズスはその前に膝を折つて深謝する。かくて皇帝は更らに口上役に祝賀の大饗宴の準備をする様に命ずると、皆々整列して退場。口上役の結辭。

因に貞節な婦人が不倫の戀に苦しめられると云ふ物語は當時甚だ人氣のあつたものと見えて、先きに述べた「佛蘭西の王妃と邪しま大臣」(1549, 12, 12)もデカーメロン第十九話を脚色した「貞節なるゲヌラ夫人」(1548, 3, 6)も同一趣向のものであるが、此の劇になると、さすがに脚色振りが一段と大膽になつて來てゐるし、構想も大規模になつて來てゐる。

とは言へ、此の「貞節なる羅馬の皇后」によれば、當時の舞臺装置は未だ甚だ簡單なもので、是非必要な小道具類が用ひられたに過ぎず、装置の不備は臺詞で補はれてゐることが推定される。この事は「ムチウス・スケヴォラ」を見ても同様である。此のムチウス・スケヴォラはブルータルク英雄傳にある古代羅馬の勇士で、既にチューリッヒの迎春劇「老聯盟員と若い聯盟員」(Von den alten und jungen Eidgenossen, 1544 宗政演第二章参照)の中にもその名前が擧げられてゐる人物であるが、彼の物語で最も劇的な場面は、彼が夜陰に乗じてタイバー河を泳ぎ渡り、敵陣に潜入する部分である。然るに此の劇ではそれが

只臺詞で傳へられてゐる丈で、實演されてはゐない。と言ふ事は舞臺の上にタイバー河を設ける手段が未だなかつたからであると思はれる。(後にはヨルダン河を渡河する場面が實演される。後述) 従つて又此の劇は劇的所作に乏しく、大部分は状況を説明する對話を以て構成されてゐる。

第一幕では羅馬の元老議員 Valerius Publicola と Horatius が暴君 Tarquinius (Superbus 古代羅馬第七代の王) を國外に追放したので、漸く國內が平和になつたが、暴君はトスカナ王の Porsenna を頼つて復讐をしようとしてゐる。然しまさかにボルゼンナがあんな悪人の甘言に瞞されて羅馬を攻めるやうなことはしまい。だが兎に角萬善の策として、トスカナに使節を送り、タルキヌスの暴狀を知らせ、彼を援助しない様に懇請しようと思つてゐる。處へボルゼンナから二人の使者が来る。そして使者の一人宰相 Cornelius (der canzler) はタルキヌスを復位せしむること、然らざれば全力を擧げてローマを攻撃すると申込む。元老議員は交々タルキヌスの暴虐を説き、使者の要求を拒む。そして官房で返事を認める迄待つて頂き度いと言つて皆々退場。

第二幕では平民を代表する Claudius と門閥貴族を代表する Mutus Scrota との對談によつて、既に羅馬は敵軍の重圍に陥つてゐること、之に對する平民側と門閥側との立場が示される。平民側のクラウディウスは敵軍が壓倒的に優勢であることを恐れるとともに、味方は損傷が多いから、傭兵でも募集しなければならぬと言ふ。スケヴォラは之に對して、敵軍は無頼の徒の寄り集りであり、ローマ軍は名譽ある歴史に輝く誠忠の士から成り立つてゐるから、決して恐れることはない。傭兵と言ふものは自己の利害で動くもので頼りにならないと説く。更らにクラウディウスは戦争のため税金が高くなり、人民の不平が絶えない。食糧は高騰し、戦果は遅々として擧げないと、政府の怠慢を訴へる。だがスケヴォラは祖國の危急を救ふためには政府も人民も犠

牲を拂はなければならぬ。政府は穀物を分配して飢饉に對處してゐるし、十分熟慮して戦争を進めてゐるのであると教へる。しかも平民側では敵軍の放火殺人強盜によつて國土が蹂躪されるのを見るに忍びない。寧ろタルキヌスを再び王として迎へた方がよいのではないかと云ふ。だが彼を國內に入れば尙一層暴虐な振舞ひをするであらう。彼には一步も讓歩してはならないのである。とは言へボルゼンナが大軍を率いて攻めて来るのをどうして防ぐことが出来ようか? と反問されて、スケヴォラは漸く彼の祕密の計畫を打ち開ける。即ち彼はトスカナ語が出来るから、トスカナ人に變装し、タイバー河を渡つて敵陣に潜入し、ボルゼンナを刺し殺すつもりである。それを聞いてクラウディウスは漸く安堵し、神々の加護を祈つて家へ歸つて行く。

第三幕は敵方軍議の場である。ボルゼンナ王が如何にして戦争に勝つことが出来るかと問ふ。宰相コルネリウスは糧道を斷つて兵糧攻めにすることを提議し、顧問 Marcus Tracius は間者を羅馬市内に放つて、門閥と平民の間を離間する様にと獻策する。王がその計畫を承認すると、宰相から兵隊に給料を支拂ふやうに申出る。王は早速その手續きをする様に命じ、それから軍神に供物を捧げるために、炭火の用意をさせる。家臣が炭火を持つて来る。宰相は會計簿を調べると其處へムティウスが来る。彼はそこにゐる三人の中誰が王であるか判らない。恐く一人離れて帳簿を讀んでゐるのが王であらうと獨語する。彼は宰相を刺し殺して逃げる。王は直ちに犯人の逮捕を下置し、宰相を慰める。だが宰相はマルクス・トラキウスに看取られて死んで行く。そこへムティウスが引き立てられてくる。彼は王から羅馬軍の内情を訊問されるけれども、如何なる拷問に逢つても味方の祕密は打ち明けないと答へる。そして羅馬人の剛毅を立證し、且つは人違ひをして宰相を殺した自分の手を罰するのだと言つて、片手をそこにある炭火の中へ差し入れる。王は痛く感動し、家臣をして彼を止めさせる。彼

は焼けた手を差し上げ、王の寛宏を讃へる。そして今は匿すべきではないとして、羅馬から三百人の勇士が此の地に潜在して王の命を狙つてゐることを物語る。王も亦羅馬人の剛毅と忠誠に心を打たれ、直ちに彼を釋放するとともに、ムチウスに命じて和議を講じさせる。そして皆々講和會議の相談をするために退場することとなる。だからここでは宰相の死骸が舞臺に残ることとなるが、それは恐らく家臣が運び去つたものであらう。ここでは何等の指示がないけれども、今後度々見られる例に徴しても、又不用になつた椅子が運び去られる場合を考へて見ても、それはほぼ確實である。

第四幕では元老議員ブリコラ及びホラチウスとトスカナの使節マルクス・トラキウスと間に和議が成立し、ムチウス・スケヴォラの功績が表彰される。

以上の様に此の劇は全部対談から成り立つてゐて、何等特殊な舞臺装置を必要としない様に出来てゐる。只第三幕でムチウスが炭火で右手を失ふ場面は彼の呼稱スケヴォラ（左手の意）の由来を示すものがあり、物語の骨子であるから、さすがに劇的に脚色されてはゐるけれども、しかもそこでも家臣によつて用意される炭火が使用されてゐる丈であるから、簡単に演出することが出来たであらう。

處て此の劇中の羅馬市が、千五百五十一年から五十二年にかけて Markgraf Albrecht von Braunschweig-Kulmbach 通稱 Alcibiades に よつて恐るべき暴行を受けたニュルンベルク市を描いたものであることは疑を容れない。特に第二幕に於て平民のクラウディウスとムチウス・スケヴォラとの對話で示されてゐる包圍下の羅馬市に關する情勢は、千五百五十二年六月十二日作 Clagesprech der stat Nürnberg ob der unpfllichen schweren pelegung marggraf Albrechtz (邊疆伯アルブレヒトの不正苛酷なる包圍に對するニュルンベルク市の嗟嘆。本書第五章参照) の中で述べてゐる事實と相應するものがある。當時ニュルン

ベルクでも劇中のクラウディウスが言つてゐる様に、市民の中に反戦思想を抱き、敵に降服することを望むものや、傭兵を使用しようとする者や、重税と食糧飢饉のため市政の處置を攻撃するものがあつたのである。ハンス・ザックスがかの對話詩の中でそれらの不平分子に關し、官民相助け合つて祖國の危急に當らなければならぬと説いてゐるのは、正しく此の劇のムチウス・スケヴォラの教示してゐる處と一致してゐる。されば作者はスケヴォラの剛勇果敢な冒險を以てニュルンベルク市民の模範たるべきものとして、彼の事跡を極力推賞してゐるのである。此の意味に於て此の劇には作者の直接體驗が織り込まれ、作者の祖國愛が謳はれてゐるとすれば、千五百五十二年七月六日と同日九日に書かれた二篇の悲劇「サマリアの包圍」と「エルサレムの包圍」とはニュルンベルク市がアルブレヒト軍に包圍され掠奪暴行を受けた直後の作文に、同市に對する大いなる警告の意味を含んでゐたものと思はれる。

「サマリアの包圍」は列王紀略下第六章八節——第七章にあるスリア王ベネハダデ (Benhadad, König Syrie) がイスラエルと戦つて、サマリアを包圍した時の事蹟、「エルサレムの包圍」は同じく列王紀略下第十八章——第十九章にあるアッスリヤ王セナケリブ (Sennacherib, König auß Assyria) がユダの王ヒゼキヤ (Hiskia, König Juda) と戦つてエルサレムを包圍した事蹟を殆ど聖書の文句通り對話體に擬案したものであるが、その何れもが豫言者エリシヤ (Elisa) 又はイザヤ (Isaias) の言葉によつて、過去のもの／＼の罪業を改悛し、神の信仰に歸依し、よつて以て敵軍に包圍されて暴行と飢饉に晒されてゐる城中のものが解放されることを骨子としてゐる。その精神は全くかの「ニュルンベルク市の嗟嘆」と歸する處を一にしてゐるのであつて、悪虐なる暴君に包圍されて市民が塗炭の苦しみを嘗めるのは、市民道徳が頽廢し、奢侈淫樂に耽つた神罰であるから、早く懺悔贖罪して神



の加護を祈らなければならぬと言ふのが作者の持論であつたのである。

處て此等の劇に於ても未だその舞臺面が殆ど何等特別の装置を必要としない様に脚色されてゐることは、劇中に出てくる城門や城壁の場面が最もよい例證をなしてゐる。と言ふのは「サマリヤの包圍」の第四幕、癩病人達が敵軍の退去を告げに來る處で（列王妃略下第七章九以下）「彼等は行つて門を叩く」（Sie gehen hin, klopfen an.）と卜書にあるけれども、彼等癩病人は大聲で門番に呼びかけて、敵が澤山の食糧や飲料を残して退却して了つたことを告げると、そのまま退場して幕切れとなつてゐるからである。これは取りも直さず舞臺に城内と城外を區別する城門がなかつたためであつて、第四幕は城外であり、癩病人達は背景の出入口の處で門を叩く所作をして、そこから退場したものである。かくて次の幕で今度は舞臺が城内に取られ、今の報告に基いてイスラエル王ヨラム（Joram, der König Israel）評定の場となるのである。同様に又「エルサレムの包圍」の第三幕、アッスリヤの使節ラブシヤケ（Rabsacke）がエルサレム方の書記官セブナ（Sebenna, der cantler）と問答する處で「石垣の上に坐す人人」（列王妃略下第十八章二十七）に大聲で話しかけてゐるのであるが、そこにも何等の卜書がなく、只二人の臺詞で「城壁の上に」（auf der stadmauer）多くの人人があることを示してゐるに過ぎず、聖書にも「然れども民は黙して一言もこれに應へざりき」とある通り、民衆の臺詞は存在しない。だからこの舞臺面で群衆が登場したとは考へられず、従つて臺詞の中にある城壁がその通り舞臺に飾り付けてあつたとは到底考へられない。寧ろ民衆や城壁の存在はすべて觀客の想像力に任せられ、ラブシヤケ役者は宛もそれらのものが存在するかのやうに所作したに過ぎないものと思はれる。

尙此の劇で注目すべきことは、冒頭口上役の序辭の末尾に

Num schweigst und bleibst züchtig stil steht!  
Hört anfang, mittel und das endt!

（こゝは話を止めてそのままおとなしく靜かに立つて、事の始め、中及び終りをお聴き下さい）

とあることである。即ち之によつて當時はまだ觀客の少くとも大部分が立つて觀劇してゐたこと、だから舞臺は一段高くし設らへられてゐたこと、並びに既に述べた通り作者の作劇法が劇物語の首尾を順を追うて示すことに係つてゐたこと等が推定される。

更らに此の二曲ともその結末は豫言者の警告が實行されて、明るい解決を齎してゐるにも拘はらず、悲劇と銘打つてゐるのは何故であらうか？ 此の點に關してもかのアルキピアデスの戦禍が影響してゐるものと思はれる。即ち當時ニュルンベルク市が此のために莫大な損害を蒙り、又作者自身戦亂の恐るべき災害を身を以て體驗してをうたのであるから、作者がここに取り扱はれてゐる包圍戰を以て悲劇と見做したのは當然のことである。何れにしても詩人はかの Summa all meiner Gedicht od. Das Valette（我が詩歌の總計又は訣別の辭。1566 od. 1567, 5, 1.）の中で fröhlicher Comedi, trauriger Tragedi と言つてゐるから、コメディを明快な氣分を與へるもの、トラゲディを悲惨な氣分を與へるものと解してゐたことに間違ひはないが、その區別は題材の主要な部分の與へる凡その印象によつたに過ぎないものである。このことはなほ五十一年の八月三日（？）と十月一日とに書かれた二つの豫言者劇を見ても明瞭である。前者は「豫言者エレミヤ及びユダの投獄」、舊約エレミヤ記第二十五章——二十八章にある通り、ユダ三代の王エホヤキム（Jojakim）エホニヤ（Zechania）ゼデキヤ（Zedkia）が豫言者エレミヤ（Jeremias）の言葉を諾かずして、バビロンの王ネブカデネザル（Nebucadnezar）に幽閉される物語を取扱つたもので明らかに悲劇である。之に對して後者は「豫言者ヨナ」で、喜劇の部に

敷へられてゐるが、しかもその口上役の序辭の冒頭には

Heil unnd genad Ihesu Christi

Sey mit euch allen, so alhi

Wohn hön die geystlich comedi,

Das man nendt auch wol ein tragedi,

(イエス・キリストの祝福と御恵、皆々様とともにありますやうにと言ふのもこれから皆様にはお宗旨を仕組んだ喜劇を聽いて下さると云ふのですから。でも此の芝居は又悲劇と言つてもよいかも知れませんが。)

とあるのである。即ち此の劇は舊約ヨナ記(第一章―第三章)の傳へる通り、豫言者ヨナが神の豫言を傳へても無効であることを恐れて逃亡し、海中で颶風に逢つて、海中に投げられ、鯨の腹中にあること三日、その後ニネベ(Ninive)の町の滅亡を豫言するけれども、ニネベはそれによつて改悔し滅亡を免かれ、ヨナは自分の豫言の適中しなかつたのを怨むと言ふ物語であるから、ヨナの立場から見れば悲劇的分子を含んでをり、全體から見れば喜劇の色調を帯びてゐる。されば作者は題材の重點を何處に置くかによつて、此れが喜劇ともなり悲劇ともなると考へたのであらう。

以上の例によつて知られる通り、ハンス・ザックスは近代劇で用ひられてゐるやうな悲劇喜劇の區別を、未だ明確に意識して作劇してゐるとは言はれない。されば先に述べた「貞節な佛蘭西の王妃」や「貞節な羅馬の皇后」と類似した題材を取扱つてゐる「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」(1552, 12, 24)が前二者と同様喜劇の部に入れられてゐるのに對して、ヘッベルの「ヘロデスとマリヤムネ」で有名な物語を脚色した「暴君ヘロデス王。その三子と妃を殺す」(1552, 11, 2)が悲劇の中に敷へられてゐることも、全體の印象に於て「騎士ガルミ」

の方が明るい感じを與へてゐるのに對して、「暴君ヘロデス王」の内容が甚だ陰慘な感じを帯びてゐるためであると思はれる。何れにしても此の兩劇は製作期が非常に接近してゐるとともに共通した點があるから、作者の悲劇觀と喜劇觀を示す最もよい例をなしてゐるとともに、作者の作劇法上に於ける發展階段を示ものとしても注目すべきものである。

「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」は民間傳説本 Die historie von dem ritter Galmyenによつたもの、スコットランドの騎士 Galmy とブリタニヤ侯夫人(die hertogin von Britania)との騎士道に準じた極めて清純な愛情を経とし、聖地巡拜に出たブリタニヤ侯の留守に大臣(Der marschall)が侯夫人に邪戀をして容れられず、夫人を讒訴して無實の罪で苦しめることを緯とし、それに宮廷の貴族達の陰謀が絡むと云ふ却々複雑な筋であつて、作者はそれを千五十四行七幕と云ふ、五十一年四月十七日に書かれた「西班牙の王子フロリオと美しいピアンツェフォラ」(千百十四行七幕)を除いて、從來嘗つて見ない長篇に仕組んでゐるのである。處でザックスの舞臺劇は大體三幕乃至五幕から成るものが多いのであるが、此の頃から七幕物の數が次第に増して來てゐるのは、作者が劇作に主力を注ぐ様になつて來たとともに、取材範圍を擴大して行き、しかもそれを脚色する丈の自信を得て來たからであるとしなければならぬ。

されば「スペインの王子フロリオと美しいピアンツェフォラ」は七幕物の最初の試みとして興味ある作品であるが、之に依ると物語の長さ自ら幕の數を増加して行つたもので、各幕は物語の進行を追つてゐるに過ぎないことが知られる。然し乍ら之が「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」を脚色するに當つて、大いに作者に役立つたことは争はれない事實である。と言ふのは兩者には非常に類似した事件が取扱はれてをり、それらの場面に於て後者の方が遙かに劇的に構成されてゐる

からである。

先づ「フロリオとピアンツェフォラ」から見に行くと、元來此の物語は佛蘭西から傳來された Konrad Fleck の *Flore und Blanschefur* (Hg. F. Sommer, Quedlinburg, 1846.) によつてあるものと思はれるが、西班牙王 Folix と王妃が王子 Florio と身分のない Blanschefur との戀仲を裂かうとして、色々術策を弄し、二人の愛人を切り放さうとするけれども、二人とも萬難を排し艱苦を忍び、遂に目出度く結ばれると云ふ筋である。始め王と王妃は王子を戀人から遠ざけるために、彼を Monterio の大學へ遊學させる。フロリオはピアンツェフォラに悲しい別れを告げて去つて行く(以上第一幕)。その後王の處へ王子の消息を傳へる使者が来る。王子は快々として樂しまず日毎に瘦せ細るばかりである。そこで王と王妃は一層ピアンツェフォラを亡きものにしたら、フロリオも思ひ諦めるだらうと相談し、大臣 (Der marschalt) がピアンツェフォラに求愛して拒まれたので、彼女を怨んでゐるのを利用して、大臣と共謀し、彼に一策を授ける。そこで彼は愛人を思うて悲しんでゐるピアンツェフォラをして、毒を盛つた孔雀の料理を客席に運ばせる。彼女が料理の皿を持つて去ると、大臣は「これであの女の命は火炙りになるのだ。これから行つてあの孔雀を犬に毒見させよう」と獨語して退場。入れ代つてピアンツェフォラが客席から退つて来る。とあとを追うて侍臣 (Die trabanten) が来て、彼女を毒殺未遂の犯人として牢屋へ引いて行く。(以上第二幕) 一方フロリオはピアンツェフォラの危急を夢に見たと言ひ乍ら、大臣が彼女を處刑しようとする處へ、變装し拔劍して馳けつける。彼は大臣の惡巧な陰謀を責め、戀人の冤罪を證すために、大臣と血闘する。彼等は戦ひ、互に追ひつ追はれつするが、遂に大臣は腕き、兩手を擧げて (Sie kempfen, treiben einander umb; endlich fellt der marschalt auf seine knie, hebt beyde hendt auff etc.) 命乞ひをする。彼は自分の罪狀を告白し、

刑吏と侍臣に縛られて連れ去られる。あとでフロリオはピアンツェフォラの縛を解き、彼女が冤罪を着せられたものであることを王に申立てようと云ふ。彼女は命の恩人が誰であるかを知らない。二人が去ると王妃が今去つたピアンツェフォラを連れて出てくる。王妃は少女に彼女の生命を助けた騎士は誰かと尋ねる。けれどもピアンツェフォラにも騎士の素姓は判らない。彼女が王妃に奨められて、ヴェナスの宮へ、助命の感謝をするための供物を捧げに行くと、入れ代つて王が狩場から歸つて来る。王は女神ダイアナからピアンツェフォラが一家の禍の種になると告げられたと言つて憂慮してゐる。そこで王と王妃は又又相談して、ピアンツェフォラをアレキサンドリアから來た寶石商に賣り渡すこととする。と口上役が寶石商の來意を告げに來る。そして寶石の櫃を持つた二人の商人が呼ばれ、寶石の取引が行はれる。次いでピアンツェフォラが来る。商人達は彼女が氣に入り彼女を買ふ商談をするために、王とともに退場。あとで賣られて行く身を嘆き悲しむピアンツェフォラを王妃が色々甘言を以て慰める(以上第三幕) 他方王に呼び戻されたフロリオは戀人が死んだと告げられ、絶望の餘り自殺しようとするので、王妃は遂にピアンツェフォラが生きてゐることを打ち明ける。すると王子は愛人を探しに行くと言つて、Herzog Aschelion に同伴することを求める。王が何處に止めても諾かない。遂に王も王子の願を許さざるを得ない。だが王子の危険の旅路を心痛する王と王妃の嘆きは深い。(以上第四幕)

次いで舞臺はアレキサンドリア。Ritter Dario が登場、ここがアレキサンドリアであり、西班牙から船が着いたと言ふから、様子を見に來たと獨語。ダリオは若い頃西班牙に居たことがあるからである。即ち彼の臺詞は觀客に場所を教へるに役立つてゐる。そこへ王子フロリオ、アシエロン侯が従者を連れてくる。アシエロン侯は、ダリオと行き逢ふと、互に久闊を敘し、侯は従者をして宿を取るため先發させて

から、ピアンツェフォラの行方を尋ねる。すると彼女はサルタンの代官 Miraglio に買ひとられ、やがてサルタンに獻納されるために塔の中に嚴重に幽閉されてゐると言ふことである。そこで王子はドリオの助言で、塔の番人を買収し、愛人を救出することとなる。彼はアンエロンから金袋を買つて、塔へ急ぐ。そのあとで、アンエロンがドリオにピアンツェフォラの身の上から、王子と彼女との悲戀物語を話して聽かせる。その物語が終ると王子フロリオが歸つて来る。彼は番人を首尾よく買収し、明日朝塔の中の乙女達に薔薇の花籠が引き上げられる時、その籠の中へ這入つて、ピアンツェフォラの室へ忍び込む手筈をきめて来たのである。(以上第五幕) 翌朝アンエロン侯と騎士ドリオが若い二人の身の上を心配してゐると、砂塵を上げて近づいてくるものがある。二人がその場を避けると、二人の愛人が捕縛されてくる。そして代官ミラグリオから死刑の宣告を受ける。二人は互に他を庇ひ、自分一人で罪を受けようとするが、それも叶はないので、お互に慰め合ふことが出来るやうに、顔を見合せて死に度いと願ふ。やがて二人が連れ去られると、アンエロンとドリオが現れ、今の罪人の身の上が明かにされる。ミラグリオは驚いて、再び二人を呼び出す。そしてフロリオがミラグリオの甥に當ることがわかる。そこで早速若い愛人達の結婚式が行はれ、歸國の船が用意されることとなる。(以上第六幕) 話變つて西班牙では王と王妃が愛子の身の上を心配してゐる。とそこへアンエロン侯、フロリオ、ピアンツェフォラが無事歸つて来る。かくて二人は王と王妃に暖かく迎へられる。(以上第七幕) かうして此の劇は劇的效果から言つて甚だ平凡な第七幕を加へて物語を完成し、喜劇の部に入れられてゐるが、各幕の人物の出入、人物の所作など、さすがに舞臺馴れして来た作者の舞臺技巧を示すものがある。だが特にここに注目すべきは第三幕、即ちピアンツェフォラが大臣の邪戀を却けたために無實の罪に陥され、その冤罪を證すために

フロリオが變装して大臣と血闘すると云ふ場面である。と言ふのが「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」七幕全體は言はば此の第三幕の同工異曲とも云ふべきものであり、従つて兩者を比較して見る時、作者の作劇法上の發展、索いては舞臺技巧の進歩が甚だ明瞭に看取されるからである。

處でフロリオ對ピアンツェフォラの關係はそのまま騎士ガルミ對ブリタニヤ侯夫人の關係であるが、此の二つの純愛物語に於て、前者では男性の方が西班牙の王子で、女性の方はその父が羅馬から巡禮に来て不慮の死を遂げ、その母も産後亡くなつたけれども、王子と同時に生れたと言ふので、王子とともに宮廷で育てられた娘である。之に對して後者では男性の方が異邦人で、女性の方は一國を支配する君主の妃である。だから男女立ち場を異にするとは言へ、何れも身分に懸隔のある間柄である。しかも騎士ガルミの戀愛關係の方がピアンツェフォラのそれに比べて、遙かに困難な立場にある。身分の相違の他に、不倫の戀であるからである。だからフロリオ——ピアンツェフォラの場合はその戀愛關係が如何にして成立したかを説明する必要もなかつたのに、ガルミ——ブリタニヤ侯夫人の場合は、その複雑にして微妙な關係を紹介する必要がある。かくて「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」第一幕は二人の戀愛成立史を取扱つてゐるのである。

場面ブリタニヤの宮廷。スコットランドの騎士ガルミが激しい情熱のために悶々の思ひに耐へ兼ねてゐる處へ、親友の貴族 Friderich が来て色々慰め問ひ糺す。ガルミは意中の人が餘り高い身分のものであるので、愛人の名を打ち明けかねてゐるが、再三問はれて遂に「侯夫人の口から只一言慰めの言葉が得られれば、此の病も癒るのだが」と洩らす。フリデリッヒは友人の愛情が純粹なのを知つて、早速夫人にその氣持を傳へようと言つて去る。あとでガルミは「あんな告白をして反つて夫人に輕蔑されるばかりだ。何と云ふことをしたのか!」も

う取り返すことも出来ない！」と又しても嘆き悲しんでゐる。此の心理描寫は却々冴えてゐる。そこへ侯夫人が腰元 Rosina を連れて来る。彼女はフリデリッヒから聞いたと言つて、ガルミの清らかな愛情を喜んで受け、彼を彼女の騎士にしようと言ふ。ガルミは身命を捧げて御奉公申しませうと打ち喜ぶ。それから何時どうして彼女を愛するやうになつたのか？ と問はれて、「さきの日殿の一行と狩に出て、山道にさしかかり、馬もさかなくなつた時、その眞白い御手を取つて道案内を申しあげて以來、只管に思ひ憧れて参りました」と答へる。かくて二人は清純な愛を誓ひ合つて、夫人は去る。とフリデリッヒが来て、その愛のために思慮分別を失ふことのない様にと忠告する。ガルミも亦絶對に不純な慾望は持たないと誓ひ、二人は食堂へと去る。(以上第一幕) するとガルミの名聲を嫉む三人の貴族 Bernhard, Rupert, Sebaldt が彼を失脚させようとして陰謀を企む。彼等は武術試合を侯に提議し、三人がかりでガルミを倒さうと云ふのである。そこへブリタニヤ侯が来て、武術試合 (ein ritterliches Gesellenstechen) を許可し、早速その旨を領内に布告させる。彼等が去ると、騎士ガルミが試合の準備をするために、フリデリッヒを探してくる。と腰元ロジナが行き逢ひ、今日の試合には侯夫人の騎士として戦つて貰ひ度いと云ふ夫人の依頼を傳へ、夫人の贈物青絹のリボンを渡して去る。入れ代つてフリデリッヒが来て、早く試合の準備をする様にと、ガルミを誘つて行く。次いで大臣 (Der marschalch) が登場。試合の結果ガルミは數々の敵を倒したが、そのために他の貴族達に恨まれるだらうと獨語してゐる處へ、試合が終つて、侯が廷臣腰元を連れて来る。そしてガルミは今日の優勝者として、口上役から披露され、恩賞を受け、大奥の内膳職に任ぜられる。(以上第二幕) かうして此の幕は試合の發議される場、試合直前の場及び試合直後の場から成立してゐるから、或る意味では「時の一致」を缺いてゐる。だがそれだからと言つて、

此の幕が單に外形を整へるため丈に、即ち各幕がほぼ等しい長さを持つたため丈に、以上の三場から構成されてゐるのではない。寧ろここでは武術試合に關係のある出來事丈が全篇の一挿話として一幕に纏められてゐるのである。此の事は、ハンス・ザックスの劇構成法に就て、從來兎角無意味な幕分け (Akteinteilung) が行はれてゐるやうに言はれて來たのに對する有力な反證をなすもので、既にかの「ヨーカースタ劇」第二幕で見た通り、作者は形式の上から丈ではなく、内容の上からも十分考慮して、幕を切つてゐると言ふことが出来る。

同様に第三幕もフリデリッヒがガルミに彼を嫉妬憎悪してゐる者達のことを警告する場面、ルーベルト、ベルンハルト、ゼーバルトの三人がガルミと侯夫人との間を疑ひ、彼を失脚させようと謀議する場面、それを窺ひ知つたフリデリッヒがガルミに難を避けて、スコットランドへ歸國するやうに勸告する場面、最後に侯夫人が腰元をやつてガルミを呼び、懇ろに告別する場面から成り立つてゐるが、それら四つの場面は緊密に連絡してゐて、切り離すことが出来ないものである。

次いでブリタニヤ侯は大臣に國政の全權を委託して聖地巡拜に出かける。あとで大臣は今こそ侯夫人に對する日頃の戀情を打ち明ける時だと獨語する(第一場)。だが次の場面で、侯夫人は腰元ロジナに、庭園を散歩中大臣から言ひ寄せられたので、彼の邪戀を侯に訴へると誓つたことを物語る(第二場)。一方大臣は訴へられては身の破滅だとはかり、厨童 (Der kuchenbub) Wenzel を買収し、彼に多額の金銀高價な服飾品を與へて、豪華な生活をするやうに命ずる。そしてそれらが每晚寵愛を受けてゐる侯夫人の手から出たものであると言はせる(第三場)。かくて厨童の派手な生活振りを怪しんだゼーバルトとベルンハルトはヴェンツェルに金の出所を糺問する。ヴェンツェルは彼の情人から貰つたものと言ふ。その婦人は？ と訊ねられて「奥方でさあ、殆ど每晚一緒に寝るんですけど。金はいくらでも貰えます。さあ一杯

やりに行きませうか。お二人の勘定はわしが持ちますよ」と答へる。(第四場)。他方侯夫人は夫君とガルミのために神の加護を祈つてゐると、フリデリッヒが来る。彼は厨童ヴェンツェルが侯夫人の寵愛を受けてゐるやうに言ひ觸らすので、捕へられて糺問されることになつたと報告する(第五場)。それから大臣が厨童を裁く場面となる。だがその前に大臣は刑吏をしてヴェンツェルを牢屋から連れて來させ、密かに彼を激勵し慰藉する。彼が裁判にかけられて絞首刑を宣告されても、それは形ばかりのことで、後十分償ひをするから、前言を翻さないやうにと言ふのである。しかも厨童を牢屋に下げると直ぐ、引返して來た刑吏に判決が下つたら容赦なく死刑を執行する様にと命ずる(第六場)。かうして置いて愈々大臣は陪審官を連れて登場。厨童を再び呼び出して取調べる。勿論厨童は侯夫人との情事を肯定するので、陪審官ルーベルト、ベルンハルトは交々死刑を主張する(第七場)。

以上が第四幕であるが、此の場は七場を費やして大臣の邪戀と悪巧な陰謀を残し無く取扱つてゐる。かうして侯夫人に對する大臣の密かな悪計が巧に準備された處へ、ブリタニヤ侯が歸つて來る。それは丁度前曲に於てピアノツェフォラが毒を盛つた料理によつて無實の罪に陥されると同じやうな憎むべき陰謀であるが、此の戯曲の方が、陰謀の手先きとなつて働く第三者厨童を一枚餘計に登場させてゐる丈に、一層複雑でもあり微妙でもあり、従つて劇的でもある。

扱て大臣は侯歸還の報に接すると、夫人の醜行を讒訴するために、直ちに侯を迎へに行く。そのあとで侯夫人も夫君を迎へに行かうとする。腰元ロジナが厨童の誅罰された事件に就いて、侯が歸つて來た今、禍が夫人に及ぶことを心配するけれども、夫人は夫君を絶対に信用してゐる。だが其處へ歸つて來た侯は夫人が喜び迎へるのに反して、有無を言はず彼女を逮捕させる。するとフリデリッヒが跪づいて、夫人のために嘆願する。そして彼女の潔白を證明するために、闘士をた

てるから、血闘によつて黑白を決めて貰ひ度いと言ふ。そこで侯は願ひによつて三十日の猶豫期間を與へる。やがて猶豫期間も今日一日となる。フリデリッヒはゼーバルトに向つて、侯夫人が大臣の奸計によつて無實の罪に陥つてゐること、夫人のために血闘する戦士を待つてゐるがまだ現れないことを話す。ゼーバルトが去ると、腰元ロジナが來る。彼女は夫人がガルミに救を求めたけれども、ガルミは夫人に再び逢ふことを恐れて、それを拒絶して來たとやつて悲嘆する。フリデリッヒはガルミが必ず來ること、もし萬一にも來なければ、自分が戦士になつて、夫人の冤罪を雪ぐと言つて慰める(以上第五幕)。之で次の幕にガルミが變装して現れるわけが示される。果してガルミは僧形に變装して、スコットラントからブリタニヤへ到着する。此の事は第六幕の始め彼が登場して眞先きに言ふ獨白で紹介される。即ち作者はガルミが今何處で何をしようとしてゐるかを觀客に理解させるために、此の獨白を必要としたのである。従つてこれも亦前劇第五幕アレキサンドリアに於ける騎士ダリオの臺詞と同様、當時の舞臺面の不備を臺詞で補つてゐる一例とすることが出来る。かくて丁度變装したフロリオがピアノツェフォラのために大臣と血闘するのと同趣向がここにも繰り返されることとなる。然し此の劇に於ける血闘裁判の方が一段と劇的に構成されてゐることは、作者の作劇法の進歩を示すものとして特記すべきものである。前劇ではフロリオがヴェナス神のお告げて愛人の救助に馳せつけて來たと言つてゐる處へ、刑吏がピアノツェフォラを連れてくる。續いて武裝した大臣が出てくる。そこで直ちにフロリオと大臣との言ひ争となり、血闘となる。處がここでは僧形のガルミがスコットラントから馳けつけて來たと自己の立場を紹介すると一先づ退場。そのあとへブリタニヤ侯が廷臣を連れて來る。それから武裝した大臣が來ると、續いて刑吏に連れられて侯夫人が來る。と直ちに夫人は無實の罪で所刑されることを訴へる。侯は顔を背けて答へない。

そこへガルミが僧衣を纏うて再び現はれる。彼は夫人に最後の懺悔をし、赦免を受けるやうにと勧める。すると夫人は大臣の奸計で無實の罪を着せられたことを誓ふ。僧は夫人を慰め、供養のため僧院に寄進を求める。夫人は指に嵌めた指輪を捧げる。それから彼女のために戦ふ闘士がないことを聞くと、僧は彼女を縛らうとする刑吏の手を押し止め、彼女を柵の方へ連れて行く。(Er fñrt sie zum schranken.) 勿論ここで夫人が僧形の人の本性を知らないのは、ピアンツェフォラの場谷と同じ。かくて僧は大臣に向つて挑戦し、僧衣を柵の中へ投げ込む。(Ritter Galmi wirfft sein kùten in die schranken.) 大臣は僧侶と戦ふことは出来ないといふと逃げる。だが侯を始め廷臣達が皆々試合をし、試合をしろ！と叫ぶ。かうして今や進退窮まつた大臣は、ガルミと血闘することとなる。勿論彼は打ち倒され、ガルミに両手を縛り上げられ、罪状の一部始終を告白する。そして夫人の代りに火の中へ引摺られて行く。(Man schleift den marschalt in das feuer.) あとで侯は夫人の前に膝を折つて、赦しを乞ふ——(以上第六幕)

以上のやうに此の幕は前劇に比べて、一段と複雑な内容を極めて巧妙に展開して見せてゐる。第一にガルミが僧形に變装してゐることに大きな意味があり、彼はそれによつて侯夫人に懺悔させその無實の罪を誓言させることが出来るが、同時に大臣はそのために血闘に對する逃口上を見出すことが出来る。第二に侯や廷臣の前で血闘が行はれてをり、しかも此の群衆は血闘を大臣に要求すると言ふ重要な役目を持つてゐる。第三に夫人が僧侶に指輪を贈つてをり、その指輪が後に僧侶の本性を知る證據品となる。第四にガルミは先づ刑吏から夫人を護り、彼女を柵の方へ連れて行つてから、大臣と血闘するが、之も用意周到な所作である。最後にブリタニヤ侯は夫人の足下に跪いて、二人の間に完全な和解が成立する場面。之等は凡て作者が劇的效果を狙つた劇的所作であるが、然し更らに注目すべきことは、舞臺の一隅を限

つて柵が装置されてゐると言ふことである。それは夫人が所刑される刑場を示すもので、後で大臣がそこへ引摺られて行つて、夫人の代りに火中に投ぜられるのである。だからここに始めて舞臺装置らしいのが見られるのであるが、それが如何にして設備され、又大臣の火刑が如何にして演出されたかは、此の劇ではまだ明瞭を缺くから、今後の例を待つこととする。何れにしても此の劇は前劇の經驗を發展させたもので、舞臺面も登場人物も一段の進歩を示してゐる。

かくて第七幕。ブリタニヤ侯はかの僧形の人が誰であるかと問ふが、誰も知らない。只スコットランドへ行く道で見たと言ふものがある。その跡を追はせる。次いで侯は藥の間違ひで突然重態に陥り、やがて逝去したことが、侯夫人、フリデリッヒ、ベルンハルト等の口から次々と知らされる。侯夫人はフリデリッヒと呼ばれて馳けつけて來たガルミを、裏切りの故を以て一端は拒否するが、かの指輪が證據となつて、ガルミの忠誠を知り、遂に彼と結婚することとなる——

扱て「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」が以上の様に甚だ清纯な明るい印象を與へる劇であるために、喜劇の部に入れられてゐるとすれば、之より約五十日前に創作された「ヘロデス、その三子と妃を殺す」は既にその題名が示す通り、甚だ陰慘な物語であるために、悲劇と呼ばれてゐる。何れも無實の罪で苦しめられる妃を取扱つてゐる點で、宮廷の陰謀劇であるが、後者の劇的構成は前者のそれに比べて甚だ見劣りがする。と言ふのも「ヘロデス」では陰謀の計畫とその結果を單に敘事的對話で物語るに急であり、そのため屢々計畫と結果の間の時間的間隔が全く無視されてゐるからである。この事は結局作者の取材した原本 Flavius Josephus (geb. 37 n. C. in Jerusalem, gest. 95 n. C. in Rom, Der jùdische Historiker.) の Der jùdische Krieg が歴史にあつて、物語ではなかつたことにも歸因すると思はれるが、しかも此の劇で多くの陰謀が行はれてゐると云ふことが、次の「ガルミ」中の



陰謀の描寫をするに當つて、作者には非常に有利に作用したことも考へられる。

猶大王ヘロデスは羅馬皇帝アウグストに召喚されて、留守中のことを Josippus と Seenus に托し、ゼームスには特に一通の祕密命令書を與へて出發する。あとでゼームスはその命令が餘り残酷だと言つて心痛するので、ヨシプスはゼームスにその内容を尋ね、命令書を見せて貰ふ。そして前にアントニオの處へ呼ばれた時にも、ヘロデス王は同じ様な命令を自分に残して行つたと言ふ。そこへ王妃 Marianne が來て、何故自分を此處に嚴重に監視させるのかと問ふ。(時間關係が無視されてゐる)彼女は二人を問ひ詰めて、王が彼女を愛する餘り若し羅馬で自分に萬一のことでもあれば、彼女を殺すやうにと指圖して行つたことを知る。彼女は王の殘虐を怨んで泣き乍ら退場。ヨシプスとゼームスは妃に祕密を打ち明けたことを後悔する。二人が去ると、ヘロデス王の妹 Salome が來て、妃マリアンネが高慢で自分を輕蔑してゐること、だからマリアンネがアントニオに自分の肖像畫を送つて、懇懇を通じようとしてゐることや、夫の留守中ヨシプスと親しくしてゐることを、王に讒訴して、復讐しようとしてゐる(以上第一幕)。

王は無事羅馬から歸つて、早速マリアンネを呼ばせる。そして口上役が出て行くと、ヨシプスに留守中のことを訊く。ヨシプスが國內は平穩であつたことを報告する。とそこへマリアンネが來る。王は彼女を迎へようと立ち上るのを、彼女は突き返す。王は妃の態度を咎める。そこで二人の間に激しい口論が行はれる。妃は王が徒に嫉妬して自分を少しも信用して呉れないと言ふ。王はアントニオに肖像畫を贈るやうなことをしては、信用が出来ないと答へる。妃は王が彼女の兄弟 Aristobulus を謀殺させたと言つて、王の愛情を疑ふ。王はそれも自衛のためであるから、お前の言ふことは無理であると答へる。だが妃は最後に、何の罪もないのに妾を二度も殺さうとしたと言つて、王を

責める。王は祕密を洩らしたゼームスを直ちに死刑に處するやう命ずる。侍臣がゼームスを連れ去ると、ザーロメが酌取人 (Der wein-schenck) を連れて來る。彼女は酌取人を證人にマリアンネを訴へる。と酌取人は王妃が自分を賣收して、王を毒害させようとしたと證言する。王は怒つて直ちに妃を捕縛させる。ヨシプスが事は重大だからよく取調べてから處刑を行はれるやうにと、妃のために取做す。然し王は反つて、妃を辯護するのは、妃と通じてゐるからであらうと疑ぐる。するとザーロメが王の耳に口を寄せて、早く處刑しないと、猶太人がどんな謀叛を起すかも知れないと叫ぶので、王は即座に妃を斬首の刑に處するやう命ずる。妃は縛られると、此處暴君から逃れることが出來たら喜んで死んで行くと言ひ乍ら、連れ去られる。次いで王が去ると、侍臣 Thiro と Ewclides が出て來る。二人が妃や王やザーロメの噂をして、王があとで後悔するだらうと言つてゐる處へ、王が廷臣を連れて再び登場。食事の合圖が聞えるやうだが、マリアンネを食卓へ誘ふやうにと命ずる。口上役が御妃は御命令によつて裁きを受けられましたと言ふ。王は今更らにマリアンネの優しさ美しさを思ひ出して、激しく嘆き悲しむ。彼は王冠王笏を捨てて退場(以上第一幕)。

マリアンネに對する陰謀が片付くと、彼女の二人の息子 Alexander と Aristobulus に對する陰謀が行はれる。彼等二人は羅馬から歸つて來て、母が無實の罪で殺された時の事情を侍臣ティロとオイクリーデスから聽く。一方ザーロメとその兄弟 Pheroras (od. Feroras) は息子達の復讐を恐れてゐる處へ、アレキサンダーとアリストブルスが來るので、此の二人の眞意を探る。そして二人が母を讒訴したのを見出して必ず復讐すると誓ふので、表面はそれに賛成し、激勵するやうな風をして別れる。然し身の上の危険を知つた彼等は、王が獨りて來るのを見ると、早速かの二人の王子が母の仇を討たうとして、王の生命を狙つてゐると訴へる。王は天を仰いで嘆息し、皇帝に訴へて二人

の息子を放逐し、Dasisの生んだ長男 Antipater に王位を譲ることにしようと言ふ(以上第三幕)。

後嗣になつたアンティパーターは自分の母親が身分の卑しいものであるから、再び王の氣が變り、マリアンネの息子を王位に即けるかも知れないことを恐れる。彼は侍臣オイクリーデスを味方にして、アレキサンダーとアリストブルスが王を怨み、王を殺さうとしてゐると言ひ觸らさせる。王が馳け込んで来て、マリアンネの息子達が陰謀を企んでゐることを聞いたと言ふ。アンティパーターはそれに油を注いで、王をして益々激怒させる。他方アレキサンダーとアリストブルスは父王が自分達を追放に處したことを知つて、全く無實の罪であるから、羅馬の皇帝に訴へ出ようと相談する。侍臣ティロが二人のために、命に懸けて辯明して見ようと言ふ。だが次の場でフェロラスとアンティパーターの口を通じ、彼等の陰謀の方が既に功を奏し、王子達は早くも投獄されてをり、今日は重罪裁判にかけられる筈であることが知らされる。それを聽いてザローメは手を打つて喜ぶ。愈々裁判の場。ヘロデス王は法廷に坐り(Der König Herodes setzt sich zu gericht.)二人の王子は縛られたまま連れて來られる。王は彼等を王の暗殺謀叛者として弾劾する。ヨシプスが彼等のために辯護するが、王は色々な暗殺の計畫が行はれてゐると、例證を擧げる。アレキサンダーとアリストブルスは彼の足下に伏して、それらが事實無根であることを訴へる。しかしヘロデスは權杖を折つて、彼等及び一味の者を悉く絞首の刑に宣告する(以上第四幕)。

最後にアンティパーターは今迄の陰謀が曝露することを恐れ、フェロラスと計つて、ヘロデス王を毒害しようと相談する。他方ヘロデス王は身邊轉た寂寥を覺え、早まつて二子を殺したことを悲しんでゐる。そこへザローメが馳け込んで来て、アンティパーターの陰謀を密告する。かくて亦もや激怒した王は、アンティパーターを責め、毒藥の罐

を證據に、彼を投獄せしめる。やがて王は重病になる。醫者が呼ばれ、尿の検査が行はれる。すると内臓は腐つてをり、胎内には無数の害虫がをり、下肢の關節は爛れ、ペニスは脹れてゐる。今は如何とも手の施しようがない。そこで醫者の勵めにより、ザローメに遺言をする。即ち彼亡き後は猶太人の老人を悉く殺し、彼等をして悲しませよと言ふのである。それから林檎と小刀とを所望し、ザローメがそれを與へると、小刀を高く振り上げて、わが胸を突かうとする。ヨシプス始め一同が驚いて止める。とそこへ牢番が来て、アンティパーターが脱獄を企てたと報告する。王は忽ち激怒して、彼を直ちに殺すやうに命ずる。その後王はやがて死んだことが、ザローメによつて告げられる(以上第五幕)。

かくてヘロデス王は實に妃と三人の息子を殺したのである。だから作者が之を悲劇の部に入れるのは當然である。しかも近親を殺す度毎に、王は反省し後悔し乍らも亦次の殘虐行爲を行はざるを得ない。此の意味に於てヘロデス王こそ偉大な悲劇的人物であるが、此の劇ではさう言つた心理描寫が唐突で、斷片的であるため、十分の効果を擧げてゐない。それは作者が依然として物語の持つ倫理的教訓に重きを置いてゐるためであつて、王の反省や後悔を通じて、陰謀と陰謀の恐るべき結果を示さうとしてゐるからである。だから舞臺構成に於ては未だ何等の新味が見られない。然し乍ら他方此の劇は作者の作劇術が次第に複雑にして大規模な構想をも支配し得るやうになつて來たことを示すものとして特記に値するものである。

かくて今やハンス・ザックスは如何なる規模、如何なる結構の物語も職人舞臺のために劇化する丈の自信を得たものと思はれる。そして當時民間に廣く行はれてゐた二つの有名な大衆物語から、五十三年早春二曲の悲劇が脚色された。その一つは彼が是より先五十一年十二月の初め四篇の工匠歌 1. Tristrant der Liebhabent: in dem langen

tone des Poppe. (Dez. 4) 2. Herr Tristrant im wald; in dem senten tone des Nachigal. (Dez. 5) 3. Her Tristranz kampf mit Merhold: in der kelberwels des Hans Held. (Dez. 7) 4. Her Tristrant mit dem trachen: in dem vergessen tone des Frauenlob. (Dez. 7) を作つてゐるもの、千五百四十九或は五十年に Worms で版行された大衆本<sup>Volksbuch</sup>「Tristrant und Isalde」を原本とする「悲劇」トリストラントと美しい女王インゾルデの悲戀」(1553, 2, 7)とあり、他は早く千五百九九年にアウグスブルクで刊行されてゐる民間童話<sup>Folksmärchen</sup>「Fortunatus から取材された」悲劇「フォルツナーツスと魔法の帽子」(1553, 3, 4)とある。

トリスタンとインゾルデ物語は十二世紀に佛國から獨逸に傳はり、最初 Eilhart von Oberge により、次いで十三世紀 Gottfried von Straburg により敘事詩に歌はれて以來、廣く各地で愛讀されてゐたが、中世語の韻文が理解され難くなつて來るとともに十五世紀末葉以後十七世紀にかけて之を散文物語に改作したものが現れるに至つた。しかもそれら散文物語は十四種の多きに達すると言はれてゐるが、(Vgl. K. Bartsch, Der älteste Tristrandruck, Germania, Jahrgang 30. Wien, 1885. S. 19-55.) ザックスの原本となつたものは Eduard Walthers の詳細な比較研究により (Vgl. E. Walthers, Hans Sachsens Tragödie Tristrant und Isalde in ihrem Verhältnis zur Quelle. 1902.) それ等十四篇の中千五百四十九年 (或は五十年) のヴォルムス版であるとされてゐるのである。と言ふことは此の有名な物語が敘事詩形式から散文小説體を経て始めて劇形式に發展して來たことを示すものであるが、獨逸文學史上演劇の領域をここ迄擴めて來た第一人者は實にハンス・ザックスであつたのである。何れにしても冗漫長大にして複雑怪奇な此の散文物語を當時の幼稚な即興的な舞臺で演出しようとする云ふ意圖は、此の作者ならは到底思ひも及ばないことであつたであらう。勿論そのために作者は

例によつて多くの時間的空間的不一致、幕の獨特な切り方、又は人物事件物語の勝手な省略短縮附加變更を行つてゐるが、しかも此等の改變は作者多年の經驗から舞臺經濟上や舞臺效果上配慮されたものであつて、當時としては進歩であり成功であると言はなければならぬものも少くないのである。

先づ第一幕では、Curnewel の Marx 王の朝廷で、アイルランド王の理不盡な朝貢の要求に對して會議が行はれ、敵の巨人 Morholdt と一騎打ちをすることによつて、朝貢の諾否を決するため、「Tristrant」が選ばれる處から始まり、トリストラントが決戦場に乗り込んで、モルホルトを斃して自分も傷くと、Isalde がモルホルトの傷口からトリストラントの劍の破片を見出すに至る迄を、三場で取扱つてゐる。事件は極めて緊密に明瞭に展開して行つてをり、原作がトリストラントの生ひ立ちを長々と述べてゐるのに比べて、遙かに劇的な發端である。例へばトリストラントが試合をする前に騎士の位を授かる必要があること等も、原作の物語を一切省略して、簡單に王が「だがその前にお前を騎士に取り立てよう」と言つてゐる丈である。そして試合後重傷を負つたトリストラントの處へ Herzog Thinas と Hofmeister Curneful の兩人が來て、彼を劬り連れ去る處や、イザルトと一緒に二人のアイルランド人が登場して、死者モルホルトを運び去つて行く處は、場や幕の切れ目に、死傷者を舞臺に残さない用意であつて、作者の舞臺經驗による巧妙な舞臺操作である。即ち之によつて舞臺幻想を破るやうな黒衣的存在を出来る丈避けたものであることが知られる。

第二幕。兩肢を纏帶し松葉杖を突いたトリストラントが死を覺悟してゐるのを Thinas と Curneful が勧めて外國へ治療に行かせる。そのあとで二人はトリストラントが死ぬと、王様には妃がないから此の國を嗣ぐ後繼者が無くなると噂してゐる。そこへ口上役が來て、トリストラントがアイルランドで或る女醫によつて恢復して歸つて來たと

報告する。之は何と言つても時間關係を無視した脚色上の缺陷であるが、當時の舞臺では舞臺外で起つた事柄を知らせ、筋の圓滑な進行を計るのが、脇役、口上役又は使者の役割(所謂間接法)であつたことを思ふと、ここでも舞臺經濟の上から、口上役がその機能を發揮してゐるわけである。次いでマルクス王がトリストラントと騎士團を連れて登場。王はトリストラントを王位繼承者にしようとするが、彼は伯父王に妻帯を勧める。すると王には意中の人があることが判る。即ち昨日二羽の燕が空中で争うてゐたが、その時空中から落ちて行つた長い髪の毛の持主を望んでゐるのである。だからトリストラントにその婦人を探してくるやうにと命ずる。次いでトリストラントはティナスとクルネファルとともに難船して、未見の國に上陸してくる。彼は走つてくるアイルランド人を捕へて、土地のことを尋ねる。すると今大蛇が此の國を荒らしてゐること、大蛇を退治したものは王女が與へられることを知る。彼は早速大蛇退治に向ふ。それから森の場。トリストラントは大蛇の首を持つて出て来て、疲れたと言つて泉の邊りに休む。そこへイザルトが侍臣 *Peonis* と腰元 *Brangel* を連れて来る。彼女は大蛇殺しの勇士を介抱する。此の時トリストラントはイザルトの長い髪の毛を見て、彼女が求める婦人であることを知る。又イザルトはトリストラントの刀が缺損してゐて、彼女の持つてゐる刀の破片と合致するのを見出す。そこでモルホルトの仇を打たうとするが、ペロニストとブランゲルに色々諫められて、思ひ止まる。以上第二幕も前半はクルネヴェル國、後半はアイルランド國になつてゐて、場所の一致を缺いてゐるばかりではなく、原本とは全く趣が變つて、森の中でイザルトはトリストラントを見出すと、直ちに膏藥を塗つたり、浴みさせたりしよう (*Wir wollen dich salben und baden*) と言ひ乍ら、椅子に腰かけさせて (*Sie setzen Tristrant in ein sessel*) 藥を塗つてやつてゐる。然し乍ら此の幕では第一幕で個別に紹介されたトリストラント

とイザルトが不思議な因縁でいよく巡り逢ふに至る迄の經過を寫したものとすれば、筋の上では一應纏つてゐるし、又森の場面で浴みをさせる代りに、椅子に掛けさせてゐるのも、臺詞に於ては原本によつてゐるけれども、實演の際には舞臺の實狀に應じたものとする事が出来る。尙森や泉のものが舞臺に作られたかどうかは甚だ疑問である。と言ふのが臺詞を仔細に検討すると、トリストラントが「この泉の邊りに腰を下ろし、休息して少しく英氣を養ふことにしよう」(*Mich zu dem brünnlein nider setzen, / AuBrühen, mich ein klein ergötzen*) と言つて横になると、イザルトが出て来て、「どこかの騎士が大蛇を退治して下すつたと云ふ噂だが、「向ふの森を探して見よう」(*Wir wöln in suchen im wald hinden*) と言ひ、それに答へて、「ロニスが「向ふの藪の中で誰か眠つて駢をかいてゐるのが聞えます」(*dort in den stauden, / Höre ich ein menschen schlaffent schnauden.*) と言つてゐるからである。従つて舞臺の一隅に藪が存在すれば、此の場面は十分に上演出来る様になつてをり、イザルトの腰元が野外用の椅子を用意してゐれば、萬事自然に進行するのである。そして此の藪の飾付けがあつたとすれば、それはかの「ガルミ劇」第六幕で用ひられてゐる柵と同様、背後の幕陰から、舞臺一隅に押し出して置けばよいわけである。

第三幕はアイルランド王ヴィルヘルム (*Der könig Wilhelm aus Irland*) がトリストラントに恩賞としてイザルトを與へようとするが、トリストラントは彼女を伯父王マルクスの妃に貰ひ受け度いと言つて、父娘の承諾を得る處から始まる。次いで王妃 *Hildegart* が侍女 *Brangel* に四年の間效力のあると云ふ戀の祕藥を與へ、マルクス王とイザルトの新婚の夜にそれを飲ませる様にと頼む場面。それから船中で、トリストラントとイザルトはともに渴を覚え、彼はブランゲルの大切にしてゐるかの魔藥を飲料と思ひ誤つて、彼女とともに飲む。と

忽ち兩人とも胸中悶々の思ひに堪へられなくなる。このことがクルネ  
ファルからブランゲルに傳へられると、ブランゲルは事の行違ひに驚  
愕し、この上は兩人の戀を叶へてやる他に彼等の生命を救ふ方法はな  
いと言ふ。だが最後の場面ではブランゲルが自分の不注意で恐ろしい  
不幸を呼び起すことになつたと獨り心痛してゐる。處て此の幕では作  
者が意圖してゐるものも、極めて明瞭である。即ち作者はトリストラ  
ントとイザルトの戀愛が彼等の意志ではなく、全く戀の魔藥のため  
であり、責任は寧ろブランゲルにあることを強調して見せてゐるのであ  
る。かくて此の二人の主人公の性格は高貴なものとなることに、彼  
等の運命は誠に同情に値するものとなる。又舞臺構造の上から言へば、  
此の幕の第二場以下は船中であるが、この點に關してはトリストラ  
ントの眞先きの臺詞「今は海を渡つて行く處」(Nun fahn wir dahin  
auf der see.)とあるのと、幕切れてブランゲルが「さて明日は都の  
ティンタリオルに上陸する筈」(Nun morgen man zu-lenden sol/  
Bey der handstat Thintariol.)と言つてゐるので示されてゐる丈で、  
特別に、船中を示す舞臺装置が用ひられたものとは思はれない。と言  
ふのも原作ではこの魔藥の這入つた壘に就いて、酒場のパーテンドー  
が留守で小女が壘を間違へて取り出し、トリストラントに渡すことにな  
つてゐるのを、ここではトリストラント自身が「ブランゲルが旅囊  
の中に壘の中へ入れて持つてゐる。それは最上の白葡萄酒に違ひな  
い。そいつを貴女と私とのためにとつて置きました」(In einem Fäsch-  
lein hat die Brangel / In irem watsack; das muß sein / Der aller-  
beste plancken-wein. / Das hab ich gnunnen euch und mir. / Damit  
wollen uns trencken wir.)と言つて、直ぐにその壘から自らも飲み、  
イザルトにも飲ましてをり、そこに何等の道具立てを必要としない様  
に描かれてゐるからである。

第四幕。マルクス王がトリストラントを待つてゐる處へ、使者が彼

の歸國を傳へて来る。王が迎へに立たうとすると、早くもトリストラ  
ントが登場。彼は王妃を伴つて來た一部始終を報告する。王の深い感  
謝の言葉。そこへイザルトがブランゲルを連れてくる。トリストラ  
ントの紹介の辭があつて、王は歡迎の辭を述べ、次いでイザルトに加冠  
し、大饗宴の準備を命ずる。第二場。Hertzog Anchtat, Graf Rudolf,  
Graf Wolf の三人はトリストラントの宮廷に於ける勢威を嫉み、彼  
と王妃との間に情交があることを王に密告しようとする。そこへ  
王が来る。三人は交々トリストラントとイザルトの不義を訴へる。け  
れども王は信じない。然し彼等を遠ざけた後で、王は獨り不安の念に  
かられてゐる。とそこへトリストラントとイザルトが手を取つて出  
來て抱き合ふ。物隱にゐた王は激怒し、トリストラントを宮廷から追  
放する。彼は一言もなく悲し相にして退場。イザルトも忍び足で去つ  
て行く。王は二度と此の様なことを見たら、突き殺してやると怒り乍  
ら退場。第三場。トリストラントが身の不幸を嘆いてゐる處へ、ブラ  
ンゲルが來て、王妃が彼を待つてゐることを傳へる。宮殿の裏庭の菩  
提樹の下で待つてゐてくれる様に、若し庭を流れる泉水に木片を流し  
てくれれば、その水は王妃の室の中を通つてゐるから、流れて來る木  
片を見て、彼の處へ馳けつけると言ふのである。トリストラントは王  
妃に呉れ呉れも宜敷くと傳言する。第四場。かの三人の訴人がトリストラ  
ントは追放になつたが、實は彼と王妃との間柄は噂丈で、事の眞相は  
了つてゐないのだと話し合つてゐる。そこへ占星術に長じた侏儒が來  
る。彼はアウクトラント候の依頼で天文を占ひ、トリストラントと王  
妃が裏庭の菩提樹の下で夜な夜な密會してゐることを證す。之に力を  
得た三人は、早速この事を侏儒をして王に告げさせ、王をして狩獵に出  
た様を風を装はせ、密會の現場を見届けさせようと相談する。第五場。  
王は侏儒を案内にして出てくるが、二人とも菩提樹の上に登つて (Sie  
steigen beid auf den baum.) 様子を窺つてゐる。やがてトリストラ

ントが来て、赤字のマークの付いた木片を泉水に流す、と同時に樹上の二人の影を水中に認める。彼は驚いて身の危険を知る。そこへイザルトが近づいて来るので、彼は無言のまま水上の人影を彼女に指し示す。それから二人の芝居が始まる。トリストラントは無實の罪で王の不興を蒙たことを、王妃から辯明して貰ひ度いと頼む。だが王妃は如何様に嘆願されても、凡てを拒絶して去つて行く。彼は自分の不運を嘆き、此の上はブリタニヤの Artus 王の處へ行かうと言つて去る。彼が去ると、王は劍を抜いて、嘘偽の證言をした侏儒を刺し殺さうとするが、矮人は逃げて了ふ、あとで王は自分の早まつた處置を後悔し、トリストラントを再び宮廷に呼び戻さうと言ひ、劍を收めて退場。

此の場は却々劇的に脚色されてゐる。原本の挿話的事件を悉く省略して、王とトリストラントとイザルトの三角關係に重點をおき、その關係を展開して見せるために、仇役として三人の貴族を活躍させ、彼等の陰謀の手先きとしては侏儒を用ひてゐると云つた趣向は、既に作者にとつて屢々——例へば「貞節な佛蘭西の王妃」や「ガルミ」——取扱はれた劇的契機である丈に、その脚色も到つて明瞭に集約的に運ばれてゐる。只ここに注目すべきは、舞臺装置の上で一つの新しい試みが行はれてゐることである。それはマルクス王と侏儒が登つて匿れてゐる菩提樹であるが、この木が舞臺の上に存在したことは、之なくしては此場面が成立し得ないことから見て、疑ふ餘地がない。然らば如何にして行はれたか？ 此の點に關しては、ヘルマンはマルタ教會の説教壇 (Die Kanzel) が恐く樹木らしく飾られて用ひられたものであると説明してゐるし (M. Hermann, Forschungen, S. 44 f.) ケスターは工匠達にとつて立木の模造品を作ること位は容易なことであるから、空洞で背後に梯子を取りつけた樹幹を、舞臺に装置したものであると主張してゐる。 (A. Köster, Die Meistersingerhühne, S. 33.) 之は孰れも一理ある立論であつて、實は人の登りうる様な立木がこゝで用ひられ

て以來、此の芝居から約一ヶ月後に書かれた「フォルツナーツス」(後述)の第五幕に於ても、又同年(五十二年)十一月四日作「アブラム、イサクを神に獻納す」(後述)の第一幕に於ても、大きな木が用ひられてゐるから、當時樹木を舞臺に飾りつける工夫が發明されたことは推測するに難くない。そしてその工夫が、ヘルマンの言ふ様に、説教壇を立木に見立てることにあつたとすれば、それは巧妙にして可能な思ひ付きであらう。と言ふのが若しケスターの言ふやうに立木の模造品を特別に飾り付け、それはそのまま此の劇の演ぜられる間中据ゑおかれたものとするのは他の場面の場合に甚だ不自然であり、さればとてそれを必要に應じて舞臺に運んだり、取り去つたりしたものとするれば、俳優以外の者が舞臺に現はれることになつて、劇的感興を亂すからである。事實次の第五幕第一場は場面が全く變り、トリストラントが先きの場面から逃れて來ると、そこへ王の使者としてブランゲルが彼を迎へに來る處で、立木がそのまま残つてゐては甚だ不都合である。之に反して説教壇を菩提樹に代用したものとすれば、その場限りの氣のきいた趣向として其のまま通用したであらう。と言ふのも場面(第五幕第二場)は更らにマルクス王の宮殿内に移つて行くのであるが、その時は説教壇もマルタ教會内のもともから存在する建築の一部として問題にならなくなるからである。だが之は作者がマルタ教會の内部構造を考慮して此の劇を書いたものであると言ふ想定の下に立てられた推定であるから、若し他の場所では此の劇が上演されたとすれば、ケスターの説が有力になつてくる。但しその場合立木の模型は成るべく他の場面が目障りにならない様な場所と形が取られたものと思はれる。尙泉水の装置は、その立木の奥にあると言つた心持ちで、必ずしも必要としない。

扱てマルクス王は再びかの三人の陰謀家の密訴に動かされ、トリストラントとイザルトの間を疑ふ。」次いでティナス候が獨りトリスト

ラントに對する警戒が嚴重になつたことを心配してゐる。そこへクルネファルがトリストラントとイザルトの捕へられたことを報じて來るとマルクス王がアウクトラント候及びかの二人の伯爵を連れて登場。二人の愛人呼び出して、裁判にかけける。ティナス、クルネファル、ペロニス等が足下に伏して、彼等のために命乞ひをするけれども、王はアウクトラントの言を容れて、兩人に死刑の宣告を下す。刑吏が二人を連れて去ると場面が變る。「クルネファルが兩手を搦つて、トリストラントの身の上を心配してゐる處へ、トリストラントはまだ腕に捕縄の付いたまま逃げてくる。そしてイザルトをも助け出してから逃亡するのだと言ふ。」他方マルクス王はかの三人の貴族に、逃亡したトリストラントを捕へるやうに命じてゐる處へ、口上役が來て、トリストラントがイザルトを奪つて逃げたと報告する。王は飛び上つて驚き、直ちに二人の後を追はせる。「トリストラントとイザルトはクルネファルとともに森の中へ逃げて來て、そこに暫く假の住居を造らうと相談する。」次いで王が獵師の風で出てくる。彼は森の中でトリストラントとイザルトを見付けた事、彼等は拔身の劍を間に置いて眠つてゐたので、彼等の間は潔白なものではないかと思はれること、それで二人の布團の上に手袋を置いて來たことを獨語して去る。「その手袋で王に見付かつたことを知つたトリストラントはイザルトに勧められて、王の懺悔僧 *Ugrim* に頼り、王の赦しを願ひ出ることとする。」かくて王は隱者ウグリムによつて連れて來られたイザルトを赦し、トリストラントは國外に追放すると言ふ。」

此の第五幕は以上九つの場面から成り立ち、例によつて敘事的對話や獨白で物語の筋を運んでゐるに過ぎないので、劇的所作に乏しいものになつてゐる。同様に第六幕も七場から成り、會話體の物語に過ぎないものである。追放されたトリストラントは *Careles* 王國でその王女 *Isald* と結婚したが、先きの愛人イザルトを忘れることが出來ないと、

クルネファルに物語る。「イザルトもトリストラントに思ひ焦れてゐる。そこへティナス候が來て、トリストラントの消息を傳へ、彼が近くに來てゐるから、狩獵に托して彼と逢ふ様にと勵める。」次いでマルクス王が出獵の準備を命じてゐる。「すると次の場では *Jacobs-Driff* (巡禮僧) に假装したトリストラントがクルネファルに、愛人も十分樂しむことが出來たから、もう之以上の長逗留は危険だと告げてゐる。」そのあと又トリストラントは *Canis* (彼の正妻イザルトの兄弟) と一緒に出て來て、その後警戒が嚴重で戀人イザルトに逢ふことが出來ないと訴へ、彼女と密會する手段を相談する。その結果馬鹿役に扮してマルクス王の宮廷に忍び込むこととなる。「他方マルクス王は旅に出ようとしてゐる處へ、口上役が馬鹿役を連れて來る。王は彼を宮廷に止めることとして、旅行に出る。あとでトリストラントとイザルトは互にそれと知り、相擁して喜ぶ。」だが次の場ではかの三人の貴族が早くも馬鹿役をトリストラントだと知つて、彼が王妃の室から歸つて來る處を襲ふ。トリストラントは彼等を棍棒で追ひ拂つて逃げる。」

第七幕。トリストラントとカイニス (彼の義兄弟) が登場。カイニスは *Nampeonis* 王の王妃 *Gardalego* を愛してゐる。そこでトリストラントの助力を得て、ガルグレーゴを手に入れようとする。彼は承知して、下僕を連れて出掛ける。次いで彼の妻イザルトは夫の身の上を案じてゐる。處へ下僕の *Ditcha* が來て、カイニスは殺され、トリストラントは重傷を負うたと報告する。やがてトリストラントが椅子に載せられて來る。そして醫者呼んで診察させる。醫者は治る見込みがないと言ふ。彼はイザルト女王の他に此の傷を治す者はないと言つて、彼女を迎へて下僕を派遣する。なほ使者の舟が歸つて來る時、イザルトが乗船してあれば白い帆、乗船してゐなければ、黒い帆を張る約束である。かくてトリストラントは海岸の見張所に人をやつて船



の近づくのを監視させてゐる。今日は妻のイザルトが自分で見張所に行く。あとでトリストラントは一刻千秋の思ひで愛人の來るのを待つてゐる。と妻のイザルトが來て、船の入港したことを告げる。がその帆は黒いと言ふ。それを聞いて、トリストラントは手と頭を垂れ、絶望の餘り身を延して死んで行く。すると彼は長椅子の上に載せられて運び去られると、蔽はれた棺が運び込まれる。(Er streckt sich unnd stirbt, man tregt in auff dem sessel ab und tregt ein verdeckte todenbar ein.) 勿論ここでは彼の死體を運び去り、寝棺を運び込むものは、先きに傷を負うたトリストラントを運んで來た者達である。此の點に就て、口上役と醫者が此の役をしたとするヘルマンの説は當らない。かくて妻のイザルトは自分の一言で夫を殺したと言つて悲嘆する。帆は黒色ではなく、白色であつたのを彼女が偽つたのである。そこへイザルト女王が泣き乍ら出て來て、棺の上に胸を寄せかけて嘆き悲しみ乍ら死んで行く。さすがに妻のイザルトも二人の眞心に感動し、二人を一つ墓に葬つて未來永劫の冥福を祈らうと言ふ――

以上のように此の劇の後半は宛も映畫のシナリオの様に、場面の變化と集約的な對話とで筋を運んでゐるのであるが、しかも之を原本の幾多波瀾に富む冗長にして多岐に渡る物語に比較すると、作者が如何に物語の本筋を正確に把握し、不幸な愛人達の愛の道行きとその最後とを描寫してゐるかが了かる。それがために作者は勿論原本を恐ろしく省略したり變更したりしてゐるけれども、その中には舞臺經濟や劇的效果のために行はれた作者のすぐれた創意も屢々見受けられるのである。例へばイザルト女王を迎へに行くのが下僕のウルリッヒであり、船の黒い帆を知らせるのが妻のイザルトであつたりするのは原物語と異つてゐるとしても、それは登場人物を節約するためばかりではなく、そのために反つて舞臺に於ける印象も簡明にして強力なものになり、効果も増大してゐる。又トリストラントが、かの三人の陰謀家を棍棒

で追ひ拂ふ場面の如きも、作者の獨創によつて附加された劇的所作である。何れにしても此の「トリスタンとイゾルデ」の中世騎士物語を脚色することによつて、ハンス・ザックスは彼の作劇術に更らに一新局面を打開し、言はば映畫のシナリオ的手法を用ひることに自信を得たものと思はれる。かくて「フォルトツナーツス」が續いて脚色された。

此の物語は大衆本として當時既に民間に傳へられてゐたもので(Vgl. Gustav Schwab, Fortunat und seine Söhne, Reclam 1826.) 時間は祖父 Fortus 父親 Fortunatus 及び息子 Ampedo 及 Andolosia 三代に渡り、場所は Zipperm (Cypern), Flandern, London, Bretagne, Constantinopel, Alexandria, England, Hibernia (Irland) に跨がり、到る處でその國の貨幣が湧き出す魔法の財布と、思ふ土地へ一瞬にして飛行することの出来る魔法の帽子が不思議を演ずると言ふ童話的冒險奇談であるから、當時の簡單な舞臺と幼稚な演出法では、それを劇化するに當り容易ならぬ困難があつたと思はれる。それにも拘はらず此の作が存在するのは、作者の多年の修練、特に前劇の經驗が預つて力あつたものであらう。従つて此の劇では「時間及び場所の一致」が前劇より更らに完全に無視されてをり、その缺陷を幕の切り方で補ふことも考慮されてゐない點で代表的作品であるとされてゐる。(Vgl. Julius Titmann, Dichtungen von Hans Sachs. III. T. S. XXII.) 然し乍らその脚色を原作物語と比較する時は、「トリスタン劇」と同様、この長大な物語を主要な契機によつて上演可能な範圍に壓縮改變してゐる作者の劇作法上の手腕は、高く評價されるべきものである。

第一幕はキプロス島のフォルトツナーツスが父親フォルトツスと訣別して旅に出て行く場面、次いで彼がフランデルンでその貴族達に嫉まれ威かされて逃げ出す場面から成つてゐる。即ちフォルトツナーツスが幸運を求めて冒險に出ると云ふ理由と、第一の冒險談とを示してゐるわ

けてあるが、そこで早くも此の作者得意の宮廷の陰謀が取扱はれてゐる。第二幕はフォルツナーツスがロンドンから逃れて来て、プレターニユの森の中で幸運の女神に出逢ひ、魔法の財布を授かる場面と、老貴族 Leopoldt を雇入れて世界旅行に出かけようとする場面、第三幕はコンスタンチノーブルでフォルツナーツスが魔法の財布から宿屋の主人に金を拂ふ場面、宿屋の主人が彼の財布を盗まうとして、ロイポルトに切り殺される場面。次いでアレキサンドリアでサルタンやその側近のものに莫大な贈物をして信用を得、王自慢の魔法の帽子を手に入れる場面。しかもここで注目すべきことは、此の二つの事件がフォルツナーツスの多くの冒険談の中でも特に重要で劇的であるのみならず、簡単に上演しうるものである點を、作者が見逃さなかつたことである。恐く魔法の財布から幾らでも金を取り出して見せるところは奇術的觀物であつたであらうし、又魔法の帽子を被り「キプロス島に行き度い」と言つて、フォルツナーツスが飛び去る。(Fortunatus fert darvon.) ところも、彼が最短距離を走つて姿を消す様に、仕組んだものであらう。

第四幕。故郷へ歸つたフォルツナーツスはかの二つの寶物に就て、息子のアンペドとアンドロジアに遺言して死ぬ。即ち二つの寶物とは好な文金を取り出すことの出来る財布、被ると何處へても自由に飛行出来る帽子であるが、その效力は二人の兄弟が二人とも生きてゐる間丈續くと云ふのである。だからフォルツナーツスの結婚、印度への旅行、帽子を奪はれたサルタンの後日譚等はすべて省略されてゐるわけである。次いでアンドロジアは兄のアンペドから魔法の財布を借りて旅に出る。すると舞臺は英國。女王と王女 Agrippa とがアンドロジアの身分來歴を話し合つてゐる。アグリピーナは既に彼の持つてゐる財布の祕密を知つてゐる。だから腰元 Imeldraut の計略で、アンドロジアは麻酔薬を飲まされ、アグリピーナに財布を盗まれる。そこ

で彼は故郷へ歸つて来て、兄を瞞して魔法の帽子を取つて行く。この中英國の場面は極めて要領よく脚色されてゐる。處でこれ以後は原本によると、魔法の帽子の力が利用されることになつてゐるのであるが、作者はアンドロジアが帽子を用ひて空中飛行する場面をそれが實演不可能であるためか、出来る丈避けてゐるやうに見える。と云ふのは原本では兄から帽子を借りると直ぐそれを被つて飛んで行くことになつてゐるのに反し、ここではアンドロジアがアンペドから帽子を渡されると、兄の方は退場し、その間に弟は悠々と今後の計畫を獨語し乍ら出て行くことになつてゐるからである。

第五幕。此の邊から作者は又例のシナリオ式技巧を用ひてゐる。場所は再びロンドン。アンドロジアは變裝して寶石を賣つてゐる。そこへアグリピーナ姫が腰元イルメルドラウトを連れて通りかかり、腰元をして彼を呼ばせる。三人が去ると、口上役が現れ、王女が澤山の寶石を買はれるが、結婚の準備でもあらうと獨語して去る。と腰元が馳け込んで来て、寶石屋が姫を抱いて、窓から飛び去つて行つたと悲嘆する。之は要するに間接敘法を用ひてゐるわけであるが、それは一面舞臺經濟のためであるとともに、アンドロジアとアグリピーナとが空中飛行する場面を避けるためでもあつたと思はれる。處が次の場面になるとアイルランドの森の中で、アンドロジアが王女のために石榴の木に登つてその實を取つてやると、その間に姫は帽子を被つて英國へ飛び去つて了。(Androsia steigt auf den Baum..... Agrippa fert mit dem wunschüttelein dahin.) 處が實演されてゐる。だがここでは森の中であるから、舞臺では「トリスタン劇」で用ひられたと同様な立木と藪疊があれば、アグリピーナは急速にその藪の陰へ走り込むことで、演出出来るわけである。それからアンドロジアが石榴の實を食へると二本の角が生える處、隱者が出て来て、別の石榴の實を教へられ、それを食へると角が落ちる處。かくて隱者から道を教へら

れて、彼は懇ろに別れを告げる。かうして見ると此の幕は結局劇的な石榴の實の奇蹟に重點を置いたもので、寶石屋の場面は單に森の場面の導入部に過ぎないのである。と言ふことは作者が上演の可能性と効果から見て、前者の場面より後者の場面を選んだとすることが出来る。

第六幕はアンドロジアが二種類の石榴の實を用ひて、アグリピーナに復讐する物語を取扱つてゐる。彼が片眼の土耳其の薬師に變装して石榴の實を腰元イルメルドラウトに賣る場面。アグリピーナに角が生えて、彼女の苦しんでゐる場面。腰元が大鼻の醫者に扮したアンドロジアを雇入れる場面、次いで使者役が出てアグリピーナに角が生えたことを報告してゐると、腰元が馳け込んで来て、醫者と王女とが窓から飛び去つて了つたことを告げる。即ちここでも作者は間接敘法によつて窓や飛行の實演を避けてゐる。かくてアンドロジアはアグリピーナを又もや森の中へ連れて来て、魔法の財布を取り戻す。そして彼女を罰するために、角を生やしたまま、アイルランドの僧院へ入れると言ふ。彼女も自分の醜姿を恥じて「早く飛んで行きませう」と答へる。(Nun fahr wir hin in Gottes namen.) だがそのあとに「彼等は急いで退場」(Sie gehen eilend ab.) と卜書にあるから、ここでは未だ「空を飛ぶこと」は舞臺の上を走ることであつたことが愈々明らかである。そして最後の場面で、アンドロジアはキプロス島に歸つて、兄アムペドーに二つの寶物を返し、爾後は此の島で平和に暮らさうと語り合つてゐる。

第七幕。キプロス島の宮廷。英人 Theodorus 伯と Graf von Limosi とがアンドロジアの勢望を羨み、彼を襲うて監禁しようかと相談する。すると次の場面で、兄アムペドーの處へ急使が来て、アンドロジアが魔法の財布とともに行方不明になつたことを知らせる。アムペドーは魔法の財布が效力を失ふ様にと、自分の持つてゐる魔法の帽子を引き

裂き、自分も死ぬ決心をする。最後にテオドルスとリモージの運命が示される。リモージはアンドロジアを責めて、財布を手に入れたと言へば、テオドルスはその後で彼を殺して了つたと告げる。そのため魔力を失つた財布は最早や金を産まない。そこでテオドルスはリモージが寶物を掴ませたと言つて怒る。遂に二人は拔劍して争ふ。そこへ捕吏が来て二人とも殺人罪で捕縛される。そして最後の場面。キプロス王は二人を呼び出し、車裂きの刑に處す――

かくて此の不思議な童話は四人の死者を出して、悲劇的結末を告げる。勿論作者は例によつて大部分敘事的對話で場所や前後の狀況を知らせ、使者役を隨所に用ひて、物語の間隙を埋めてゐるから、非劇的な場面が少くないけれども、しかも各幕には必ず觀客の目に訴へて興味ある劇的所作が挿入され、それが當時の簡單な舞臺と演出技術に適合する様に仕組まれてゐることを知らなければならぬ。

扱つてハンス・ザックスは此の童話的綺談「フォルトツナーツスと魔法の帽子」を脚色することによつて、今や如何なる種類の素材をも劇化する丈の自信と能力とを得たものと思はれる。恐く詩人の作劇術は此の劇に於て當時の幼稚な工匠歌人舞臺と舞臺上の制約とによつて上演しうる限りの極限を利用してゐると言ふことが出来るであらう。従つて此の劇はザックスの過去の創作劇の總決算であるとともに、將來に於ける彼の演劇活動の規準をなすものとなる事が出来る。何れにしても今後詩人は大膽に取材し、勇敢にそれを演出することを恐れなくなつたやうに見える。此の事は「フォルトツナーツス劇」に次いで同じ年創作された二篇の悲劇「祭司エリとその不良兒達」(1553, 8, 27.) と「イサクの獻納」(1553, 11, 4.) 及び翌年五十四年に出来た二篇の悲劇「夫殺しのクリティメストラ」(1554, 1, 2.) と「トロヤ城の破壊」(1554, 4, 28.) を見ても知られる。即ち前二者は舊約聖書サムエル前書第一章――第四章と創世記第廿二章によつたものであり、後の二曲は

ホメル傳説圈特に *Wahnhafte Histori und Beschreibung von dem Trojanischen krieg und zerstörung der Stat Troie durch Dictyn Creussem und Daren Phrygium, Deutsch durch M. Tattus, 1536. Frankfurt bei Ch. Egenolph. (Im Besitz des Dichters.)* によつたものであるが、何れも作者の取材の範圍が擴大され、その脚色法が愈々老巧味を加へて來たことを示すものである。

先づ「祭司エリとその不良兒達」では第一幕に於て Elkana が妻 Hanna と相談して、「子 Samuel を神の宮仕へに出さうとする場合と、祭司エリが二人の不良兒 Hophni と Phineas に祭物の用意を命じて、彼等から馬鹿にされる場面と、少年サムエルが祭司エリに引渡される場面とから成り立つてゐるが、之れ丈見ても聖書の如何にも簡素な平面的な敘事物語が、平明な立體的な劇的對立に變更されて來てゐるのが判かる。ことに第一場でエルカナが妻のハンナに、神の申し子であるから、サムエルを神に捧げなければならぬと因果を含め、ハンナも母親としての愛情を殺して、それに従ひ、サムエルも父の吩咐を従順に守らうとする邊りは、一幅の市民的家庭風景とも言ふべく、聖書で單に「乳ばなれせしとき、牛三頭粉壹斗酒壹囊をとり、その子を携へてシロにあるエホバの家<sup>いとけな</sup>にいたる。その子なほ幼稚し」とあるに過ないのに比べて、作者の構想力の豊さを示すものである。更らに敬虔なエルカナ一家と祭司エリの不敬な子供達を對立させて冒頭で紹介してゐるのも、巧妙な劇的發端である。

それから第二幕で聖書の第二章十二節——十七節に相當する部分がホフニとピネハスの對話で示され、祭司エリの教訓も息子達には馬鹿にされるばかりである。第三幕は聖書第二章二十七節——三十六節にある神の人(Der prophet)がエリを訪れる場面である、エリがサムエルと登場する。と「神の人が戸を叩く」(Der prophet klopf an.)とト書があり、エリが「わが子よ! 行つて誰が戸を叩いてゐるか見

て御覽!」と云ふ。すると「サムエルは出て行き、歸つて來て言ふ」(Samuel geht, kombt wider unnd spricht:)とあつて「神の人が神様から何かのお告げがあると云つて來てをられます。」と復命する。だから此の場面でもまだ舞臺の上に戸口が設けられてあつたのではなく、舞臺の出入口で「戸が叩かれた」ものと思はれる。そしてサムエルは一端舞臺裏に出て、それから又引返して來たもので、従つてその時交されたサムエルと神の人のとの應答の臺詞は必要がないから、記されてゐないのである。神の人が去ると、エリは子供の教育を誤つたことを長々と述懐し、サムエルに神を敬ふことを教へ、彼を就寢させる。それからエホバがサムエルを三度呼ぶ場面となるのであるが、これも聖書では「サムエル神の櫃あるエホバの宮に寢る」とあるけれども、サムエルは祭司エリの傍で直ぐ横になる (Samuel legt sich) ことになつてゐる。

それから第四幕で、イスラエル人とペリシテ人(Die Philistiner)の戦を、エリとサムエルが憂慮してゐる處へ、戰場から使者が來て「契約の櫃」を求め、かの二人の不良兒ホフニとピネハスが厭やく乍ら父に命ぜられて、その櫃を戰場へ持つて行くこととなる。即ち戰場の記述が聖書と違つて、使者の口を通じて間接に物語られてゐるのは、此の作者の既に屢々用ひてゐる舞臺技巧である。

第五幕の第一場は聖書第四章五節——九節に當る場面であるが、ペリシテ人の陣營を寫すに當つて、作者は Gasa と Thimnat なる二人のペリシテ人の兵士を登場させ、その對話で「エホバの契約の櫃陣營にいたりしとき、イスラエル人みな大いに叫びければ地なり響けり」の状況を寫してゐる。次いでエリとサムエルとエリの娘、即ちピネハスの妻サフラ (Saffra, die schnur) とが登場、Ariel なる兵士が敗戦を報してくる。エリは椅子からひつくり返つて死ぬ。(Eli felt hinter sich vom stuhl zu todt.) サフラも悲嘆にくれ、やがて死ぬて

あらうと言つて悲し相に退場。勿論聖書にある様に子供を生むことは出来ないから、彼女の臺詞で、生れて来る児供には *Icabod* (イカボド、榮無し) と名付けることが告げられてゐるのみである。あとでサムエルが、此の様な悲惨な結果になつたのは、エリが子供の躰を誤つたための神の罰であると教訓し、「では死者を墓に運び、神の恵が再び加はる様に、凡ての罪惡から遠ざかられよ」と結ぶ。そして皆々整列して退場 (*Sie gehen in ordnung ab.*) とあるから、兵士アリエルが死んでゐるエリを運び去り、それから、登場人物一同が舞臺に勢揃ひし、行列を立てて退場した物と思はれる。かくて口上役の結辭。

此の劇は同じく愛子を神に獻げると云ふ同一趣向からなる次の劇「イサクの獻納」を當然連想させる。だから後者は一段と劇的構想に於て優れてゐるものがある。劇は創世記第十八章一節—二十一節に相當する部分から始まる。アブラハムは家の戸口に腰を下ろし、通りかかる旅人に供養をしようとしてゐる。とそこへ主が二人の天使とともに現れる。アブラハムは立ち上つて、主の前にひれ伏し (*Abraham steht auf, fällt für in nieder*)、「足を洗ふ水を取つてくる間、この樹陰に休んでゐて下さい。一口のパンも取つて來ませう」と言ふ。神はそれを受け入れるが、勿論聖書にある様に、アブラハムに饗應の準備をさせる隙を與へず、追ひかけて「お前の妻 Sara はどこにゐるか？」と問ひ、アブラハムが「小屋の中におりますが、何か御用ですか？」と答へると、主は「明年の今頃サラに男の子が生れる」と告げる。すると之を聞いて、サラは戸の背後で獨り言を言ふ (*Sara redt wider sich selbst hinter der thür.*)「わたしはもう九十歳にもなつてをり、主人と楽しむこともないから、どうして子供が生れようか」と。主はアブラハムに「サラは何故笑ふのか？」と訊く。サラは「どうしてどうして笑ひなど致しません」主「いや笑つた。だからよく聽け。一年経つてお前の處へ來て見るが、その時は屹度男の子が出來てゐる。」それか

ら主は *Sodom* (ソドム) の號呼を見るために去つて行く。あとで今の神の言葉を疑つて止まないサラに對して、アブラハムが懇々と神の力が宏大で、人間の淺はかな智慧では推測出來ないことを説いてきかせる。それは誠に老夫婦の睦しくも美しい風景で、作者の創意になる優れた對話である。處で此の場面では舞臺に家の戸口と立木が必要である。即ちエホバが「此の樹の陰に休む」ための樹木があり、それから程遠からぬ處に門扉がなければ「サラが戸の背後で獨り言する」場面が實演出來ないことになる。だから恐く謝肉祭劇「井戸の中の女房」で既に見たやうな戸口の飾付けが、舞臺劇で行はれるやうになつたのは、此の劇から始まると云ふことが出來るであらう。

次いで聖書第二十二章一節—二節が第二幕に宛てられてゐるが、こゝでも聖書の簡明な記述に比して、作者は甚だ劇的な肉付けをしてゐる。アブラハムは神から一子を授けられたことを感謝してゐる。とそこへ主が現れ、彼の信仰を檢して見よう云々と獨語し、アブラハムを呼ぶ。そしてイサクを神に獻げることがを要求する。處で聖書では、神の告げがあると直ちにアブラハムは燔祭の準備をして、神の示した處へ出掛けることになつてゐるが、作者は主の退場したあとで、アブラハムをしてサラを呼ばせ、又もや此の老夫婦の心理的葛藤を詳細に寫してゐるのである。それはエルカナとハンナがサムエルを神に獻げようとして決心する場面を更に一段と發展させたものである。サラは神の御告げが餘りに残酷だと言つて、却々信じようとしなない。それをアブラハムが神意の計るべからざることを順々と説いて説得する。そこには信仰と人情との對立が大きな問題として取り上げられてゐる。

第三幕は先づ第二十二章四節—八節に相當する部分がそのまま脚色されてゐるが、アブラハムがイサクに柴薪を負はせ、二人の下男 *Simri* と *Mesech* をあとに残して、山へ登つて行くと、あとに残つた下僕達が一昨夜以來主人夫妻の嘆き悲しむ聲を洩れ聞いたと言つ

て頻りに怪んでゐる。主人夫婦は何不足ない身分であり、穩なしい男の子迄授かつてゐるのに、何が其麼に悲しいのであらう。殊に出立の朝のごときは母親サラが息子を抱いて、もうこれが見取めかなどと嘆いてゐたのはどうしたことか？ と噂してゐる中に、番をするやうに命ぜられてゐた驢馬が居なくなつてゐるのに氣が付いて「大變だ、大變だ！ 驢馬が何處かへ行つたぞ。森の中で狼にでも殺されなければよいが。」と馳け出して行く。此の場面も作者の創意によるものであるが、アブラハム夫婦の恩愛の情を寫さないでゐられない人情詩人の詩情が窺はれて、興味深いものがある。しかもここで驢馬が舞臺で用ひられてゐるのは、今迄に見られない新しい試みである。此の驢馬は燔祭に必要な柴薪を荷つて來たもので、アブラハムはイサクにその薪を擔せ、少年達に驢馬の番を命じて、山へ登つて行くのである。少年達が去ると、アブラハムは薪を負うたイサクを連れて出てくる。彼は薪で祭壇を築き (Abraham baut den altar mit dem holz.) イサクの兩手を縛る。そして驚く息子に因果を含めて、祭壇の上に彼を横へる。彼が息子の髪を毛を取つて、刀を高く振り上げ、正にうち下さうとする時、天使の聲が呼ぶ。かくてイサクは赦されて、牡綿羊がその代りに獻げられることとなる。そしてアブラハムはその羊を取り、下僕達は薪を負ひ、皆々整列して退場する。だからここでは又牡綿羊が舞臺に用ひられてゐるが、此の羊は天使が退場した後で、下男達が連れて出て來たものに相違ない。それでなければ最後の卜書に「アブラハム牡綿羊をとり、下男達は薪を取る云云」(Abraham nimbt den wider, die knecht das holz und gehen alle in ordnung ab.)とあるその下男達が、どうして此の時舞臺にゐるか解釋が出来ないからである。兎に角之によつて工匠歌人の舞臺では餘り大きくない家畜類(謝肉祭劇泣く小犬参照)が用ひられる様になつて來たことを知りうる。因に此の劇は晩年更らに改作されて七幕に擴充されてゐる(第十五章

「アブラハムとロト」参照。  
却説北歐の古傳説と聖書物語に次いで、作者が好んで脚色したものは、希臘羅馬の神話や史實であるが、今や此の方面に於ても彼の劇作法は著しい進歩の跡を示すやうになつて來た。それはさきの聖書劇でも見た通り、主として素材の敘事的敘述を劇的場面に更新し、努めて劇的對立を鮮明にして、そこから劇的葛藤を發展させてゐる技法にあり、此等の點に關して作者は殆ど何等の苦心も拂はず、極めて自在に且つ自然にその詩想を驅使してゐるやうにさへ見えるに至つてゐる。此の意味に於て「夫殺しのクリティメストラ」と「トロヤ城の破壊」とは作者の劇作が漸く圓熟期に這入つて來たことを示すものである。「クリティメストラ」では此のミケーネの王妃が夫アガメムノン (Agamemnon, könig Micenarum) を殺すに至る原因を、祭司エギスツス (Egistus, der priester) の奸計に歸してゐるのであるが、此の趣向は、此の物語を宮廷の陰謀劇たらしむるもので、作者にとつては既に度々用ひた得意の劇的契機である。Chimæra は十年不在の夫の身の上を心配して、祭司エギスツスをしてデュピターの神意を伺はせる。二人が神殿へ去ると、二人の侍臣 Dion と Cleon が來て、トロヤ戦争の話をし、國王アガメムノンの徳を讚へる。やがて彼等も職務を執るために退場。すると先きに王妃、次いでエギスツスが來て、神託があつたことが物語られる。即ち彼は神託だとして、アガメムノンが Casanda の美貌に迷ひ、彼女と婚約して家郷の事を忘れてゐると言ふ。クリティメストラは瞋恚の焰を燃やし、復讐を誓つて去る。とエギスツスは王妃を首尾よく欺いたことを喜び、やがて彼女を自分のものにするのだと獨語する。かくてその結果は第二幕の始で二人の侍臣 (Die zwen kennelings) の對話で示される。王妃と祭司との邪戀は宮中の評判になつてゐる。——と言つてディオオンとクレオンは國王の歸還を待つてゐる。やがてクリティメストラがエギスツスと來るの

て二人は避ける。彼女は手紙をエギスツスに示し、國王歸還の通知があつたと言ふ。そして彼等の不行跡を國王の眼から隠蔽するために色々と相談するが、結局王妃が妊娠してゐるので、國王を殺すより他手段がないとクリティメストラが云ふ。かくて國王暗殺の手筈が詳細に取り決められる。愈々アガメムノンが歸つて来る。第三幕では國王が無事歸還出来たことを喜び、貞淑な王妃との再會を待ちかねてゐる。彼はカサンドラを呼ばせて、今後の運命を豫言させる。豫言は國王とカサンドラが王妃によつて殺されることを告げる。勿論王は王妃を信頼して、其の豫言を信じない。だが國王が王妃を信頼してゐればある程、その信頼が裏切られた時の悲劇的感動は大きい。従つて此のカサンドラの場面は作者が劇的效果を狙う巧妙な措置であるが、作者にとつては此の種の對立の效果に就ては既に十分經驗済みのことであるから、如何にも自然に物語の一部として運ばれてゐる。王がカサンドラを連れて去ると、デイオンとクレオンが来て、王妃とエギスツスが彼等を買収しようとして金をばら撒いてゐるが、王を裏切ることが出来ないと話し合ふ。入れ代つてクリティメストラとエギスツスが来る。彼女は顛へ戦くエギスツスを威嚇して、夫を暗殺するやうに強いる。即ち物陰にかくれてゐて、アガメムノンが更衣をする時、飛び出て刺し殺すと言ふのである。王が家臣を連れてくる。そして王と王妃の間に涙組ましいばかりの再會の場面があつて、王妃は新しい着物を薦める。王が王服(das purpur-kleid)をとつて兩腕を通し、着物を頭から被ると(此の服は故意に袋狀に作られてゐて頭を抜く口がない)エギスツスが馳けよつて彼を刺し殺す。王は倒れる。皆々武器に手をかける。とエギスツスが家臣達を威嚇して鎮める。カサンドラは悲痛の叫びを擧げる。彼女の豫言は必ず適中するけれども、亦必ず誰にも信ぜられないのである。然しクリティメストラは夫アガメムノンの情婦だとして、彼女を絞首刑に處する。かくてカサンドラが首に繩を懸けら

れて、曳かれて行くと、エギスツスは明日市場で國民一同に此の事件の理由を説明すると言ひ、王の遺骸を運ばせて、皆々とともに退場。以上此の幕は毒婦クリティメストラと臆病卑劣なエギスツスの對立、愛情に溢れた平和な夫婦再會の場から、忽ち暗殺の修羅場を現出する變化、その餘韻としてカサンドラの悲劇を配した邊り、誠に此の作者としても從來に見られない劇的場面を描き出してゐる。

第四幕はアガメムノンの遺臣 Talthybius が Idomeneus に王の息 Hercules を托してコリントに逃がしてやる處、次いでデイオンとクレオンがエギスツスの即位、ヘレステスの逃亡、王女の誕生等に就て噂してゐる處、更らに七年後に及んでヘレステスがメルクル神からアテインの Strophus を訪ね、そこで味方を募つて父親の復讐をするやうにと告げられ、イドメネウスとともに、コリントを出發する處が取扱はれてゐる。此の中第三場は例によつて場所と時間との連關を飛躍させてゐるが、此の幕全體がヘレステスのコリント時代を取扱つてゐるものとすれば、之も從來度々見られた様な舞臺經濟上の約束を用ひてゐるわけである。かくて第五幕でヘレステスはクリティメストラとエギスツスを刺し殺す。と彼等の娘 Erigona が家臣達に彼を殺人罪で訴へる。そして場面はそのまま法廷となり、裁判官 Mnesteus 原告 Eriphona、被告ヘレステス、陪審官 Menelaus, Idomeneus 等の陳述があつて、結局裁判官はヘレステスを無罪とし、彼に王座と王冠を興へる。Eriphona は絶望し、自決を決意して綱を持つて退場。そして判官ムネステウスは新王が見出され、復讐は遂げられ、國內に平和が立ち歸つたことを宣言する。即ち之も又作者得意の裁判の場であるから、筋書は至つて自然に進行してゐる。

次の「トロヤ城の破壊」は Achilles の Polixena に對する求愛を中心にして構成されてゐるが、ここにも作者は從來の演出によつて試験済みの幾多の技巧を活用してゐる。既に第一幕第一場で、希臘軍に



包圍されてゐるトロヤ城内を寫し、Priamusが三人の息Hector, Paris, Plemphebusと戰の形勢を評定して、戰意を固めてゐるのは、「サマリアの包圍」や「エルサレムの包圍」を思はせるものがある。それからCasandraがトロヤ城の運命を豫言して容れられず、監禁される。しかも此の場面は次の希臘陣營でアヒレスが親友Patroclusにポリクセナに對する戀の惱を打ち明ける場面と對立するもので、かくの如き對立關係を強調して、劇的葛藤を發展させて行くのも、作者の好んで用ひてゐる脚色法である。尙アヒレスのために求愛の使者としてパトロクルスがポリクセナの母親Hecubaの處へ出掛けて行くやうになつてゐるのも、Dictys Cretensisのトロヤ戰史にある如くAutomedonがHectorへ行くよりも合理的であり、人情的である。かくて第三場では此の兩陣營の交渉の第一歩が踏み出される。ヘクバとポリクセナが戰亂を嘆いて平和の到來を願つてゐる處へ、パトロクルスが來て、アヒレスの求愛と、求愛が成功すれば和平を招來することが出來ると提議する。二人の女性は平和のためならと、アヒレスの求愛を容れるが、そこへ折りから來合せたヘクトルが過酷な條件を持ち出す。即ち二人のAyaces (Aias=Ajax)を引渡さなければ、妹を遣るわけには行かないと言ふのである。此の條件は次の幕でパトロクルスがアヒレスに報告する處で、更らにPisteusの息子達をも殺すことを要求してゐるから、益々過酷なものとなり、アヒレスとしては到底容れることが出來ない。彼は愛人に對する激しい情熱と味方に對する厚い友誼とに板挟みになつて懊惱苦悶する。それをパトロクルスが今は寧ろ武器をとつて積惡のトロヤを亡ぼし、戰勝者として愛人を手に入れる方が正しいと勧める。かくて葛藤は愈々深刻になつて行く。他方ヘクトルは益々戰意に燃えてゐる。弱氣のパリスが諫めるのも諾かず、丁度來かかつたパトロクルスに挑戦して、遂に彼を倒す。作者得意の血闘の場である。ヘクトルがパトロクルスの甲冑を剝いてゐると、アヒレスと

アヤックスが來る。さすがに此の二人に素制されて、ヘクトルはそのまま退場するが、あとでアヒレスの悲嘆と復讐の念は、彼のポリクセナに對する愛情を克服したかに見える。かくて二人はパトロクルスの遺骸を運び去る。(Sie tragen den toden Körper ab.) 因に作者は舞臺に死體を残さないために、常に注意深く配慮してゐるが、此の事は觀客席に向つて幕が無かつたことを、今や明確に斷定せしめる。今や敵味方の戰意は一觸即發の状態にある。第三幕ではそれが具象的に展開される。トロヤ方は再び軍議を開いてゐる。アマツオーネンの女王 Penthesileaが援軍を卒いて今夜到着するのを、ヘクトルが迎へに行くと言ふのである。それを間牒によつて知つたアヤックスはアヒレスに此の機を脱はさず、ヘクトルを打ち取れと勧める。かくて兩雄相闘ふ決戰の場となる。二人が劍を抜いて追ひつ追はれつ長い間戰ふ場面 (Sie kämpfen, treiben an einander lang umb, bis Hector fällt.) は、作者が是迄度々脚色してゐるものであるが、ここではそれが更らに重大な劇的展開を齎すのに役立つてゐる。と言ふのが此の勝利によつてアヒレスの心理は甚だ複雑なものになり、それが續いて展示されてくるからである。ヘクトルが倒れると、アヒレスは彼の死骸を凌辱しようとする。處へ口上役が來て、プリアムス王からの使者だと言つて、死體の引渡しを願ふ。勿論王の申出を拒絶したアヒレスも、それがポリクセナの切なる願だと言はれては拒むことが出來ない。彼は兄を殺しては妹の愛を得ることも出來なくなつたと悄然として退場する。そのあとへヘクバとポリクセナが來て、ヘクトルの遺骸に取り繼つて悲嘆にくれ、故人の功績を稱へ、無慚な死を惜しみ、綿々として盡さない。漸く二人はその遺骸を棺臺に載せて運び去る。かくて血は血を呼び、復讐は復讐を呼ぶ。

第四幕でアヒレスは愛人との縁が斷ち切れたことを悲しんでゐる。それをアヤックスが慰め、武術大會が行はれるからと言つて、彼を氣

鬻らしに連れ出す。と他方それと對立して、トロヤ方ではヘクバがパリス、プロイフェブス、ポリクセナ等とヘクトルの復讐を謀議してゐる。そしてアヒレスがポリクセナを未だに愛してゐるのを利用し、ポリクセナから逢引の手紙を送り、彼を誘ひ出して殺さうと云ふことになる。即ちここでも作者は「宮廷の陰謀」を主要契機として應用してゐる。しかも此の陰謀は陰謀に参加してゐる人物の立場と心理との詳細な開陳によつて、極めて鮮な印象を與へるやうに描かれてゐる。同様に次の幕第一場、淋しいアポロの神殿で密會が行はれ、アヒレスが遂にパリスとプロイフェブスに不意を襲はれて殺される場面も、その氣分と人物の動きに一段と行き届いた描寫を示してゐる。孰れにしても此等の點は結局作者が從來の經驗によつて習得した作者得意の劇構成法の應用であるが、此の劇に至つては、人物の性格や心理状態から劇的葛藤を導き出してゐることを見るのである。さればアヒレスが殺されると、パリス等は彼の死體を尙も凌辱しようとするが、ポリクセナは嘗つては自分を熱愛し、自分を愛するが故に今殺されて行つた此の勇士に、さすがに哀憐の情を覚え、彼を厚く葬ることを願ふ。かくてヘクバがアヒレスの遺骸を布で蔽うて、一同は去る。とアヤックスと Nestor がアヒレスの安否を氣遣つて探しに來る。彼等は死骸を見付けて慟哭し、又もや復讐を誓ひ、盛大な葬儀を營まうと言つて、死者を運び去る。勿論此の最後の場は次の幕で希臘方の復讐が行はれるための用意であるとともに、從來も用ひられてゐる死者を舞臺から運び去るための舞臺上の技巧<sup>テクニック</sup>でもある。

然し乍らアヒレスとポリクセナの悲戀は之で終るのであつて、次の第六幕は全く補足的な附加物である。アヒレスの息 Neoptolemus が父の仇討を誓つてゐる處へ、アヤックスが來て、葬儀が盛大に行はれた事、トロヤ攻略の策がなつたこと、パリスは Philoctet に殺されたこと等を話す。他方トロヤ方ではヘクバが希臘軍の退却したことを喜

べば、ポリクセナはその退却に不審の念を抱いてゐる。二人が去るとプリアムス王が來る。彼も平和が回復したと言つて、安堵して眠りに入る。とプロイフェブスが馳け込んで來て、希臘軍が城中に侵入して來たことを告げる。味方の Eneas, Athenor が敵と共謀して裏切つたのである。プリアムスが彼と一緒に逃亡すると、ネオプテレムスが血のついた拔身をかざして來る。彼は既にプリアムス王を刺殺し、Dewlebus (アヒレスを殺したプロイフェブスの事。ザックスは此の名を Ferneste Historien und exempel von widerwertigem Glück durch Joannem Boccacium etc, 1545. から取つた) を慘殺して來た。城中には火がかけられ掠奪が行はれてゐる。と言つてゐる處へアヤックスがポリクセナを連れて來る。かくてネオプテレムスはアヤックスが彼女を助けよと言ふのにも拘はらず、父の墓の上で復讐するのだと言つて、王女の手を縛す。ポリクセナは既に覺悟を決めてゐる、一家眷屬すべて殺された今は、最早や生きて恥を残す考はない。彼女は捕虜となつた母とカサンドラの幸福を祈り乍ら、ネオプテレムスに曳かれて行く。

以上の様に此の幕も複雑な事件を集約的によく纏めてゐるが、しかもそれ丈無理があり(例へばプリアムス王とプロイフェブスが逃亡すると直ぐネオプテレムスが出て來て、彼等を殺したと言つてゐる)第五幕迄との連關も稀薄であつて、冗漫の感しを起させる。だが當時の作者の立場からすれば、かの「不幸な女王ヨーカーカスタ」第五幕と同じやうに、物語の「始め、中、終り」を觀客の眼前に展開して見せることが、劇作の重要な條件であつたことを、ここでも忠實に遵守してゐるに過ぎないのである。

なほ當時作者は二篇の喜劇「義を重んずる隊長カミルスとヴァリス」市の不忠なる學校教師」(1553, 12, 8.)と「女王ベルゾネス、哲學者アリストテレスを騎り廻す」(1554, 1, 20.)を書いてゐるが、孰れも古

代希臘羅馬の傳説から取材したもので、前者は Titus Livius の *Römische Historien* etc. 中の羅馬の勇士 *Cincinnatus* の物語をそのまま忠實に脚色してをり、後者は *Rosenplüt* の作とされてゐる *Ein spieler von fürsten und herren*. (王侯貴族の芝居。中獨演五七六頁參照) で既に劇化され、同じくローゼンブリュートの「或る貴族とその妻」(中獨演五五六頁參照) やゲンゲンバッハの「十の年代」(中獨演六二〇頁及宗改演第二章參照) 等の中で屢々言及されてゐる有名なアリストテレス傳説である。しかも注目すべき事は、兩者とも作者が好んで取扱つてゐる一種の陰謀劇である丈に、甚だ輕快に物語が進行してゐることである。即ち前者では *Araso* なる *Valisco* の學校教師が自分の預つてゐ

る生徒達を敵將カミルスに引き渡して恩賞に浴さうと企むが、カミルスによつて反つてその様な不正な裏切り行爲を罰せられるのであり、後者ではアレキサンダーの王妃が偽りの色仕掛けて、遂に碩學アリストテレスを弄絡し、馬にして乗り廻すのである。そしてそこには主役と仇役との對立關係を示す場面を交互に重ねて行くとともに、兩者の動きを説明する副人物の對話を配すると言ふ劇作法上の技法が巧に使用されてをつて、ハンス・ザックスの脚色法並びに工匠歌人舞臺の構成にほぼ一定の型が出来たことを思はせるものがある。されば今やその舞臺構造が如何なるものであつたかを明かにする時が來たものと思はれる。

## 第十二章 工匠歌人舞臺その一 一五五五年—一五五六年

アルキビアデスの騒亂は一時ニュルンベルク市の文化活動を低下せしめたけれども、他面之がため従来兎角制限を受け勝ちであつた信教の自由は次第に恢復され、特にかのアウグスブルク假宗教協定 (Das Augsburger Interim vom 30. Juni 1548.) は戰亂の収まることもに合法的に廢止された。従つて一時は戰禍の被害から立ち直るのも容易ではないと思はれたけれども、しかも此の自由都市のすぐれた傳統的自治機構と、遅ましい市民的叡智とは、意外に早く復興の實を擧げるに至つた。今日デュラーの望樓 (Die Dürer-Türme) と言はれてゐる四ヶ所の圓筒形の塔はその證據として、實に千五百五十五年—八年に完成されたもので、實用的用途と繪畫的風致とを兼ね具へた當時の都市城壁の代表作とも言ふべきものである。かくて千五百五十五年九月二十五日アウグスブルク宗教和議 (Der Augsburger Religionsfriede) が成立して以來、ニュルンベルク市の繁榮は再び昔日に劣らぬものがあつたと思はれる。

此の情勢はハンス・ザックスの演劇活動にも亦影響しないではなかつた。即ち五十四年度には悲劇二篇喜劇一篇に過なかつた彼の劇創作が、五十五年度から以後、再び活氣付き、驚くべき多作を示してゐるのは、如何に當時職人組合の間に演劇欲が旺盛であり、市民の觀劇熱が上昇してゐたかを裏書きするものである。事實千五百五十五年十一月九日の市役所議事録によれば、

Als Barthel Mack, maler, und etliche andere maler gebetten, inen zu vergönnen, das si nach weihenachten das spil von der zerstörung Jerusalems halten mügen, ist bevolhen, si uns neu jar

wider darumb ansuchen zu lassen usw.

(畫家バルテル・マックその他二三の畫家、クリスマス後エルサレムの破壊なる芝居を上演したき旨請願せしにより、新年になりて再度出願するやう命じたり云々)

とあり、従来新年以後謝肉祭前夜頃迄許されてゐた芝居を、前年の歳末から始めようとして不許可になつてゐるものがあり、同年十二月卅日には

Jörgen Frölich, messerer, und Hanssen Adam, briefmaler, und iren mitverwanten irer begerten comedien halben, inen dieselbe zu recidiren zu vergönnen, widersagen, si mügen über drei wochen wider ansuchen, wöll man inen weiter gepirlich antwurt geben.

(刀鍛冶ヨルゲン・フリーリッヒと挿繪畫家ハンス・アーダム及び彼等の仲間に出願の芝居につき、その上演許可の件は三週間後に再び願ひ出づる様、その後適宜確答を與へるべき旨通達す)

とあり、此の年二三の劇團が相競うて芝居を演じようとしてゐたことが知られる。そして其等職人組合の劇團に脚本を供給したものがハンス・ザックスであつたことも、右の記録にある「エルサレムの破壊」が五十五年十月二十一日に出來た彼の作品である事から推定される。次いで千五百五十六年十二月卅一日にもヨルゲン・フリーリッヒ及び其他の刀鍛冶の上演願が時期尙早のために却下されたとあり、五十七年一月二十五日にはハンス・ザックスが自作の芝居を上演することを願ひ出て、脚本の檢閲を受ける様にと通達されてゐる。そして前章でも一寸觸れた通り、翌二十六日に挿繪畫家達と刀鍛冶達、即ちハン

ス・ブーグムとヨルゲン・フレリッヒ等にマルタ教會で次の日曜日迄芝居を上演することが許可され(Den ansuchenden briefmalern und messern soll man ire spil bis kunftigen sonntag bei sant Martha zu halten zulassen.)二十七日にはハンス・ザックスにも上演許可が下りてゐる。(Hansen Sachsen soll man seine spil zu halten zu lassen.)處が二月六日に至つて

Hans Sachsen soll von ratswegen ernstlich angesagt und bei eins rats straf auferlegt werden, ainich spil im predigercloster zuvor und ehe die predig gar aus ist, zu halten, noch jemand hinein zu lassen.

(ハンス・ザックスに對し市會の決議により、若干の芝居をブレディガー僧院に於て説教の前又は説教の全く終らざる中に上演すること或は何人かを入場せしめることを禁ずる旨嚴重に通告し、且つ犯す時は市會による罰則を課するものとす)

とある。以上の記録を総合すると、大體千五百五十五年の頃から挿繪畫家及び刀鍛冶の一派はマルタ教會を、ハンス・ザックス一派はブレディガー僧院の食堂(Kemter od. Refektorium)を劇場として利用しようと考え、五十六年五十七年には、それが實現してゐることが推定される。しかも此の兩派はケスターの言ふ如く(Vgl. A. Köster, Die Meistersingerbühne, S. 17)全く別箇のそれぞれ獨立したものではなく、ヘルマンの言ふ如く(Vgl. M. Herrmann, Die Bühne des H. S. S. 18f.)何れもハンス・ザックスの指揮下にあり、彼はその兩者の舞臺監督乃至出演者であつたと思はれる。と言ふのも彼は工匠歌人の重鎮として既に職人組合を指導してゐたのであり、又彼の脚本が他の劇團の臺本になつてゐることが記録の數ヶ所知られるからである。そして此の關係はその後六十年迄は續いたものと推定されるのであるが(本書第十五章参照)上記の記録により五十七年には確實に成立してゐるので

あるから、結局劇作家ハンス・ザックスの活動は、五十四年一寸少憩した後、五十五年から五十七年にかけて、最も旺盛にして華かなものになつて行つたとすることが出来る。それは宛も一時沈靜するかと思へた火山が、今や時を得て猛然と火煙溶岩を吹き上げるにも似た壯觀である。

既に見た如く、ハンス・ザックスの演劇活動は五十年―五十四年の間に大體その舞臺様式の定型を作り上げたものと考へられるのであるが、此のことはその後の劇作に影響し、五十五年以後の作品に於て明瞭に看取される結果となつた。その最もよい例はマックス・ヘルマンも指摘してゐる様に、かの口上役が結辭を述べるために登場する場合のト書に見られる。元來千五百五十一年五十二年五十三年の劇作品を收めてゐる作者自身の筆寫本説話詩集第七卷と第八卷は今日紛失して存在せず、只作者が後年校訂して出版した活版本しか傳つてゐないのであるから、五十年一月から五十五年十月にかけての作品中、十三篇を除き、他は悉くその校訂活版本によるより他に仕方がないのである。従つてそれら活版本の本文はその作品の出來た當初そのままのもてはないことが考へられるため、それがそのまま上演されたかどうか疑しい點が多々ある。然るに五十五年以後の作品には作者が創作した時そのままの筆寫原本が存在するから、さう言つた疑を容れる餘地がない。かくて五十五―六十年間の作品の本文はそれぞれ上演された時にもその通りに行はれたものとするものが出来る。この意味に於て同期間の作品は今日研究の對象として最も好適のものであり、従つてかの結辭役の登場を規定する用語の如きも、そこに記されてゐるものは、その當時の實際の演出と合致するものと見て大過ないであらう。處でザックス劇の全曲を通じて、芝居が終ると俳優一同が整列して退場し(Sie gehn alle in ordnung ab.)その後必ず口上役が結辭を述べることになつてゐるが、その場合、Der ernholdt geht ein (od. tritt

Ein) und beschleußt, Der ehrnhold beschleußt, 及び Der ehrnhold kompt und beschleußt と三通りの卜書が見られる。此の中第一の「口上役入場。結辭を述べる」とあるのは五十四年に出来た喜劇「女王ペルソネス、哲學者アリストテレスを騎り廻す」と「トロヤ城の破壊」(以上自筆本)を始めとして、それ以前に出来た「金持ちの老市民と三人の息子」(1552, 7, 22) 「ダビデとアビゲイル」(1553, 1, 4 以上活版本) 「グリセルダ」(1546, 4, 15) 「リサベータ」(1545, 12, 31) 等に見られる。之に對して第三の「口上役来て。結辭を述べる」とあるのは、自筆本によると「エルサレムの破壊」(1555, 16, 21) に於て始めて見られ、それ以後六十年の終りに至る迄實に四十五曲、單に第二の如く「口上役結辭を述べる」とあるのが九曲、第一の如く「入場」とあるのが二曲 (Des Marschalls Sun, 1556, 7, 4 und Pura die martirh, 1559, 11, 11) であると言はれてゐる。(Vgl. M. Hermann, Die Bühne des H. S. S. 50) 即ち五十五年以後マルタ教會がハンス・ザックス劇上演の特約舞臺とも言ふべきものになつて以來、口上役は最早や舞臺背後から入場せず、一端登場人物の行列を導いて舞臺側面から樂屋へ退場した後、そこから又同じ道を逆に舞臺へ來ることが決定的になつたのである。此の事實からヘルマンは俳優が舞臺へ登場する時、背後から「入場」する場合と、側面から「來る」場合とがあり、今や此の二つの場合が *eingehen* と *kommen* とで明瞭に區別されて現はされるやうになつたと言ふ。言はば *eingehen* od. *eintreten* と *kommen* は五十五年以後ハンス・ザックスの舞臺専門用語となり、それぞれ特殊の意味を持つてゐるとされるのである。但し幕又は場面が變つて最初に登場して來る人物には習慣的に *eingehen* が用ひられてゐるから、その場合又は *eingehen* が *kommen* と同意義のこともある。

以上の事實はほぼ五十五年「エルサレムの破壊」を堺として、それ以前の作品とそれ以後の作品とを決定的に區別せしめる理由となるの

であるが、曩にも述べた通り丁度此の年以來マルタ教會をフレイリッヒ一派が使用したとすれば、作者が彼等のために此の様な配慮をした臺本を書いたと云ふのも首肯されるであらう。

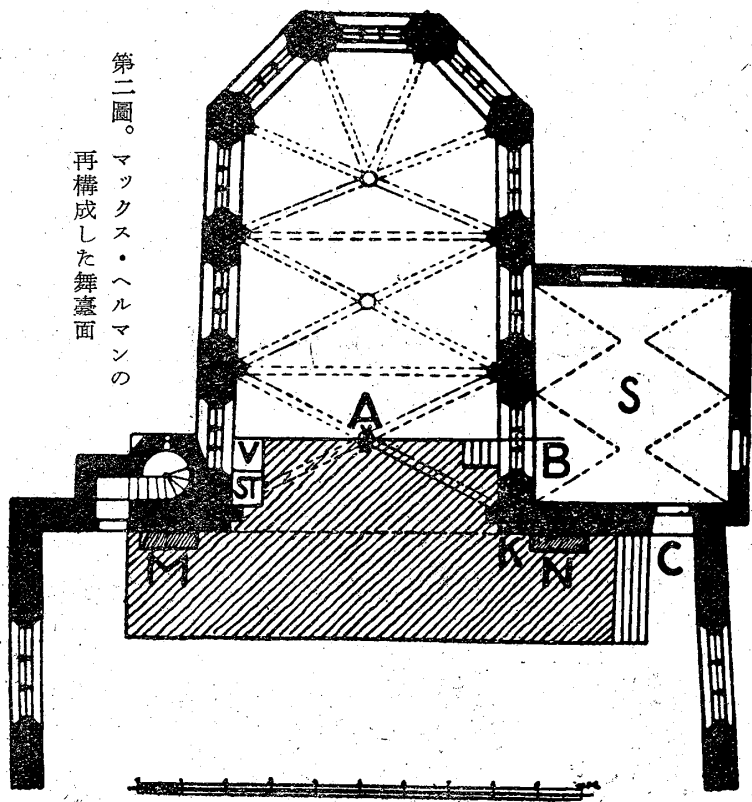
然らば俳優は何處から「入場し」、何處から舞臺へ「來た」ものであるか？ 即ち舞臺と樂屋との關係はどのやうになつてゐたか？

此の問題を解くためには先づ當時のマルタ教會の内部構造を再現して見なければならぬ。今日現存してゐるマルタ教會は、前章で述べた通り度々改造されたもので、ハンス・ザックス當時の同教會ではないからである。従つてマックス・ヘルマンの研究も又第一に十六世紀

第一圖。 マルタ教會内部



中葉に於けるマルタ教會の構造が如何なるものであつたかを究明し、次いでその内部の如何なる部分に如何様に工匠歌人舞臺が設けられたものであるかを考證してゐるのである。そしてその綿密にして、甚だ聰明な研究の成果は、結局次の如き再構成圖を示すに至つた。

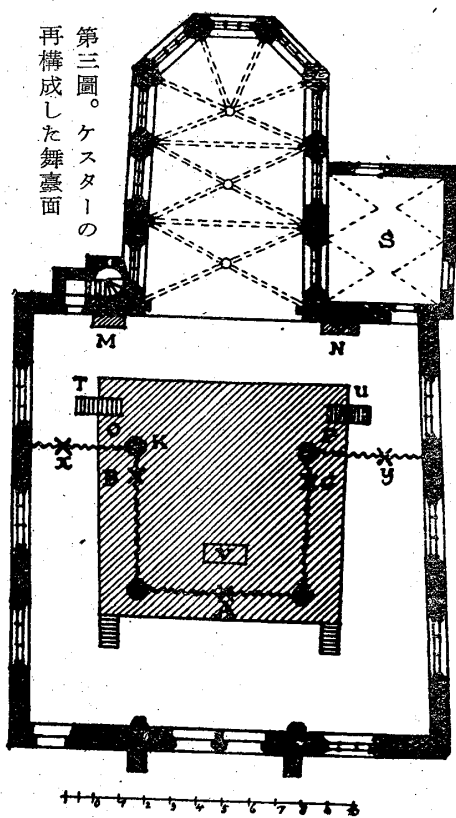


第二圖。マックス・ヘルマンの再構成した舞臺面

舞臺。凸字形の斜線を引いた部分。前面舞臺の中、十二メートル背景の中、六メートル。奥行、會衆席の部分二・五メートル、内陣の部分二・二メートル。高さ、九十五センチ。(観客は坐つて見物)

A. 背景の幕。中央に幕の切れ目、即ち第一登場口(舞臺へ昇る階段あり)

B. 聖器室(Sakristei)より内陣(Chor)へ通ずる戸口。(此の戸口は今日壁で塗り込められて最早存在しないのであるが、ザックス當時には存在したことがヘルマンによつて考證されてゐる。(M. Herrmann, 第十二章 工匠歌人舞臺 その一



第三圖。ケスターの再構成した舞臺面

舞臺。會衆席(Schiff)中央に高さ約二メートルの高床(Podium)を作る。(観客は立つたまま見物)波状線は舞臺面と樂屋とを區切る幕。観客席は内陣のある側。

A, B, C, X, Y. 何れも登場口。

Forschungen, S. 33 ff.) 舞臺背後を限る幕(A)は丁度此の戸口を二分する所にあり、出演者は此の幕の背後から内陣へ行くことも、又幕の前面から舞臺へ出ることも出来る。即ち第二登場口。

C. 聖器室から會衆席へ通ずる戸口。前面舞臺は此の戸口の近くまで延び、それから戸口まで階段あり。即ち第三登場口、

M. N. 副祭壇。上演中は幕で覆はる。

S. 聖器室(僧侶控室)。之は内陣とともに樂屋となる。

K. 説教壇。

st. 内陣供へ付けの椅子。

然るにアルベルト・ケスターは殆ど全面的にその所論に反対し、次の如き設計圖を作つた。



T、U。階段。

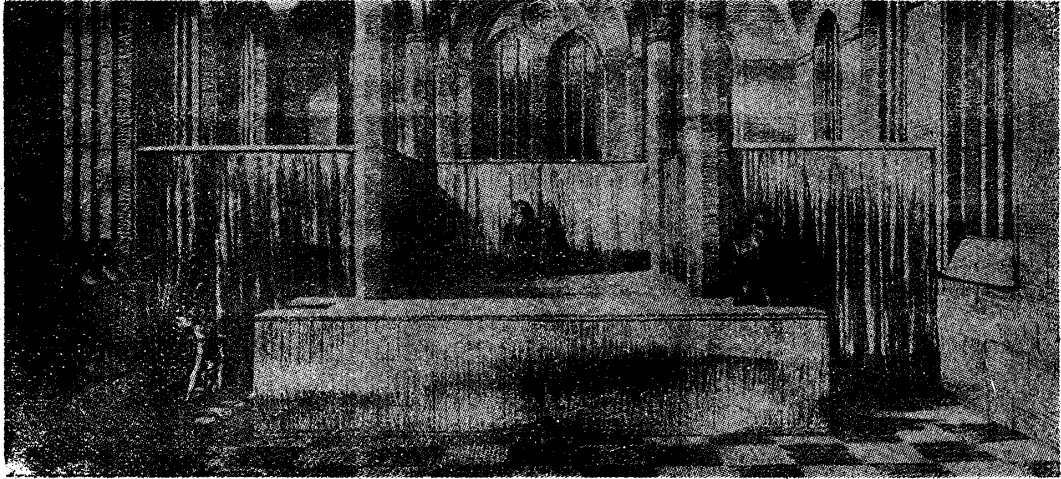
V。せり出し穴。

K。説教壇。

之を立體圖にすると下圖の如くなる。

處で此の兩氏の舞臺設計圖はそれぞれザックスの作品とマルタ教會の構造を精密に比較考證して考案されたものとは言へ、何れも想像圖であるから、今遽にその可否を決定し難いけれども、マルタ教會に關する限り、ヘルマンの再構成がより適當であると思はれる。と言ふのは何よりも會衆席を觀客席にとる方が、會衆席に舞臺を設けて、觀客席を内陣に取るよりも自然であるからである。かの千五百二十七年一月十七日 Riga の Petrikirche へ Burchard Waldis の De parabell van verlor'n Sohn (遊蕩兒の寓話) が上演された時も、内陣が、樂屋會衆席が觀客席に用ひられたのである。(宗改演、第八章參照) 然し乍

第四圖。ケスター設計の工匠歌人舞臺面



らザックス劇はマルタ教會ばかりではなく、ブレデイガー教會の食堂又はその他の場所でも演ぜられたのであり、此の食堂は奥行二十三・五〇メートル、巾八・一〇メートル、中央に二本の支柱のある長方形の廣間であるから、そこではケスターの舞臺面が適合する。何れにしても當時の工匠歌人舞臺が高床の上に、底部を觀客席に向けた凸字形をなしてゐたと云ふ點に於ては、兩者共通であつて、ヘルマンはそれにマルタ教會の建築様式から、ザックス劇を上演するに必要な三つの登場口を想定し、ケスターは戯曲そのものの要求する處によつて五つの登場口と一つのせり出し穴を假定し、かくて出來たものをマルタ教會内に設置してゐるのである。なほ之を換言すればヘルマンの場合はマルタ教會と言ふ特定の場所に限られた特殊の舞臺構圖であり、ケスターの場合は十六世紀工匠歌人劇一般の最後に到達した段階に於ける舞臺面の再構成であると言ふことが出来る。

處でザックスの舞臺が凸字形をなしてゐたと言ふことは、ヘルマンの説によれば、少くとも千五百五十年マルタ教會が用ひられて以來その内部構造上確定的事實とされてをり、次いでケスターによつても一般工匠歌人舞臺に就いて同じ形が認定されてゐるのであるが、此の事は勿論ザックス劇の内容そのものと密接な關係があるのである。然し乍らその登場口の數に就ては尙疑問の餘地なしとはしない。然らばザックス劇の内容とは如何なるものであるか？

此の點に關しても、既に前章迄に見た通り、ザックス劇が舞臺及び舞臺装置に要求してゐるものは、今迄の處甚だ素朴にして簡單なものであつて、大部分は科白によつて觀客の想像力に訴へる丈で濟ましたものと思はれる。だから、舞臺裝飾の如きも殆ど用ひられず、高々室内なら一脚の椅子、戶外なら藪臺又は立木、それも出來る丈教會内供付けのもの(例へば説教壇)が利用されたのであつた。然し室内と戶外を隔てるための門扉の如きものが飾り付けられたのは、比較的遅か

つたのであるから、「イサツの獻納」(1553, 11, 4) 参照) その初期に於ては、室内と戶外、或は城中の一室と外からそれに通ずる廊下、或は對話會談の行はれる場所と試合闘争等の活劇の行はれる場所を同一舞臺面に設定するために、前面の張出舞臺とその後方の奥の舞臺との二つの部分から舞臺を構成するのが最も當をえてゐるわけである。事實、ザツクス劇の殆ど全部を通じて、宮殿又は城中の一室を必要としてをり、その場合此の奥舞臺をそのまま室内に使用し、同じ城内の他の部分又は他の室から登場する人物は背後の幕の中央(第一登場口A)から這入り(eingehen)、城外又は遠方から登場する人物は前面舞臺の向つて右側(第三登場口C)から來れば(kommen)、そこに自ら登場人物の違つた立場が明瞭に區別されて演出し得ることとなる。だから凸字形舞臺は形そのものが一種の舞臺装置の代りをなしてゐると言ふ事が出来る。だがそこに幾つの登場口が設けられてゐたかの問題になると、今遽に決定し難いものがある。從來見て來たザツクス劇によれば、A、B、Cの三つの出入口(第一圖参照)で兎に角満足されるやうであるが、然し恐らくそれは今後増加されて行き、恐くマルタ教會以外の場所ではケスターの舞臺に近いものに迄發展して行つたものではないかと考へられる。否マルタ教會に於ても少くともCの反対側にもう一ヶ所登場口Dを想定しなければ、實上演上甚だ不都合をきたすものがあるのである。果して然りとすれば、背後を限る幕は向つて左右兩側の副祭壇を覆ふ所迄延長され、その幕の後ろを通つて、前面舞臺向つて左側へも登場しうるやうになつたものと推定される。かくて今や問題は五十五年(特に「エルサレムの破壊」)以後に創作されたザツクス劇が、如何なる舞臺装置と舞臺裝飾とを必要してゐるにかかつて來る。と言ふのも劇作法に於て既に十分に修練を積んだ作者は、今や演出法に種々の新しい創意と工夫とを凝らす様になつて來たからである。

以上のことは五十五年の始めに出來た Comedi mit 14. Personen.

Die irrfart Ulissi mit den werbern und seiner gemahel Penelope, und hat 7 actus. (カッパエスの漂流と求婚者達とウリッセスの妻ペネローペ。1555, 2, 20) から始めて、その後引き續き同様に古代傳説から取材された三篇の悲劇 Tragedia mit 10 personen. Die Königin Rosinunda, und hat 5 actus. (ロシナンダ王妃。1555, 8, 10) Tragedia mit 7 personen. Die getrew frau Alcestis mit ihrem getrewen mann Admeto, und hat 3 actus. (貞節な妻アルケステイスと貞節な夫アドメト。1555, 8, 30) Tragedia mit 7 personen. Von Clinia und Agatocli, den zweien Griechen, hat 3 actus. (二人の希臘人、クリニアとアガトクリス。1555, 9, 12) 等が依然としてまだ前年度の古代劇と大差ない構成を持つてゐるのに對して、かの Tragedia mit 17 personen. Die zerstörung zu Jerusalem zu agiren, und hat 6 actus. (エルサレムの破壊。1555, 10, 21) 以後のものになると、人物の出入が甚だ複雑になつてゐることから言つても容易に推定される。

「ウリッセスの漂流」は勿論ホメールのオデッセー(Homers Odyssee. Deutsch durch Simon Minervius, Schaldenreisser, 1537, im Besitz von Sachs.)によつたもので、第一幕はウリッセスの息子 Telemachus が父の安否を氣遣つてゐると、Minerva が現れて、父の消息を知る便宜を教へられる場面と、Penelope の求婚者四人がウリッセスの留守を利用して、私腹を肥やさうと陰謀を企んでゐる場面からなつてゐる。即ち此の幕は二場から成り、その孰れもがウリッセスの Itaca 城内の一室であり、例によつて主役と仇役の對立的立場を示すためのものであるが、それが別々の場面で取扱はれてゐるから、各場の人物の出入は至つて簡單明瞭である。

同様に次の幕も二場から成り、第一場は Nestor zu Pilum の居城の一室。ネストルが登場、トロヤ戦争から無事歸還したことを喜んでゐると、口上役の取次ぎで、ミネルヴァとテレマクスが來て、ウリッセ

スの其の後の消息を尋ねる。第二場も全く同じ形で、スパルタの Menelaus 王の居城の一室。矢張りメネラウスがヘーレナを奪ひ返して無事歸國したことに満足してゐると、口上役の取次でテレマクスとミネルヴァが来る。彼等はメネラウスからウリッセスのその後の消息、即ちウリッセス漂流記を悉しく告げられる。

第三幕はかの四人の求婚者がテレマクスを海上に迎へて殺さうと相談してゐる場面と、その陰謀を傳へ聞いた侍女頭 (Hofmeisterin) Ewiclea が、息子の安否を心配してゐるペネローペにそれを報告して、ペネローペが悲嘆する場面と、ウリッセスが故國に漂流した處で、ミネルヴァが出現、留守中の出來事とその對策を授ける場面から構成されてゐるが、ここでも格別に人物の複雑な動きはない。只ミネルヴァが最後に退場する時「私は昇天しよう」(Gen hinel will ich schwingen mich.) と言ひ次に「ミネルヴァ退下」(Minerva geht ab.) と卜書にあるのは、第二の登場口 (B) の必要性を思はせる。次いで第四幕。豚飼ひ Ewmeus が登場 (geht ein 即ち第一登場口 A) イタカ城の食客共の贅澤振りを奮慨してゐる處へ、乞食の身形をしたウリッセスが来る (kommt, 即ち第三登場口 C) 彼は豚飼ひにウリッセスが生きてゐることを告げて、彼を慰める。とそこへテレマクスが来る (kommt, C) 彼は豚飼ひに命じて、母親ペネローペに自分が無事歸朝したことを知らせにやる。豚飼ひオイメウスが去ると (geht ab, 第三登場口 C) ミネルヴァが来て (kommt, B) ウリッセスを指し招く。ウリッセスは彼女の處へ下りて行つて、再び服裝を變へて行く (Der geht zu ihr ab, kommt wider verkleidet.) 即ちウリッセスは乞食の姿から王者の姿になつて來るのであるが、それと氣が着いたテレマクスが「あなたは人間ぢやない。確に天から下つて來られた神様ですから、御供物を獻げませう」と言つてゐる處から考へると、豚飼ひは第三登場口 C から走り去り、テレマクスがそれを見送つてゐる間に、ミネルヴァが第二登場口 B か

ら出て来て、ウリッセスを祕かにそこから連れ去り、そしてウリッセスは樂屋で着換へて、同じ所から出て來ると、テレマクスが始めて、そこにゐる人物の姿が全く變つてゐるのに氣がつくと言つた想定がなり立つ。孰れにしても此の第二登場口は或る人物又は神々怪物が突然現はれたり消えたりするためには非必要な設備である。かくてウリッセスは息子に自分の本性を明かし、今後の方策を授ける。そしてその言葉の通り第五幕で、ウリッセスは愈々、乞食に變裝して城中に現れる。此の幕は然し主役と仇役とが正面衝突するに至る寸前の動きを取扱つてゐる丈に、甚だ劇的であり、敵味方の出入を巧に裁いてゐる。然しそれを規定する eingehen と kommen の用語はヘルマンの言ふように、未だ必ずしも正確に使用されてはゐない。先づ四人の求婚者が登場 (gehen ein, A) テレマクスを逃して了つたことを話合つてゐる處へ、ペネローペが侍女頭オイリクレアを連れて出て來る (tritt ein, A) 彼等の陰謀や不行跡を責める。求婚者達 (Die vier werber) は代る代る辯明し、「明日又來ませう」と言つて去つて行く。(gehen aus,) と入れ代つて直ぐ主服を着たテレマクスが来る (kommt fürstlich) だから先きの四人とテレマクスとは別の登場口を用ひたに違ひないのである。即ち彼等が城中を去つて行くのだとすれば C から去るわけであり、さうするとテレマクスは A から來ることとなる。然し A から來ると言ふのは、ヘルマンの規定に反する。そこで今は四人が B から去り、(特に gehen aus とあつて普通の gehen ab とないから) テレマクスは C から來たものとして置かう。テレマクスは母親に、旅行の結果を報告し、父が必ず歸つて來ると告げる。ペネローペは痛く喜んで侍女頭とともに退場 (geht ab, A) すると四人の求婚者が又來る (kommen, 即ち先きに B から去つたものとするれば又 B から來るとして置かう) 彼等はテレマクスに向つて、彼の無事歸還したことに祝意を表し、酒宴を開かうと言ふ。そこへ豚飼ひがウリッセスと來る (kommt, C) 四人は代る代る

乞食姿のウリッセスを嘲り笑ひ、Antinousの如きは彼を投げ倒す。テレマクスがそれを諫めて、「廣間で寢酒でも飲んでお休みなさい。」と言ふ。それで四人が去る(A)。それからテレマクスは豚飼ひをして母親を呼びにやる。そこには卜書がないけれども、勿論豚飼ひはAから退場する。そのあとでウリッセスは息子に、今日城中へ歸つてくると、犬丈が彼の本性を嗅付けて、飛びついて来たことを物語り、ペネローペにはまだ彼の身分を秘密にして置くやうにと吩咐ける。そこへペネローペが来る。こゝで「侯妃ペネローペ来る。」(Penlope, die fürstin, kombt.)と卜書にあるのは、彼女が呼ばれて来たからである。と解釋出来ないこともないが、それでは敘事的であつて、舞臺用語にはならない。だから先きに四人の求婚者がBの登場口を用ひたと云ふ解釋とともに、此の解釋も無理であらう。ここではどうしてもペネローペはCから来ずに、Aから這入つて来なければならぬのである。従つて此の劇ではまだkommenに一定の意味が含まれてゐないとしなければならぬ。扱てペネローペは此の乞食姿の客人から夫ウリッセスの消息を聞く。彼女はその乞食がどことなく氣品があり身分あるものであることを察し、厚く待遇するやうにと、息子に吩咐ける。かくて皆々退場(A)。

第六幕。テレマクスとウリッセス登場(Gehen ein, A) ミネルヴァが手弓を持つて来る(B)。女神はテレマクスにその手弓を授け、それで求婚者達の力を験めすやうに言ひ、彼等を牧童と協力して成敗する手順を教へる。ミネルヴァが去ると(B)、さきの豚飼ひと牛飼ひが登場する(Gehen ein, A) 即ち彼等は先きの幕で示されてゐる様に、既に城中に來てゐるものとして、Aから這入つてくるのである。此の二人が未だ歸らない主人のありし日の徳を讃へる。そこでウリッセスは彼等に自分の本性を明かし、彼等が喜ぶのを抑へて、愈々求婚者達を征伐する準備をさせる。それに従つてテレマクスと二人の牧童は、敵

が城中に這入つて來たら、そのあとで、凡ゆる城門を閉ざすために出て行く(Gehen aus, B又はC) そのあとでウリッセスは地上に腰を下ろす(Ulisses setzt sich an die erdt.)とあるから、この場面は城の玄關口であることが知られる。従つて前面舞臺で演技が行はれてゐるわけである。彼が腰を下ろすと、四人の求婚者が来る(Kommen, C) 即ち彼等は城外の自宅から來たのである。彼等を見るとウリッセスが施し物を乞ふ。すると四人の者は又散々に彼を嘲り嗤ひ、Agelausは彼を足蹴にする。そこへテレマクスが弓を持つてくる(B又はC)。彼はその弓を張ることの出来るものが、母と結婚するのだと言ふ。四人が交々試みるが失敗する。最後にウリッセスが弓を引き絞り、矢を番へて標的を射る。それから始めて憤怒の聲を擧げて、四人の不行跡を責める。遂に四人に襲ひかかる。テレマクスとかの牧童達も助けに馳けつけて来る(Die drei kumen im zu hilf, C)。かくて鬪争の結果四人は悉く打ち殺される。だから以上の活劇は凡て前面舞臺の存在を許す時、始めて演出可能となる。ウリッセスは尙悪人の殘黨をそれぞれ處刑することを命じ、テレマクスを連れて退場、二人の牧童は死者を運び去る(Die zwen hirten tragen die toden ab)。

最後の第七幕はペネローペとウリッセスの再會の場。此れは作者の常套的終幕で、物語を完結するための附加物に過ぎない。以上検討した處によつて、「ウリッセスの漂流」は奥舞臺と前面舞臺に三つの登場口があれば十分に演出し得るやうになつてゐること、Eingehenとkommenには未だ正確な使ひ分けがしてないことが知られる。同様に「ロシムンダ王妃」にしても「アルツェステイスとアドメート」にしても「グリニアとアガトクレス」にしても同じ舞臺様式で上演することが出来る。

「ロシムンダ」は作者の藏書目録にある Albertus Krantz の Denmarcker cronik に據るものべ Lombardia の王 Albinus は敵王

Ewrimundus を亡ぼし、その娘 Rosinunda を妻にしたが、一日敵王  
 オイリムンツス即ち新妻の父親の頭蓋骨で作つた酒盃に酒を満させ、  
 ロシムンダと乾盃する。妃はそれと知つて悲しみ怨み、無言のまま退  
 場。大臣達が王の亂暴な所業を諫めるが、王は一寸冗談をしたに過な  
 いと言つて、取り合はない(以上第一幕第一場)王妃は父を殺され剩へ  
 その鬪略で酒を吞まされたことを屈辱であり侮蔑であるとして、復讐  
 しようとする。そして折りからそこへ這入つて來た Hemelchids を  
 呼び止め、王を殺してくれと頼む。だがヘルヒルデイスはそんな大  
 逆罪はとも引受けられないと拒む。(二場)即ち以上の出來事は同  
 じ城内で起つてゐるから、奥舞臺で、登場口は一つ(A)あれば足り  
 る。従つて人物の登場は凡て *eingehen* で現はされてゐる。口上役が  
 鬪略の盃を王から受け取り、王の命令でそれに酒を注いで持つて來る  
 處も (Der ehrholdt bringt die schalen vol wein, gibt sie dem  
 König.) 奥舞臺幕中央の出入口(A)で行ふことが出来る。

その後もかの二人の大臣 (Die zwen rath) は王が王妃を侮辱した  
 ことを心配してゐる。そこへ王は侍臣達を連れて來る。二人の大臣は  
 代る代る今日の事件が妃の感情を害したことを述べて、王の反省を促  
 すけれども、王は傲然として取り合はない(第二幕第一場)。處で王は  
 侍臣を連れて來るとあるから、ここでは王がCから來て、「饗宴に行  
 く」(zu der gasting) ために、Aから去つたものとしなければならな  
 い。然るに次にすぐ續いて(勿論場面が代つてゐる)二人の侍臣が  
 來る。(Die zwen trabanten kommen.) とあり、しかも彼等は妃の夜宴  
 から歸つて來た處なのである。従つて前場の關係から言へば彼等はA  
 から登場して來なければならぬわけである。だからAから登場する  
 場合が *eingehen* でCからの場合が *kommen* であると言ふヘルマン  
 の説はここでも未だ適用されてゐないとしなければならぬ。更に先  
 きを見てみよう。此の二人の侍臣は妃の夜宴で、妃が悲し相にしてゐ

たことの原因やヘルヒルデイスが侍女の Anata に言ひ寄つて、肘  
 鐵砲を喰つたことなどを話し、やがて王の出獵があるから、馬の用意  
 が出来るだらうと言つて、退場する。即ち此の場は言ふ迄もなく作者  
 得意の間接敘法であるが、ここで問題になるのは侍臣達がCから退場  
 して行くと言ふことである。何となれば彼等は城中から下つて、狩に  
 出て行く處だからである。だから彼等はAから這入つて來た筈であり、  
 それを來ると言つてゐるのは、來るが必ずしもCを用ひることを意味  
 してゐないと言ふことになる。そして此の事は次の幕の卜書を見ると  
 尙一層明瞭である。

ロシムンダが一人登場し (geht allein ein) 腰を下ろして、復讐の  
 方法を考へてゐる。即ちヘルヒルデイスが侍女アマタを愛してゐる  
 から、自分が侍女に變装して彼を密會に呼び出し、彼に王を殺すこと  
 を承諾させようと云ふのである。そこへ侍女アマタが來る (kommt)、  
 そこで王妃は彼女に計畫を打ち明け、アマタの室で變装するために、  
 侍女とともに出て行く。と入れ代つて(勿論場面が變つてゐる)ヘル  
 ルヒルデイスが這入つてくる (geht ein)。彼は長年の戀が叶へられた  
 のを喜んでゐる。と侍女に變装した王妃が來て、ヘルヒルデイスが  
 喜んで手を差し延べるのを拒み、王妃に不義を仕掛けた罪人になるか  
 それとも自分の頼みを入れて王を殺すかと脅迫する。かうして遂にヘ  
 ルヒルデイスは王の暗殺を承諾する。處でここではどうしてもヘル  
 ルヒルデイスがCから來て、王妃がAから這入つて來なければならな  
 い。と言ふのは王妃は既に變装するために侍女の室へ來てゐるのであ  
 り、外部から來るものはヘルヒルデイスであるからである。だから  
 「王妃侍女の着物を着て來る」(Die königin kombt in der hoffjungk-  
 frau kleidung) とあつても、その來るが常に一定の登場口Cを指示  
 してゐると言ふことは出來ない。以上の理由から、ここでは兎に角ヘ  
 ルヒルデイスがCから這入つて來 (geht ein) 王妃がAから來たもの

として置かう。ルマンも eingehen が背後から (A) 又 kommen が前面から (C) 登場することを意味すると言つても、それは一般に方角の差異を示すための場合や、又はその他の舞臺上の關係を顧慮する時、使用されてゐるのであると言つてゐるから (M. H. Forschungen S. 32.)

王妃とヘメルヒルデイスが退場 (gehen aus) すると、王が大臣侍臣口上役を連れて這入つてくる。彼は腰を下ろし、手紙を讀まなければならぬと言つて、一同を下げる。恐らくCが用ひられる。そのあとで「王は手紙を開き、それを讀んで眠る。王妃が来て、彼の刀を縛り、騎士 (ヘメルヒルデイスの事) に合圖をする。彼が来て、室の前方に立ち止る。王妃は彼の處へ歩み寄つて言ふ」(Der König bricht den brief auf, list ihn und entschieft. Die Königin kombt, verbindt im sein schwerdt und winckt dem ritter, der kombt und steht vornen in saal still, die Königin geht zu ihm unnd spricht:;) とト書にある。此の様な委しいト書は從來餘り例がない。然し今後次第に増加して行く傾向があるのは、作者が出演者のために注意して置く必要を感じて来たためであらう。そしてそれとともに一定の用語も確立されて來ることが考へられる。だから此の場合には王妃もヘメルヒルデイスも王と反對の登場口 (C) から來たとあり、ヘメルヒルデイスは前面舞臺に立ち止つて躊躇の様を示してゐるので、王妃が奥舞臺から前面舞臺へ歩み寄つて來たことを明瞭にしてゐるのである。王妃はヘメルヒルデイスが良心の苛責に耐へないと言ふのを又もや威嚇する。そして「彼は行つて、王に一撃を加へる。王は目を醒まし、拔劍しようとするが出来ない。鞘のまま打つてかかる」(Er geht unnd gibt dem König einen strach, der König erwacht, will von leder, kann nit, schlecht zu nit der scheiden.) とト書があり、更らに「彼等は戦つて、王は遂に倒れる。二人の侍臣が室の外で話す。クレフェス言ふ」

(Sie kempfen, bis der König felt. Die zwen trabanten reden vor dem sal, Clephes spricht:;) とあり、クレフェスが「室で何か叫ぶ聲がする。悲鳴や劍戟の響も聞える」言へば、Maron は「さあ、何事か見てみよう」と「侍臣達は馳け込んで來る」(Die trabanten lauffen ein.) 此の對話は勿論二人がCから出て、舞臺に上つてくる間に話されればよいわけである。かくて二人がヘメルヒルデイスに襲ひかかる。王妃がそれを止めて、王の死骸を侍臣達に運ばせ、次いで王妃と騎士が退場。

第四幕では先づ大臣二人が入場。王の暗殺が王妃の使喚で行はれたことを話してゐる。そこへ王妃が侍女を連れて來る。王妃はヘメルヒルデイスを擁護するために熱辯を振ふけれども、大臣達は納得しない。大臣が去ると、ヘメルヒルデイスが悲し相にして出て來る。彼と王妃とは城中の形勢が不利なので、Ravenna の皇帝の代官 Longinus の處へ逃亡しようと相談する。ヘメルヒルデイスが去ると、ロシムンダは侍女アマタをして二人の侍臣を呼ばせる。侍女が出て行くと、直ぐに、侍臣が來る。(Sie gehet aus, die trabanten kummen.) だからその間時間の間隔を埋めるものがない。(因に此の不備も後の作品になると次第に取除かれる) 王妃は二人に逃亡するための舟、荷物の用意を命じて、去らせる。あとで王妃はアマタに貴重品を掻き集めて出奔する支度を吩咐け、ともども運命の急轉を悲しみ乍ら退場。即ち此の幕ではト書の指示する通り、二人の大臣がAから這入つて (Gehen ein)、Aから去る以外は、王妃もヘメルヒルデイスも侍臣もCから來てCから去つたものと解して、別に不都合はないであらう。

次いで第五幕、皇帝の代官ロンギヌスの城中。ロンギヌスが這入つて來て、ロシムンダの逃亡して來たことを獨り言してゐる處へ、侍女アマタが來て、彼を王妃の夜宴に招待する。すると代官は侍女のあとに蹤いて出て行く。場面變つて二人の侍臣が來る。彼等はロンギヌス、

王妃、ヘメルヒルデイス等の其の後の様子や心境を噂し合つてゐる。そこへロンギヌスが来るので、お辭儀をして去る。ロンギヌスはロシムンダと結婚して、ロムバルヂヤ王國を手に入れようと企んでゐる。するとロシムンダが這入つて来る (tritt ein)。と直ちに侍女達を遠ざける。そしてロンギヌスとの祕密の會談で、ヘメルヒルデイスを殺し、代官と結婚して、再び故國を取戻すことを密約する。處で此の場は王妃の居室の一室だとすれば、(即ち代官はロシムンダの夜宴に招待されて來たのである。) 侍臣やロンギヌスが外部から来る。(C) こととなり、王妃は内部から這入る。(A) こととなるから問題は無い。だが次の場面では凡ての人物が來ることになつてゐて、又もや kommen の意味するものが甚だ曖昧である。

先づ侍女アマタが來て、獨白で、王妃が今日終日毒藥を作つてゐたのは、自分を殺すためではないかと疑ひ、廣間で行はれる夜食に給仕するため出て行く。次いで王妃が德利を、侍女がコップを持つて來る。彼女は今こそそとの王國に歸る端緒を手持つてゐるのだと言つてゐる處へ、ヘメルヒルデイスが湯浴から上つて來る。(kombt aus dem bad.) 彼は渴を覺え、王妃の獎める酒を半分飲むと、身震ひし、胸を掴み、德利を王妃の方へ差し出して (Er trinkt auff halb, erschut sich, greift an die brust, streckt ihr die schewren dar) あとの半分を飲む様に強要する。王妃がそれを拒むと、彼は劍を抜いて彼女の胸に突きつけ (Er zuckt das schwerdt, setzt ihr auff die brust) 無理にそれを飲ませる。彼女は飲みほして崩折れる。(Sie trinkt aus und sinkt darnider.) やがてヘメルヒルデイスも一緒に地獄に行かうと言ひ乍ら倒れる。アマタが悲鳴を擧げて助けを呼ぶ。ロンギヌスが二人の侍臣と來る。彼はアマタから事の次第を聞いて、二人の死者を厚く葬る様に侍臣に命じ、死體を運び去らせる。以上の筋書は必然的に場面が前の場と同じく王妃の居室の一室であることを思はせる。だから

少くとも王妃と湯浴して來たヘメルヒルデイスは内部から這入つて來る(A) べきで、ロンギヌスの來た方角とは異らなければならぬ。だからここでは來ることが、A からとC からとの兩方の出入口から登場することに用ひられてゐて、差別がないことになる。然し結局此の劇全體を通じて二つの登場口があれば、それで十分上演しうる様になつてゐることは從來のものと何等變る處はない。

この様に見て來ると「貞節な妻アルツェステイス」も「クリニアとアガトクレス」もその舞臺構成から言へば至極簡單に出來てゐる。

「貞節な妻アルツェステイス」は「ヨーカースタ劇」と同じく Ovidius の Metamorphosis から取材されたもので、物語の筋は次の如きものである。例の黄金の羊毛皮で有名な Medea と Jason が希臘へ歸つてくると、メデアは Pelias の娘達を騙して、ペリアスを殺させる。それはペリアスがヤゾンを憎んで、金毛皮の難題を課したことに對する復讐であつた。以上を此の劇の前提物語として、今やペリアスの息子達 Acastus と Agialeus とは父親の復讐をするために、父親を殺した娘達、即ち自分等の妹達を極刑にしようとして相談する。(以上第一幕) 長女 Alcestis は彼女の夫 Admetus の處へ逃げて來て、一部始終を訴へる(第二幕)。かくて追手が來ると、アルツェステイス——アドメイト夫妻は互に庇ひ合ひ、互に身代りになつて死なうと嘆願する。だがそれも許されず、妻が曳かれて行けば、夫は最早や生きる甲斐がないと死を希ふ(第三幕)。

「クリニアとアガトクレス」は希臘の諷刺作家 Luciano に由來するものであるが、ザックスの用ひた獨逸語譯は今日まだ不明である。そのためにザックスは拉甸語本から直接取材したのであらうと言ふ説があるけれども、彼が拉甸語をそれ程によくしたかどうかも疑はしい。(Vgl. Wilhelm Abele, Die antiken Quellen des H. S. S. 73.)

Clinia は父を失つて途方に暮れてゐる。親友 Agatocles が彼を色



々勵まし教へ、二人は堅く友情を誓ひ合ふ(一幕一場) 次いで幫間(Der heuchler) Amaso がよい獲物を探してゐる處へ、仲間の Traso が來て、二人はクリニアを誘惑し甘い汁を吸はうと打ち合せる(一の二)。次いでクリニアが讀書しようとしてゐると、二人の幫間が來て、甘言を以て遊びに連れ出す(二の一)。アガトクレスがクリニアの墮落を心配してゐる處へ、クリニアは華美な服装をしてやつて來る。彼はアガトクレスが懇々と諫めるけれども、忠言を請かないで傲然と退場(二の二) 次いで二人の幫間がもうクリニアは破産に瀕してゐるから、他の鳥を探さうと言つてゐる(二の三)。かくて第三幕。クリニアは這入つてくると、すつかり零落した様子で、後悔に暮れてゐる。アガトクレスが來て、彼に金を與へ、土地や城を呈供し、今後を戒める(三の一)。彼等が去ると、二人の幫間が來る。二人はクリニアに金が出来たのを知つて、又もや誘惑しようとする(三の二)。次いで不良貴族 Fronsteiner がその妻 Sophia と這入つて來て、美人局の相談をし、クリニアを引掛けようと言ふ(三の三)。クリニアが來る。彼がソフィアと呼ばれて來たと獨語して去ると、ソフィアが來る。彼女はクリニアを待つてゐる。そこへクリニアが這入つて來るので、女に喜び迎へ入れらる。とフロンシュタイナーが拔劍して來る。クリニアはフロンシュタイナーから言ひ懸りをつけられて、彼を切り殺し、ソフィアも刺し殺して逃げる(三の四)。アガトクレスが獨り出て來る。彼は友の身の上を心配してゐる。そこへ幫間トランナーが來て、クリニアが捕縛されて死刑にならうとしてゐると話す。アガトクレスは友人を助けるために急ぐ(三の五)。ここでアガトクレスとトランナーの登場する方向が違つてゐるにも拘はらず、兩者とも來るとあるのは、矢張り kommen の意味がまだ一定してゐないことを示す。即ちアガトクレスは A から這入り、トランナーは C から來るべきものであらう。次いで幫間アマンナーが來て、クリニアの人殺しをした理由や、アガトクレスが彼を助けよ

うとしてゐることを獨語して去る(三の六)。最後にクリニアとアガトクレスが來る。クリニアは裁判で遠島になつたので、友人に別れを告げる。だがアガトクレスは何處迄も生死を共にすると言つて、二人は舟に乗るため退場(三の七)。そして此の劇では結辭を述べるものが幫間トランナーでも口上役でもよいことになつてゐるのは、宮廷悲劇ではないからであらう。何れにしても此の幕では人物の登場する場合が十二回あるうち、這入るとあるのは三回。あとの九回は來るとなつてゐることから言つて、甚だ不思議な感を起させる。

然し乍ら若し之をケスターの想定した如く、前面舞臺左右の兩側に登場口があつたとすれば、事情は又自ら異つてくる。今此の新らたに附加された前面舞臺向つて左側の登場口を D とすれば、かの第三幕五場に於て、アガトクレスは友人クリニアの不行跡を心配して、彼を諫めるために來たのであるから、當然 C から出てくる。そして向ふから幫間トランナーが馳けてくるのを見つける。(Dort lauft Traso, sein heuchler, Her.) 従つてトランナーは D から出て來る。彼はクリニアが裁判にかけられ正に死刑の宣告が下されようとしてゐる現場から來たのであるからである。かくてザックス劇は從來三つの登場口を以て上演し得たものが、今や四つの登場口を使へば、より一層都合よく演出出来ることが知られる。しかも此の事は次作「エルサレムの破壊」(1555, 10, 21) 及び Tragedia, mit 13 personen zu agiern, des Levitten kebsweib, und hat 5 actus. (ハム人の妾。1555, 11, 5) を見る時、尙一層明瞭に看取することが出来るのである。

「エルサレムの破壊」は「ヘロデス劇」と同じく、猶太の史家 Flavius Josephus の猶太戰史 (Der jüdische Krieg, 原本は希臘語、四世紀に出た Hegesippus の拉甸語譯あり) によつてゐるもので、紀元七十年 Titus Flavius Vespasianus がエルサレムを包圍攻略した事件に取材してゐる。即ち劇の題材は既に作者が屢々取扱つてゐる都市包圍戰で

あるから、作者の最も得意とするものであるが、此の劇は正しく此の種の中でも壓巻とするに足るものである。

第一幕はユダヤに於ける羅馬の代官 Cestus Florus が二人の侍臣と、羅馬皇帝に忠勤を盡すため、ユダヤに重税を課することを謀議してゐる場面と、之に對抗しようとするユダヤ方の内情とを描いてゐる。ユダヤ方では Eleazarus と Simon が羅馬の壓政に反抗して自由戦争を起さうと相談し、折りから來かかる僧正 Ananus 司祭 Jesus 市議 Gorgion Niger に謀叛の計畫を打ち明け、同志となることを勧誘する。けれども三人とも交々それが無謀の擧であると言つて反對する。三人が去るとエレアツァルスとシモンは市民に呼びかけ、二人丈でも事を決行しようと言ふ。例によつて作者は序幕で劇的對立を紹介してゐるが、ここではその對立が羅馬とユダヤとの他に、ユダヤの内部も二つに分裂してゐることを示し、複雑な劇的葛藤を展開しようとしてゐる。そして此の内部分裂が第二幕、第三幕で更に詳細に紹介される。先づ過激派 (Die Zelotter) のシモン一味は Johannes Gibealens なるものを間者 (Der verräter od. der Kundschafter) として溫和派の僧正一黨の中へ潜入させる。第二幕の冒頭で此のギスガレヌスが過激派に頼まれて、僧正の様子を探りに行く旨を自己紹介して退場する。とさきのゴルギオン・ニガーが金袋を持つて逃げて來る。彼は一揆に加擔しなかつたため、羅馬方だとして掠奪に逢つたのである。そこへ過激派の連中が來て、彼の金を強奪し、彼を連れて行く。次いで僧正アナヌス、司祭エーズス、市議 (Der ratherr) Gamaliel 等が來る。彼等の中には間者のギスガレヌスや先きに連れて行かれた市議ニガーも加つてゐる。僧正は市民に向つて一揆の暴狀を訴へ、その對策を問ふ。そして明日は市會と市民の力で、過激派を襲撃することとなる。間者ギスガレヌスは表面それに賛成するが、皆が市廳舎の方へ去ると、早速今の様子を過激派に内通しようと言つて獨語する。そこへ一揆の者達

(Die auffrischen) が來る。ギスガレヌスが僧正方の計畫を密告すると、エレアツァルスがそれに對抗するため Idumeer 人二萬人を城中に引入れて味方にしようと言ふ。かくて城内の對立は益々尖鋭化して行く。處で此の幕では敵味方凡ての登場人物が來ることになつてゐるが、兩者が同一方向から登場するとは考へられないから、この來るには右側 (C) からと左側 (D) からと二つの場合があるとしなければならぬ。

扱て第三幕では内亂のその後の経過が示される。僧正派が入場 (geht ein)。一揆の者が Idumeer 人 (= Idumäer=Edomier) と合體して暴狀の限りを盡してゐると嘆いてゐる處へ、過激派及びエドム人達が來て、僧正と司祭とを打ち殺す。彼等は二人の死骸を晒し者にさせるために運び去る。代つて市議ガマリエルとニガーとが來る。彼等の對話で、城内では一揆のために一萬二千の貴族が殺戮暴行を受けたこと、羅馬のヴェスパシアヌス及びその子ティツスが猶太の各地を征伏し、味方の大將 Josephus (此のヨゼフはかの猶太戰史の著者) を捕虜にしたこと、だがヨゼフは正義の士だから、捕虜になつても祖國を救済するために盡すだらうこと、更らに一揆方では過激派とエドム人の間が仲間割れし、今は城内が三分してゐること、そしてかくなるのも凡て神の罰であつて、神は既に度々色々な不可思議な現象で、その豫告を與へてゐること等々が物語られる。しかもそこへ百姓ヨハネスが出て來て、腕を振り擧げ、絶望の言葉を絶叫し乍ら、悲し相に通り返り行く。彼は人人に馬鹿者扱ひにされ乍ら、既に四年五ヶ月の間あの様に叫び續けてゐるけれども、少しも聲が噎れない。之も神の徴の一つであるとガマリエルが言ふ。

第四幕。過激派が武裝して來る。羅馬軍の攻勢に對し、形勢不利である。彼等は旗印を立てて討つて出る。次いで貴夫人 Sabina が子供を抱いて來る。彼女は一物もとどめず掠奪に逢つて、今は死ぬより他

に途がない。そこへ老猶太女 Salome が忍び足て来る。彼女も夫と兄弟を殺され、五人の子供を餓死させ、家財を失ひ、呆然なす處を知らない。しかも彼女は家の焼けてゐるのを見て、急ぎ走り去る。あとに残つたサビナは子供に因果を含め、接吻し、それから顔をそむけて子供の頸を切る。(Sie küsst das Kind, schneidet ihm darnach die Kehle ab mit umgewentem Angesicht.) とそこへ一揆のものが来て、食物を強請する。サビナは血塗れな子供を差し出して、之でもお上りと言ふ。さすがの狼藉者達も驚愕し、互に尻込みする。サビナは彼等の臆病な様子を嘲ける。そして彼等が退散すると、此の子供の肉を食へ盡したら、自分も餓死するのだ獨語し乍ら退場。

第五幕。一揆の者達が来る。そして戦備を整へてゐる處へ、羅馬方 Florus と二人の從臣が鷲の旗印を持つて来る。兩者相戦つて、羅馬方が遁走する。旗印を捕獲した一揆方は、意氣揚々と引揚げる。次いで羅馬方の陣營。ティツスが從臣を連れて来る。彼はエルサレム城内が飢餓に瀕してゐるのを知つて、かの俘虜の將軍ヨゼフを降伏勧告の使節として派遣する。他方城中では一揆のものが入場(gehn ein)。形勢非なりとして協議してゐる。とヨゼフが近づいて来るのを認める。ヨゼフは城壁の外から、言葉を盡して降伏を勧めるけれども、エレアツアルスやかの間者のヨハネス・ギスガレヌスは罵詈雑言、城門の上から石を投げ落すぞと威嚇して、追ひ返す。即ちここでは舞臺が城壁の上であると思はれる。「ヨハネスは下へ向つて叫ぶ」(Johannes schreit herab.) とあるからである。従つて舞臺は高床(Podium)の上であり、ヨゼフはその舞臺の下迄出て来て、以上の問答が行はれたのであらう。

第六幕。羅馬方では總大將ティツス、副將 Terentius Rufus 代官 Cestius Florus が入場。降服勧告が失敗したので、更らに軍議を凝らしてゐる。既に二つの城壁は陥落してゐる。だから第三の城壁を地下

道を掘つて攻め、なほ嚴重に包圍して糧道を斷つこととする。彼等が退場すると、舞臺はエルサレム。かの狂人の百姓ヨハネスが又もや絶望の叫びを擧げ乍ら、手を振りあげて出てくる。と銃弾にあたつて倒れる。一揆の者が入場。彼等は窮鼠反つて猫を噛むの勢で、襲撃に出ようとしてゐる處へ、羅馬軍が攻め込んで来る。兩軍戦つて、一揆方は旗印を捨てて逃げる。ティツスは敵軍を寛大に取扱ひ、且つ寺院を保護することを命ずる。そして雄大なエルサレム城が破壊されたのを眺めて感慨に耽つてゐる。ヨゼフが来て、祖國の荒廢したのを悲しみ、自分は爾後羅馬へ移つて、此の歴史を後世に傳へようと云ふ。そこへ一揆の張本人シモンが捕へられて来る。(Die trabanten bringen Simon.) ティツスは彼を捕虜として羅馬へ連れて行くことを命じ、論功行賞を行ふことを宣す。一體にティツスは此の劇に於て卓越した名將として、恩威並び行ふ様に描かれてゐる。同様に一揆方のエレアツアルスは最も急進的な實行家として、又シモンは過激な謀略家として活躍し、溫和派の僧正司祭は無力を精神家であり、問者ヨハネスと俘虜將ヨゼフは對立的人物として、それぞれその性格と運命とが巧に描き分けられてゐる。殊に百姓の狂人ヨハネス、貴夫人サビナ及び老婦ザローメの挿話は凄慘目を蔽はしむるものがあり、穩健な此の作者の筆になるものとは思はれない程、異例にして生彩ある場面を構成してゐる。實に以上の點から言つても此の作品は劇作家ザックスの生涯に一時期を劃するものである。何となれば此の劇こそは、是迄に演出法上の約束や上演の場所が大體に於て確立され、今や作者の作劇法が、その劇形式に盛りべき内容に、新機軸と新技巧を取入れる方向へ向つて来たことを示してゐるからである。

だが此の劇の持つてゐる特殊の意義はそれのみではない。即ち先きに口上役の結辭を述べる時の卜書に關して見た通り、此の劇以後卜書に用ひられる eingehen と kommen の意味が明確に意識的に區別し

て用ひられてゐるのである。例へば第三幕で僧正派が這入つて來、過激派が來るとあり、第六幕で羅馬の將軍ティッスが這入つて來、次の場で一揆のものが這入つて來、羅馬軍が來るとあるのは、孰れも這入るとある時は背後から奥舞臺へ、來るとある時は側方から前面舞臺へ登場することによつて、満足させられる。前面舞臺へ直接登場する時は、何時も來るであるが、此の劇では第二幕で既に述べた通り、その場合左右兩側に登場口(C及びD)があつたことを思はせるものがある。此の事は第五幕で、一揆方が最初に來、次いで羅馬軍が來ることになつてゐること、一層明確に示されてゐる。即ちここでは兩軍相戦ふのであるから、廣い前面舞臺が用ひられたのであり、敵味方が戰場に來るのに、同一方面から登場して來るとは考へられないからである。

處で此の「エルサレムの破壊」は、既述の通り、五十五年十一月九日晝家バルテル・マックその他によつて上演許可が請願されてゐるから、翌五十六年の年頭に上演する豫定のもとに書かれたものであることは明かである。しかも當時既にマルタ教會とともにプレディガー僧院の食堂がザックス自身を代表とする劇團によつて使用されてゐたのであるから、此の劇も此の食堂を豫定して書かれたものであると、考へられないであらうか？と言ふのが僧院の食堂ならケスター流の舞臺が設けられるからであるが、若し又マルタ教會で上演されたものとすれば、此の頃からそこでも前面舞臺左右兩側に登場口が設けられる様な工作が施されたものとしなければならぬ。そして此の事は次作「レビ人の妾」を見る時、ほぼ確定的であることが知られる。

「レビ人の妾」は舊約士師記第十九章—二十章を脚色したもので、必しも傑作ではないが、前劇と同じ趣向の戦争の場を描いてゐるので、マルタ教會の様な奥行き狭い舞臺では、その上演が全く不可能ではないとしても、不便であるに反して、プレディガー僧院で前劇が上演

されたと同じ舞臺がそのまま使用されたとすれば、總ての條件が満足されるのである。恐く作者は僧院の食堂か又は同様な廣間に舞臺を設ける可能性があつたので、此の兩劇を書いたものであらうか？

レゾ人(Der Levit)は下男を連れて、姦通して自宅へ逃げ歸つた妾(Das Ketsweib)を連れ戻しに出掛けて行く。他方妾の父親の處へ、妾は泣き乍ら歸つて來て(Das Ketsweib kombt weinend)父親に匿まつて貰ふ。そこへレビ人が訪ねて來て戸を叩く(Der Levitt klopfte an)。彼は父親に戸を開けて貰つて這入つて來る。此の geht ein は前面舞臺右よりに戸口が設けられてゐて、その戸口を這入つて來て奥舞臺へ通つた意味であらう。同時に妾は匿れる(Das weib verbirgt sich)とあるのは前面舞臺の反對の側に退いたのである。だから父親とレビ人と和解が成り立つと、彼女はそこから二人のある奥舞臺へ來るのである。(以上第一幕)レビ人は妾と下男とを連れて這入つて來て、エブス(Jades)の門の前を素通りにしてギベア(Gibe)の方へ行く。即ちAからDへ行く。その間、さきの戸口はエブスの都門になる。そして次の場ではそれがギベアの都門になる。そこでは先づ門番(Der Thorwart)が這入つて來る。彼が門を締めて、休まうと言つてゐる處へ、レビ人が妾と下男を連れて這入つて來るとある。此の geht ein は然し kombt とあるべきで、恐く書き誤りであらう。即ち門番はAから這入つて來、レビ人はCから來なければならぬ。レビ人は入門を拒まれて、妾と下男とともに野宿をしようとして地上に坐る。と老人 Tars (聖書には此の老人の名前は出てゐない)が鎌を持つて野原から來る。そして彼によつてレビ人達は奥舞臺へ導き入れられる。そこが老人の住居となるわけである。彼等がそこで飲み食ひしレビ人が身の上話をしてゐると激しく戸を叩くものがある(Man klopfet ungestinn an)。之は勿論奥舞臺背後で戸を叩く音を聞かせたものとするところが出来る。それから老人とキベア人の「邪なる者」との對話(士

師記十九の二十二―二五)はすへて奥舞臺背後の幕(A)の内と外とで行はれ、レビ人の身代りになる妾もそこから突き出される。と言ふのが戸口の外部にあるギベア人達はすべて大聲で叫ぶやうに指定されてゐるからである。(Die Gibenitter schreyen außerhalb der thür, od. Der Gibenitter roth schreit.)

次の場ではかの妾が哀れな様子で出て来る。彼女は地上に倒れて死んで了ふ。そこへレビ人と下男が来る。彼等は反対側から來なければならぬから、ここでも前面舞臺のCとDが用ひられる。かくてレビ人は妾がギベア人達に凌辱されたことを知り、復讐を誓ひ、死骸を抱いて去る(以上第二幕)。

そしてレビ人はかの妾の死體を十二に刻んで、イスラエルの十二ヶ國に送る。その結果第三幕ではイスラエル方の評定の場となり、かの妾を辱しめた犯人をギベアから要求することとなる。他方ギベア人方も評議の結果、その要求を拒む。次いでイスラエル方がギベアの前に陣を張つてゐる處、之に對してギベア方も戦備を整へてゐる處。とそこへイスラエル軍が攻め込んで來て、戦闘。イスラエル軍は(Die Israeliten)は敗北遁走する。でイスラエル方では再び戦ふべきかどうかを司祭 Pinehasに問ふ。司祭は「攻めのぼる」ことが神の意志であると告げる。かくて第四幕では又もや兩軍が戦ふこととなるが、此の場面は全く「エルサレムの破壊」第五幕と同じ趣向によつてゐる。即ちギベア人方が來て、再び敵軍の來襲に備へてゐる處へ、イスラエル方が來て、互に戦ひ、イスラエル方は再度逃走、敵は之を追うて皆々退場する。次いで三度目の戦闘が行はれるが、その時もギベア方が先づ來て、先の戦勝を誇つてゐると、見張りの者(Der wacher)が急を告げて來る。ギベア方が打つて出る。そしてイスラエル軍を舞臺へ追ひ込んで來る。とイスラエル軍は軍を返して反撃に出る。之と呼應してイスラエル軍の伏兵(Der hinterhalt)が來て、ギベア軍は挾撃

される。かくてギベア軍は散々に打たれて、皆々逃げ去る。だからここでも敵味方兩軍の登場する二つの出入口が必要である。即ち始めギベア方がCから出てくる。見張りの者がDから來る。そしてギベア方はDから打つて出る。そこで場面が代り、ギベア方はCからイスラエル軍を追跡して再び出てくる。イスラエル軍はD近く迄逃げて來ると反撃に出る。と同時にC(又はB)からイスラエル軍の伏兵が現れ、ギベア軍は散々に敗れて、A、B、C、D、凡ゆる出入口から逃げる。勿論此の場合Dの代りにAが用ひられても上演は可能であるが、それでは凡てが來ると指示されてゐる意味が通らないのみならず、多人數武装したものがAから登場することは、動作を緩漫にし、混亂させ、觀客の視界を遮るから、活劇の勢を殺ぐことになるであらう。

尙此の劇は第五幕として、イスラエル人達はその一つの支派ベニヤミン(Benjamin)即ちギベア)の絶えることを憂へて、善後策を講ずる(士師記第二十一章)場面がある。

扱てハンス・ザックスは「エルサレムの破壊」及び「レビ人の妾」で戦争の場面を實演させてゐるのであるが、この事は當時此の種の大活劇が舞臺劇として上演可能であるばかりではなく、必ず人氣を博することが出來ると云ふ自信を、作者に抱かせたものと思はれる。その證據には、作者は五十五年十一月に二篇の喜劇

Ein comedi mit zwey-und-zweytzig personen. Die vertrieben keyserin mit den zweyen verlorren söhnen, und hat sechs actus. (追放された皇后と二人の行方不明の王子。1555, 11, 13)

Comedi mit 19 personen. Die schön Magelona, unnd hat 7 actus. (美しきヴェグローナ。1555, 11, 19)

十二月に二篇の悲劇

Tragedia mit 21 personen. Hertzog Wilhelm von Osterreich mit seiner Agaley, deß königs tochter auß Griechenlandt, und hat 7

actus. (埃太利侯ヴィルヘルムと希臘の王女アグライ。1555, 12, 3)

Tragedia, mit 13 personen zu agirn. Der Jephthe mit seiner Tochter, hat 3 actus. (ハンタリスの娘。1555, 12, 11)

を書いてゐるのであるが、執れも格闘又は戦争の場面が取入れられてゐるのである。

「追放された皇后」は既に作者が度々取扱つてゐる「ゲノヴェヱア傳説」風の物語で、羅馬皇帝 Heraclius の妃が双生児を生んだため、皇帝の母親から不義の子を生んだと讒訴され、母親の陰謀で追放される。そして妃は森の中で一人の子供を猿に、他の子供を女獅子に攫はれる。それから此の三人の數奇な運命が物語られる。猿に奪はれた子供 Florenz は佛蘭西の大臣 Clement に救はれて、佛國で育つ。それから二十年後、土耳其が佛王 Tagabertus に挑戦してくる。フロレンツは土耳其の巨人王 (Der riesen-könig) と一騎打ちして、敵を倒し大功を立てる。他方獅子に奪はれた子供 Lion は、妃がエルサレムに行く舟に救はれて或る島迄来た時、再び妃に見出され、母子はエルサレムの貴人の家で養はれてゐる(以上の経過は第五幕で妃がリオンに物語つてゐる)。そして今基督教國の危機を知つて、巴里へ救援にかけつけようとする。(第五幕第一場)。佛國では皇帝、佛王、フロレンツ、クレメント等が来て、土耳其軍に打つて出ようとしてゐる處へ、土耳其軍が来る。互に相戦つて、土耳其軍は逃走し、基督教軍はあとを追ふ(五の二)此の戦で佛軍は勝つたけれども、羅馬皇帝とフロレンツは敵の捕虜になる。と佛王やクレメントが言つてゐる處へ、リボンが手勢を連れて到着する。そこへ土耳其軍が来て、又もや戦闘となる。そして又もや土耳其軍は敗れ、基督教軍が彼等を追跡して皆々退場(五の三)。此の戦の結果羅馬皇帝とフロレンツが助け出され、そこで皇帝と妃、及び二人の王子フロレンツとリオンの和解と再會の場が現出する。折りから羅馬から使者が来て、かの讒訴した母后は氣が狂

つて死んだと言ふ(以上第六幕)。

「美しいマゲローナ」はプロヴァンスの傳説で、既に千五百二十七年 Veit Warbeck に引いて獨逸譯が出来てゐると言ふ。プロヴァンス伯 Johann Cerise の獨息子 Peter は兩親の留めるのを無理に嘆願して、武者修行に出る(第一幕)。そしてナポリの宮廷へ来て、その武術試合に参加し、武勳を立て、ナポリ王の娘 Magelona から花冠を受ける。二人の間に激しい戀愛が成り立つ(第二幕)。此の武術試合は却々念入りに仕組まれてゐて、人氣のあつた場面だと思はれる。即ちナポリ王が王妃王女を連れて奥舞臺へ這入つてくる。すると前面舞臺へ多くの騎士達が来て、二人宛戦ふ。(Heinrich von Tapona unnd Fiderich von der Kron und ander Kempter künnen, kempfen par und par.) 最後にペーターが進み出て挑戦すると、又もや騎士達が次から次へと現れ、皆々打ち負かされる。だからこれは格闘の場であるけれども、登場口はAとCと二つあれば足りる様になつてゐる。

それからマゲローナとペーターの間に熱烈な愛が燃え上る。作者は第三幕と第四幕で、二人の戀の場面を詳細に描いてゐるが、此等の場面こそ、此の劇の新しい特質として注目すべきものである。マゲローナはペーターを慕う悶々の情に堪へかね、乳母を通じて愛人に意中を打ち明ける。ペーターはマゲローナの心を知つて歡喜し、母から貰つた三つの指輪の一つを彼女に贈る。マゲローナは更らに愛人を呼ばせる。乳母は第二の指輪を貰つて来て、彼が承諾したことを報告する。かくてペーターはマゲローナの處へ忍んで来る。男は女に第三の指輪を贈り、女は男に頸飾りを贈る。二人の密語は盡きる處を知らないかの如くである(以上第三幕)。次いで二人は薔薇の花園で再び密會し、遂に駆け落ちの相談をする。その甘美な戀の場面は、前幕の荒々しい格闘の場と誠によいコントラストをなしてゐる。駆け落ちをして森の中へ逃れて来た二人は、そこで暫しの憩を取つてゐる間に、鳥のため、

かの三つの指輪の這入つた袋を掠はれる。ペーターは鳥のあとを追うて行く。その揚句鳥の行方を見失つたペーターは道を踏み迷うて、愛人の行方をも又見失ふ。芝居ではペーターが舞臺へ駆け込んで来て、以上の経過を獨語してゐる處へ、土耳其人が来て、彼に襲ひかかり、彼を捕へて、アレキサンドリアへ連れて行くこととなつてゐる。すると次の場面ではもうアレキサンドリアで、土耳其王が登場。海賊船が到着し、貴族らしい基督教徒を連れて来たと言ふから、見度いものだと言つてゐる。そこで二人の土耳其人が出て行つて、ペーターを連れて来る。そしてペーターは土耳其王に仕へることとなる（以上第四幕）。

話代つてマゲローナは森の中で漁師の女房に救はれ、プロヴァンスに伴はれて、その僧院長になる。一日プロヴァンス伯夫妻は、漁師から献上された大魚を持參して、僧院を訪れる。夫妻とマゲローナが行方不明のペーターの話をしてゐる時、漁師の女房がかの大魚の腹に三つの指輪が吞まれてゐたと言つて、それを持つてくる。伯夫妻はそれを見て、息子が今は亡いものと悲しむけれども、マゲローナは反つて彼が生きてゐることを豫感する（以上第五幕）。それからペーターは土耳其王から長年の功績に免じて、歸國を許される。彼は荷物を先きに故國の僧院宛に送り、身は變装して歸國しようと獨語する。又マゲローナは一夜ペーターの夢を見たと言つて、愛人の身の上を氣遣つてゐる。次いでペーターは歸國の途上或る島に寄港した時、舟に置き去りにされるが、二人の漁師に救はれて、プロヴァンスへ歸ることとなる（以上第六幕）。僧院ではマゲローナが大きな荷物が届いたと言つてゐる處へ、ペーターが巡禮の姿で来る。マゲローナはペーターの獨語を立ち聞きして怪しみ、それから二人の愛人同志の絶えて久しい再會の喜びの場面となる。そしてペーターの長物語の間に、やがて呼ばれて来た伯夫妻も加はり、受難の戀物語はすべて目出度して實を結ぶ。勿論此の劇の第四幕後半以下は對話と獨白で物語を敘事的に進めて

ゐる丈で、すべて從來の脚色法をそのまま常套的に踏襲してゐるに過ぎないから、上演上格別問題になる點はない。だがマゲローナ——ペーターの哀戀物語は作者をして次作「壞太利侯ヴィルヘルムと希臘の王女アグライ」の悲戀物語を脚色させるに至つたものと思はれる。と言ふのも此の兩者は何れも相思の男女の數奇な運命を取扱つてをり、内容が甚だ近似してゐるから上演するに當つても前者の俳優や衣裳その他の設備をそのまま後者に應用することが出来るからである。しかも一方は喜劇的結末を告げ、他方は悲劇的破局に終つてゐるから、そこに對立的變化もあり、作者の作劇慾を刺戟するに足るものもあつたであらう。

元來「ヴィルヘルムとアグライ」物語は早く千三百十四年 Johann von Wüzburg 作 Wilhelm von Oesterreich なる敘事詩があり、後十五世紀散文小説として出版されてゐるもの（Vgl. Gustav Ehrismann, Geschichte der d. L. bis zum Ausgang des Mittelalters, Schulband, S. 92 ff.）ザックスも此の散文小説によつたものと思はれる。壞侯レオポルト（Leopoldt）の息ヴィルヘルムは夢に美しい王女を見て、戀々の情に堪へず、父の諫止も嘆願も諾かず、彼女を探しに出る。だが途中舟が沈んで獨り異國に上陸する。そして希臘王 Abrant の處へ連れ行かれ、Pala と變名して仕へることとなる（第一幕）。彼は王宮で夢中の美女を見出して歡喜する。と他方希臘王の息女 Agley も彼と同じ晩夢見た男性がリアルだと知つて、飛び立つばかりの思ひ。二人は遂に相逢うて堅く行末を誓ひ合ふ。處がアグラント王は Phrigia 王 Balwan から求婚されて、アグライをフリギア王に嫁することにしたと言ふ。それを聽いてアグライが悲しみ悶える處へ、リアルが来る。若し二人は悲戀に泣く（以上第二幕）。王宮ではアグライとフリギア王との結婚式が行はれようとしてゐる。アグラント王と大臣がその相談をして去ると、リアルが出て来て、フリギア王が今アグラント王の夜宴に臨んでゐる



云云と獨語してゐる。宴後希臘王とフリギア王とが夜宴の席で給仕をしてゐた若者リアルの噂をしてゐると、フリギアからフリギア王の處へ急使が来る。ペルシャ王 Melchior がフリギアへ侵入して来たと言ふのである。バルヴァン王はアグラント王と相謀つて、ペルシャへ挑戦状を持つた軍使を派遣することとなり、リアルを選ぶ。勿論フリギア王は即刻歸國し、結婚は一時延期となる。だがアグライ姫は父王とともにフリギア王を援助するため、遠く異國へ行かなければならぬ。リアルはペルシャへ行く途中武者修行の武士 (Der abentheuerhauptmann) に逢ひ、自分の使命が死地に赴くことだと教へられ、その不幸から逃れる道を示される (以上第三幕)。彼はペルシャの森の中で二人の刑吏に處刑されようとしてゐる乙女を助ける。そして傍に置かれてあつた立派な椅子に腰を下ろし、そこに掛けてある狩の角笛をとつて吹き鳴らす。とペルシャ王とその息 Wildems が来る。リアルはペルシャ王にフリギア王の挑戦状を渡す。ペルシャ王は怒つて彼を處刑させようとするが、息ヴェイルデムスの取做して彼を赦す。そして彼はペルシャ軍に味方することとなる (以上第四幕)。かくて愈々希臘王アグラントとフリギア王バルブンは攻勢に出ようとして準備をすれば、アグライ姫は愛人の行方を思うて悲しんでゐる。他方ペルシャ王とその息ヴェイルデムス及びリアルも敵の攻撃に備へようとしてゐる。處へ希臘王とフリギア王が攻め込んで来る。例の如く烈しい戦が行はれ結局フリギア王が倒れ、攻撃軍は遁走する。と死者は運び去られ、皆々も一緒に退場。(Man trägt den toten ab und sehen alle mit ab.) 處で此の戦鬪の場が變つてゐることは、是迄見た様に兩軍ともが来る。と指定されてをらず、ペルシャ方が先づ這入つて来て (Gehen ein) ヴェイルデムスが「敵が打つて出てくるから、我軍も戦列を整へよう」と言ふ。そこへ希臘フリギア方が来る (Kommen) のである。だからペルシャ方はAから奥舞臺へ出て来て、そこで戦列を整へてゐると、敵が

Cから攻め込んで来るわけである。従つて、此の劇では登場口が二つで濟むやうに考慮されてゐると言ふことが出来る。却説、此の戦鬪の結果、アグライ姫は結婚から免れたので、希望に燃えて愛人を待つてゐる。そこへリアルから手紙を挟んだ薔薇の花束が届けられる。だがその喜びも束の間、今度はペルシャ王が息ヴェイルデムスのために彼女を選ぶ。アグライ姫はその事を父王から申し渡されて、又もや深い絶望に陥る。リアルも又絶望する (以上第五幕)。

ペルシャの宮廷では希臘王とその息女を迎へて、武術試合が行はれる。花婿ヴェイルデムスは多くの騎士を相手に戦つて勝つが、最後に戀仇リアルと烈しく格闘して殺される。ペルシャ王は怒つてリアルを處刑しようとする。と神の使メルクールが現れ (tritt ein) 恐らくBの登場口から) シュピターの命令だと言つて、リアルを連れ去る。アグライ姫は再び自由の身となつたが、同時に又愛人をも失つて、ただ神々の加護を祈つてゐる。メルクールに連れられたリアルはアルメニアの女王を監禁してゐる怪人 Morlein を征伏することを命ぜられる。そこへ怪人が来る。兩雄相打つが、最初リアルが打ち倒される。怪人は彼の首を切り落すために剣を取つてくると言つて去る。とその間に再び起き上つたリアルは、再度怪人と戦つて、遂に怪人を倒す。此の格闘の様式は今後も作者が用ひてゐるものである。(ジイフリート劇参照) かくて解放されたアルメニア女王はリアルに厚く感謝し、彼の希望を入れて、メルクールを使者とし、早速希臘王とアグライ姫を呼ばせる (以上第六幕)。メルクールがアグライ姫を連れて来ると、又もや思はぬ男に嫁がされるかと悲しむが、そこへ現れたのがリアルであるのを知つて、歡喜する。そこで始めてリアルは自分が塊太利侯の息ヴェイルヘルムであることを明かし、父レオポルト侯を呼ぶこととする。又アルメニア女王は二人を結婚させるために、メルクールに命じ、アグライの父希臘王アグラントを呼びにやる。既にして結婚式は二週間盛大

に祝はれ、今日は一角獣を狩する日である。ヴァイルヘルム侯はアグライの懸念するのを押し切つて、狩に出る。だが彼がアグライと結婚したのを嫉んだ土耳其王 Granes (土耳其服を着てゐる türkisch gekleidet とある) に待ち伏せされ、不意を襲はれる。二人は相戦つて共に倒れる。二人の死骸は馳けつけて来た二人の獵夫が二回に運び去る。此の報知は直ちにアグライに齎らされる。彼女はために絶望して息絶える。最後にアルメニア女王が来てアグライの死んだのを確認し、此の不幸な愛人達の運命を哀れみ、二人を一緒に厚く葬ることとする——(以上第七幕)

以上の様に此の劇でも受難の戀愛史を縫つて戦闘、試合、格闘の場面が挿入され、劇的所作を構成してゐるのであるが、その舞臺面は前劇(第二幕参照)と同じく、さして複雑な構成を必要としない様に出来てゐることは、第五幕の戦闘の場でも見た通りである。即ち登場口が AC 及びメルクルの出入する B があれば足りるのである。要するに、此等兩劇はマルタ教會のヘルマン式舞臺でも十分上演出来る様に、奥舞臺がフルに使用されてゐる。

處が「エフタとその娘」の戦闘の場面になると、敵味方兩軍がどうしても前面舞臺左右兩側(C及びD)から登場して来たに違ひないと思はる様に仕組れてゐる。今簡単にその筋書を見ると——

此の劇は士師記第十一章以下によつてをり、エフタは妾腹の子であるため、本妻の子供達から家を追はれる。處がその後ギレアデ人(Die Gileaditer)はアンモン人(Die Ammoniter)に攻められて、エフタを將軍として迎へざるを得なくなる。で漂泊中のエフタの處へギレアデ人の代表が来て、彼は總大將になる(以上第一幕)。他方アンモン人は既にギレアデの國に陣を張つてゐる。そこへエフタの使者が来て、降服を勧告する。勿論敵は承諾しない(二の二)。そこで彼はギレアデ人を率いて出征することとなる(二の二)。アンモン人も敵に先んじて

討つて出ようと相談する(二の三)。かくてエフタがギレアデの長老達を連れて出陣して来る。そして此の戦に勝つたら、歸宅した時最初に出逢つたものを神に捧げると誓ふ。そこへアンモン人が進軍して来て、兩軍の合戦となり、遂にアンモン人は逃走、イスラエル軍はそれを追うて這入る(二の四)。此の経過は明かに兩軍とも戰場に來ることを意味してゐるのであるから、先例によつて、前面舞臺が用ひられ、そこには左右に登場口があつたとしなければならぬ。それから第三幕でエフタの娘が鼓を持つて、乙女達と登場。恐らく聖書にある通り、彼女は舞ひ踊り乍ら、凱旋して來る父親を迎へる。だがエフタは今や先の誓によつて、娘を神に捧げなければならぬ。だから二ヶ月の猶豫期間の後、彼は娘を神の燔祭に供するのである。

ハンス・ザックスは五十五年度の作品で、好んで戦場の場面を脚色し、工匠歌人舞臺にとつては新機軸である所謂活劇物を創案したのであるが、扱て五十六年度の作品では果して如何なる新機軸を考案して行つたか? 此の觀點より見て、最も注目すべきことは先づ何よりも、彼の舞臺が益々實演を重んずる様になつて來た事實を擧げなければならぬ。即ち從來とかく當時の幼稚な舞臺技術では演出不可能であると思はれる様な事件は、使者の報告か口上役の説明或は關係人物の獨白や對話、從臣や僕婢の噂話等で物語られたに過なかつたものが、勿論それらの間接敘法も一方に於てなほ盛に用ひられるとともに、他方出來る限り觀客の面前で實演されるか、又は觀客をしてそれが行はれたと思はせる様な方法を取つてゐるのである。そのために舞臺の使用法や大小道具の應用に色々工夫が施されたし、俳優の演技にも多くの要求がなされたものと思はれる。従つて演技術そのものも當然進歩發達して行つたことが考へられる。そしてその間の消息を示す最も有力な資料は、臺詞の間に益々多く挿入されて來てゐる卜書である。

今その實例として五十六年度最初の作 *Comedia*, mit 16 personen zu agiren, hat 5 actus: Der Gideon (ギデオンの 156, 1, 25) を取つて見よう。此の芝居は士師記第六章から第八章二十三節迄を脚色したものであるが、聖書の敘事的物語、言はば平面描寫を、到る處で劇的對立即ち立體的描寫に移してゐるのが著しく目立つ。

先づ聖書には「イスラエルの子孫またエホバの目のまへに惡を行ひたれば、エホバ七年の間之をミデアン人の手に付したまふ云云」とあり、イスラエル人がミデアン人とアマレク人達によつて國を荒される慘狀について記されてゐるのであるが、劇の第一幕は、冒頭に Aser と Levi なる二人のイスラエル人を登場させ、交々異教徒によつて掠奪暴行を受けてゐる有様を話させ、嘆き悲しませ、神の救助を求めさせてゐる。とそこへ豫言者 (Der Prophet) が來て、イスラエル人の墮落を責める。アセルが改悛して、一重に神の加護を祈る。そこで豫言者は彼等を連れて、エホバに燔祭を捧げるために退場する。次いでギデオンが連枷を持つて來る。彼はそれで麥を打つてゐる。とそこへ天使が來る。此の天使は聖書のエホバの使者に當るもので、ザックス劇では聖書のエホバの言葉はこれ以後殆ど凡ての場合天使によつて傳へられてゐる。その方が實演し易いからであらう。かくて天使からイスラエルを救ふやうに命ぜられたギデオンは (士師記六の十二—十八)、祭物をするために走つて行つて、肉を筐に、汁を壺に入れて持つてくる。そして天使の指圖通り、筐と壺を下に置き、肉に汁を注ぐ。天使が杖でそれを掻き廻すと火が燃え上る。(Gideon laufft, bringt fäisch im korb und ein hafn. .... Gideon setzt korb und hafn nieder, geust die bru auß: der engel rührt mit dem stab an, geht feur raus.) すると天使は急いで退場 (Der engel geht eylend ab, 即ちBの登場口が用ひられる)。ギデオンは聖書にある通り「あゝ主よ主よ、われ御使を見たれば死なん」と云ふ。と又天使が來て、彼を激勵して二人とも退場。

かくの如くここでは色々な小道具、例へばギデオンの連枷と小麥、筐や壺が用ひられ、それがト書で注意されてゐるのみならず、その壺から火を發すること迄實演して見せてゐる。しかもそれらの道具類は後見役や助演者の手を借りず、登場人物自身が舞臺へ運んで來るやうになつてゐるのは、ザックス劇の大きな特徴としなければならぬ。だから聖書では敵に食糧を奪はれるのを恐れて、ギデオンは酒樽の中に匿れて麥を打穀することになつてゐるのを、劇では單にギデオンをして「長い間ミデアン人から逃げ廻つてゐたので、ここで暫く麥打ちをしよう」と言はせ、酒樽を用ひないで濟むやうにしてある。又ギデオンが筐と壺とを「椽樹の下に持ち出で」「巖の上に置く」(六章十九—二十) 筈であるのを、それらの木も岩も一切省略されて、臺詞にもト書にも言及されてゐない。それは要するにそれらの道具建てをする下廻り役 (Theaterdiener) を演技中に舞臺に出すことは舞臺幻想を破るものとして、極力避けたからであらう。

次の幕ではギデオンが神の告げによつて Baal の祭壇を毀つ件が演ぜられる。先づギデオンが一人登場。獨白で昨夜神が現れ、偶像を破壊しエホバのために新しい祭壇を築くやうにとのお告げがあつたから、今夜十人の召使を連れて密に事を決行しようと言つて去る。次いでイスラエル人の偶像禮拜者である Thubal と Jabal が遠く山の上を望んで、新しい祭壇の出來てゐるのを見、ヨアシ (Joas) の息子の所爲だから、ヨアシから息子を引き出して殺さうと話し合ひ、ヨアシの家へ行つて戸を叩く (Sie gehen hin, klopfen am haub Joas)。即ち二人はCから來て前面舞臺で山上を望見する恰好をし、奥舞臺Aの出入口で戸を叩く所作をすると、ヨアシがそこから出てくるのである。ここでは必ずしも戸口の飾付けを必要としない。ヨシアは勿論彼等の要求を、聖書の文句通り、拒絶して彼等を追ひ返す。

それから聖書に「茲にミデアン人アマレク人および東方の民相集り

て、河を渡りエズレルの谷に陣を取りしが云云」とある。簡単な記述が、ミデアン人の王ザルムンナとゼバ及び彼等の將軍ベルス (Zalmuna und Seba, die König der Midianiter, kommen mit Belo, irem hauptman.) の對話で、極めて慎重に謀議される場面となつてゐる。彼等はイスラエル人に對抗するために、敵味方の陣勢を計り、戦備を整へようとしてエズレルの谷に (im grundt Jesreel) 陣營を設けに行く處である。だからここでは前面舞臺が用ひられ、彼等はCから出て來るのである。

第三幕でギデオンは口上役とともに入場。彼は既にマナセ (Manasse) から軍勢を集めたが、尙ナフタリ、アセル、ゼブルン (Naphthali, Aser, Sebulon) から人も集めるやうにと言つて、口上役を派遣する。それから彼は羊の毛によつて神意を問ふ。(士師記六の三十六—四十) そこには彼のそれぞれの所作を規定する卜書が付いてゐる。彼は「手を高く揚げて」神に祈り、羊の毛皮を地に敷く。それから「毛皮を再び取り上げて皿の中へ水を絞る」即ち神は彼の祈りを入れて、地はすべて<sup>かほ</sup>燥き、羊の毛のみ露がおりたのである。彼が更らに毛皮丈燥いて地上一面山も谷も濡し給へと祈つてゐる處へ、「レヴィ、アセル及びギデオンの息子エテル (Jeter) その他多勢が武装して來る」(彼等とともに口上役も歸つて來る。) そこで「ギデオンは毛皮を取り上げる。」そして今や神が彼とともにあることを知つた彼は、「一同にハロデに (Bey Harot) 陣を敷くことを告げる。と「天使が來る。」天使は集まつた軍勢が多過ると告げる。ギデオンは口上役をして、臆病者は家郷へ歸る様にと觸れさせる。「そこで若干のものが退場する。」レヴィが二萬二千ものものが歸つたと言ふ。と又「天使が來る。」そして聖書にある通り、「民を導きて水際に下り、」手を口にあてて水を<sup>かひ</sup>飴るもの」を別ける様にと告げる。そこで一同退場する。次いで「ギデオンが三人連れて戻つて來る」(Gideon kombt wider selb

rit.) と「天使が來て」、三百人丈選抜されたことを告げて去る。ギデオンが選抜された三百人に向つて激勵し、敵の油斷してゐる中に、明日攻撃すると云ふ。そこへ又「天使が來て」、彼に敵狀を偵察に行くことを命ずる。彼は少年フラ (Pura) を連れて出かける。以上は凡て聖書の記載する處を劇的對話に移したものである。あとでエテルとレヴィが明日の戦の豫想をしてゐると、ギデオンが歸つて來る。勿論此のエテル對レヴィの對話は聖書にないけれども、ギデオンが敵の陣營迄行つてくる時間を埋める意味を持つたものである。彼は敵の陣營で二人の人間が大麥のパンの夢物語をするのを聞いた話をし(士師記七章三十三—三十四)、軍を三隊に分ち、各人喇叭と燈火を入れた空瓶とを持つて夜襲することを命ずる。

以上の様に此の幕でも聖書の内容を出来る丈忠實に舞臺で再演して見せようとする作者の苦心の意圖が十分窺はれる。そのためにギデオンは羊の毛皮を持つて出てくる。彼は手を舉げて神に祈る。イスラエル方の軍勢が多勢武装して登場する。天使が度々出入する。従つてその登場口としてどうしてもB、之を一般的に言つて奥舞臺の側面後方よりに、第二の登場口を想定せざるをえない。しかも水際に水を<sup>かひ</sup>飴る場面丈が舞臺外で行はれるやうになつてゐるのは、舞臺の上に河の裝置をすることが出来なかつたからであらう。處で軍勢が水際に去つて、ギデオンが再び「三人連れて」歸つてくる迄、舞臺は暫く空虚になつてゐるわけであるが、その間舞臺裏で兵士達の水を飲む水音を聞かせてゐたものではないかと思はれる。と言ふのもギデオンが出てくると殆ど同時に天使が來ていきなり「水を<sup>かひ</sup>飴めた三百人によつてイスラエルを救はん」と言つてゐるからである。しかもその三百人は「ギデオンが三人連れて戻つてくる」ことによつて暗示されてゐるのはなからうか? 従つてそのあとでフラ、エテル、レヴィの三人が物を言つてをり、ギデオンとともに少くとも「四人連れ」であつても、その數に

拘泥する必要はあるまい。又時間關係が實狀に即しないのは、從來のものと同様にはないけれども、之れ丈の内容を一幕に纏めて、目前に展開して見せた作者の手腕は、當時の觀客を十分満足せしめたであらう。

第四幕と第五幕は此の作者得意の戦争の場面である。ミデアン人の王ザルムンナとゼバはかの大麥の夢を自分方に都合よく解釋して敵方は三百人に過ぎない。何が出来ようかと、高をくくつてゐる。これは聖書で只「ギデオンの……敵軍の慮りなく居るを撃てり」（八の十一）と簡単に記されてゐる部分に當るもので、作者の詩的想像力による創作である。そこへギデオンの襲撃して來るのであるが、此の戦闘の特色は、ト書にある通り、ギデオンは遠くから指圖し、イスラエル軍は喇叭を鳴らし、瓶を打ち破つてその中の燈火を掲げ、喊聲を擧げて突貫して來ること（Gideon kumbt, stelt sich von weiten unnd sie lassen, zerschlagen die krieg, schreien）、かくてミデアン軍と互に入り亂れて相打ち、敵を追ひ拂ふ。するとギデオンはフラをエフライム（Ephraim）の山中へ派遣し、エフライム人をして逃げる敵をヨルダンの邊りて打ち取るやうにと言はせる。フラは直ちに走つて行く。あとでアセルとギデオンとその息エテルは追撃戦の謀議をし、エテルがスコテ（Suchot）へ兵に糧食を與へようと言つてゐるのは、次の幕のための巧妙な伏線をなす。因に此の戦争が前面舞臺で行はれたことは、兩軍とも「來る」とト書にあることで明瞭である。次いでミデアン軍の二王と將軍ベルス（Belus）とが出て來て、彼等が敗戦して走の途中であることを話し合ふ。

最終幕。スコテの長老達 Gelon と Salon（此の名は作者の作爲）がイスラエル軍の勝利は信じられないと話してゐる處へ、ギデオン及びその軍勢が來て（Gideon und sein volck kumbt）パンを要求する。だが彼を蔑視してゐる彼等はそれを拒絶する。ギデオンは復讐を誓つ

て去る。次いで又戦闘の場。ミデアンの兩王と將軍が出て來る。彼等は敵がもう彼方の山から迫つて來ると言つてゐる處へ、ギデオン軍が突撃して來る。遂にザルムンナとゼバは捕へられて、ギデオンの前へ引き立てられる。ギデオン（士師八の十九—二十）は彼等を斷罪し、息エテルをして彼等を殺せようとするが、エテルは懼れて殺し兼ねてゐる。そこで彼自身二人を殺す。その死體が運び去られる。それからギデオンはスコテ人を懲らすために一同を派遣する。一同が退場すると、エフライム人達（Die mender Ephraim）がギデオンの處へ來る。彼等がミデアンの群伯オレブ（Oreb）とゼエブ（Seb）の首を持つて來て功績を誇り、ギデオンに慰撫されて歸る處は、すべて士師記第八章一—三によつてゐる。最後にイスラエル人達が戻つて來て、ギデオンに王となることを求めるが、彼がそれを拒る處も、第八章二十二—二十三の通りである。かくて一同整列して退場。口上役の結辭——

「ギデオンは聖書に取材した澤山のザックス劇の中でも、特に當時の舞臺様式を表示する典型的作品である。そこには從來兎角臺詞で物語られる文であつた所作や操作がト書によつて比較的明瞭に規定され、可能な範圍に於て實演されたものであることを示すものがあるからである。しかも此の傾向は今後益々助長され、題材の要求する處によつて演技の上に色々な新工夫が施されて行つた。勿論多作の作家のことであるから一曲が一曲毎に進歩して行つてゐると言ふわけには行かず、中にはその場限り、自在の筆力の走るままに書き流して行つたものもあるけれども、大體に於て何等かの新しい思ひ付きが、それぞれの曲に加へられてゐるから、今後の作品によつて尙舞臺面を再構成する有力な資料が得られるであらう。だから今度は「ギデオン」に次いで直ぐ着手された「Tragedia, mit 17 personen. Der richter Simson, hat fünf actus. (士師サムソン。1556, 1, 31) を取つて検討して見よう。

此の劇は士師記第十三章—第十六章によつて、サムソンの生涯を脚

色したものであるが、その第一幕は丁度十三章全部に當ててある。即ちマノア (Manoah) とその妻ズサ (Susa) が登場、ズサは神の怒りに觸れたイスラエル人が、その罰としてペリシテ人 (Philistiner) のために凡ゆる暴行を受けてゐること、それに彼女自身石婦で、子供が生れないことを嘆く。それをマノアは色々に言ひ慰める。夫が家の方へ去ると、妻は両手を舉げて、子供を授かる様にと、神に祈る。と天使が来る。天使は聖書にある通り、男の子が生れる。その頭には剃刀をあててはならないと告げて去る。すると又マノアが来る。彼は妻から今の話を聞くと、手を舉げて祈る。すると又天使が来る。マノアは天使が誰であるか、今のお告げが確であるかどうかを尋ね、天使に勧められて、高い岩山の上で、神に祭物をするために、三人で去る。次いでマノアとその妻が出て来て、地に顔を伏して「神を見たから死ぬだらう」と云ふマノアを、ズサが慰め勵ます。かうしてその脚色法は全く「ギデオン」第三幕で天使が度々現れる場面用ひられてゐるものと同じである。且つエホバの祭壇で祭物をする場 (士師十三の十九—二十) 即ち「火燄壇より天にあがれる時、エホバの使者壇の火燄の中にありて昇れり」が實演されてゐないで、只マノアの臺詞丈で物語られてゐるのは、それ丈の設備が當時まだ舞臺で出来なかつたからであらう。

第二幕は第十四章全部に相當し、かのサムソンの謎かけの場面である。始めマノア夫婦が出て来て、男の子が授かり、それが既に成人して、今日はテムナテ (Thimna) のペリシテ人の處へ行つたが、もう歸る頃だと話してゐる。そこへサムソンが歸つて来て、テムナテで美しい女を見付けたから、女房に貰つてくれと頼む。父親がペリシテ人は異教徒だから、同族の中から嫁を貰ふ様にと言ふが、サムソンは承知しない。遂に夫婦はサムソンとテムナテへ出掛ける。次いでドロロン (Dolon) と云ふ花嫁の父親がサムソンの兩親から娘に求婚されたから承諾したと獨語して退場。それからサムソンが蜂蜜を持つて出てくる。

彼は無手で獅子を退治したこと、その後獅子の死骸の中に蜂蜜を見付け、それを兩親に食べさせたこと等を獨語する。そこへ父親マノアが来て、一緒に結婚式を舉げるために、テムナテへ急ぐ。ここでも獅子退治が實演されずに、單に物語られてゐるのは、矢張り演出上の都合によるものであらうが、サムソンに蜂蜜を持たせることでそれを補はふとしてゐる作者の意圖は、簡にして要を得てゐるとすべきであらう。それは丁度「ギデオン」の最終幕でエフライム人がオレブとゼエブの首を持つて出てくることによつて、エフライム人對ミデアン人の戰鬪の場を省略してゐるのにも似てゐる。つまり作者は或る場面が演ぜられない場合、その場面に最も關係の深い物品を示すことによつて、その場面を象的に印象づけると云ふ舞臺技巧を用ひてゐるのである。

扱てドロロンと花嫁と二人の若者 Goliat と Jabin がサムソンの到着を待つてゐる。サムソンが来て、花嫁に手を差し出し、お互挨拶宜敷くあつた後、二人の若者に謎をかける (士師十四の十四)。そしてドロロンに案内されて一同夜食に去る。それから四日目ゴリアートとヤピンはまだ謎が解けないで苦しんでゐる。遂に花嫁に頼んで、サムソンから謎の答を聞き出して貰ふこととする。彼等が去ると、サムソンが花嫁 Doria と出てくる。そしてドリアは口説いたり泣いたりして、遂にサムソンから謎の解答を聞き出す。それからゴリアートとヤピンがサムソンに謎を解いて見せる場面があり、更らにサムソンが三十人の衣服をもつて来て、かの若者達に與へ、傲然として立ち去つて行く簡單な場面がある。

第三幕は十五章を脚色してゐる。サムソンは小山羊を連れて登場。彼は妻の家を訪れようとして来たのである。すると舅が迎に出てくるのを見る。即ち彼は前面舞臺へCから現はれ、舅は奥舞臺へAから出て彼を迎へる。但しト書には *Simson geht ein mit einem böcklin* (サムソン山羊を連れて這入つてくる) とあるけれども、幕又は場面

が變つて、最初に登場して来る人物には *kommen* する場合でも、習慣的に *eingehen* が用ひられてゐることは、先きに述べた通りである。舅 (*Der schwager*) はサムソンに、彼の花嫁を他の男に與へて了つたと言ふ。そこで彼は怒つて、三百の狐を捕へて、二匹宛尾を結び、火をつけて、ペリシテ人の田畑を荒らさせてやると言つて、森の方へ行く。すると次の場面ではペリシテ人の群伯 *Sabulon* と *Zion* なるものが出て、サムソンが三百の狐で田畑山林を荒したことを話し合ひ、その仕返しとしてサムソンの舅一家を焼き打ちしようとする。だから既に前例 (「イサクの獻納」参照) もあるので、小山羊を舞臺に出してゐる作者も、狐狩と田畑荒しの場面は實演させるわけには行かなかつたのである。同様にペリシテ人がサムソンの舅一家を襲撃する場面はなく、只サムソンが獨り出て来て、その事件を物語り、復讐を誓つてゐる。處へかのペリシテ人の群伯と下僕達が來かかると、そこで又作者得意の格闘の場となり、サムソンは彼等を追ひ拂ひ、腰を下ろして休息する。と二人の猶太人 *Enoch* と *Saroch* が來て、彼を縛つて連れて行く。すると先きのペリシテ人達が又やつて來る。と見たサムソンは縛繩を引きちぎり、腮骨を取つて、彼等を打つ。彼等の一部は倒れ、數人は逃れる。 (*Sie binden in und füren ihn herauf. Die Philister fürsten khommen mit iren knechten. Simson zerreist die bandt, nimbt den kienbacken, schlecht sie, fallen ein theil, fliehen etlich auß.*) かくてサムソンは腮骨で千人を倒したと誇り、烈しく渴を訴へ、その腮骨から水を飲む。そして水を湧かし給ふた神に感謝するのであるが、此の最後の場は聖書に「ここに於て神レヒにあるくぼめる所を裂き給ひしかば、水そこより流れいでしが云云」とあるのを、作者が自在に作爲して、水が腮骨から出るやうにしてゐるのである。だから之は明かに當時の舞臺では地上から水を湧かせる事の不可能なを知つてゐた作者が「ギデオ」第三幕で水際の場面を避けた様に、

ここでも、演出可能な範圍で脚色したことを示してゐる。更らに換言すれば、ハンス・ザックスの作劇法を見る場合には、作者の詩想の貧困に歸するよりも、寧ろ當時の舞臺形式又は操作の不備を問題にしなければならぬ場合が多あると言ふことである。

第四幕は聖書の第十六章一―十四を、第五幕は十五―三十一を取扱つてゐる。ペリシテ人の群伯サブロンとテロンはサムソンがガサ (*Gasa*) の遊女の處に泊つてゐるのを知つて、彼の歸路を都門で待ち伏せて倒さうと相談し、都門を固めさせるために出て行く。次いで都門の場となる。即ちサムソンは敵の計略を知つて、敵の豫想しない眞夜中に起き出し、都門を門もろとも外して、「ヘブロンに向ひなる山の嶺」 (*auff die höch des bergs vor Hebron*) 迄持つて行くのである。だから彼は前面舞臺へ出て來る。 (*Simson kommt*)。そして以上の経緯を獨語すると、門を取つて退場する。 (*Simson nimbt das thor und geht ab*)。従つてここでは前面舞臺の一方にどうしても門が飾り付けてなければならぬ。處で門扉が舞臺で用ひられた例は「イサクの獻納」及び「レビ人の妾」参照) 既に之迄もあるけれども、それが如何にして舞臺に飾りつけられたかは、此の場面でも明瞭を缺いてゐる。かのサブロンとテロンの對話から見ると、恐くサムソンの出て來る前に、門の番兵達が登場し、門の飾り付けをしたものではないかと思はれる。何れにしても此の門扉は今後もザックス劇に相次いで用ひられてゐるから、工匠歌人舞臺に於ける重要な舞臺装置の一つである。

それから有名なサムソンとデリラ (*Delila*) の場面となる。サブロンとテロンが來て、都門の計略を掛けてゐる處へ、下僕がサムソンの逃げたことを注進して來る。そこで今度はサムソンの怪力の源が何處にあるかを知るために、彼の愛人デリラを買収し、彼女をしてその祕密を探らせることとする。かくて下僕がデリラを呼びにやられる。下僕が出て行くと、サブロンがどんな犠牲を拂つてもサムソンの



怪力を破らなければならぬと言ふ。そこへデリラが来る。彼女はチロンに説かれて、喜んでサムソンから秘密をひき出す役を引受ける。二人の群伯が去つて、サムソンが来る。(彼が此處へ訪ねてくるのは場所の錯誤である)そこでデリラは巧に持ちかけて、彼の力の在り場所を問ひ出さうとする。その結果彼女は三度サムソンに瞞されるのは原典にある通りである。始めは乾いたことのない七條の新しい繩で彼を縛る。そして彼女が「ペリシテ人があなたを！」と叫ぶと、それが合圖で、ペリシテ人が襲ひかかるが、直きに逃げて行く。サムソンは起き上つて、綱を断ち切る(Die Pfister fallen ein, fichen baldt. Simson fert auf, zerreist die bandt)。次いでまだ用ひたことのない新しい索で彼を縛ると、同様に彼はそれを断ち切つて、敵を追ひ拂ふ。更らにデリラは彼の七條の髪毛を一本に編んで絹の紐で結び、それを壁に釘で打ちつける。だがペリシテ人が襲ひかかると、彼は忽ち又自由の身となる。そして敵は逃げ、彼もその後を追うて這入る。あとでデリラは、彼が單純でまた自分の不實に気が付かないから、どこまでも彼を迷はせて、秘密をきき出して見せると獨語して退場。此の場はサムソンの髪毛が壁に打ちつけられるためにも、奥舞臺が用ひられたに相違ない。従つて三度出て来て三度も逃げて行くペリシテ人は奥舞臺背後の幕の陰に潜んでゐたこととなる。そして三度目の場合文前面舞臺を通つて逃げて行き、サムソンはその後を追うて退場する。尙此の場面は相變らず場所と時間の關係を無視してゐるけれども、俳優の演技が巧みてあれば、それらの缺陷を補つて餘りある程劇的所作に富んでをり、簡單な小道具で十分演出出来るから、炯眼な作者がそれらの點を見逃さなかつたことは當然のことである。

かくて第五幕、デリラがサムソンの髪毛を切り取る場面となる。デリラが今夜こそはと待つてゐる處へ、サムソンが来る。彼が甘言にのつて、髪毛の秘密を洩らすと、デリラは髪毛を梳いてやるからと言つて、膝を枕に彼を横たはらせる。彼は髪を解かせてゐる間に眠る。と彼女はペリシテ人に合圖をする。ペリシテ人が来て、彼の髪毛を切り取る。そこでデリラが「ペリシテ人があなたを!……」と叫ぶ。サムソンががばと起き上る。ペリシテ人が彼に襲ひかかり、彼を捕へて鐵の鎖で縛る。かくて彼はサブロン<sup>サブロン</sup>の命令で眼を抉られ、ガサの牢屋で石臼を挽くこととなる。それからペリシテ人は市廳で祝賀の祭を開くと言ひ、口上役が民衆(Das gemein volck)を呼んでくる。ここではまだ口上役が去ると、直ぐ民衆が出て來ることになつてゐて、その間の時間的間隔を埋めるものがない。民衆の一人 Gason がサムソンの捕縛されたことに對して祝意を表す。群伯チロンは祝祭に當つてサムソンをして戯技を演じさせようと言ひ、皆々市廳舎の方へ去る。最後に、サムソンの怪力が市廳舎を倒す處であるが、作者はここでもその實演の不可能なのを知つて、場面をサムソンの牢屋の外に取つてゐる。口上役が来て、サムソンを牢屋から引き出して、市廳舎へ連れて行く様にとつて去ると、少年が盲目のサムソンの手を曳いて出てくる。彼は神に祈りを捧げ(士師十六の二十八以下)少年に市廳へ行つたら建物を支へてゐる二本の柱の所へ連れて行くやうにと頼む。少年が彼を連れ去る。と市廳舎が崩れ落ちる様が大音聲がする。少年が馳け込んで來て悲鳴を擧げる。(Der knab furt Simson hin; denn wirt ein grob gerümpel, samb falle das rathaub ein; der knab kompt geloffen, schreit kläglich.)彼はサムソンのために市廳舎が崩壊して、三千人の男女が壓死したと告げ、サムソンを葬るために彼の友人達を呼んで來ると言つて退場。かくて口上役の結辭。だから此の場も明かに舞臺装置の都合によつて、牢獄内の場面も市廳舎崩壞の場面も割愛されたもので、その代り建物の崩れる音響を舞臺裏で聞かせてゐるのは注目に値する。之に依つて「ギデオンの第三幕イשראל人が水を飴る場面も、樂屋でその物音を聞かせたものであると云ふ推定が成

り立つてあつて、兩者ともその時舞臺は空虚になつてゐるのも酷似してゐる。何れにしてもここに又新しい演出技巧が見られるわけである。

「ギネオン」と「サムソン」に次いで聖書から取材されたものには「放蕩兒」(1556, 4, 18)

Tragedia mit 9 personen. Der verlor son, und hat 5 actus.

David, mit irem bruder Amnon und Absalom, und hat drey actus. (ヌグリの娘タバルとその兄弟アマノン・アハトン・サロム。1556, 5, 12)

Comedia mit 5 personen. König Darius mit drey kenerling, hat drey actus. (ヌリウス王と三人の侍臣。1556, 9, 23)

Comedia mit 22 personen. Der Josua mit sein streiten, und hat 7 actus. (モシホムスとの戦。1556, 10, 19)

Tragedia mit 27 personen. Der Machabeer, und hat 7 actus. (マカベエ。1556, 10, 30)

Comedia mit 6 personen. Das wifrewlin mit dem ölkrug, und hat drey actus. (寡婦と油壺。1556, 12, 18)

等喜劇四篇悲劇二篇あるが、之等を原典の簡明直截な記述に比べると、ハンス・ザックスの劇構成法や詩的想像力が最もよく窺はれて興味ある研究の對象となり得るであらう。そこには此の作者が従來用ひて來た技巧が屢々繰り返され、又は自然に應用されてゐるから、一見した處千篇一律の感を與へるけれども、仔細にそれを原典の物語と比較して見る時、それが必ずしも作者の缺點ではなくして、寧ろ作者は絶えず古るい技巧に新しい趣向を加へることにより、劇的效果を擧げようと努めてゐることを知ることが出来る。

例へば「放蕩兒」であるが、此の物語(ルカ傳第十五章十一—三十二)は、既に見た通り(宗改演第八章参照)當時幾多の劇作家によつて最も

好んで取扱はれた題材である。しかもハンス・ザックスは全くそれらとは別箇に、自らの経験によつて自らの舞臺のために作劇したものと思はれる。と言ふのも彼の芝居は全く獨逸風の富農一家の家庭的事件として脚色されてをり、その信仰上の立場も、結辭にある通り、作者の宗旨である新教精神によつて、「徳行の功德を誇る人人」(die werckheyligen, stolzen hauffen)として長男を排し、贖罪によつて救はれる罪人として放蕩兒を推賞してゐるからである。そのために作者は最初に父親(Der vater)の口を藉りて主人公の家庭的事情を詳しく紹介してゐる。それによると一家は父親と後妻と、先妻の息子二人とから成り、家運に恵まれ何不足ない。長男は父親に似て勤勉力行、質素従順でよく家事に勤めてゐる。只次男は遊惰放縱で悪友に誘はれて身を修めない。だがそれも若い中のことで、年をとれば身持ちも良くなるだらうと言ふのである。父親が去ると、阿諛者 Wolf が登場。ヴォルフは既に度々見た様な幫間的人物で、ここでは彼が次男をよい獲物とばかり、煽て上げ、彼に兩親から遺産を分けて貰へ、さうでないとなれば自分の生んだ子供のために財産を取り上げるぞと、悪智恵をつけることとなつてゐる。次の幕では長男と父親とが次男の噂をして、兄がもつと嫉を厳しくしなければならぬ等と言つてゐる處へ、次男が来る。彼は父と兄との説諭も諾かず、強引に遺産を貰つて行く。その間父親は一度退場して、金袋を持つてくるのであるが、父親の居ない間にも兄と弟との争ひが續いてゐる。孰れにしても此の三人の對話は作者の老練な筆致を示すもので、生眞面目で頑固な兄、慈愛に溢れ世故にたけた父親、やん茶坊主できかん坊の弟と言つた市井の家庭風景がよく描寫されてゐる。しかも作者は弟が遺産を請求する動機として、ヴォルフの入智慧にある様に、繼母關係を新しく附加してゐる。即ちこの家族的トラブルは人物の行動に劇的契機を與へるものとして、甚だ現實的な趣向である。

他方ヴォルフは兩親が貯へた財産をすつかり使ひ果して借金で投獄され相になつてゐる。だから金袋を持つてやつてくる放蕩兒を、凡ゆる甘言で誘惑する。アウグスブルクへ行かうか、シヤトラーズブルクでもライン河のケルンでもよい。どこにも美しい女が澤山ある等と言つて、若い男の遊心を唆る。放蕩兒は先づ着物や馬を買つて旅仕度をし、今日は仲間と一杯やつて遊び、明日門を出たら、羽を吹いて見て、羽の飛んで行く方へ騎つて行かうと言ふ。

第三幕は娼婦 Dulceda と下婢 Hilla が放蕩兒を誘惑する場面であるが、此の種の場面も既に作者には經驗済みのものである。だが之を同趣向の場面、例へば謝肉祭劇二十三番「若い商人ニコラとソフィア」等と比較すると、著しい進歩の跡が見られる。即ち謝肉祭劇では原作デカメロンを甚だ情味のない平面的なものにしてゐるのであるが、ここでは聖書に「幾日も経ぬに弟おのが物を悉く集めて遠國に行き、そこに放蕩にその財産を散らせり」と簡明に記してあるのに對し、その放蕩の経緯を順序よく展開して見せてゐる。ドゥルツェダは今迄の馴染の容に捨てられて、新しい掠鳥を求めてゐる。そこで下婢のヒラを遣つて、「此の頃よく家の前を通る金のあり相な伊達者」に求愛させる。かくてヒラは戸口に立つて (Hilla stellt sich zu der Thür) 待ち構へてゐると、放蕩兒が阿諛者 (Der schmartzler od. der schneicher) と一緒にやつて来る。ヒラが巧に戀の取持ちをするので、彼は惜し氣もなく、女には金の指輪、下婢には金貨を贈る。下婢が去ると、ヴォルフが「女中はわしのものだ。女中がお前さんから貰ふものは、わしがまたうまく取り上げるんだ」と言ふ。「さあ宿屋へ行かう。お前は大馬鹿の大頓痴氣だ」「若旦那、お前さんもてさあ」「何だと?」「何ね、煙が目にしみたんで」と捨白科宜敷く二人は退場。次いでドゥルツェダが掠鳥を陥穽にかけたかどうかと待つてゐると、ヒラが上首尾を傳へて来る。女は更らに傷ついたハートを刺繍した手

巾を贈らせる。放蕩兒はヒラから手巾を受取ると、お禮に首から鎖を外ずして與へ、今晩行くから出来る丈の御馳走を用意しておく様にと、贅澤な料理を敷へ上げる。ヒラが去ると、放蕩兒は戀の成功に得意になり、かのお追従者に煽てられて、早速賭博場へ出掛けて行く。あとで阿諛者は彼の恐ろしい浪費振りを一數へ上げて、彼の財布も直きに空にならだらうと獨語。

第四幕。その言葉の通り次の場では、ヒラが馬鹿若様が二ヶ月も誑かされて、湯水の様金を使つてゐると言つてゐる處へ、ドゥルツェダが不機嫌相に出て来て、男が自分に借金を申し込む様になつたからもう縁切りだと言ふ。同様にヴォルフも宿屋から何もかも取り上げられ、追ひ立てを食ふ様になつてはもう用はないと、放蕩兒の姿を見ると逃げ出す。それを放蕩兒が呼び止めて、宿屋からは追はれ、女からは捨てられた、何とか助けてくれと頼むが、散々愛想づかしを言ひ、金の切れ目が縁の切れ目だとはかり、行つて了ふ。若者は兩手を舉げて悲し相に、金はなくなつた。物價は高騰してゐると嘆く。そこへ町人 (Der burger) が来る。放蕩兒は彼に頼んで、漸く豚飼ひにして貰ひ、そのあとに蹤いて行く。そして第五幕目、放蕩兒は牧童の袋と鞭を持つて出て来て、手と目を天に舉げて嘆き悲しむ。彼は豚飼ひの辛さを身に泌みて感じ、飢餓に堪へないので、父親の處へ歸つて、せめて日傭人夫としても使つて貰はうと言ふ。かくて父親の心配してゐる處へ、彼は歸つて来る。父は見事らしい姿をしたものが近づいて來るのを見て怪しむが、それが家出をした息子だと知ると、馳け寄つて抱きよせ接吻する。(Der vater laufft, umbrecht den son, küsst in, der son felt auff beyde knie, hebet sein hendt auff.) 息子が跪いて兩手を舉げ、せめて人夫としても使つてくれと言ふのを、父は抱き上げて、死んだものが生き返つて來たと言つて喜ぶ。下男が來て、息子に着物を着せ、上靴を足に履せる。そして二人が家に這入ると、長

男が熊手を擔いで出て来る。彼は立ち聴きして、家の中の騒々しいのを怪しむ（即ち舞臺裏で賑かな物音をきかせる。）下男 *Heinz* が来て、弟のために祝宴が設けられてゐることを知ると、唾を吐いて罵しる。

「あんな奴はネッカー河に沈んで了ひばよい。」すると「父親が家の戸口に立つ」（*Der vater steht unter die haubthür*）。そこで取り交される父子の間答はほぼ聖書の文句によつてゐる。結局兄は傲然として立ち去るので、親父は若い頃度しかつたものも年を取ると生意氣になつて反抗する。弟は若氣の過ちを犯したが、世の辛慘を嘗めてからは、立派な息子になつたと述懐する——

ザックスの放蕩兒劇には他の作者例へば *Burhard Waldis* (1527) や *Jörg Wickram* (1540) のものの様に、物語中最も劇的な場面を構成すると思はれる放蕩兒遊興の場や豚飼ひの場が脚色されてゐない。娼婦や阿諛者が出て来るけれども、それもザックス風の型に嵌つた人物で、まだ遊女生活や道化役者にまで發展して行つてはゐない。然し作者が勉めてそれらの人物の行動にそれ相應の動機を與へて會話に生氣を帯びさせ、多くの卜書を挿入して獨逸的な人情風俗を寫してゐるのは、大衆劇として却々老巧な脚色振りであるとしなければならぬ。特に注目すべきは第三幕娼婦 *ドゥルツェダ* の家の前に門扉が用ひられてゐることである。恐く前劇「サムソン」で用ひられたものが、早速此處にも應用され、前面舞臺の片側を區劃する様に置かれたものであらう。下婢 *ヒラ* がそこに待ち構へてゐると、放蕩兒と追従者が *C* から前面舞臺へ上つて來、そこで下婢との問答があり、彼等は又宿屋へ引返して行く。下婢は奥舞臺を通つて *A* から這入る。次いで *ドゥルツェダ* が外から歸つてくる (*Dulceda kombt*)。下婢は *A* から出てくる。そして二人が去ると、又放蕩兒と阿諛者とが這入つて來る (*Der verlorne sohn geht ein mit sein schnarotzer*) とあるのは、此の門扉を這入つてくる意味であり、次の下婢が這入つて來る (*Die magdt*

*geht ein* とあるのは *A* から奥舞臺へ出て來ることだと解される。之に對し第五幕で「父親が家の戸口に立つ」とあるのは、*A* から出て來るのであるから、そこでは門扉を必要としない。

かくて此の門扉の使用價值を知つた作者は、今後盛んに之を用ひるやうになり、工匠歌人舞臺はそれがために更らに寫實的演出が出来るやうになつて行つた。今暫く五十六年度に書かれた此の門扉に關係のある作品を通じて、その發展の跡を辿つて見ると——

先づ五十六年七月四日作 *Comedia, mit 12 personen zuspielen. Von dem marschalck mit seinem sohn, unnd hat funff actus.* (宮内卿とその息子) の第四幕には此の門扉が設けられてゐたことを思はせるものがある。

此の物語は羅馬皇帝 *Vespasianus* の頃老宮内卿 *Sophus* が息子 *Pamphilus* に遺言として與へた三つの教訓を骨子としたもので、その教訓とは第一、刑の定まつた罪人を助けてはならないこと、第二、自分より目上のものを饗應してはならないこと、第三、細君には祕密事項を洩らしてはならないことと言ふのである。やがて父が亡くなつて息子の *パムフィルス* が皇帝から父の後任に任ぜられる。處で茲に *Dibolt* と云ふ悪人があつて、金に困つて追剝ぎをしようとしてゐる處へ、皇帝の息 *Titus* と *パムフィルス* とが通りかかる。泥棒は密に忍び寄つて、*ティツス* が *パムフィルス* の大臣任官を祝ふため手提袋から取り出した鎖を奪つて逃げる。だが忽ち從臣達に捕り押へられる (第一幕)。しかも *パムフィルス* は泥棒が死刑になる處を助けて、自宅へ連れて歸る。

かうして父親の第一の教訓に背いたけれども、何の祟りもないと言ふので、更らに第二の教訓に背いたけれども、皇帝と皇子とを饗宴に招待することを、細君の *Floria* と相談する (第二幕)。その驕奢を極めた饗宴の模様は、*パムフィルス* の家臣 *Marus* と *Phedrus* によつて物語られる (間接敘法)。だが皇帝は大臣の豪華な生活振りを徴らすために、黄金

の器具類を没收するやうに命じて、引上げて行く。パムフィルスは第二の教訓が適中したのを知つて、今度は第三の教訓の眞偽を試みようとして、一計を案出する。彼は皇子ティッスを巧に説いて、或る娼婦を、彼を戀してゐる貴婦人だと偽つて、彼を誘惑する。そして皇子に密に宮中を脱け出て、婦人の家に暫く滞在することを承諾させる。それから懐を殺して袋に入れ、それを擔いで細君の處へ来る。彼は血塗れの刀を示し、皇子に侮辱されたので、彼を殺したから、袋の中の死體を地下室に匿すのだと告げる。勿論絶対に他言は無用だと戒める。だが夫人は下男のディボルトから、皇子が行方不明になつたので、皇帝が激怒して探してゐると聞いて、夫の身の上を心配する。彼女は心痛の餘り、折り柄訪ねて来た友達の Sabella に、絶対に他言しないと云ふ約束で、夫の祕密を打ち明ける(第三幕)。しかもサベルラは夫君である宮中顧問官 Philippus に、之も祕密を守ると言ふ誓約の下に、今の話を決らす。ここで夫が妻から祕密を聞き出す時の會話は誠に巧妙な極めてゐる。だが祕密を知つたフィリップスは「皇帝に對する忠誠の誓の方が、お前に對する誓よりも大切だ」と、即刻宮中に出仕する。その結果は次の場面で示される。パムフィルスが妻のフロリアにまだ祕密は曝露しないやうだと言へば、フロリアは「貴方と私の他に誰も知らないことが、どうして他に傳りませうか云云」と答へる。すると彼は「誰か戸を叩いてゐる。行つて見ておいで。」と言ふ。そこで「フロリアは行つて開ける」(Floria geht, thut auf.)と卜書にあり、從臣達が来て、パムフィルスを捕縛して行くこととなる。だからここで門扉が舞臺に存在したと思はなければならぬ。かくてパムフィルスは皇帝の前に呼び出され、死刑の宣告を受ける。それから皇帝は死刑の執行人を募集させる。すると先の泥棒、今のパムフィルス家の下男ディボルトが出て来て、賞金欲しさにそれに應募しようと獨語してゐる(第四幕)。いよいよ大臣が處刑される時になつて、彼は事の真相

を悉一物語る。そこへ皇子ティッスも無事歸つて来る。かくてディボルトが處刑されるが、かの三つの教訓はすべて適中したわけである。次いで五十六年九月二十九日作の喜劇 Comedia, mit 9 personen zu agieren. Julianus, der kayser, im badt, und hat 5 actus. (浴する皇帝ユリアヌス)にあつては、宛も此の門扉のために、此の作品が書かれたかの如き觀を呈してゐる。劇物語は Gesta Romanorum から取られた Jovinianus 皇帝 (röm. Kaiser, 363—364) に關するもので、既に Aurelianus der hofferig: in dem rosentone des Hans Sachs (1549, 6, 21) 及び Der hofferig, kaiser Aurelianus in dem pad (1550, 2, 9) なる工匠歌及び説話詩で歌はれてゐるものである。作者が主人公の名前をヨヴァニアヌスからアウレリアヌス、更らに此の劇のやうに Julianus Apostata (背教者ユリアン皇帝) へと變へて行つたのは、その方が一層人によく知られてゐたからであらう。

皇帝ユリアンは一日王侯廷臣勢子達を從へて野猪狩りに出る。その權勢は並ぶものなく、彼は遂に自らを神以上のものと誇る。だが天使はその増長慢を憎み、彼を懲らさうとする(第一幕)。狩場で暑熱に堪へかねた皇帝は、宮内卿 (Der hofmeister) の奨めて、溪流に浴しようとして、服飾品着衣帽子を脱いで、浴用マントに着換へる。彼が水浴に去ると、Hertzog Gottfried と宮内卿とが「急に冷い水に觸れて、熱を出されては」「いや皇帝の身體は鍛へてあるから大丈夫だ」等と話してゐる處へ、先の天使が皇帝と同じ浴衣を着て現れる。そこで皆は天使を皇帝だと思ひ、彼に皇帝の衣服裝身具を着せて、連れ立つて立ち去る。そのあと浴衣のままの本物の皇帝が出てくる。彼は四邊りを遠く見廻し、家來のものも着物も凡て失くなつてゐるのを見る。始め彼は廷臣達の惡戯だと思ふけれども、大臣の名を呼びたてても誰一人答へるものがない。やむなくゴットフリート侯の處へ立ち寄つて、着物と馬を借りようと獨語する。話代つてゴットフリート侯は天使の變

装した皇帝をコンスタンチノーブルの宮城に送つて今歸つて來た處である。早速食事の支度を召使に命じてある處へ、戸を叩く音がする。召使が取り次に出る。皇帝は門を這入らうとし、召使は彼を突き返す。皇帝は「余は皇帝であるぞ。主人の處へ通せ。」と怒る。下僕は彼を門の處に待たせて、侯に今の様子を報告する。そして侯から「通して宜しい」と言はれて再び門の處へ来る。皇帝は下僕に嘲弄され乍ら、門を這入つてくる。だが彼が如何様に自分が皇帝であることを申立てても、相手にされない。遂にゴットフリート侯は召使に命じて彼を叩き出させる(第二幕)。以上の様に此の幕では門扉(Die Pforte)が重要な役割を演じてゐることは、贅言を要しない。しかも之は是以後の各幕に使用されてゐるから、舞臺にそのまま設置されてゐたものと思はれる。尙ここで皇帝が着物を着換へてゐることは、既述の「ガルミ」劇や「フォルツナーツス」劇等等で變装が行はれてゐることと相俟つて、工匠歌人舞臺に於ける扮装の問題に示唆を與へるものであるが、此の點に關しては後述することとする。

次いで第三幕に於ても、天使皇帝(Der engel-kaiser)と皇后とが夕食後獸苑を遊歩しようとして、楽しく語らつてゐる處へ、皇帝が門を叩く。そして門番(Der thorwardt)と裸の皇帝(der nacktet Kayser)の間に門の内と外とで長い押し問答が續く。遂に門番は天使皇帝にその一部始終を報告し、皇后の意見で、裸體の皇帝を門から呼び込める。そこで皇帝は自分が本物の皇帝であることを證明するために、昨夜の閨中の祕事迄素破抜くので、皇后が恥しむて顔を蔽ふ(Die Kayserin deckt ir angesicht vor scham.)と言つた場面があつた後、天使皇帝は廷臣達に、二人の中どちらが眞の皇帝であるかを問ふ。そして皇帝は似而非者であるとして、又門から敲き出される(第三幕)。皇帝は萬策盡きて自殺しようとするが、又思ひ返して、隠者を訪ねて行く決心をする。次いで隠者が杖をつき、珠數と祈禱書を持つて登場。彼が

祈禱と禁慾の生活に就いて物語つてゐる處へ、裸の皇帝が又戸を叩く。隠者が覗き窓を開けて見るが、再び閉ぢて了ふ。(Der einsidel thut das fenster auf, schlecht das wider zu.)彼は皇帝を認めない。皇帝は跪いて兩手を挙げ、今迄の傲慢不遜な言行を告白改悛し、再び戸を叩く。だが隠者は惡魔の化身だとして受けつけない。漸く皇帝が十字架に懸つた基督に免じて赦しを乞ふに至つて、彼は門の内から、何の用かと話しかける。皇帝は神を無視、教徒を迫害したことを告白する。そこで始めて隠者は窓を開いて、皇帝を呼び入れる。(即ちここで Der kayser geht ein. とあるのは門を這入る意味である。)かくて皇帝は森の中で水浴した以來のことを物語り、隠者に懺悔し赦免を乞ふ。隠者は彼に自分の着物を着せ、自分の帽子を被らせ、手を差し出して彼のために祈る(第四幕)。宮廷では天使皇帝と皇后とが獸苑から歸つて來て、樂しかつた遊山の話をしてゐる。と戸を叩く音がする。そして門番を迎へられて、隠者の着物を着た皇帝が這入つてくる。一同が彼に敬禮をする。天使皇帝が彼を自分の傍に立たせる。今はゴットフリート侯も宮内卿も皇后も、何れが眞の皇帝か判断がつかない。そこで天使皇帝が自分の本性を明かし、皇帝の不遜が罰せられたことを懇ろに説く。そして皇帝と衣裳を取り換へるために急いで(schnel)退場する。(即ちBの登場口から)すると宮内卿が皇帝から復讐されはしないかと恐れる。だが服飾を改めて歸つて來た皇帝は、跪いて赦しを乞ふ皇后を抱き起して、彼女の徳を讃へる。それから同様に、兩手を舉げて平伏する一同に立ち上る様に合圖をし、一同を連れて神に感謝するためソフィア寺院へ行く――

此の劇では簡單ではあるが、要所要所に適切なト書が愈々多く挿入されてゐて、作者が出演者の演技を指導するに當り、如何に細く神經を使つてゐるかを示してゐる。これは作者の演出法が漸く老熟して來た證據であるとともに、出演者の演技も進歩して來たことを思はせる。

かくてユリアン皇帝は四度門扉の前に立つが、その度にその演出は異つてゐることを知るのである。最初はゴットフリートの下僕 (Der knecht) に向つて威嚇的に開門を要求し、次回は宮廷の門衛 (Der thorwardt od. Portner) に向つて、怪疑し嘆願し、三回目は隣者に對し跪つき兩手を擧げて懺悔告白し乍ら度々門を叩き、四度目には門を叩くと、直ちに廷臣一同から叩頭して迎へられるのである。従つて此の劇では「覗き窓のある門」が前面舞臺左右何れかの側の登場口近くに通行を遮る様に飾り付けられてゐた事は最早や全く疑を容れない。然し乍ら誰がその様な飾り付けをしたかは、此の劇でも依然として明瞭を缺くが、登場人物以外に道具係のやうなものが登場することを極力避けたものとするれば、此の場合もかの下僕又は門番が門の用意をしたものと思はれる。と言ふのは最初の場合にゴットフリート侯が「下僕を連れて来る」とあるからである。

かうして此の門は更らに五十六年十二月八日作「Tragedia, mit II personen zu agiern. Das kien weib Areaphila mit den zweyen tyrannen, umnd hat 5 actus. 勇婦アレタフィラと二人の暴君」にも用ひられをり、續して十二月卅一日作「Ein Comedi, mit vierzehn personen zu agieren. Die trewen gesellen und brüder, zweyer könig sön, Olivier und Artus, hat sieben actus. (忠實なる伴侶にして兄弟二人の王子、オルヴィールとアルツス) 第七幕にも、更らに又五十八年九月十三日作悲劇「アブラハム、ロト、及びイサクの獻納」及び五十九年一月十四日作悲劇「ヘル神」等々にも用ひられてゐる。此の中「オルヴィールとアルツス」は五十六年度最終の作品であり、あとの二篇は製作年度が遅れてゐるから、何れも他の連關に於て問題となりうるのて後述することとする。

「勇婦アレタフィラと二人の暴君」は作者が所藏してゐた Plutar-chus の Von den guten Sitten. 21 Bücher. Deutsch durch Mich. Herr.

Straburg bei Hans Schott, 1535. から取材したもので Chena の暴君 Nicocrates とその弟 Leander に對し、市民 Phedimus の妻 Areaphila が娘の Beatrix とともに謀略を以て復讐する物語である。

暴君ニコクラテスは弟レアンダーと協力して密偵 Nison と Pison を放ち、不平分子を弾壓しようとしてゐる。そして富裕な市民フェディムスと妻アレタフィラがその恐怖政治に不満を抱いてゐるのを知つて、フェディムスを捕へて殺す。劇では此のフェディムスとアレタフィラが暴君の暴虐振りを話し合つてゐると、二人の密偵が戸口で立ち聽きしてをり、戸口を這入つて來て、フェディムスを襲ふことになつてゐる (Die zwen trabanten losen an der thür, kumen hinein, fallen hin an)。だから此の第一幕でも門が用ひられたことは確實である。それからアレタフィラは夫の復讐をするために、愛情を偽つてニコクラテスと結婚することとなる。彼女は隙を見て暴君を毒殺しようと謀つてゐるが、王の母親 (ilvia) に毒藥を發見され、恐ろしい拷問にかけられて責められる。然し頑強に口を閉じて白狀しない。勿論此の拷問の場はかの密偵達やアレタフィラ自身の口から物語られてゐるに過ない (間接敘法。以上第二幕)。毒殺に失敗したアレタフィラは娘のベアトリックスに獎めて、王弟レアンダーと結婚させ、レアンダーを使喚して暴君を殺させようとする。レアンダーは暗殺者 Daphnites を雇入れ、ダフニテスは王が長い死罪人名簿を見てゐる處を襲ひ、レアンダーとともに彼を殺す。すると口上役が王笏と王冠を持つて來て、レアンダーに捧げる。そして死者は從臣達が來て運び去る。 (Die trabanten kumen, tragen den todten ab.) 即ち幕切れに舞臺を取り片付けるものは、登場人物の中の誰かであつて、劇外の人ではなかつた證據である (以上第三幕)。

やがてレアンダーも又かの密偵である從臣達に喉かされて暴君となる。ベアトリックスはそれと知つて嘆き悲しみ、レアンダーを諫める



が、諾かれぬ(第四幕)。そこでアレタフィラはリビアの太守(Der Libier-fürst) Anabus を呼んで、彼を殺させようと言ふ。かくしてレアンダー軍とリビア軍との戦闘の場があつて、リビア軍は敗亡する。(Die Libier kommen, schlagen einander, bis die Liebier fliehen.) そこでレアンダーは敵方から講和を申込まれ、氣のすすまないのをアレタフィラに勧められて、都門へ出かける。そしてアナブスが廷臣をつれて匿れてゐる處へ、アレタフィラがなほも嫌がる彼の手を引いて連れてくる。(Archaphila firt den tyranen und zeucht in bey der handt, weil er sich ärsen wil.) かくてレアンダーは忽ち捕へられ、袋に詰められて海中に投ぜられることとなる。だからこども、明示してはなげけれども門扉が利用されたものと思はれる。即ちアナブスは奥舞臺Aから這入つて来て、門の陰に匿れる。レアンダーはCから前面舞臺へ上つて来て門の中へ這入る。と直ちに敵の伏勢によつて捕へられると言つた情景が想定される。それからアレタフィラに口上役から王冠と王笏が捧げられるが、彼女はそれを固辭して隠退すると言ふ。因に此の劇はその結末で暴君が倒され祖國の自由が恢復されることになつてゐるので、作者は之を自筆本で悲劇にして置いたものを、後の活版本では喜劇にしてゐる。

却説ザックスの舞臺と門扉との關係は大體以上の様に、次第に重要な役割を果すやうになつて來たのであるが、その他の點に於ても劇物語の必要とする處に應じて、尙色々な考案が施されたことは當然のことであつた。従つて先きに擧げた五十六年度の聖書劇は、それを原典と比較することによつて、作者の創意の存する處を最も適確に示すものであるから、なほ二三考察して見ることにしよう。

「ダビデの娘タマルとその兄弟アムノンとアブサロム」はサムエル後書第十三章の忠實な對話化で、アムノンが妹タマルを凌辱して捨てた

のを、同じく兄のアブサロムが復讐すると云ふ筋である。タマルに懸想して悶々の情に堪へかねてゐるアムノンの獨白や、ヨナダン(Jonadab)の入智慧で、タマルを呼び寄せるために彼が病氣だと伴ると、早速ダビデ王が醫者を連れて来て、醫者の診察が行はれる處等は凡て作者の創意によつてゐる。だが勿論聖書にある様に「タマルを辱しめてこれと偕に寝る」場面は實演されてゐない。タマルが料理の皿と匙とを持つて、病氣と偽つてゐるアムノンの室へ這入つて行くと、あとで二人の下僕が出て来て、アムノンのタマルに對する舉動が尋常ではない有様を物語る。そこへアブサロムが來るので、二人の下男は退場。アブサロムもアムノンの病狀を心配して見舞ひに來たのである。するとタマルが衣服を取り亂し、灰を被り、兩手を擧げ泣き乍ら出て来て、アブサロムに、アムノンの暴行を物語るのである。之に對して最後にアブサロムがアムノンを暗殺する場面は、聖書の簡單な記載に比して甚だ劇的に構成されてゐる。アブサロムは偽つてアムノンを和解の宴に招待する。彼は今宵こそ妹の仇を打つ時だ。どれ今暫く客人達のお相手をして來ようかと言つて去ると、下僕の「Eli」が振舞酒で大分よい機嫌になつて這入つてくる。それを他の下僕「Ojai」が探して來て、もうアムノンが席を立たうとしてゐるから、逃さない様にしろと言ふ。そこへアムノンが酒に酔拂つて千鳥足でくる。そのあとからアブサロムが蹤いて來て、こちらの下僕達にアムノンを指し示す。アムノンが上機嫌で下僕達に「此處處で何をしておるか! 室へ行つて飲んだり飲んだり。わしが御相伴をしてやらう」と話しかけるのを、「お相伴は入らない。殺してやる。」とばかり、下僕達は切りつけて、殺して了ふ。孰れにしても此の劇では脇役の下僕達(2 Knecht od. trabanten) が巧に利用されて、劇の筋を運んでゐる。

次の「ダリウス王と三人の侍臣」は外典エズラ第三の書第三章(Das dritt im dritten buch Esre)から取られたもので、一種の討論

劇であるから、劇的所作に甚だ乏しい。ギリウス王は座興として三人の侍臣 Ariel, Josua, Serubabel に、世界の中で何者が一番強力であるかと云ふ問題を解答させる。アリエルは酒、ヨシユアは國王、セルバベルは婦人を擧げて、それぞれ雄辯を振ふが、最後にセルバベルはその婦人よりもなほ一層強いものは「眞理」であると云ふ。王はセルバベルの眞理説を採用し、彼に厚く恩賞を與へるのみならず、エルサレムに神殿を建てることを許す——要するに此の劇は全篇單なる對話に終始してゐるから、隨所で上演しうるものである。

だが之に對して「ヨシユアとその戰」は從來に見られなかつた特殊な場面を持つてゐる丈に注目すべき作品である。劇の内容はヨシユア記第一章から第十一章迄を脚色してをり、ヨシユアが神の告げによつて、ヨルダン河を渡りカナーンの地を平定する物語である。その第一幕は聖書の第一章と第二章に相當し、天使がヨシユアに神の加護によつてカナーンの地が與へられることを告げると、ヨシユアは有司人及び間牒を呼んで、それぞれにカナーンの地に進撃することと敵狀を偵察することを命ずる場面と、その間牒二人が妓婦ラハブ (Raab) から助けられる場面とから成つてゐる。處で第一場て天使がヨシユアを、神の掟に従つてヨルダン河を渡るやうにと激勵して去ると、ヨシユアは大聲で叫ぶとあり、次いで「有司人ヘルと二人の間牒が這入つてくる」とある。(Hemer, der hauptman, geht ein und die zween kundschafter.) だから彼等は奥舞臺背後 A から出て来るわけである。と言ふのも此の場面はヨシユアが最後に「私も陣屋に這入らう」と言つて退場してゐることによつて、陣營の外であり、奥舞臺背後が陣營に見立てられてゐると考へられるからである。従つて天使の退場口は矢張り別に存在しなければならぬ。だからヘルマンはそれがマルタ教會の聖器室と内陣とを通ずる戸口であるとするのであり、ケスターは奥舞臺に「せり出し」の如き穴があつて、それが用ひられたとする

のである。だがヘルマンの説はマルタ教會にのみ通用する説であり、ケスターの説は後述する様に少しく行き過ぎであると思はれる。之を一般的に言つて、矢張り奥舞臺側面にも出入口が一つあつたものとすれば足りるであらう。それから第二場、間者達 (A から這入つて来ることになつてゐる) が娼婦ラハブに迎へられて遊興をしようとしてゐる處で、間者の一人が戸を烈しく叩く音を聴きつけ、ラハブに急いで見て来てくれと言つてゐるのであるが、ここで舞臺に例の門扉が利用されたかどうか疑はしい。恐らく此の場合は、演技が奥舞臺で行はれてゐるのであるから、第一登場口 A の背後で戸を叩く音をきかせたものであらう。と云ふのもラハブは直ぐに、「さあ大變! 王様の手先きのものだわ」と言ひ、間者達に屋根の上に逃がれる様に指圖すると、そのあとに「彼女は彼等と退場、下僕達と一緒に歸つて来る」(Sie geht mit in ab, kombt wider mit den knechten. 因にこの kombt wider は單に戻つて来ることを意味する丈で、必ずしも C から来ることを意味したい。) と卜書があるからである。従つてここでもラハブは間者達と B から去り、王の下僕達と A から戻つてくるわけで、奥舞臺にどうしても二つの登場口が存在しなければならぬ。更らにその先きで、そのエリコ (Jericho) の捕手達がラハブに瞞されて歸つて行つたあとで、ラハブは二人の間者を大聲を擧げて呼び出し、彼等を町の石垣の上から下ろして逃がしてやることになるのであるが、そこで「彼女は綱をつけた棒を持つてゐる」(Raab hat ein knebel an einem strick) とある。之に依つてケスターは、その棒の兩端に一人宛間者が乗り、棒の中央に綱がついてゐて、前面舞臺の上から觀客席へ吊り下ろされたものであると説明してゐる。(Vgl. Köster, Die Meistersingerhühne, S. 77.) 然し此の想定は遽に信じ難い。寧ろ此棒はこれから先舞臺外で起る筈のことを豫想させるために過ぎないもので、舞臺で眞演するたぬものではない。と云ふのもそれから直ぐ皆々退場 (Sie gehen alle

ab.)と簡単な卜書があるに過ぎないからである。

第二幕はイスラエル軍がヨシユアに率ゐられて、契約の櫃はこを昇ぐ祭司等とともにヨルダン河を渡り、エリコの町を攻めとる場面(ヨシユア記第三章第六章)である。先づさきの間者がヨシユアと有司人に敵状を報告する簡単な場面があり、次いで二人の祭司(Die zween priesten)が聖櫃を昇いで出て来る。彼等はヨシユアから聞いたと言つて、民の先頭に立ち、ヨルダン河に行けば、河の流れが止まることを話し合ふ。それから民衆が彼等のあとに従ひ、一度巡廻し、祭司等は立ち止る。(Das Volk zeucht nach, gehn ein mal herum, die priester stehn still.)即ちヨルダン河迄前進した形である。かくて祭司 Leviは民衆に向つて、足を濡らさずに、渡河しうることを教へ、十二人の代表者に、河の中から十二の石を拾ふことを命ずる。それから彼等は皆列をなして通り過ぎる。(Sie gehn alle in ordnung durch.)且肩の上に石を載せてゐる。(haben stein auf ihren achseln.)それからヨシユアは祭司等に河から上つてくることを命ずる。と祭司達が登つてくる。(Die priester steigen herauff.)そして祭司 Aaronが、見る間に潮がまた元通り滔々と流れ出したことを告げて、皆々退場する。次いでエリコ王(Der köning von Jericho)が二人の下僕と出て来て、イスラエル人が河を渡つて来たから、城門を固める様にと命じてゐる。彼等が去ると、天使が兜を被り、抜劍して現れる。ヨシユアが来る。天使は彼に履物を脱ぐことを命じ(ヨシユア記五の三十一―三十五)更らにヨベルの喇叭(das hailjar-horn=Halljahrshorn)を鳴らして、エリコの町を一日に一回、七日目には七回巡つて関の聲を擧げれば町の城壁が壊れ陥ると教へる。天使が去ると、ヨシユアは祭司有司人を呼び出す。そして今の天使の御告げを話し、彼等にその用意を命ずる。すると祭司達は喇叭と契約の櫃を持つて来て、先きに立つて行く。そのあとから武装したものが續く。彼等は一度巡廻し、そのあとで再び退場

する(Die priester bringen posannen und die gottes-laden, gehn vor, die geristen hernach, gehn ein mal herum, gehen darnach wider ab.)。即ち之はエリコの町の週圍をイスラエルの民が廻つたことを示すものである。次いでエリコ王が二人の下僕と出て来て、敵が町の周圍を今日で六日間毎日喇叭を吹いて廻つて歩く話をする。敵はこちらを恐れて、よう手出しが出来ないのだと下僕が嘯ふ。彼等が去ると、イスラエル人が列を立てて先きの様に出てくる(Die Israeliten kommen mit hier ordnung wie vor.)。ヨシユアは七回町を巡つて関の聲を擧げること、町の城壁が壊れたら、突入してすべつてのものを殺すこと、然し誑はれたるものに手をつけてはならないことを命ずる。かくて彼等は一回乃至三回巡廻し、喇叭を吹き関の聲を擧げる。と町が大音響をたてて倒れ、敵は打ち殺される(Sie gehn ein mal oder drey herum, blasen und machen ein feldgeschray. Die statt felt mit gerimpel. Die feind werdn erschlagen.)。ヨシユアは町を焼き拂ふことを命じ、エリコの町を建てるものは呪はれる云云(ヨシユア記六の二六―二七)と教へる。そして彼等は死者を運び去つた後で、又退場する(Sie tragen die toden ab, gehen darnach auch ab.)。扱て以上の様に見てくると、そこには從來見られなかつた様な大掛りな奇蹟的事件が取扱はれてゐる丈に、それらの場面が如何様にして實演されたものであるかを問はないではゐられない。勿論ヨルダン河の流れが止まると言ふやうな大自然の異變が、その通り舞臺の上で示されたとは考へられないから、此れは當然祭司ヨシユアの臺詞で度々物語られることにより、観客の想像力に訴へるに止められたものである。だがイスラエルの民が、河を渡り、石を拾つて反對の岸へ登つて来る所は、明かに上演されてゐるのである。果して然らば舞臺の何處がヨルダン河と見做され、何處からその河へ下り、何處から上つて来たものであるか?此の問題に對しては、ヘルマンの説とケスターの説

とは又激しく對立してゐる。ヘルマンはマルタ教會で上演されたものとして、前面舞臺から下り、Cから聖器室を経て内陣へ通ずる戸口(B)を上つて来たものとしてゐる。即ち祭司を先頭に一同列を立てて樂屋へ這入り、觀客の視界から消える。それは丁度一同が河底を通つてゐることを想像させる。その間ヨシユアは舞臺の上に止まつてゐる。それから彼は「ヨルダンを出て來れ」と呼ぶ。と先頭の二人祭司達は内陣の戸口から徐々に浮び上つてくる。それは丁度實際に河床から登つてくる様な印象を與へる——と言ふのである (Vgl. M. Herrmann, Forschungen, S. 34 ff.)。この解釋は簡にして要をえてゐるが、「ヨシユアは舞臺に止まつてゐる云云」以下は實狀に合はない。彼も一同とともに河を渡り、河から出てくる時は先頭に立ち、石を拾つて肩に擔いてゐる人達を連れてゐなければならぬ。そして一同が渡りきるまで河の中に止つてゐる祭司達を、最後に呼び出すのである。

之に對してケスターは奥舞臺の左右兩側に登場口(今それをE、Fとして置く)があり、その後方中央に「せり出し」の如き穴があつたものとして、次の如く説明してゐる。先づ二人の祭司がEから出てくる。次いで民衆が少くともヨシユアを入れて十三人出てくる。彼等は行列をたてて舞臺の上を一巡して、再びEの側へ戻る。そして祭司等は「迫出し」を前にして立ち止る。そこで祭司 Levi がヨルダンの流れは最早や流れなくなつた云云と言ふ。と言ふことは舞臺の床下で大工達が「せり出し」穴の蓋を取り除けることを意味する。さうすると舞臺の床に穴が出来るが、穴の深さは半米位にしてある。そこでヨシユアが命令を下すと、先づ二人の祭司が聖櫃を持つて穴の中へ下り、その凹みの中へ立つてゐる。その傍をイスラエル人達が、丁度淺瀬でも渡る様にEの側から下りて行き、各人屈んで穴の下から差し出される石を受け取り、Fの側へ上つてくる。最後にヨシユアと呼ばれて祭司達も上つてくる。そして祭司 Aaron は振り返つて、河がまた元の通

り流れ出したことを告げる。と言ふことはかの穴の蓋が再び下から填め込まれることを意味する、かくて一同はFの出入口から退場する。(Köster, Die Meistersingerhölle, S. 76—77)

此の演出法は寔に巧妙を極めてゐるが、反つて巧妙過ぎて不自然である。第一にここで奥舞臺丈が用ひられたとすることは規模が小さ過ぎるのみならず、「穴」をヨルダン河と見做すことは餘りに小細工に過ぎ、河の感じが出ない。第二に卜書の「彼等は皆列を立てて通り過ぎ、その肩に石を載せてゐる」と云ふ簡單な文句からは、「穴」の如きものを推定せしめる些かの手掛りもない。寧ろ此の卜書は、彼等が舞臺を通過して一端退場し、再び登場して來たときは、石を擔いてゐると取るべきである。従つて舞臺は一度空虚になり、そのあとは場面が全く變るものと考へるべきであらう。即ち「彼等は肩に石を載せてゐる」とある處からは、場面がヨルダン河の對岸に移り、全く新しい場面になるのである。さうすれば從來の慣用に從つて、此の場面全體は簡單に上演出来る。先づ奥舞臺Aから祭司二人が這入つて來る (Die zwei Priester gehen ein.)。彼等は陣屋からヨルダン河へ行くこと、二千年一ド隔てて民衆がついてくることを話し合ひ乍ら、前面舞臺へ出てくる。そしてそこでアロンは奥舞臺の方へ振り返つて、民衆があとから蹤いて來るのを認める (Schaw! da zeucht nach her jederman.)。それから彼等は前面舞臺から奥舞臺へかけて圓形を畫いて一巡し、前面舞臺の登場口迄來て立ち止る。その登場口の下は河である。先頭に立つてゐるレヴィは下を見下ろして、河の水が止つたことを傳へると、ヨシユアが河を渡ることを命ずる。かくて一同前面舞臺を下つて舞臺裏へ這入る——間——次に舞臺裏を廻り、その間に石を擔ぎ、反對の側から前面舞臺へ昇つてくる。祭司達は先に出て、舞臺下又は舞臺へ上る階段の中途に立ち止つてゐる。そこでヨシユアが彼等と呼ばし上げる。彼等が前面舞臺へ登つてくると、アロンが今登つて來た方を

振り返つて、河が再び流れ出したことを告げる。かくて一同は又前面舞臺を通つて行く。従つてここでも河の装置などが、ケスタアの云ふ様に、舞臺の上に設けられることはなかつたと思はれる。

更らにエリコ町の町を攻略する場面は如何にして行はれたか？ 茲では最初にエリコ王とその従者の場面があり、次ぎに天使とヨシユアの場面がある。その天使が例によつてBから去ると、ヨシユアと呼ばれて祭司や有司人が奥舞臺背後（そこが陣營）のAから出てくる。そして祭司達はヨシユアの命を受けて、一端又奥舞臺背後へ這入り、そこで喇叭と聖櫃を持つて出て来る。そして彼等を先頭に武装した者共が續き、喇叭を吹いて大行進が行はれる。即ち前面舞臺から奥舞臺へかけて一回巡廻し、又奥舞臺の背後へ退場する。と言ふのはその前でヨシユアは「今日は太陽が登ると直ちにエリコの町の廻りを巡り、列をなしてそのまま又陣屋へ這入れ」と言つてゐるからである。次いでエリコ王と従者が再び出て来て、イスラエル人を嘔つて去る。このエリコ王の場面は二回とも、Cから登場、前面舞臺で行はれる。と云ふのは二回とも「エリコ王来る。」とあるからである。それからイスラエル人が前の様に行列をたててくる。即ち今度は奥舞臺及びその背後がエリコの町であつて、彼等はCから前面舞臺へ登場してくるのである。そして舞臺の上を一回乃至三回巡廻する。その間喇叭が奏され、三回目時、関の聲を擧げる。すると「サムソン」劇の場合のやうに、舞臺裏で城壁の崩れる大きな物音をたてる。エリコ人達が奥舞臺へ飛び出して来て次々と殺される。かくてヨシユアは陣營へ引き上げることが命ずると、死者は運び去られ、皆々前面舞臺から退場する。

處でケスタアは茲でも巧妙な演出を想定してゐる。それはイスラエル軍がエリコの町を巡る處は、舞臺の上で行はれたのではなく、前面舞臺と観客席との間を一方から他方へ巡り、そのまま舞臺裏へ抜けて、裏を廻つて又出てくる。かくしてゐる中に舞臺の上ではエリコ王の場

面が行はれる。即ち舞臺の上はエリコの町で、イスラエル軍は文字通り町の周圍を巡つてゐると云ふこととなる。七日目の時も同様で、ヨシユアが先頭に立つて行列は前面舞臺の下を廻り、樂屋の中へ消えて、裏を廻つて又出てくる。その間喇叭の音と関の聲がする。三度廻つた處で、舞臺裏で大音響がすると、イスラエル人は左右の階段を昇つて前面舞臺へかけ上り、そこでエリコ軍と大格闘が行はれる——と言ふわけである。

然し乍ら前面舞臺の下、観客席の一部迄用ひて演技が行はれたかどうかは甚だ疑問である。元來ケスタアの此の想定は、「すべてハンス・ザックスの芝居は演技の始まる前、役者一同扮装した姿で、先拂ひとして杖を持った口上役を先頭に、観客席の間を通つて、嚴かに樂屋入りをしたものである」(Vgl. Köster, S. 48.)と言ふ推定から連想されたものである。彼の説によると此の舞臺入りの行列は、演技の終つた後、口上役の結辭の前に行はれた同様な顔見世行列（此の行列が行はれたことは殆ど大部分の脚本に皆々整列して退場とあるから確實である）と照應するものであり、観客席が舞臺の一部（丁度日本の劇場の花道のやうに）と見做されてゐたことを證するものであるから、今の場合のやうに、前面舞臺と観客席との間が演技に用ひられても不思議はないと云ふのである。

然し乍ら演技の開始前に此の様な舞臺入りの行列が行はれたかどうかが第一問題なのである。ケスタアはそれが行はれたと考へられる理由として、口上役の序辭中、冒頭観客に對する挨拶の文句を最も有力な根據として擧げてゐる。例へば「貞節な皇后」(1551, 8, 31)では *Aus gunst sey wir zu euch kommen.* (御眞眞により一同かく參上致しました)とか「ハンニム王」(Tragedia mit 7 personen, der jung stoltz köning Rehabeam mit Jerobeam. 1551, 11, 12. 列王紀略上十二の一以下)には *Beruffen sey wir zu euch kummen.* (お呼びにあづかりまして一同參

上致しました」とか言ふ文句があり、ケスターは千五百五十一年以後の作品中四十一篇の例を擧げて同様な文句が殆ど常習的に繰り返されてゐることを示し (Köster, S. 42 f.)、普通ならば観客の方から芝居を見るに來るのであるから、「かく賑々しく御來場下さいまして有り難く御禮申上げます」とても言ふべき處を、俳優の方から観客のある處へ呼ばれて來たと言つてゐるのは、観客の集まつてゐる間を、舞臺入りの行列が行はれたからであると説明してゐる。尙 Adam Puschmann の「ヨゼフ劇」(宗教演第十章ヨゼフ劇参照)の序辭でも「Wir Personen in dem Spiel fein/Kommen zu euch herein jetzt auch/Nach alter gewonheit vnd brauch/Ein Comedia zu Agiren. (私共劇中の人物は此の度も亦昔年らの風習によりまして、芝居を致しますためにかく參上致しました。）」とあると言ふ。

然し乍ら之に對してヘルマンは別な解釋を下し、舞臺入り行列が行はれたことを全く否定してゐる。彼の説によると、ここで役者達が観客の處へ「參上致しました」と言つてゐるのは、彼等がニールンベルク市中の何處かから観客の集まつてゐる演技場(マルタ教會)へ乗り込んで來た事實を指してゐるのではなくして、芝居が始まる時は演技場全體——舞臺も観客席もひつくるめて——が劇中の所用の場所に變じてゐるものと想像されてをり、その場所へこれから劇中の人物が(樂屋から)登場して來ることを意味するのと言ふ。その證據には序辭の中には見物人の集まつてゐる場所と舞臺とを一緒にして、廣間(Sal)と呼んでゐる場合が相當數あり、その「廣間」がマルタ教會の會衆席そのものを意味するのはなくして、劇中に用ひられる場面を指してゐるのは明かであるからである。例へば「美しイマゲローナ」(1555, 11, 19) は Glück unnd heyl sey den ehrenvesten, / Erbern unnd wolgeachten gesten, / Versamlet hie in diesem sal! / Gebetten komb wir her zu-mal, / Ein comedi zu receidrn, etc. (この廣間にお

集りの名譽名聲名望ある御客様方の御清榮を祈り上げ奉ります。御召しにあづかりまして私共一同は特に喜劇を演じますために參上致します。)

とあつて、その廣間と云ふのは、直ぐ次に續く劇中のプロヴァンス伯 Johann Cerise の廣間を指してゐるのである。尙此の間の消息を明瞭に示してゐる文句は、千五百五十七年八月十日作 Comedia mit 15 personen. Der Daniel, und hat siben actus. (タニエル) の序辭でも「ソコには Genadt, friedt und barmhertzigkeit / Wunsch wir euch von Got alle zeit, / Alh, so versamelt sindt zu mal / In diesem küniglichen sal. Gebeten sindt wir zu euch kommen, / Ein histori uns fürgenommen, / Comedi-weiß euch fürzutragen. (御恩寵と平安と御慈悲が神様より永へに下ります様に、かく此の王城の廣間にお集りの皆々様方のために御祈り申し上げます。召されて私共は、昔物語を芝居に仕組み、御高覽に供しよう、かく參上致しました。)

とあり、次いで第一場はネブカドネザルの王城の廣間で演ぜられる。だから演技場全體が既に劇の世界と見做されてゐるのであつて、俳優は外部から観客席を通つて舞臺へ來るのではなく、その劇の世界から呼ばれて、今や演技をするために、既に劇の世界の中にある観客の處へ出てくるのである。(Vgl. M. Herrmann, Die Bühne des H.S. S. 79—81.) 此の解釋は真相に近いものと思はれるが、ただ之では「召されて」とか「招ばれて」又は「呼ばれて」(Gebeten, geladen, od. beruffen) とかある意味が明瞭ではない。此の言葉は明かに観客側からの要求があつて、演技をするやうになつたことを表はしてゐる。即ち「トロヤ城の破壊」(1554, 4, 28) には Erbar unnd ehrenveste herren, / Zu euch komb wir auff ewr begeren, / Ein tragedi bey euch zu halten, (名譽あり名聞ある皆々様、ここに參上致しましたは、皆々様の御懇望により、悲劇を皆々様の處で演じますため)とあり「ブルグメントの二人の騎士」(Die zwen ritter von Purgund

1552, 1, 16) には 'Aub. sonder gunst wir zu euch kommen. (特別の御最前によりかく參上致しました)とあり、「アビガイル」(David mit Abigail, 1553, 1, 4) には Euch zugefallen/Sind her-gebeten kommen wir. (皆様に御氣に召します様に御依頼によりかく參上致しました)とある。だが事實は既に當時職人組合の素人劇團が入場料を取つて芝居を興業してゐたのであるから、観客から依頼されて芝居をしたのではない。況してやヘルマンの言ふ様に、演技場に集まつてゐる客人から「懇望」されるわけではない。果して然りとすれば、此等の文句は昔からの傳統的なものだとしなければならぬ。元來民間演劇は謝肉祭劇に於て見た様に、宮廷や門閥富豪又は料亭等の饗宴の餘興として、旅藝人や町内の有志劇團が招聘されて演ぜられたものであるから、その形式がここでもそのまま傳へられてゐるのである。

扱て本題に戻つて、孰れにしても、ケスターの言ふ舞臺入り行列が行はれた形跡はないし、終幕後の顔見世行列に於ても、観客席が使用された證跡はない。だから此の「ヨシユア劇」中、イスラエル軍がヨルダン河へ進軍して行く處でも、エリコの町を數回巡る處でも、舞臺の上文で行はれたものと思はれる。現にケスター自身前者の場合を説明して「彼等(イスラエル軍)は全く原始的なる方法により、舞臺の上を一巡する。それはハンス・ザックスが特に聖書劇で意識して用ひてゐるもので、昔から傳へられてゐる技法である」(Köster, a. o. a. O. S. 73)と言つてゐる様に、後者の場合でも、舞臺の上で行はれたものであるか、或は前面舞臺をCからDへ(又はDからCへ)行進して樂屋を廻つて出てくるかしたもので、観客席を利用したものではない。と言ふのも舞臺下を通つたとすれば、観客の中には見えないものも出来るからである。

その明かな證據は次の第三幕に於て見られる。此の幕はイスラエル軍がアイ(Ay)を亡ぼす経緯(ヨシユア記第七章第八章)を取扱つてゐる

るが、アカン(Achon)がエリコの誑はれた物、イントと銀二百と金の棒を隠匿したため、ヨシユア軍が神に見放され、アイの王と戦つて敗れる物語と、ヨシユアが贖罪し、アカンを石で打ち殺した後、今度アイ軍と戦つて、敵を敗る物語から成り立つてゐる。しかも此の二回目の戦が行はれる所に「有司人へモル身を匿す。ヨシユア退場。敵が来る。彼等は後へ退ぞき、舞臺の上を廻る。ヨシユア矛を差し上げる。すると伏兵が来て、敵を打ち倒し、彼等を運び去る。」(Hemor, der hauptman, versteckt sich. Josua geht ab, die feindt kommen, sie weichen zu rück auf der pin herum. Josua reckt die lanzen auff, da kombt der hinterhalt, schlagen die feindt nider unnd tragen sie ab)とかなり詳細な卜書があるのである。その意味は明らかである。ヘモルは伏兵となるため奥舞臺側面の登場口Bへ姿を匿くす。ヨシユアは前面舞臺Cから退場し、敵を誘き出して来る。かくてヨシユア軍は敵に追はれた形で舞臺の上へ登り、舞臺の上を廻つて逃げ走る。よい程にしてヨシユアが槍を擧げると、それを合圖に、さきのヘモルの伏兵が奥舞臺の横から不意に出て来て、ヨシユア軍とヘモル軍とて敵を挾撃する形になり、かくて敵を打ち倒す。そして打ち倒された敵は運び去られる。即ちここでは明かに舞臺の上を巡廻することが表示されてゐるのである。

第四幕はギベオン(Gibeon)の民が詭計を用ひてヨシユアと契約を結ぶ事件(ヨシユア記第九章)、第五幕はエルサレム王アドニゼデク(Adonizedek)他四人の王がギベオンを包圍するのをヨシユアが打ち破る事件(第十章)第六幕は五人の王が所刑され、ヨシユアは更らに近隣を征伐しようとする命を下す處(二十二―四十二)第七幕はヘゾルの王ヤビン(König Jabin zu Hazor)が同志を糾合すると、ヨシユアは天使の激勵を受けて、又もや兩軍相戦ひ、遂に三十一の王國を占領する迄(第十一章)を脚色してゐる。相變らず戦闘の場面が多く、



それが工匠歌人達の特技であつたらしい。

それかあらぬか「マカベエル」七幕も亦一種の戦争劇と言つてもよいであらう。此の劇は外典「マカベエルの書」(Die Bücher der Makkabäer)から取材されたもので、シリアの暴君 Antiochus 父子がエルサレムを占領し、ユダヤの殿堂を破壊し、掠奪暴行の限りを盡すのに對して、祭司 Mathatia の子 Judas Maccabäus が果敢に闘争して彼等を亡ぼすことを骨子としてゐる。

第一幕第二幕第三幕はアンティオクス父の暴狀振りを描いてゐるが、特にその第二幕で、舞臺に異教の偶像神の祭壇が装置されてゐることは注目に値する。即ちここで祭司マタティアは聖都エルサレムが異教徒に汚されることを痛憤してゐると、敵將 Melius がアンティオクスの布告文を持つて來て、異教の祭神に供物を捧げることを命ずる。マタティアは勿論拒絶する。すると 'Ihobiel なる背教者が出て來て、祭壇に供物を捧げるので、彼は敵將とトビエルを刺し殺し、祭壇を覆へすのである (Mathatia ersticht den haubtmann und 'Ihobielen und stüßt die altur umb)。そして彼の子供達マカベウスと Jonatus に、山の中へ逃れよと命ずる。そこへ Onias なるラビが出て來て、アンティオクスのために二人の婦人がその子供等を彼女等の頸に縛りつけられて町を引廻された上、城壁の上から壕の中へ投げ込まれて殺されたと報告する。此の殘虐な話を聞いたマタティアは息子達に、アンティオクス討伐の決意を告げる。だから此の場面で祭壇が必要であることは明瞭であるが、誰がその祭壇を舞臺に飾り付けたか、又誰が敵將とトビエルの死體及び破壊された祭壇を取りかたづけたかは、何等記載されてゐない。恐らく取り片付けの方は作者が書き忘れたので、多くの他の作品で指定されてゐる様に、そこに居合す登場人物によつて、運び去られたものであらうが、祭壇の装置をしたものは別になければならない。だが之によつて工匠歌人舞臺に於てかの門扉や樹木や藪の

例に見る如く、必要な道具立てが次第に舞臺の上に飾りつけられるやうになつて來たことを知ることが出来る。従つてそれ等のことを處理する道具役と言つたものが、後には幕間に舞臺で飾り付けをすることもあつたと言ふことを、全然否定し去ることは出来ない。

第三幕に於ても同様な問題が起る。ここではアンティオクスの暴狀が實際に示される。彼は刑吏 (Der hencker) に命じて、布告に背き、改宗しない一人の婦人とその七人の息子を次ぎ次ぎに呼び出して、彼等の舌を切り取り、或は笞打つて、更らに焼き殺させるために連れ去らせる。處で刑吏が暴君に答へる言葉によれば「一人の女と七人の息子達が縛られて、下に連れて來てある」(Großnechtiger König, wir haben unden / Ein weyb mit sieben sönen repunden, etc.) のだから、これは前面舞臺の階段の下から舞臺の上へ次々と連れて來られたものと考へられる。然し彼等を王の命令するやうに、舌を切つた後に、「赫々とおこつた火の上にかけて赤く熱した焙烙鍋で焼き殺す」ことは誰が何處でしたか? ケスターはここでもかの「せり出し穴」が奥舞臺にあつて、その中へ息子達が次ぎ次ぎに連れ去られ、その穴から火焰と煙を吹き出させて見せたのであると説明してゐる。と言ふのは王の言葉に「下へ連れて行け!」(Und furet in darnach hienab!) とあるからで、この「下へ」が前面舞臺の階段を下へ下りて行くことだとすれば、一方の階段の下は、他の子供達が縛られてゐる處であるから使用出来ないし、他方の階段の下であるとしても、火焙りの刑等をそこで行ふことは不可能であるからである。だが之はケスターの考へ過ぎてあつて、それらの臺詞はその通り舞臺で實演されるためのもてはなく、寧ろ實演されないが故に臺詞で補つたものであることは、既に度々見て來た處である。その證據には「舌を切る」(Man schneidet ihn, die zungen ab) 所文は卜書に明示してあり、實演されてゐるのである。だから此の場合、息子達は舌を切られたり、笞で打たれたり

する所作が行はれた後、次ぎ次ぎと奥舞臺の背後へ引かれて行つたものに過ぎず、「赫々と熾つた火」や「赤く熱した焙烙鍋」が舞臺で使用されたのではあるまい。

かくて第四幕はユダス・マカベウスとアンティオクス軍との戦争の場、第五幕はアンティオクス父が難病に罹つて死ぬ場、第六幕はアンティオクス子とマカベウスとの戦争の場、第七幕もなほ戦闘の場面が續き、マカベウスは神から授かつた黄金の太刀で敵を殲滅する。

以上の戦争劇は何れも原典の物語を忠實に要約して、當時の舞臺で上演しうる様に、寧ろ要領よく壓縮したものであるから、相變らず場所や時間の關係を無視してゐることは言ふ迄もない。だがそれだからと言つて、作者の劇的構想力が必ずしも貧困であつたとは言はれない。そしてその最もよい例は五十六年度に於ける最後の聖書劇「寡婦と油壺」(1556, 12, 18)である。此の劇の物語は聖書列王紀略下第四章一

七に極く簡潔に記載されてゐる豫言者エリシヤ(Elisha)の奇蹟物語の一つであるが、ザックス劇にあつてはそれが獨逸庶民生活の一端を寫した人情喜劇に迄發展させられてゐる。その第一幕は寡婦(Die Wittfrau)が二人の息子 Satoch と Mesach とともに、父親の死後正に貧窮のどん底に陥つてゐることを嘆いてゐる處へ、債主が來て、情け容赦もなく貸金を催束する様を描いてゐる。遂に何も取り立てるものがないと判ると、債主(Der schuldherr)は二人の息子を奴僕にして連れて行くと言つて去る。あとで母子は談合の結果、とにかく法律家に相談して見ようと云ふことになる。第二幕はその法律家(Der Jurist)も、始めは愛想よく迎へるが、母子に金がないと聴くと、劍もほろろに追ひ返す場面、母子は途方に暮れて、今は止むなくエリシヤに縋らうとする。かくて第三幕になつて始めて原典にある場面となる。エリシヤはイスラエルの民が物價高騰で苦しんでゐるのは、彼等の墮落に對する神罰であるが、寡婦孤兒は助けてやらうと言つてゐる。そこへ

かの寡婦が來て跪づく。彼女は縷々として今迄の窮狀を訴へ、只管に神の加護を乞ふ。そこでエリシヤは彼女の家に古るい油壺が只一つ残つてゐると聽いて「往きて隣りの人人より器を借りよ云云」(列王紀略下四の三四)と命ずる。寡婦は二人の息子をして器を借りにやる。二人の息子は一端退場して壺を持つてくる。長男は「此麼澤山の空の器が僅の油で、どうして一杯にならうか」と疑ふ。然し母親は神様の御言葉を疑つてはならないと息子を戒しめ、凡ての器に次から次へと油を注ぐ。そして母子が喜んでゐる處へ、ヨシヤが再び現れ、その油を賣つて借金を返し、残つた油で生計を立てよと教へて去る。母親は神の恩恵に感謝し、彼等は油を運び去る。(Sie tragen das öl ab) ここには、之を原典と比較して見る時、作者の豊かな詩才を窺ふに足るに十分のものがあつた。

聖書に取材したものに次いで、ハンス・ザックスが好んで脚色してゐるものは、古代及び中世の傳説史實であるが、五十六年度に於ける此の方面の收獲も、前年度に劣らぬものがあり、原作が長大にして複雑な物語である丈に、作者の脚色法は當時の舞臺狀況を知る上に多くの示唆を與へてゐる。

先づ同年二月十五日 Tragedia mit 25 personen zu agiern, die Melusina, und hat 7 actus. (メルシーナ。1556, 2, 15) が詩作されてゐるが、ゲーテの「新メルシーナ」で周知知られてゐる此の有名な傳説は、既に丁度百年前千四百五十六年 Thüring Ringolingen によつて佛語から獨譯されてをり、ハンス・ザックスの後にも Jacob Ayrer (1615) が脚色してゐる。ハンス・ザックスの劇は Graf Emerich von Poitiers が Raymond とともに狩て途に迷ひ、野猪に襲はれて不慮の死を遂げる處から始まる。ここで二人は野猪の近づいてくる物音を聞いて一端退場すると直ぐ、ライムントが両手を高く擧げて出て來て、

野猪を刺さうとして、誤つてエメリッヒ伯を殺したことを告げ、殺人の嫌疑が自分に懸ると言つて嘆く。するとメルジーナが路傍に立つて (Melusina sted da an weg) 「婦人の前を通り乍ら、挨拶もせずに行くとは、貴人に例のない禮儀を知らない人ですこと」と話しかける。だから此の場合メルジーナが「せり出し」から現れたとすれば甚だ好都合であるが、その様な施設がなかつたとすれば、矢張り輿舞臺側面の出入口 (B) が必要である。それから彼女はライムントに結婚を申し込む。但し土曜日は絶対に彼女を一人にしておくと云ふ條件付きである。かくてライムントはメルジーナの助言によつて殺人の嫌疑を免れるばかりか、エメリッヒ伯の息 Betram から、宏大な封土を授けられることになるのであるが、それらの事は凡てライムントとメルジーナとの對話で示されてゐる丈である。即ちライムントがベルトラム伯に「一匹の鹿の皮で圍みうる土地」を請願することは第一幕で、その鹿の皮を細い紐として廣い土地を圍むことは第二幕第一場で、彼女が彼に助言してゐるけれども、實演されてはゐないのである。同様にライムントとメルジーナの盛大な結婚式のは、口上役が一人登場して報告してゐる丈である。それからライムントの壯麗な城が新築されることもメルジーナがライムントに助言することによつて示されてゐる丈で、それに續いて直ちに二人の間の子供 Urens と Giot が武装して登場、彼等はキプロス島 (Zippem) の王が土耳其軍に攻略されてゐるのを援助に行くと言ふ。次いでキプロス島に於ける戦闘の場面 (第三幕)。更らにメルジーナとライムントの處へ使者が来て、他の二人の子供達 Anthonius と Keychart がプラーグで武勳を立てたと報告する場面、ライムントが弟の Graf von Forst に嫉みかされて、メルジーナの祕密を窺ひ知る場面 (ここでもライムントは妻の様子を見て來ると言つて一端退場する。あとで弟フォルスト伯が獨りで、兄はメルジーナに瞞されてゐるのだと言つてゐる。そこへ再び歸つて來たライムントは、絶望の状

態宜敷、メルジーナが半身蛇體になつて水浴してゐたと告げる丈である。以上第四幕) それからライムントの處へ息子の Goffroy が、グラナダで巨人 Gedeon を倒したと言ふ報告が來る場面、そのゴッフロイの處へ弟 Freymund が僧院に這入つて修道僧になつたと云ふ報告が來て、彼が激怒する場面、その結果、ライムントの處へ使者が來て、ゴッフロイが弟の僧院を焼き打ちにしたと報告すると、ライムントは悲嘆の餘りメルジーナに彼女の祕密を曝露する場面、(以上第五幕) 等が續く。何れも使者 (Der Postpo) の報告で物語を運んでゐる丈であるから、一種の敘事的對話である。只此の中最後の場面で、祕密を曝露されたメルジーナが一端退場し、羽を付け、下半身尾を付けて出て來て (Melusina geht ab, rüst sich inn die Flügel und den schwantz.) ライムントに訣別し、その尾へ走り去る (Sie fert ab mit irem schwantz.) ことになつてゐるのが、變つた趣向である。然し彼女の空中飛行が實演されたかどうかは疑しい。と言ふのは羽を付けてゐるのにも拘はらず、單に「尾で走り去る」とあり、又その次の第六幕の始めて、例の様に二人の下男が出て來て、奥方が城の上空を三度廻つて飛んで行かれたと噂し合つてゐるから、之は舞臺外で起つたことを知らせる作者の常套的手段の一つである。

かくて第六幕は再びゴッフロイが出て來て、巨人 Grimold を退治し、巨人に捕へられてゐる人達を解放する場面を仕組んでをり、第七幕は彼が父親ライムントの處へ歸つて、父の後を繼ぎ、父は巡禮に出ると云ふ處で終つてゐる。要するに此の劇は使者口上役下男等による間接敘法を極度に應用して、物語の筋を運んでをり、當時の舞臺で演出し難い様な點を避けてゐるから、それぞれの舞臺面も簡單なものであつたと思はれる。

同様に次の作 Comedia, mit 18 personen zu spielen, von Hugo Schapler, den streitbarn helden in Franckreich, und hat 7 actus.

(佛國の豪傑、フーゴー・シャプラー。1556, 6, 11) も、佛國カペティンガ  
ー王朝 (Dynastie der Kapetinger, 987-1328) の始祖 Hugo Capet の  
波瀾に富んだ武勇傳を、當時の舞臺に向く様に要領よく劇化したもの  
である。此の物語の原本は佛國の敘事詩 Hugues Capet から Elisa-  
beth von Lothringen によつて獨譯され、更にシヤトラスブルク  
つ千五百八年 Conrad Heidorffer による校訂大衆版、Ein lieplichs  
Lesen und ein wahrhaftige Hystorij wie einer (der da hieß Hug  
schapler, und was netzers geschlecht) ein gewaltiger kinig zu  
Franckrich ward. が出て、廣く民間に流布してをったものである。フ  
ーゴー・シャプラーは母方の祖父が屠殺業者である處から、卑賤にし  
て身を起し、一代にして佛王になつたので有名であるが、此の劇は彼  
が父を亡くしてから、父の知人富豪のシモン (Simon der reich) を頼  
つて巴里に來た處から、彼が仇敵 Graf Fridrich von Schampantia  
を倒してカペティンガー王朝の基礎を築く處迄を取扱つてゐる。相變  
らず戰鬪の場面の多い芝居であるが、鬪争になる迄の經路は例によつ  
て事後的報告の形で知らされてゐる。例へばフーゴー・シャプラーは  
シモンから旅金を與へられ Hegenaw の騎士 (Der ritter) の處へ行く  
と言つて退場する。そして次の場面ではもう彼が一人出てきて、そ  
の騎士の娘と相愛の仲になり、娘の父親の怒りを買つてゐるけれども、  
娘に呼ばれたから是から密に逢ひに行くのだと言つてゐる。そこへ  
ーゲナウの騎士が二人の下男を連れて來て、彼に打つてかかる。彼は  
騎士を切り倒す。下男は逃げる。と彼は最早や此の國にもゐられない  
から Fribland の king Hugwan の處へ行くと言つて、一人退場。  
そして下男が來て騎士を運び去る (Die knecht kummen, tragen den  
ritter ab.) 次の場でも同様、フーグブン王が口上役と二人の從臣を連  
れて出て來て、フーゴーなるものを備ひ入れたが、姪を誘惑したから  
罰するのだと言ひ、從臣をやつてフーゴーを縛つて連れて來させる。

そして王が劍を抜いて彼に投げつけると、彼は從臣の手から脱して逃  
げる (以上第一幕)。かう言つた調子で殆ど各幕毎に活劇が演ぜられて  
ゐるが、その間を繋ぐものは活劇に至る迄の經路を知らせる獨白か對  
話である。言はば活劇から活劇へと物語が展開して行くの、か此の劇の  
新しい趣向のやうに見えるのである。

フーゴーは漸くに逃れて來ると、女の悲鳴を聞きつける。盜賊が娘  
を連れてくる。そこで又格鬪となり、彼は二人の賊を追い拂ふ。助け  
られた娘の父親 Der wild graf が來て、彼に厚く感謝する。それから  
彼は巴里のシモンの處へ歸つて來て、Hegenaw, Brabant, Fribland  
等の旅の話をしてゐると、宮廷から口上役が迎へに來る。次いで佛王  
妃 Blanchehor が Meria 姫、宮内卿 Conestabel シモン、フーゴー  
等を隨へて登場。Graf Savari が國王を毒殺した上、メリア姫に求婚  
して來たと心痛してゐる處へ、當のサヴァリ伯が弟 Fridrich と hertzog  
von Burgund とともに乗り込んで來る。かくて激しい論戰となり、遂  
にフーゴーはサヴァリ伯を切り倒す。そこで又活劇となり、フリドリ  
ッヒとブルグント侯は逃げて行く (以上第二幕)。

王妃は宮内卿、フーゴー等とサヴァリ方の復讐戰に對し、軍議を凝  
らしてゐる。そしてハンガリー王やヴェニス侯に援助を求めることと  
し、王妃と姫が神の加護を祈るために退場すると、口上役が急を告げ  
てくる。でこちらから打つて出ようとしてゐると、早くも敵が攻めて  
來て、又もや戰鬪が行はれる。そしてフーゴーは Graf von Estempe  
を捕虜にする。次いでフーゴーはフリースラント王フーグブンの陣屋  
を偵察に來て、彼と決鬪、彼は敵を倒すが、彼も亦敵の從者達に捕へ  
られる。因にこどもフーゴーが縛られて引かれて行つた後、再び從  
者達が來て、フーグブンの死體を運び去る様に指定されてゐる。(Sie  
fuhren ihn hienaub, kummen wider, tragen den thotten kinig ab.)  
處が次の場面では、フリドリッヒ伯がブルクント侯に、折角捕へたフ

ーゴも逃げて了つたと報告してゐる。その逃げた方法は更に次の場面で、宮内卿にフリーゴ自身物が物語る。彼は先きに娘を救つてやつた野武士の伯爵に助けられたのである。そこへ王妃が来て、フリーゴに感状と恩賞、楯と兜を授ける（以上第三幕）。この様にしてフリーゴの運命が巧に物語られて行くのであるが、結局彼が舞臺で活躍するのは、武勇を奮ふ場合であつて、その前後は物語の筋を理解せしめる程度の對話に止まつてゐるのである。だから第四幕ではフリーゴが敵陣に乗り込んで、敵を敗走させる。すると口上役が三つの黄金の百合の紋章付き楯を持つて来て、それを王妃から下されたと言つて彼に授ける。そこへ又敵が盛り返して来て激戦になる。遂に敵將フリドリッヒ伯は捕へられる。しかも次の場面で彼は王妃に嘆願して、そのフリドリッヒ伯を放してやるとともに、王女メリア姫と結婚することとなる。だが五幕目では、彼が新しい領地を檢分するために出掛けると、その留守に再びフリドリッヒ伯がブルグント侯とともに侵入して来て、王妃を責め、王女を捕へて連れ去る。他方（第六幕）フリーゴは先きに和平を誓つたブルグント侯の居城に泊り、翌朝侯に送られて森に指しかかると、不意に侯と侯の配下に襲はれ、命からがら逃れる。そして隠者に行き逢ひ、衣服を交換して貰ふこととなる。次いで隠者の風をしたフリーゴは宮内卿コンネスターベルに遭遇し、彼は變装したまま巴里に歸り、宮内卿からの報告を待つこととする。宮内卿は偽つて敵將フリドリッヒ伯に仕宿し、敵狀を通報しようと言ふのである。處で敵將フリドリッヒ伯はメリア姫を捕へて来たが、今や彼女と結婚して佛王にならうと企んでゐる。だが姫が承諾しないので、宮内卿をして彼女を説得させようとする。かくて伯が去ると、姫が泣き乍ら出てくる。宮内卿は彼女を慰めて、フリーゴが生きてゐることを告げ、彼女を救ふための計略を授ける。話變つて（以下第七幕）フリーゴ（依然として隠者の風をしてゐる）宮内卿からの手紙によつて、シモンと復讐の準備をする。かくて愈々フリドリッヒ伯とメリア姫との結婚の當日、伯が宮内卿に式の準備萬端整つたよしを告げて去ると、姫が出て来る。彼女は夫フリーゴが救ひに来てくれることを神に祈願する。そこへ伯とブルグント侯が来て、宮内卿に式典を擧げるための僧正を呼ばせる。だが呼ばれて来た僧正は、フリーゴ及びシモンである。忽ち舞臺は修羅の巻と化し、フリドリッヒ伯もブルグント侯も縛り上げられて、斬首の刑に處せられることとなる。あとでフリーゴとメリア姫との再會の喜び——かくてフリーゴ・シャプラー武勇傳は目出度し目出度して終る。

以上見た通り此の劇でも作者が當時の舞臺で上演可能な範圍に於て各場面を構成してゐることは、戦闘の場面とフリーゴが恩賞を授けられる場面の他は殆んど劇的所作を必要としない單なる對話か獨白かから成り立つてゐることによつても知られる。又戦闘の場が死者が出来る、例へば第一幕に於けるヘーゲナウの騎士、第三幕のフリースラント王フーグヴン等、必ず劇中の人物がそれを運び去る様に卜書で指定してゐるのは、作者が絶えず上演の場合を考慮して、詩作してゐる證據である。

扱て既述のメルジーナ物語にしる、フリーゴ・シャプラーにしる、中世傳説中の武勇譚を主としてゐるが、之に對して同じく中世傳説の重要な部分を占める戀愛譚を主題にしてゐるものに次の四篇がある。

Comedia, mit 5 personen zu agiern. Die schön Marina mit dem doctor Dagmano unnd hat 3 actus. (美しきマリナと法博士グヴェヌス。1556, 9, 1)

Tragedia, mit 16 personen zu agiern. Die vier unglückhaften Liebhabenden personen, unnd hat 7 actus. (四人の不幸なる戀人。1556, 11, 12)

Tragedia, mit 16 personen zu agiren. Von zwey liebhabenden, Hagwärtus mit Signe, des königs tochter auß Denmark, und hat 5 actus. (二人の戀人、ハーグワルツスとデンマークの王女シグネ。1556, 11, 30)

Ein Comedi, mit vierzehnen personen zu agieren. Die trewen gesellen und brüder, zweyer könig sön, Olwier und Artus, hat sieben actus. (親友にして義兄弟なる二人の王子、オルヴィールとアルツス。1556, 12, 31)

「美」を「マリーナ」は既に Albrecht von Eyb が Das Ehebüchlein (結婚の書。1472。宗改演、第四章参照) の中で紹介してゐるもの、ゲーテの Der Kluge Prokurator (Vgl. Goethe, Unterhaltungen deutscher Ausgewanderten.) の原型である。ゲヌアの商人 Aranus は商用で三年間アレキサンドリアに旅行するに當り、妻の Marina に留守中孤閨の淋しさに耐へ兼ねたら、愛人を求めてもよいが、必ず思慮分別に富む若者を選び、お互に秘密を守つて世間の醜聞にならない様に注意して欲しいと言ひ置く。マリーナは始めの中道心堅固に暮らしてゐるが、やがて性の衝動に耐へられなくなり、近所の法律顧問 Dagmannus を呼んで、求愛する。ドクトールは非常に嬉れし相な風で、それを受け入れるけれども、それには条件があると言ふ。彼は大學にゐる頃、町に騷擾が起り、それに連坐して捕縛され所刑される處であつたが、神に願をかけ、一年の間色情を慎しみパンと水丈で過すことを誓つて漸く難を逃れた。その後誓言を守つて來たが、あとまだ六十日間禁慾しなければならぬ。だが若し誰かが一緒に節慾してくれるなら、各人卅日づつて満願になる。だから今後一ヶ月マリーナが協力してくれるなら、その上は晴れて戀の樂しみが出来る——と言ふのである。マリーナは早速禁慾生活に這入る。がやがて半月もすると、心身ともにすっかり憔悴する。彼女は半病人の様になつて、最早や情熱の火も消えて

了。そこで始めて賢明なドクトールの意圖を知り、同時に夫の忠告にも深い意味があつたことを悟つて、マリーナは過ちを犯さなかつたことを神に感謝する。

之は女性の性的要求と、それに伴ふ心理的變化を素朴卒直に描いてゐる點で、異色あるものである。

「四人の不幸な戀人」は Jörg Wickram の小説 Gabriotto und Reinhart (Strasbourg, 1551) を脚色したもので、佛國の騎士ガブリオットと英國の王妹 Philomena 及びガブリオットの親友ラインハルトと英國伯爵の娘 Rosimunda の二組の悲戀物語を脚色したものである。Ritter vom Hag Gerrier は佛王 Landolfs の暴虐を諫言して逆鱗に觸れ、息子のガブリオットとともに追放に處せられる。ガブリオットーの親友ラインハルトは彼に同情し、自分の知人を頼つてもに英國へ渡らうと勧める。その後佛王は自分の早まつた處置を後悔するが、もう彼等は出發した後である。三人は英國に亡命して來て、英王ハインリッヒの御前試合で、老ゲルニールは Marschalck、ガブリオットーは Eberhardt、ラインハルトは Orbin とそれぞれ試合をして武勳を立てる。特にガブリオットーは王妹フィロメーナに認められる(第一幕)。やがてフィロメーナはガブリオットーに對する戀々の思ひを親しい友達ロシムンダに打ち明ける。ロシムンダもラインハルトを愛してゐる。そこで二人は愛の印を騎士達に贈つて見ようと相談する。話變つて二人の騎士達は乙女達が窓から投げて寄越した花輪と裝身具を受け取つたからには、自分達も手紙を贈つて、愛の告白をしようと相談する。そこへ口上役が狩獵の會に誘ひに來る。次いで、手紙を貰つたと言ふ乙女達の方では、この上はどこ迄も秘密にしかも清らかに愛の交際を續けて行き度いと願ひ、女醫の Laureta に萬事打ち明けて、宜敷頼まうと話し合ふ。そこへ老騎士ゲルニールが來て、狩りてガブリオットーが負傷したと言つて、女醫のラウレタを探す。フィロ

メーナは驚いて、病を治す魔力を持つと言ふ指輪を、ロシムンダに托して、見舞ひにやる。だが此の時早くも彼等の幸運を嫉む敵が現れる。騎士 Orin はロシムンダを愛してゐるので、女の心がラインハルトに傾いてゐるのを察して、二人の關係を王に密告しようとする。その方法は王の愛してゐる鸚鵡に言葉を教へて、喋らせようと云ふのである(以上第二幕)。

その中にハインリッヒ王に王子が生まれ、皇儲生誕の祝賀武術大會が行はれると云ふので、先きのマルシャルク、エーベルハルト及びオルピンは今度こそ佛國の三騎士を懲らしてやらうと用意してゐる。乙女達の方でも、ガブリオットーの傷が癒つたと云ふので、女醫に頼んで、騎士達にそれぞれ贈物をし、試合の勝利を祈つてやる。愈々試合の當日、王の面前で再び型の如く三組の勝負が順次行はれる。王はガブリオットーを優勝者とし、フィロメーナに命じて、彼に花環を下される。かうしてフィロメーナとロシムンダの思慕の情は愈々濃やかに愛人達の邊りに飛び、今日も二人は女醫ラウレタと呼ばれて、騎士達の待つてゐると云ふ女醫の室へ行く(第三幕)。

だが王は鸚鵡の口からロシムンダとラインハルトの仲を知つたと言つて、二人の間を監視しなければならぬと獨語する。しかもガブリオットーもラインハルトも今は戀の喜びに凡ての憂苦を忘れてゐる。とそこへエーベルハルトが戸を叩いて訪れる。彼は王がラインハルトとロシムンダの祕密を知つて、その眞相を探つてゐると警告する。そこで二人の歡喜は一轉する。彼等はともく、一應佛國へ引き上げるより他に手段がないと話し合ふ。そして様子を見に來た英王に向つて、一年の間歸國の請暇を願ひ出る。かくて二人が英國を去つた後、一方女醫ラウレタが乙女達の戀心を憐れんで、騎士達の安否を氣遣つてをれば、他方獨り英國に残つた老ゲルニールは、二人の舟が難破し彼等の行方は知れず、漸く彼等の連れてゐた二匹の犬丈が宮廷へ歸り着い

たと獨語してゐる。然るに當の本人達は首尾よく佛國へ泳ぎ着いて、巴里へやつて來る。彼等が遭難の經過を話し乍ら宮廷迄來ると、そこに佛王が立つてゐて、快く二人を迎へる。だがその後ラインハルトは枯れた薔薇の花を見ては、英國に残して來た戀人を思ひ、不吉な夢を見ては、頭を抱へて悲しんでゐる。ガブリオットーが色々とそれを慰めて、氣分を轉換させようと骨を折る(第四幕)。

處て佛王は何とかして二人を宮廷に留めようとして、大臣(Doy marschalck)と相談する。そして大臣の妹の容色でガブリオットーを迷はさうと云ふことになる。その結果ガブリオットーとラインハルトが最早や一年になるが、愛する人達はどうしてゐるか、噂し合つてゐる處へ、大臣の妹 Blancheffor が饗宴の招待に來る。ガブリオットーが彼女を抱く。と大臣が不義者見付けたとばかり、二人の從者とともに馳け込んでくる。彼は言ひがかりをつけて、二人を結婚させようとするのであるが、ガブリオットーは不義者呼ばわりを承知しない。遂に二人は格闘し、とどのつまり大臣は倒れ、二人の從者は逃げる。そこでガブリオットーとラインハルトは又もや英國に逃亡することとなる(第五幕)。英國に來た二人は英王に厚く迎へられるが、その時王はガブリオットーの指に、さきのフィロメーナの指輪を認める。王は二人を去らせた後で、彼と王妹との仲を疑ひ、馬鹿役 Jockel をして監視させようと獨語する。かくて馬鹿役が二人の騎士の相手をしてゐるが、二人と入れ違ひに王が來ると、ガブリオットーとフィロメーナとの情事を密告する。王は彼に、明日狩場で、ガブリオットーを毒を塗つた林檎で殺すやうに命ずる。然るにガブリオットーは狩場で下男の Antoni から王と馬鹿役との密話を教へられる。そこで彼は早速又下男をして逃亡の用意をさせるとともに、父親や愛人に別れを告げに行く。そのあとへ馬鹿役が出て來て彼を待つてゐる。やがて彼が歸つてくると、馬鹿役は「日がかん／＼照るが、咽喉は渴かないか」と林檎



を奨める。ガブリオットーは劍を抜いて彼の胸に擬し、彼にその林檎を食へさせる、と馬鹿役が倒れる、ガブリオットーは葡萄牙へ渡ると言つて、急いで退場（第六幕）。

それから三日目、ガブリオットーは下男に切々たる悲戀の思ひを述べ、今は生きて甲斐無い命だと嘆き、わが亡き後は自分の心臓と指輪とを愛人に届けてくれよと言ひ置いて、死んで行く。他方フィロメーナもロシムンダに、戀人の夢を見た話をして悲しめば、ロシムンダもラインハルトが親友の安否を氣遣つて怏々として樂じまず、今朝も二本の血管を切つて血を取つた等と心配する。そこへ下男のアントニがガブリオットーの心臓の這入つた皮囊と指輪を持つてくる。フィロメーナは愛人の悲しい最後を聞くと、その心臓に接吻し乍ら、せめてあの世と一緒にならうとばかり、崩折れる。ロシムンダが下男をして女醫のラウレタを呼ばせようとしてゐる處へ、當の女醫が頭上て手を打ち合せ乍ら馳けて来る。ガブリオットーが死んだと言ふ報知が宮廷へ來たので、それを聞いたラインハルトも血管が破れて死んで行つたと言ふのである。とロシムンダも亦死なばもろともと、來世に希望をかけて死んで行く。ハインリッヒ王が兩手を高く擧げて馳けつける。王はフィロメーナの愛情を誤解してゐたことを後悔し、ロシムンダの死を悼み、三人の死骸とガブリオットーの心臓とを一つの墓に厚く葬ることを命ずる。かくて死者が運び去られると、皆々行列をなして退場、口上役が來て、結辭を述べる。

寔に之は老練な脚色振りである。四人の戀人の性格、熱烈剛勇なガブリオットー、どこ迄も友情に厚く心の柔しいラインハルト、熱情的にして高貴なフィロメーナ、純情にして貞淑なロシムンダが美事に描き分けられてあるとともに、彼等の運命が少しの無駄もなく、さりとて何等の間隙もなく緊密に前後連關して展開して行つてゐる。恐らく當時の簡単な舞臺形式では以上のものを要求しても無理であらう。

次作「ハーグブルツスとシグネ」は *Swedische Chronik Alberti Krantzij, durch Heinrich von Eppendorff verteutsch (Strasbourg 1545), I buch 46 capitel. じよせものつ、* ザックスは既に千五百四十六年五月卅一日作工匠歌 *Die tew lieb pis in dot: im grünen tone Heinrich Frauenlobs.* で此の悲戀物語を取扱つてゐる。その脚色法は前劇「ガブリオットーとラインハルト」と同巧異曲であり、それに從來の鬪争の場面を一幕附け加へたものに過ないから、ここでは口上役の序辭によつてその梗概を簡単に紹介するに止めて置く。

丁抹王 *Sigarus* の宮廷に瑞典の若い三人の貴族が滞在してゐる。その中末弟の *Hagwarius* は王女 *Signe* に愛され、互に夫婦の約束を取り交してをつた。處がここに獨逸の貴族 *Hainrich* なるものがあつて、彼女に戀慕して、彼女から拒絶された。彼はそれを恨んで、二人の王子 *Haraldus* 及び *Sibaldus* を使喚し、かの三人兄弟に對して理不盡に喧嘩を吹きかけさせる。その亂闘で二人の王子はハーグブルツスに殺されるが、彼の兄二人も重傷を負うて死ぬ（第一幕）。ハーグブルツスは一端西班牙に逃亡するが、戀人を思ふ情に堪へ難く、日夜懊惱する。遂に一計を案じ、女装して丁抹に歸り、國王に西班牙からの報告書を捧呈すれば、その晩は王女の室へ泊まることが出来たらうと考へる。その間シグネも亦腰元相手に、不幸な戀を嘆いたり、夢物語をしたりして、愛人の安否を氣遣つてゐる（第二幕）。やがて事はハーグブルツスの計畫通り運ぶが、かの獨逸人ハインリッヒはハーグブルツスの假装を見破つて、王に密告する（第三幕）。王は彼が翌朝王女の室を立ち出た處を捕へさせ、彼の女装を剥ぎ取る。かくて彼の辯解も通らず、彼は絞首の刑に處せられることとなる。それを聞いた王女シグネも、彼が斷罪されるのを物見櫓の上から見送つた後、同じく梁に被衣を吊るして首を絞つて死なうと言ふ。且つ腰元も亦之に殉じ、あとは火をかけて悉く灰燼に歸する様に纏焚きに命じておくこととする。

やがてハーグブルツスは刑場に曳かれて行く途中、後宮が火焰に包まれてゐるのを遠く望んで、今はもう思ひ残すことはないと言ふ。そして王は？——王は二人の非業の最後を知つて、始めて悲嘆の涙に暮れる（第四幕）。ハーグブルツスの弟 Hacco は三人の兄の仇を討たうと軍議を凝らす。同様に丁抹王も敵軍上陸の報を得て、出陣しようとしてゐる處へ、ハッコーが攻め込んでくる。かくて激戦の結果王もハインリッヒも戦死する。此の戦で一風變つてゐるのは、ハッコー軍が皆々手に大きな木の枝を振り翳して出てくることで、之は丁抹王に傳令が報告してゐる様に「森全體が進軍してくる様に見える」ため、沙翁劇「マクベス」第五幕に於ける同趣向に先鞭をつけてゐるわけである。最後に「オルヴィールとアルツス」(1556, 12, 31.) は序辭によると、Die französische cronica から取材されたもので、既に屢々見た様な舞臺構成と舞臺技巧を組合せて、その複雑な筋を運んでゐる點で、矢張り老巧な作品と言ふべきであらう。

Castilia の王 Karl には先妻の子 Olivier と、後妻の連れ子 Artus があつたが、二人は非常に仲が好く本當の兄弟も及ばない程であつた。處が父の後妻 Isabella がオルヴィールに不倫の戀を仕掛けたので、彼は弟アルツスに一通の書き置きと、清水の這入つたガラス壺を残して、英國へ逃避する。壺の水が曇つたら、彼に不時の變が起つたものと思つてくれと言ふのである。以上が第一幕の内容であるが、作者はそれを五つの連續した簡單な場面物語つてゐる。所謂シナリオ式脚色法である。王が廷臣と二王子を連れて出て、王子達を一同に紹介し、わが亡き後は子供達を宜敷く頼むと言ひ、二子にはそれ／＼カステイリアとポルトガル領を分ち與へるから、仲睦じく暮らすやうにと言へば、二王子も互に堅く友愛の誓を立てる。次いで王妃が獨り出て来て、オルヴィールに對する悶々の情を訴へる。それからアルツスが現れて獨り、オルヴィールの行方を探してゐる。彼が去るとオルヴィールが

出て、繼母から求愛されたことを悲しみ嘆き、今は誰も知らない處へ逃げて行くより他に術はないと決心する。次いで王妃が入つて来て、オルヴィールに拒絶されたけれども、もう一度運試だしをして見ようと、彼を廣間の方へ探しに行きかかる。とそこへアルツスが来て、兄が手紙と水壺を残して失踪したことを告げて、去る。王妃は始めてオルヴィールの眞意を雫り、泣き乍ら退場する。

扱て次の幕の始めではオルヴィールが獨り登場、旅の途中船中で Hans Thalbort なる騎士と知り合になつたが、舟は難破し、騎士もやがて病死した。しかも騎士は負債のために追放の身であつたので、彼がその借財を支拂つて、埋葬してやつたと獨語、これからロンドンへ行つて武術試合に参加しようと言つてゐる處へ、二人の強盜が襲ひかかる。そこで格闘。格闘中に彼は財布を落し、それを強盜に奪はれる。彼が途方に暮れてゐると、白衣の騎士 (Der weisse Ritter) が現れ、彼に助言と金と武具とを與へて、ロンドンに行かせる。但し、彼が試合で勝ち得た物の半分は、白衣の騎士のものになると云ふ條件付きである。因に此の白衣の騎士は後でわかる通り、かのタールポルトの亡靈である。かくてオルヴィールはロンドンで武術試合に参加、武勳を立てるが、最後にアイルランド老王に血闘を挑まれ、彼を殺す。老王の息 Halon が復讐を誓ふ(以上第二幕) 次いでオルヴィールはアイルランドの新王ハロンが復讐戦を準備してゐる處へ、攻め込んで之を降す。だが敵王に絶對の恭順を誓はせて、彼を放してやる。ここで場面が飛んで故國のカステイリア。弟アルツスが獨り出て来て、兄の行方を心配してゐる。兄が失踪して既に三年、父王は金にあかしてその行方を探らせ、母は心痛で分別も無くなつてゐる。只壺の水が未だに澄んでゐるのは、無事である證據であらうかと獨り言。扱て又英國ではオルヴィールが戦勝の功績によつて、今は王女 Helena と結婚し、既に一子を設け、第二子も間もなく生れようとしてゐる。彼の幸運は缺ける

處もない様に見える——とオルヴィールは獨語。そこへヘレナが来るので、野猪退治に出掛けると言つて、妃が不吉な夢を見たからと止めるのも諾わずに、振り切つて出て行く(以上第三幕)。だが彼は狩に出て森の中を迷うてゐる處を、かのアイルランド王ハロンが藪陰から跳り出て、捕へられる。そしてアイルランドの岩窟の中へ幽閉されることとなる。話變つて弟アルツスは今迄澄んでゐたガラス燻の水が、今は黒くなつてゐるのを見て、兄の不幸を知り、愈々兄を探しに行かうと決意する。又英國ではヘレナが、狩に出たまま歸らぬ夫を待つて既に二年半、尙も神に祈願して彼の歸るのを獨り悲しく待つてゐる。弟アルツスも諸國を遍歴して、未だに兄の行方がわからない。彼は獨り森の中で途を迷ひ、野宿をしようと言つてゐる處へ、恐ろしい形をした大蛇が火を吐き乍ら襲ひかかつてくる。彼は大蛇と格闘、それを倒すが(Artus schleift sich mit dem trachen, felt in)、自分も重傷を負ふ。するとかの白衣の騎士が又現れ、彼に藥を與へる。彼がそれを塗ると、忽ち心身爽快になる。すると騎士は彼に不思議な助言を與へる。彼はオルヴィールによく似てゐるから、先ブロンドンへ行つてオルヴィールだと稱し、三日の間ヘレナと寢室を共にし、悲しんでゐる彼女を慰めてやらなければならぬ。但しその間必ず彼女に手を觸れてはならない。それからアイルランドへ行つて、牢獄から兄を救ひ出すやうにと言ふのである。かくて彼が騎士に祝福されて、騎士とともに退場すると、アイルランド王ハロンが獨り登場、オルヴィールが既に三年、牢獄で苦しんでゐると告げて退場。次いで英王とヘレナが出て来て、オルヴィール(實はアルツス)が歸つて來たと思つたら、三日滞在したのみで、又もや巡禮に出て行つたと話し合ふ。次ぎにアルツスが出て来て、白衣の騎士の言葉通り、オルヴィールの風をして英王とヘレナを慰めて來たと獨語、するとかの騎士が又現れ、オルヴィールの幽閉されてゐる要塞を差し示して、兄を救出せよと教へる。騎士

が消えると、アイルランド王が来る。そこで又もや格闘。結局王は捕へられ、オルヴィールを引き渡すこととなる。そして王は即刻オルヴィールを連れて來る。かくて兄弟相抱いて喜ぶ(以上第四幕)。だがアルツスが兄に今迄の一部始終の物語をすると、兄は弟と妻との間を疑ひ、嚇怒して弟に斬りつけ、弟に重傷を負はせる。かくてオルヴィールがブロンドンに歸つて盛な歓迎を受けた有様は、口上役が獨り出て來て報告する。やがてヘレナから、弟と彼女との間が潔白であつたことを聞いたと言ふオルヴィールは、後悔に暮れて弟を探しに出てくる。そして藪陰で苦しんでゐる弟を連れて、ブロンドンへ歸る。それからヘレナが二人の愛子を兩手に引いて、アルツスを見舞ひに行く。次いでオルヴィールと撞木杖を衝いたアルツスが出てくる。兄と弟は同じ夢を見たことを話し合ふ。それは、兄の他に弟の傷を癒すものがないと言ふのである。でオルヴィールはその夢の意味を神意に問ふため、聖堂へ行つて祈念することとなる(以上第五幕)。然るに神意によると、愛子二人の血を飲ませれば、弟の傷が癒ると言ふので、オルヴィールは涙に暮れ乍ら、愛子二人を縛り、鋭利な刀を抜き放つて、子供達を連れて行く。(Er bindt die kinder und zeucht ein scharpf messer aus und fñrt die kinder ab) 入れ代つて杖に縫つたアルツスが來て、今は最後の日も近づいたと言つてゐる處へ、オルヴィールが皿に盛つた子供達の血を持つて來て、彼に飲ませる。と見る見る病人は恢復する。然し子供を殺した兄弟は、最早やブロンドンに止まることが出來ない。オルヴィールは逃亡の支度をするために、奥へ這入るが、直ぐに又、甦つた子供達を連れて出てくる。兄弟は神の宏大な慈悲に感謝し、愈々故郷へ歸らうと相談する(以上第六幕)。かくてヘレナと二人の子供を連れて、カステイリアへ歸つたオルヴィールは、今、王位に即き、一家の繁榮を壽いでゐる。然しヘレナは幸運の頼み難いことを述懐する。と戸口を叩く音がする。オルヴィールが戸口へ行つて、誰かと訊

く。白衣の騎士が「戸を開けないと、踏み破るぞ」と答へる。威嚇されて、オルヴィールが怒る。彼は劍を抜いて、戸を開ける。と白衣の騎士が這入つてくるので、忽ち喜びの聲を擧げ、騎士を迎へて、ヘレナに紹介する。だが白衣の騎士はさきの誓約の履行を求めに來たのである。オルヴィールは喜んで約束を果さうと言ひ、試合で得た賞品の頸飾りを、頸から外ずして渡す。だが騎士は王妃ヘレナの半身と、二子の中から長男とを要求する。それときいてオルヴィールは哀訴嘆願し、只管に容赦して貰はうとするが諾かれない。遂に彼は神にかけた誓言は守らなければならぬと諦めて、妻に因果を含める。ヘレナも夫のために死なうと悲しい決心をし、夫と子供とに泣く泣く別れを告げる。オルヴィールが刀を振り上げる。と白衣の騎士は始めて彼の手を止める。そして自分が彼に助けられたハンス・タールボルトの亡霊であること、オルヴィールが地上の財寶、富や名譽や妻子に心を牽かれず、只天上の財寶に歸依したことを稱へる。かくて亡霊が速に(Geschwindt) 消え去ると、オルヴィール夫妻は跪いて、神の光榮を讚美し、地上の喜びを顧みず、只管に天上の喜びを求めようと誓ふ。

かくの如く見てくる時、此の劇が到る處で既に經驗濟みの技巧を利<sup>テセニク</sup>用してゐることがわかるであらう。第一幕に於けるオルヴィールに對する繼母の不倫の戀は「不貞な皇后と無實の伯爵」(Die falsch keyserin mit dem unschuldigen Grafen, 1551, 11, 27) 第一幕その他を思はせるものがあり、第二幕のロンドンに於ける武術試合は「四人の不幸な戀人」の第二幕に甚だ近似してゐる。又試合の結果オルヴィールとヘレナの間が結ばれるのも、ガブリオットとフィロメーナやハーグベルツとシグネとの關係と同じである。白衣の騎士は從來屢々見て來た「天使」や「メルクル」と全く同じ役割をしてゐる。又第四幕でアルツスが退治する大蛇も、かのメルジーナ物語で既に半身の蛇形を用

ひてゐるから、それから發展したものであらう。然し乍ら此の大蛇の役は此の劇から始まつて今後屢々用ひられてゐるから、尙後述することとしよう。更らに第七幕では明らかに門扉が用ひられてゐるが、之も既に前述した處である。最後に謝肉祭劇及び喜劇「エバの等しからざる子等」(1553) 以來子役がここに久し振りに見られる(從來のものでは例へば「追放された皇后と二人の行方不明の王子」(1555, 11, 13) の第二幕などでは、赤兒であるから、恐らく人形が用ひられた)のは、注目に値する。尙舞臺面が英國からカステイリア、カステイリアから英國へと飛ぶのも、「フォルツナーツス」(1553, 3, 4) で經驗濟みの趣向である。之を要するに此の劇は登場人物として亡霊、大蛇、子役等を從來のものから一段と進歩發展させて來てをるとともに、大蛇や亡霊の出入口として、奥舞臺側面にも登場口が存在したこと、又藪や門扉が裝置されたに相違ないことを一層明らかに示してゐるのである。と言ふことは又之が上演されるためには、從來見て來た様な舞臺形式であれば十分であることをも立證してゐるわけである。

かくてハンス・ザックスの演劇活動が老練の域に達したとも言ふべき最も收獲の多かつた千五百五十六年は暮れて行つた。

## 第十三章 工匠歌人舞臺 その二 一五五七年

ハンス・ザックスの演劇活動は、從來見て来た通り、當時の工匠歌人舞臺及びその演技術と相關關係に於て、次第に登場人物の種類や性格及び舞臺の構造や裝置に新味を加へて、今や漸く圓熟老練の域に達した様に見える。その脚色法は全般的に言つて、劇的所作よりも寧ろ敘事的對話や獨白を主としてゐるけれども、それによつて複雑な物語の筋を簡潔明快に運んで行く作劇技法は愈々自在を極め、今は最早や何等苦澁の跡を留めない迄になつて来た。それと同時に舞臺經濟上から相變らず、時間、空間の關係が無視されてゐるとは言へ、しかも當時の幼稚な舞臺形式と舞臺操作との許す限りに於て、大膽な實演を企圖し、觀客の觀劇慾を満足させようとする試みに就ても、多くの經驗が積まれて来たものと思はれる。勿論多作の作家のことであるから、一作毎に筋の運び方や新機軸の實演によつて、進歩の跡を示してゐるとは言はれない。多くの作品の中には只物語を對話に變へたに過ぎない様な、劇としては安易にして低調なものも存在するが、それらの作品にしても、作者の旺盛な詩作慾と、演劇運動に對する間斷ない熱意とを示すものとして見る時は、當時の工匠歌人劇のために貢獻する所ものが少くなかつたことと思はれるのである。

かくて五十六年には喜劇十篇、悲劇七篇と云ふ驚くべき多數の作品が脚色され、工匠歌人の舞臺劇もその形式と内容に於て、ほぼ達すべき處に達したものとすることが出来る。と言ふのも翌五十七年度に書かれた戯曲は、正しく從來の作風の總決算であり、總仕上げであると言つた觀を呈してゐるからである。先づその取材の範圍から見ると、作者が既に屢々利用してゐるデカメロンを始めとして、相變らず聖

書によるものが最も多く、古代中世の民間傳説によるものがそれに次いでゐる。しかもそれらの物語を脚色するに當り、作者は宛も公式によつて數學の問題を解くが如く、此れ迄に既に試験済みの各種の作劇法を巧に組み合せて場面を構成し、筋を運んでゐるのである。この事は正しくハンス・ザックスの不斷の演劇活動が五十六年から五十七年にかけて、漸く結實し、ここに舞臺構造や演出法に於て獨得な工匠歌人劇なる一定の劇様式がほぼ完成するに至つたことを意味する。今や作者は才筆の走るがままに、物語を劇化して、聊かの澁滞の跡も留めない様に見える。

然し乍ら老成の筆になるものは、之を演劇發展史上から見る時は、既に常套的平凡に墮してゐるものが多い。従つてハンス・ザックスの舞臺を再構成するに當つては、それぞれの作品が悉く興味ある問題を呈供してゐるわけではないから、ここではその中何等かの意味で尚工匠歌人舞臺の機構を解明する上に關連のある作品を取り出して検討することとする。

處で五十七年度に這入つて最初に出来た作品は久し振りで又デカメロンの第四日第十話から取材された *Comedia, mit 10 Personen zu agien: Der jüdling im kasten, und hat 3 actus.* (箱の中の若者、1557, 1. 13) であるが、之を最初のデカメロン劇に比べると、定に巧妙な脚色振りを示してゐる。原作に據ると、Salernoの老醫 *Mazzeo* は若い美しい妻を持つてゐるが、妻の性生活に十分満足と與へることが出来ない。そこで妻は若い *Ruggien* と密通してゐる。或る時老醫は足を痛めてゐる患者を手術するために、麻醉薬を作つて、室に藏つて

置いたが、丁度急患に呼ばれて泊りがけて往診に行く。細君は喜んで若い愛人を呼ばせ、家中の者が寝静まる迄、室に匿まつておく。若者は待つてゐる間に烈しい渴を覚え、かの麻酔薬をそれと知らずに飲む。そして深い眠に陥る。そこへ細君が来てこつそり起きさうとするが、起きない。彼女は吃驚して、鼻を撮んだり髭を引張つたり、抓つたり火で焦がしたりするが、反應がない。そこで女は男が死んだものと思ひ、女中を呼んで相談する。すると女中は隣りの指物屋が何時も夜中に箱を店の前に出して置くから、死骸をその箱の中へ入れておかうと言ふ。さうすればかね／＼評判の悪い若者のことだから、喧嘩でもして殺されたと言ふことにならうと云ふわけである。二人で若者を往來へ運び出す。ザックスの芝居はここ迄を一幕一場に仕組んでゐる。場面は老醫 Maseo の一室。例の通り醫者が自己紹介して、患者が来ないかと待つてゐる處へ、二本の松葉杖を衝いて、腿に繃帯した病人が来て、診察を受ける。醫者は患者の脚を診て、之は切り取らなければならぬと言ふ。そして手術料を受け取ると「少しも痛まない様に麻酔劑をかけて手術するから、明日又来るやうに」と慰める。患者が去ると、水の這入つたガラス罎を持ち出し「之を窓の外に置いて、外氣に晒らしておけば、麻酔薬が出来る」と言つて、罎を窓枠の上に置く。そこへ細君の Lisa が来る。彼は細君に「これから親友 Maltin を治療しに行くから、留守を頼む」と言ふ。「今日はお歸りになりませんか？」と細君は念を押す。「わしを待たないで、先に寝んでおくれ」と、彼は出て行く、細君は彼を見送つて獨り言「あなたの上衣は前から見るより後から見の方が似合ひますわ。」彼女は早速女中の Emma を呼んで、情人 Rustie を呼びにやる。そして今晚の御馳走を拵らへて置かうと、色々結構な料理の名を並べたて乍ら出て行く。その後へ女中が若者を連れて出て来る。女中は「夜になつたら奥様がいらつしやるから、ここで靜かにしてゐて下さいね」と言つて去る。若者は獨りにな

ると「旦那に見附かると大變なことになるが、リーザが愛してゐてくれるので、巧く匿まつてくれるだらう」と獨り言。暫く無言のまま坐つてゐるが、やがて又「早く日が暮れないか」と待ち遠い思ひ。その中に「今日は仲間とボール投げをやつて暑い日に灼けた上、鹽辛い腸詰めを食べたので、すっかり咽喉が渴いたが、何か飲むものはなからうか」と四邊りを見廻す。そして先の罎を見附けて、ここに水があるとかばかり、罎を取つて水薬を試して見る。そして「こいつあ伊太利酒だ」と大喜びで、皆飲み干して了ふ。聽て猛烈に眠くなる。彼は「眠くてたまらない」と言ひ乍ら、死んだ様に倒れる。するとリーザが来る。彼女は男が眠つてゐるものと思つて、一生懸命に呼び起さうとする。彼を揺つたり、彼の手を持ち上げて見たりするが、若者は死んだ様になつて動かない。そこで女中を呼んで助けを求め、そして女中の助言で、隣家の指物屋の箱の中へ死體を入れようと相談する。女中も鳥の羽を若者の鼻先きに宛て見て、若者の死んでゐるのを確め、細君に手傳つて貰つて、死骸を擔いで行く。細君は泣き乍らそのあとに従ふ。

以上の様にザックスの脚本では、原作に見られない様な劇的動機や劇的所作が附加されてゐて、巧に物語を運んで行く。老醫が脚の患者を診察する場面、麻酔薬を作る場面、ことにそれを風にあてるために窓枠に置くこと云ふ趣向は、作者の勝れた着想と言はなければならぬ。又若者が一人室で細君を待つてゐる場面、ことに彼が咽喉の渴いてゐる理由を述べてゐる處なども、情況描寫として優れてゐる。それから細君が若者を呼び醒まさうとして色々骨を折る處や、彼が死んでゐること確める處でも、原作のやうに亂暴な所作を避けて、鳥の羽を用ひてゐるのは、上演のための機宜に適した處置であらう。

處で茲で問題になるのは、麻酔薬が置かれる窓枠であるが、此の窓は原作に見られないもので、しかも劇の中では甚だ效果的に使用され

てゐるから、どうしても舞臺に装置されたものに違ひない。恐らくマルタ教會内で上演された場合は、舞臺向つて左側の内陣の窓がそのまま使用されたであらうが、その他の場合でも、同様な位置に、即ち奥舞臺側面の成るべく観客席に近い所に窓枠が取り付けられたものと思はれる。

扱て箱の中へ入れられた若者はどうなつたか？ 原作によると、兄弟の高利貸がその箱を盗んで行き、若者は高利貸の細君達の寢室へ運び込まれた箱の中で、眠を醒すことになつてゐる。そして箱の中に居る自分を不思議に思ふが、老醫が歸宅したので、細君が彼をそこへ匿したのであらうと想像する。その中に身體が痛くなるので、寢返りをする撥みに、箱がひつくり返り、蓋が取れる。彼は箱から這ひ出して、こつそり逃げ去らうとする。處が物音に目を醒ました細君達に、泥棒泥棒と騒ぎ立てられ、馳けつけて来た近所の人達に攫まる。彼は何が何やら分らない中に、拘引され拷問に懸けられ、絞首されることになる。翌朝その噂を聞いた醫者の細君も合點が行かない。そこへ醫師が歸つて来て、麻酔藥が失くなつてゐると怒るので、細君は始めてかの若者が死んだのではなくて、麻酔にかかつてゐたのだと知る。聽て又様子を見にやつた女中が歸つて来て、若者は誰も助けるものがないので、死刑になるだらうと報告する。そして箱を盗まれた指物屋が、或る男と喧嘩してゐるのを見て来たと告げる。その喧嘩の理由はかうである。例の箱は賣約済みて、指物屋は既に前金を取つてゐたが、その買手が今朝の泥棒騒ぎの時、高利貸の家で問題の箱を見たのである。そこで買手は指物屋に、箱を二重賣りしたと言つて怒る。指物屋は箱が夜中に盗まれたのだと言つて抗辯する——と云ふわけで、買手と指物屋は口汚く罵り合つてゐるのである。以上の物語によつて、細君には事件の全貌が悉く明かになる。彼女は女中に言ひ含めて、女中がかの若者の情人であると言ふことにする。女中は早速醫者の處へ行つて、

泣き乍ら、昨夜自分の室へ戀人を呼び入れたことから、例の水薬を飲ませたことを告白し、そのため今男の生命が危くなつてゐるから、救ひ出しに行くことを許して貰ひ度いと願ふ。醫者は怒つたり、冷かしたりして、それを許す。そこで彼女は牢屋へ馳けつけ、獄吏に取り入つて、若者に面會する。そして若者と萬事打ち合せる。それから裁判官の處へ行き、彼の言ひなりになつた上で、若者の無實を申し立てる。裁判官は醫師指物屋高利貸かの若者とそれぞれ訊問し、何れも女中の證言に合致することが了かつて、若者は無事故免される。その後若者と醫師の細君は楽しい日、いや楽しい夜を過ごすことに、此の事件を思ひ出して笑つたと言ふ——

處でザックスの芝居は此の事件の多い複雑な物語を、第二幕の二場面と、第三幕の一場面で要領よく纏めてゐる。第二幕第一場では二人の高利貸 *Forus* と *Orus* が指物屋の箱を盗む相談をしてゐる。作者はここで此の二人が高利貸で、抵當物を容れて置く箱が入るから、指物屋の箱を盗まうとしてゐることを示す。だが泥棒をしては首が危険いと言ふオルツスに對して、「高利で貸すのと泥棒をするのと、何處に違ひがあらう。何れも利慾のためではないか、高利で貸してゐるのが恥ぢてなければ、箱を盗んでも恥ぢることはない」とフォルツス。そこで二人は相談一決、暗闇に乗じて、盗みに出て行く。即ち此の場面は既に度々用ひられてゐる作劇技法、副人物の側から側面描寫をして事件を展開してゐるものであるが、作者はそれを劇的に構成するたために、二人の人物の意見を對立させて、高利貸即泥棒論を説き、一種皮肉な滑稽味を出してゐるのは、さすがに老巧な獨創的趣向である。次いで原作では、箱に入れられた若者の成行きが直接描寫で物語られてゐるが、劇では例の間接敘法、女中の報告で凡てを運んでゐる。場面は翌朝。醫者の細君リーザが情人の急死を悲しんで、あれからどうなつたらう。様子を見に女中を遣つてあるが云云と言つてゐる處へ、



女中のヒラが、手を揉んで歸つて来る。彼女は女中から、かの若者が高利貸の家で生き返り、捕縛されたと聞くと、夢かと計り驚き、自分の醜聞が評判になることを恐れる。て再び女中に命じて、その後の情況を探らせる。女中と入れ違ひに老醫師が歸つてくる。彼は嚙が空になつてゐるのを見て、細君に詰問する。そこで細君はそれが麻酔薬であつたことを知る。醫者が細君により加減に丸められて、新しい薬を作り去ると、女中が来る。女中は指物屋と箱の買手とが喧嘩し、二人で高利貸の處へ行つて、箱を取り戻したのを見て來たのである。それ若者が高利貸の家で捕つたのは判つたけれども、どうして彼が生き返つたか判からない——と女中は報告する。だがその理由は細君が既に知つてゐる。彼女は若者が麻酔薬を飲んだのであることを教へ、自分の身代りになつて、若者を救ひ出すやうにと頼む。即ち獄吏の所へ行つて、彼を買収し、若者に面會させて貰ふ。そして若者に、女中と逢引してゐる中に眠くなつて眠つたので、その後の事はどうしたわけか判らないと申立てるやうに、教へて置けと言ふのである。

以上の様に此の幕では實演されたら嚙面白であらうと思はれる様な事件、例へば若者が箱から這ひ出て捕まる處とか、指物屋と箱の買手との喧嘩とかが、凡て女中の報告で物語られ、細君の身代りになつて女中が醫者に告白する處も、全然省略されてゐるけれども、それは矢張り此の作者の屢々用ひてゐる舞臺經濟上の常套的手法である。しかもそれがため複雑な内容が細君を中心としてよく簡明に緊縮され、劇的興趣が次第に盛り上つてくる様に描かれてゐるのは、敘事的報告を最も巧に利用した好例とすることが出来る。

第三幕は之も既に幾度となく脚色された裁判の場である。裁判官が法廷を開いて待つてゐると、二人の高利貸が若者を泥棒だと言つて訴へる。そこで若者が調べられ、若者の言葉で女中が證言し、反つて高利貸を箱盗人だと訴へる。遂に高利貸は畏れ入つて、追放刑に處せら

れたのを、金を出して赦して貰ふ。

此の劇はザックスの圓熟期に於ける人情喜劇の典型とも云ふべきものであるが、此の劇の様に物語の葛藤が最後の裁判の場で解決されると云ふ趣向は次作 *Comedia, mit 10 Personen zu agieren: Der verloren son, den man richten wolt, hat 3 actus.* (行方不明の息子の裁判。1557, 3, II) に於つて、更に一層強調されたものになつてゐる。

ゲヌアの市民 Nicias の息子 Nicolaus は三歳の時誘拐されて、希臘の Achaia に賣られたが、その主人が餘り酷使するので、七年後逃亡し、その後歐羅巴中を流れ渡り、遂にそれと知らず自分の親父に買はれる。彼は忠實に仕へて、新しい主人に信用されてゐるが、同時に又主人の娘 Appalonia にも愛される。だが彼は娘の戀を受け入れないので、娘の怨みを買ふ。娘は彼が不義をしかけ、暴力を振つたと申立てる(「不貞の皇后と無實の伯爵」のモティーヴ)。主人は怒つて彼を裁判に訴へる。そこで裁判の場となるが、ニコラウスは娘のためを思つて、真相を告げない。だが彼の頭にかけた珠數により、彼の本當の素性が明かにされる。娘は自分の罪を懺悔し、息子は生みの父母のもとに返へる。

此の物語は Berowaldus の書いてゐるものだと序辭にあるが、その書名は不明である。劇ではニキアスが妻の Aretina と行方不明の息子を思つて悲しんだ上で、家の仕事が増したからと言つて、召使を雇入れに出て行く場面と、彼がニコラウスを雇入れる場面を第一幕とし、娘のアパロニアがニコラウスに對する戀情を女中に打ち明け、女中の止めるのも諾かずに、彼に言ひ寄り、彼に拒絶されて反つて彼を不義者に仕立てる場面を第二幕とし、一切の解決を第三幕の裁判の場に托してゐる。従つて裁判の場が最も詳細に劇的に寫されてゐる。裁判官二人の陪審官刑吏が現れて、裁判の開始が宜せられる。被告である下男のコラウスが縛られたまま連れて來られる。裁判官が原告ニキア

スに「此の國民大衆の面前で、訴の趣を申立てよ」と命ずる。かくて老紳士ニキアスは下男が娘に暴行しようとした前後の事情を委しく陳述する。裁判官と陪審官が交々ニコラウスに答辯を促すけれども、彼は首を垂れたまま答へない。只身に覚えのないことであるが、誰にも迷惑を懸けたくないから、凡てを甘受する。神のみは此の心を知り給ふと答へるばかり。遂に裁判官は彼に斬首の刑を宣告する。すると彼は最後の願として、神に自分の不幸な生涯を訴へることを許して貰ひ度いと言ふ。願が許される。とニキアスが反對して、早く刑を執行する様にと刑吏に迫る。刑吏は許可の命令が下りたのだからと、それを抑へる。そこでニコラウスは委しく自分の身の上を物語り、刑吏に形身として、首に懸けた珠數を渡す。それと見て母のアレティナが刑吏からその珠數を借りて、此れは見覚えのある品だと言ふ。老父ニキアスも始めて下男の本性に疑心を起し、それからお前の洗禮名は何と言ふ。父親の名は？ と訊けば、アレティナも「そして又母親の名は？」「妹はないか？」と尋ねる。下男はニコラウスの本名を逆に讀んで「Stalocin」と偽名してゐたのは、先の主人が餘り残酷だつたので、再び連れ戻されることのない様に名前を偽つてゐた事や、アパロニアと云ふアテーンであるが、父の名も母の名も知らない事や、アパロニアと云ふ妹があつたことを覚えてゐる事等を答へる。それから彼は幼い折り自分が誘拐された時の模様を委しく物語る。かうして父母息子の絶えて久しい再會の場となるのであるが、父親が刑吏に、此の子の繫縛を解いてやつてくれと言ふと、母親が馳けよつて、息子の繫縛を断ち切つてやるあたりは却々に人情を穿つた脚色法である。そこへ妹のアパロニヤが来て、兄の前に跪き、一切を告白して赦しを乞ふ。兄は彼女を抱き起し、畜生道に陥らなかつたのも、神の恵だと感謝すれば、父は先づ先づその話はあとにして、今日は家へ歸つてお祝にしようかと、皆々退場する。

茲に少しく詳細に此の裁判の場を述べたのは、之と全く同巧異曲であるかの「ヴィオランタ」劇の裁判の場と比較する便宜のためであるが、前者が後者に優つてゐることは、今更ら贅言を費やす必要もありません。

尙此の種の敘事物語から取材されたものに Hans der Büheler (Hans von Bühel) の Die Königstochter von Frankreich (1401) を脚色した Ein comedi mit sibenzehen personen. Marina, des Königs tochter auß Franckreich, und hat siben actus. (佛國の王女、マリーナ姫。1557, 7, 20) がある。

だが此等の敘事物語の劇化は何れも從來用ゐられてゐる劇作法及び舞臺面を巧に應用したもので、工匠歌人劇も既にその劇形式の限界點に達したことを思はせるものがある。この事は此の年最も多く書かれた聖書劇にも見られるのであるが、そこでは物語の筋を、獨白又は對話で運んで行く技巧の極致が示されてゐると言つても過言ではない。

今五十七年度に聖書から取材された喜劇三篇

Comedia mit 9 personen. Die Jael, und hat vier actus. (ヤヘン。1557, 7, 8)

Comedia mit 15 personen. Der Daniel, und hat siben actus.

(ヌニヒヤ。1557, 8, 10)

Comedia mit 4 personen. Der Mephistoset. (ヌヨホセナ。1557, 10, 5)

悲劇三篇

Tragedia könig Sauls, mit verfolgung könig Davids. (サハントヌヨハト王の追縛。1557, 8, 28)

Tragedia mit 14 personen. Die verfolgung könig David von dem könig Saul, hat 5 actus. (ヌヨハト王サハント王の追縛。1557, 9, 6)

Tragedia mit 17 personen. Der gotlob könig Ahab mit dem frommen Nabor, hat fünf actus. (興徳のトハント王と敬徳のナハト。1557,

10,4) 及び喜劇でも悲劇でも何れでも良しとするもの一篇

Comedia (oder Tragedia) mit 24 Personen. Die entpfengnuß und geburdt Johannis und Christi, und hat 9 actus. (マヘネトキリストの受胎と誕生。1557, 6, 16)

を通過すると、此の中「喜劇(又は悲劇と呼んでもよい)と口上役の序辭(で言つてゐる)、ヨハネとキリストの受胎と誕生」を除いては、何れも舊約聖書の極めて忠實な對話化である。だから此處では從來に見られない様な特殊の場面のみを摘出して、その舞臺面を考察することとする。

「ヤエル」は士師記第四章を四幕に脚色したもので、第一幕はその章の一節から五節迄、第二幕は六節—十三節、第三幕は十四節及び十五節、第四幕は十六節から二十二節迄を取扱つてゐる。此の中第三幕は例の如き戦争の場面であるが、第四幕でヘベル(Haber)の妻ヤエルがその戦で敗けて逃げて事たシセラ(Sisera)を、頭に釘を打ち込んで惨殺する處を、聖書にある通り、實演してゐるのは甚だ興味を牽くと云ふのも「シセラの頭に釘が打ち込んである」(der nagel steckt ihm im kopf.)のを示すためには、そこにトリックが用ひられたに相違ないからで、その仕掛けは恐らく釘にあつたのであらう。

「ダニエル」はダニエル書第一章から第六章迄を脚色したもので、第一幕第一場では、バビロンの王ネブカデネザル(Nebucadnezar)と寺人の頭アシパナス(Aspenas)を、第二場ではユダの人、ダニエル、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤ(Hanania, Misael, Asaria)を紹介し、第三場で、王が法術師や魔術師に夢占ひをさせる處を取扱ひ、第二幕で、ダニエルがその夢を占ひ直す轉末を取扱つてゐる(以上ダニエル、一章及び二章)。次いで第三幕は聖書の第三章に相當するもので、始めハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤが登場して、ネブカデネザル王が金の像を建立して、國民に禮拜させようとしてゐるけれども、そん

な偶像に供物を獻げることとは出来ないと話し合つてゐる。そこへ王が廷臣を連れて這入つて來るので、彼等は一隅に退いて見てゐる。すると大きな像が建てられる。口上役が偶像を禮拜するやうにと布告する。皆々敬意を表し、跪づく。かの三人丈は一隅で立つたまま動かない。口上役がそれを王に告げる。王は彼等を連れて來させ、金像を禮拜するやうに命ずる。けれども三人とも諾かない。遂に彼等は縛られ「常よりも七倍も熱くした爐」の中へ投げ込まれるために、連れ去られる。と從臣が馳けて來て、爐に投げ込まれた三人のイスラエル人は平然としてゐるのに、反つて家來のものが多く焼かれたと報告する。王は立つて爐の方へ行き、宛も中を覗き見る様な風をして(Der könig, steht auf, geht gegen dem ofen, sieht samb hinein)「四人のものが火の中を歩いてをり、四人目のものは神の子の様である」と言ひ、再度火の中を覗く(Der könig, schaut wider hinein)。それから王は手を舉げて、彼等呼び出す——

此の場面は當時の演出法を知る上に、色々な示唆を與へてゐる。先づ演技中に登場人物によつて大きな金の像が建てられてゐるのは、道具方と言つた人達が、舞臺の飾り付けをしなかつた證據である。又三人のイスラエル人が一隅に立つてゐるとあるのは、奥舞臺に王が居り、その傍に金像、奥舞臺と前面舞臺との界目邊りに口上役が立ち、前面舞臺の一方の端、王から見えない處に彼等三人が様子を窺つてゐることを意味する。最後に三人が爐の火で焼かれる處は、勿論實演不可能であるから、舞臺裏で行はれる様になつてゐるが、彼等が何處から連れ去られ、王は何處から二度も爐の中を覗き込んだものであるか? 此の點に關しては、ヘルマンは矢張り聖器室から内陣へ通ずる出入口が用ひられたものだとしをり、ケスターは奥舞臺に例の「せり出し口」があつて、三人はその中へ連れ去られ、王がその穴を覗き込むと火焰がそこから吹き出す様に(前述「マカベエル」第三幕に於けると同様)

仕組んだものであると言つてゐる。だが之も奥舞臺側面の一方に出入口があれば、そこで十分演ぜられる。殊に場面はバビロンのドラの平野(ダニエル、三の一)であるから、「せり出し」の如きものがそこにあると言ふのは全く不自然である。

第四幕は丁度第四章に當つてゐる。ダニエルは再び法術師や卜筮師うらなひしが解き明すことの出来ない王の夢を、美事に説明する。すると次の場面では王はその夢占ひの通り氣が狂ひ、叫んだり騒いだり、引掻いたり、搔き捲つたりする(Hie wirdt der könig unsinnig, schreyet, tobet kratzt und kretzt)。そして原典にある様に、王が「逐はれて世の人と離れ野の獸とともに居り牛の如く草を喰ひ天よりくだる露に濡れる」處は、次の場面でアシペナズと州牧アリオク(Arioch, der fürst)の對話で示される(間接敘法)。そこへ王が四つ這ひになつて這入つて来て、顔を天に向けて、膝の上に起き上り、兩手を組み合せ、漸次又もとの正氣に歸る。即ちここでは狂人の役がどの様にして演ぜられたかが知られて、甚だ興味深いものがある。

第五幕は第五章を取扱つてをり、ベルシヤザル王(Belsacer)が大饗宴を催し、その席上神の手が現れて、壁に文字を記し、その文字の意味をダニエルが解き明す。處でここでも先づハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤが出て来て、老王は既に亡くなつて、その息ベルシヤザルが王位についたこと、新王が矢張り神を畏れぬ豪華な生活をしてゐることを話し合つてゐると、饗宴の支度(Man deckt den tisch)が始まるので、彼等は一隅に退く。やがてベルシヤザル王が廷臣をつれて這入つて来て金銀の盃を取り寄せ、一同に酒盃を廻す。だから演技に必要な道具や器物は幕の始まる前に装置されてゐたものではなくして、演技中に必要に應じ、登場人物の誰かによつて持ち運びされたものであることが知られる。又王は壁の方を見て、食卓から急に立ち上り「やあやあ、あすこの壁に字を書いてゐるあの手はどうしたのか？」(Die

könig schawt gegen der wandt, feht vom tisch auff und spricht: Ey, ey, was bedeut jhene handt, / Welche dort schreibet an die wandt?)と言つてゐるから、壁面に人の手を顯はしたものと思はれると言ふことは王が奥舞臺で觀客席の方に向つて食卓に着いてゐるとすれば、奥舞臺左右何れかの側に、何等かのトリックで人の手が忽然と出現したことを意味する。恐くその手は側面の幕を越して上方から吊り下げられたものであらう。

第六幕と第七幕は第六章に相當し、ダニエルが獅子の穴に投げ込まれる物語を取扱つてゐる。ダニエルを嫉むアリオクとアシペナズは、彼を失脚させようとして、陰謀を企む。彼等はダリヨス王(Darius)をして、卅日の間王以外のものに願ひ事をしてはならないと言ふ禁令を出させる(以上第六幕)。處がダニエルは日に三度天の神に祈りを捧げる。それを見たかの二人の大官は、王とダニエルの居る處へ来て、ダニエルが禁令に背いたことを訴へる。王は止むなく彼を捕縛させて、獅子の穴へ投げ入れるために連れ去らせる。そして穴の前に石を置く様に命じ、その石に封印をする(Der könig versigelt den stein)。王がダニエルのために、顔を蔽うて泣き乍ら退場すると、かの三人のイスラエル人、ハナニヤ、ミシヤエル、アザリヤが登場、——因に此の三人は屢々登場、彼等の對話によつて物語の筋が明瞭に運ばれてゆく(間接敘法)——王とダニエルが悪臣の奸計に掛つたことを話し合つてゐる。そこへ又王が来るので、彼等は一隅に匿れて見てゐる。王は穴の前へ行つて、大聲でダニエルを呼ぶ。即ちダニエルが獅子の穴に投ぜられてから、一晚を経て、今は其の翌朝である。王の呼び聲に答へて、ダニエルが獅子の穴の中で叫ぶ聲がする。王は喜んで、家來の者にダニエルを引き出させる。それからダニエルを讒訴したものを悉くその穴へ投ぜる様に命ずる。彼等が連れ去られると、家來の一人が直ぐ歸つて来て——そこに時間的間隔のないのは相變らずの時間的

錯誤——悪者どもは悉く獅子に食ひ殺されたと報告する。かくて王の神を讃へる言葉を以て終る——だからここでは獅子の穴の入口がなければならぬが、此の場面も勿論ヘルマンの説では、マルタ教會の聖器室と内陣とを通ずる戸口が利用されたものとし、ケスターによれば、奥舞臺に「せり出し口」が存在した事を證據立てるものであるとされてゐる。然し乍ら始めギリヨス王はダニエルを連れて奥舞臺へ這入つて来て (gehiet ein)、「尋ねたいことがあるのだが、州牧たちは何處にゐるか？」と探し乍ら、前面舞臺の方へ進み出て来る處へ、アリオクとアンペナズが前面舞臺へ来る (Die zwen fürsten kummen) ことになつてゐるから、奥舞臺背後の幕の近くに獅子の穴があると考へられない。寧ろ奥舞臺側面の登場口が穴の入口として使用され、ここへ家來のものが、王の命令で模造した大石を運んで來たものとする方が、真相に近いのではないか！既にそこに大きな石が据ゑられてあれば、必ずしも穴そのものが舞臺に存在する必要はない。ダニエルはその石の陰から、家臣達によつて引き出されればよいのである。

「ダニエル劇」に次いで脚色された聖書物語はダビデ王に關する二篇「サウル王とダビデ王の迫害」及び「ダビデ王、サウル王に迫害される」であるが、前者はサムエル前書第十五章から第二十二章迄を、後者は第二十三章からサムエル後書第一章迄を取扱つた連續劇であり、ザックスの聖書劇中最大のものである。

「サウル王とダビデ王の迫害」第一幕は、イスラエル王サウルが豫言者サムエルから神の聲を告げられ、アマレク人の王アガグ (Hagak, der König der Amalekier) と戦ひ、彼を生捕りにするが、敵を亡し盡さなかつたために、神の怒を招くに至る物語である。だから作者は例によつてここで早速得意の戦闘の場を描いてゐるばかりではなく、サムエルがサウル王に神の怒を告げて、立ち去らうとすると、王は彼のマントを捉へて引き止めようとするので、マントが裂ける處や、そ

こでサムエルがアガグを呼び出して打ち殺す處などを、拔かり無く脚色してゐる。此の事は要するに作者が物語の中で、劇的效果に富む實演可能な部分は出来る丈忠實に演出し、實演不可能な部分は登場人物の獨白又は對話で知らせる様に、絶えず周到な注意を拂つてゐることを證するものであつて、此の作は作者の作劇技法が此の意味に於ける最高度に達してゐることを思はせる。

第二幕では、サムエルが神の御告げによつて、エサイ (Isay) の七人の子供の中から、ダビデを見出す。ここでも神そのものは登場せず、神の聲丈が聞える様に配慮されてゐる、(Der herr oder ein stimm die spricht) それからサウル王の物狂ひをダビデが琴を弾じて鎮める。第三幕では、ダビデが親父エサイに命ぜられて、戰場に行つてゐる兄達の處へ、食糧を届けに行く。そして、ペリシテ人の巨人ゴリアテ (Goliath) を投石索と石で倒す物語が原典(十七の二十二—五十一)そのままに演ぜられる。

第四幕では、サウルの子ヨナタン (Jonathan) がダビデと所謂「契約を結ぶ」場に次いで、サウル王の物狂ひの場 (前劇「ダニエル」第四幕参照)、サウルが娘ミカル (Michal) をダビデに與へるに至る迄の次第が演ぜられる。勿論サウル王が先の戦から凱旋して來ると、「婦人踊躍つ相こたへて歌ひけるは、サウルは千をうち殺し、ダビデは萬を打ち殺す」(十八の七) 處も、又ダビデが王の婿となるために、「その従者とともに行きて、ペリシテ人二百人を殺し、その陽皮をたづさへ歸る」(十八の二十五及び二十七) 處も、さすがに實演されてゐない。只サウル王がかの婦人の歌を聞いたと言つて狂亂する場面、及び王が軍長アブネル (Abner) と待つてゐる處へ、ダビデが陽皮の這入つてゐる皮囊を持つて來て (David bringt die vorhäut in ein Lädlein) それを王に捧げる場面が演ぜられるのである。

第五幕はダビデの妻ミカルが彼をサウル王の刺客から逃がす處であ

る。だがミカルが彼を窓から吊り下ろす處は(十九の十二)、臺詞丈で済まされてゐる。その代りミカルがダビデの身代りとして、牀の中に像を入れ、その頭に山羊の毛の編物を置いておく處は(十九の十三以下)、そのまま脚色されてゐるから、ミカルはダビデを逃すために一端退場し、再び登場して來て、寢臺を用意し、その中に人形を入れたことを知りうる。

第六幕はヨナタンとダビデとが新たに契約を固める處と、サウル王がダビデの不在を咎め、辯護するヨナタンに槍を投げつける處と、エゼルの大岩の陰(hinter Asel, dem großen stein)に匿れてゐるダビデに、ヨナタンが三本の矢を射て、危急を告げる處である。ここで用ひられてゐる大岩は、前劇「ダニエル」の獅子の穴で用ひられたものと同じものであらう。

第七幕。ダビデがノブの祭司アヒメレク(Ahimelech, der hohepriester zu Nob)から「潔きパン」とゴリアテの劍とを與へられる場面と、ガテの王アキシ(Achis, König zu Gathe)の前で、氣狂ひを装ひ、庇護を受ける場面(以上第二十一章)。そしてアヒメレクが一族もろ共サウル王に殺される處(二十二の六一一九)は演ぜられず、ただアヒメレクの子アビヤタル(Abiatar)がダビデに報告してゐるのみである(二十二の二十一—二十三)。

「ダビデ王サウル王に迫害さる」第一幕は、サムエル前書第二十三、二十四、及び二十六章によつてゐる。二十五章が除いてゐるのは、それがダビデとナバルの妻アビガルとの物語で、既に「アビガイル」(Abigail, 1553, 1, 4. 前掲)で取扱はれてをり、サウル王との關係がないからであらう。

サウル王は相變らずダビデを追求しようとするが、ヨナタンとアブネルは王を諫止する。ここで作者はヨナタンをして第二十四章の出來事(ダビデがエンゲデの洞穴でサウルに危害を加へなかつたこと)を

物語らせ、アブネルをして第二十三章の事件(マオンの野でサウルはダビデを追ひ詰めたのに、外敵侵入の報告が來て、サウルは空しく軍を引き上げざるを得なかつた事)を引用させて、ダビデには王に對する何等の害心もない事や、彼には絶えず神助があることを以て、サウル王の無謀の擧を止めさせようとしてゐる。之は舞臺經濟のために、敘事的報告形式を用ひた最も聰明な例とすることが出来る。かうして二人の熱心な辯護があるにも拘はらず、サウルはその諫言を信じない。そこへジフ人(Der Sphitler)が來て、ダビデがヘキラの山に(auf dem hügel zu Hachila)匿れてゐることを訴へるので、サウルは早速兵を連れて出發する。かくてそれ以下は第二十六章を脚色してゐるのであるが、ここでダビデはアビシヤイ(Abyssai)を連れて、サウルの陣營——聖書によると、サウルは車營wagenlagerの中に寝ね、民そのまわりに陣をはれりとある——を偵察に行き、王の寢入つてゐる間に、槍と水の瓶を取つて行く處が演ぜられてゐる。處が脚本にはサウル王とアブネルが舞臺に登場して眠つてゐることを示す何等の言葉もない。いきなり「ダビデ、アビシヤイと這入つて來る」とあり——因にこの「這入つて來る」は陣營の中へ這入る意味に解されるから、必ずしも第一登場口Aを指示するものではなく、B又はCであつてもよい——アビシヤイが此の月明りてサウル王を探さうと言ひ、王があすこに眠つてゐるから、此の機會に一層王を殺したらと勧めるのを、ダビデは押し止めて、王の枕元から、槍と水瓶をとり、退場する。と直ぐ歸つて來て、今度は大聲で、敵將アブネルを呼び起す。すると「わしを呼ぶお前は誰だ？」とアブネルが言ふ。それから二十六章十五—二十一の問答が行はれるのである。だからダビデが登場する前にサウル王とアブネルが舞臺に出てゐなければならぬ。従つて之は恐く作者の不注意な書き落しであらう。尙ほサウル王がAから登場し、ダビデがB又はCから登場したに違ひないことは、彼等が退場する處に、「サウ

ルはアブネルと退場、ダビデも亦アビシヤイと退場」(Saul geht ab mit Abner, David geht auch ab mit Absay)と別箇に指定されてゐることによつても知られる。又ダビデが槍と水瓶とを取つて一度退場し、直ぐ又歸つてくるのは、聖書の「かくてダビデは彼旁にわたりて遙に山の頂にたたり。彼と此とのへだたり大なり。ダビデ民とネルの子アブネルによばはりて言ひけるは云云」に應ずるためである。

第二幕。ダビデがガテの王アキシ(König Achis zu Gath)からチクラグ(Ziklag)の町を興へられる(二十七章)。次いで第三幕は第二十八章によつて、サウルがエンデルの口寄せの婦(Die zaubrerin zu Ender)をして、サムエルの亡霊を呼び出させる處である。婦は魔の輪と魔の記號を書いて、呪文を稱へると、サムエルの靈が婦に乗り移る。勿論此の様にして亡霊を呼び出すことは、聖書にはないことで、作者は中世民間に傳承してゐた降靈術をここに應用して、劇的所作を創り出してゐるのである。かくてサウルはサムエルの亡霊から、神に全く見捨てられたことを告げられる。そして第四幕は第三十一章によつて、ペリシテ人とイスラエル人との決戦の場である。作者は例によつて先づペリシテ人の陣營でアキシが部下と軍議を擬らしてゐる處を寫し、次いでイスラエル王サウルがヨナタン、アブネル等と戦鬪の準備をしてゐる處を描き、そこへペリシテ軍が襲撃して來ると言つた風な常套的脚色法を用ひてゐる。因に聖書の第二十九章第三十章が省略されてゐるのは、それがサウル王と關係がないからで、劇としては此の二章を除かないと、第三幕から第四幕へと劇的葛藤が高潮して行く勢が全く阻害されて了ふのである。かうしてサウル王とその一族は全滅。今やダビデ王の世界が出現する。その事を示すのが第五幕で、サムエル後書第一章によつて、ダビデは少年からさきの戦争の結果を傳へられ、そのサウルに最後の止めを興へたと言ふ少年を斬り殺させてから、サウル王とヨナタンを吊ふ歌、即ち「弓の歌」(一の十八—二十七)を歌ふ。

そして王位に即くためにヘブロン(Hebron)へ旅立つ——  
サウル王の悲劇を書いた作者は、更らに同様に暴君の運命を主題にした悲劇「濱神のアハブ王と敬神のナボテ」を書いてゐるが、之は前劇を小さく變曲したものと云ふべきもので、その舞臺技巧は既に悉く試験済みのものと言つてもよい。題材は列王紀略上第二十一章と第二十二章にあり、第一幕は二十一の一—八、第二幕は二十一の十一—十四、第三幕は十五—十八、第四幕は二十二の一—二十九、第五幕は二十二の三十一—三十七に相當してゐる。

イスラエルの王アハブ(Ahab, der König Israel)はエズレル人ナボテ(Nabot, der Isreelit)にその葡萄畑を譲らせようとするが、承諾しないので、怏々として樂しまない。王が食事も咽喉に通らない程に憤怒するのは、サウル王がダビデを嫉んで物狂しくなると同じことで、その性格は全く同一であるから、同じ俳優が演じたものであらう。そこで王妃イゼベル(Elisabet)の獻策を容れて、ナボテを裁判に掛け、偽證人を作つて、彼を無實の罪に陥れ、遂に石で打ち殺させる。即ち此の種裁判の場も既に度々演出されてゐるものである。只ここで注目すべきはナボテが石に撃たれて死ぬ處で、ト書に「すると二人(偽證人)は人造の石を投げつける」(Da werfen die zwen mit gemachten steinen zu)とあることで、之によつて、ダビデがゴリアテを射殺した時の石も、ダニエルの獅子の穴の石もすべて本物の石ではなく、模造品が用ひられたことを推察しうる。

此のアハブ王の暴舉に對して、豫言者エリヤ(Elijah)にエホバの言(二十の二十一の十七)のであるが、この場合も前劇で豫言者サムエルに神の告げ(「サウル王とダビデ王の迫害」第二幕参照)があつた様に、神自身は登場せず、その聲のみが聞える様になつてゐる。次いでアハブ王はエリヤから神の告げを聽いて、衣服を裂き、王笏王冠を捨て、囊を被り跪いて赦しを乞ふ。之はサウル王が口寄せの婦を通じて、サ



ムエルの靈を見る處と甚だよく類似してゐる。

次いでアハブ王はユダの王ヨシヤパテ (Josphat, der König Juda) を迎へて、ギレアデのラモテ (das Ramot in Gilead) を攻略する相談をする。そして豫言者達を呼んで、神の言葉を問ふ。豫言者達は皆虚言の豫言をする。けれども獨り豫言者ミカヤ (Micha, der prophet) のみは、此の戦が王のため不利であると言つて、エホバの眞の意志を告げるので、彼は牢獄に投ぜられる。即ち此の場もダニエル劇でネブカデネザルが法術師や魔術師に夢占ひさせ、更らにダニエルにその眞相を説き明かされる場面を思はせるものがある。かくて終幕で先づスリア軍 (Die Sier) が戦闘準備をしてゐる處を示し、次いでアハブ王が之と對抗しようとしてゐる處へ、スリア軍が攻め込んで來て、激戦となり、ヨシヤパテ王は逃れ、アハブ王は射殺される。そしてその戦争の結果は副人物であるアハブ王の家臣二人の對話によつて知らされてゐる。だから此の場も言ふ迄もなく最早や幾度となく用ひられた演出法によつてゐる。

かくの如くザックスの聖書劇は「サウル王とダビデ王」を絶頂として、それ以後は最早や老熟期に這入つてゐると言つてもよいであらう。だから此の「アハブ王とナボテ」の出來た翌日 (十月五日) に書かれた「メビポセテ」は明かにその内容から言つても、形式から言つても、聖書劇の結辭とも言ふべきものである。内容はサムエル後書第九章を對話化したもので「サウル王とダビデ王」の後日譚であり、形式は前後に口上役の序辭と結辭とを附した一幕物で、最も單純な工匠歌人劇である。始めサウルの下僕デバ (Ziba) と口上役が出て、サウル一家が滅亡して、ダビデの治世になつたことを話し合ふ。それからダビデ王が現れ、神に厚く感謝した後、サウル一族の中で生き残つてゐるものがなつかしく訊く。デバがヨナタンの子メビポセテの話をする。彼は跛者である。ダビデはデバに命じて、彼を呼ばせる。かつ口上役をし

て彼のための家邸を求めさせる。やがてダビデは呼ばれて來たメビポセテに、サウルの持ち物一切を返すと言ひ、終生自分と食卓を共にする様にと命ずる。デバは十五人の子と二十人の家來とで、メビポセテに奉仕すると申出る。そこへ口上役が歸つて來て、食卓の準備が出来たと傳へるので、ダビデは一同を連れて退場する。だから之は最早や劇と言ふより一種の儀式である。寔に聖書劇の結末を飾るに相應しい式的演技である。事實又此の中に述べてある。ダビデ王が神に感謝し、ヨナタンの子メビポセテに恩恵を施す心境は、老詩人自身が達した敬虔な人道愛の精神に相應するものであつたであらう。それとともに詩人は漸く自己の詩藻の枯渇しつつあることを意識しせざるを得なかつたばかりではなく、老年の衰弱が日とともに加はるのを嗟嘆して、同年 (五十七年) の十一月五日彼の誕生日には Ein Klagesprech über das schwer alter (對話、老弱の嗟嘆、前篇第七章参照) を書いてゐるのである。正にその言葉の通り、五十七年度に於ける作者の劇詩創作は此的一幕物を最後として、翌五十八年一月迄全く休止してゐる。されば此の作品は名實ともに作者の圓熟期と老熟期とを劃する式辭とすることが出来る。

尙此の年の聖書劇としては「ヨハネと基督の受胎と誕生」があるが、之はルカ傳第一章第二章三十九 (イエス宮参り迄) に加ふるに、マタイ傳第一章 (ヨセフに對するガブリエル天使の受胎告知) 及び第二章 (三王者とヘロデス、三王者の禮拜、聖家族埃及行、ベツレヘムの嬰兒塵殺) を配してゐる一種の降誕祭劇であり、例によつて極めて忠實な聖書の對話化であるに過ない。只最後の第九幕、嬰兒塵殺の場、泣き叫び逃げ廻る母親達から、幼兒 (恐らく人形) が奪はれ突き殺され壁に投げつけられる處を實演してゐるのは、此の作者としては思ひ切つた脚色振りである。それがため作者は此の劇を喜劇とも呼び、又悲劇とも呼んでゐるのであつて、ハンス・ザックスは結局劇物語全體

の興へる最後の印象が明るく楽しいものであるか、暗く悲しいものであるかによつて、喜劇悲劇の區別を立ててゐたことが出来る。扱て従來見て來た様に、聖書劇の他にハンス・ザックスが好んで脚色したものは、英雄傳説であるが、その典型的代表作とも言ふべきものは、矢張り此の年に書かれた次の二篇の悲劇であることが出来る。

Tragedia mit 19 personen zu agieren: Des Königs Ciri geburt, leben und endt, und hat 7 actus. (チルス王の誕生、生涯及び最後。1557, 6, 30)

Tragedia, mit 17 personen: Der hörnen Sewfried, ein son König Sigmunds im Niderlandt, und hat 7 actus. (和蘭王シグムントの王子、角質のソイフリード。1557, 9, 14)

「チルス王の誕生、生涯及び最後」は作者所藏の希臘の史家ヘロドトス(Herodotus, der griechisch geschichtschreiber)の Von den Persier und vilen andern kriegem und geschichten. Deutsch von H. Boner, 1535, Stuttgart. を主として、羅馬の史家 Justinus の Des Geschichtschreybers Justini wahrhaftige Hystorien. Deutsch von H. Boner, 1531, Augsburg bei H. Steyner. を副として、脚色されてをり、その筋書はほぼ次の如きものである。

メディアの王 (der König Medie) Astiages は不思議な夢を見たと言つて、宮内卿 (der hofmeister) Harpagus に相談する。そして卿の勧めで、口上役を遣つて占師を呼ばせる。豫言者が來ると、王は夢物語をする。王女 Mandanes が小用をしたら、その小水がアジア中に氾濫したと云ふのである。すると Kiron と云ふ易者が、それは王女が男子を出生し、その子が亞細亞を支配し、王をも追放するやうになることであると言ふ。それを聞くと王は、丁度ライオス王の様に、非常に恐慌をきたす。だが宮内卿ハルパグスはその豫防策として、王女

を地方の名も無い貴族に降嫁させて無力なものにして置けば、安全であると言ふので、王も喜んでその策を容れる。次いで二人の侍臣 Flacon と Silon が出て來て、王女が身分の低いヘルシャ人 Cambises と結婚したことを怪んでゐる。此の二人と入れ違ひに、王が宮内卿と豫言者を連れて再び現れる。王は又もや夢を見たと言つて、その話をする。王女の陰門から葡萄の木が生じ、その枝が亞細亞全國を覆うたと言ふのである。豫言者は此の夢も先の夢と同様、王女が妊娠してをり、やがて男の子が生れ、亞細亞の征服者になることであると解く。そこで王は易者に寶石を興へて下らせるが、獨りになると、自分の置位が我が孫によつて奪はれるのを恐れ、王女を呼び返し、子供が生れたら、祕に殺さなければならぬと獨語 (以上第一幕)。

處でこゝで演ぜられてゐる夢占ひの場は、此の劇の次に書かれた「グニエル」や「サウルとダビデ」で更に發展させられてをり、二人の侍臣の對話で物語の筋を運んで行くのも、別に珍らしい構想ではないが、此の幕の事件は全篇の物語の契機をなし、第二幕と緊密な關係を持つてゐる丈に、全體の構成から言つて、甚だ重要な意義を持つてゐるのである。

だから第二幕では先づ、先の二人の侍臣の對話で、王女がお産のためにペルシャから歸つて來てゐることが知らされる。女房達が立ち騒いでゐるのは、臆てお産があるからであらうと言つて、二人が去ると、宮内卿が男兒出生の報を傳へる。とそこへ王が赤坊を抱いて來る。そして宮内卿に赤坊を渡して、祕かに殺すことを嚴命する。王が去ると、卿は赤坊を眺めて接吻し、哀憐の情に堪へかねてゐる。すると牧夫 Mithates が來る。そこで卿は彼に赤坊を森の中へ捨てるやうにと頼む。場面變つて牧夫の妻 Cino が夫の歸るのを待つてゐる。彼女は丁度死産した處で、今その子を葬らうとしてゐるのである。とそこへ牧夫が赤坊を抱いて歸つて來る。そして夫婦は美しい可愛らしい男の子

を殺さなければならぬのを悲しむ。牧夫はその子が王女の子ではないかと疑ふ。遂に細君は自分の死産した子供を身代りにして、此の子を助けようと言ふ。そこで二人は自分達の子供を葬つておき、検視人が來たらそれを堀り出して見せることとする。次いで宮廷では王が宮内卿から、森の中で赤坊の殺された事が、家臣によつて確認されたと言ふ報告を受ける(以上第二幕)。此の幕は「不幸な女王ヨークスタ」の第一幕、ライウス王が幼児エデプスを殺させる處と同一趣向であるが、その脚色法に於ては更らに一段の進境を示してゐる。「ヨークスタ劇」では王が王子の誕生を喜んでゐると、メルクルが現れて、生れた子は父王を殺すものであることを告げる。すると王は急に決心して、侍臣に幼児を殺すことを命ずる。そして王が事情止むを得ないことを述懐してゐると、早くもかの侍臣が子供の心臓を劍の先につけて現れ、命令が實行されたことを復命する。即ちそこでは言はば全く事務的に事件が運ばれてゐるに過ぎない。之に反して此の劇では第一幕で生れて來る子供の運命を詳細に知らせ、次いで幼児そのものを登場させて、それを中心に王、宮内卿、牧夫夫婦等の心理の動きを人情味豊かに描寫してゐるのである。之は「ヨークスタ劇」以後赤兒——恐らく人形——が舞臺で用ひられるやうになつたため、ザックス劇の子役に關する特記すべき進歩と言ふべきであらう。しかも此の子役は次の幕になると、本物の少年となつて登場して来る。

處で赤坊のその後の状況は、かの牧夫夫婦の對話で示される。彼は Cirus と呼ばれ、既に十二歳になつてゐる。自らにして高貴な品位を具へ、子供仲間では何時も王様に選ばれる。二人がそんな話をしてゐる處へ、かの侍臣の一人フラコンが來て、牧夫とチルスに王からの出頭命令を傳へる。かくて例の裁判の場となる。王が牧夫とチルスを呼び出す。そしてチルスが州長の息子を毆つた件で、告訴されてゐることを告げ、その不法行爲を取り調べる。それに對するチルスの答辯は

實に堂々たるものである。彼は仲間の者から王に選ばれたのだから、命令に従はない者を罰するのは、當然であると言ふ。王は少年が唯者でないことを見て取り、牧夫を一隅に連れて行つて、子供の素性を問ひ糺す。牧夫は始めの中何處迄も自分の子供であると申立てるので、王は拷問に掛けさせようとする。侍臣達が彼に襲ひかかる。と牧夫も遂に觀念して、事の真相を告白する。即ち此の場の少年チルスの言葉は、僅に十六行の臺詞に過ぎないけれども、立派に一つの性格を示すものとなつてゐる。勿論子役を使用してゐる場合は今に始まつたのではない。特に五十三年度に書かれた作品「モーゼの少年時代」「エバの等しからざる子等」「祭司エリとその不良兒」のサムエル「イサクの獻納」のイサクは何れも少年であるから、當時演技に巧な少年俳優が居つたのではないかとも思はれる位であるが、その後は五十六年作「オルヴィールとアルツス」の中のオルヴィールの二人の子供を見る丈で、それも全く無言役である。だからこのチルスに至つて、子役も文字通り健全に成長して來たと言ふべきであらう。しかも子役はこれ以後ザックス晩年の作品に於て屢々用ひられてゐるのである。

扱て王は直ちに宮内卿を呼ばせる。と口上役が直ぐ卿を連れて來る(此の間未だに時間的間隔が無視されてゐる)。そして卿の證言によつて、當時王女の子供が殺されずに、牧夫に渡されたことが明かになる。王は表面王女の子供が無事に育つたことを喜んで見せるけれども、心中では、自分の命令を實行しなかつた卿に對して、激しい怒りに燃えてゐる。彼は卿の息子を呼んで、神に感謝の犠牲を獻げさせる様に、宮内卿に命じ、同時に卿を夕食に招待する。だが卿が退下すると、王は彼の息子を呼んだのは、息子を殺し、その肉を父親に饗應するためだと獨語する。そこへ卿の息子が來る。王は直ちに「お前が自分で犠牲になるのだ」と言つて、劍に手を掛け乍ら、彼を連れ去る(以上第三幕)。此の幕は同じ裁判の場でも、非常に劇的に構成されてゐる。

そしてタンタルス一族の間に行はれた、子供の肉を父親が食べると云つた殘虐無慚な事件を暗示して、怪奇極まる劇的葛藤を次の幕に引き繼いでゐるのは、巧な脚色法と言はざるをえない。

處で王と宮内卿の夜宴の光景は、例によつて二人の侍臣の對話で知らされる。その對話によると、今奥で宮内卿は王と楽しく會食してゐる。だが料理人から聞いた處では、その御馳走は前代未聞のものらしい——やがて王と卿とが食事を終へて出てくるので、侍臣達は下らうとする。王は今食べた料理が何の肉であるかわかるかと訊く。卿は久しく此處美味しい御馳走を食べた事がないと答へる。すると王は侍臣に命じて肉の皿を取り寄せる。卿はその皿を見せられると、深い溜息を吐くが、陛下のなさることが悪からう筈はないと答へる。そして子供の殘骸丈でも葬つてやり度いからと言つて、その皿を貰つて行く。彼が去ると、王は又もや豫言者を呼ばせ、今後チルス如何にしたらよいかと尋ねる。豫言者キロンはチルスが子供の間に王位に即き、子供達を自由に支配したからには、かの夢は既に實現されてゐる。今後最早や心配することはないと答へる。但し萬一を慮つて、彼を波斯の父母の元に返し、メディアから遠ざけておくやうにと言ふ。王は早速チルス呼び、供人を附けてやるから、父母の元へ歸るやうにと命ずる——（以上第四幕）。

それから第五幕六幕七幕は凡て作者得意の戦闘の場面である。かの宮内卿ハルバグスは十三年の間王に對する復讐の機を覗つてゐたが、今やその時が來たとなし、二十五歳になつたチルスに、鬼の腹に詰めた密書を送り、謀叛を勧めてやる。密書を受けたチルスは、メディア王が自分を殺さうとしたことを知り、親父カムピセスと相談し、兵を率ゐて、ペルシャからメディアへ出發することとなる。それと聞いたメディア王アステイアゲスは、之も軍隊を召集させるとともに、かの偽りの豫言をした豫言者達を殺す様に命ずる。既にしてチルスは軍を

進め、ペルシャの騎士達を激勵してゐる處へ、アステイアゲス王が攻めて來る。だが王は宮内卿の寢返りによつて激戦中に捕へられる。チルスは遂に王から王冠を受け、王を隠退せしめる（以上第五幕）。既にしてチルスは亞細亞全國を従へたが、只スキテイの國（Schiier Landt）の女王 Thoniris のみが屈しないので、彼女を征伏するために軍議を凝らす。そしてスキテイ國へ侵入し、多くの食糧と酒とを置いて退く。そのあとへスキテイの王子 Sargapis が進軍して來て、酒食を見附け、皆々それを喰ひ酔つて寢込んで了ふ。とチルス軍が攻め込んで來て、又戦闘となり、スキテイの王子は殺される（以上第六幕）。スキテイの女王トミスリスは激怒し、一端退却すると見せてチルス軍をおびき寄せ、伏兵と挾撃して、遂にチルスを倒す。女王は我が子の復讐をするために、チルスの首を取り寄せ、血の這入つた鉢の中へそれを浸す——（第七幕）。

此の劇は以上見た通り、夢占ひ、裁判、戦闘の場面から構成されてゐるから、格別新しい演出法を用ひてはゐないけれども、これらの場面の取扱ひ方や、場面と場面との緊密な連絡の取り方に於て、最も圓熟した作品とすることが出来る。そしてこの「チルス王」の生涯を劇化したことが、聽て作者に、ゲルマンの英雄ジークフリート傳説を脚色する機因と自信とを與へたものと思はれる。即ち「和蘭の王子、角質のゾイフリート」がそれである。

處で此の「角質のゾイフリート」は作者の數ある英雄傳説劇の中で、その題材から言つても脚色法から言つても、最も異色のあるもので、言はばザックス劇の特質を大寫しに寫し出してゐる觀がある。従つてその原典が何であり、それが如何様に劇化されてゐるか、又如何にして上演されたかを究明することは、劇詩人としてのハンス・ザックスの價值、及び當時の工匠歌人舞臺の眞相を闡明にする上に、多くの示唆を與へてゐるのである。だから此の劇程にザックス研究家によつて度

々問題にされてゐるものは、他にその例を見ないのでみならず、そこには色々興味ある解釋が論議されてゐる。然し乍らその原典及び原典との比較研究に就くは Julius Tittmann (Vgl. Dichtungen von Hans Sachs, III, F. Dramatische Gedichte von J. Tittmann, S. XXVIII ff.) W. Grimm (Vgl. Die Deutsche Heldensage, S. 349 f. 1889) Bruno Philipp (Vgl. Zum Rosengarten, Halle, 1879, XXXIV) 及び Ely Steffen (Vgl. Euphorion B. X. S. 505—518 u. S. 759—776, Quellenfragen für den Hürnen Seufried von Ely Steffen aus Schwerin) 等の所説に對して Karl Drescher (Vgl. Studien zu Hans Sachs, I. Hans Sachs und die Heldensage. Berlin, 1890 u. auch Euphorion XI. Noch einmal der Hürnen Seufried des Hans Sachs von Karl Drescher in Bonn.) の説が甚だ詳細を極めてをり、正鵠を得てゐる様に思はれる。又 Max Herrmann のハンス・ザッツの舞臺再構成説は正に此の劇を中心にして展開されてゐるのであらう (Vgl. M. Herrmann, Forschungen zur deutschen Theatergeschichte etc.) 之に對する論議として Albert Krüster も此の劇の上演法を詳細に論述してゐる (Vgl. A. Krüster, Die Meistersingerbühne des 16. Jahrhunderts, S. 98 ff.) 程であるから、今茲ではそれら諸家の説を参照し乍ら、此の劇の諸問題を攻究して見ることにする。

先づ此の劇がニールンベルクで千五百三十年及び四十年と二回刊行されてゐる Das Lied von Hürnen Seyfrid (角質のシীগフリート (歌) を主とし、千四百七十七年及び九十一年に出版された Das Heldenbuch (此の中には Ornit, Hugdietrich, Wolfdietrich, Der große Rosengarten, Der kleine Rosengarten が收められてゐる) を從として脚色されたもの) 作者は Nibelungenlied に就ては未だ何等關知する處がなかつたことは確實である。だから主人公の名前 Siegfried (od. Seyfrid, Sifrit) が Sewfried (od. Seufried) となつてゐるのも、民間詩人である作者が、サントフランケン地方の民間に

通用してゐたものを、そのまま採用したからであらう。

劇は例の通り口上役の簡單な梗概の紹介があつて、和蘭王シীগムントが二人の顧問とともに登場 (König Sigmund auß Niderlant gehet ein mit zweyen räten.) 評定の場から始まる。王は悲し相にして腰を下ろし、息子ゾイフリートが放縱無頼で亂暴狼藉を事とし、諸國を荒し廻つて少しも官中の禮儀作法を顧みないので嘆き、如何にしてたら彼を矯正することが出来るかと尋ねる。顧問 Dietlieb (此の名は Heldenbuch のローゼンガルテンから取られたものである。) と Hortlieb (此の名はニートリープの類推から作られたもの) かの「箱の中の若者」の二人の高利貸の名前が Hortus, Ortus とあると同様な命名法である。尙此の種の命名法は到る處に見られ、作者は無数の含畜に富んだ固有名詞を造つてゐる。) は交々ゾイフリートを暫く他國の宮廷へやつて作法を見習はせたがよいと勧める。そこで王は口上役をして王子を呼ばせ、ライン河畔のウォルムス (Wurnbs) の Gibich 王の宮廷へ行く様に命じ、百人の供人を付け、寶石と金とを與へよと云ふ。ゾイフリートは喜んで承諾するが、自分は若くて強く、獨力で十分旅をして行くことが出来るからと言つて、供人も旅金も辭退する。では王城の前迄送つてやらうと、王は皆々とともに退場。

此の第一幕第一場の構成は既に「フロリオとビアンツェフォラ」(1551, 4, 17) に於て、フロリオの戀愛を阻止するために、王と王妃とが彼を他國へ留學させようと相談する場面と甚だ近似してゐる。且つゾイフリートが亂暴者として紹介されてゐるのは、作者が一般に獨逸古傳説中の英雄 Eck, Hildebrant, Laurin, Seifrit, Fasolt, Dietrich von Bern 等を基督教的秩序と愛とに反して、たえず血腥い争鬪に耽つてゐるものとして (Vgl. Der Fechtspruch, 1545, 7, 24. die weil es kostet blutes vil / wider christlich ordnung und lieb; / dennoch ein stück vom kampf noch blieb. / Viel helden kempfen im freien felt / und ritten zam

in finstre welt, / als Eck und der alt Hildebrant, / Laurin, Hirnen Seifrit  
genannt, / König Fasolt und Dietrich von Bern / treten einander Kampf  
Gevorn.)、當時のフマニスムスの精神と文明開化を誇りとする市民的  
教養の立場から、快く思つてゐなかつたからで、之がために此の場面  
は英雄傳説的な豪快味を失つて、宛も十六世紀の市民的家族會議風の  
調子を出してゐるのである。更らにジグムントが息子を流立させる  
時、百人の供人と旅金を與へようと言つてゐるのは、「ジグムント  
トの歌」には見られない臺詞で、寧ろ「ニーベルングンの歌」に同じ  
趣旨の言葉があるため、作者が此の大敘事詩を知つてゐたとする説が  
あるけれども、それは當らない。と言ふのは此の様な場面で、王をし  
て王子に供人を連れて行けと言はせてゐるのは、此の作者の慣例と言  
つてもよい程屢々見られる臺詞で、かの「フロオリとビアンツェフォ  
ラ」第一幕にも「チルス王の誕生、生涯及び最後」第四幕等々にもあ  
り、必ずしも「ニーベルングンの歌」を必要としないからである。否そ  
ればかりではなく「ニーベルングンの歌」では、ジグムントが十  
二人の武士を連れて行くことになつてゐるのに、茲では供人も旅費も  
持たずに出發するのであるから、此の場の趣向は全く作者独自のもの  
である。そして作者が何故にゾイフリートをして父王の好意を辭退す  
るやうにさせたかは、その方が亂暴者で既に諸國を荒し廻つてをつた  
彼の性格に合致するのみならず、彼が次の場面で鍛冶屋の弟子になる  
ことと矛盾しないためである。之は畢竟劇作家ハンス・ザックスが劇  
の筋を合理的に運ぶために構想したもので、言はば原典の言はざる處  
を独自の趣向で補つてゐるのである。第一幕第二場は鍛冶屋の場であ  
る。鍛冶屋が小僧と仕事の手筈を話してゐる處へ、ゾイフリートが戸  
を叩く。小僧が取り次ぐ。ゾイフリートが這入つて来て、親方に使つて  
くれと頼む。親方は試みに槌を與へて、鐵を鍛へさせる。彼は槌が小  
さ過ると言つて、大きい槌を貰ひ、猛烈な力で鐵砧の上へ打ち知す。親

方がそんな打ち方は役に立たないと言ふ。ゾイフリートは精出して働  
けと言つたぢやないか、何を苦情を言ふことがあるかと答へる。小僧  
が此奴氣が變だぞと言ふものだから、彼は親方と小僧を槌の柄で殴つ  
て、追ひ出す。がそのあとに直ぐ「二人は又戻つてくる」とト書にあ  
る。(Er schlecht mit dem hammerstel meister und knecht hiernaß,  
Die zwen kummen wider.) そして二人はあの恐ろしい弟子をどうし  
たら、追ひ拂ふことが出来ようかと相談してゐる。だからト書には指  
定されてゐないけれども、二人を追ひ出すと、ゾイフリートが舞臺を  
去つたものとしなければならぬ。二人は相談の結果、ゾイフリート  
を森の炭焼きの處へ、炭を取りにやれば、森の洞穴に大蛇が住んでゐ  
るから、それに締め殺されるだらうと言ふことになる。そこで親方は  
大聲でゾイフリートを呼び入れ、籠を渡して、炭を取つてくる様に吩  
附ける。彼は承知して早速出掛ける。あとで親方と小僧は、もう歸つ  
て來ないでくれればよいが、とか吃度大蛇に食はれるから、遠くから  
蹤いて行つて見物してやりませうとか言つて、退場する。

以上第一幕は「ジグムントの歌」第一節から第七節一行迄に相當  
し、屢々同一の文句が使用されてゐるから、此の劇の原典が「歌」で  
あることは最早や疑を入れない。處で之が如何様にして上演された  
か？ その第一場に就ては既に屢々同様な舞臺面が用ひられてゐるか  
ら、問題は無い。始め王は顧問達口上役を連れて、奥舞臺の背後(A)  
から登場(Gehet ein.)して、奥舞臺の一方にある(又は侍臣の持參  
した)椅子に掛ける。次ぎに口上役は奥舞臺背後Aから矢張り、ゾイ  
フリートを連れてくる。と言ふのが彼も亦同じ官廷の人物であるから  
であるが、口上役がゾイフリートを迎へに行つて連れて來る迄の時間  
的経過を満すために必要な臺詞も所作も與へられてゐないのは、相變  
らず時間關係を無視してゐると言はなければならぬ。そして最後に  
王は王子を見送るために家臣を連れて、前面舞臺(C)から退場する。

ここでケスターは奥舞臺左右兩側にも出入口があつたものとして、ゾイフリートを側面の出入口の一つから登場させて、王の登場する場所と異なる様に想定してゐるけれども、必しもその様な區別をする必要はない。場面は王が政務を執る室であるから、宮廷人ならば同一の戸口を用ひて差支へない筈である。又ケスターは最後に一同が退場する戸口を、奥舞臺背後(A)に取つてゐるけれども、それでは旅立つて行くゾイフリートを見送る所作を表すことが出来ない、即ち従來の例から言つて、城外へ出入することを現はすためには、凡て前面舞臺が用ひられてゐるのである。

次に鍛冶屋の場では、鍛冶屋と小僧が奥舞臺へ登場する(Gehen ein)。彼等は鍛冶に必要な鐵砧や大小の槌を運んで出て来て、奥舞臺宜しき所に置く。ゾイフリートは前面舞臺へ出て来て、舞臺へ上つた處に設けられてゐる門扉を叩く。そしてその門扉から鍛冶場、即ち奥舞臺へ這入つてくる。ここで卜書に Sewfriedt geht ein. とあるのは勿論此の門を這入る意味である。やがて彼は親方も小僧も此の門の外へ追ひ出す。そして彼自身は奥舞臺背後へ這入る。恐く此の時彼は先の鍛冶の道具類を取り片附けたものであらう。従つてさきの二人が戻つて来る迄の時間的空白がそれで滿される。すると先の二人がCから又出て来る。小僧は籠を持つてゐる。そして親方は大聲でゾイフリートを奥舞臺へ呼び出す。同時に小僧は親方に炭籠を渡し、ゾイフリートは親方からその籠を受取つて、門から出て行く。と二人もあとを追ふ様にして前面舞臺から退場。

第二幕は森の場である。ゾイフリートは籠を持つて来て(Sewfriedt kumbt mit dem korb,) あちらこちらと歩く。彼は森の中を歩き廻つて、炭焼きを探したが、見附からない。だが藪陰に岩の洞穴が見えるから、あの中に炭焼きが住んでゐるかも知れないと獨語する。そして「洞穴の方へ行つて、中を覗くと、大蛇が中から這ひ出して、彼に襲

ひかかる。彼は籠で防ぎ、次いで劍で防ぎ、互に格闘する。遂に大蛇は逃げる。二人とも走つて退場。ゾイフリートは舞臺裏で、宛も大蛇を焼いてゐるかの様に煙をたてる。それから戻つて来て言ふ」と言ふ長い卜書があつて、ゾイフリートは大蛇の角が溶解して泉から出る小河の様に流れたこと。それに指を浸したら、指が角質になつたこと、そこで全身にその液體を塗つてすつかり不死身に變つたこと等を獨語する。即ち例によつて上演不能の事件は間接敘法によつて知らされてゐるのである。なほゾイフリートはかうなつては最早や鍛冶屋に奉公する氣にはなれないから、ヴォルムスへ行つて、宮廷の作法を學ぶつもりであるが、噂に聞くその美しい王女 Crimhildt と結婚したいものだと獨語してから退場する。しかもこの最後の言葉「是迄の亂暴を止めて、一生懸命宮廷の作法を學ぶ」(Will mich abhon meiner grobn weis, / Hofucht lernen mit allern Feis.) ために、ヴォルムスへ行くと言ふのは、原典「歌」には見られない文句で、作者が劇物語の前後を照應させるために、特に附加した新趣向である。

かくてヴォルムス城中の場となる。Gidich 王は口上役とともに登場。息女クリムヒルトを呼ばせる。口上役が去ると、ゾイフリートが来る。彼が宮廷に奉仕したいと申出ると、型の如く身分才能等が問ひ糺される。そして王と固めの握手が交はされ、彼は宮中に留まることとなる。そこへ口上役がクリムヒルトを連れて来る。王は王女に此れから武術試合が行はれるから、屋上の物見櫓(zu oberst an der zinnen)で見物するやうにと言ふ。又ゾイフリートには試合に参加する様に勧める。ゾイフリートが喜んで参加し度いが、馬も鎧も楯も槍も持つてゐないと答へるので、王はそれらのものを與へようと言つて、彼を連れて退場する。其の後へ引き續いて「王女クリムヒルト言ふ」と卜書にあつて、クリムヒルトが屋上の物見櫓から試合を見物してゐる時の獨白が記されてゐる。だから此處で場面が變つてゐるものと思はな



ければならない。彼女はゾイフリートの勇ましい姿を遠く望見して、痛く氣に入つたと言ひ、彼の武運を祈る。その中に彼女は大蛇が飛行して来る (In dem Feuert der trach daher.) のを認める。大蛇は物凄い形をし、巨大な怪物で、口から火を吐き、空中を飛んで物見の上の彼女をめぐらして舞ひ下りてくる。彼女がさう言つて恐怖し、助けを呼ぶ中に、大蛇が来て、彼女の手を取り、彼女を連れて急いで走り去る (Der trach kumbt, nimbt sie bey der hendt, laufft elendt mit ihr ab.)。クリムヒルトの助けを呼び、父母に別れを告げる悲しい叫び聲が續く。大蛇が乙女を連れて行つて了ふと、ギビツヒ王とゾイフリート、口上役が駆け込んで来る。王は王女が空中を飛んで行つたのを見たので、悲嘆にくれる。口上役がそれを慰めて、大蛇は決して姫に危害を加へるやうなことはない、極めて作法正しくオリエントの砂漠の方へ連れて行つたのを見たから、そこへ行けば必ず無事息災の姫に逢ふことが出来ようと助言する。王は王女を無事に救へ出して来るものには、王女を與へようと言ふ。すると直ちにゾイフリートがそれに應ずる。大蛇が砂漠の中の岩山へ飛んで行つたのを知つてゐるから、屹度王女を助け出して來ませうと言ふのである。王は喜んで彼を祝福する。かくて皆々退場。

此の物見櫓の場は然し乍ら、全く作者の創意によるものである。「ジグフリートの歌」ではクリムヒルトが何の目的もなく只窓際まはに立つてゐると、大蛇が彼女を攫つて行くことになつてゐるけれども、ここでは彼女が武術試合を見るために、屋上に立つてゐることにしてある。そして此の方が一層劇的であることは言ふ迄もないことである。又クリムヒルトがゾイフリートに好感を抱いてゐるのを示してゐることや、大蛇の行方を口上役もゾイフリートも知つてゐることは——尤も之は餘りにも空間關係を無視した構想ではあるが——凡て次の幕のための伏線であり、原作の不備を補ふための作者の用意周到な獨自な着想に

よるものである。

處で此の幕は「歌」の第七節二行から第十八節迄と第三十二節に相當するものであるが、ここでも作者は原作の簡素な敘事物語を、劇的に構成するために、それぞれ必要な劇的契機を考案したり附加したりしてゐる。しかもそれが上演可能な範圍で取り上げられてゐることは、かのゾイフリートが大蛇を焼いて、角質の肌はだになる場面が、舞臺裏で行はれる様になつてゐることも知りうるであらう。何れにしても此の大蛇退治の場は既に「オルヴィールとアルツス」(1556, 12, 31) 第四幕に於て演ぜられてゐるもので、その恐ろしい大蛇の假装——二枚の翼、鐵の齒、長い毒のある尾、火を吐く口——は當時非常に人氣のあつたものと見えて、今後も「アンドロメダとペルゼイス」(1558, 3, 28) 「フェーブスとダフネ」(1558, 3, 29) 「アレキサンダー大王」(1558, 9, 27) 等で用ひられてゐる(後述第十五章参照)。然らば此の大蛇の住んでゐる「藪陰の洞穴」は舞臺の何處にあつたか? 之に就てはケスターは矢張り奥舞臺に「せり出し」穴があつて、そこから大蛇が出入し、又ゾイフリートが大蛇を焼いた煙もそこから立ち昇るやうに装置されてゐたものとし、ヘルマンはマルタ教會内の内陣と聖器室とを繋ぐ戸口がそれ使用されたものとしてゐる。然し之を一般的に言つて、此の場合も奥舞臺一方の側面に出入口があつたとすれば十分である。その出入口の前に、之も既に度々用ひられてゐる敷疊や大岩を装置し、又そこから煙を送り出せばよいのである。それらの装置が幕の背後から押し出されると、ゾイフリートが前面舞臺へ登場して來て、森の中を探す恰好で舞臺の上を暫く往來し、奥舞臺側面の岩陰を覗き込む。すると大蛇が出來て來て格闘となり、兩者は岩陰へ這入る。暫くして岩陰から煙がたち、ゾイフリートが又戻つてくる。そして彼はヴォルムスへ行くために前面舞臺、來た時とは反對の側から退場する。

次の場はギビツヒ王の廣間であるから簡單である。王、口上役、ク

リムヒルトは勿論奥舞臺背後から登場し、ゾイフリートは前面舞臺から来る。そして彼等はすべて試合の準備をするために奥舞臺の背後へ去る。次いでクリムヒルトは物見櫓へ登る恰好で前面舞臺へ出てくる。マルタ教會なら説教壇へ昇ることも考へられるが、普通なら前面舞臺がそのまま屋上と見做される。彼女は前面舞臺の一端に立つて、観客席上を越して遠く武術試合を見てゐる形。すると前面舞臺の反対側を區劃する幕の陰から、竿の先きに附けた大蛇の假装が、彼女の目につく様に高く差し出される。そしてそれが卸されると、大蛇が彼女と反対の側から前面舞臺へ踊り出して来て、彼女を連れて同じ道を急いで走り去る。とそれとは又反対の側からギビツヒ王、口上役、ゾイフリートが前面舞臺へ馳けつけて来る。そして彼等の退場口も来た時と同じ道である。だからここでは奥舞臺は用ひられる必要はない。従つてケスターが奥舞臺背後から此の蛇體が高く掲げられたのであるとしてゐるのは、實情に添はない。ヘルマンも此の大蛇の空中飛行を實演するために、奥舞臺の背後で梯子を用ひて、大蛇に扮した役者が幕の上から一時姿を現はしたものだとしてゐる。だが彼はそれ以上に、マルタ教會の説教壇が此の場合用ひられたのだと主張する。然し説教壇を用ひるとすれば、クリムヒルトがそこから武術試合を見物し、大蛇を認めて舞臺へ逃げ下りて来ると、そこで大蛇に攫はれて行くとした方が一層合理的である。若しヘルマンの言ふ様に、大蛇に扮した役者が演技の始まる前に、そこに匿れてゐて、一瞬そこから姿を現はし、それからクリムヒルトがその恐ろしい形相を獨白してゐる間に、その説教壇の階段を下りて来て——クリムヒルトが「空から下りてくる」(Er lest sich herab aus dem Luft)と言つてゐるから——前面舞臺の下に達し、そこから舞臺の上へ上つて来たものとすれば、大蛇役者が此の場面の始まる前に、観客の目の前で、説教壇に登つて行かなければならぬと言ふ難點がある。

第三幕。大蛇がクリムヒルトを連れて来る。彼女は坐つて泣いて、兩手を振り、今から砂漠の中の岩山で何の喜びも無く、若い生命を空しく過ぎなければならぬと嘆く。大蛇は彼女を慰めて、自身の身の上を物語る。それによると、彼も元來希獵の王子で、戀の鞘當てから魔法にかけられて、大蛇にされたので、滿五年を過せば、もとの身體に返るから、その時は彼女の勞苦も立派に償ふことが出来るのである。だがクリムヒルトは只管に父の家へ歸して呉れと頼み、その代り五年経つたら屹度あなたの處へ参りませうと誓ふ。大蛇は勿論彼女を手放すことは出来ないと言ふ。五年の後最初に相逢ふ婦人と彼は結婚しなければならぬのである。だから此の洞穴に閉ぢ込めて置くのだと言つて、大蛇は乙女を連れて去る。此の大蛇の物語は原作によると、もつとずつと後段第百二十五節で歌はれてゐるのであるが、作者はその順を變更してここに挿入したもので、しかも大蛇が希獵の王子であると言ふのは、かのヘルデンブーフ中で英雄 *Engelrich* や *Wolfdietrich* が希獵出身になつてゐることから示唆されたものであらう。

大蛇とクリムヒルトが去ると、武装したゾイフリートが出て来る。前の場面から既に四年を経過してゐるのである。彼は四日四晩飲まず食はず、岩山の狭間を探し廻つたが、山は峻しく道は無く、大蛇を見附けることが出来ない。だがそこへ王冠王服寶石で身を飾つた矮人が近づいて来るのを認める。侏儒 *Engel* (*Engel*) はゾイフリートの名を呼んで親し相に挨拶する。彼は怪しんで、どうして自分の名を知つてゐるかと問ふ。侏儒はあなたの事はよく存じてをります。和蘭の王子で、父の名はジグムント、母の名は *Sieglinga* と言はれませうと答へ、何故此處恐ろしい所へ來られたかと尋ね、ここには大蛇が住んでゐて、或る王女を捕へ、晝夜を分かつた番をしてゐると教へる。ゾイフリートはその王女を救ひに來たのだと答へる。すると侏儒はそ

れが無謀の擧であると言つて、切に思ひ止まらせようとする。だがゾイフリートは道案内をしつて肯かない。遂に侏儒の鬚を擽んで劍を抜いて威す。そこで侏儒はやむなく道案内をすることを承諾するけれども、大蛇の處へ行くには、その前に Kuppen と云ふ巨人を倒し、その持つてゐる鍵を手に入れなければならぬ。しかもその上で恐ろしい大蛇と戦ふことになるのである——と言つて大蛇の物凄いや相を物語る。だがゾイフリートは既に若い頃大蛇を二匹も生捕りにし、尾を以て城壁に吊したことがあると言つて、少しも恐れる色はない。彼は躊躇する侏儒を促して、王女を救ひに先づ巨人クーペロンの處へ案内させる。

以上第三幕は「ジグフリートの歌」第十九節——第三十一節、及び第三十三節——第六十節に相當する部分である。だが之を「歌」と比較する時、作者が如何に注意深く劇的所作の契機を構築してゐるかを知りうる。ゾイフリートが大蛇の棲家を知つてゐて、此の大蛇の岩 (Tachenstein) へ直接尋ねて來ることは、既に前の幕で準備してあり、彼の生國素性が侏儒によつて物語られる経緯、又「歌」の第十九節——第三十節では大蛇が悪魔の手先きとして乙女を地獄に陥さうとしてゐるのを、ここでは大蛇が希臘の王子の化身であるとされてゐること、さてはゾイフリートが大蛇を恐れない理由として、既に二匹も大蛇を生捕りにして城壁に吊したことがあると言つてゐること——因に「歌」の第三十三節では、彼の勇武を歌つて、獅子を捕へて樹上高く吊して晒物にしたとあり、ローゼンガルテンの中では、彼が獅子を生捕りにし尾を以て城壁に吊したとあるから、此の場合作者は後者に依つてゐるわけである——等々は、何れも作者の原作に對する獨創的補正である。しかも上演のための舞臺面は甚だ簡單に仕組まれてゐる。第一場は大蛇の岩である。大蛇が乙女を奪つて來て、洞穴へ連れて行く處であるから、二人は前面舞臺へ登場して來て (Der trach firt die jungfrau

amir)、奥舞臺背後へ退場すればよい。第二場では大蛇の洞穴に行く途中であるから、ゾイフリートは前面舞臺Cから、侏儒は同様Dから來て、二人はAへ這入る。

第四幕、第五幕はゾイフリートと巨人及び大蛇との格闘から、ゾイフリートがクリムヒルトを連れてヴォルムスへ歸還する處迄を取扱つてゐる。即ち「歌」の第六十節から第七十二節迄であるが、格闘の場は既に作者が度々脚色してゐる最も得意な劇的所作であるから、ここでは一面に於て舞臺經濟上原作の敘事的描寫を壓縮するとともに、他面立ち廻りの場を幾度も繰返して、觀客の觀劇慾を堪能せしめてゐる。

巨人クーペロンが大きな鍵を持つて出て來て、空を眺める。彼は天地晦暝、大蛇が狂暴に山を馳け廻つてゐると述べ、昨夜は徹宵して鍵の番をしてゐたから、是から一眠りして來ようと言つて去る。と侏儒とゾイフリートが來る。彼は戰斧で戸を叩く。侏儒は傍に避ける。巨人が「誰だ、洞穴の戸を叩くのは」と鐵棒を持つて飛び出してくる。そして誰が彼をこの荒山へ連れて來たか? 何故室の戸を叩くのかと訊く。ゾイフリートは四年の間大蛇に捕へられてゐる乙女を救ひ出しに來たのだから、鍵を渡せと言ふ。巨人は嘲笑うて、追ひ返さうとする。ゾイフリートは肯かない。遂に格闘となる。先づ巨人が鐵棒で打つて掛る。彼は身を翻へしてそれを避け、劍を抜いて互に戦ふ。巨人の手から棒が落ちる。彼がそれを取らうと、身を屈めると、一撃が加へられる。巨人は屈せず「若僧め、斃ばつて了へ」と、再び襲ひかかる。「貴様こそ粉粉こなこなにしてくれる」と、ゾイフリートは又もや巨人を叩きつける。巨人は棒を落して逃げ去る。そのあとからゾイフリートは「出て來い。鍵を渡せ!」と呼ぶ。と巨人が劍と兜と楯を帯びて再び出て來る。彼は「鍵を寄越せとはよく言つた! お前の生命は貰つてやる。お前を生捕りにして木に吊し、永久に恥を晒させてやる」と

挑戦する。ゾイフリートは「俺には神の加護がある。貴様は悪魔の手先だ」とばかり、再び烈しく打ち合ふ。遂に巨人は倒れ、手足を差し延べて降服する。するとゾイフリートは傷を手中巾で繻帯してやる。それから二人は互に握手を交し、巨人は大蛇の棲家へ行く道を委しく物語る。そしてゾイフリートが勇んで先に立つて行くと、その後から巨人は又もや剣を抜き、彼に斬りつけて、彼を倒す。すると侏儒が彼の身體に隱笠 (die nebel-kappen) を被せる。巨人は彼を突き殺さうとするが、隱笠のために彼の姿が見えないと言つた形。やたらに突き捲つて「彼奴何處へ消え失せたか？」とあちらこちらを探す。その間に侏儒はゾイフリートを抱き起す。と彼は隱笠をかなぐり捨てて、巨人に襲ひかかり「最早や容赦はならぬ」と烈しく攻めたてる。巨人は遂に兩手を差し出して命乞ひをする、自分を殺しては美しい乙女の處へ行くことが出来なくなると言ふのである。でゾイフリートは彼を赦し、道案内をさせる。彼は巨人が色々と大蛇の岩窟や乙女の話をするのを遮つて、今度は巨人を先きに立たせて、侏儒とともに退場する。(以上第四幕)。

之は却々所作に富んだ場面であるが、巨人の役は既にかの「ダビデとゴリアート」の場で試験済みのものであるから、その扮装や演出法がここでも用ひられる。ただ特記すべきことは、巨人が「お前を生捕りにして木に吊してやる」と言つてあることで、此の文句は元來「歌」の方では先に述べた通り、第三十三節ジグフリートの勇武を歌つてゐる處にあるのである。然るに作者は第三幕二場では「城壁に吊るし」と言はせ、ここで「木に吊るし」と言はせてゐる。之は作者が臺詞を書くに當り、如何に細心の注意を以て、原作の用語を利用してゐるかを示すもので、ここでは岩山の巨人の言ふことであるから、木に吊るす方が勿論情況によく合致するわけである。

處で格闘の場は既に屢々用ひられてをり、その方法も委しくト書て

示されてゐるから問題はないとしても、かの隱笠の場面は如何にして演出されたか？ 舞臺は巨人の住居の前である。だから巨人は奥舞臺背後から出て来て、又其處へ這入る。するとゾイフリートが侏儒とともに前面舞臺(C)から登場、奥舞臺背後の幕(A)の處で、戸を叩く。巨人がそこから躍り出して来て、格闘の場となる。やがて彼は又Aから逃げ込んで、今度は甲冑をつけて現はれる。そして再度負けて、前面舞臺でDの方を指差して、大蛇の岩へ行く道を物語る。かくてゾイフリートがDの階段の上に達すると、巨人が背後から打ち倒す。とその附近に逃避してゐた侏儒がすばやく隱笠を被せる。さうすればゾイフリートの身體は階段が舞臺へ切り込んでゐる凹みの中へ完全に匿される事が出来る。そして巨人が彼を探し廻つてゐる間に、彼は侏儒に助けられて、再び立ち上り、笠をとつて、巨人と三度格闘。結局巨人はゾイフリートを案内して、前面舞臺Dから退場する。以上はケスターの想定であるが、奥舞臺に、之迄も度々用ひられてゐる藪壘や岩の装置があつたとすれば、その陰を利用して、隱笠の場面は行はれるのである。

第五幕は愈々大蛇の岩である。クリムヒルトが坐つて悲嘆に暮れてゐる。そこへ巨人がゾイフリートと侏儒とともに現はれる。彼女は非常に喜ぶけれども、又愛人の身の危険を思つて、逃げよと切に勧める。だがゾイフリートは彼女を救ひに來たのだと言つて諾かない。すると巨人が地上に落ちてゐる劍を指し示して、その劍でなければ、大蛇を傷付けることが出来ないと云ふ。ゾイフリートが劍を拾ふために屈むとその隙きを見て、巨人は又もや彼に打つてかかる。彼は劍を拾ふと、巨人の裏切りを烈しく咎める。乙女は泣いて兩手を揉んでゐる。二人の戦闘が續く。かうして遂に巨人は倒される。ゾイフリートはその足を捉へ「粉々になれ」とばかり、眞逆様に千仞の谷底へ投げ落す。それから乙女の方に向つて、もう大丈夫だから安心する様にと慰め、四

日も食事をしてゐないことを告げる。乙女が感謝して彼女の愛を誓ふ。その間に侏儒は樂屋から菓子を山盛りにした金の皿を持つて来る。彼はそれをゾイフリートに奨めて、此れからの戦鬪に備へさせようとする。ゾイフリートがそれを少量食べると、乙女が叫び聲を擧げる。大蛇が火を吐き乍ら、空中を飛行して来る。その恐ろしい物音が聞えるから、早く逃げるか、戦の支度をすべく言ふのである。侏儒は恐怖に冷汗を流し、皿を持つて洞穴の中へ匿れる。乙女も大蛇の火焰が収まる迄、一時匿れる様にと、ゾイフリートを促して逃げる。大蛇が来て、火を吐き乍ら、あちらこちらと走る。その火焰が収まるとゾイフリートが襲ひかかる。大蛇は彼の首に懸けてある楯をもぎ取つて、彼を突き倒しその上を走り過ぎる。だが彼は再び起き上つて打つてかかる。遂に大蛇を倒して谷間へ投げ落す。と同時に彼も氣絶して倒れる。クリムヒルトが来て、膝の上に彼の頭を載せ、嘆き悲しむ。すると侏儒が来て、ゾイフリートの様子を見、死んだのではないから、此の木根を與へるやうにと言ふ。クリムヒルトがその木根を飲ませると、ゾイフリートは上體を起して半醒半眠の有様、乙女は彼を抱いて接吻し、救はれたことを喜ぶ。侏儒も同様に感謝する。彼は矮人國の王であるが、巨人のために征服されてゐたのを、今や一族郎黨とともに解放されたのである。ゾイフリートも漸く立ち上り、今は全く正氣に返つて、愈々ヴォルムスへ歸國することとなる。侏儒が道案内を申出で、それから先發してギビツヒ王に二人の歸國を先觸れして置かうと言ふ。するとゾイフリートが侏儒をして、自分の運命を占星させる。そこで侏儒が星を仰いで見ると、星座は不吉の相を呈してゐる。彼は乙女と結婚し、八年の間俱に暮らすか、その後睡眠中に殺される。だがやがてその暗殺者達も必ず復讐されるであらう——ゾイフリートはそれが神の意志とあれば、致し方がないとばかり、一同を促して、ヴォルムスへと出發する。

場面變つてヴォルムスの宮廷、王が口上役と登場。王女の行方を思つて悲しんでゐる。既に王妃は心痛の餘り死んで了つたと言ふ。處へ先の侏儒が来て、王女とゾイフリートの到着を告げる。王が非常に喜んで、早速迎へに行かうとすれば、侏儒は、御二人は既に城門の前で馬を下りて、此の廣間へ來られる處だと言ふ。言葉に違はず、ゾイフリートがクリムヒルトを連れて来る。父王は王女を迎へて抱きかかへ、絶えて久しい再會の喜びを述べた。それからゾイフリートにも手を與へ、王婿として歓迎する。かくて大蛇退治の長物語は何れ二三日後のこととし、今日は休ませさせて貰ひ度いと言ふゾイフリートの乞ひを容れて、王は結婚式の支度を何かと指圖し乍ら、一同夜食へと退場。

此の幕でゾイフリートの武勇傳は最高潮に達する。彼は巨人クーペロンを斬り倒して谷底に投げ下ろし、次いで大蛇と生命懸けの大格闘を演じ、遂に之を斬り伏せて突き落す。恐くその大活劇程當時の素朴な觀客の興味を牽きつけたものはないであらう。火を吐きつつ舞臺の上を荒れ廻る怪物のために、さすがの勇士もその下敷きになつて、今は萬事休すかと思える。だが彼もさる者、忽ち起き上つて大蛇に斬りつける。かくて格闘數刻、大蛇は美事に退治されるが、ゾイフリートも今は力盡き氣も弛んで、氣絶して倒れる。かく見て來ると此の場面は正しく「ヴァイルヘルムとアグライ」第六幕リアルと怪巨人格闘の場を發展させたものである。だからこゝでも作者は又原典に比較して注目すべき改作をしてゐる。原作ではタリムヒルトもジグフリートが死んだものと思つて氣絶する。だが暫くしてジグフリートは自然に正氣に返るけれども、王女の方は侏儒から木根を口に含ませて貰つて始めて生き返ることになつてゐる。然るにザックス劇では王女の方がゾイフリートを介抱し、木根を與へてゐるのである。此の趣向はヘルデンブーフ中の Kaiser Ortnit の同じ様な大蛇退治の物語から取られたものと言ふ (Vgl. Hans Sachs und die Heldensage von Karl Drescher,

512)けれども、そればかりではなく、作者はゾイフリートが薬を飲んでから徐々に正氣に返つてくる様を寫してゐるから、そこには作者の創意が十分働いてゐるとしななければならぬ。即ち作者の意圖する處はゾイフリートの心理描寫をすることによつて、劇的效果を高めることであつたと思はれる。同様に此の幕の第二場で、ギビツヒ王が「王妃も心痛の餘り死んで行つた」と言つてゐるのは、原作には記されてゐないことと、之は原作で侏儒 Engel が彼の父王 Nyding に就て、一族悉く巨人に征伏されたので、父のニブリンクは傷心の餘り死んだと物語つてゐることから連想されたものである。又彼侏儒がゾイフリートに先行して、彼と王女との到着をギビツヒ王に知らせる使者役をしてゐるのも、勿論原作にはないことである。之等のことは凡て、要するに作者が劇的效果を狙つて構想したもので、作者の功績に歸すべきものである。

然し乍ら之を上演するに當つて、從來に見られない難點は、大蛇の吐く火焰と、巨人や大蛇が谷底へ投げ落される場面であるが、それらは如何にして演出されたか？ 場面は大蛇の岩であるから、奥舞臺背後に大蛇の洞窟があるものと想定される。クリムヒルトは奥舞臺背後から登場。大蛇は今留守である。そこにト書で「巨人クーペロン這入る。」(Der ries Kuperon geht ein.)とあるのは、前面舞臺登壇口に門扉があり、その門扉の錠前を鍵で開けて這入つて來たことを意味する。あとから續いたゾイフリートがクリムヒルトに喜び迎へられる。その間に巨人は前面舞臺よき所に劍を落して置く。ゾイフリートがその劍を拾はうとして、巨人と格闘となる。クリムヒルトと侏儒は奥舞臺で氣を揉んでゐる。巨人が倒れると、ゾイフリートは彼の足を持つて百尋もある此の山の鞍部から投げ落とし、紛紛に打ち砕いてやる」と言ひ乍ら、巨人の死體を投げ下ろす。何處へ？ 此の疑問に對してケスターは矢張り奥舞臺の「迫り出し」が利用されたとし、ヘルマンは

マルタ教會の内陣と聖器室との間の戸口を宛ててゐる。だが此の場合も奥舞臺側面の出入口に藪や大岩が装置されてゐて、巨人はその上から大岩の陰へ落されたものとする方が、臺詞の示す處と一致する。格闘が終ると、侏儒は前面舞臺から先きに來た方へ退場、金の皿に菓子を入れて持つてくる。やがて大蛇が近づいてくること、王女によつて知らされる。ここでは大蛇が空中飛行して來る様を示す必要はない。三人は奥舞臺の背後へ匿れる。大蛇が前面舞臺へ、羽搏き匍伏して來る。彼は舞臺の上をのたうち廻り、口から火を吐く。その火焰は實に大蛇の假装の口の中に装置された一種の仕掛煙花によつたものと思はれる。と言ふのが當時ニュルンベルク市で如何に仕掛煙花が發達してゐたかは、ザックスが既に四十年二月十五日作「羅馬王フェルディナント神聖なる直轄都市ニュルンベルクに入都さる」や四十一年三月十日作「皇帝カール五世聖なる帝國都市ニュルンベルクに入都さる」(第四章參照)の中で歌つてゐる處であつて、火焰や煙を出す火藥が、舞臺で用ひられたとしても、何等不思議ではないからである。やがてその火焰が収まると、奥舞臺背後からゾイフリートが馳け寄つて、大蛇と大立廻り宜敷くあり、彼は大蛇を巨人と同じく、岩の陰へ投げ落すと同時に岩のこちら側の下へ氣絶して倒れる。するとクリムヒルト、次いで侏儒が奥舞臺へ出て來る。そして彼等三人は前面舞臺から退場する。

尙次の場面は「フロリオとピアンツェフォラ」の終幕と全く同一趣向であるから、その演出法もその應用に過ぎない。

扱てヴォルムス宮廷へ無事歸還したゾイフリートとクリムヒルトとの後の運命はどうなつたか？ この事に關しては、彼等の結婚生活を八年間續くとある文で「ジグフリートの歌」はその後の消息を何等傳へる處がなく、直ちにジグフリートの死を、それもごく簡潔に述べてゐるに過ぎない。それによると彼は三人の王弟の嫉みを受け、泉で

涼を取つてゐる時、彼の兩肩の角質でない部分を通して、Hagenのために刺殺されたとある。然し乍ら劇作者ハンス・ザックスとしては、物語の筋を「始め、中、終りと事件が目の前に起つてゐるのを見る様に出来る文明瞭に示す」ために此の八年間の空白を何とかして埋める必要があつた。かくて第六幕がそのために脚色されたのであるが、その題材が「歌」にないとすれば、作者はそれを何處から取つて来たか？ 先づ第六幕の筋を見てみよう。

ゾイフリートはクリムヒルトとともに登場。二人は腰を下ろす。二人は既に結婚してをり、今は懷舊談に花を咲かせてゐる。その中にゾイフリートは角質になつた話をし、如何なる巨人英雄にも負けることはないと自慢する。すると王妃は伊國 Bern (Verona) の Dietrich が豪勇並ぶものがない勇士であると噂話をする。それを聞くとゾイフリートはその人が来てくれれば、力比べをして見度いと言ふ。そこでクリムヒルトは伊國の勇士とその師範役老 Hildebrandt を招待しようと言へる。ゾイフリートも大賛成。ローゼンガルテンで試合をして見度いから、早速手紙をかく様にと頼む。王妃がては彼女の従兄ブラバント侯 (mein Vetter, hertzog aus Brabant) 因に原作では Volker が最初に使に選ばれてをり、彼はクリムヒルトの姉の子である。その姻籍關係がそのまま茲に用ひられてゐるのである。を使者に立てようと言へば、ゾイフリートはその間にローゼンガルテンや廷臣の衣裳を用意させて、ベルナーを迎へるに恥づかしくない様にしようと言へる。二人が去ると第二場。ギビツヒ王が入場。娘と婿がデトリッヒ・ベルンを招く相だが、増上慢から不祥なことが起らなければよいかと心配してゐる。王の此の八行からなる獨白が終ると、場面が變つて第三場。デイトトリッヒが老師範ヒルテブラントと登場して来る。デイトトリッヒはクリムヒルトがブラバント侯を使者としてゾイフリートとの試合を申込んで来たことを話し、どうしたらよからうかと相談する。

そしてヒルテブラントに勧められて、武裝を整へ、ヴォルムスへ出發することとなる。次いで第四場は又もヤヴォルムスの宮廷。クリムヒルトとゾイフリートが登場。試合の準備も出来て、客人を迎へるばかりになつてゐる。早くローゼンガルテンの試合を見度いものだとクリムヒルト。ゾイフリートも必勝を期してゐるが、萬事は神の手にあると言つて、奥の室へ去る。とそのあとを見送り乍らベルナーが出て来る。やがて彼はクリムヒルトの方に向いて、招待に應じて今到着したと挨拶する。クリムヒルトは手を差し出して、此の度の戦で世界一の勇士を決めるのだと言ひ、勝者には彼女自ら抱擁し接吻し、花冠を與へると約束する。デイトトリッヒがそれを承諾し、御主人に宜敷くと言ふ。女王はその通り申し傳へませうと退場。あとでベルナーはゾイフリートが角質であることを、今見て知つたと言ひ、試合に應じたことを後悔する。彼は故郷へ歸り度くなつたと訴へる。すると老ヒルテブラントがその卑怯な様を嘲笑するので、彼も怒つて劍を抜いて老人を打ち倒し、奮然として退場する。そのあとで老ヒルテブラントは起き上り、今のは凡て主人をして戦に勝たせるための計略であると言ふ。かくて第五場。ローゼンガルテンの場である。クリムヒルトが来る。彼女は試合を見物するために、薔薇の花園の中に坐る。次ぎにゾイフリートが武裝して来る。彼はあなた此方と歩き廻り、敵の來方の遅いのを怪しんで、氣おくれでもしたのかと獨語する。そこへデイトトリッヒも武裝して来て「遅いことがあるものか。ヒルテブラントもわしを輕蔑したから、一撃の下に殴り倒してやつた處だ。同じ様な目に逢はせてくれよう」と答へる「では、いざ來れ」とゾイフリート。二人は互に格闘する。始めゾイフリートはベルナーを追ひ廻す。その様を密にヒルテブラントが見てゐる。彼はこつそりと口上役に命じて、ベルナーが自分を打ち殺したと觸れさせる。そこで口上役が試合場に現れて、試合を中止する様に警告し、ヒルテブラントが主人に殺されたか



ら、その冥福を祈つて埋葬する旨を披露する。それを聴くとデイトリヒは激怒し、ヒルテブラントを殺したのも、汝のためとばかり、ゾイフリート目懸けて猛烈に攻めかかる。二人は又もや激しく戦ふ。遂にゾイフリートは後退し、クリムヒルトの膝の中へ身を匿す。クリムヒルトは彼の上に薄い手巾を投げ懸け、此の通り自分の膝の中に這入つてゐるから、と言つて夫のために命乞ひをする。デイトリヒはわが師匠が死んだからには、彼をも生かしては置かないと答へ、劍を閃めかして刺さうとする。と老ヒルテブラントが馳けよつて来て、劍の下を潜つて、彼を押し止める。そして自分が死んだと觸れさせたのは、彼を激勵するためであつたと物語る。ベルナーは振り返つて、彼が元氣なのを見ると、喜んで劍を収め、ゾイフリートに手を差し延べて彼を起す。ゾイフリートも生命を助けられたのを感じてデイトリヒの誠實と友情とを賞め讃へる。女王はベルナーの頭に花冠を載せ、彼を抱擁し接吻する。ベルナーも試合が無事に終つたの喜び、挨拶を述べて一同を祝福する。かくてゾイフリートに送られて、皆々退場。

以上の様に此の幕は所謂シナリオ式に構成されてを、他の幕と著しく趣を異にしてゐる。勿論此の種の脚色法も既に度々用ひられてゐるもので、かの「トリストラントとイザルト」第五幕の如きは九場、第六幕は七場から成り立ち、目眩しく場面が變化してゐる例もあるから、何等新しい試みではないが、此の劇では此の幕丈が他の部分と著しく相違してゐるのは何故であるか？ それは此の幕の原作が最早や「ジグフリートの歌」ではなく、別種のものであり、それを劇的物語の八年間の空白を補ふために、一幕に壓縮して挿入したからである。然らばその原作は何であるか？ 此の問題に就ては、それが既に此の劇の他の箇所でも折々影響を及ぼしてゐるヘルデンブーフ中のローゼンガルテン物語であることは疑を容れない。但しその物語を此の劇の前後と合致する様に變更してゐることも亦明かな事實である。處が作

者は一面改作を企圖し乍ら、他面原作の物語に引き摺られて、その改作の趣旨を徹底し得なかつたが故に、此の幕が全體と何となく調和し難いものを持つに至つた。そして此の缺陷は第七幕にもそのまま踏襲されてゐるため、此の劇の第六幕以下の効果が極めて散漫にして低俗な見世物本位に墮してゐるのを如何とも仕難いのである。即ちその缺陷とは何よりも先づゾイフリートの不徹底な性格描寫である。

抑々ゾイフリートは此の劇の始めて亂暴狼藉者として紹介されてをり、口上役の結辭でも「行儀作法も徳もなく、大膽不敵にして恐れを知らぬ若者」(Zumb andern deut Sewfriedt die jugent / On zucht suter siten und tugendt, / Verwegen, frech und unverzag, etc.)の代表として取扱はれてゐる。にも拘はらず、此の幕では甚だ消極的であるばかりではなく、卑怯未練な態度さへ示してゐる。此の様な結果になつたのは勿論原作「ローゼンガルテン」のためであるが、作者は自らの解釋に従つて、それを訂正しようと試みてはゐるけれども、結局成功しなかつたのである。原作ではジグフリートとクリムヒルトはまだ婚約の間柄で結婚してはゐないのを、ここでは結婚後のこととし、若夫婦の懷舊談で幕を開けてゐるのは、甚だ巧妙な趣向であり、又原作では十二組の試合が取扱はれてゐるのに、ここではデイトリヒとヒルテブラントが挑戦されるのも、舞臺經濟上から當然の處置であり、その試合の發起者挑戦者がクリムヒルトであるのを、ここでは彼女がデイトリヒの噂をすると(原作では Volker が此の役をしてゐる)、ゾイフリートが直ちに乗り氣になつて、試合をして見度いと言ひ、彼の依頼で、クリムヒルトは使者を出し、彼は試合の準備に取りかかる様になつてゐる等は、凡て作者独自の解釋を表現したものである。更に原作ではギビツヒ王自身もクリムヒルトの計畫に賛成し、自らも試合に出て負け、デイトリヒから新たに封祿を受けることになつてゐるのを、茲では第二場で特に王をして娘と婿の無謀の擧を嘆かせて

あるのも、ゾイフリートの傲慢な性格を側面描寫するものとして、作者の苦心の存する處である。然るに第四場以下になると、今迄積極的であつたゾイフリートが極めて消極的になり、原作通りクリムヒルトが萬事を采配することになつてゐる。そして彼は遂にクリムヒルトの膝の中へ逃げ込んで、彼女の取做して漸く生命を助からうとする。彼は至極禮儀正しくデイトリッヒと和解し、彼と友情を結ぶ。そこには「大膽不敵にして恐れを知らぬ若者」らしい面影は些かも見られない。しかも茲ではクリムヒルトの性格が前幕迄のそれとは全く一變して、甚だ行動的になつてゐる。之等のことは凡て原作ローゼンガルテンから來てゐるもので、作者は遂に彼自身の新しい立場による解釋と、傳來の英雄物語とのギャップを十分に架橋することが出来なかつたと言はなければならぬ。

芝居は五つの場面からなつてゐるが、從來此の種争鬪の場面で見えて來た通り、敵味方兩方の陣營の情勢を交互に描き、最後に兩者が遭遇する場面となると言つた常套的脚色法によつてゐる。第一場第二場はヴォルムスの宮廷内であるから、奥舞臺が用ひられる。ゾイフリートもクリムヒルトもギビッヒ王もすべて奥舞臺背後(A)から登場(Geht ein)、何れも腰を下ろして(sitzen, setzt sich)話す。それは彼等が王者の位にあるものであることを示す作者の舞臺的習慣である。又その退場口もAである。第三場はデイトリッヒ・フォン・ベルンの邸内である。従つてここでも奥舞臺が用ひられる。第四場は再びヴォルムスの宮廷、ゾイフリートとクリムヒルトは矢張り奥舞臺へ登場、間もなくゾイフリートは「奥の室へ行く」(Ich wil gehn in den innern saal)ためにAから去る。と同時に前面舞臺へベルナーがヒルテブラントとともに出て來る。彼はゾイフリートの後姿を見送つた後、女王の方へ向く。やがて女王も奥舞臺背後へ這入る。最後にベルナーは前面舞臺でヒルテブラントを切り倒した後、來た方から急いで退場。

ヒルテブラントもそのあとを追うて去る。第五場はローゼンガルテンであるから、演技者は凡て前面舞臺へ出てくる(kommen)ことになつてゐる。先づクリムヒルトが來て、奥舞臺側面に腰を下ろす。そこには薔薇の藪が飾り付けてある。次いでゾイフリートが前面舞臺から奥舞臺へかけて行きつ戻りつする。彼のあとから口上役も出て來て、前面舞臺の階段(C)近くに止まつてゐる。そこへデイトリッヒが同様に登場して來る。そしてゾイフリートはデイトリッヒを前面舞臺から奥舞臺へかけて追ひ廻す。その間にヒルテブラントも登場してゐて、口上役の居る近くから、密に奥舞臺の方を窺ふ。そして口上役をして、自分の死んだことを布告させる。口上役が前面舞臺の中央に進み出て、試合を中止させる。だが彼がもとの位置に戻ると、兩勇士の格鬪が再び始まり、遂にゾイフリートは奥舞臺に追ひ詰められ、クリムヒルトの膝の間へ匿れる。彼女は彼に手巾を被せる。ベルナーが劍を振り上げて迫る。とヒルテブラントが前面舞臺のたもとから出て來て、彼の劍の下を潜り抜ける。そこでベルナーがヒルテブラントの方を振り向く。最後にベルナーは歸國するのであるから、一同は前面舞臺から退場する。

第七幕はゾイフリートの死を取扱つてゐる。その第一場はヴォルムス宮廷に於ける陰謀の場であるが、此の種の場面も既に作者が度々脚色してゐるものである(例、「騎士ガルミとブリタニヤ侯夫人」第三幕第二場参照)。クリムヒルトの兄弟 Günther, Gernot, Hagen はゾイフリートが驕慢無禮で彼等を侮蔑してゐるのを憤慨し、彼を取除く方法を相談する。ハーゲンが彼が王婿であつて見れば、放逐するわけには行かないから、試合を申込んで、打ち果したがよいと言ふ。するとギェンターは彼が全身不死身であるけれども、兩肩の間丈が肉身であるから、そこが急所であると教へる。それに對してゲルノートは彼が毎日正午になると散歩に出て、森の泉の邊りて草や花の中に横たはつて午

睡をとる習慣であるから、その時密かに彼を刺殺したらよいと提議する。そこで衆議一決して、三人は拔身に指を掛けて、誓約する。ハーゲンは今日に決行すると言つて、謀殺の役を引き受ける。

以上は「ジグフリートの歌」の第七十三節から百七十七節に相當するわけであるが、ザックス劇ではゾイフリートの横暴振りが特に強調してある。それは勿論作者が初めから彼を亂暴者として取扱つてゐるのに照應させるためであるから、その限りに於ては一應筋は通つてゐる。かくて森の邊り泉の場となる。王服を着たゾイフリートが登場(Krummet)横になつて休む。彼は「此の泉のわきの山腹の菩提樹の下の日陰で休まう。草木の香しい匂がする。かうやつて靜かに寝てゐると何と穩かに目が閉ぢて行くことか！」と言ひ乍ら眠る。すると「三人の兄弟が来る。二人がゾイフリートの方を指さす。ハーゲンが忍び寄つて、短劍で彼の肩の間を刺し、短劍を投げ捨てる。ゾイフリートは少しばかりじたばたするが、やがて靜かに横たはる」とト書にある。それから「ハーゲン言ふ」とあつて、「彼の増上慢も之で終りだ。宮廷ではゾイフリートが泉の側で暗殺されてゐるのを、獵師が見付けたと言ひ觸らさう」と臺詞が續く。彼等は木の小枝で、ゾイフリートの死體を覆うて退場する。暫くするとクリムヒルトが口上役と一人の獵師を連れて来る。彼女は「夫が泉の邊りて死んでゐると聞いたが」と言ひ、ゾイフリートから小枝を取り除く。そして兩手を頭上で打ち合せて嘆く。更らに彼の上に倒れ、彼を抱き接吻し、生命を賭けて彼女を救つてくれた夫であると訴へ、それを眠つてゐる中に刺し殺すとは、と言つて暗殺者を呪ふ。と落ちてゐる短劍を見付け、それを取り上げてちつと眺める。そして殺人者がハーゲンであり、兄弟達の嫉妬から出たことだと怒り、ゾイフリートが徳高くして、常に誠實一途に勵んで來たこと、街道はそのために安全平穩となり、大小の不正は罰せられたことを讀へ、此の復讐は必ず自分の手で仕遂げて見せると誓

ふ。かくて死者を運び、厚く葬る様に命し、自分は終生喪に服し、寡婦で過さうと言ふ。そこで口上役と獵師は死者を運び去り、女王は悲嘆し乍らそのあとに續く。次いで口上役が來て、結辭。結辭の中ではジグムント王を以て、無頼な息子を持つた親、ゾイフリートを亂暴狼藉者、侏儒を忠實な家來、巨人を向背常なき陰謀家、大蛇を惡逆無道にして、その報ひを受けた者、ディートリッヒを正義廉直の士、ヒルテブランドを忠義一徹な廷臣、クリムヒルトを好奇心にかられて不遜な所業を働く美女、彼女の兄弟達を嫉妬憎惡に満ちた策動家であると教訓してゐる。

かくの如くしてゾイフリートは遂に泉の邊り菩提樹の下で、睡眠中ハーゲンのために、急所を突かれて殺される。だが此の様な殺され方は「ジグフリートの歌」の全く預り知らぬ處である「歌」では成程オーデンの森(Odenwald d. h. Odenwald)の泉の中とあるが、そこには菩提樹のことがないばかりか、その泉で彼は顔を冷やしてゐる處を、ハーゲンによつて刺殺される(第七十八節)。しかも劇ではゾイフリートが睡眠中に殺されると言ふ言葉が、最初の口上役の述べる序辭の中にも、侏儒の星占ひの中にも、ゲルノートの謀計の中にも、更らにクリムヒルトが悲嘆する言葉の中にも、度々繰り返して明言されてゐる。従つて此の點に關する「歌」と劇との差異が作者の勝手な思ひ着きによつて生じたものではないとしなければならぬ。勿論泉で口や顔を冷やすと言つた状況を實演し難いために、作者が勝手に趣向を變へたものとも考へられないではない。然しそれにしても矢張り泉や菩提樹や、ゾイフリートの身體を覆う澤山の小枝が要求されてゐるのであるから、それが必ずしも實演不可能な所作ではなからう。とすれば作者はここでも「歌」以外の別の原典に據つてゐるものとしなければならぬ。然らばその原典は何であるか? 此の問題に對しては、既に早く W. Grimm (Vgl. Deutsche Heldensage, S. 351, 1889.) がジ

グフリートに關する北方傳説、特に「ニーベルンゲンの歌」がそれであると言つてゐる。だがニーベルンゲンの歌とハンス・ザックスの劇と共通する處は、菩提樹と泉と言ふ點で、睡眠中に殺されると言ふ點ではない。又北方傳説では Sigurd が妻の Gudrun の傍で寢床の中に眠つてゐる時、殺されることになつてゐる。然し之も此の劇と睡眠中と云ふ點では一致するけれども、その他に何等の共通點はない。されば之等の傳説の混合した第三の稿本があつて、ザックスはそれによつてゐるのであらうと云ふ説もあるが (Vgl. R. von Muth, Einleitung in das Nibelungen-Lied, S. 70 f.)、その様な稿本が存在した證據は、他に全く見られない。だからそれよりも寧ろここでも作者はヘルデンブーフ中の Kaiser Ornit からヒントを得てゐるとする Karl Drescher の説が肯綮に當つてゐると思はれる。皇帝オルトニットは二回大蛇を退治に出かけてをり、二回とも菩提樹の下草花の中で眠つてゐるのであるが、その一回目には「輝く婦人」(Iraw clare) から藥根を買つて元氣を恢復してをり、二回目には眠つてゐる時、大蛇に襲はれて殺されるのである。處で既に述べた様に、此の劇の第五幕大蛇の岩でゾイフリートがクリムヒルトから侏儒の藥根を飲まされると云ふ趣向が、此のオルトニットの第一回目の大蛇退治から採用されたものとすれば、彼が暗殺される場面も、オルトニットの第二回目の大蛇退治から着想されたものであることは、必ずしも根據のないことではない。と言ふのも「ジグフリートの歌」では敘述が至極簡單で、何故彼が泉の邊りへ來たかも了からず、又その場所や暗殺の風景に就ても甚だ明確を缺くものがあるからである。そこで作者はオルトニット物語から再び暗示されて、それに作者得意の趣向を加へ、此の場を劇化したものであらう。劇ではゾイフリートが毎日正午に森の中へ散歩して午睡をとる習慣であるとしてゐるのは、ゾイフリートの行動を動機付けるための作者独自の構想であるが、之は作者としても何等新しい着想

ではない。既に彼の工匠歌や説話詩には屢々詩人が森の中を散歩して疲れ、木陰に眠ると云ふ趣向が(例、千五百三十年作「ニールンベルク頌歌」参照)用ひられてゐるのである。だから此の劇でもゾイフリートは散歩に出て、森の泉の邊りに來るとオルトニットの如く菩提樹の下で草花の匂を嗅ぎ乍ら、安らかに眠り、眠つてゐる最中に殺されるのである。

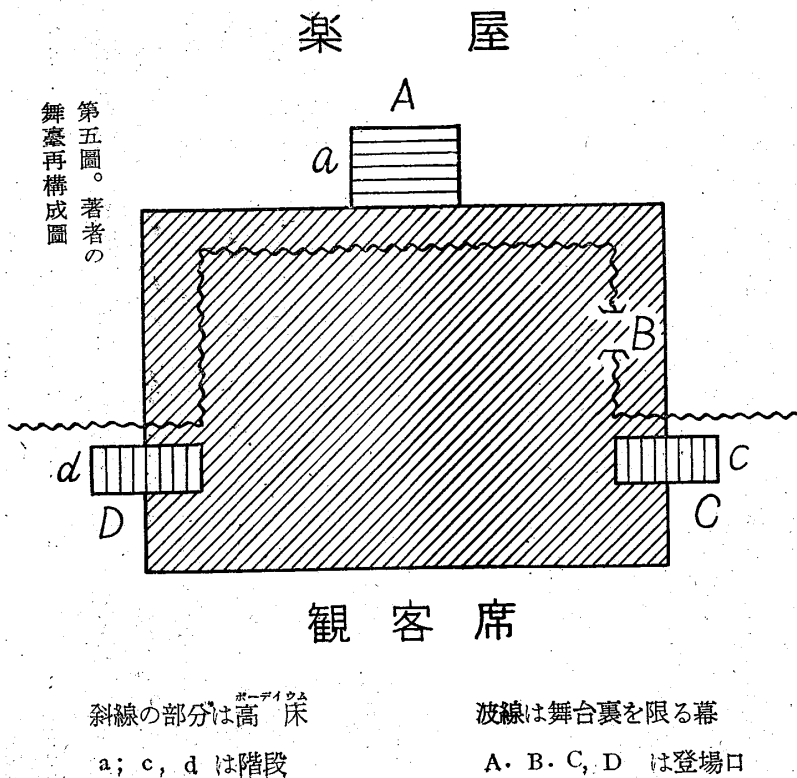
扱つてゾイフリートが殺された後のことに就ては「ジグフリートの歌」は何等傳へる處がない。だがオルトニット物語では彼の妃が夫の死を嘆き、復讐を誓ひ、一生を寡婦で暮さうとすることが敘述されてゐる。従つて此の劇の最終の場面、クリムヒルト悲嘆の場も、之によつてゐることは明かであるが、然し彼女が口上役と獵師を連れて現場に馳けつけ、夫の死體から木の枝を取り拂つて、最愛の夫の功績を口を極めて讃へてゐるのは、凡て劇作者としての、ハンス・ザックスの劇的構想によるものである。しかもカール・ドレッシャーが既に指摘してゐるやうに、此の構想も必ずしも新しいものではなく、既に四十五年十二月卅一日作の、デカールメロンに取材した「リサベータとローレンツォ」の終末と甚だ近似してゐるのである。「リサベータとローレンツォ」物語は作者が説話詩として一回、工匠歌として三回、悲劇として一回取扱つてゐる程、作者にとつて會心の題材であるが、その説話詩 Historia. Ein Kleglich Geschichte von zweyen Liebhabenden. Der ernört Lorenz. (悲戀物語、殺されたローレンツ。1515, 47) では、リサベータの兄三人が菩提樹の下でローレンツを殺して、土中に埋めておくと、リサベータが腰元とともに森の中を探し求め、土を掘つて彼の死體を見出し、嘆き悲しむ様が歌はれてゐる。之によつて作者は舞臺では穴を掘る代りに、小枝で死體を覆ふやうにし、腰元の代りに獵師と口上役とを出して、後でゾイフリートの遺骸を運び去るに都合のよい様にしたのである。

以上の様に見て来ると、此の幕は實に「ジグフリートの歌」と「皇帝オルトニット」と「リサベータとローレンツオ」の三者を、作者自身の独自の構想により巧に結合して構成されてゐると言ふことが出来る。だがそれ丈に主人公ゾイフリートの性格はローレンツオのそれに何時か置き變へられることとなり、クリムヒルトの口を通じて、全く有徳正義の勇者として賞め讃へられるに至り、その性格描寫が又もや前後矛盾を來たす様になつた。

最後に此の幕の上演法は簡單であつたと思はれる。第一場は宮廷の陰謀の場であるから、三人の兄弟は奥舞臺背後から登場、同じ所から退場する。第二場は森の場面で、例の如く大きな藪疊が奥舞臺側面の登場口附近に装置され、菩提樹もその中に立てられてあつたとすることが出来る。藪の奥に泉のある心持。前面舞臺(C)からゾイフリートが出て来て、藪の下で眠る。次いで三人の兄弟が矢張りCから来る。二人は彼の姿を差し示し、ハーゲンが彼を突き殺す。それから三人で藪の中から小枝を取つて彼を掩ひ、ハーゲンは短刀を落す。かくて三人はもと來た處から去る。暫くしてクリムヒルトが二人の従者を連れて、奥舞臺背後(A)から這入つてくる。こゝでト書に *Crimhildt* *seht ein* とあるのは、彼女が泉のある所を目差して來たからであらう。彼女は、夫が此の冷い泉の邊りで殺されてゐると聞いたが、と言つてゐるから。そして奥舞臺で泉の邊りを廻る恰好で、藪の處まで來て、夫の死體を見出し、劍を拾ふ。それから彼女は二人の従者に死體を運ばせて、前面舞臺から退場する。

之を要するに「角質のゾイフリート」は作者が多年劇作家として習得して來た經驗と智識との正しく總決算とも言ふべきものである。詩人は原作の不備を補ふために、他の物語を利用したり、自分の創意を附加したりして、劇的契機を明瞭にし、劇的所作を強化し、依て以て劇的效果を擧げるに努めてゐる。此の意味に於て此の劇は作者の最も

圓熟した作劇力を示してゐるけれども、同時に又此の作者の缺陷とも云ふべき、時空關係の不合理、劇物語の不統一、性格描寫の不徹底等も強く現はれてゐる。さればハンス・ザックスの劇作、従つて工匠歌人劇も此の劇に於て、ほぼ技巧の極點に達するとともに、その散漫にして緊密をかく脚色法も漸く固定したものとすることが出来る。だがそれ丈に工匠歌人舞臺は此の劇によつて、ほぼ確定的に再構成することが出来る。それは既に多くの作品を通じて検討して來た通り、二重舞臺、即ち前面舞臺と奥舞臺を凸字形に組合はせ、その底部を觀客



第五圖。著者の舞臺再構成圖

席の方に向けたもので、そこには奥舞臺背後の中央及び一方の側面と、前面舞臺左右兩端と都合四つ(A, B, C, D)の登場口がある。そして奥舞臺へ登場することを *eingehen*、前面舞臺へ登場することを *Kommen* と言ふ。舞臺は高床(Podium)の上に設けられてゐた。と言ふことは、登場人物が遠くを望見する場合(此の劇ではクリムヒルトが大蛇の飛行を見る處)によつて知られるのみならず、之も既に「エルサレム包圍戦」で述べた通り、口上役の序辭によつて、観客が大體立つて觀覽してゐたと言ふことから推定される。尤も観客席に座席があつたかどうかには就ては、ケスターは原則的には否定し、ヘルマンは寧ろ肯定してゐる。ケスターの理由とする處は口上役の序辭に於て「ヨーカースタ」(1550, 4, 19)を始めとして「エルサレムの包圍」(1552, 7, 9)「騎士ガルミ」(1552, 12, 24)「トロヤ城の破壊」(1554, 4, 28)及び「チルス王の誕生、生涯及び最後」(1557, 6, 30)の五篇に「扱て靜かにして立つたまま押し合はずに御聞き下さい云々」(Nun schweig und hort! steht ohn gedreng.)と言つた文句があるのに對して「扱て靜かに坐つて、落ちついて物語をよく御聽き下さい云々」(Nun sitzet still und habet thu / Und höret der histori zu.)と言つた挨拶があるのは僅に「富裕な老市民」(1552, 7, 22)と「アビガイル」(1553, 1, 4)の二篇に過ぎないと云ふ事實に基くのである。そして観客が少數のものを除いて大部分立つてゐたものとすれば、舞臺の高さは一メートル八十センチ乃至二メートルなければならぬとケスターは主張する。之に對してヘルマンは口上役の注意は立つてゐる者が特に騒ぎ勝ちであるから、それが必ずしも観客の大部分の立つてゐたことを意味するのではないとし、観客席には座席があり、只席座に坐れなかつたものが立つて見てゐたとしてゐる。そしてその有力な證據として、千五百六十年工匠歌人の競演があつた時 Ambrosius Ostericher が序辭として歌つた工匠歌に Darumb Alle die ir wöllet zu schawen, / Ir seidt man

oder frawen, / So bitten wir auch feissig Alle sandt—— / Ir wöllet still sitzen zuechtig an den Orten, / mit wercken vnd mit worten. (されば見物の皆々様、殿方にしる御婦人にしる、皆々様に切に御願ひ申し上げます。どうか御座席に靜かにお坐りになり、身振り口振りをお謹しみ下さいませ様に。)とあり、婦人ばかりか男子も坐つてゐたことが明かであると言ふ。だがヘルマンの擧げた例は工匠歌の競演であつて、工匠歌の場合は演劇の場合とは會場が違ふから、必ずしも適切な反證とすることは出来ない。恐く工匠歌人舞臺としてはケスターの擧げてゐる口上役の序辭の例から言つても、大部分の観客は立つてゐる場合の方が多かつたのではないかと思はれる。そしてその観客席と舞臺との間には幕が無かつたことは、幕の切れ目には常に登場人物が悉く退場する様に仕組んであることや、出来る限り登場人物をして演技に必要なものを運び込ませ、又は演技後の取片附けをさせてゐることによつて知られる。登場人物はそれぞれの身分に應じて扮装し、ことに巨人や大蛇のためには、必要な假裝が用ひられたけれども、舞臺裝飾は使用されなかつた。だから場所を示すためには大部分臺詞に依つてゐるが、まま岩や藪臺や門扉の如きものが用ひられた。然し舞臺幻想を破らないために、それらのものを舞臺上に裝置するにも、背後の幕間から押し出したものではないかと思はれるが、萬止むを得ない場合は登場人物に扮したものが、或は世話役又は道具方と言つたものが道具立てをしたかも知れない。俳優の動作(Aktion, 立居振舞、睡眠、覺醒、泥酔、死亡、狂氣、病氣、負傷、戰鬪等を現はす所作)や身振り(Gestus, 喜怒哀樂、快不快、愛憎等を現はす所作)も、次第にその頻度を増し詳細になつて行つてゐる卜書によつて見ると、絶えず研究され工夫が凝らされてゐたものと思はれる。此の點に關してマックス・ヘルマンはザックス劇が、彼の著しく寫實的な謝肉祭劇に比へて、その動作に於て暗示的象徴的(andeutend-symbolisch)であ

り、その身振りに於て抒情的激情的 (Lyrisch-pathetisch) であり、一體に儀式的莊重味 (zeremonielle Feierlichkeit) を帯びてゐると言つてゐるのは、遽にそのまま文字通りには肯定し難い。成程謝肉祭劇に比べてはその氣味がないこともないが、元來脚本に記されてゐる卜書は甚だ不完全であつて、作者が單に一種の符徴として書き止めておいたに過ぎないと思はれるものも甚だ多く、ヘルマンの言ふ様に、實演の場合卜書通り何等増減なく行はれたとは考へられず、實際には尙多くの所作が加へられたものと思はなければならぬ。その最もよい例は此の劇の大蛇の場面であつて、大蛇の役が如實に眞に迫つて演出されるために、作者は色々と經驗を重ね、創意を傾けてゐるのである。そしてその様に演出法が緻密になればなる程、本來の劇としての根本問題、筋や人物の統一が、末梢的技巧のために閑却される様になつて來たと云ふことの中に、老詩人の圓熟期から老熟期への推移が明かに看取される。かうして作者自身も亦老來漸く詩泉の涸渇して行くのを嗟嘆する時が來たのである。



## 第十四章 老成期の謝肉祭劇

一五五五年—一五六〇年

ハンス・ザックスの劇創作は千五百五十五年を境として、謝肉祭劇から舞臺劇へと明確に轉換してゐるのであるが、それ丈にその後の謝肉祭劇は一面に於て過去の經驗によつて安易に書き流されたものが多くなつて來てゐるとともに、他面に於て戯曲創作に影響されて、喜劇の領域に著しく接近して來るやうになつた。だから彼の謝肉祭劇は五十五年以後、即ち詩人の六十一才還暦の年を境として、漸く爛熟老衰の境地に這入つて來たものとするのが出來よう。此の事は作品の數が急激に減少してゐることによつても知られるが、尙その内容が次第に雜駁にして弛緩したものと成り、その形式が屢々一幕物としての特質を逸脱してゐる處にも見られる。之を演劇史の上から見れば、所詮謝肉祭劇なるものは中世から近世へかけての過渡期の產物であつて、それが文學の特殊のジャンルとして存在することは、最早や時代の志向にも、作者の藝術的欲求にも合致しなくなつた時が來たのである。

既に見た通り、ハンス・ザックスの謝肉祭劇は簡單な對話論争の顔見世形式から發して、惡妻、農民、僧侶を揶揄する物語的諷刺劇となり、更らに啓蒙的教訓劇、人文主義的思想劇へと展開し、結局現代劇にも比すべき人情喜劇、環境喜劇、性格喜劇に迄高揚して行つた。だが彼の謝肉祭劇には、抑々の始めから一つの大きな矛盾が内藏されてゐた。彼は從來の卑俗低調な座興的素人芝居を淨化向上せしめ、その穩健中正な處世觀によつて、諧謔諷刺の中に自ら人倫の道を教へ、據て以て當時の市民道徳を啓蒙開發しようと思懸けてををつた。そして此の意圖は獨逸ルネッサンス期に於ける人文主義精神の特質をなすものであつて、一般に十六世紀の獨逸演劇をして純藝術的香氣を見失はせ

るに至つた重大な理由をなすものであるが、ハンス・ザックスの謝肉祭劇も亦諧謔と教訓とを藝術的に融合することが出來ず、結局諧謔に成功すれば純然たる喜劇へ移行し、教訓を強調すれば一種の敘事的對話へ墮して行く結果となつたのである。かくして彼の謝肉祭劇は早晩内面的に崩壞して行かざるを得ない運命にあつた。されば今後の謝肉祭劇は笑話詩劇 (Schwänke) か又は説話詩劇 (Spruchgedicht) に類するものが多く、その間まま少數のものが、優れた性格喜劇とも言ふべきものに迄昂められてゐるのである。事實又これらは大部分過去に於て既に工匠歌か説話詩で取扱れてゐる題材を再生したものであつて、かくの如く謝肉祭劇がその本來の姿である珍奇な趣向、馬鹿騒ぎ、祝祭的陽氣、舞踊と言つた、所謂謝肉祭氣分から遠ざかり、物語そのものの内容、その筋の運び方や意義に主要な劇的要素を見出すに至つた以上、謝肉祭劇は輕妙に對話化された笑話詩か教訓詩か或は又喜劇形式に合流して行くのは、當然の歸結であると言はなければならぬ。

此の意味に於て五十五年から毎年二篇乃至四篇宛書き續けられ、六十年に至つて終つてゐる總數十六篇の謝肉祭劇は、教訓的意義に重點を置いてゐるもの、笑話的要素に富んだもの、喜劇的形式に近づいてゐるものの三種類に大別して見ることが出来る。

先づ教訓的意義に重點を置いてゐるものとしては、五十五年度に出來た二作

Ein spiel mit fünf personen : Der dot im stock. (木株の中の死神。1555, 8, 8 Nr. 70.)

Ein spiel mit 3 person : Zwaier philosophi disputacio, ob peser hayraten sey oder ledig zw pleiben anen weissen mann. (二人の哲學者の討論、賢者は結婚と獨身と何れを可とするか。1555, 9, 27, Nr. 71.) を第一に擧げることが出来る。

「木株の中の死神」は千五百四十七年一月廿九日作工匠歌 Der dot im stock, in dem spiegelton des Erenbot. 既に取扱はれてゐるものゝ Goedeke (Vgl. Dichtungen von Hans Sachs, I.T.S. 225.) によれば、同種の物語がマラドマンナイトを始め、Kuhn の Westfälische Sagen, Joh. u. Ign. Zingerle の Kinder-und Hausmärchen, Emanuel Geibel の Goldgräber 等々に見られると言ふ。ハンス・ザックスの用ひた原本は不明であるが、物語は Friedrich Rückert の Eine persische Erzählung (in der Zeitschrift der morgenländischen Gesellschaft, 14. S. 280.) と同一趣向であると言ふから、近東亞細亞から傳へられ、廣く獨逸各地で地方的に傳説化されてゐたものであらう。

劇では天使が最初に登場して序辭を述べ、最後にも現はれて結辭を述べてゐるが、之は從來に見られない場面であつて、恐く當時作者が盛に詩作してゐた舞臺劇の作法に影響されたものであらう。しかも序辭の中では極く簡単に劇物語の内容を紹介し、その様な實例を古人が貪慾を戒しめる鑑として物語つてをり、貪慾こそ凡ゆる罪惡の元であると教へてゐるし、結辭の中でも同様な趣旨を繰り返して戒めとしてゐる。従つてその結構は戯曲の場合と全く同じであるから、此の作は一幕物の形式を取つてゐる以外には、舞臺劇臺本と區別し難いものになつてゐる。

天使が退場すると、森の隱者 (Der walprueder) が珠數を持つて出てくる。彼は世を避けて、只管に斷食と祈禱で神に仕へてゐると獨り言し、腰を下ろして休む。が傍の木株が空洞になつてゐるのを見て、何か匿されてゐるのではないかと、その中を探る。そして金囊を見附

けて吃驚し、此の中には死神がある、富はその持主に害をなすばかりだと、一端逃げ出す。だが又あの金があれば貧乏人に施物が出来るのにと、思ひ返して戻つてくる。彼は木株の中へ手を入れ、金をぢやらく言はせる。しかも彼は此の金は他人のものだ。他人の物で施物をするわけには行かないと反省して、金をその儘に去つて行く。そのあとへ三人の人殺し (Drey mörder) Dismas, Barrabas, Jesnas が来る。三人の對話で、彼等が官憲に烈しく追求されてゐることが知らされる。エスマスが一番弱氣で、早く逃亡しようと言ふが、デスマスもバラバスマもその臆病を嘲つて、天國も地獄も坊主どもの作り話だから、氣にすることは無い。捉まつて殺されたら、殺されたて結構、兎に角腹が減つたから、金持ちの商人でも見附けて、殺して金を取らうと答へる。そこへ先の隱者が背後を振り返り／＼出てくる。するとデスマスが彼奴を殺して金を取らうと言ふ。エスマスがあれば坊様で、金は持つてゐないと止める。だが他の二人は隱者を遮つて、何ぞそんなに後を振り返つて見るのかと問ふ。隱者があの木株の中には死神があると云ふ。デスマスが劍を抜いて、人を馬鹿にすると言ひ懸りをつける。そして坊様が跪つき、兩手を舉げて嘆願するのも諾かず、彼を斬り倒す。隱者は神様の復讐が必ずお前達の上を下りると言つて、死んで行く。そこで三人は死者を擔いで、森の溝の中へ埋めようと退場する。此の坊主殺しの場は理由が薄弱のやうであるが、あとでバラバスマがこれでもう森の中で十八人殺したと誇つてゐるやうに、彼等の兇惡振りを示すためのものである。やがて三人は又歸つて来る。そしてデスマスが木株の中にある死神を見ようぢやないかと言ふ。エスマスは隱者を殺したことを後悔してゐる。だがやがて三人は木株の方へ近づき、中を覗く。と木株の中に千グルデンの金を見附けたと言つて大喜び。デスマスは早速町へ行つて、パンと酒を買つて来て、腹造らへをし、それから金を分けようと提議する。そこで三人は躡み込んで、二ヶの

賽を振る。と町へ買ひ出しに行く役はエスマスに當る。バラバスが巡査に捕まらない様に、うまく行つて来いよと注意する。エスマスは酒代と嚙とを受け取り、何だが身の毛が逆立つ思ひがすると言ひ乍ら、町の方へ出掛けて行く。あとでデスマスがあんな臆病者を仲間にして置いては、何時か裏切られる。町から歸つて来たなら、打ち殺して了はうと言へば、バラバスは忽ちそれに賛成し、さうすれば此の金も半分宛分けて一人前五百グルデンになるが、彼奴がゐては三分の一で三百三十三グルデンにしかならないと答へる。却々勘定に委しいなど、デスマスはバラバスと互に悪計の誓約を交す。するとバラバスは殺した坊主も金を持つてゐるに違ひないから、探ぐつて見ようぢやないかと言ふ。デスマスも成程さうだ。金を持つてゐなくても、呪禁の札位持つてゐるだらうとばかり、二人は隠者を埋めた所へ立ち去る。かうしてここで此の二人を退場させてゐるのは、さすがに巧な舞臺操作である。そのあとへエスマスがパンと酒を持つて出て来る。彼は四邊を見廻して、誰も居ないのを見ると、酒に毒を容れておいたことを獨り言する。彼は二人の悪黨振りに堪へられない。このままでは身の破滅であるから、二人を毒殺し、金を全部持つて他國に行き、そこで眞人間に返つて罪滅しをしようと言ふのである。即ち此の獨白をここに挿入する必要があつたので、作者は相當な理由を作つて、かの二人の殺人鬼を退場させたのである。だからエスマスの祕密の告白が終ると、かの二人が馳けつけて来る。そしてデスマスは刀を抜いて、エスマスに斬りつける。歸りが遅かつたのは、密かに彼等を裏切つて、教會裁判に密告してゐたからだらうと難癖をつけたのである。エスマスは辯解しようとするが、忽ち殺されて了ふ。二人は又死者の死骸を森の穴へ埋めに行く。それからやがて歸つて来た二人は、一杯やつてから、金を分けようと、それを樂しみに酒を呑み始める。とその中に先づデスマスが胸を掻き掻つて苦しみ出す。次いでバラバスも同様

に身悶えして苦しむ。遂にデスマスは立ち上つて、その邊を歩き廻る中に倒れて死んで了ふ。バラバスもあの老筆が木株の中に死神が居ると言つたのは本當だつた。お陰で坊主もわしら三人も皆死んで行くこととなつたと言ひ、地獄に陥る恐しさに絶望し乍ら、宛も死んだやうに長く横はつて了ふ (Er ligt gestreckt sam dot.)。かくて天使が来て、結辭を述べる (Der engel kumbt vnd peschlewt.)。

正に老練な脚色振りである。隠者が木株の金に心を牽かれ乍ら、逃げ出す處も自然であり、三人の殺人鬼の行動もそれぞれ契機が與へられてゐて、筋の運びを圓滑にしてゐる。ことに最も劇悍なデスマス、奸智に丈けたバラバス、また幾分良心的なエスマスの性格から、彼等の行爲が必然的に導き出されてゐるのは、此の作品の價値を高からしむるものである。然し乍らそこには最早や何等謝肉祭的氣分は見られない。只人間の慾心を戒めようとする意圖文が強調されてゐるため、此の劇は謝肉祭劇から發展して來た一種の勸善懲惡式悲劇とも言へきものになつてゐる。

同様に「二人の哲學者の討論」も戯曲形式によつて書かれた教訓的對話、又は教訓的説話詩の戯曲化とも言へべきものである。題材は之も既に千五百四十二年二月二十一日作の工匠歌 *Solon mit seinem sun: im rosen tone Hans Sachsens* の中でも、又此の序辭の中でも紹介されてゐる様にブルータルクのソロン傳から取られてゐる。しかもザックスの用ひた原本が彼の愛藏書 *Von den Leben und Ritterlichen thaten der aller durchleuchtigsten Männer, Griechen und Römer, Deutsch von H. Boner. (Colmar 1541. bei B. Grüninger)* であることは、かの工匠歌の内容が此の書と全く合致してゐることによつて明かである (Vgl. *Die antiken Quellen des H. S. von Wilhelm Abele. S. 28.*)。然るに此の劇になると、作者はそれに更らに各様の新趣向を加へてをり、それらの中には勿論作者の自由構想によるものもあるけれども、

又之も作者の所藏本の一つである。Das Buch der Croniken unnd geschichten mit figuren und bildnussen von Anbeginn der welt bisz auff dise unsere zeyt d. h. die Kobergersche oder Schedelsche Chronik : auch Nürnberger Chronik. 1496. (普通ニヤーデル年代記と呼ばれる) から取られたものもある。

處で劇の内容は前劇の如く、序辭によつて簡潔に物語られてゐるが、こゝではその口上役を劇中の人物、ターレスの弟子 Minister (ein discipel Thaletis) が述べ、てゐるのは、此の種小曲に於て人物經濟のために取られた便法であらう。弟子が退場すると、賢人ターレス登場、地球を持ち腰を下ろして言ふ (Thales, der weis, get ein, tregt ein sphaera celi, sezt sich vnd spricht :) とあり、普通舞臺劇に用ひられてゐると同様な卜書が記されてゐる。ターレスが天文を占つて今年の吉兇、日蝕の有無を判断しようと言つてゐる處へ、ミニステルが哲學者らしい身扮みなりの人が訪ねて來たとやつて來る。ターレスは客人を招じ入れさせるが、その間、客人がアテーンの賢人でソロンに違ひない。彼はアテーンの政府から請暇を得て、諸國を廻つてゐると聞いてゐる。わしも彼に逢ひたいものだと言ふ。ソロンが來て、彼と握手を交す。ソロンはターレスを讚へ、アポロ神から金の卓子を贈られた哲人であり、一年を十二ヶ月五十二週三百六十五日に分けた賢人であると言つて挨拶する。此の二つのターレスに關する挿話は、彼の天體の智識に關する物語とともに、シェーデル年代記から取られたもので、こゝではそれらが彼の人物を紹介するに役立つてゐる。ターレスもソロンの來訪を非常に喜ぶが、只残念なのは家の中が下男で、十分の響應が出来ないことと言ふ。そこでソロンが何故奥方を貰はないか？ それとも病氣で亡くなられたか？ と訊く。ターレスは婦人に對する欲望がないから、生涯妻は持たないつもりだと答へる。だがソロンは家庭に於ける妻が如何に夫の慰めになるかを説いて、妻のない生

活は半ば死んだも同然だと言ふ。するとターレスは哲學を學び、星辰を判し、時の過ぎるのを知らざるにゐる。妻は思索の邪魔になるばかりだ。プラトーンも女は常に平和の攪亂者なりと言つてゐる (Weil Plato sagt : ein weib all frist / Ein vnruiges nebel ist.) と反駁する。因に此のプラトーンの引用は Plutarchi von Cheronea unnd anderer kurz weise und höfliche Spruch. Deutsch von Heh. von Eppendorf. (1534, Straburg bei Hans Schott.) の中にある Cato の言葉であると言ふ。かくて此の二人の哲人は結婚と獨身の優劣論を戦はすのであるが、その會話は寔に流れる如く自然に發展して行つてゐる。ソロンが妻によつて子孫を得、子孫によつて名を後世に傳へることが出來ると言へば、ターレスは子供は兎角不良になり心痛の種となると答へる。子供に躰しんたいをすればその心配はないとソロン。いや兩親自身に屢々躰しんたいがないから子供の躰しんたいは投げやりにされるとターレス。兩親は自然の愛で子供を躰しんたいけるのである。妻子のない君にはその樂しさ嬉れしさは了かるまいとソロン。それは盲目的な愛と云ふもので、子供は只我儘になるばかりだとターレス。かく甲論乙駁。ソロンは子供が何處に兩親の喜びであるかを説き、人が皆妻帯しなければ、人類は亡びると言ふけれども、ターレスは喜びよりも心配の方が遙かに多い。其塵儂い幼稚な樂しみよりも、學問藝術に専念した方がよいと言つて譲らない。遂にターレスは君の子供も何時か屹度君の心配の種になると言ふ。ソロンが我が子は徳と智の鑑である。どうしてあの子がわしを困らせるやうなことをしようかと自慢する。では二日の中に今の言葉を本當にして見せようと言ふ。此の時の弟子が食事の用意が出来たと言つて來るの

で、二人の哲人は退場する。

次いで弟子のミニステルが二人の賢人の論争は誰の勝利になるだらうかと獨り言を言つてゐる。處へターレスがマントと帽子と旅囊と杖を持つて出てくる。彼はそれらのものを弟子に與へた上、尙一通の手

紙を渡し、それでアテインから来た使者を装うて来て、ソロンの息子だと思はれる様な若者がアテインで亡くなつたと言ふ話をする様に命ずる。弟子がその品々を受け取つて、では之を着て順禮僧(Waltrude)の様な風をして参りませう云々と云つて去ると、ターレスは、息子が死んだと聞いたら、流石のソロンも悲嘆するだらう。さすれば討論はこちらの勝利だと言ふ。そこへソロンが来る。彼はターレスの邸内や藏書を見て来た處で、この様な財寶を受け継ぐ子供が無いのは残念ではないかと言ふ。それは神々の覺召しにあることだ。生きてゐる中は財寶も必要であるが、死んだ後にそれが何うならうと問題ぢやないとターレス。そこに順禮僧姿のミニステルが来る。彼はターレス賢者の御宅はこちらですかい? と訊き、アテインの賢人 Chiron から手紙を托されて来たと言ふ。ターレスが手紙を受け取り、封を切つて密に讀む。その間ソロンは懐し相に、何時アテインを發つて来たかと訊けば、今日で一週間になりますと巡禮僧、アテインには變つたことはなかつたかね? 左様、丁度儂が出發した日のこと急病で亡くなつた青年を教會に葬る行列がありました、弔鐘のなる中を、元老も市民も皆々悉く棺の後に従ひ、大變な盛儀でした。して又その青年の父親の名は判らないかな? 聞いたことは聞きましたが、すつかり失念致しました。何でも非常な賢人で随分町のために手柄のあつた人だとの事。今はアテインにをられない相で。ではその名前を誰かが言つたら、思ひ出せるかね? 聞けば判りますとも。ぢやソロンとは言はないか? さうくさう言つた名前でした。とここぞソロンは兩手を頭上で打ち合せ、泣き叫んで愛子の死んだことを嘆き悲しむ。するとターレスが子供は矢張り悲しみの種ではないか。でも立派な御子様だつたと言ふからには、今頃は神々の仲間に加へられてゐる。その様に嘆くことは要るまいと皮肉な慰め方をする。しかも尙且つソロンが悲しんで止まないの、遂にターレスは今の話が凡て作爲事であると打ち明ける。

そして獨身の利益を説くけれども、しかも、此の論争は更らに明日多くの賢人達を招いて、新たに検討しようと言ふことで、三人は夜食をとりて退場。ミニステルが出て来て、結辭を述べる「皆様明日又来て、どう云ふ決定が下されるか聽いて下さい。聞くところに依れば、明日はもつと澤山の賢人達が来られ、お二人の討論に最後の判定を下されるの事、負けた方が一樽の酒を奢られる相ですから、そのお酒で愉快にやつて、結婚生活の喜びがいや増す様にと、どなた様にもハンス・ザックスは願つてをります」

結局討論の結論は示されてゐないが、作者の意圖する處は、結婚生活にも獨身生活にもそれぞれ利害得失があるから、正しい結婚生活を樂しく送るやうにすべきであると言ふにあるのであらう。一體に題材そのものが理論闘争であるから、劇的所作に乏しいにも拘はらず、似而非巡禮僧を配して巧な對話で興味を繋いで行つてゐるのは、矢張り凡手の及ばない處である。尙巡禮僧が基督教式葬儀の話をするのは時代錯誤であるが、それは作者が一般觀衆の理解を容易ならしむるための詩的虚構であるから、さして問題にすべきことではあるまい。

扱て以上の様に處世的教訓を骨子としてゐる謝肉祭劇は、尙次の三篇を擧げることが出来るであらうが、生涯をかけて市民道德の高揚に盡して来た作者が、老來益々健全な市民生活の發達を念願してゐる様子が窺はれて、奥床しいものがある。ただ此の種のものには、兎角老齡のための詩的情熱の消耗と多作とのために、劇としては必ずしも傑作と言ひ得ないのは致し方のない處である。だから今は簡單にその概梗を記すに止めて置く。

Ein spil, mit 6 personen zw spielen: Der knab Lucius Papius Cursor. (少年ルチウス・パピウス字走者。1556, 2, 8, Nr. 73.) は作者が既に二回(1545, 12, 23. und 1550, 6, 19.) 工匠歌として取扱つてゐる物語で、題材は Gesta Romanorum 及び Titus Livius の Römische

historien mit etlichen neuen Translationen etc. (1523, Mainz) によつてゐるものと思はれる。尤も作者は工匠歌の中でプルータルクの記述する處によつてゐると言つてゐるけれども、プルータルクの中には此の物語はないのみならず、此の劇では歴史家 Macrobius の記してゐる事實物語であると言つてゐるから、プルータルクと云ふのは作者の思ひ誤りて「マクロビウスが記してゐる」として此の物語を載せてゐるゲスタ・ロマノールムこそ、此の劇の原本である。劇物語は次の如きもので、ここでは正式に口上役 (Der herold) が序辭と結辭とを述べてゐる。

少年ルチウス・パピリウスは今年十三歳、元老院の會議に父親に従つて出席することが許されてゐる。母親 Luciana は會議の模様を知らうとして、少年に色々と問ひ糺す。だが少年は會議の祕密は洩らすことが出来ないと言つて答へない。母親はお父様には決して言はないからとか、此の林檎を上げるからとか宥めたり賺したりするが、少年は口を割らない。遂に母親は怒つて、鞭を持つて來て、脅迫する。少年は止むなく一計を案じて、虚構の報告をする。即ち元老院の議案は、夫に二人の妻を持つことを許し、戦争で失はれた人口を増加しようとする法律案であつたと言ふ。少年は母親に堅く口留めをして、晝食の支度を致しませうと出て行く。とあつて母親は、之は婦人の一大事だ。黙つてはゐられないと言つてゐる處へ、友達の Hortensia が來る。ルチアナは今の話をして、一夫二妻制は婦人を侮辱するものであり、家庭争議の元である。之は全女性の問題であると執り立つ。二人は相談の結果早速手別けして、反對運動を起すこととなる。

話變つて元老院では Thitus Manlius, Furius Camillus の二人が少年パピリウスを傍にして、隣國の叛逆に對する對策を協議してゐる。處へ外部が騒しくなつてくる。そこで口上役をして様子を見にやると、三千人の婦人達が押し寄せて來てゐるとの事。カミルスが代表者二人

を選ぶ様にと、口上役に傳達させる。そしてマンリウスが婦人と云ふものは氣紛れて、何でもない事でも大袈裟に騒ぐものだ等と言つてゐると、先きのルチアナとホルテンシアが選ばれて來る。そこで元老院議員達と婦人代表との間に元老院の職責と婦人の職務とに就いて、互に烈しい議論が交はされる。しかも婦人達の苦情と言ふのが、結局一夫二妻制の法律にあると判り、それが何等根據のないことである丈に、婦人達はすつかり敗亡する。マンリウスとカミルスは交々その輕舉妄動を戒め、ルチアナとホルテンシアは畏れ入つて引き下る。あつて少年パピリウスにより、事の起りが説明され、少年は國家の機密を守つたことを稱讚される。

之は勿論祕密は何處迄も嚴守されなければならないこと、特に婦人や子供に對しては機密事項を洩らさない様にと教へてゐるのであつて、此の年書かれた喜劇「宮内郷とその息子」(1556, 7, 4.) 中の第三の教訓(前記)を更らに強調して見せてゐる。だが同時に又當時の婦人の増上慢を諷刺する意味もあつたであらう。二人の元老議員が口を極めて、婦人の各様の惡徳を戒めてゐるし、又一婦でも手に負へないのに、二婦を持つたら、どうして制禦して行けようかと言ひ、寧ろ二夫一婦制にして、二人で細君を押へた方がよい位だと言つてゐるのは、諧謔としても面白いけれども、それ以上に貞淑溫良、よく夫に仕へるやうにと言ふ作者の女性觀を示してゐるのである。だがそれにも増して注目すべきは、原作通り、此の劇も遠い昔の羅馬の元老院で起つた事件として脚色されてゐるにも拘はらず、作者の眞の意圖は之に依つて當時のニエールンベルク市會と市民との關係の在り方を暗示するにあつたと言ふことである。此の意味に於て婦人の陳情團が大舉押し寄せ、代表を出して、元老議員と交渉する場面は、共和都市ニエールンベルクの民主政治を寫したものと見て、今日なほ共感を呼ぶものがある。尙少年パピリウスの役を演じた子役役者が翌年に書かれた「チルス王の

誕生、生涯及び最後」(1557, 6, 30)『第三幕の少年テルススの役を演じたものではないかと想像すると、却々に興味深いものがある。何れにしてもルチウス・パピリウスの少年時代の此の逸話は既に低地獨逸詩で Matthäus Forchem なる學校教師が五幕の謝肉祭劇 *Ein schön kort nye gedichtet Speel der Historien van den Papyrio praetextato* (Widmung von 1551. 面白く短い新作芝居、少年パピリウス物語。)に脚色してゐる。(cf. Creizenach, B. 3. S. 200 f.)又ニヒルンベルクで *Das neue Spital* の羅典學校長から St. Sebald の説教師になつた Leonhard Culmann の Von dem Aufbruch der ehrbaren Weiber zu Rom wider ihre Männer (羅馬の貴婦人達夫君に叛逆す)も同一題材によるものゝあらうが (Näheres S. Die Reformation im Spiegelbilde der dramatischen Literatur von Hugo Holstein, S. 250 f.) タルンには *Aulus (Jellius) の Artische Nächte* (Noctes articae, I, 23) に依つてをり、ザックス劇とは何等の關係もなき。

此の劇に次いで、尙教訓を主としたものには *Ain fasnacht spiel mit 4 person, den wüecher vnd ander peschwerd petrefent* (高利貸及びその他の苦情に關つて。1557, 12, 23. Nr. 78) 及び *Ein fasnacht spiel mit 4 person: Die zwen gefattern mit dem zorn* (二人の茶飲み友達と憤怒。1559, 11, 23. Nr. 82.) の二篇を擧げることが出来る。前者ではデューピター神を判者として、百姓と職工と商人とが、それぞれ自分こそ一番悲惨な生活を送つてゐると訴へ、互に他の者の言ふことを嘘言だと反駁する。最後にデューピター神は三人とも各自その職に勵み、互に協力して助け合へば、憎むべき高利貸の手に懸ることもないと、懇々と教へる。

後者の筋書きは——或る男が射的場ですつかり負けて、女房の機嫌を心配し乍ら歸つて來ると、途中で仲の好い友人に逢ふ。そして友人の入智慧で、酒燻と酒徳利とを買ひ、射的に勝つたことにして、家へ

歸ることとする。處が女房は隣りの女房から、事の真相を聞いてゐるので、夫が歸つてくると、忽ち喧嘩になる。猛烈な口論の末、夫は女房を擲る。と先の友人が來て止める。まあまあそんなに細君を打擲し度ければ、わしを擲つて鬱憤を霽らして呉れと言ふ。だが夫は友人を押し退けては女房に迫らうとする。友人は再三自分を擲つてくれと頼む。そこでそれ程頼むならと、夫は友人の髪の毛を擲んで引き倒す。處へ判者 (Der richter) が來て仲裁する。すると一方は頼まれたから擲つたのだと言ひ、他方は只だ細君を擲るのを止めさせるための口實に過なかつたのだと言ふ。判者は兩方とも分別が足らないから、此處誤解が起きたのだと言つて和解させる——

さすがにその夫婦喧嘩の描寫は堂に入つたものであるが、之も既に工匠歌と笑話詩に (1549, 3, 29 und 1550, 2, 7.) 作詩されてゐるもので、更らに六十二年十月六日の笑話詩 (Schwanck. Die zwen rauffenden fattern) によつて改作されてゐる。且つその素材は Hugo von Trimberg (etwa 1235 bis nach 1313) の諸國物語集 *Der Renner* から取られたものであると言ふ。

以上の二篇は何れも初期の素朴な謝肉祭劇形式をそのままに、顔見世式論争の裁判又は夫婦喧嘩の裁判を取扱つてゐるのみならず、劇物語よりも教訓的訓話に重點が置かれてゐるため、謝肉祭劇としては幼稚であり、道德劇としては卑俗で理屈つばい感じを免れない。

之に對して、笑話的要素に富んでゐるもの、即ち諷刺諧謔を基調として、人情性格の弱點を突いたものに、謝肉祭劇として當然傑出したものが存在すると言ひうる。事實又笑話詩に取材した作品の中には一幕物の茶番狂言として、今日なほ生命のある傑作を見出しうるのである。

處で此の種のものとして先づ第一に取り擧げなければならぬものは、オイレンシュピーゲルの笑話を劇化した次の二篇であらう。



Ein fasnacht spiel mit 4 person : Ewlenpiegel mit dem pelczwaschen. (オイレンシュペーゲルと毛皮のタリーニンヌ。1556, 2, 5, Nr. 72.)

Ein fasnacht spiel mit 4 person : Ewlenpiegel mit dem plaben hostuech vnd dem paurn. (オイレンシュペーゲルと書メギン地と百姓。

1557, 9, 30, Nr. 77.) 因に前者は工匠歌 Das pelczwaschen Ewlenpiegels im späten tone des Frauenlod (1546, 5, 11) と、又後者は工匠歌 Eulenspiegel mit dem plaben tuech in dem spiegeltone Erenhots (1548, 11, 6.) と同一題材のものである。

オイレンシュペーゲル物語の高地獨逸語大衆本は、曩にも一寸言及した通り(第十一章参照)千五百十九年のグリュエーニンガー版の Fin kurzwellig Leben von Dil Ulenpiegel (Neudr. von J. M. Lappenberg, 1854.) が今日残存してゐる最古のものでされてゐるが、ハンス・ザツクスの所有してゐたものは、千五百四十五年のフランクフルト版で (Vgl. Tittmann, Dichtungen von H. S. II. S. III. Anm.) 彼は之に依つて早速翌四十六年四月廿八日工匠歌 Ewlenpiegel mit der kellerin : in der kelberweis des Hans Heiden. (之は後五十三年十二月十六日謝肉祭劇に改作。既述。) を詩作したのを始めとして、爾後度々所謂オイレンシュペーゲル物を書いてゐる。此の兩劇は同書第三十話及び第六十八話から取られたもので、劇物語の筋はかなり忠實に原本によつてゐるけれども、場面を劇的に構成するために、多くの粉飾を施してゐるのは勿論のことである。

「オイレンシュペーゲルと毛皮のクリーニンゲ」は此の悪戯者が Duergner Iant (Thüringen) の Nüegsteten (Nienstetten) へ、毛皮を洗濯してやると言つて、宿屋の女房を始め近所の細君達から澤山の古毛皮を集め、釜の中で牛乳と一緒に煮立て、やがて女房達をして洗濯棒を森の中へ取りにやらせてゐるうちに、毛皮をすつかりぼろぼろにして、逃げて行つたと言ふ話である。劇では例の通り、宿屋の女房

が商賣が不景氣で、亭主が呑んだくれであることを訴へてゐる處へ、オイレンシュペーゲルが来て、宿を頼む。彼は自分程何時も正直律氣な人間はないと言ふものだから、女房は私も正直な話を聴くのが大好きだと答へる。と早速「一眼のお主婦さん、どの腰掛けに掛けたらよいかね？」とやる。女房が「何も妾の眼のことをかれこれ言はなくてもよいぢやないか」と怒り出す。「いやわしは正直に言つては、此の通り何時も失敗してゐますのぢや」とオイレンシュペーゲル。それから女房が註文されたビールを取りに行つてゐる間に、彼は女房がお人好して好氣心に富んでゐるから、一つ愚弄つてやらうと言ふ。やがてビールの酌をし乍ら女房が「お前様は何の商賣をしてゐなさる。」と訊くのに対して、彼が散々に弄かう滑稽な對話が長々と続く。とど毛皮を洗濯するのが得意だと言ふことになつて、女房は大喜びで、洗濯に出す古毛皮を取りに行く。オイレンシュペーゲルは「お主婦さんはわしの言ふことをすつかり本當にしてゐる」と獨り面白がつてゐる。その中に毛皮を持った女房が歸つてくると、隣りの女房がビールを買ひに来る。彼女も今の話に釣られ、早速親類中を誘うて、毛皮を洗濯して貰はうと言ふ。それぢやビールを持つて行つておくれと、二人の女房は退場。オイレンシュペーゲルは愈々謝肉祭の餘興が出来ると大満悦やがて女房達が歸つてくる。彼女達は汚い虫喰ひ毛皮を出して、之が眞新しくなるなら大したものだと感心してゐる。オイレンシュペーゲルは牛乳と大釜とを持つて來させる。彼が女房達の馬鹿さ加減を笑つてゐる處へ、宿屋の女房が釜を運んで來る。すると彼は釜の中へ毛皮を入れ、大眞面目で出鱈目な呪文を稱へる。そして爐に火をおこし、牛乳を入れて釜を煮立てるのでと言つて、女房と二人で釜を運び去る。そのあとへ隣りの女房と連れだの女等が牛乳を持つて歸つてくる。彼女達は此魔魔術のやうなことが出来るなら、私の年を三十程若返らせて貰ひ度いものだ。お寶をこつそり埋めておいたのを、お禮に上げて

よいがとか、宅の皺苦茶爺さんを四十程若くして呉れたら、匿くしてあるボヘミヤの古銭をやつてもよいが等と話してゐる。そこへ宿屋の女房が来て、古毛布の洗濯法をこつそり盗み取つたから喜んでくれと言ふわけ。すると又オイレンシュピーゲルが出て来て、洗濯棒にするのだから、大急ぎで森へ行つて菩提樹の枝を取つて来て呉れと頼む。女房達が馳け出して行くと、してやつたりと、このまま姿を匿して、垣根の陰から女房達がどうするか見てやらうと獨り言。彼は忍び足で逃げ出す。あとで女房達が歸つて来て大騒ぎ。お客様が居なくなつたと、釜を持ち出して来て、中のもので取り出すと、何もかもぼろ／＼になつてゐる。遂に女房達はお互に責任のなすり合ひをし、その毛皮は、お前さん、お寺の和尚さんから貰つたのだらう等と云ふ素破抜き迄あつて、大喧嘩。三人追ひつ追はれつ室から出て行く。とオイレンシュピーゲルが箒を持つて出て来て、非道い騒ぎでしたが、悪口雑言は此の箒で掃除します。これで謝肉祭のお楽しみが出来れば結構。わしには何の藝もないので、お別れには臭い匂でも残して行きませう。Niegstenen にはもう参りません云々と結辭を述べ、

全く謝肉祭氣分の洋溢した芝居である。しかも茲では従來見て来た様な劇作法上の技巧が到る處に用ひられてゐるのみならず、演出上の用意もよく行き届いてゐる。開幕、宿屋の女房が商賣の不振を嘆いてよい客は来ないかと待つてゐる場面は、既に度々用ひられてゐる趣向であるが、多辯で好奇心の強い女房が、之も却々奇才に猛けたオイレンシュピーゲルとお互に皮肉な滑稽問答を取り交すあたりは、作者の最も得意とする處であり、女房達が古毛皮のクリーニング法をすつかり信用して、彼の言ふがままに奔走し、遂には臍繰り金で若返り法を施して貰はうと言ふに至つて、彼女達は此の種愚かてしかも狡猾な百姓女を代表する喜劇的人物になる。そして作者はかくの如く極力女房達の喜びを寫した後に、急轉直下、彼女達が瞞されたことを知つた時

の状景に移つて、その劇的對立の効果を高め、例の如く喧嘩の場面を持ち出して「やるまいぞ、やるまいぞ」で幕を閉じてゐるのである。又登場人物が度々舞臺を去つてゐるけれども、その間のギャップを埋めるためには、獨白や對話が巧に挿入してあつて、次の場面に期待を抱かせる様に出来てをり、爐を焚く場面が舞臺の外に移してゐるのも、演出を簡單にするためである。

次の「オイレンシュピーゲルと青いズボン地と百姓」も巧な潤色を施した傑作狂言である。原作によると、オイレンシュピーゲルは焼いた物か煮たものしか食べないので、何處かで料理した御馳走が手に這入らないかと探してをつた。丁度その頃 *Velzen* (*Oizen*) 丁年の市がたつてゐたので、彼は何かうまい仕事はないかと歩き廻つてゐると、百姓がロンドン製の緑色の羅沙地を買つて歸るのを見た。そこで一計を案じ、スコットランドの乞食僧と不良仲間とを語らつて、百姓からそのズボン地を捲き上げる——と云ふことになる。

處でザックスの劇ではオイレンシュピーゲルが最初に出て来て、年廻りが悪くて不景氣だと言ひ、オルツェンの年の市で、一儲けしよう。嘘を吐いて人を瞞かすのが自分の商賣だが、町ではもう自分のするところが知れ渡つてゐるので、馬鹿な百姓共でもなければ、瞞されなくなつたと獨り言。入れ代つて百姓が屠豚用の槍と女持ちの財布をもつて出て来る。彼は女房の匿しておいた臍繰りを見附けたから、市場へ行つて、ズボンを新調し、お祭りには大いに美装込んで踊るんだと、ほくほくもので通つて行く。次いでスコットランド人の乞食僧が来る。彼も百姓を瞞して、裏金を捲き上げるのをしてゐる。今日も是れから年の市へ行つて、呪禁の札で一儲けしようと言ふわけである。それから與太者が来る。彼は旅の職人相手に賽ころやカルタで、如何様賭博をやつて過して来たが、冬になつてはそれも出来ない。これから市へ行き、何か悪戯の種を見附けて食にありつかうと言ふのである。

かうして四人の登場人物が順次市場へやつて行く。之は一種の顔見世形式であるが、ここではそれが同一方向に向つて集中されてゐるので、興味と緊張感を呼び起す。

扱て最後に出て来た與太者 (Der spickred) が市場へ行かうとしてゐる處へ、オイレンシュピーゲルがやつて来て、呼びかける。此の趣向は却々簡にして要を得てゐる。即ち彼は既に市場で先の百姓がロンドン製のズボン地を買ふのを見て、早速一計を案じて来たのである。百姓は財布をぶちまけて、商人に代價を取つてくれと言つてゐた處から見て、錢勘定も出来ない阿呆であることが判る。そこで彼奴を瞞して布地を横取りしようと言ふわけである。與太者は乗り氣になつて、どうするか話してくれと問ふ。そこで彼の計畫と言ふのは——百姓の歸るのを町の門で待つてゐて、まづオイレンシュピーゲルがどうしてそんな青い地を買つて来たのかと話しかける。百姓が青い地ぢやない。綠色だと言ふから、それぢや青か緑か賭をしようと言出る。そこへ與太者が何氣ない風で通りかかる。百姓は與太者に、布地の色を判断して呉れと頼むだらう。與太者は興味の無さ相な顔をして取り過ぎようとする。だが百姓が再三再四頼むので、青い色に決つてゐると答へてやる。なほスコットランドの坊様にも同じ様に打ち合せてあるから、坊様は森の中に匿れて、待機してゐる筈である。かうして百姓との賭で勝つたら、そのズボン地を取り上げて、三人で分けようと言ふのである。與太者は非道く喜んで、羅沙地が手に這入つたら、頸巻きにして冬を凌ぐことも出来るし、顔を匿して町を歩くことも出来る、萬端手筈を打ち合せて去る。あとでオイレンシュピーゲルは獨り、道端に佇んで、百姓を逃がさない様にしようと言つてゐる處へ、屠豚用の槍先きに綠色の羅沙地を翳して、百姓が出て来る。かくて計畫通り、百姓は三人のためにズボン地を捲き上げられるのであるが、最後に百姓は「聖職にゐるなさるお坊様迄が縁を青と言はつしやるだから、賭に

負けたことにしておくが、お前様方三人とも無頼漢で悪者だ」と言ふものだから、坊様が怒つて、破門にしてやると威す。百姓が「イロハのイの字を知らない癖に、破門が出来ますかい」とやり返す。て例の如く喧嘩になつて、百姓が逃げて行くのを、三人で追つて這入る。最後に百姓が再び出て来て結辭、彼は悪錢身につかずと言ふが、女房の金を盗んで買つた布地であつて見れば、瞞されて取り上げられたのも尤もだ。お祭りには繼のあたつたズボンで踊りに行かうと言ふ。

此の劇は一見して舞臺事情に通じたものの脚色である事が判かる。第一段で登場人物が紹介され、第二段でオイレンシュピーゲルの悪計が企まれ、第三段でそれが實行されてゐるが、此の三段階が巧妙に結合されてゐて、舞臺に聊かの餘も生じてゐない。そればかりではなくオイレンシュピーゲルが與太者に計畫を話す前に、坊様とは話合ひが出来てゐることになつてゐる事や、それぞれの人物の行動にそれぞれのモチイヴが與へられてゐる處等は、作者が如何に創意に富んだ劇作家であるかを示すものである。そして最後に笑ひの中にそれとなく教訓を仄かしてゐるのも自然である。

然し乍らハンス・ザックスの謝肉祭劇も之等のものを以て、ほぼその最高の境地に達したものとすることが出来る。此の種の笑話劇には尙次の如きものがあるが、既に何れも技巧に勝つて、力に負けてゐる趣を呈してゐる。

Ein fasnacht spil mit 4 person : Die kuplet schwieger mit dem alten kauffman. (問男を勧める姑と老商人。1566, 3, 17. Nr. 74.)

老人の夫に満足しない若女房が、夫の留守に母親に教へられて、情人と逢引する。そこへ夫が急病で歸つて来るので、母親の入智慧で、夫には寢床の用意をする様な風をし乍ら情人を敷布の陰に匿して逃がす。旦那は綺麗な敷布を見て、家の中が却々よく整理されてゐると大喜びで、寢室へ連れ去られる。以上第一段。それから母親が娘に、自分の

若い頭夫を瞞してゐた話を聞かせてみると、気分が良くなつたと言つて、又老人が出て来る。彼は借金取りに追はれてゐるので、今日は歸らないと言つて、出て行く。と先の若者が再び忍んで来る。そこで細君は今度は大丈夫だ等と云つてゐる處へ、又もや老商人が歸つてくる。それと知つた母親は若者を臺所へ隠してから、旦那を連れて来る。女房は夫を、刑吏が来てあなたを探してゐた。借金が拂つてないので、牢屋へ入れられるのだと威す。旦那は周章狼狽してなす處を知らない様。そこで彼女は彼を鳩小屋へ押し込める。それから若者を呼び出し、二人で故意と大聲を擧げて、宛も刑吏が家探しに來たかの様な芝居を演じ、これで今晚は大丈夫だと安心する。以上第二段。處がやがて真相を感じた旦那が鳩小屋を出て来る音がするので、母親は若者に窓から逃げよと教へる。彼が逃げ去ると、入れ違ひに老人が現れる。彼は怒つて、今庭へ飛び出した男は誰だと呶鳴る。母親と女房が交る交るあれは山羊が室へ紛れ込んで來たから、追ひ出したのだと言ふけれども、髭もなく角もない山羊があるかと言つて諸かない。遂に女房を擲らうとするので、母親と細君は彼を氣違ひにしてさふ。そして二人は老人を抑へて、氣違ひ除けの呪文を稱へ出す。老人も漸く氣を鎮めて、どうやら自分の氣の迷であつたらしいと言ひ出す。それから庭を見廻つて來て、今も月明りて山羊を植木屋だと見誤つた程だから、先きのも自分の思ひ違ひであつたと、女達に謝罪する。以上第三段。

之は三つの笑話を結合したもので、第一段は Steinhöwel の Aesop の中に收められてゐる Petrus Alphonsus の Disciplina clericis から取られ、千五百四十七年九月十日工匠歌として詩作されてをり、第二段は同じ書の中にある Pogius の Sieben Faceten から取られ、五十一年八月二十二日同じく工匠歌として歌はれ、第三段は Hugo von Trimberg の Der Renner の中にあり、四十九年三月三十日には工匠歌で、又五十年二月八日には Die getnerin mit dem pock (植木

屋の女房と山羊)と言ふ笑話詩で取扱はれてゐるものである。だが此の三段階を結合したことは、前劇と違つて、既に技巧の行き過ぎであり、不自然にして不統一の譏りを免れないものがある。

Ein fasnacht spiel mit 5 person: Der dewffel nam ein alt weib. (悪魔と老婆との結婚。1557, 9, 24. Nr. 76.) 同種の題材は Niccolò Machiavelli の Belagor 物語に見られると云ふが、ザックスの用ひた原本は不明。然し之も既に二回、五十六年六月十二日作工匠歌と五十七年七月十三日作笑話詩とに取扱はれてゐるものである。

悪魔が地上に出て來て、藥草を採りに行く老婆(巫女)と知り合ひ、意氣投合して、盛大な結婚式を擧げることとなる。その日一人の醫師が同じく藥草を採りに來て、亂痴氣騒ぎの音が何處からともなくするので、氣味悪がつて逃げて行く。扱て結婚した悪魔は、妖婆が餘り強欲で、いくら地中の寶を掘つてきてやつても満足せず、亂暴し打擲するので遂に堪まりかねて逃げ出す。彼は途中でかの醫者に逢ひ、醫者に雇はれることとなる。そこで醫者と相談で、町の金持ちの猶太人 Esau に取り憑く。とエサウは仲間の Mose に突然亂暴をし出す。

モッセが扱ひ兼ねてゐる處へ、醫者が來て、悪魔拂ひをしてやる。すると兼ねて打ち合せてあつた通り、悪魔が離れて、エサウは正氣に返る。モッセは喜んで謝金三十ターレルを出す。だが醫者は山分けにするると云ふ約束に反して、謝金の中から十ターレルしか悪魔に與へない。悪魔は大いに不平で、次の機會に復讐しようとする。彼は今度はモッセに取り憑く。醫者が來て、前の通り悪魔拂ひの呪文を稱へるけれども、モッセは反つて醫者に喰つて懸り、先の禮金を胡魔化したことを言ひ立てる。すると醫者はもつとよく效く呪文を探してくると言つて出て行く。悪魔に憑かれたモッセは尙も醫者を罵つてゐる。とそこへ醫者が馳け込んで來て、悪魔の女房が教會裁判に訴へたので、刑吏が悪魔を連れ戻しに來ると言ふものだから、悪魔(即ちモッセ)は

大恐慌、女房に擲まつては百年目とばかり、地獄へ逃げ歸る。代つてエサウが結辭を述べる。

之は古くから謝肉祭劇の好題材となつてゐる惡妻物語と、愚かな惡魔とを滑稽の對象にしてゐるが、惡魔の結婚と醫者の惡魔拂ひの二つの物語を紹介しようとして、色々趣向が加へられてゐるけれども、前劇「間男を勧める姑と老商人」に比べて、更らに又構成力の缺如が目立つ。次いで

Ein fasnacht spiel mit 4 person : Der pauper mit dem safran. (百姓とサフラン。1558, 11, 10, Nr. 79.) になると、達者な會話の集積に過ぎず、場面と場面の間に何等の連絡もない混成物になつてゐる。始め百姓の若者 Hainz Hederlein が Kinzel Mayer の息子 Stoffel に、踊りの賞品花輪を取られた上に、悪口を言はれたと言ふので、悔しがつて、仕返しをしてやると教り立つてゐる。彼は傷除けのお札があるから、喧嘩をしても大丈夫負けはしないと云ふ。だが百姓 Fritz Herman から、相手がとても強くて、そんな札等は役に立たないと教へられる。そこで彼は次第に弱氣になり、結局諦めて引返して行く。次いでそのヘルマンが今度は女房から料理の染粉に用ひるサフランを買ひにやられる。百姓はサフランの名が覚えられないので、道道サフ、サフと言ひ乍らやつてくると、石に躓いて、踉蹌く拍子に忘れて了ふ。そして躓いた時にシュトルプ (stolpern, 躓くの意) と言つたのを思ひ出して、今度はシュトルプ、シュトルプと言ひ乍ら市場へ行く。市場では行商人 (Der kremer) が藥草を並べて嘸し立ててゐる。とかのハインツ・ヘーグラーインが傷除けの藥草を買ひに来る。彼は行商人に一一品物の效能を訊き、行商人の巧な口車に乗つて、色々なものを買つて行く。そのあとへヘルマンがシュトルプ、シュトルプと言ひ乍ら出てくる。彼は藥草の匂を嗅ぐと、氣分が悪くなり、氣が遠くなる。行商人が香料を塗つて介抱してやるが、却々癒らない。

そこへ先きのヘーグラーインが来て、そんな物を塗つては、死んで了ふ。此の男にはかうしてやるに限ると言つて、道端から馬糞を取つて来て嗅がせる。と百姓はすっかり元氣になる。それからシュトルプブリオン (Stolpbrion) が欲しいと言ふが、行商人は勿論そんなものはないと言ふ。黄色な粉だと言ふので、それならサフランの事だらうと判かり、値段のことで又一悶著あつて、百姓はサフランを買つて歸る——と言つた筋で、最初の場面は、後の場面に出て来る人物を紹介してゐる丈で、物語そのものには何の因果關係もなく、後の場面は之も古來復活祭劇や謝肉祭劇で用ひられてゐる、所謂雜貨商人の場面 (Kramenscene) にサフラン買ひの場面を挿入したものに過ぎない。因にサフラン物語はこれより先既に二回工匠歌 (1548, 6, 20, u. 1555, 10, 15.) に作られてゐるものである。同様に Ein fasnacht spiel mit 4 person : Der schwanger pauper mit dem fiesel. (仔馬を孕んだ百姓。1559, 1, 26, Nr. 8.) も千五百五十一年五月二日作工匠歌と五十七年十二月九日作笑話詩に歌はれてゐるものである。

百姓 Kunz Ruedendunst は腹工合が悪いと言つて、女房 Gretta と色々その原因に就て話合つた後、猶太人の醫者 Ysaac の處へ、小便を届け病氣を診察して貰ふこととする。で小僧の Hainz が使にやられる。ハインツは盲目の牝驢馬で一走り行つてくると言つて出掛ける。次いで醫者のイザークが出て来る。彼は今迄占ひをして暮らして來たがそれも化の皮が剥けてもう駄目になつたから、醫者に轉業した。勿論下劑をかける他に、醫術などは何にも知らないのだと獨り言。彼が去ると、小僧のハインツが出て来る。彼も獨り言で、使に出た途中で驢馬が木の根に躓き、驢馬から落ちて小便をすつかり零して了つた。處が丁度驢馬が放尿したので、それを代りに嚢に詰めて來たと言つて去る。次いで又醫者が出て來て、商賣が不景氣だと嘆き、患者が來ないかと待つてゐる。そこへハインツが来る。で醫者が病人の容體を訊く

けれども、その意味がうまく通じないで、ハイイツとの間に暫く滑稽な問答が続く。とど検便をした醫者は、此の病人は馬の仔を孕んでゐると言つて、下劑を與へる。話變つて百姓は女房に介抱されてゐる。彼は小匙でスープを食べてゐる中に、匙を呑み込んで、益々苦しむ。とそこへ小僧が歸つて来て、旦那は馬の仔を孕んでゐると告げる。百姓は大恐慌の態で、不運の身の上を嘆く。が下劑を呑むとやがて便意を催して、小僧に連れられて出て行く。あとで女房が馬の食べ物である燕麥のお粥ばかり食べてゐたので、此處事になつたのだらうと言つてゐる。そこへ小僧が来て、喜んでおくんなされ、旦那はすつかり癒りましたぜと言ふ。彼は匙もろとも腹の中のをすつかり下して了つたが、その音が餘り大きかつたので、午寝をしてゐた兎が飛び起きて、森の中へ一散に逃げ込んだ程であつたと言ふわけ。やがて歸つて來た百姓はその兎が自分の腹の中から生れた馬の仔だと思つて大喜び、あんな元氣のよい馬の仔は見たことがない。さぞ立派な馬になるだらう。だが何よりも是から六週間は寝なければならぬから、料理と酒を頼むと云ふ。

以上此の劇でも最初に百姓夫婦、次に醫者、次に小僧ハイイツのそれぞれが顔見世に順次紹介されてから、後段で始めて物語の本筋が劇的に發展して行く様になつてゐる。だから「悪魔と老婆の結婚」や「百姓とサフラン」と同じ様に、ここでも前段と後段が調和しないものとなり、脚色力の著しい弛緩を示してゐる。

以上相變らず傳統的な悪妻や愚昧な農民が諧謔の對象になつてゐるのは、ザックスの謝肉祭劇も漸くマンネリズムに墮して來たものと言はなければならぬ。斯くして笑話に取材した謝肉祭劇も爛熟期の徴候を遺憾なく發揮し、部分的技巧のために、全體の統一を缺くに至つた。そしてその構成が次第に一幕の範圍を越えて「オイレンシニピーガルとズボン地と百姓」の如く三段階に區分されたり、「間男を勸め

る姑と老商人」の如く三種の物語から合成されたり、或はそれ以下の諸劇の如く前段と後段に二分されたりするやうになると、それは既に數幕の喜劇と言つてもよいものとなる。かくてハンス・ザックス自身が謝肉祭劇の部に擧げてゐる晩年の作品の中には、本格的喜劇と區別し得ないものが見られるやうになつて來てゐるのである。之を換言すれば、ザックスの謝肉祭劇は笑話的謝肉祭劇から謝肉祭的物語喜劇へと發展解消して行くことを以て、その最後の段階に達したとすることが出来る。そして次の二曲は正にその間の推移を明かにするものとして、興味ある研究對象を呈供してゐる。

その中の一曲は有名なナイトハルト劇(中獨演第二十四章ナイトハルト劇参照)即ち

Ein fasnacht spiel mit 8 person : Der Neidhart mit dem feyhel, hat 3 actus. (ナイトハルトと重。三幕。1557, 2, 9. Nr. 75.) であり、他の一曲はパウリのシムプ・ウント・エルンスト第四十一話から取られた Ein fasnacht spiel mit 4 person : Der doctor mit der grossen nusen. (大鼻先生。1559, 12, 13. Nr. 83.) である。

ハンス・ザックスのナイトハルト劇は當時既に活版本として廣く知られてゐた Neidhart Fuchs 物語(恐く千五百三十七年版)で、彼は是より先千五百三十八年五月廿九日には Der Neidhart mit seinen listen : in dem hofone des Danhawser, 三十九年一月十八日には Die peschofen rot (Neyhart mit den pauen) : in dem vergessen thon Frawenlobs, (坊主にされた百姓一揆、又はナイトハルトと百姓達)、更らに五十六年三月三十一日には Der Neidhart mit dem feyhel : in dem hofone Danhawser. と云ふ三篇の工匠歌を作つてゐる。此の中最初のものにはナイトハルトの耳の遠い細君の事件を、次のものは所謂「大ナイトハルト劇」(中獨演、四七八頁参照)の中に脚色されてゐる頭を剃られた百姓達の物語を、最後のものは有名な董事件を主題にし

てゐるが、此の劇は第一幕に董事件を、第二幕にナイトハルトの復讐を、第三幕に耳の遠い細君の事件を取扱ひ、しかも工匠歌の簡略な年代記式敘述を巧に潤色して、三つの挿話を劇的に結合し發展させてゐる (Vgl. Germanische Abhandlungen, Neidhart mit dem Veichen von Konrad Gursinde, S. 223 ff.)

先づ馬鹿役 (Der Narr Jeckel) が登場、観客に挨拶する。彼は謝肉祭が来たから、何か面白い事をするために来たと言ひ、芝居の簡単な梗概を紹介する。彼が去ると、ナイトハルトが現れる。彼は冬が去り春が来て、鳥は歌ひ草は萌え出ると、美しい春景色を稱へ、最早や室内にぢつとしては居られない。緑の野原で董の花を探して、日頃尊敬してゐる侯爵夫人に捧げようと、四邊りを見廻す。すると一本の董の花を見附ける。彼は折り取つては枯れるだらう。侯夫人に知らせ、お出でを願ふことにしようと、花に帽子を被せて去る。

以上馬鹿役の口上とナイトハルトの獨白は全くザックス式の作劇法に據るもので、詩人独自の構想である。ことに何故ナイトハルトが董の花をそのままにして、侯夫人を迎へに行くかの理由として、花が枯れるからと言つてゐるのは、人物の動きに動機を與へようとする作者の注意深い補充であつて、注目に値する。元來此の董事件はヴィーン宮廷で Leopold VI. der Glorreiche の頃に始まつた習慣に起源を有するもので、當時三月にドナウ河邊で最初に咲いた董の花を、春の來た象徴として、宮廷人が賞て喜び、その花を圍んで舞踏會を催するのが常であつた。此の宮廷の春の儀式は後に民間の五月祭と一緒になり、ナイトハルト傳説では宮廷の騎士階級と民間の百姓達が此の祭を契機として争ふことになつたのである。だから董の花は當然野外に咲いてつて、折り取られてはならないのであるが、ザックスの時代にはそれらの意義が忘れられて了つたために、詩人は彼独自の理由を新しく附加したのである。

扱てナイトハルトが董の花を帽子で掩うて去ると、三人の百姓 *Vila Sewfst, Engelmayr, Hainz Scheuenfried* が出てくる。此等の名前もエンゲルマイルを除いては作者自身の得意な命名法によつたもので、百姓を揶揄した意味が籠められてゐる。處で此の三人の百姓がナイトハルトに恨を抱いてゐるために、董の花を折り取つて、その代りに人糞を置いておくのは、傳説通りであるが、ここではゾイフィスト (豚のすし尻の意) が、今のナイトハルトの仕草を見てをつて、何とかして彼を苦しめてやり度いが、どうしたらよいかと問ひ、エンゲルマイルが花を盗んで、わしらの踊場の飾りにしようと答へ、更らにシヨイエンフリート (平和を嫌ふもの意) が花を盗む丈ではなく、その代りに人糞を入れておけば、ナイトハルトが侯夫人の前ですつかり面目を失ふだらうと言つてゐる。それからエンゲルマイルが大きな野糞を垂れるグロテスクな場面がある。相變らず農民を愚弄の對象にした素朴な滑稽であるが、エンゲルマイルが自分の汚物を誇らし氣に自慢してゐる文句等は却々面白い。處でここでも作者は百姓達がナイトハルトを怨みある理由として、彼が狩獵に出れば農作物を荒すためであるとしてゐるのであるが、之も騎士階級と農民階級の對立してゐた時代史的背景が忘れられて了つた結果によるのである。

百姓達が宮廷人の來るのを見て、汚物に帽子を被せ、董を持つて逃げ去ると、ナイトハルトが侯夫人や馬鹿役を案内して現れる。夫人は彼の説明を聽いて非常に喜び、五月祭の民謡を歌ひ乍ら、皆々と踊る。それから夏の喜びを見、美しい香を嗅がうと夫人が言へば、馬鹿役が早速帽子に鼻を付けて「人糞の匂がする」と言ふ。ナイトハルトが怒つて、彼を足蹴にする。愈々夫人が帽子を取ると、汚物が現れる。夫人は烈しく嘆いたり怒つたりして、ナイトハルトを侯爵に訴へると言ふ。彼は夫人の足下に伏して、自分の知らないことと、之は確に *Zeisch-nawr* 村の百姓の仕業であると陳辯する。馬鹿役が汚物の如何に魁偉



であるかを、侍女達に觸れ廻つて、その廻りを踊り歩く。遂に彼はそれを宮廷に持つて歸ると言ふ。夫人はやがて歸館を促す。馬鹿役がそれに勢をえて「ヴェーインの旦那さんの處へ歸りませうかい。腹が減つて來ましたわい」と言ふので、皆々退場。

第二幕。かの三人の百姓がナイトハルトと一戦を覺悟して、各自自分の力を自慢する。それから菫の花を五月祭の花柱にして、その周圍を民謡を歌つて踊り廻る。そこへナイトハルトと馬鹿役が來て、例の通り喧嘩となる。とど百姓達は逃げて行き、馬鹿役がそのあとを追ふ。ナイトハルトは竿から菫の花を取り、それを自分の無實の罪の證しとして、侯夫人の處へ持つて行かうと言ふ。この花を持つて歸る理由も作者の發明に係はるものである。やがて馬鹿役が歸つて來て、百姓達が皆大怪我をし、外科醫へ行つて手當を受けてゐると言つて、その滑稽な有様を悉一物語る。その挿話もザックスの創意によつてゐる。ナイトハルトは至極満足して、宮廷へ引き上げる。次いで三人の百姓が出てくる。ショイエンフリートは二本の松葉杖をつき、ゾイフィストは頭に繻帶を巻いてゐる。彼等はナイトハルトに復讐しようとするが、武器ではとても敵はないから、計略で行かうと相談する。中でも一番利口者のショイエンフリートが一策を案ずる。ナイトハルトの細君はとても美人だから、色好みの侯爵に取りもたうと云ふのである。かうしてこの場合は次の幕を導入する伏線となる。

第三幕。侯爵が一人で先きのナイトハルト事件に興じてゐる處へ、百姓エンゲルマイルとゾイフィストが來る。エンゲルマイルが或る婦人から侯爵に挨拶を頼まれて來たと言ふ。侯は早速それは又誰かかと訊く。ゾイフィストが得たりと、ナイトハルトの奥様ですと答へる。器量はよいかな? と侯爵。此の邊りでは一番の美人ですとエンゲルマイル。ぢや近い中に逢ひ度いものだと、侯爵は乘氣になる。彼は酒手をやつて百姓達を返す。とナイトハルトが來る。早速侯は、明日狩

獵に出て、晩はナイトハルトの家で泊るから、夫人に用意をしておく様に傳へよと命ずる。彼が委細承知すると、お前の奥は大變な美人だ相だなと侯爵。その言葉で侯の意中を見抜いたナイトハルトは細君が二三年前病氣をしてから耳が遠くなつたから、話す時は大聲を出さなければならぬと斷る。やがてナイトハルトは家へ歸つて支度をしておきませうと何氣ない顔で退場。侯爵も獵の用意をさせよう。美人から色よい返事があればよいがと言ひ乍ら退場。次いでショイエンフリートに先きの二人の百姓が侯爵に面會した時の事を報告してゐる。彼等は我が事なれりとばかり大喜び。三人食事にしようと思つてゐると、次ぎはナイトハルト邸内。ナイトハルトは侯爵が色好みだから、計略に掛けておいたが、細君も同じ様に瞞しておかう云云と獨り言。そこへ細君の Fensie が來る。そこで侯爵の來訪を告げる。と細君が侯爵は若くて美しい御方だと喜ぶ。すると彼は侯爵は落馬したため耳が遠いのだと教へ、大聲で話す様にと注意する。その中に侯爵の到着した音がするので、ナイトハルトは門前迄迎へに出て行く。と入れ違ひに侯爵が這入つて來る。細君が彼を迎へる。彼は彼女を抱いて、大聲で挨拶する。細君も負けずに大聲で、來訪の御禮を言ふ。二人は互に大聲を張り擧げて、お世辭を取り交す。遂に侯爵は指輪を興へて、愛の印だ。誰にも言はずに受取つてくれと大聲で言ふ。二人の話を馬鹿役が聽いてゐて、どうして其麼に嘯鳴るのですかいと、傍から散々に野次馳走にありつけるとばかり、早速あとを追ふ。やがてナイトハルトが出て來て、侯爵と細君とが大聲で話をしなければならぬので、一つも内緒話が出来ないと喜ぶ。彼が去ると馬鹿役が來て、殿様は馬鹿になつたのか、大聲で喚めてゐる。此の分だと殿様に自分の役を取り上げられる。これあどうしたらよからうと悲觀する。最後に侯爵が現れ、わしが大聲で物を言ふと、細君も大聲で叫ぶ。之ぢや話も出来ないか

ら、諦めて歸らう——と言ふわけで、皆々行列をたてて、退場。馬鹿役が来て、結辭を述べる。行き過ぎたことを言つたり仕たりしても、謝肉祭のことだから赦して頂き度いと言ふのである。

此の第三幕は原作ナイトハルト・フックスの稚拙な物語に比べると、甚だ巧妙に仕組まれてゐる。エンゲルマイルが侯爵をしてナイトハルトの細君に興味を抱かせる時の巧な掛け引き、ナイトハルトが侯爵の意中を見抜く時の機微な對話、侯爵がそのあとでする獨白、百姓達が計略の成功を期待して喜んでゐる場面、更らにナイトハルトが自分の計略を物語る獨白、彼の細君が侯爵の若くて美しいことを賞める言葉、侯爵が細君を抱いて指輪を贈る迄の會話、最後にナイトハルト、馬鹿役、侯爵が事件の結果を報告する時の三人三様の甚だ個性的な臺詞、何よりも馬鹿役が到る處に顔を出して、皮肉な滑稽を演じてゐること等は、何れも作者の老巧な劇的構想力を示すもので、原作の固い枯淡な表現に劇的生命を與へるものである。勿論場面が度々變つてゐることや、百姓達のその後の動靜が立ち消えになつてゐることや、最後に主要人物が一人一人登場してゐる點等は、全體の緊密な統一感を破るものであるから、此の作者の何時も乍らの安易な脚色振りも目立つことを否むことは出来ない。

以上の様に此の劇は明瞭に三幕に區分されてをり、既に本格的な三幕物の喜劇と大差ないものになつてゐるが、只序辭と結辭で謝肉祭に演ぜられるものであることを指示してをり、百姓が愚弄され、馬鹿役が活躍してゐるので、僅に傳統的な謝肉祭劇の面影を傳へてゐる。そして此の傾向を更らに一步前進せしめたものが、次の「大鼻先生」であつて、之になると馬鹿役が正に劇の主人公になつてゐる點で、笑話劇であるけれども、作風は全く教訓的喜劇になつてゐる。その題材は早く千五百四十五年十二月十四日に工匠歌に作詩されてゐるのみならず、此の劇と同年五十九年八月十四日にも笑話詩 Schwanck. Der

doctor mit der grossen nasen. として取扱はれてゐるから、作者はその笑話詩を更らに劇化したものであらう。

笑話詩によると、バイエルンの有力な僧院長に、見たもの聞いたものは何でも即座に喋つて座興を添へる馬鹿役が抱へられてゐた。或る日院長が博學の大先生 (Ein doctor) を招待したが、此の先生は異常に大きな鼻を持つてゐる。二人の食事中馬鹿役がその偉大な赤鼻を賞めたので、大先生は非道く恥ぢ入つた。そこで院長は下男をして、彼を追ひ出させた。處が馬鹿は正直に言つたのが氣に入らなかつたので、今度は嘘を言つて見ようと、又もや食堂に忍び込む。彼は先生に。何處から、其麼小さな鼻を手に入れたのか？ 子供の鼻でも盗んで來たのか？ と訊く。で先生は又もや恥づかしい思ひをする。院長は驚いて、馬鹿を笞で打擲させる。彼は本當を言つても、嘘を言つても、氣に入らないなら、何とも思はない振りをしようと、三度室へ這入つてくる。そして鼻が大きからうが、小さからうがちつとも構ひませんと言ふものだから、前にも増して激しく打擲された。人は沈黙を守つて、妄りに口を出してはならない——と言ふのが此の笑話の教訓である云々。

處で之丈の物語では、僧院長にもドクトールにも、食事中とある丈で、何等の動きが與へられてゐず、只馬鹿役が三度同じ種類の失敗——因に物語はこのために自ら三段階に分たれる——を繰り返してゐるに過ぎないから、そのままでは芝居にならない。そこで作者は先づ重苦しい僧院内の出來事を、明るい貴族の館に移し、館の主人 (Der juncker) と下男 Fricz とを登場させる。貴公子は獨逸第一の大博士が今日お客に來られるから、粗忽のない様にと、博士の學問が廣く深いことを色々と話して聞かせる。下男が、さう云ふ方なら馬鹿役にもよく言つて聞かせて、無暗の事を言はない様にしなければなりませんと言ふ。そこで馬鹿役 Jeckle が呼ばれて、大切なお客がある。何

でもよく出来るお方だから、十分氣を付ける様にと命ぜられる。馬鹿は料理の大家なら大切にするんだがなあと、長々と御馳走の名を擧げて大喜び、主人はそれを察めて、下男と馬鹿とを客を迎へるために、門前へやる。かうして登場人物がそれぞれ紹介されると、芝居は本筋に這入る。主人は十年前には随分親しく往來してゐたが、久しぶりて懐しい人に逢ふことだと、獨り待つてゐる。そこへ二人に案内されて、博士が来る。主人は手を差し出して喜び迎へる。彼は一週間は滞在して貰ひ度いと勧め、客は明日はパンベルクへ行くので、一寸舊情を温めるために寄つたのだ等と、互に挨拶あり、酒が出される。酒の乾盃宣敷くあり、馬鹿も一杯貰つて飲むと忽ち笑ひ出す。博士と云ふのは、主人がその學問技術を賞めれば賞める程、その風采容貌は滑稽な人物である。矮人こびとで大きな赤鼻が顔中を占めてゐる。馬鹿より先きに、彼が登場して來ると、觀客が先づ笑ひ出したことであらう。馬鹿があなとは鼻の王様ですな。大鼻の中から一番大きい鼻を選んだのでせう等と賞める。主人がそれを叱る。下男が彼を追ひ出す。それから主人は只管に博士に陳謝して邸の建物を見てくれと言つて、連れ去る。

すると馬鹿が忍び足で出て來る。彼は今の失敗を反省して、今度は嘘言うそを言つて、博士に氣に入らうと云ふ。下男が出て來て、お前は物を言つてはならないと教へるけれども、彼は却々諾かない。そこへ邸内の建物を見廻つて來た主人と客が這入つて來る。博士は建築の立派なのを賞讃し、今度は圖書室が見度いと云ふ。主人が自分の藏書の話の色々と説明し、讀書の樂しみを語る。二人が大いに共鳴して出て行かうとすると、馬鹿が進み出て、博士が木の様に背が高く、鼻は子供の鼻でも盗んで來たのか、小さくて可愛らしいとお世辭を言ふ。博士が怒つて、二度もわしを侮辱すると言ふ。主人は棍棒で彼を叩き出させる。それから又陳辯大いに努めて、漸く博士の機嫌を直し、圖書室へ案内して行く。と又しても馬鹿がやつて來て、今日は運が悪い。本

當のことを言つても、嘘を言つても氣に入らない。身體の小さい癖に、怒り方は大きい。一層鼻なんかちつとも氣にしてゐないと言つて見ようかと獨り言。すると又下男が來て、もう何にも言ふなと色々言つて聞かせるが、彼は納得しない。あんな大きな鼻は盗んで來たか、二つの鼻を一緒にしたのだ。今度は何とかして氣に入りたいものだ、色々言ひ争つてゐる。そこへ又主人と客が歸つてくる。博士は主人の藏書を賞め、讀書の利益を説いて、人生を知り、徳を磨くに役立つ等と話す。すると馬鹿が博士の肩を敲いて、親し相に、あなた、鼻なんか何でもありませんよとやる。主人は激怒して、此奴、手足を縛つて吊し上げ、うんと叩いてやれと、下男に命ずる。客は三度も恥づかしめられては、もう此の家やにゐられないと言ふ。主人は馬鹿の言ふことだ、どうか悪く思はないで、食事を一緒にして頂き度いと一生懸命取做さうとする。だが博士は食事を攝つたら、直ぐ出發するから、馬車の用意をしておくやうにと下男に吩咐ける。かくて馬鹿役が出て結辭。口は謹しむべきものであると自分の例をあげて説明する。

かうして笑話詩の平面的敘述が、美事な陰影のある立體圖に描き上げられてゐる。人物の動き、各人物に相當した會話内容、三段階の漸層的發展、そしてそれと教訓的意義の調和等は此の劇をして謝肉祭劇の分野を越えて、正に本格的喜劇の領域に達せしめてゐる。だから今や笑話劇から物語喜劇へと移る時が來たと言つてもよいであらう。

事實、ハンス・ザックスの四十餘年(一五七一年二月二十一日—一五六〇年十一月二十三日)に渡る謝肉祭劇創作は、次の三篇

Ein fasnacht spiel mit 5 person: Der verspilt rewter. (賭博で負けた馬丁。1559, 11, 16. Nr. 81.)

Ein kürzweilige comedi mit 7 person: Die jüing wifraw Francisca, so durch ain list zwayer pueler abkom, vnd hat 3 actus. (面白く喜劇、登場人物七人。若未亡人フランチスカ、計略を以て二人の情人から逃れる

話 三幕。1560, 10, 31. Nr. 84.)

Ein kürzweilig spiel mit 8 person: Esopus, der fabeldichter, vnd hat 5 actus. (面白く芝居。登場人物八人。寓話作者イソップ。五幕。1560, 11, 23. Nr. 85.)

を以て、漸くその多彩な活動を閉ぢてゐるのであるが、此等は何れも、若し作者が謝肉祭劇の項に分類してゐなかつたなら、喜劇臺本と見做しても、何等差支へないものになつてゐるのである。

此の中「賭博に負けた馬丁」と「フランチスカ」は作者が既に是迄十一篇の謝肉祭劇 (Nr. 16, 25, 26, 27, 41, 42, 43, 45, 46, 53, 62.) を取材してゐるデカメロン物語の中の第八十四話と第八十一話を劇化したもので、何れも笑話詩として千五百五十九年四月十九日と五十八年九月一日とに詩作されてゐるから、當然その物語のもつ皮肉な滑稽味を主眼とした謝肉祭劇風の笑話劇になる筈のものであり、作者もその意味で之等を謝肉祭劇の部に入れたものであらう。然し乍ら當時の作者にとつては、工匠歌に對する關心が既に全く失はれて、説話詩の詩作が主となつてゐる様に、謝肉祭劇に對する期待も要求も次第に本格劇創作の藝術的欲求に交替しないではゐなかつたのである。それには勿論謝肉祭劇そのものの存在價值や世間的需用が時代とともに減少して行つた事にも依るであらうが、しかも詩人の晩年に悟入した清澄な心境は、人間の愚行や奇行を通じて、何等かの興味ある教訓的意義を見出さないうてはゐられなかつたからであらう。由來詩人は諧謔の中に教訓を含ませることを以て、謝肉祭劇の使命として來たのであるけれども、此の兩者を渾然と融合して、藝術的に表現することは、所詮謝肉祭劇の様な形式では達成し得ないものであつた。従つてそのために、形式が打破されるか、内容が犠牲にされるかは、長い間の懸案となつてゐた。即ち既に見た様に、教訓に重きを置けば諧謔が成立せず、笑話に力を入れれば倫理を全く無視しなければならなかつた。かくて結

局作者は老來己が詩人としての本領を顧みた時、笑話の中にも人間性の眞相が潜んでゐることを看破し、そこに世道人心を啓發する契機を見出したのである。その結果當然、謝肉祭劇形式は最早や捨てられなければならなかつたが、詩人としてはそれを捨てても、人間の喜劇性を通じて、人生の意義を教へることを決意したものと思はれる。だから「賭博に負けた馬丁」は一種の性格喜劇であり、「フランチスカ」は一種の環境喜劇であつて、最早や謝肉祭劇とは直接何等の關係も見られないものとなつてゐる。

「賭博に負けた馬丁」では例の通り先づ二人の主要人物が代り合つて登場。それぞれ自己紹介をしてゐるが、最初に出る貴公子 Engelhart の獨白と、次に出る馬丁 Klas Schellentaus の獨白とは全く違つた性質のものになつてゐる。エンゲルハルトは是から伊太利の Ancona へ行つて Rosina と云ふ富裕な娘を嫁に貰ふつもりだが、それにはこちらにも信用を得るやうに、十分支度を整へる必要がある。相憎今迄の馬丁には暇を出した後だから、代りを新しく雇入れなければならぬが、周旋屋にても頼まうかと云ふ。之は人物の現在の狀況を示すものに過ぎないが、次のクラス・シェルレンタウスは賽とカルタを持つて出て來てカルタ遊びを十五種類も長々と説明し、彼が如何に如何様賭博に通じてゐるかを自慢する。之は彼の性行を示すためのもので、作者の全く獨創的な補足である。原作では Sina に Cecco Angulieri と Cecco Fortarigo なる二人の男があり、同じ名前でも、同じく父親を憎んでゐる他には、何等共通する處がなかつたとある丈である。そこでアンギウリエリが父親から逃れてアンコナの司教を頼つて行かうとして、父から旅費を貰ひ、召使を探してゐると、フォルタルリゴが之に應ずる。アンギウリエリはフォルタルリゴが賭博好きで酒呑みであることを知つて、始め彼を拒るけれども、フォルタルリゴがその悪癖を止めると誓ふので、遂に雇入れる。それから二人は旅

に出て、Buonconvento 迄來ると、正午になつたので、アンギウエリは晝休みをする。その間にフォルタルリゴは賭博打ちに行つて、持ち金は勿論着物迄取られて了ふ。彼は主人が午睡してゐるのを見て、主人の金を盗み出し、再び賭博に行つて、又もや負ける。その間に目を醒したアンギウエリは、拂ひを済まして出發しようとして、金が紛失してゐるのに氣付く。そこで大騒ぎをしてゐる處へ、フォルタルリゴが襯衣一杯になつて歸つて來る。彼は自分の胸衣を質に入れたから受け出す金を出してくれと言ふ。然し彼が金を盗んだことを告げる者があつたので、主人は益々怒つて、散々に面罵する。けれども下男は愈々落ちつき拂つて、自分の胸衣の話をするので、周圍のものも彼の言ふことを信じ出す。遂に主人も餘りの馬鹿馬鹿しさに呆れ返つて、獨り先に出發する。と下男は何處迄も主人の後を追ひかけて、胸衣を返せと叫ぶ。そこへ二人の勞働者がやつて來るので、なほも大聲で「其奴を擲へてくれ。其奴はわしの上衣を盗んだ奴だ」と喚く。するとアンギウエリが何と抗辯しても諾かれず、勞働者達はフォルタルリゴに手傳つて、彼の上衣と靴を剥ぎとつて了ふ。かうして下男は主人の衣裳を着て、シエナの町へ引上げたが、主人は裸では家へ歸ることもならず、親戚の處へ一時落ちついて、父親からの助けを待つたと言ふ。

以上の様に物語の核心は下男の徹底した鐵面皮な偽瞞が成功し、それによつて主従の位置が轉倒する處にある。されば作者が最初にその下男役の性格を示すために、彼の如何様賭博を極力紹介してゐるのは、後段の彼の行動の根據となるもので、重要な意義を持つてゐるのである。

處でクラス・シエルレングダウスは今迄馬丁をしてゐたが、目下は失業状態で、新しい主人を探してゐる。と言つてゐる處へ、先のエンゲルハルトが來る。そこで彼は帽子をとつてお辭儀をし、雇入れて貰ひ度いと交渉する。場面は、全く原作通り、エンゲルハルトは一端拒

るが、結局支度金を與へて、一緒に退場する。次いで宿屋の亭主が出て來て、商賣の不振を嘆くこと例の通りで、漸く向ふからやつて來る二人の旅人を見附けて、大喜びで迎へに行く。すると場面が變つて、馬丁のクラスが口を拭き乍ら出てくる。彼は宿で晝食を終へて來た處、主人は酒を飲むな、賭博をするなと言ふから、控へて來たが、そんな事が何時迄續かうかと獨り言してゐる。そこへエンゲルハルトが出て來て、晝寝をして行くから、馬の番をしてゐる様にと命じて這入る。クラスは得たりと、近所の賭博場へ出かける。そのあと、へ亭主が一寸顔を出して、客人が寝過して、今晚はここへ泊つてくれると儲かるのだがと言つて去る。これは勿論前の場面から次の場面へ移る間の時間的間隔を埋めるためのものである。亭主が去ると、馬丁が襯衣一枚の姿で出て來る。彼は賭博で帽子から靴まですつかり剥ぎ取られて了つたのである。そこで壁に掛けてある主人の旅囊から、金を盗んで行く。そのあとへ亭主が出て來て、客人が起きた様だ。此の分では今夜は泊つて行き相もないと言ふ。とエンゲルハルトがやつて來る。彼は背延びをし、目を擦り、すつかり眠つて了つた。さあ出發しようかと、馬丁を呼ばせる。亭主は外へ出て、クラス！、クラス！と呼び立てる。が返事がない。此の邊は原作と比べて、如何にも寫實的な描寫をしてゐる。そこで客は馬丁に構はず出發することとして、勘定書を請求し、金が無くなつてゐることを發見する。彼は此の家で金を盗まれた以上、亭主の責任だと怒る。亭主は自分が預つたものなら、責任を持たうが、自分の知らないことだから、責任はないと争ふ。遂に二人は役人の處へ行つて黑白を決めようと、出て行く。此れも作者の附加したもので、どこにも起り相な市井の一風景である丈に、自然である。そのあとへクラスが出てくる。彼は主人がまだ眠つてゐるなら、主人の着物や帽子劍迄持つて行くつもりである。とエンゲルハルトが來て、彼を見附け、裸でどうしたのだと叱る、森の中で追剝に奪られた

のだとクラース。机の上でカルタに負けたのだらうとエンゲルハルトでクラース「さうと判つては仕方がない」と借金を申し込む。主人が怒れば怒る程、彼は執拗に嘆願する。遂にエンゲルハルトは自分の馬を宿料に残し、クラースの縋りつくのを振り切つて、出て行く。クラースはなほもそのあとを追ふ。場面變つて、二人の百姓が出てくる。彼等は人の叫び聲がするが何事かと怪んでゐる。とそこへエンゲルハルトとクラースが馳け込んでくる。そしてクラースが「追剝だ、其奴を擱へてくれ」と喚き立て、百姓達がエンゲルハルトを捉へて裸にする件は、原作の通りである。最後にエンゲルハルトの結辭で、自分人間を見る明が無かつたので、此慶目に逢つたのだから、仕方がないが、無頼の生活をして來たものの言ふことを容易く信じてはならないと教へる。

これは全く馬丁クラース・シエルレントウスの獨舞臺とも言つてよい。それ文に作者は彼の性格と所作を強化し、原作では見られない程明瞭に描き出してゐる。この事はオイレンシペーゲルの悪戯とクラースの詐欺行爲とを比較して見れば容易に理解し得る。前者は悪戯を企んで、他人を踊らせるのであるが、後者は自ら公然と悪事を働いてゐる。作者は結辭で「三子の魂は百迄と諺にもあるが、無頼の生活をして來たものは、信用が出来ない」と言つてゐる通り、クラースは正しく性格的に不道德漢で、彼の行爲はその性格から自ら發するのである。かう云ふ悪人にかかつては、善人のエンゲルハルトは到底太刀打ちが出来ない。彼の喚く聲は大きく、之の叫ぶ聲は餘りにも小さい。彼は目的のために手段を選ばないのに、こちらは全くの無防備である。一方が執拗に横車を押せば、他方は泣寝入りをするより他に仕方がない。即ちかう言つた日常屢々見る非合理的な人生の一面を諷刺してゐる點に、此の劇の意義がある。しかもそれが悲劇的印象を残さないのは、愚な百姓達によつて、主人が裸にされ、召使が美服を纏う

て威張り返ると言つた滑稽な落ちになつてゐるからである。だから此の劇は笑ひの中に諷刺的教訓を含んでゐる性格喜劇と言つてもよいであらう。そして此の傾向は次の「フランチスカ」になると更らに一段と前進せしめられてゐる。

「フランチスカ」では表題に明かに喜劇と指定されてをり、「ナイトハルト劇」と同じく三幕に幕分けが行はれてゐるし「少年ルチウス・パピリウス」と同様、口上役 (Der herold) が演技の前後に現れて序辭と結辭を述べてゐるから、その形式の上から言つても、從來の謝肉祭劇とは全く別種のものになつてゐる。しかも内容から言つても、作者は三人の主要人物の性格を巧に書き分けてゐる上に、彼等の陥る境地を通じて、一種グロテスクなユーモアとスリルを描き出しゐるから、そこに謝肉祭劇的なものが見られるとしても、尙且立派な環境喜劇と見做し得る十分の理由が存在する。

劇は口上役が觀客に挨拶し、物語の簡単な筋を紹介すると、第一幕となる。

若くして未亡人になつた Francisca が黒い喪服を着て、獨り言を言つてゐる。愛し愛された夫に死なれてから、二人の青年 Alexander と Rinucco が色々言ひ寄つて來る。何れも體よく斷つてゐるけれど、二人は却々諦めない。そこで一晚考へた末巧い計略が出来たから、これなら必ず此の勝負に勝つだらう——と言つた意味のことである。處で之を原作物語の書き出し「Pistoja」に二人の追放されたフロレンス人 Rinuccio Palermi と Alessandro Chiarmontesi があつたが、二人ともお互にそれと知らず、同じ婦人に烈しく戀着した云云」とあるのに比べると、作者の構想が如何に劇的であるかを知ることが出来る。と言ふのも此の十八行の獨白によつて、登場人物三人の關係、即ち境地が明白に知らされるとともに、それが一つの計略によつて如何に發展して行くかを期待させるからである。フランチスカは若く

美しく思慮分別に富む婦人である。彼女は一夜熟慮の上奇計を案出したと言ふ。従つて問題は當然それが如何様なもので、如何様に實行されて行くかに係つてくる。そしてその實行は原作にある通り、女中 Pilda を通じ早速着手される。女中は市場でアレクサンダーに逢ひ、彼から女主人への戀の取り持ちを頼まれて来たのである。フランチスカは彼の愛を受け入れる代りには、自分の方にも頼みがあると云ひ、女中をして彼女の要求を傳へさせる。それは今日 Stanadio (原作では悪者で醜男の Scannadio) と云ふ者が墓地に葬られたから、今夜眞夜中その墓穴に這入つて、死者の死衣を彼自身が着て、死者の傍に寝てゐること、さうすれば下男が行つて、彼を擔いで此の家へ連れて来る筈であるから、二人は人知れず楽しい時が過せる。だが若しそれが嫌なら、今後はもうお目にかからないと言ふのである。そこで女中は主人の命を受けて出て行く。彼女はアレクサンダーが獨りフランチスカに思ひ焦れてゐる處へ来て、今の女主人の傳言を傳へる。彼は我が事成れりと大喜び、早速承知し、女中に使賃をやつて歸す。以上が第一幕であるが、ここではまだ計畫の一部が實行されてゐるのみで、フランチスカの眞意が果して何處にあるのか、女中にも觀客にも知らされてゐない。と言ふのもその計畫たるや餘りにも奇怪なものであるから、フランチスカ自身にも成功するかどうか疑はしいからである。だから第二幕の始めて、彼女は男の返答如何と、心配して待つてゐる。そこへ女中が上首尾の報告を齎して来る。そこでフランチスカは愈々自信を持つ。彼女は更らにリヌチヨの處へ女中をやる。彼が彼女を愛してゐるなら、今夜例の墓穴へ這入つて、死んだスタナディオを擔いで、此の家へ連れて来るやうに、若しそれが出来なければ、愛のない證據だから、以後愛の口説は止めて貰ひ度いと言ふわけである。かうして始めて女中にも女主人の眞意が了解される。だが此の様にフランチスカが事を慎重に運んで行く心理は、原作の全く預り知らぬ處であ

る。原作では彼女が女中に始めから計畫の全部を打ち明け、その結果、男の方でも二人とも、フランチスカのためなら墓の中處か、地獄の中へも下りて行くと、女中に答へたとある丈である。

フランチスカと女中が去ると、リヌチヨが来る。彼もさきのアレクサンダーの様に、フランチスカに戀々としてゐるが、前者が大いに樂觀的で自信を持つてゐるのに反して、之は反對に悲觀的で懷疑的である。そこへ女中が来て、女主人の依頼を告げる。勿論彼も喜んで、死者を運ぶことを引き受ける。女中は又も使賃を貰つて歸る。リヌチヨは夜の來るのが待ち遠しいと言つて去る。次いでその結果をフランチスカが女中から聞く場面がある。が、女中が若し本當にリヌチヨが死人を連れて來たら、どうしませうかと問ふのに對して、そんなことには決してなるまいと思ふが、若し連れて來ても、家へ入れてはいけないと、フランチスカが答へてゐるのは、作者の行き届いた注意を示してゐる(以上第二幕)。

かくて原作では墓穴の中でのアレサンドロとリヌチオの心理や行動が敘述されてゐるけれども、劇では(第三幕)彼等が墓へ行く途中と、墓から出て來た途上のことになつてゐる。それは勿論舞臺經濟のためであるが、又之によつて二人は十分に自分の心境を獨白し得るのである。そしてそこに又二人の性格の相違が明白に現はされてゐる。アレクサンダーは途すがら醜怪極まる死人の傍に寝なければならぬことを思ふ。そして其奴の魂は確に地獄に行つてゐるに違ひないから、自分も一緒に地獄に曳かれて行くのではないかと、次第次第に恐怖を感じ、遂に途中で一端引き返す。だがやがて又愛人に笑はれるのが辛いので、勇を鼓して墓の方へ行く。之に對してリヌチヨは始めからもう恐る恐る出てくる。彼は矢張り誰も彼も恐れ嫌つてゐた悪人を擔ぐことを考へると、非常に恐怖に襲はれる。髪毛は逆立ち、全身が顫へ出す。彼は又死者の友人達がこの事を知つたら、何麼目に逢はされる



かと心配する。かうして恐怖に戦き乍ら、愛情に牽かれて墓の方へ行  
く。彼の恐怖する様は、滑稽な途愚かである。二人が去ると、二人の  
夜警が出て来る。ここでその二人 Hirschrot と Krachans が話して  
ゐることは、作者の作つた挿話で、先の二人が戻つて来る迄の時間  
を埋めるためのものであるが、同時に彼等が登場して来る理由をも明  
かにしてゐるから、一石二鳥の役を果してゐる。即ち今から二日前或  
る商人が寶石を賣るからと言つて、金持の猶太人を自宅に呼び、彼を  
殺して持ち金を奪つた事件があつたのである。そこで二人の夜警は今  
屠豚用の槍と手槌 (mit schweinspiessen vnd fausthemern, これは當  
時ニュルンベルクの警官の武器であつたものらしい) を持つて、その  
商人の隠家を張り番してゐる處である。とそこへリヌチヨがアレクサ  
ンダーを擔いで出てくる。月明りでそれと見た夜警は例の殺人犯人だ  
とばかり、早速捉へようとする。だがリヌチヨはいち早く死體を投げ  
出して逃げる。夜警がそのあとを追ふ。残されたアレクサンダーも起  
き上ると、警察に搦まつては大變だとばかり、逃げて了ふ。暫くして  
リヌチヨが夜警を巻いて出て来るが、あちらこちらと探すけれども、  
死體が無くなつてゐるので、こいつは巡查に見附かつたかと、又もや  
異常な恐怖に襲はれて、家へ逃げ歸る。そのあとでフランチスカが女  
中に向つて、今の謝肉祭の遊びはどう思ふ? と問ひ、二人の馬鹿者  
共も之でもう黙るだらう。お前も二人を家へ入れてはいけなと吩咐  
ける。彼女達は原作にある通り、今の街上の活劇を窓から見てゐたも  
のであらう。かくて口上役の結辭で、婦人には貞節を勧め、若者には  
戀の闇に迷うてはならないと教へる。

かうして此の劇でも原作の要點を生かすために、臨機應變の趣向が  
加へられ、問題の奇計が引き起すグロテスクな滑稽味を十分に高めて  
ゐるのは、流石に老練な手腕である (Vgl. Archibald Mac Meehan, The  
Rejection of Hans Sachs to the Decameron.)

今やハンス・ザックスは謝肉祭劇を殆んど喜劇の領域迄高めて行つ  
た。されば彼が謝肉祭劇の部に擧げてゐる最後の作品 Ein kurzweil-  
lig spiel mit 8 personen: Esopus, der fabelreicher, vnd hat 5 actus.  
(面白い芝居。登場人物八人。寓話作者イソップ。1560, 11, 23, Nr 85.) はそ  
の表題を見ても知られる通り、形式内容とも他の喜劇作品と全く區別  
し難いものになつてゐるのである。元來此の劇の題材は Steinhöwel の  
Aesop に收められてゐる Das Leben des hochberühmten fabeldichters  
Esopi us krichischer zungen (高名な寓話作者イソップ傳。希臘語より)  
によつてをり、千五百五十五年六月九日作工匠歌 Esopus mit sein  
herrn Xanto: in dem schwarzen tone des Klingsor 取扱はれて  
ゐるものであるが「高名な寓話作者イソップの傳記」が謝肉祭劇に脚  
色されるなどと言ふことは、當時の市民的教養の水準が、ハンス・ザ  
ックスの永年の努力によつて、如何に高められて來たかを證して餘り  
あるものである。

劇は例の通り口上役の口上によつて始まる。口上の中で「今日は謝  
肉祭前夜で、色々陽氣な事が行はれますから」と斷つてあるから、之  
が明かに謝肉祭劇として作られたものであることを知るのであるが、  
次いでイソップに就いて、寓話作者であり、賢明にして物判りのよい  
判者であり、寓話によつて面白可笑しく處世法や處世訓を教へた人だ  
あり云々と、イソップの作風を紹介してゐるのは、從來見られない様  
な臺詞で、市民的教養の函養に資するための説明であるとするものが  
出来る。

第一幕は奴隸商人 (Der menschen kauffman) がイソップの主人  
Zenas から優優で醜男で、人か動物か了からない様な畸型のイソッ  
プを買ひ取る場面。商人は數人の有能な奴隸、堅琴弾きや文法學者  
(Der harpfenschlager, Der gramaticus) を連れて出てくる。彼は此  
等の若者を仕入れたのが、Samo の市場へ行つて賣るつもりである。

て彼等を疲勞させないために、馬を買ひに來たのであるが、ツエナスに勧められ、インソップに乞はれて、インソップを買ひ取る。商人が彼を連れて去ると、あとから蹤いて行く堅琴弾きや文法學者が彼の畸型を散々に笑ふ。

第二幕は商人が市場で哲學者 Xantus に若者達を賣る場面。此の場面は「行方不明の息子」(前述)第一幕を發展させたものである。先の奴隸商人が若者達を並べて、お客を待つてゐると、クサンツスが奴隸を買ひに來る。彼は若者達に一人一人生れは何處か、何が出来るかと尋ね。買ひ取らうとするが、何れも値段が高く折り返はない。遂にインソップが滑稽な奇智に富んだ答をするのと、非常に安價なので、彼を買ひ取る。

第三幕はインソップがクサンツスの細君に嫌はれる場面。クサンツスがインソップを連れて歸ると、待つてゐた細君が餘りの醜さに憤り出す。インソップが美しい若者を下男に欲しいと云ふのは、好き心があるからだ。ユーリピデスも「海中や水中には巨大な怪物がうよ／＼してゐるし、貧乏も大きな苦しみであり、地上には又病氣や恥ぢと云ふものもある。——だが怒り易い悪妻程、男にとつて困るものはない」と言つてゐると言ふ。細君は怒つて遂に家を出て行く。クサンツスは Ceno に招待されてゐるから、その料理をこつそり家内の處へ送つてやつたら、彼女の機嫌も直るだらうと、インソップを連れて退場。

第四幕はインソップが細君に仕返しをする場面。細君がどうしてインソップを追ひ出さうかと考へてゐる處へ、インソップが主人に命ぜられて鶏肉料理を持つてくる。だが彼はそれを細君に届けずに、牝犬にやつて出て行く。細君がそれを見て、主人は最早や自分を愛してゐないのだと悲しむ。そこへ主人が歸つて來て、色々優しく慰める。だが細君は彼を寄せ付けない。料理を犬にやる程だから、私より犬が大

切なのでせうと怨む。驚いたクサンツスがインソップを呼んで問ひ糺す。インソップは「あなたの一番親切なものに遣つてくれと言はれましたから、犬にやりました」と答へる。「わしの家内に届けろと言つたのだが」と主人。「それなら此の料理は私の家内にやつてくれ。わしが一番親切なものの處へ持つて行つてはならぬとお仰有らなければなりません」とインソップ。そこで細君は愈々怒つて。「此處下男を家に置く位なら、わたしは父の家へ歸ります」とばかり、家出をする。クサンツスは引き止めようとあとを追ふ。因に此の場では犬が使はれてゐるが、これも既に謝肉祭劇では「泣く小犬」(前述、参照)で見たものであり、「ベリトラ夫人の薄命物語」(159, 8, 16; 後述)にも見られるから、當時よく訓練された犬が舞臺で使用されたことは確實である。

第五幕はインソップが奇計を以て、家出したクサンツスの細君を呼び戻す場面。インソップは細君のことで苦慮してゐる主人に、一計を授ける。彼は料理の材料を澤山買ひ込み、更らに細君の家へ行つて、鶏や鶯鳥の賣物はないかと訊く。かの堅琴弾き (Der harpfenst, こつて此の人物が出てくるのは、人物經濟のためである。) が出て來て、どう云ふ宴會があるのかと問ふ。そこでインソップは主人が再婚するのだと言ひ、前夫人が傲慢で怒り易く、家出をしたから、後妻を貰ふことになつたと告げる。他方クサンツスは下男的首尾如何と待つてゐる。彼は細君を呼び戻さうとする自分の試みが皆失敗したので、若し下男にそれが出來れば、下男の方が自分より俐口だと述懐してゐる。處へ烈しく戸を叩いて細君が這入つてくる。彼女は、夫が再婚すると聞いて、堪まらなくなつて歸つて來たのである。そこで夫婦は仲直り。

インソップに就ては「彼奴は又何か口實を作つて、十分懲らしめてやるから、さあ機嫌を直して、園亭で仲直りをしよう」と云ふわけ、皆々行列を整へて退場。口上役の結辭には「貞淑な婦人方に切にお願

ひ致しますが、此の狂言を見て、御氣を悪くなさらない様に。之は千年前の御話で、此悪妻は此の頃はもう居りません。だがその娘や子供が残つてゐるとすれば、男達の御願として、もう少し穩しくなつて頂いて、家庭の平和が増します様にと、ハンス・ザックスは願つてをります」

之は誠に老巧な皮肉であり、觀客を怒らす代りに笑はせ乍ら教へると言つた甚だ諧謔的效果を擧げてゐる。かうして謝肉祭劇特有な悪妻物語も、今や至つて上品な教訓的喜劇に醇化されて來た。然し又他面に於て劇物語に一貫性を缺き、劇の主題が全篇を通じて緊密に發展してゐないから、謝肉祭劇としての特質を失つて了つてゐるのも、見逃すことは出来ない。ここに演ぜられてゐるものは、各幕それぞれインツプ傳中の一駒一駒であり、しかも後半三幕以後に至つて漸くクサンツスの細君對インツプの對立が必然的に連關して、劇的葛藤を生じてゐる丈に、前半との不調和が目立つのである。だが此の種の脚色法は既に舞臺劇の方では當然のこととされてをり、ここでも作者は最初にインツプ傳、ことにインツプの「賢明にして物わかりのよい判者」としての性格を描かうと企圖してゐたのであるから、作者としては最早や普通の喜劇を書くと同じ態度で、之に臨んだものとしなければならぬ。それが謝肉祭劇に特有にして、又作者得意の夫婦喧嘩の場面になつて、急に悪妻物語に興味を移したため、此の様に後半が纏つたものになつたのであらう。と言ふのも原本のクサンツスの細君は此の様な悪妻には描かれてゐないからである。

何れにしてもハンス・ザックスの謝肉祭劇は、此の「インツプ傳」によつて、最終段階に達した。詩人の該博な智識と眞摯な人生觀照は、謝肉祭劇の取材範圍を次第に擴大し、その内容を充實させて行つたが、若し之以上進む時は謝肉祭劇本來の使命を逸脱するものになつたであらう。詩人も亦過去四十有餘年の思ひ出も多い創作活動に、終止符を

打つものとして、此の五幕六百四十行に渡る長篇を書き、斯くて遂に永久に謝肉祭劇から筆を絶つたのであつた。

抑々謝肉祭劇は庶民階級の祝祭的餘興であるから、何時何處でも即座に演じうる種類のものでなければならぬ。従つて日本の狂言のやうに、出来る丈登場人物の數を少くし、筋を簡明直截にし、舞臺裝置を簡單にし衣裳や道具立てを手近に求めうるやうに構成されてゐなければならぬ。この意味に於てハンス・ザックスの謝肉祭劇には上演のための周到なる用意が拂はれてゐるのであるが、この事は詩人自身が俳優でもあり、舞臺監督でもあつた經驗による處のものが多かつたであらう。即ち晩年に近づくに従つて卜書が増してゐるけれども、孰れも上演可能な範圍に於て簡單に行はれる種類のものであることは、その間の消息を證明して餘りある。更らに内容に於ても當時の市民生活に直接訴へるやうな陽氣な諧謔が基調をなしてゐなければならぬから、奇拔な趣向と輕快な會話が必要とするのである。ハンス・ザックスは此の點に關しても、當時に於ける最も傑出した市民的笑話劇作家であつた。彼は原作を屢々工匠歌や笑話詩又は説話詩で取扱つて、その題材を十分自家藥籠中のものとした後、獨特な構想を以て或は改作し、或は翻案して、性格を創造し、環境を發展させる。しかもそれらの改作や翻案は外國種を自國物に變へるためばかりではなく、一體に敘事物語を劇物語に變へるために行はれたもので、原作の人物や事件を取捨選擇する方法に於て、彼の劇作家としての手腕を十分に窺はせるに足るものがある。ことに劇的所作に出来る限りその契機を與へようとする苦心してゐる點は、驚嘆に値するものがある。その用語も博覽強記と間斷ない修練によつて、自由自在に驅使されてをり、對話に至つては屢々農民や市民の生活と人情を寫實的に描寫して正に生動せしめてゐる。勿論彼の滑稽諧謔には當時の大衆を目前の粗野卑俗のものも見られるけれども、之を前時代の謝肉祭劇と比較する時は、その

間格段の相違が見られるのみならず、詩人は努めて作品の品位を向上せしめることに力を注いだのであつた。

だがハンス・ザックスにとつてはそれ丈が劇作の目的ではなかつた。彼は又穩健篤實な性格とルネッサンス期の文明開化の風潮によつて、國民大衆の教化啓蒙を念願しなほはゐられなかつた。彼は諧謔文學を通じて、市民社會のために生活の指導原理と人倫の規準を説かうとした。それがために作者は劇物語の中に内包又は隠蔽されてゐる教訓や新智識を、特に明瞭化しようとして、原作に於ける多くの劇的場面を犠牲にした。否教訓のない所にも教訓を求めたり、教訓そのものためにさへ、劇物語を作つたりした。かうして勿論教訓を強調するために取りられた色々な趣向が、そのまま劇的效果を擧げるに役立つ

てゐるものもあるけれども、大部分の場合、宛も水に油を灌いだ様に、教訓と諧謔とは調和せず、劇的興趣を殺ぐに至つてゐる。だから彼の謝肉祭劇は二つの相反する主要契機、無邪氣なフォームルと眞面目な道義とが絶えず相刻し、その間フォームルが優位を占めて教訓を従としてゐるものと、道義を主調として諧謔を伴奏にしてゐるものと、兩者の何れかに全く無關係なもの、即ち諧謔か又教訓か丈のものを生む結果となつたが、結局作者の性向と時代の要求とは、謝肉祭劇の特質を次第に變化せしめ、教訓的喜劇へと發展的に解消せしめて行つた。さればハンス・ザックスは正しく當時の市民文化を最も雄辯に代表する喜劇作家であるとともに、時代の生んだフマニテートの精神を最も忠實に啓蒙した民間教育者でもあつた。

## 第十五章 晩年の劇作

一五五八年—一五六五年

謝肉祭劇で庶幾された民衆啓蒙の趣旨こそは、一度筆を絶たうと迄決意した老境の詩人ハンス・ザックスをして、従來の工匠歌及び謝肉祭劇の詩作から次第に遠ざかり、今後尙數年の間本格的劇作に専念せしむるに至つた主要な動機であつた。今や此の老作家は千五百五十七年十一月五日六十三歳の誕生日に「老弱又は老衰の嗟嘆」を作詩し、爾來全集出版の準備を進めるとともに、聽て五十八年八月十七日「説話詩集第十三卷卷頭詩」で述べてゐるやうに「悪人を懲らし、善人を喜ばせ有り難がらせ、又は悲しめるものの心を笑話詩で陽氣にし、歡喜で満たす様に詩作を續ける」と云ふ心境になつて行つた。

されば彼が五十八年以後詩作した悲、喜劇は前章で見た同時代の謝肉祭劇が輕妙洒脫なのに比して、著しく着實眞摯な筆致を用ひ、努めて一般市民の教養を高めることに力を灌いでゐる。しかもその作劇法上の技術は既に名人藝とも云ふべき域に達してを了つたから、如何なる複雑怪奇な内容も、殆ど何等苦心の跡を留めず、如何なる長大沈漫な題材も適宜に要約し、聊かも澁滞する處がないかの如く見える。

だがそれだからと言つて、今後の劇詩が悉く名品佳作であると言ふわけではない。寧ろ名人藝に着きものの情性によつて、達者な脚色振りを示してゐる丈、清新な構想と豊な詩情を缺くに至り、大觀して従來の長所と短所とが益々擴大されて行つたと言ひうる。之は正しく作者が恐らく只要求されるままに、必要に應じて健筆を振ひ、博覽強記の智識と多年修得して來た演劇上の經驗とを、市場に供給して行つたからで、ハンス・ザックスの演劇運動も漸く老熟の境に這入つたものとする事が出来る。事實又ニュルンベルク市會議事録に依ると、五

十八年にはハンス・ザックスの率ゐる劇團にダビデ劇の一つと「チルス王の誕生と生涯と最後」(1557, 6, 30.)との上演が許可されてゐるのみならず、他の劇團にもザックス作の「ヨハネ及び基督の受胎と誕生」(1557, 6, 16.)が認可されてをり、五十八年十二月二十九日には Hans Saxon vergönnen, seine zwai spil nachn neuen jar an bis uf den weissen sonntag zu spielen. (ハンス・ザックスに二つの芝居を新年以後復活祭後の日曜日迄上演することを許す)とあり、又同年十二月卅一日には Den ansuchenden messerern ire zwo comedias izt nachn neuen jar bis uf den weissen sonntag bei sant Martha zu agiren vergönnen. (刀鍛冶職人達の請願により、彼等の芝居二曲を新年以後復活祭後の日曜日迄、聖マルタ教會で上演することを許す)とあり、續いて五十九年二月十三日には Jörgen Frölichs, messerers, und seiner gesellschaft zwai spil besichtigen und, wo sich nichts ungeschichts oder unzutugs darinnen befindet, soll man inen solche comedias bis künftigen sonntag und montag zu spielen vergönnen. (刀鍛冶、ヨルゲン・フレイリッヒ及びその一團の二つの芝居を檢閲し、それに不都合な箇所や不道德な箇所が存在しない時は、彼等にその劇の上演を次の日曜と月曜迄許すこととす)とあつて、當時老詩人の作品は毎年少くとも四曲以上要求されてゐたのである。なほ此の趨勢は六十年に至つて恐らく極點に達したであらうことは、五十九年十二月二十九日附で、ハンス・ザックスに上演許可があり、ヨルゲン・フレイリッヒにもマルタ教會で少くとも二曲許されてゐるのみならず、書記 Ambrosius Oesterreicher にも Frauenbrüderkloster 芝居を演ずることが許や

れてゐることによつても知られる。だが六十年三月廿七日愛妻クニグ  
ンデを失つた詩人は、六十一年の演劇には最早や自ら陣頭に立つ事  
しなかつたものらしい。此の年上演許可を受けてゐるものとしては、  
ヨルゲン・フレリッヒ一派しか知られてゐるな（2. Jan. 1561: Geor-  
gen Frölich auf sein bitt des Sachsens spi bei s. Martha zuspilien zulassen  
etc.）。かくて六十一年八月十六日全集第三卷の編輯が終るや、その緒  
言の最後に「親切な讀者よ、ては御好誼に免じて此のわが最後の著書  
を受納されよ。此の書を以て余は六十六歳の老後を、神の慈悲により  
隠退して送らうと思へば」と記してゐるやうに、爾後演劇活動から  
も隠退しようと思つたものと思はれる。その後六十一年終り頃から  
始まつた黒死病流行のため、市政府は一端許可した六十二年度の演劇  
を中止する様に命じたから、六十一年九月二日再婚再び青春の情熱に  
燃えたつた詩人ではあつたけれども、六十一年十一月十七日に *Ein  
tragedi, mit zwölf personen zu spielen: Andreas, der ungerisch  
könig, mit Banclano, seinem getrewen statthalter.* (ハンガリー王  
アンドレアスと忠義な代官バンクバヌス) 六十二年三月十一日に  
*Tragödia, mit vierzehn personen zu agieren: Die zwölf argen köni-  
gin* (十二人の邪悪なる王妃。因にザックス作品目録表には喜劇の部  
に入れてある) を書いたのみで、六十三年には全く劇創作から筆を絶  
つてゐる。漸く六十四年に至りニュルンベルク市では工匠歌人劇が再  
開され、此の年以來ヨルグ・フレリッヒ一座、Ambrosius Oester-  
reicher 一座の他に、織匠 Veit Fesselmann 一座の名が見られ(此の  
フェセルマンには六十六年の一月に Michel Vogel なるものが協力し  
てゐる) 三座競演の形を呈してゐるが、それかあらぬかハンス・ザッ  
クスは六十四年に悲劇一篇 *Theseus mit dem minotaur im irrgarten  
in 7 akten mit 25 personen.* (テーズニスと迷宮のミノタウル。1564, 2?)  
及び喜劇一篇 *Ein schöne comedi Terentii, des poeten, vor 1700*

*jaen beschriben. Von der bulerin Thais und iren zweyen bulern,  
dem ritter Thraso und Phoedria, und hat 5 actus.* (千七百年以前に  
書かれた詩人テレンツの面白い芝居。遊女タイスとその二人の情人ト  
ラーノとフェドリッパ。1564, 11, 4) を書き、六十五年一月にも悲劇  
*Tragedia. Lucrecia mit Ewrialo, hat 5 actus und 10 personen.* (ル  
クレチアとオイリアルス) と喜劇 *Comedia gar kurz judicium Paridis  
vur kinder in 3 actus* (パリスの審判、子供のため簡単にしたもの  
三幕) を書いてゐる。だから此等の作品は再起した新工匠劇團のため  
に書き下ろされたものであらうが、老工匠自身は最早や後進に席を譲  
つて第一線には立たず、かくてその四十八年(千五百十七年謝肉祭劇  
ヴェナスの廷臣以來)に渡る劇作生活も千五百六十五年詩人の年齢七  
十一歳の年を以つて、全く終熄を告げてゐる。之を要するに老來詩想  
の枯渴を幾度か嗟嘆して來たハンス・ザックスも、自らが多年育成し  
て來た劇團と長年愛顧を蒙つて來た市民とのために、指導教化の責任  
を果すとともに、詩人としての天職に生き抜かうとして、五十八年か  
ら六十年迄喜劇七篇悲劇十一篇(六十二年以後のものは前掲)を創作、  
相變らず強健なる筆力と倦むことなき演出力を發揮してゐるのである。  
扱て彼の演劇活動がなほ三年間(一五五八年—一五六〇年)繼續してゐる  
とすれば、その間工匠歌人舞臺は如何なる發展を遂げたであらうか?  
此の問題に就ては前々章で述べた通り、既に舞臺形式と演出様式をほ  
ぼ完成してゐたのであるから、今やそれら既得のものが如何様に應用  
され變形されたかを見ることによつて、ほぼ解決される様に思はれる。  
處て五十八年に這入つて最初に書かれたものは *Comedia mit 13  
personen. Pontus, eins königs sohn auß Galicia, mit seiner schönen  
Sidonia, eins königs tochter zu Britania, unnd hat 7 actus.* (ガリチアの  
王子ポンツスとブリタニアの王女美しいシドニア。1558, 1, 17) であるが、  
は當時民間に流布してゐた大衆本 *Pontus und Sidonia* (Vgl. Büschung

und Heinrich von der Hagen: Buch der Liebe, S. 269 f.) から取材されたもので、恐くかの「角質のゾイフリート」から暗示されて、作者はそれと同種類の此の北歐の英雄譚を脚色したものであらう。しかもその物語の骨子はかの「騎士ガルミとブリタニア侯夫人」と甚だ近似したもので、ガリチアの王子ポンツスとブリタニアの王女シドニアとの清純無垢な戀愛が陰謀家 Gendolet によつて妨害されるけれども、ポンツスの信仰と勇武は結局二人の愛を目出度く結ぶと云ふ筋書であるから、その趣向に於て特に斬新なものはない。然しそれ丈作者は主人公達の戀愛を描くに當つて、努めてその端正なる言動を細叙し、物語のもつ教訓的意義を鮮明にしようとしてゐる。だから第一幕に於てポンツスがブリタニア王 Artillus に召し出されて獻酌侍従に取り立てられる場面でも、第二幕でブリタニアの王女シドニアが彼を呼ばせて、互に清らかな愛を誓ひ合ふ場面でも、甚だ寫實的な描寫が行はれてゐる。ブリタニア王は宮内郷 Seneschal から、土耳其軍のために國土を奪はれ、父を殺され、母を見失つたポンツスが、辛じて逃亡してブリタニアに漂流し、今宮内卿の邸に保護されてゐると言ふ委しい報告を聞くと、早速卿に命じて、ポンツスを連れて來させる。卿が出て行くくと、王は側に居る Herzog Gottfried と土耳其軍がガリチアを占領した上は、ブリタニアにも攻め入つてくるであらうと、その對策を協議する。そこへ卿に案内されたポンツスが來て跪づく。かくて王は彼の不幸を慰めると、彼は厚く王の好意を謝し、神の加護を信じて將來の希望を捨てないと答へる。即ち作者はここでポンツスの謙讓な態度と敬虔な信仰を寫してゐるのである。又此の場面が如何に寫實的に演出されてゐるかは、宮内卿が退場してポンツスを連れて來る迄の時間的空白を、王とゴットフリート侯の對話で埋め、その對話の内容が後續する事件、土耳其軍侵入に關するものであることによつても知られる。同様な配慮は第二幕にも行はれてゐるのであつて、王女シドニアは侍

女 Elissa にポンツスの不幸な身の上を物語れば、侍女もポンツスの美丈夫にして徳高く武技に長じてゐることを噂し、かくて侍女は宮内卿とポンツスとを呼んで來ることとなる。侍女が出て行くと、シドニアは獨り名譽と徳行に輝くポンツスに逢ふことの出来る喜びを述べる。

そこへ宮内卿がポンツスを連れて來る。即ちこのシドニアの獨白も舞臺に間隙の出来るのを避けるためであつて、從來此の作者に屢々見られた様に、呼ばれた人物が直ちに登場すると言つた不自然な演出を避けてゐるのである。そして實に此後の作品には殆ど必ず此の様な配慮が行はれてゐるから、之こそ晩年のザックス劇の演出法上に於ける一得點としなければならぬ。かくてポンツスが來ると、シドニアは懇ろに彼を迎へ、再三固辭するのを勸めて傍の椅子につかせる。そして彼女は彼を自分の騎士に選ぶのであるが、二人の會話は極めて禮儀正しく、委曲を盡して人倫の道を守ることを誓ひ合つてゐる。

第三幕はブリタニア宮廷へ土耳其の騎士が挑戦してくるのを、ポンツスが引き受けて、之を倒す場面と、土耳其のサルタンがブリタニアの首都近くに布陣し、今二人の侍臣と就眠してゐる處へ、ブリタニア王、ポンツス、宮内卿等が敵の油斷を見澄まして夜襲し、異教徒を打ち敗る場面で、何れも作者得意の戦闘劇である。

第四幕はゲンドレットの第一の陰謀とその結果を取扱つてゐる。彼は侍女エロイザを通じてポンツスを中傷する(第一場)。シドニアはそれを信じて彼と絶交する(第二場)。彼は森の隱者の草庵に一時匿れる(第三場)。そして武術試合を催し、黒衣の騎士に變装して、宮内卿ゴットフリート侯ゲンドレットを打ち倒す。かくて彼等はシドニアに奉仕する様に命ぜられる(第四場)。シドニアは三人の申出でを聽いて、黒衣の騎士とは誰であるかを疑ふ。侍女がポンツスに違ひないと言ふ(第五場)。次いで第五幕はゲンドレットの第二の陰謀の始終を示す。彼はポンツスがシドニアと和解して再び宮廷で勢力を得たと獨白、今



度は其處へ来た王に直接、彼が王女に不義をしかけてゐると讒訴する。王は怒つてポンツスの辯解を信じない。ポンツスも王が騎士たるものの言葉を信じない以上、此の國を立ち去ると言ふ。王が去つて、シドニアが来る。彼は彼女に別れを告げる（第一場）。ゲンドレットは今やポンツスに代つて國政を握つてゐる。彼は王女をブルゴニヤ侯（Der Herzog von Bourgogna）に嫁する周旋をして、莫大な報酬を貰つたことを獨語（第二場）。王女シドニアは侍女にブルゴニヤ侯との結婚の日が迫つたことを訴へ、ポンツスを思つて悲しんでゐる。そこへ巡禮姿のポンツスが現れる。彼は一杯の酒を所望し、その盃の中へ嘗つてシドニアから與へられた指輪を入れて返す。かくて二人の愛人の絶えて久しい再會の場となり、二人は更らに愛の誓を新たにす。そして明日シドニアの結婚祝賀武術大會が行はれるから、そこでポンツスは武勳を立てようと言ふ（第三場）。かくて又もや試合の場。ゴットフリート侯や宮内卿に勝つたブルゴニヤ侯もポンツスのために打ち殺される。王は死者を運ばせ、悲し相にして退場（第四場）。

以上第四幕第五幕とも例のシナリオ式脚色法で、達者な演出と云ふ他はない。相變らず武術試合が見せ所であつたに相違なく、その他ポンツスが變装して活躍する處は「ガルミとブリタニヤ侯夫人」を思はせるものが多い。

第六幕はブリタニヤ王が自分の後繼者即ちシドニアの夫を定める場面であるが、宮内卿とゴットフリート侯が交々ポンツスを推擧する。しかも茲で此の二人の口を通じてポンツスが Engeland で武勳を立て歸つて來た事を委細物語つてゐるのは、主人公の其の後の動靜を知らせようとして、例の間接敘法を應用してゐるわけである。王は早速二人を遣つて、ポンツスと呼ばせる。處でここで又作者は二人が出て行つて歸つて來る迄の間を埋めるために、簡單な一場面を挿入してゐるのである。と言ふのが二人が出て行くと、王は更らに口上役にシド

ニアを呼んで來る様に命じてゐるからである。しかも口上役が退場すると、そこで又王は「娘の意見も聞いて見なければならぬ云云」と獨語してゐる處へ、シドニアが口上役と登場して來る。だから此の獨白も場つなぎのためのものである。そして王がシドニアにポンツスと結婚する氣があるかと訊き、王女が喜んで承諾すると、先きの二人がポンツスを連れて歸つてくる。之は要するに舞臺に生ずる二重の空白を巧に補充してゐるのであつて、作者の演出法が愈々精緻になつて來たことを示すものである。

それからポンツスは王から娘のために求婚される。彼は祖國ガリチアを土耳其軍から解放してから、王女を貰ひ受け度いと言つて、急遽出發する。あとでシドニアは侍女とともに神慮の有り難さを感じ、次いで土耳其軍とポンツス軍との戦闘。ポンツスは敵を悉く倒す。彼は合掌し、天を仰いで神に感謝する。とそこへ彼の母が乞食の姿で現れ、絶えて久しい母子再會の場面となる。

第七幕はゲンドレットの第三の陰謀を取扱つてゐる。彼はポンツスが土耳其軍に敗れて戦死したと偽り、自ら王女に求婚する。だが王とゲンドレットに迫られても、シドニアは承知しない。彼女が獨りになると、侍女が馳け込んで來て、王が監禁されたと言ふ。口上役が來て、王の玉璽の附いた指輪を證しにして、彼女が結婚を承諾しなければ、王は牢獄で餓死させられると言ふ王の傳言を傳へる。即ちここでは王のその後の狀況を知らせるために、極度に間接敘法を利用してゐる。口上役が去ると、ゲンドレットが王を連れて來て、再び結婚を迫る。そこへ百姓姿のポンツスが現れて裏切者を刺し殺す。かくて二人の愛人は目出度く結ばれる。

以上此の劇は神を信じ名譽を重し、正しい愛情に生きるものの勝利を描いてゐるのであるが、作者はその間得意の陰謀や戦闘や試合の場面を挿入して、觀客の興味を繋ぎ、教訓と劇的感興とを巧に結合して

ある。恐く老詩人の市民道徳に對する深い配慮から構想されたものであらう。舞臺面や演出法に關しても從來の經驗を活用すれば十分實演出來る様に仕組まれてゐる。只各幕がそれぞれ主人公の武勇譚の一節を取扱つてゐるために、一幕の内容は或は緻密に過ぎたり、或は粗野に過ぎたりするとともに、全體として統一された緊密な因果關係がなく、結局敘事詩を對話化したものと言つた印象を残すに至つてゐる。之は要するにザックス劇の根本的特質であつて、何れの劇作品を見ても、此の種の缺陷を大なり小なり持つてゐるのであるけれども、演劇が一種の娛樂と教養とを兼ねた民衆教化の手段と見做されてゐた當時にあつて、何等の指導者もなく、全く獨力で複雑な演劇運動を擔當した市井の一靴工匠に、それ以上を要求するのは無理であらう。だから此の意味に於ても、今後の作品では全體の構想よりも、寧ろ各場面に於ける趣向に重點を置いて、工匠歌人舞臺のその後の容相を検討すべきものであらう。

然る時は此の劇に次ぐ二作

Comedia mit 9 personen: Der Persus mit Andromede, unnd hat 5 actus. (ベルゾイスとアンドロメード。1558, 3, 22.)

Tragedia mit 6 personen: Die Daphne, eins königs tochter, und hat 3 actus. (王女ダフネ。1558, 3, 29.)

は何れも大蛇が活躍してゐることに注目しなければならぬ。此の二篇は何れもOvidiusのMetamorphosis(Die wunderbarliche Verenderung der Gestalten der Menschen und anderen Creaturen, Georg. Wickram zu Colmar, Mainz. 1545, 作者所載)から取材されたものであるが、恐くかの「メルジーナ」や「角質のゾイフリート」で大蛇の役が人氣を博したので、作者は愈々大規模な大蛇劇を仕組んだものと思はれる。

「ベルゾイスとアンドロメード」では第一幕でミネルヴァから Medusaを退治する様に教へられたベルゾイスが、第二幕ではもう翼の附

いた靴を履き(in sein geflügelten Fußkleid)蛇の髪の毛をしたメドウサの首を持つて出てくる。そしてその首の恐しさを説明して去ると、Atlas王がベルゾイスによつて大岩山に化せられる場面が續く。處てそこに「ベルゾイスがメドウサの首をさしつけると、アトラスは逃げ、歸つて来て、大きな山となる」(Persus helt ihm das haubt Medusa für; Atlas fleucht, kumbt wider, ist ein grosser Berg.)とト書にある。従つて此の場合矢張り奥舞臺側面の出入口が使用されたものと思はれる。即ち先に想定した様に、アトラスがそこから逃げ込むと、彼に代つて模造の大岩山が背後から押し出されたものであることはほぼ確實である。だからミネルヴァが前面舞臺へ現れて(Minerva kumbt)その岩山がアトラスの肉血骨毛髮鬚であることを委しく説明してゐるのである。それからミネルヴァはアトラスの果樹園で黄金の林檎を奪つてくる様にと命じ、番をしてゐる二匹の大蛇は今丁度眠つてゐるからと教へる。と第三幕ではもうベルゾイスがその黄金の林檎を持つて登場して来る。そして今度はミネルヴァからエチオピア王 Cepheusの國へ行けと教へられ、かくてベルゾイスがアンドロメードを海蛇から救ふ場面となる。しかも今迄は獨白又は對話で敘事的に筋を運んで來てゐるのが、此の場面文は詳細に脚色されてゐる。據つて如何に當時大蛇の活劇が呼び物であつたかを察知することが出來よう。その海蛇(Wasserrache)の形相は Phineusの臺詞に依ると、口から火を吐き、背は角質で長い尾と翼とを持つてゐるとあるから「ゾイフリートの大蛇」と同じものが使はれたものと思はれる。此のフィネウスはアンドロメードと結婚する筈であつたのを、彼女が海蛇に捧げられることになつたので、今嘆き悲しんでゐる。それを Furcht als が色々慰め、二人の對話で、アンドロメードの不幸な運命が委しく紹介される。即ち第三幕はまだ例の通り敘事的對話に過ないが、第四幕、エチオピア王は娘アンドロメードに因果を含め、二人の愁嘆

は盡きるべくも見えない邊りから、描寫は精細を極めてゐる。遂に王は娘の手に手錠を掛け (Cepheus schleust ir die hendi in die Bandt) 自分の無力を嘆き乍ら、一隈に退けば、(Der König tritt von ir auf ein ort.) アンドロメダは天を仰いで、此の世に最後の別れを告げる。とペルゾイスが飛行して来る。(Pereus kumbt geflogen) 彼は翼を振つて、山を越え谷を渡り、幾千里を飛んで、此の黒人國へ來たと言ひ、あすこの海中の岩で休まう。何だが白い大理石像の様なものが見えるぞと獨り言し乍ら、アンドロメダの縛られてゐる岩へ飛んで行く。だからここでも岩山の飾り付けが奥舞臺にあつたに相違なく、又ペルゾイスは前面舞臺へ高い處から飛び下りる様にして登場するか、或は翼の付いた靴を履いてゐるのであるから、その翼を動かして飛行してゐることを示したものであらう。それから彼はアンドロメダが恐しい海蛇が来るから逃げよと言ふのを諾かず、彼女を助けると言ふ。父王がその問答を聽いて、近づいてくる。王はペルゾイスの身分や申出を聽いて、非常に喜び、娘を助けてくれたら、娘を彼に與へると約束する。そこへ「海蛇が来る。火を吐き乍ら乙女めがけて走つて行く。ペルゾイスは海蛇を突き刺し、切りつけ、倒れては又起き上り、互に追ひつ追はれつする。遂に海蛇は倒れる。かくて王とペルゾイスは乙女の縛を解き、父は娘を抱きかかへる」(Das meerwunder kumbt, speidt feuer auß, eilt auff die jungfraw. Pereus sticht und schlecht auff das meerwunder, steht auff, jagen einander umb, bis das meerwunder felt. Sie lösen die jungfraw auff, der vatter umbfecht die fochter.) 彼は娘の生命を救はれたことを喜ぶとともに、ペルゾイスに向つても我が女婿として稱讚を惜しまない。ペルゾイスはかの岩上にデュピターとメルクールとミネルヴァの祭壇を設けることを勧め、かくて王は王妃を慰め婚禮の準備をしようと言つて、皆々退場。正に「ゾイフリート」の大蛇退治の場の繰り返してある。だから海蛇は矢

張り前面舞臺へ宛も海中から浮び上るやうに、階段を上つて出て來、その死體は同様にペルゾイスによつて岩山の陰に投げ落されたものと想定される。

第五幕は例の陰謀の場で、アンドロメダに未練のあるフィネウスが同志二人と共に謀して、ペルゾイスを襲ひ、彼を殺さうとする。だがそこでペルゾイスの差しつけるメドウサの首によつて、順次化石にされること云ふ趣向が變つてゐる。即ち一人は劍を振り翳したまま、一人は弓を引き絞つたまま、又フィネウスは兩手を舉げたまま凝固して、石になるのである。然しここで此の三人の代りに模造した石像が用ひられたかどうかは疑問である。寧ろト書によつて見れば、彼等はぢつと動かずに立つたままであるものと思はれる (Phineus erstardt unnd bleibt mit aufgehaben henden stehen.)

此の大蛇劇は次の「王女ダフネ」でも最先きに再演されてゐる。そこでダフネの父 Thesalia の Pereus 王が百姓 Thesalus と登場して來ると、直ちに目下國內を荒してゐる恐ろしい大蛇の物語をし、その善後策に苦慮してゐるのであるが、日の神 Phobus の出現によつて國難から救はれることとなる。そして第二幕で日の神は火を吐く大蛇と長い間格闘し、遂にそれを倒す。それから日の神と Cupido が各々自分の力柄を自慢して口論となり、キューピットはフェーブスを金の矢で射、ダフネを鉛の矢で射る。そして第三幕。ダフネは森の中でフェーブスに追はれて、進退窮まり、月桂樹に化す。その月桂樹に化する處で「ダフネは逃げて、再び歸つて來ると、月桂樹になつてをり、兩手を擴げて立つ」(Daphne fleucht, kummet wider und ist ein lorbeerbaum, steht da nit außgebreiten armen.) とあるから、之も先きに見たアトラスが化石になる場合と同じ演出法が取られたものと思はれる。即ち觀客の目の前で直ちに變形することが出来なかつたのである。

處で大蛇の演出が如何に當時好評を博したかは、同年(五十八年)

九月二十七日作 Tragedia mit 21 personen : Von Alexander Magno, dem König Macedonie, sein geburt, leben und endt, unnd hat 7 actus. (マケドニア王、アレキサンダー。その誕生と生涯と最後。)の第一幕の幕切れて、特にわざ／＼大蛇を出して、舞臺の上を一巡させてゐるのでも判かる。此の劇は序辭を斷つてある通り、プルータルクの英雄傳、Eusebius (Das Buch der geschicht dess grossen Alexanders von Johann Hartlieb, 1488) Bocattius (Furnehmste Historien und exempel von widerwertigem Glück, von Hieronymo Ziegler verteuuscht. 1545.) 及び Justinus (Des Geschichtschreybers Justini wahrhaftige Hystorien, deutsch von H. Boner, 1531.) 等から取材されたものでも、此の第一幕は Die Schedelsche Chronik (1496) 又は Chronica Zeytbuch unnd Geschyhbibel von anbegyn bisz in disz gegenwertig MDXXXI Jar. Durch Seb. Francken von Wörd. 1531. が利用されてゐる、と言ふ。(Vgl. W. Abele, Die antiken Quellen des H. S. s. 33.)

埃及王 Nectanabus は廿六年間の治世を平和に過して來た事を神に感謝してゐると、急使が來て、波斯王 Artaxerxes が侵入して來たことを告げる。ネクタナブスは事の真相を知らうとして、口上役に雨水の這入つた盥と棕栢の棒を取りにやる。口上役が其等の品を取りに行つてゐる間、王が魔術によつて密かに事の眞偽を知り度いのだと言つてゐるのは、舞臺の空白を埋めるためである。かくて彼は侍臣達を遠ざけ、棕栢の棒で輪を畫き、盥を中央に置き、多くの異形の文字を記して、盥の中を覗く。とやがて背後にのけぞらん計りになつて、大軍が攻めよせ、埃及の神々迄も敵に味方してゐるのが、水中に見えると言ふ。彼は靈 (Der geyst) を呼び出して、更らに委しい豫言を聞かうとする。靈が現れて、波斯軍のために國土は奪はれ、王は捕へられると告げる。それを逃れるには王自身隠退し、亡命してマケドニアのフリッップ王の宮廷へ行き、魔術を以て王妃 Olimpias に仕へるより他

に仕方がないのである。そこで王は靈を去らせ、魔法使に變装して、マケドニアへ出發しようと言ふ。

マケドニアの王妃オリムピアスは青年 Pausanias と、遠く出征してゐるフリッップ王の安否を氣遣つてゐる。彼女はパウザニアスの勧めで、近頃當地に來た魔法使を呼ばせ、王の運命を占はせようとする。パウザニアスが出て行くと、王妃は評判の高い魔法使に非常な期待を寄せてゐる。その臺詞も例の通り舞臺の空白を埋めるためのものである。やがて前場のネクタナブス王が法術師の風をして來る。彼は王妃に依頼されて、澤山の輪の付いた棒と天球とを取り出し、それ等を觀て (Nectanabus zeucht sein polum mit viel zirckeln unnd spera herfür, schaudt diese) フリッップ王のその後の動靜を告げる。だがそれとともに、彼は王妃の美貌に恍惚となる。王妃は「何故そんなに妾の顔をしげしげと見るのか？」と問ふ。再三問はれて彼はヂュピター神が彼女に懸想し、大蛇となつて通つて來ると豫言する。彼女は夫の留守にそんな不義は出來ないと訴へるが、法術使はフリッップ王にもヂュピター神から御告げある筈だから、心配はないと答へる。王妃は泣き乍ら退場。あとでネクタナブスは今晚大蛇に變身して、王妃と衾をとものにしよう。之から魔法の力を試して見るのだと言つて、一端退場。再び來た時は、大蛇の形となり、舞臺を一巡して去る (Nectanabus gehet ab, kumbt baldt wider wie ein trach und gehet herum unnd wider ab.)。

以上が第一幕であるが、此の幕が魔法の場と大蛇とが呼び物として脚色されたものであることは疑を容れない。と言ふのもオクタナブスの事件はプルータルクにはなく、シェーデル年代記から特に取られたものであるからである。

第二幕はそれから十八年後、マケドニア王妃オリムピアスとネクタナブスとの間に生れた子供は既に十八歳になつてゐる。王妃はそれが

ヂュピターの子であると思つてゐる。彼女が息子の將來をヂュピターに祈願して去るとネクタナブスが這入つて来て、その子がアレキサンダーと名付けられ、フィリップ王の子として育てられ、今や文武に優れた若者になつたことを傳へる。そこへ當のアレキサンダーが来る。彼は此の魔術使をして自分の運命を占はせる。魔術使は天球 (Sphaera caeli) を目詰め、天を仰ぎ、彼が希臘小亞細亞フリカ波斯印度と、

全東洋を支配するに至るけれども、結局家臣によつて毒殺されると豫言する。そこで彼は更らに魔術使自身の運命を豫言させる。すると彼は自分が自分の子によつて殺されると言ふ。アレキサンダーはその豫言を適中せしめないため、自分の手で魔術使を突き殺す。だがネクタナブスの最後の告白によつて、彼の豫言は結局適中したことが判る。アレキサンダーが退場すると、二人の從臣が来て、死體を運び去る。

次いでアレキサンダーはフィリップ王から王位を譲られ、ペロポネソス征略に出陣する。そのあとでフィリップ王は大蛇の子を生んだ王妃を追放して、クレオパトラを後妻に入れようとするので、王妃はさきの青年パウザニアスを説いて、王を暗殺させる。だがパウザニアスも王の忠臣 Parmenio に捕へられ、残酷な死刑に處せられることとなる。かくて王の死體も侍臣達によつて運び去られる (Sie tragen den toden könig ab.) かうして舞臺の後片付けは依然として登場人物によつて行はれてゐるから、工匠歌人舞臺には遂に幕を下ろすことがなかつたのである。

第三幕では一方アレキサンダーがパルメニオ及び Clitus と、波斯の Darius 征討の軍議を凝らせば (第一場)、ダリウス王も Mazeus, Pessus 等の諸侯と對抗策を凝議する (第二場)。かくて大王は波斯へと進軍することとなる (第三場)。

第四幕は波斯の陣營へマケドニア軍が攻め込んで来て、例の通り激戦。波斯軍は敗亡する。やがてダリウスから降服の使者が来る。だが

和議は成立しない。そこでダリウス王は再び戦備を整へて攻撃に出ようとする。マケドニア方では、アレキサンダーが寢坊してゐると言つて心配してゐる。だが彼は早朝太陽を拜して供物を捧げて來たのである。とそこへ波斯方が攻め込んで来て、又もや戦鬪。波斯は敗れ、皆々敵を追うて退場。即ち此等合戦の場面は相變らず常套的脚色法に依つてゐる。次いでダリウス王の家臣ベッスがマツェウスを説得し、ダリウス王を暗殺する。アレキサンダーはその遺骸を厚く葬らせ、二人の裏切者を極刑に處する。

第五幕からアレキサンダーの性格が一變して来る。彼は勝利に驕つて漸く暴虐振りを發揮するのである。即ち諫言する Clitus を刺し殺し、教訓する Calistenes を投獄する。しかもクリッスを殺した彼は忽ち後悔し、自分の短慮に絶望して自刃しようとする。家臣達がそれを止める。しかも彼等の中には色々甘言を呈するものもあるので、王は又もや慢心を起し、自ら地上の神だと僭稱するに至る。

第六幕。アレキサンダーは既に印度に侵入。印度王 Porus を攻めて (戦鬪)、之を降服させる。けれども彼の乞ひを容れて、もとの王位に復してやる。それから侍臣達の推舉で Calanus なる賢人と呼ばれる、政治の要諦を尋ねる。「カラヌスは乾いた皮革を持つて来て、地上に投じ、その一端を踏むと他端が反り返る。他端を踏むと、前的高端が反り返る。革の中央に立つと、靜止してゐる」(Calanus bringet ein dicke handt, wüfft die an die erdt, tridt an ein ort darauff, so schnabt die haut am andern ort auff; so tridt er ans ander ort, so schnabt das ort auff; zu letzt steht er mitten drauff, so ligt die handt still.) 即ちこの長い卜書は作者が新しい趣向を演出するに當つて、如何に、行き届いた注意を拂つてゐるかを示すものである。かくて政治の要領も此の通りで、一方を攻めれば他方が背き、他方を降せば一方が離れる。中央に位して善政を施さなければならぬと、カラヌ

スは言ふ。それから彼は王がバビロンで毒殺されること、自分も自ら火中に投じて死ぬことを豫言する。そして彼が退場すると、舞臺の外で濕つた藁を以て煙を立て、宛も彼が自分を焼いてゐるかの如くする (Da mag man aussen mit nassem stro ein rauch machen, sanft verbren er sich.) だから何でも「ゾイフリート劇」第二幕ゾイフリートが大蛇を焼くのと同じ方法が用ひられてゐる。

かくて第七幕、アレキサンダー毒殺の場となる。マケドニアの太守達 Nearchus と Perdica とが近頃不吉な徴候が各地に現れてゐることを話し合ひ、大王の御機嫌を伺つて来ようと言つて去ると、若い兄弟の大王 Casander と Jolas が出て来る。彼等はそれぞれアレキサンダーの暴虐に怨みを抱くかどがあり、大王を毒害しようと思つた。そこで先きのネアルクスとペルディカが大王の御機嫌を奉伺し、不思議な海の怪物の話を披露に及ぼうとして、酒を所望する。直ちに口上役を通じて、命令が下る。先のカサンデルとヨラスとが酒盃を持つてくる。大王がそれを飲むと、立ち上り、身を振ぢ両手で腹を擦り、烈しく苦悶する。彼は死期の迫つたことを知り、色々後事を托す。城外から號泣する聲が聞えてくるので、何事かと頭を擧げて問ふ。ネアルクスが人民が王の重態であることを知つて悲嘆してゐるのだと答へる。此の邊は相變らず時間關係を無視してゐるけれども、劇としては却々精細な描寫であり、效果に富んでゐる。王は民衆に最後の挨拶をすると言つて、椅子に掛けたまま運ばれて行く。あとでネアルクス、カサンデル、ヨラス等が再び登場。王の急病を何かと話し合つてゐる處へ、ペルディカが馳け込んで来て、王の死を報ずる。時にアレキサンダーは三十三才と一ヶ月、統治十二年にして、十二人の太守に國政を委ねて、崩御されたと言ふ。

此の劇は第二幕で豫言されるアレキサンダーの運命が如何にして實現されるかを期待せしめる點で、最後迄觀客の興味を繋いで行くよう

に出來てゐるのみならず、大王の性格が中間で一變し、瞬間瞬間の氣分に左右される暴君となり、それがために非業の最後を遂げるに至るのは、作者の暴君に對する憎惡感を示すとともに、勸善懲惡の趣旨を盛つたもので、平和と自由を愛する啓蒙詩人の特色を最もよく現はしてゐる。何れにしても之と同様に英雄の一生を脚色した「チルス王の誕生と生涯と最後」と此の劇とを比較する時、部分的描寫が一段と精緻になつて來てゐることを見るのである。例へば劇中の人物の行動を出來る限り自然に合理的に運び、その所作を如實に表現する様に努めてゐることは、第七幕で王が毒杯を飲むに至る経路の描寫や、毒杯を飲んだ後の王の苦悶する状態を委しく規定してゐることによつても、十分に窺はれる。尙ほ此の劇の第六幕は印度に舞臺が取つてあり、印度人が登場し、大王はそこで五千の町と十五の民族とを征伏したとあるのは、獨逸劇で印度を取扱つた最初のものとして、注目に價する。恐らく作者は此の劇から印度に關心を抱くに至り、後に印度傳説「セドラス王とヘレバート」(後述)を劇化するに至つたものであらう。

以上古傳説に取材したものの他に、五十八年度の作としては、受難劇、最終裁判劇及び「アブラハムとロト」の三篇の聖書劇があるが、何れも大作であり、老詩人の旺盛な創作力には誠に驚嘆に値するものがある。

受難劇 Tragedia mit 31 personen, der gantz passio nach dem text der vier evangelisten, vor einer christlichen versammlung zu spielen, und hat 10 actus. (四福音書の本文に依る受難全曲。或る基督教徒の會合にて演ぜられるもの。1538, 4, 12.) は「過越の備」をするために基督がヨハネとペテロをエルサレムへ先發させる處(ルカ、二十二の七一—二)から始まり、アリマタヤのヨセフ、ニコデモ及びマリヤ等が基督を十字架から降ろし、埋葬するために運び去る處で終つてゐる。その全體の筋書が中世受難劇の傳統に従つてゐるのは作者に直接それ

を見聞する機会があつたことを思はせる。例へば此の劇に限つて、各幕毎に口上役 (Der ehnholt) が登場して、その幕の内容を説明してゐるのは、第二フランクフルト受難劇で、各場面ごとにアウグスティヌスの説明 (中獨演三四〇頁参照) が行はれてゐるとその軌を一つにしてゐる。只此の劇は中世劇のやうに大規模な市民的行事としての祝祭的野外劇ではなく、表題にもある通り、或る基督教徒の集會のために書かれたものであるから、工匠歌人舞臺式な室内劇として、極めて聖書に忠實に眞面目に脚色されてをり、觀覽物的粉飾や餘興的附加物を挿入してゐない。然しその卜書には當時の演出法を知る上に、却々興味深いものがある。就中第八幕、ピラト再審の場、「ピラトの下僕達がイエスの着物を脱がせ、柱に縛る」(Die knecht Pilati ziehen Jesum seine Kleider ab, binden in an die seulen) とそれから「赤い繪具に浸した鞭や笞をもつて来て、イエスの身體を擲打すると、身體が血塗れになる」(Ein knecht bringt geyssel unnd ruten in rotte farb eingetrucht. Sie haben in sein leyb, wirt blutig.) とある處や、そのあとで彼等はイエスに茨の冠を被せ「それを赤い繪具に浸した海綿で彼の頭に押しつけると、血が彼の顔の上で流れ落ちる」(Sie trücken im die kron ans haut mit einem schwenlein inn rote farb eingeduncket, das imbs blut ubers angesicht abfließt.) とある處などは、イエスの血塗れた裸體を見せたもので、如何にも寫實的な演出である。尤もマックス・ヘルマンはこの様な場合イエス役者は肉襦袢を着てゐたものであるとしてゐるけれども (M. H. Forschungen, S. 132) それにしても寫實主義に變りはない。

最終裁判劇 Tragedia mit 34 personen, des jüngsten gerichtes, auß der schrift uberal zu sammen gezogen, und hat 7 actus. (最終裁判。聖書の到處から奇を集めたもの。1558, 5, 25.) 著 Karl Reuschel (Vgl. Die deutschen Welgerichtsspiele des Mittelalters und der Refor-

mationszeit, S. 151 ff.) に依れば、千五百十六年五月十一、十二、十三日聖靈降臨祭に行はれた Freiberg の所謂 Ludi solennes (祝祭劇) を底本として、構想されたものと言ふ。即ちフライベルクでは公設市場で、原罪、基督の誕生と生涯及びその三日目に最終裁判劇が行はれてをり、そこに登場する人物名とザックス劇のそれとは、ほぼ合致してゐるばかりではなく、兩者とも Ars moriendi (死に處する法、宗教演第十四章エーダマン劇参照) の戯曲化を取扱つてゐるからである。勿論フライベルクの戯曲臺本は今日殘存せず、只 Andreas Moller の Theatri Freibergensis chronici pars posterior (1653. フライベルク演劇年代記、後篇) の記述する處によつて、その内容が僅に知られてゐるのであるから、委しい考證をする由もない。孰れにしてもハンス・ザックスは例の通り中世劇の傳統による最終裁判劇を原本として、豊富なる聖書の引用、彼独自の舞臺形式及び新教教義「信仰による義證」(Die Rechtfertigung durch den Glauben) とを以つて、急速に此の劇を書いたものであることは疑を容れない。

劇は他のザックス劇と同じく、口上役の挨拶、内容の説明に始まり、式日用上衣を着た祭司 (Der priester kumbt inn einem coroch) が登場、百六十七行に渡る長廣舌を振つて、世の終末の近づいたことを説教する。

第二幕は「死に處する法」即ち作者が四十九年九月六日に書いた「頻死の富者ヘカストス」(Macropedius の Hecastus 改作、宗教演第十三章道德劇参照) の趣旨を簡約したもので、此の人間の死を取扱つた物語が、世界の終末に行はれると言ふ最終裁判と結合される契機は、既に遠く九世紀の作とされる Muspilli (im Sinne von Weltbrand, d. h. Erdvernichtung, 世界の破滅を意味する。Vgl. G. Ehrismann, Schlubband, S. 141 ff.) に見ることが出来る。

此の劇では口上役の説明に次いで、驕慢な若者 (Der stoltz jungling)



が登場、享樂生活を謳歌し、最終裁判を蔑視する。彼はまだ若い。神信心をするにしても、ずつと先の事だと言ふ。そこへ死が近づいて、手弓で彼を狙ふ。若者は色々に懇願し、せめて一年丈でも猶豫してくれと頼むけれども、死は容赦しない。若者は鷲の羽があれば、ヘラクレスの柱迄でも逃げて行くのにと悶える。しかも死は何處へ逃げてでも神の手に見出されると峻厳である。そこで若者も漸く今迄犯して來た罪業を反省し、後悔し出す。悪魔が來て、なほも彼を苦しめる。遂に死は彼が裁かれて永久に甦ることがないと威し、弓を射る。若者は倒れ乍らも、なほ一心に救を求め。悪魔は手を拍つて、彼の廻りを踊り跳ねる。そこへ祭司が來る。彼は基督の十字架の死を説き、心から悔い改めれば救はれると教へる。だが若者は自分の罪の深さを思うて、今はそれを信じない、しかも祭司は聖餐によつて信仰を強めれば、必ず永遠の生命が與へられると、順々と説く。遂に病める罪人 (Der krank sündler) は漸く安心し、感謝し、宛も死んで行くかの如く息を引く。(Da zeucht der krank, samb er sterbe.) 悪魔はかうして折角の獲物が無駄になつたので、唾を吐き乍ら、怒つて退場、天使が來て死者を運び去る。即ち此の場面は全く新教教義による作者自身の信仰を具象化したものである。

第三幕は口上役の説明後、王、司教、市民、職人、百姓が交る交る登場して、それぞれの階級が腐敗墮落してゐる様を説き、世の終末が來たことを告げる。所謂顔見世形式によつてゐる。

第四幕——第七幕は愈々最終裁判の場である。口上役に次いで基督が使徒と天使を連れて現はれる。主は虹の上に座をとり、最後の審判を行ふ旨を宣言。使徒達を審判官に任じ、四人の天使をして、世界の四方に向つて喇叭を鳴らさせる。ミカエル天使は王侯達を、ガブリエル天使は僧侶達を、ラファエル天使は町人職人牧夫百姓を、ウリエル天使はその他凡ての死者を呼び起す。Cherub 天使が彼等に拷問の道

具を示し、善人には天國を、悪人には地獄を約束する。そして拔身の劍で群集を二分する。基督は右手に集つたものの上に十字を切り、彼等を迎へる。そして正しき者との間にマタイ傳二十五章三十四以下の問答が續く。アダム、エバ、ダビデ、取税人ザアカイ、マリア・マグダレーナ、十字架に懸けられた右手の強盜、パウロ等それぞれ主を稱へる。

第五幕。口上役。次いで主は悪人の罪狀を告發する者を求める。モーゼが十戒を逐條的に説いて、世人の墮落してゐる様を述べる。之は二百六十三行に渡る大論説である。

第六幕に至つて悪人が裁かれる。主は王侯を糾問する。王は無言。Iniferが彼の罪惡を數へ上げて墮獄を主張する。同様に僧正も下を向いて答へないので、サタンが舊教僧の從來の貪慾非業を説く。この邊りも新教教徒としての作者の立場を最も明瞭に示してゐる。最後に一般大衆が主によつて糺弾される。一人の魂が己が罪を是認する。悪魔 Beelzebub が踊り乍ら出て來て、主に、容赦なく罪人を地獄の業火へ追放して貰ひ度いと願ふ。彼は樂し相に退場。罪人達は愁然としてゐる。すると第七幕、口上役の解説に次いで「慈悲」(Die Barmherzigkeit) は彼等のために辯護し「正義」(Die Gerechtigkeit) は彼等を弾劾する。大天使は喇叭を吹いて、愈々神の宣告が下ることを告げる。そして主は彼等を地獄に墮す。墮獄された魂達と主との間にマタイ傳第二十五章四十一以下の問答があり、ルチフェルは他の惡魔達と出て來て、彼等を鎖で縛つて、連れて行く。彼等の悲鳴が續く。主は選ばれたる者を天國へ招く。かくて皆々整列して退場。ペテロが大きな鍵を持つて續く。この時「キリストは甦り給へり」の復活祭歌が歌はれる。口上役の結辭。此の最後の幕は中世劇の傳統にそのまま従つてゐる。特に復活祭歌が歌はれてゐるのは、此の劇が復活祭の頃上演されたものであることを示してゐる。だから五十八年十二月二十九日に「新年

以後復活祭後の日曜日迄」上演が許されてゐるのは、此の劇のためにはなかつたか？ 尚アウグスブルクでは千五百七十一年、Nördlingen では七十九年 Memmingen では千六百二十一年にその地の工匠歌人組合が最終裁判劇を上演してゐるのも、此のザックス劇であつたと推定される。だから中世劇の傳統もかくてザックスを通じ、なほ後世永く傳へられて行つたのである。

「アブラハムとロト」 Tragedia. Der Abraham, Lott sampt der opfferung Isaac, hat 21 person und 7 actus (1558, 9, 13.) は先の「イサクの獻納」(1553, 11, 4.)を増補擴大したもので、第一幕に於て創世記第十六章と第十七章、第二幕に於て第十八章、第三幕と第四幕に於て第十九章(ソドムのロトの話)、第五幕に於て第二十章、第六幕に於て第二十一章一節—二十一節迄、第七幕に於て第二十二章一節—十三節迄を取扱つてゐる。此の中第二幕の前半は「イサクの獻納」の第一幕前半を、第七幕はその第二幕と第三幕とを、少數の辭句を除いて、そのまま踏襲してゐる。全體の脚色法は例によつて聖書の敘事物語を對話化したものに過ないから、前述の受難劇や最終裁判劇と同様、新味や詩情に乏しく、傳統的な聖書劇の復習とも言ふべきものである。只第三幕、ソドムのロト (Lott zu Sodom) が二人の天使ガブリエルとウリエルを都門で迎へて、自宅へ招じ(第一場、それから自宅で姉娘が粉を捏ねて、饗應の準備をしてゐる處へ、ソドムの町民が多數押し寄せてくる場面は、甚だ生彩を帯びた描寫をしてゐる。ここには確に門扉が装置されてをり、その覗き窓から姉娘が家の外を窺ひ、ロトの妻が大きな石で門を押へるやうにと言ひ、ロトが門の外へ出て行つて、天使によつて又家の中へ押し返される(創世記十九の三—十)。それからソドムの人人が戸を突き破らうとして、目が眩み、威嚇の言葉を殘して退場すると、二人の娘婿 Serei と Sirel が来る。彼等はソドムの町が亡びると言ふ天使の豫告を信じない。ロトの妻が一緒に逃げる

やうに色々勧めるけれども、婿達は嘲笑して應じない。かくて彼等はソドムの町とともに亡びるわけであるが、此の場面は全く作者の創意に依るもので、次の幕の伏線となつてゐるのである。(以上第三幕)ロト一家は皆々包みを負ひ、天使に連れられて逃げて行く。ロトは天使が山へ逃れよと云ふのを、ソアル (Zoar) の町へ行くと云ふ。そこで天使達が退場すると、火が降り始め、大きな叫聲が起る (Nach dem fecht es an, regnet fewer und wird ein grob geschrey.) そしてロトの妻は振り返つて見たために、柱となつて動かなくなる (Das weib sieht unnb, wird ein sewlen, bleibt stehn.)。彼等が凡て退場すると、アブラハムが来る。彼がソドムの町の滅亡して行く様を述べる處は、創世記第十九章二十七、二十八節に依つてゐるけれども、劇としては間接敘法を用ひてゐるわけである。次いでロトと二人の娘が出て来る、ロトは山の巖穴に住むことと言ひ、娘達は凡ての男達が死に絶えたから、父と俱に寝て、子孫を作らうと相談する。即ち茲て先の二人の女婿の役割が意味を持つて来るのである。以上の様に第四幕では舞臺に火を降らせたり、ロトの妻が鹽の柱になつたりする處を演じてゐるが、それらの事は恐く、大蛇が火を吐いたり、ヘルズイヌ劇で Phineus 他二人が化石になつたりすると同一方法が取られたものであらう。尚ほ演出法上で興味があるのは、第六幕でアブラハムの妻サラが、割禮をしたばかりの赤坊を抱いて出てくるのであるが、そこに「サラ坐つて、宛も息子イサクに乳を飲ます如くする」(Sara sitzt, samb seug iren son Isaac.)とト書にあることと、之によつてその幼児は人形が用ひられたことを推定せしめる。

以上は五十八年度の聖書劇を見たのであるが、此の種のものとしては尙翌五十九年度に書かれた二曲  
Tragedia mit 8 personen, der gott Bell, und hat 3 actus. (ベル神 1559, 1, 14.)

Die comedi der Königin Hester, ganz durchaus gefast, weilentfingiger mit etlichen actis und personen gemehret, und hat jetzt sieben actus und 23 person. (喜劇、女王エステル。全體洩れなく脚色。若干の幕及び人物を以て一段と委しく増補したれば、今は七幕二十三人に達す。1559, 8, 8.)

があり、前者は外典ダニエルの書から取材され、後者は舊約エステル餘録 (Zusätze zum Buch Esther) によつて既に千五百三十六年十月八日三幕物に書かれてあるものを、更らに増補改訂したものである。しかも「ベル神」劇は小曲乍らよく纏つてをり、従来見て来た様な工匠歌人舞臺を最もよく利用してあるものとして、注目に値する佳作である。

舞臺はバベル (Babel) の異教神ベル (Bel) の殿堂内で、奥舞臺には芝居の始まる前に、ベルの偶像を飾つた祭壇があり、前面舞臺右側には神殿に入る門扉がある。第一幕ではその門扉を這入つて、ベル神の三人の祭司が登場。主として前面舞臺で、その三人の論議が行はれる。Sadoch はベル神の祭壇が出来てから莫大な供物が毎日王様から捧げられるので、七十人の同僚達が何不自由なく楽しく暮らしてあると言ふ。Aroch も陰謀、妻子達も食へて行かれると合槌を打つ。

だが實はその豊富な肉や酒やパンはベル神が一晩の中に召し上げるもので、ベル神こそ靈驗灼かな生き神であると王を欺き、又自分達は晝間斷食し、苦業してゐる様に見せかけて、民衆の信仰を繋ぎ、王の信用を得る様にしているのだと、内情を洩らす。Mardoch は然しその奸計も何時か王の知る處となり、彼等が間道を通つて、供物を横取りしてゐることも曝露するのではないかと心配する。サドッホが王は十分彼等の佞辯巧智に騙されてゐるから、大丈夫だと言ふけれども、マルドッホはダニエルと云ふ猶太人が、誠の神靈を體し、王から絶大な信頼を受けてゐるばかりか、色々な祕密に通じてゐる様子だから、氣懸りだと答へる。そこでアロッホは王に取入つて、あの猶太人をもベル

神を禮拜する様に強請しようと言ふことに相談が決まる。

次の幕でダニエルが這入つてくる。彼はベル神の祭司達の驚くべき不正と、王が善良にして彼等に騙されてゐるのを見抜いてゐる。だから後から這入つて来た王に、坊主達の悪計と、ベル神の偶像に過ないことを懇々と説く。王は口上役をして祭司達を呼びにやり、事の真相を調べるのだと言ふ。そこへ呼ばれて来たかの三人は、ベル神が生き神であるかないか、今晚験して見て頂き度いと申し出る。即ち何時もの通り供物を捧げ、王自ら戸口に錠を掛け、封印をし、明朝再び来て、供物の有無を確めて貰ひ度いと言ふのである。そこで従者が三本の酒罎と十二のパンを偶像神の前に供へる。だが王が神殿の戸口を封印し、一同退場する前に、ダニエルは口上役をして灰を持參させ、それを床の上に撒いて置く。

かくて第三幕、三人の坊主は穴から出て来て、食べたり飲んだりする (Die drei pflaffen kummen durch das loch, essen und trinken.) その中に鶏の聲が聞える。と彼等は残つた供物を携へて、穴から退場する (sie tragen das ubrig offer als mit und gehen ab durchs loch.) 入れ代つて王がダニエルと従者を従へて来る。王は戸口の門がそのままなのを見て、戸を開けさせる。そしてベル神の方を見ると、供物が全部無くなつてゐるので、ベル神の徳を讃へ、ベル神を誹謗したダニエルを死刑に處すると言ふ。だがダニエルは王を止めて、床の上の灰に印された足跡を指摘する。それが坊主共の足跡であることは、ダニエルも推察するが、彼等がどうして神殿の中へ出入りしてゐたかは判らない。そこで王は彼等と呼ばせて糺明する。かうして祕密の戸口があることが判り、三人の坊主は妻子もろとも絞首刑に處せられることになる。あとでダニエルは邪神を克服したことを、厚く神に感謝する。此の劇では舞臺が凡て神殿の内部であると考へられるから、時間空間の関係が一致してをり、劇物語は甚だ自然に進行してゐる。又舞臺

装置として用ひられてゐる祭壇や門扉も既に「イサクの獻納」その他  
て經驗済みのものであるから問題はなほ。只かの「穴」と言はれる「問  
道」又は「祕密の戸口」(der verborgen gang od. die heimlich thür)  
が問題であるが、ここでもクスターは卜書に「穴」とあることによつ  
て、奥舞臺に「迫り出し」があつたと主張し、ヘルマンは例によつて  
聖器室と内陣を通ずる戸口を想定してゐる。然し臺詞の中では「問道」  
又は「戸口」とあるから、從來見て來た様に、奥舞臺側面に出入口  
(B)があれば、それでも十分間に合ふのである。

次の「エステル」劇は實にザックスの聖書劇中最後の作品となつた  
ものであるが、之を三十六年作エステル劇初稿と比較する時、舞臺技  
巧や人物の出入、筋の運び方に於て、流石に老巧な脚色振りを見るこ  
とが出来ゝ(詳細は宗改演第十一章エステル劇參照)。

かくて爾後、ハンス・ザックス最後の劇作は専ら古代中世の英雄傳  
説に向けられ、五十九年度には二篇の喜劇と一篇の悲劇

Fin comedi, mit XVII] personen zu agieren: Die edel frau Berri-  
tola mit ihren mannicheftigen ungelück, und hat VII actus. (高貴  
なるベリトラ夫人の薄命物語。1559, 8, 16. ザックスの戯曲目録では悲劇の部に  
ある)

Ein comedi, mit XXVI] personen zu recitieren: Der fürst Wilhelm  
von Orientz mit seiner Amaley, des königs tochter auß Engeland,  
hat VII actus. (ホルリエンツ侯ヴェルホルムと英國の女王アマレイ。1559,  
10, 18.)

Tragedia mit 8 personen, die jungkraw Pura unnd riter Gottfid,  
und hat drey actus. (美女ペーラと騎士ゴットフリード。1559, 11, 11.)

Tragedia, mit 14 personen zu agirn: Die frumb künigin Arsinoes  
mit irem tyrannischen bruder, könig Pholomeo Ceramo, und hat  
6 actus. (敬神の女王アルシノエと暴虐な兄ペトロメオス・セラマエス王)。

1559, 12, 19.)

六十年には三篇の悲劇と一篇の喜劇

Ein comedi, mit XXIII] personen zu agieren: König Sedras mit  
der königin Helebat und Pillero, dem fürsten, etc., hat 7 actus. (サ  
ラス王ヘレバトとピレロ侯等。1560, 6, 13.)

Ein tragedi mit zwölf] personen. Die königin Cleopatra aus Egip-  
ten mit Antonio dem Römer, und hat siben actus. (埃及の女王ク  
レオパトラと羅馬の人アントニオ。1560, 9, 10.)

Ein tragedi mit acht-und-zweintzig] personen. Romulus und Remus,  
die erbawer der stat Rom, und hat siben actus. (羅馬市の建設者ロムルス  
とレムス。1560, 9, 20.)

Ein tragedia mit 24 personen. Artoxerxes, der künig Persie, mit  
seinem mancherley unfals der seinigen, und hat 7 actus. (波斯王ア  
ルトクセルクセスと一族の不幸。1560, 10, 12. 作者の戯曲目録では喜劇の部に  
ある)

を書いてゐるのである。然し此の種英雄傳説劇に於ても最早やその  
多くは慣習的技法と敘事的喋舌によつて場面が構成されてゐるから、  
新趣向として見るべきものが少く、明かに老成期の惰性による爛熟し  
た創作力を示してゐる。だから此の場合も、上記の作品中二三特異と  
すべき點に注目して、ザックスの舞臺が最後に到達した特殊事項を擧  
げるに止めておくこととする。

先づ「高貴なるベリトラ夫人の薄命物語」はデカールメロン第十六  
話を脚色したもので、例によつて達者な會話で物語を進めてゐる。ベ  
リトラ夫人と言ふのはシシリー島の總督 Arigeto Capetz の夫人で、  
此の島がカール一世に一時征伐された時、夫は捕へられ、自身は二子  
と乳母を連れて亡命する。だが一行はナポリに舟航しようとして、途  
中暴風に逢ひ、Puntza (Ponzo) 島に漂着する。處で劇はここで彼

女が舟に乗つて登場して來ることになつてゐる (Beritola kombt mit dem schiff.) 彼女は嵐の恐ろしかつたことを物語り、ここは何處かと問ふ。船頭が島の名を告げ、島が不耗な無人島であることを話す。彼女は神に祈念するために、乳母に子供達を托し、子供達に接吻して上陸する。と舟は漕ぎ去る (Beritola kisset die knaben und steigt auß dem schiff. Sie fahn mit dem schiff ab.) ベリトラはあなただけの方と歩き乍ら、神に身の不運を訴へる。それから海の方を見下ろすと、遠く沖の方で、小舟が海賊船に曳かれて行くのを見る。彼女は子供達が海賊に奪はれたことを知り、悲嘆の餘り氣絶して倒れるが、やがて又起き上ると、悲しい運命を諦める。そして牝鹿が洞穴から出て來るのを見たからと言つて、その洞穴の中へ這入る。がやがて直ぐに出て來ると、仔鹿が二匹あたと言ひ、二人の子供の代りにあの仔鹿の世話をして、生涯を此の島で暮らさうと決心する (第一幕)。此の場面は原作の平面的敘述に比して、甚だ立體的に構成されてゐるが、それ丈にかの「豫言者ヨナ」では未だ用ひられなかつた舟が、今や舞臺で實際に動かされるやうになつたことを確實に證明してゐる。恐くその舟は舞臺とはぼ平行する位の高さを有し、四人を乗せる丈の相當大懸りな模擬船で、前面舞臺の登場口近くに背後から押し出されたものであらうと言ふのも奥舞臺にはかの「大蛇の岩山」の如き、鹿の往む洞穴がなければならず、前面舞臺から観客席にかけて海が擴がつてゐると想定されなければならぬからである。尙牝鹿がここで實際に用ひられたかどうかは疑問である。恐くベリトラの獨白の中で言及されてゐる丈であつたと思はれる。彼女は「あすこで今牝鹿が岩窟から出て行くのを見たから」と完了形を用ひてゐるからである。然しよく訓練された犬が用ひられたことは、次の幕で明瞭に察知しうる。それはベリトラが Marggraf Conrad Mala Spini 夫妻によつて發見され、彼等に救はれて伯爵の領國へ伴はれて行くこととなる場面であるが、伯夫妻も嵐

を避けて此の島に寄港し、今退屈凌ぎに鳥見物をしようと、犬を連れて上陸して來た處である。そこに「獵夫が喇叭を吹く。犬が走つて行く。するとベリトラが洞窟から走り出て、小枝で犬を追ふ。獵夫が犬を引き寄せる」と卜書に記されてゐるのである。だから此の犬は翌年書かれた謝肉祭劇「寓話作者インツップ」第四幕でも用ひられたものであらう。

扱てかうして舟が當時劇團得意の出し物になつたことは、それが次作「オルリエンツ侯ヴィルヘルムと英國の王女アマリー」にも特に卜書で指定されてゐることによつても知られる。此の物語は Rudolf von Ems の Willahalm von Orlens (um 1238 entstanden) を改作した千四百九十一年のアウグスブルク版によつてゐるものとされてをり (Vgl. Ehrismann, Schlußband. S. 32.) その筋書は次の如きものである。

オルリエンツ侯ヴィルヘルムは Palzgraf Friderich と戦つて敗れ、伯の部下によつて殺される。だが彼を殺すのは伯の眞意ではなかつたので、伯はオルリエンツ侯夫人 Sabina に使者を遣つて、その生れたばかりの子供ヴィルヘルム (父と同名) を自分の養子として迎へる (第一幕)。それから十八年後、サピナ夫人は自分の子供の安否を氣遣つて、二人の侍女をやり、ヴィルヘルムの様子を探らせる。處がその侍女達の口からヴィルヘルムは計らずも、自分の本當の素性を知る。そこで彼は自分の父親を殺した人のもとに養はれるのを悲しんで、英國へ渡る (第二幕)。英國で武術試合に参加、武勳を立てた彼は、例の如く王女アマリーと相愛の仲になる。だが二人の結婚は認められ相もないので、彼は堅く愛を誓つて、佛國へ去る (第三幕)。その間に英王ハインリッヒは印度王 Helmo からの (手紙による) 求婚を容れて、アマリー姫に印度王との結婚を強請する。姫は想ひ餘つて、ヴィルヘルムにその旨を知らせる。と彼は英國に潜入し、姫を奪つて逃亡しようとして、捕へられる。彼は直ちに處刑される處を、英王妃の取做して、

僅に命丈は助けられ、苛酷な條件を附けられて、追放される。即ち肩に刺つた槍身は一國の王女の手以外の手で抜き取つてはならない事、アマリー姫の命令がなければ物を言つてはならない事、即刻英國を立ち去る事と云ふのである(第四幕)。そこでヴィルヘルムは漁師の舟に便乗して希臘へ渡る。そしてその漁師の斡旋で、希臘王 Ynachus の宮廷に迎へられる。彼の肩には槍が刺つてをり、彼の口は物を言はない。その槍を王が取らうとし、王妃が取らうとするが、彼は無言のまま固辭する。漸く王女が抜き取つて、繃帯する。それから此の啞者は希臘と波斯との戦で大功を立てる(第五幕)。更らに同じく波斯軍にその所領地を荒された尼僧院長 Beatrix は希臘王に救助を求めめる。希臘王はヴィルヘルムを派遣する。そこで彼は波斯王との一騎打ちで、敵を降服させる。此の尼僧院長は英王の姉で、僧院の財政難を救済するために英國に歸り、英王から金を拜領する。それとともにアマリー姫の快々として樂しまない風を見て、保養のために希臘へ連れてくる(第六幕)。かくてベアトリックスの仲介で二人の愛人は始めて再會する機會を得、アマリーの言葉で、ヴィルヘルムは物を言ふ様になる。希臘王は早速英王へ、二人の結婚を許す様にと急使を派し、印度王には自分の娘を與へようと言ふ(第七幕)。

以上簡単な梗概によつても判る様に、此の劇も戦闘や試合の場を織り交ぜた巧者な敘事的對話の連続であるが、特に啞者が活躍してゐる處に、新奇な趣向を見ることが出来る。處でその第五幕、ヴィルヘルムが英國を追放されて希臘に渡る處で、冒頭に「漁師登場、橈と魚籠を擔ぎ、大聲で叫ぶ」(Der Fischer geht ein, trägt ein ruder und ein fischfäblein und schreit:)とあり、漁師が希臘のアテーンへ渡航する客人はないかと言ふと、ヴィルヘルムが来て「渡航したいと言ふ意味を身振りて示し、一グルデンを渡す」とあつて、ここで確に舟が舞臺に存在したことを示すものがあるのである。と言ふのはその後で「漁

師が槍身の方へ手を延すと、啞者はそれを避け、槍身をそのままにしておく様にと身振りて示し、舟の中へ這入り、舟に乗つて漕ぎ去る」(Der Fischer greift nach dem eisen, der stumb weicht, deut im, er sol das eisen stecken lassen, tritt ins schiff, fährt mit im ab.)とあるから、之は異常な卜書であるとしなければならぬ、何となれば從來の例によると、登場人物が漁師であることを示すためには、橈を持つて出て来る丈で済まされてゐたのだから、ここでも「槍身をそのままにしておく様にと身振りて示す」丈で、二人は退場し、舟のことは凡て所持品と臺詞で暗示しておくべき筈なのを、わざとくに「舟の中へ這入り、舟に乗つて漕ぎ去る」と斷つてゐるからである。だがそれ丈にここで前劇の如く舟が前面舞臺一方の登場口(C)近くに押し出されてあつたものとすれば、場面は極めて明瞭に解釋される。漁師は今舟を出さうとして、自分の住居から橈と魚籠を持つて、奥舞臺背後(A)から這入つて来る。ヴィルヘルムは前面舞臺、舟のあるとは反對の側(D)から来る。そして二人が舟にのると、舟は又幕の背後に引き去られる。然るにケスターが「ペリトラ夫人」劇の舟を説明して言ふ様に、その舟が更らに舞臺と觀客席の間を前面舞臺に沿うて一週し、右から左へ這入り、その舟を動かしたものは舟の陰にある少年達であるとするのは甚だ疑はしい。(Köster, Die Meistersinger-Bühne, S. 72)と言ふのも若し舟がその様に自由に動かされたものなら、漁師は始めから、橈を持たずに、舟に乗つて登場して来る方が、效果的であるからである。なほその間の消息は「埃及の女王クレオパトラ」(1860, 9, 10.)第五幕、Actium の海戦を取扱つてゐる場面でも明瞭である。そこでは勿論此の戦が陸戦の形で演ぜられてゐるが、只卜書に「そこで彼等は長い間戦ふ。その間に女王は漕ぎ去る」(Da schlagen sie lang an einander, in dem fehret die königin darvon.)とあつて、矢張り舟は前面舞臺の傍に用意されて、靜止待機してゐたものである。

ことを知る。因にクレオパトラ劇は大體ブルータルクに據つてをり、第一幕、アントニオのクレオパトラ招宴。第二幕、クレオパトラの饗宴、クレオパトラとアントニオの釣魚遊び。女王はアントニオの釣竿に漁師をして豫め用意しておいた魚を付けさせる。第三幕、埃及に於けるアントニオ。クレオパトラは兄 Lisania 姉 Cassandra を殺させる。アントニオ羅馬にて Octavia と結婚。アントニオ、クレオパトラをシリヤに呼び、多くの都市を興へる。第四幕、クレオパトラ、アントニオと二兒を設ける。アルメニア王捕虜となる。アレキサンドリアに於けるアントニオの勝利。第五幕、アントニオとオクタヴィアの離婚。彼の遺言。アクチウムの戦。第六幕、Alba に於ける兇兆。諸侯の離叛。第七幕、アントニオとクレオパトラの死。

却説斯くの如く見て來ると、ここに「アレキサンダー大王」劇以來、ザックスの劇作には一つの特異な傾向が顯著に現はれて來てゐることを見逃すわけには行かない。それは彼の取材の範圍が今や主として希臘羅馬から、埃及、近東、波斯、印度に迄及んでゐることである。既に「ペリトラ」はシンリー島の物語であり、「オリエンツ侯ヴィルヘルム」は波斯の戦士と戦つてをり、同じく五十九年作「童女ブーラと騎士ゴットフリート」も近東の殉教者であり「敬神の女王アルシノエスと暴虐の兄プロメウス王」でも第一幕で Seleucus なる亞細亞の有力な王 (Der mechtig köng in Asia) が登場してゐるのである。

「童女ブーラ」は St. Ambrosius (um 333-397) の物語による初期基督教徒の殉教史である。彼女は所謂 Arrianismus (Die arrianisch Lehr,アレキサンディアの Presbyter Arius の教説) を奉ずる Keyser Valens in orient によつて、邪教徒として取調べられ、投獄される。然るに Ritter Godfrid が獄中に彼女を訪れ彼女と衣服を交換して、彼女を逃がす。處が彼を少女だと思ひ誤つて、一人の侍臣が言ひ寄り、彼の被つてゐるマント (husecken) を取つたために、彼の本性が露は

れる。彼は裁かれて斬首の刑に處せられることとなる。それを聞いたブーラはゴットフリートが正に處刑にならうとする處へ、自首して出る。二人は互に身代りになつて死なうとする。とそこへ口上役が來て、皇帝の裁きを傳へ(相變らず時間關係が無視されてゐる)、二人がその様に死に度いと言ふなら、二人とも殺して了へと命ずる。

「敬神の女王アルシノエス」は H. Boner 譯 (1531) Justinus の史實譚第二十四卷の記述を忠實に脚色したもので、Arrianoes とはマケドニア王 Isimachus の妃である。王は亞細亞の王 Seleucus (der König auß Asia) との戦闘で、殺され掠奪される。(Sie plündern, sehn nach dem ab.) 但し此の掠奪の場面が如何にして行はれたかは、問題であるが「ハーグワルツスとシグネ」(1556, II, 30. 前述) 第五幕にも、Hacco と丁抹王 Sigarus との戦闘のあとで、「ハンノーの命令によつて「死者が運び去られる。一同掠奪した後退場。」(Man treget die toden ab: nach dem man blindert, geht man ab.) と簡單なト書がある。之によつて見ると、そこには丁抹王と獨逸人ハインリッヒの死體があり、敵軍は皆逃げて了つてゐるのであるから、此の二人の死骸を運び去り、敵方の捨てて行つた甲冑武器その他の所持品、又は王の椅子卓子のやうなものを奪つて行つたものと思はれるから、ここでも同様な處置が取られたものであらう。つまりかくすることによつて、舞臺の跡片附けが出来るのである。

王の戦死後、アルシノエスは二人の子供とともに Cassandria 城に立て籠つて、時節の來るのを待つてゐる。處が彼女の弟 Pholomeus Cerannus は外敵を美事に驅逐した後、マケドニアを横領しようと言ふ野心を起す。彼は Arras なる大將の獻策を容れ、アルシノエスに結婚を申込む。アルシノエスは腹臣 Dion を派して、弟の眞意を確かめる。そしてプロメウスが彼女と結婚すれば、マケドニア王國を彼女の二子に返還すると、デュピターの神殿で誓つたと云ふ報告を受ける。



更らに彼女は自分でも弟を訪れ、弟から女王として王冠を授けられ、愈々安心して、彼をカッサンドラ城に招待する。今やカッサンドラ城では結婚式の大掛りな準備が行はれる。即ち女王の命を受けて、ディオンが口上役に命ずる準備の數々は豪華絢爛を極めてゐるのであるが（間接敘法）、此の邊り敘事詩人としてのハンス・ザックスの描寫力は相變らず豐潤なるものがある。だがカッサンドラ城に乗り込んで來たプロトメウスは忽ち二子を刺し殺し、王妃を追放する。しかも驕るもの久しからず、此の暴君も亦ヨーロッパ人の王 Belgus, (König der Gallier oder Franzosen) のために亡ぼされる。此の最後の幕（第六幕）で韃靼王の使者(Der postpot der Thartarey)が來て、プロトメウスに援助を申込み、拒絶されると言つた場面があつて、作者が目新しい趣向として、東洋人に注目してゐることを示してゐる。

尙ほ五十九年度の作としては Ein spiel mit 14 personen: Die zwölff durchleuchting, getrewen Frauen. (十二人の高貴にして貞節なる婦人。1559, 3, 30) なる一風變つたものがあるが、之は Arthinesiu, Argia, Sulpicia, Hipsicratea, Ipernestra, Thalia, Paulina, Julia, Porcia, Admete, Euadne, Parthea の十二人の婦人が Juno の前に代る代る出て、各自の經歷を物語ると言つた一種の顔見世形式で、之と對幅をなすものが、六十二年作「十二人の邪惡なる王妃」(前掲)である。即ちここでは「女王、名譽夫人」(Fraw Ehr, die köigin) の前に Semiramis, Venus, Niobes, Medea, Phedra, Clitimestra, Thullia, Olimpias, Cleopatra, Agripina, Rosinunda, Arsinoes が交々彼女等の罪惡史を物語り、それぞれ名譽夫人によつて糾弾されると云ふ筋で、兩者とも劇と云ふより敘事詩の集積である。その上工匠歌人舞臺では勿論女優は存在しなかつたから、十二人の女形俳優を揃へると言ふことも、餘り大膽な着想である。従つて此の二曲は上演用に書かれたものではなからう。

何れにしてもザックスの舞臺は六十年度に至つて、愈々東洋色を濃厚に發揮してゐる。と言ふのも嘗つて作者が愛讀し、數篇の寓話詩、笑話詩、工匠歌を取材した印度の物語集 Panchatantra の譯 Das Buch der Beispiele der alien Weisen (既述、謝肉祭劇 Nr. 69. 盲目の寺男參照)こそ、實に「セドラス王とヘレバート女王とピレロ侯等」の原典であり、「波斯王アルトクセルケセスと一族の不幸」は特にプルートクから選んだ波斯史劇であるからである。従つて König Sedras auß Indian の喜劇は、その前半が「ダニエル」劇(1557, 8, 10.)と甚だ近似した夢占ひの物語であり、舞臺の構成には格別新しい趣向は見られないけれども、その劇物語には流石に東洋的色調が漂うてゐる。セドラス王は Saba の町を征略すると(戰鬪の場、第一幕)夢を見る。そこでサバの賢人三人を呼んで、夢占ひをする様に命ずる(第二幕)彼等は此の機會に征伏されたことに對する復讐をしようかと相談し、夢が甚だ不吉な前兆だから、それを避けるために、王妃王子忠臣 Pillero 及び聖者 Kimeron の四人と、王の所持する白象と寶劍を犠牲にしなければならぬと進言する(第三幕)。王が悲嘆してゐるのを見たピレロ侯は、隱者キメロンに諮問する事を勧める。そこで呼ばれて來たキメロンの夢占ひは、甚だ吉報である(第四幕)。そしてその夢占ひ通り、各國から使者が朝貢して來る。Emelach からは寶石を盛つた黄金の鉢、アラビヤからは眞珠、希臘からは二頭の白馬(之は厩で渡される)とあつて登場してゐる(Tharsis からは刀劍、祭司メンからは紫衣、Thabar からは古代麻織物、Cedar からは黄金の冠、Edom からは白象(白馬の場合と同様)が獻げられる。以上の様にこゝでも眞偽二様の夢占ひが繰り返されてゐるのは「ダニエル」劇を思はせるものがあるが、しかもセドラス王の宮廷で、馬鹿役(Der Narr)が絶えず傍から口を出して、座興を取り持ち、彼は彼で獨特な滑稽な夢占ひをしてゐる處や、白象を始め豊かな貢物が運ばれて來るあたりは、自ら東

洋情調を横溢させてゐる。殊に忠臣ピレロがサバ市征略の前後に於て、寛仁大度の態度で臨み、平和を第一の樂しみとする様にと説いてゐるのは（第一幕及第二幕）、作者の持論であるとともに、又東洋風な仁君思想の反映であると思はれる。

扱て贈物を受けたセドラス王は使者達を厚く勞ふやうに命じ、ピレロが彼等を案内して去ると、今の贈物を妻子家臣達に分配する。その中王妃 Helebat は冠を、愛妾 (Des Königs bulschaff) は紫衣を貰ふこととなる。やがて此の二人が拜領の衣裳を付けて登場してくる。馬鹿役が食卓の準備をする。王は王妃を右手に、愛妾を左手にして、席に着く。口上役が白粥を持つて来て、食卓の上に置く。かうして劇中の人物がすべて演技に必要な道具立てをするのも従前通りである。すると王妃が側妻そばめの着てゐる衣裳を見て、不平を言ひ、王の頭から白粥を浴せる。王も激怒して、王妃を死刑に處する様に、ピレロに命ずる。だがその後で直ぐに王は後悔する。最早や食慾も進まない。彼は食卓を片附けるやうに吩咐け、馬鹿役が悪口を言つてゐる間に、一同を連れて退場する。即ちここでも舞臺に出てゐる道具建てが如何にして撤去されたかを知ることが出来る。(以上第五幕)。

ピレロは然し王妃を自分の家に匿まひ、王の前では血塗りの刀を示して、王妃を處刑にしたと偽る。王は一時の激情から王妃を殺したことに對して、悶々の情に堪へないでゐる。だから此の趣向も既に度々用ひられてを、何等目新しいものではないが、そのあとに續く王の嘆きに對するピレロの答は、東洋的教智に満ちたもので、すべて處世的訓言から成り立つてゐる。ピレロにそれとなく訓戒された王は遂に悲し相に沈黙し、足下を目詰めるばかり、そこで始めてピレロは王妃がまだ生きてゐることを告白する(第六幕)。そして王と王妃は再び出會、互に自分の過失を詫びかの夢占師共は呼び出されて、嚴罰に處せられる(第七幕)。

處でかくの如く劇物語の中には自ら東洋的色調が浸み出てゐるのに對して、登場人物の扮装には果してどの様なものが用ひられたであらうか？ 遺憾乍ら此の點に關し、卜書の傳へる處のものは甚だ少い。然し乍ら當時既に假裝舞踏會が盛んに行はれてをり、又中世劇からの長い傳統もあつて、舞臺装置が殆ど皆無に等しかつたのに反し、舞臺衣裳は一般に出来る丈役柄を示すに必要なものが、用ひられたと言ひ得る。此の事は又人物の所持品によつて、その身分を明かにしようとしてゐる事からも明かである。しかもその附屬品アクトリヤットに關しては、王には王冠、王笏、騎士には甲冑楯刀、日の神フェブスには弓矢籛、キュービットには目隠しと手弓と籛、ペルゾイスには翼のある靴、學者には書籍、法術師には天球、裁判官には權杖、漁師には魚籠、船頭には櫓、牧童には笞と雜囊、獵師には角笛と槍等々殆ど枚擧に暇のない程、多くの例があるのである。だから扮装に就て注意書が少いのは、寧ろ注意する必要もない程、當然それ相當の扮装が行はれることになつてゐたことを證するものであらう。とは言へ勿論それらの衣裳は傳統的のものか、當時の常識によつて選ばれたもので、歴史的風俗史的考證によつて、忠實にその原形が再現されたものではないことは、「フォルツナーツス」劇第六幕で、アンドロジアが土耳其風の着物を着て來たり (Andolostia kumbt türkisch gekleidet) 「埃太利侯ヴェルヘルムとアグライ」第七幕で、異教の王グラネアスが同じく土耳其風の服装で登場したり (König Graneas geht ein, türkisch gekleidet) してゐることによつても知られる。その他異邦人の服装として西班牙風の衣裳が用ひられたことが「フロリオとビアンツェフォラ」第五幕で、騎士ダリオの臺詞「そら、あすこに西班牙風の紳士と下僕が二三人で來るぞ」 (Schaw! dort kommen spanisch gekleidet / Ertlich herren und auch knecht.) によつて知られてゐるが、それ以外、例へばアガメムノンがトロヤ風の服装で登場するのも「タリタイムストラ」第三幕 Cithimestra

spricht : Du hast an ein trojanisch gewant,) ムチウス・スケゾオーラがトスカナ風の着物を作らせたと言ふのも (ムチウス・スケゾオーラ) 第二幕 Und hab mir auch zu diesen sachen / Ein thuscansich kleyd lassen machen) 実際には史實通りのものではないかたであらう。孰れにしても土耳古風及び西班牙風の衣裳は Sigismund Heldt の風俗畫集 (un 1665) に載つてゐるから、當時舞臺で用ひられたとしても、必ずしも不可能事ではない。だから印度人を現すためにも、印度風の服装が用ひられたとは到底考へられないが、或は土耳古風の衣裳に似たものが應用されたかも知れない。そしてかく推定することは、次の劇「波斯王アルトクセルクセスと一族の不幸」を見る時、ほぼ確實であると思はれる。

此の劇はブルータルクの英雄傳をそのままに脚色した一大陰謀劇で、從來此の種陰謀劇で用ひられた作劇法上の技巧の總決算をしてゐる観がある。

Atoxerxes と Cirus は兄弟で、兄は先王ダリウスの遺志によつて、明日王位を繼ぐ積りであると宣言する。然るに弟チルスは兄が父王のまだ波斯王にならない前に生れた子であり、自分こそ波斯王としての父の子であるとして、王位を要求する。勿論アルトクセルクセスはそれを拒絶して退場。そこでチルスは自分を偏愛してゐる母后を味方にして、明日即位式の折、兄を暗殺することとする。翌早朝軍神ミネルヴァの宮で、チルスは拔身の劍を持つて、一隅に匿れてゐる。とアルトクセルクセスは司祭とともに來て、今迄の服を脱いで、初代の王チルスの服を着、王冠を戴く (Der künig zewicht sich ab, legt die claidung künig Ciri an sambt der kron.) だからこゝでも「童女プーラ」が騎士ゴットフリートと服装を交換する様に、更衣が行はれてゐるが、之は明かに登場人物の役柄に應じて扮装が施されたこと、及び王を現はすためには從來通り、王冠が用ひられたこと、然し「チル

ス王の服」とあるから「エステル」劇第六幕で、アハシェエロス王がモルデガイに、王自身の指輪と王冠と、黄と白との絹地から出來た王服を與へる場面 (Der künig geyt Mardocheo sein fingering, ein kron und ein purpurkleyd, gelb und weiß seiden.) と同種類のものが用ひられたことを思はせる。それは隨つて純粹な波斯服ではないとしても、土耳古風と考へられてゐたものに近いものであつたであらう。

扱てアルトクセルクセスが王服を着終ると、もう一人の司祭が馳けて來て、暗殺者の潜んでゐることを報告する。そこで弟チルスが捕縛され、投獄死刑に處せられるのを、母后 Parisades の命乞ひで、漸く彼の所領地 Lydia に幽閉されることとなる (以上第一幕)。然しチルスは波斯王になる野心を捨てない。彼は味方を募る。他方母后は宮中でアルトクセルクセスに對し、チルスのために盛に辯護する。然しその後母后と弟の策動を知つて、王も愈々軍備を整へることになつたことが、例の如く、二人の侍臣の噂話で間接に敘述される。又母后の陰謀を見破つた王妃 Sathra は、母后を烈しく面罵する。後で母后は今受けた侮辱に必ず復讐すると誓ふ (第二幕)。かくてチルス軍議を擬らせば、アクトクセルクセス王も戰略を謀つてゐる處へ、チルス軍の侵入。追ひつ追はれつとの戦闘の結果、王も傷つき倒れるけれども、チルスも戦死したと云ふ報告が來る。やがて Manistes と云ふ宦官がチルスの首と右手とを持つて來て、王に捧げる (第三幕)。だが母后は喪服を着て (in aim klagkaid) 悲しんでゐる。彼女は王に説いて、戦に功勞のあつた家臣や宦官マニエサテスをそれぞれ残酷極まる刑に處させ、剩さへ捕虜になつてゐる敵將 Clearchus を放免させる。すると王妃ステイラが來て、クレアルクスの罪狀を數へ擧げ、彼の放免に反對するので、王は先の命令を取消す。それを深く怨んだ母后は侍女を語らつて、王妃を毒殺する。即ち仲直りの招宴だと偽り、宴席

て毒害するのであるが、宴會の場は無くて、王が母と妻との和解を喜んでゐる處へ、王妃が兩手を打ち合せ乍ら出て来て、椅子の上に倒れ、やがて死んだ様に崩折れるのである (Sie sincket gar nider, sam dot.) 王は兩手を振つて悲嘆し、王妃の死骸を片付けさせると、直ちに毒を盛つた侍女を呼び出して、極刑に處する (第四幕)。

アルトクセルクセス王は後嗣として、長男 Darius を選ぶ。ドリウスは跪づいて、王から王帽を冠せられる (Darius kniet nider; der künig sezt in den künig-huet auf.) 即ちドリウスが王冠ではなくして、王帽を戴くのは、矢張り土耳其風の衣裳が用ひられた證據である。ドリウスは此の時父王の反對を押し切つて、Aspasiam を妃として迎へることとなる。だが次いで出て来た一人の侍臣と一人の宦官の對話は、アスピナムが王の命令で、ダイアナの神殿へ尼僧として捧げられたことを告げる。之に對してドリウスは腹臣の太守 Teribazus の勸めて王を暗殺することとする。他方王は眠られぬままに夜帽を被つたまま (in einer schlafhoben) 出づくる。と宦官 Sparonibaczo が暗殺者のあることを急報する。王は直ちに寢室に伏勢を配置する。かくて忍び込んで来た暗殺者の中太守テリバズスは殺され、ドリウスは親殺しとして、波斯の古法に則とり、剃刀で (mit ainem scharsch) 首を斬られることとなる (第五幕)。

ドリウスが處刑された後、今後は末子 Ochus の陰謀が始まる。彼はアルトクセルクセス王の若い後妻 Atossa と相愛の仲で、彼女と共に謀して、二人の兄 Artaspis と Arsanis を殺し、王位を奪つて、王妃アトッサと結婚しようとする (第六幕)。かくてオクスが如何にして兄アリアスピスを取り除くかは、彼の獨白で告げられる。即ち父王がアリアスピスを殺さうとしてゐるから、國外に逃亡するやうにと、宦官をして傳へさせるのである。そのあとでアリアスピスは悲觀の餘り、自ら毒を飲んで、蹠躑き乍ら退場。次いでオクスが登場し、アルサミ

スを除くために刺客を送つたと獨語する。處てアルサミスの方では兄アリアスピスの死因が怪しい、オクスの仕業ではないかと獨語してゐる。それをかの刺客が立ち聴きしてゐて、オクスに難癖を附けたと言ひ懸りの種とする。しかもアルサミスはオクスの極悪非道振りを攻撃して止まないのので、遂に刺殺される。最後にアルトクセルクセス王が廷臣を連れて登場、三人の子息が死に果て、末子は兄弟殺しの重罪人であるけれども、之を處罰しては後繼者が絶えるから、今後のことは神々の裁きに任せようと言ふ。

此の劇では度々陰謀や暗殺が行はれ、前劇の馬鹿役の代りに宦官が活躍してをり、死刑の方法も各種の殘虐な手段が用ひられることになつてゐて、如何にも波斯の宮廷悲劇らしい雰圍氣を出してゐる。隨つて扮装に關しても從來に見られない程多くの注意書があり、土耳其風の王服喪服王帽夜帽等が用ひられてゐる。之は要するに工匠歌人舞臺に於て扮装が決して輕視されてゐなかつたことを證して餘りある。又アルトクセルクセス王の優柔不斷の性格、即ち容易に母后の哀訴に心を動かされたり、一端下した裁決を王妃の抗議で取消したりすることに、凡ての悲劇の原因があること、二人の兄弟アリアスピスとアルサミスがそれぞれの性格に應じた死に方をすること、その他チルス、王妃、母后、オクスがそれぞれ獨自な強烈な個性を持つてゐること等は、作者の人間性に對する理解を示すものである。かくて此の劇はハンス・ザックスの長い演劇活動の最後を飾るに相應しい一大性格悲劇であると言ふことが出来るであらう。

今や老詩人にとつて、演劇の現役から退く時が来たのであつた。「アルトクセルクセス」が書かれてから約一年有餘を経て、六十一年十二月十七日に出來た「匈牙利王アンドレアスと忠義な代官バンクバヌス」は前述の如く、最早や作者自身の手によつて上演されたものではなかつたと思はれる。だがその物語は A. Bonfini の史譚 (übersetzt

von H. Bomer, 1543 in Basel) から取られたもの、Ludwig Heinrich von Nicolay の翻譯 <sup>スクリプト</sup> Baueban, Joh. Friedrich Ernst Albrecht の劇断片 Der gerechte Andreas 及び Grillparzer の Ein treuer Diener seines Herrn 等の題材となつてゐるものであるから、ここに簡単にその梗概を記せば――

匈牙利王安ドレアスは土耳其に遠征するに當つて、忠臣 Banus に國政一切を委ねて出發する。王の出陣を聞いた王妃の弟 Friderich は空闘を守る王妃を慰めるために、遙る遙る獨逸から匈牙利宮廷へ訪ねて来る。そしてバンクバヌスの妻 Rosina を見ると、激しい戀情に襲はれる。彼は王妃 Gerhaut の助力を得て、色々と言ひ寄るけれども、貞節なロジナは應じない。その間の消息は例によつて侍臣達の噂話や、フリデリッヒ及びロジナの獨白で知らされる。遂に王妃の計ひで、フリデリッヒはロジナを園亭に襲ひ、暴行する。だが園亭の場面は勿論直接演じられてはゐない。丁度前劇で王妃スタティラが母后、パリサティデスによつて毒殺される場面と同じく、ロジナは顔を蔽うて出て来て、フリデリッヒに凌辱された旨を、跪き泣き乍ら、夫バンクバヌスに訴へるのである。激怒した夫は王妃を責めて、之を殺す。そして直ちに王の陣中に自首して出る。他方フリデリッヒは乞食の姿をして (in betterskleidern) 逃亡する。王はバンクバヌスの告白を聴くと、歸國の上裁断するから、今迄通り國政を司るやうにと云ふ。かくて戦勝して歸還したアンドレアス王は法廷を開き、各證人の證言を聴取、バンクバヌスの無罪を宣告する――ここで口上役が最後の決定的な證言をしてゐるのは、此の役が必要に應じて、劇中の人物として利用されたことを明かにしてゐる。

之は誠に作者の倫理觀に最もよく適合した筋書であるとともに、異國趣味にも應ずるものがある丈に、よく纏つた好喜劇をなしてゐる。之に次いで六十四年及び六十五年に「テゾイスとミノタウル」テレ

ントの「タイヌ」(Eunuchos)、「パリスの判決」「ルクレチアとオリアルス」(劇稿) 等が彼の總目錄に載つてゐるけれども、今日では「タイヌ」を除いて、判讀し難いものがあつたり、印刷に附されてゐなかつたりするばかりか、工匠歌人舞臺との關係も明かではないから、ここでは論外に置くこととする。

かくしてハンス・ザックスの前後四十八年に渡る劇作家生活は、悲劇六十一篇、喜劇六十四篇、謝肉祭劇八十五篇總數二百十篇の多數を産み、作者の博學多識と勤勉力行を證して餘りあるものがあるが、今その業績を振り返つて見る時、獨逸演劇が此の市井の一工匠に負ふ處のものが如何に多いかを思はざるを得ない。勿論今日の目から見る時は、その内容形式ともに未だ甚だ素朴にして簡略なものであるが、ザックスがよく獨力を以て、單なる顔見世形式の粗雜鄙陋な對話を、近代劇にも比すべき環境喜劇性格悲劇に迄高め、日常卑近な風俗描寫から發して、古今内外の原典に取材した驚くべき廣範圍に渡る素材を自在に脚色し、幼稚にして殺風景な舞臺を一段一段と複雑微妙なものとし、その作劇法上又は演出法上に幾多の新趣向を加へて行つたことは、正に驚嘆に値するものがある。しかも彼は生涯自分の詩人としての天職を忘れず、新教精神の上に立脚して、絶えず新しい人文主義的精神を以て、人心を啓發啓蒙して行くことを念願してをつたのである。そのために作品の藝術的香氣が勸善懲惡式な道德的教訓のために被蔽されることも屢々であつたけれども、その穩健にして中庸を得た處世的睿智は、當時のともすれば浮薄輕佻に流れようとする市民生活を指導するために、必要缺くべからざるものであつたのである。正しく彼こそは宗教改革の生んだ最大の獨逸詩人であつたとともに、文藝復興の時流に乗じた最大の啓蒙作家であつた。されば彼の遺した總數六千七百十篇に達すると云ふ莫大な精神財は、汲めども盡きせぬ獨逸文學の寶庫とも言ふべく、なほ各方面の研究に俟つべきものが無數に存在する。

果して然りとすれば、彼の後繼者として、此の祖先の偉業を引き繼ぐためには、恐く異常な才能と不屈の努力を要するであらう。それが如

## 跋

一、ハンス・ザックスは獨逸文學史上に於ける一つの大きな陥穽とも言ふべのものである。それを僅に望見して、その傍を通つて行けば、兎に角無事に先へ進むことが出来るけれども、その代りその中に獲られてゐる夥しい獲物を、或は見逃すかも知れない虞がある。と言つて一度その中へ足を踏み入れるや否や、忽ち手も足も絡め取られて、再び浮び上ることが出来なくなる様な氣がする。勿論此の市井の職人詩人に關しては無数の研究が、特に彼の生誕四百年祭に當る千八百九十四年以來、發表されてゐる。しかもその多くは局部的論評であるか、又は詩人の全貌を要約するに止まるか、未だ彼の詩業の發展的段階を正確に見極めたもののあることさへも、私は寡聞にして知らない。

しかも此の詩人程近世初頭、文藝復興と宗教改革の二大精神の交流する眞只中に立つて、庶民階級のために、時代の要求する最も重要な文化的使命を果した者はないのである。従つてその業績を解明することは、近代に於ける獨逸市民文化の根底を培つてゐる各種の要因を知る上に於て、必ず多くの成果を齎すであらう。私はハンス・ザックスの詩業がなほ無數に多くの興味ある問題を藏してゐることを思ひ、各方面からそれが攻究されることを念願して止み難いものがある。

二、本書は先きに書いた「宗教改革時代の演劇」と併せて、十六世紀獨逸演劇史の一部をなすものである。従つて從來の敘述法に依り、前篇では劇作を中心として見た作家の生涯と作品の概観を、後篇ではその作家の演劇に關する業績を發展史的に記述することにした。しかもハンス・ザックスの場合果して庶幾する目的を達したか否か、甚だ疑なきを得ない。何分にもその老大な資料は、演劇史の一部としてこ

何にして、何時、誰によつて果されるか？ 之こそ獨逸文學史、從て獨逸演劇史の解くべき次の大きな課題である。

の小論に盛るには、餘りに過大であつた。そこに多くの割愛しなければならぬものが生じたのは當然であるが、果してその取捨選擇が適宜に行はれたかどうか第一に問題である。論述の趣旨はそれぞれの作品の舞臺面が窺はれるやうにして、その原作との比較、従つて作者の劇詩人としての特質と發展とを明かにするにあつたのであるが、それも色々な制約から十分に論じ盡すことが出来なかつた。大方の叱正を頂ければ有り難い仕合せである。

三、だから各作品に就ては尙論すべき問題が多々あるのであるが、今は矢張り小を捨てて大につくつもりで、兎に角劇詩人ハンス・ザックスの全貌を一通り見渡すことを主とし、個々の作品に關しては結局素描のやうなものにならざるを得なかつた。さうでもしなければ、私は本書が結局陥穽に陥つて再び浮び上ることが出来ない様な危惧に、絶えず襲はれてゐたのである。

四、書中の固有名詞は小著中世獨逸演劇史の場合と同様に、聖書から取られたものは、邦譯聖書の讀み方に従ひ、その他は通稱に依つたり原作の讀み方に従つたものもあるが、要は作品の内容を成るべく判り易くしたいと思つたに過ぎない。

五、最後に、此の論稿が文部省科學研究費の補助を得、大阪大學文學部教授會の好意ある推舉により、紀要として公刊されることになつたのは、私の望外の喜びとして、茲に厚く感謝の意を表する次第である。

昭和二十六年十一月三日文化の日

著者記